
岡 部 町

宮 西 遺 跡 II

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

<第1分冊>

2 0 0 5

岡 部 町

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡群全景 (合成写真)



遺跡風景



第4次調査区全景

発刊に寄せて

岡部町では、「やさしさ」と「住民の自由ための行政の自立」を基本理念として、都市基盤整備の推進、福祉・教育の拡充、地域活性化事業などを積極的に推進しております。産業振興も重要な施策で、さきに榛沢地区に西部工業団地整備事業を進めてきました。平成8年から10年にかけて23.1ヘクタールの工業団地が造成され、現在では進出した企業すべてが順調に操業されており、地域経済活性化に大いに貢献しております。

ところで本町は、豊かな自然の恵みをうけ、古くからの歴史と文化に支えられた伝統のある町で、特に原始・古代の遺跡が数多く所在しております。

なかでも、中宿遺跡で発見された建物跡群は、古代の榛沢郡の郡衙正倉として高い注目を集めました。平成3年には県史跡「中宿古代倉庫群跡」の指定を受け、全国的にも知られております。

町は指定地の公有地化や、古代倉庫の復原など史跡の保存整備を進め、現在は中宿歴史公園として町民の憩いの場になっております。

また、西部工業団地整備事業地内にも国の重要文化財に指定された「緑釉手付瓶」が出土した西浦北遺跡をはじめとした榛沢遺跡群が所在し、これらの遺跡の発掘調査を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団をお願いいたしました。

西部工業団地関係では、これまでに四冊の発掘調査報告書が刊行されましたが、本報告書が最後となります。これらの報告書には、かつて岡部の地に暮らした人々の足跡が記録され、その積み重ねのうちに長い歴史が築かれてきたことを知ることができます。

岡部町では、こうした先人たちの営みによって育まれてきた特色ある地域文化を大切に将来に伝えることを基礎にして、やさしさのある町づくりを進めていきたいと考えております。

結びに、本報告書の刊行にあたりご協力をいただきました多くの皆様に心から感謝申し上げます。

平成17年3月

岡部町長 神尾高善

序

埼玉県では、豊かな彩の国づくりを実現するため、調和と均衡ある発展を目指し、それぞれの地域の特性や文化に応じた整備事業を行っております。都市と農村が調和をおこなす県北地域では、自然環境と共生し、創造性に満ちた活気ある産業社会の構築に向けて、先端技術産業を軸とした整備が推進されております。

岡部町西部工業団地造成事業は、県北地域の都市機能と居住環境の調和を図り産業の発展と雇用の拡大を目的として、岡部町により計画されたものです。

工業団地造成地内には5か所の埋蔵文化財包蔵地がありました。その取扱いにつきましては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、岡部町の委託を受け当事業団が実施いたしました。

岡部町は、埼玉県内でも多くの埋蔵文化財が分布する地域として知られ、特に県指定史跡の「中宿古代倉庫群跡」は古代における榛沢郡衙の正倉と考えられております。また、重要文化財の緑釉手付甕を出土した西浦北遺跡はこの隣接地にあたります。

岡部町西部工業団地関係の報告書はすでに沖田遺跡、大寄遺跡、宮西遺跡関係の四冊が刊行されておりますが、今回の報告書で最後となります。遺跡の内容は、縄文時代前期および古墳時代から平安時代の集落跡を中心とするものです。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました岡部町教育委員会、鹿島道路株式会社、株式会社横森製作所、東洋エクステリア株式会社並びに地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田 陽 充

例 言

本書は、大里郡岡部町に開発された岡部町西部工業団地造成事業地内に所在する大寄遺跡・沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡・沖田Ⅲ遺跡・宮西遺跡のうち宮西遺跡の一部に関する発掘調査報告書である。

1. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

宮西遺跡第1次 (MYNS)

大里郡岡部町大字榛沢340番地12他

平成9年2月18日付け教文2-203号

宮西遺跡第2次

大里郡岡部町大字榛沢304番地8他

平成9年4月25日付け教文第2-13号

宮西遺跡第4次

大里郡岡部町大字榛沢305番地6他

平成10年4月24日付け教文2-9号

2. 発掘調査は、岡部町西部工業団地建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、岡部町の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。
3. 本事業は、第1章の組織により実施した。平成8年度は元井茂、橋本勉、磯崎一、木戸春夫、宮瀧由紀子、鳥羽政之、宮本直樹が担当し、平成9年1月6日から平成9年3月31日まで実施した。平成9年度は橋本勉、中村倉司、磯崎一、富田和夫、木戸春夫、平田重之、松田哲が担当し、平成9年4月1日から平成10年3月31日まで実施した。

平成10年度は、磯崎一、石坂俊郎、福田聖、斎藤欣延が担当し、平成10年4月1日から平成10年8月31日まで実施した。また、整理報告書作成作業は木戸が担当し、平成14年度は平成14年10月1日から平成15年3月24日まで、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日まで、平成16年度は平成16年4月1日から平成16年8月31日まで行った。

4. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。
5. 発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真は大塚道則が撮影した。
6. 本報告書の出土品の整理・図版の作成は木戸のもとで桜井元子・浅見ふみが行った。遺物実測は縄文土器を黒坂禎二、縄文石器を西井幸雄・浅見ふみが、金属製品を瀧瀬芳之、埴輪を大谷徹が行い、それ以外は桜井元子・浅見ふみの補助を得た。本文の執筆は木戸が行い、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IV-1を黒坂禎二が行った。

7. 本書の編集は、木戸が担当した。
8. 本書にかかる資料は平成17年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
9. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

(敬称略)

穴澤義功 知久裕昭

凡例

1. 本書の遺跡全測図における X・Y の座標値は、国土標準平面向直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。
3. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図

住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土塙	1/60
製鉄炉跡	1/30・1/60
粘土採掘坑・古墳跡	1/100
方形区画溝跡・溝跡	1/200

遺物図

土器	1/4	土製品	1/3・1/4
拓影図	1/1	1/3	1/4
石製品	1/2	1/3	1/4
金属製品	1/3	埴輪	1/4
縄文時代石器	2/3	1/3	1/4

上記に合わないものに関しては、縮尺率等をそのつど示している。

4. 遺構図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

S J…住居跡	S B…掘立柱建物跡
S F…井戸跡	S F…製鉄炉跡
S X…竪穴状遺構・門形周溝状遺構・環状ピット列・焼土遺構・粘土採掘坑	
S D…方形区画溝跡・溝跡	
S K…土塙	S T…古墳跡

5. 挿入中のスクリーントーンは以下のことを示す。

遺構断面図 斜線部分…地山
遺物図については緑釉陶器の緑釉塗布部分、灰釉陶器の灰釉塗布部分、赤彩色部分、黒色処理、羽口の還元範囲・鉄付着部分に網をかけて示した。断面黒塗りは須恵器・須恵質を表す。

6. 遺構断面図のピットに付した数値は、上端からの深さを示す。

7. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位mである。

8. 遺物観察表は次のとおりである。

胎土は、肉眼で観察できるものについて示した。

A…赤色粒 B…石英 C…長石 D…角閃石
E…白色粒 F…白色針状物質 G…雲母
H…砂粒 I…片岩 J…礫

9. 編物石については、輪郭線を重ね図で示した。

10. 本書に掲載した地形図等は以下のものを使用している。

国土地理院 1/50000地形図

「高崎」「寄居」

国土地理院 1/25000地形図

「本庄」「寄居」「深谷」「三ヶ尻」

国土地理院 1/2500国土基本図

「Ⅸ-J C 25-2」(昭和36年作成)

国土地理院 航空写真

「KT-60-A A+16-2 3707」

目次

<第1分冊>

口絵
発刊によせて
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1
1. 調査にいたるまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡群の立地と環境	7
1. 地理的環境	7
2. 周辺の遺跡	9
III 遺跡群の概要	14
1. 遺跡群の概要	14
2. 宮西遺跡の概要	18
IV 古墳時代以降の遺構と遺物	44
1. 竪穴住居跡	44
2. 掘立柱建物跡	285
3. 井戸跡	324
4. 竪穴状遺構	344
5. 円形周溝状遺構	346
6. 環状ピット列	346
7. 製鉄ガ跡	347
8. 焼上遺構	356

9. 粘土探掘坑	357
10. 方形区西溝跡	368

<第2分冊>

11. 溝跡・河川跡	374
12. 土壕	404
13. 古墳跡	432
14. 茶毘跡	434
15. 上塚墓	435
16. 畝跡	436
17. 道路跡	438
18. グリッド出土遺物	443
V 縄文時代の遺構と遺物	451
1. 住居跡	451
2. 土壕	500
3. グリッド出土遺物	513
VI 結語	515
1. 縄文時代	515
2. 土器の様相	519

挿図目次

第1図 年度別調査範囲	3
第2図 埼玉県の地形	7
第3図 遺跡周辺の地形区分	8
第4図 遺跡分布図	12
第5図 周辺の遺跡	15

第6図 関連遺跡遺構分布図	16・17
第7図 グリッド配置図	19
第8図 全調査区割図	20
第9図 遺構全測図(1)	21
第10図 遺構全測図(2)	22

第11区	遺構全測区 (3)	23	第47区	第142・151号住居跡・遺物出土状況	62
第12区	遺構全測区 (4)	24	第48区	第142号住居跡出土遺物	63
第13区	遺構全測区 (5)	25	第49区	第143号住居跡・出土遺物	65
第14区	遺構全測区 (6)	26	第50区	第144・145号住居跡	66
第15区	遺構全測区 (7)	27	第51区	第144号住居跡出土遺物 (1)	67
第16区	遺構全測区 (8)	28	第52区	第144号住居跡出土遺物 (2)	68
第17区	遺構全測区 (9)	29	第53区	第145号住居跡出土遺物	69
第18区	遺構全測区 (10)	30	第54区	第146号住居跡・出土遺物	69
第19区	遺構全測区 (11)	31	第55区	第152・154・156・158・330号住居跡・ 遺物出土状況	70
第20区	遺構全測区 (12)	32	第56区	第152号住居跡出土遺物	71
第21区	遺構全測区 (13)	33	第57区	第158号住居跡出土遺物	71
第22区	遺構全測区 (14)	34	第58区	第153号住居跡	72
第23区	遺構全測区 (15)	35	第59区	第153号住居跡出土遺物	73
第24区	遺構全測区 (16)	36	第60区	第155号住居跡	75
第25区	遺構全測区 (17)	37	第61区	第155号住居跡出土遺物	76
第26区	遺構全測区 (18)	38	第62区	第157号住居跡・出土遺物	77
第27区	遺構全測区 (19)	39	第63区	第159・160号住居跡・遺物出土状況	79
第28区	遺構全測区 (20)	40	第64区	第159・160・176・177出土遺物	80
第29区	遺構全測区 (21)	41	第65区	第161号住居跡	82
第30区	遺構全測区 (22)	42	第66区	第161号住居跡遺物出土状況・ 出土遺物 (1)	83
第31区	遺構全測区 (23)	43	第67区	第161号住居跡出土遺物 (2)	84
第32区	第124号住居跡	45	第68区	第162・164・166・167・168号住居跡	86
第33区	第124号住居跡出土遺物	46	第69区	第162・168号住居跡遺物出土状況	87
第34区	第125号住居跡・出土遺物	47	第70区	第162号住居跡出土遺物 (1)	88
第35区	第127・147号住居跡・出土遺物	48	第71区	第162・164号住居跡出土遺物 (2)	89
第36区	第128号住居跡・出土遺物	49	第72区	第164号住居跡出土遺物	90
第37区	第130号住居跡・出土遺物	50	第73区	第168号住居跡出土遺物	90
第38区	第132・133号住居跡・出土遺物	51	第74区	第163号住居跡	91
第39区	第134・135号住居跡・遺物出土状況	52	第75区	第165号住居跡・遺物出土状況	92
第40区	第134・135号住居跡出土遺物	53	第76区	第165号住居跡出土遺物 (1)	92
第41区	第136・137・138・149号住居跡・ 遺物出土状況	56	第77区	第165号住居跡出土遺物 (2)	93
第42区	第136・137・138・149号住居跡出土遺物	57	第78区	第169・170・190号住居跡・ 遺物出土状況・出土遺物	95
第43区	第139・140・150号住居跡	59	第79区	第190号住居跡出土遺物	95
第44区	第139・150号住居跡出土遺物	60	第80区	第171・186・191号住居跡	
第45区	第141号住居跡	60			
第46区	第141号住居跡出土遺物	61			

	遺物出土狀況	96	第116図	第204号住居跡・遺物出土狀況	136
第81図	第171・186・191号住居跡出土遺物	97	第117図	第204号住居跡出土遺物	137
第82図	第174・175号住居跡	99	第118図	第205・207・243号住居跡・ 出土遺物	138
第83図	第175号住居跡出土遺物	100	第119図	第206号住居跡・出土遺物	139
第84図	第176号住居跡	101	第120図	第208号住居跡・遺物出土狀況	140
第85図	第177号住居跡・遺物出土狀況	102	第121図	第208号住居跡出土遺物	141
第86図	第177号住居跡出土遺物	103	第122図	第209号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	143
第87図	第178号住居跡・遺物出土狀況	105	第123図	第210号住居跡・遺物出土狀況	144
第88図	第178号住居跡出土遺物	106	第124図	第210号住居跡出土遺物 (1)	145
第89図	第179号住居跡・遺物出土狀況	107	第125図	第210号住居跡出土遺物 (2)	146
第90図	第179号住居跡出土遺物	108	第126図	第210号住居跡出土遺物 (3)	147
第91図	第180号住居跡・遺物出土狀況	109	第127図	第210号住居跡出土遺物 (4)	148
第92図	第180号住居跡出土遺物	110	第128図	第211号住居跡	150
第93図	第181号住居跡・出土遺物	111	第129図	第212号住居跡	151
第94図	第182号住居跡・出土遺物	112	第130図	第212号住居跡出土遺物 (1)	152
第95図	第183・189号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	114	第131図	第212号住居跡出土遺物 (2)	153
第96図	第184号住居跡・遺物出土狀況	115	第132図	第213号住居跡・出土遺物	154
第97図	第184号住居跡出土遺物	116	第133図	第214号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	155
第98図	第185号住居跡・遺物出土狀況	117	第134図	第215号住居跡・出土遺物	156
第99図	第185号住居跡出土遺物 (1)	118	第135図	第216号住居跡・出土遺物	157
第100図	第185号住居跡出土遺物 (2)	119	第136図	第217号住居跡	158
第101図	第187号住居跡	120	第137図	第218号住居跡・出土遺物	159
第102図	第188号住居跡・出土遺物	120	第138図	第219号住居跡・出土遺物	160
第103図	第192号住居跡・出土遺物	123	第139図	第220号住居跡・出土遺物	161
第104図	第194号住居跡・出土遺物	124	第140図	第221号住居跡	162
第105図	第195号住居跡・出土遺物	125	第141図	第221号住居跡出土遺物	163
第106図	第197号住居跡・遺物出土狀況 (1)	126	第142図	第223号住居跡	163
第107図	第197号住居跡遺物出土狀況 (2)	127	第143図	第223号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	164
第108図	第197号住居跡出土遺物 (1)	128	第144図	第224・225号住居跡	166
第109図	第197号住居跡出土遺物 (2)	129	第145図	第224・225号住居跡遺物出土狀況	167
第110図	第198号住居跡・遺物出土狀況	131	第146図	第224・225号住居跡出土遺物	168
第111図	第198号住居跡出土遺物 (1)	132	第147図	第226・244号住居跡・遺物出土狀況	170
第112図	第198号住居跡出土遺物 (2)	133	第148図	第226号住居跡出土遺物 (1)	171
第113図	第199・200号住居跡	134			
第114図	第200号住居跡出土遺物	135			
第115図	第201号住居跡	135			

第149图	第226号住居跡出土遺物 (2)	172	第184图	第257・258号住居跡出土遺物	205
第150图	第227・253号住居跡	173	第185图	第259号住居跡・遺物出土狀況	206
第151图	第227号住居跡出土遺物	174	第186图	第259号住居跡出土遺物	207
第152图	第228・232・233号住居跡	175	第187图	第260号住居跡・出土遺物	208
第153图	第228号住居跡出土遺物	175	第188图	第261号住居跡	209
第154图	第229号住居跡・出土遺物	176	第189图	第262・263号住居跡	210
第155图	第230・231号住居跡・遺物出土狀況	177	第190图	第264号住居跡・出土遺物	212
第156图	第230号住居跡出土遺物	178	第191图	第265号住居跡・出土遺物	213
第157图	第234号住居跡	179	第192图	第266号住居跡・出土遺物	214
第158图	第235・241号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	180	第193图	第267号住居跡・出土遺物	215
第159图	第236号住居跡	182	第194图	第268号住居跡・出土遺物	216
第160图	第236号住居跡出土遺物	183	第195图	第271号住居跡	217
第161图	第237号住居跡・遺物出土狀況・ 出土遺物	184	第196图	第271号住居跡出土遺物	218
第162图	第238号住居跡	185	第197图	第272号住居跡	219
第163图	第238号住居跡出土遺物	186	第198图	第274号住居跡・出土遺物	220
第164图	第239・240号住居跡	186	第199图	第275号住居跡・出土遺物	220
第165图	第242号住居跡・出土遺物	187	第200图	第276・277号住居跡	222
第166图	第245号住居跡	188	第201图	第276号住居跡出土遺物	223
第167图	第245号住居跡出土遺物	188	第202图	第277号住居跡出土遺物	223
第168图	第246号住居跡	190	第203图	第278号住居跡・出土遺物	224
第169图	第247号住居跡	191	第204图	第279号住居跡・出土遺物	225
第170图	第247号住居跡出土遺物	192	第205图	第280号住居跡・出土遺物	226
第171图	第248号住居跡	193	第206图	第281号住居跡	227
第172图	第248号住居跡出土遺物	194	第207图	第281号住居跡出土遺物	228
第173图	第249号住居跡・出土遺物	195	第208图	第282号住居跡	229
第174图	第250号住居跡	196	第209图	第283号住居跡・出土遺物	229
第175图	第250号住居跡出土遺物	197	第210图	第284号住居跡・出土遺物	230
第176图	第251号住居跡・出土遺物	198	第211图	第285号住居跡	231
第177图	第252号住居跡	199	第212图	第286号住居跡	232
第178图	第254号住居跡・遺物出土狀況	199	第213图	第286号住居跡出土遺物	233
第179图	第254号住居跡出土遺物 (1)	200	第214图	第287・288号住居跡	234
第180图	第254号住居跡出土遺物 (2)	201	第215图	第287号住居跡出土遺物 (1)	235
第181图	第255号住居跡・出土遺物	202	第216图	第287号住居跡出土遺物 (2)	236
第182图	第256号住居跡・出土遺物	203	第217图	第288号住居跡出土遺物	236
第183图	第257・258号住居跡	204	第218图	第289・290号住居跡	237
			第219图	第289号住居跡出土遺物	237
			第220图	第291号住居跡	238

第221图	第291号住居跡出土遺物	239	第258图	第316号住居跡·出土遺物	277
第222图	第292号住居跡·出土遺物	240	第259图	第319·320号住居跡	279
第223图	第293·308号住居跡	242	第260图	第320号住居跡出土遺物	279
第224图	第293号住居跡出土遺物	242	第261图	第321号住居跡	280
第225图	第294号住居跡	244	第262图	第323号住居跡·出土遺物	281
第226图	第295·301号住居跡·出土遺物	245	第263图	第324号住居跡·出土遺物	281
第227图	第296号住居跡·出土遺物	246	第264图	第325号住居跡	282
第228图	第297号住居跡	246	第265图	第326号住居跡	282
第229图	第299号住居跡	248	第266图	第327号住居跡·出土遺物	283
第230图	第299号住居跡出土遺物	249	第267图	第328号住居跡	284
第231图	第300号住居跡	249	第268图	第329号住居跡·出土遺物	284
第232图	第302号住居跡·出土遺物	250	第269图	第1号掘立柱建物跡	287
第233图	第303号住居跡·出土遺物	251	第270图	第2号掘立柱建物跡	288
第234图	第304号住居跡·遺物出土狀況	252	第271图	第3号掘立柱建物跡	289
第235图	第304号住居跡出土遺物(1)	253	第272图	第3号掘立柱建物跡出土遺物	290
第236图	第304号住居跡出土遺物(2)	254	第273图	第4号掘立柱建物跡·出土遺物	290
第237图	第304号住居跡出土遺物(3)	255	第274图	第5号掘立柱建物跡	291
第238图	第306号住居跡·遺物出土狀況	256	第275图	第6号掘立柱建物跡·出土遺物	292
第239图	第306号住居跡出土遺物(1)	257	第276图	第7号掘立柱建物跡	293
第240图	第306号住居跡出土遺物(2)	258	第277图	第7号掘立柱建物跡出土遺物	294
第241图	第307号住居跡·出土遺物	259	第278图	第8号掘立柱建物跡·出土遺物	295
第242图	第309·322号住居跡	260	第279图	第9号掘立柱建物跡	296
第243图	第309号住居跡出土遺物	261	第280图	第10·11·12号掘立柱建物跡· 出土遺物	297
第244图	第322号住居跡出土遺物	261	第281图	第13号掘立柱建物跡	299
第245图	第310号住居跡	262	第282图	第14号掘立柱建物跡	300
第246图	第311号住居跡·出土遺物	263	第283图	第15号掘立柱建物跡	301
第247图	第312·314号住居跡	265	第284图	第16号掘立柱建物跡	302
第248图	第312·314号住居跡遺物出土狀況	266	第285图	第17号掘立柱建物跡·出土遺物	303
第249图	第312号住居跡出土遺物(1)	267	第286图	第18号掘立柱建物跡·出土遺物	304
第250图	第312号住居跡出土遺物(2)	268	第287图	第19号掘立柱建物跡	305
第251图	第314号住居跡出土遺物(1)	269	第288图	第20号掘立柱建物跡·出土遺物	306
第252图	第314号住居跡出土遺物(2)	270	第289图	第21号掘立柱建物跡·出土遺物	307
第253图	第313号住居跡	271	第290图	第22号掘立柱建物跡·出土遺物	308
第254图	第315号住居跡	272	第291图	第23号掘立柱建物跡	309
第255图	第315号住居跡出土遺物(1)	273	第292图	第24号掘立柱建物跡	310
第256图	第315号住居跡出土遺物(2)	274	第293图	第24号掘立柱建物跡出土遺物	311
第257图	第315号住居跡出土遺物(3)	275			

第294区	第25号掘立柱建物跡……………	311	第330区	粘土採掘坑……………	358
第295区	第26号掘立柱建物跡……………	312	第331区	粘土採掘坑出土遺物 (1)……………	359
第296区	第27号掘立柱建物跡……………	313	第332区	粘土採掘坑出土遺物 (2)……………	360
第297区	第28号掘立柱建物跡・出土遺物……………	314	第333区	粘土採掘坑出土遺物 (3)……………	361
第298区	第29号掘立柱建物跡……………	315	第334区	粘土採掘坑出土遺物 (4)……………	362
第299区	第30号掘立柱建物跡・出土遺物……………	316	第335区	粘土採掘坑出土遺物 (5)……………	363
第300区	第31号掘立柱建物跡・出土遺物……………	318	第336区	粘土採掘坑出土遺物 (6)……………	364
第301区	第32・33号掘立柱建物跡……………	319	第337区	方形区西溝跡……………	369
第302区	第34・35号掘立柱建物跡……………	320	第338区	方形区西溝跡遺物出土状況……………	370
第303区	第36号掘立柱建物跡……………	322	第339区	方形区西溝跡出土遺物 (1)……………	371
第304区	第37号掘立柱建物跡……………	323	第340区	方形区西溝跡出土遺物 (2)……………	372
第305区	井戸跡 (1)……………	329	第341区	溝跡 (1)……………	376
第306区	井戸跡 (2)……………	330	第342区	溝跡 (2)……………	377
第307区	井戸跡 (3)……………	331	第343区	溝跡 (3)……………	378
第308区	井戸跡 (4)……………	332	第344区	溝跡 (4)……………	379
第309区	井戸跡 (5)……………	333	第345区	溝跡 (5)……………	380
第310区	井戸跡出土遺物 (1)……………	334	第346区	溝跡 (6)……………	381
第311区	井戸跡出土遺物 (2)……………	335	第347区	溝跡 (7)……………	382
第312区	井戸跡出土遺物 (3)……………	336	第348区	溝跡 (8)……………	383
第313区	井戸跡出土遺物 (4)……………	337	第349区	溝跡 (9)……………	384
第314区	井戸跡出土遺物 (5)……………	338	第350区	溝跡 (10)……………	385
第315区	井戸跡出土遺物 (6)……………	339	第351区	溝跡 (11)……………	386
第316区	井戸跡出土遺物 (7)……………	340	第352区	溝跡 (12)……………	387
第317区	井戸跡出土遺物 (8)……………	341	第353区	溝跡 (13)……………	388
第318区	竪穴状遺構……………	345	第354区	溝跡 (14)……………	389
第319区	竪穴状遺構出土遺物……………	346	第355区	溝跡 (15)……………	390
第320区	円形溝状遺構……………	347	第356区	溝跡 (16)……………	391
第321区	環状ビット列……………	347	第357区	溝跡 (17)……………	392
第322区	第1号製鉄炉跡……………	348	第358区	河川跡・出土遺物……………	393
第323区	第1号製鉄炉跡出土遺物……………	349	第359区	溝跡出土遺物 (1)……………	394
第324区	第2号製鉄炉跡・遺物出土状況・ 出土遺物……………	350	第360区	溝跡出土遺物 (2)……………	395
第325区	第3号製鉄炉跡・出土遺物……………	351	第361区	溝跡出土遺物 (3)……………	396
第326区	製鉄関連遺物構成区 (1)……………	352	第362区	溝跡出土遺物 (4)……………	397
第327区	製鉄関連遺物構成区 (2)……………	353	第363区	溝跡出土遺物 (5)……………	398
第328区	製鉄関連遺物構成区 (3)……………	354	第364区	溝跡出土遺物 (6)……………	399
第329区	焼土遺構・出土遺物……………	356	第365区	土壌 (1)……………	405
			第366区	土壌 (2)……………	406

第367区	土壌 (3)	407	第404区	第33号住居跡出土遺物 (2)	455
第368区	土壌 (4)	408	第405区	第33号住居跡出土遺物 (3)	456
第369区	土壌 (5)	409	第406区	第33号住居跡出土遺物 (4)	457
第370区	土壌 (6)	410	第407区	第33号住居跡出土遺物 (5)	458
第371区	土壌 (7)	411	第408区	第33号住居跡出土遺物 (6)	459
第372区	土壌 (8)	412	第409区	第33号住居跡出土遺物 (7)	460
第373区	土壌 (9)	413	第410区	第33号住居跡出土遺物 (8)	461
第374区	土壌 (10)	414	第411区	第118号住居跡	462
第375区	土壌 (11)	415	第412区	第118号住居跡出土遺物	463
第376区	土壌 (12)	416	第413区	第126号住居跡	464
第377区	土壌 (13)	417	第414区	第126号住居跡出土遺物	465
第378区	土壌 (14)	418	第415区	第129・131号住居跡	467
第379区	土壌 (15)	419	第416区	第129・131号住居跡出土遺物	468
第380区	土壌出土遺物 (1)	424	第417区	第148号住居跡・遺物出土状況・ 出土遺物	469
第381区	土壌出土遺物 (2)	425	第418区	第173号住居跡・出土遺物	470
第382区	土壌出土遺物 (3)	426	第419区	第193号住居跡・遺物出土状況・ 出土遺物	471
第383区	土壌出土遺物 (4)	427	第420区	第196号住居跡・出土遺物	473
第384区	土壌出土遺物 (5)	428	第421区	第202号住居跡・遺物出土状況	474
第385区	第1号古墳跡	433	第422区	第202号住居跡出土遺物	474
第386区	茶毘跡	434	第423区	第203号住居跡 (1)	475
第387区	第2号茶毘跡出土遺物	435	第424区	第203号住居跡 (2)	476
第388区	上城墓	435	第425区	第203号住居跡出土遺物 (1)	477
第389区	第1号上城墓出土遺物	436	第426区	第203号住居跡出土遺物 (2)	478
第390区	第2号上城墓出土遺物	436	第427区	第269号住居跡・遺物出土状況・ 出土遺物	480
第391区	岳跡	437	第428区	第270号住居跡	481
第392区	第1号道路跡 (1)	439	第429区	第270号住居跡出土遺物 (1)	482
第393区	第1号道路跡 (2)	440	第430区	第270号住居跡出土遺物 (2)	483
第394区	第1号道路跡出土遺物	441	第431区	第273号住居跡・出土遺物	484
第395区	第2号道路跡出土遺物	441	第432区	第298号住居跡	485
第396区	第2・3号道路跡	442	第433区	第298号住居跡出土遺物 (1)	486
第397区	グリッド出土遺物 (1)	445	第434区	第298号住居跡出土遺物 (2)	487
第398区	グリッド出土遺物 (2)	446	第435区	第298号住居跡出土遺物 (3)	488
第399区	グリッド出土遺物 (3)	447	第436区	第298号住居跡出土遺物 (4)	489
第400区	グリッド出土遺物 (4)	448	第437区	第305号住居跡 (1)	490
第401区	第33号住居跡 (1)	452			
第402区	第33号住居跡 (2)	453			
第403区	第33号住居跡出土遺物 (1)	454			

第438図	第305号住居跡(2)・遺物出土状況	491	第453図	グリッド出土遺物(6)	508
第439図	第305号住居跡出土遺物(1)	492	第454図	グリッド出土遺物(7)	509
第440図	第305号住居跡出土遺物(2)	493	第455図	グリッド出土遺物(8)	510
第441図	第317号住居跡	495	第456図	グリッド出土遺物(9)	511
第442図	第317号住居跡出土遺物	496	第457図	宮西遺跡Ⅰ期の土器	520
第443図	第318号住居跡・出土遺物(1)	497	第458図	宮西遺跡Ⅱ期の土器	522
第444図	第318号住居跡出土遺物(2)	498	第459図	宮西遺跡Ⅲ期の土器	524
第445図	第318号住居跡出土遺物(3)	499	第460図	宮西遺跡Ⅳ期の土器	526
第446図	土壌	500	第461図	宮西遺跡Ⅴ期の土器	528
第447図	土壌出土遺物	501	第462図	宮西遺跡Ⅵ期の土器	530
第448図	グリッド出土遺物(1)	503	第463図	宮西遺跡Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ期の土器	532
第449図	グリッド出土遺物(2)	504	第464図	宮西遺跡Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ期の土器	534
第450図	グリッド出土遺物(3)	505	第465図	宮西遺跡Ⅼ・Ⅽ期の土器	536
第451図	グリッド出土遺物(4)	506	第466図	宮西遺跡Ⅾ・Ⅿ・ⅰ期の土器	538
第452図	グリッド出土遺物(5)	507	第467図	宮西遺跡ⅱ・ⅲ・ⅳ期の土器	540

表 目 次

第1表	各遺跡の調査期間と面積	2	第20表	第144号住居跡出土遺物観察表	68
第2表	第124号住居跡出土遺物観察表	46	第21表	第145号住居跡出土遺物観察表	69
第3表	第125号住居跡出土遺物観察表	47	第22表	第146号住居跡出土遺物観察表	69
第4表	第127号住居跡出土遺物観察表	48	第23表	第152号住居跡出土遺物観察表	71
第5表	第128号住居跡出土遺物観察表	49	第24表	第158号住居跡出土遺物観察表	71
第6表	第130号住居跡出土遺物観察表	50	第25表	第153号住居跡出土遺物観察表	73
第7表	第132号住居跡出土遺物観察表	51	第26表	第155号住居跡出土遺物観察表	76
第8表	第133号住居跡出土遺物観察表	51	第27表	第157号住居跡出土遺物観察表	77
第9表	第134号住居跡出土遺物観察表	54	第28表	第159号住居跡出土遺物観察表	81
第10表	第135号住居跡出土遺物観察表	54	第29表	第159・160・176・177号住居跡 出土遺物観察表	81
第11表	第136号住居跡出土遺物観察表	58	第30表	第160号住居跡出土遺物観察表	81
第12表	第137号住居跡出土遺物観察表	58	第31表	第161号住居跡出土遺物観察表	85
第13表	第138号住居跡出土遺物観察表	58	第32表	第162号住居跡出土遺物観察表	88
第14表	第149号住居跡出土遺物観察表	58	第33表	第162・164号住居跡出土遺物観察表	89
第15表	第139号住居跡出土遺物観察表	60	第34表	第164号住居跡出土遺物観察表	90
第16表	第150号住居跡出土遺物観察表	60	第35表	第168号住居跡出土遺物観察表	91
第17表	第141号住居跡出土遺物観察表	61	第36表	第165号住居跡出土遺物観察表	94
第18表	第142号住居跡出土遺物観察表	63	第37表	第170号住居跡出土遺物観察表	95
第19表	第143号住居跡出土遺物観察表	66			

第38表	第190号住居跡出土遺物觀察表	96	第75表	第223・224号住居跡出土遺物觀察表	164
第39表	第171号住居跡出土遺物觀察表	98	第76表	第224号住居跡出土遺物觀察表	169
第40表	第186号住居跡出土遺物觀察表	98	第77表	第224・225号住居跡出土遺物觀察表	169
第41表	第191号住居跡出土遺物觀察表	98	第78表	第225号住居跡出土遺物觀察表	169
第42表	第175号住居跡出土遺物觀察表	100	第79表	第226号住居跡出土遺物觀察表	172
第43表	第177号住居跡出土遺物觀察表	104	第80表	第227号住居跡出土遺物觀察表	174
第44表	第178号住居跡出土遺物觀察表	106	第81表	第228号住居跡出土遺物觀察表	176
第45表	第179号住居跡出土遺物觀察表	108	第82表	第229号住居跡出土遺物觀察表	177
第46表	第180号住居跡出土遺物觀察表	111	第83表	第230号住居跡出土遺物觀察表	179
第47表	第181号住居跡出土遺物觀察表	111	第84表	第235号住居跡出土遺物觀察表	181
第48表	第182号住居跡出土遺物觀察表	113	第85表	第236号住居跡出土遺物觀察表	183
第49表	第183号住居跡出土遺物觀察表	114	第86表	第237号住居跡出土遺物觀察表	184
第50表	第184号住居跡出土遺物觀察表	117	第87表	第238号住居跡出土遺物觀察表	186
第51表	第185号住居跡出土遺物觀察表	119	第88表	第242号住居跡出土遺物觀察表	187
第52表	第188号住居跡出土遺物觀察表	121	第89表	第245号住居跡出土遺物觀察表	189
第53表	第192号住居跡出土遺物觀察表	123	第90表	第247号住居跡出土遺物觀察表	193
第54表	第194号住居跡出土遺物觀察表	125	第91表	第248号住居跡出土遺物觀察表	194
第55表	第195号住居跡出土遺物觀察表	125	第92表	第249号住居跡出土遺物觀察表	195
第56表	第197号住居跡出土遺物觀察表	130	第93表	第250号住居跡出土遺物觀察表	196
第57表	第197号住居跡出土雜物石計測表	130	第94表	第251号住居跡出土遺物觀察表	198
第58表	第198号住居跡出土遺物觀察表	134	第95表	第254号住居跡出土遺物觀察表	201
第59表	第200号住居跡出土遺物觀察表	135	第96表	第255号住居跡出土遺物觀察表	202
第60表	第204号住居跡出土遺物觀察表	137	第97表	第256号住居跡出土遺物觀察表	203
第61表	第205号住居跡出土遺物觀察表	139	第98表	第257号住居跡出土遺物觀察表	205
第62表	第206号住居跡出土遺物觀察表	139	第99表	第257・258号住居跡出土遺物觀察表	205
第63表	第208号住居跡出土遺物觀察表	141	第100表	第258号住居跡出土遺物觀察表	205
第64表	第209号住居跡出土遺物觀察表	143	第101表	第259号住居跡出土遺物觀察表	207
第65表	第210号住居跡出土遺物觀察表	149	第102表	第260号住居跡出土遺物觀察表	208
第66表	第212号住居跡出土遺物觀察表	153	第103表	第264号住居跡出土遺物觀察表	212
第67表	第213号住居跡出土遺物觀察表	154	第104表	第265号住居跡出土遺物觀察表	213
第68表	第214号住居跡出土遺物觀察表	155	第105表	第266号住居跡出土遺物觀察表	214
第69表	第215号住居跡出土遺物觀察表	156	第106表	第267号住居跡出土遺物觀察表	215
第70表	第216号住居跡出土遺物觀察表	157	第107表	第268号住居跡出土遺物觀察表	216
第71表	第218号住居跡出土遺物觀察表	159	第108表	第271号住居跡出土遺物觀察表	219
第72表	第219号住居跡出土遺物觀察表	160	第109表	第274号住居跡出土遺物觀察表	220
第73表	第220号住居跡出土遺物觀察表	161	第110表	第275号住居跡出土遺物觀察表	220
第74表	第221号住居跡出土遺物觀察表	163	第111表	第276号住居跡出土遺物觀察表	223

第112表	第277号住居跡出土遺物觀察表	223	第149表	第7号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	294
第113表	第278号住居跡出土遺物觀察表	224	第150表	第8号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	296
第114表	第279号住居跡出土遺物觀察表	225	第151表	第11号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	298
第115表	第280号住居跡出土遺物觀察表	226	第152表	第12号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	298
第116表	第281号住居跡出土遺物觀察表	228	第153表	第17号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	304
第117表	第283号住居跡出土遺物觀察表	229	第154表	第18号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	304
第118表	第284号住居跡出土遺物觀察表	230	第155表	第20号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	306
第119表	第286号住居跡出土遺物觀察表	233	第156表	第21号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	307
第120表	第287号住居跡出土遺物觀察表	236	第157表	第22号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	308
第121表	第288号住居跡出土遺物觀察表	237	第158表	第24号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	311
第122表	第289号住居跡出土遺物觀察表	237	第159表	第28号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	314
第123表	第291号住居跡出土遺物觀察表	239	第160表	第30号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	316
第124表	第292号住居跡出土遺物觀察表	241	第161表	第31号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	318
第125表	第293号住居跡出土遺物觀察表	242	第162表	第4号井戸跡出土遺物觀察表	341
第126表	第295号住居跡出土遺物觀察表	245	第163表	第5号井戸跡出土遺物觀察表	341
第127表	第296号住居跡出土遺物觀察表	246	第164表	第6号井戸跡出土遺物觀察表	342
第128表	第299号住居跡出土遺物觀察表	249	第165表	第7号井戸跡出土遺物觀察表	342
第129表	第302号住居跡出土遺物觀察表	250	第166表	第8号井戸跡出土遺物觀察表	342
第130表	第303号住居跡出土遺物觀察表	251	第167表	第9号井戸跡出土遺物觀察表	342
第131表	第304号住居跡出土遺物觀察表	256	第168表	第11号井戸跡出土遺物觀察表	342
第132表	第306号住居跡出土遺物觀察表	258	第169表	第15号井戸跡出土遺物觀察表	343
第133表	第307号住居跡出土遺物觀察表	259	第170表	第16号井戸跡出土遺物觀察表	343
第134表	第309号住居跡出土遺物觀察表	261	第171表	第18号井戸跡出土遺物觀察表	343
第135表	第322号住居跡出土遺物觀察表	261	第172表	第20号井戸跡出土遺物觀察表	343
第136表	第311号住居跡出土遺物觀察表	264	第173表	第21号井戸跡出土遺物觀察表	343
第137表	第312号住居跡出土遺物觀察表	268	第174表	第22号井戸跡出土遺物觀察表	343
第138表	第314号住居跡出土遺物觀察表	271	第175表	第23号井戸跡出土遺物觀察表	343
第139表	第315号住居跡出土遺物觀察表	276	第176表	第24号井戸跡出土遺物觀察表	343
第140表	第316号住居跡出土遺物觀察表	278	第177表	第28号井戸跡出土遺物觀察表	344
第141表	第320号住居跡出土遺物觀察表	279	第178表	第29号井戸跡出土遺物觀察表	344
第142表	第323号住居跡出土遺物觀察表	281	第179表	第2号竪穴式遺構(SX4)出土遺物 觀察表	346
第143表	第324号住居跡出土遺物觀察表	281	第180表	第4号竪穴式遺構(SX8)出土遺物 觀察表	346
第144表	第327号住居跡出土遺物觀察表	283	第181表	第1号製鉄炉跡出土遺物觀察表	349
第145表	第329号住居跡出土遺物觀察表	284	第182表	第2号製鉄炉跡出土遺物觀察表	350
第146表	第3号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	290	第183表	第3号製鉄炉跡出土遺物觀察表	351
第147表	第4号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	290			
第148表	第6号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	292			

第184表	製鉄関連遺物観察表	355	第218表	第17号溝跡出土遺物観察表	400
第185表	粘土採掘坑 (S X 12) 出土遺物観察表	365	第219表	第18号溝跡出土遺物観察表	400
第186表	粘土採掘坑 (S X 13) 出土遺物観察表	365	第220表	第19号溝跡出土遺物観察表	401
第187表	粘土採掘坑 (S X 14) 出土遺物観察表	365	第221表	第20号溝跡出土遺物観察表	401
第188表	粘土採掘坑 (S X 15) 出土遺物観察表	365	第222表	第21号溝跡出土遺物観察表	401
第189表	粘土採掘坑 (S X 15・16) 出土遺物 観察表	365	第223表	第23号溝跡出土遺物観察表	401
第190表	粘土採掘坑 (S X 16) 出土遺物観察表	365	第224表	第26号溝跡出土遺物観察表	401
第191表	粘土採掘坑 (S X 17) 出土遺物観察表	365	第225表	第35号溝跡出土遺物観察表	402
第192表	粘土採掘坑 (S X 26) 出土遺物観察表	365	第226表	第36号溝跡出土遺物観察表	402
第193表	粘土採掘坑 (S X 30・31・32) 出土遺物 観察表	366	第227表	第37号溝跡出土遺物観察表	402
第194表	粘土採掘坑 (S X 31) 出土遺物観察表	366	第228表	第39号溝跡出土遺物観察表	402
第195表	粘土採掘坑 (S X 33・34・35) 出土遺物 観察表	366	第229表	第40号溝跡出土遺物観察表	402
第196表	粘土採掘坑 (S X 37) 出土遺物観察表	366	第230表	第41号溝跡出土遺物観察表	402
第197表	粘土採掘坑 (S X 40) 出土遺物観察表	366	第231表	第43号溝跡出土遺物観察表	402
第198表	粘土採掘坑 (S X 53) 出土遺物観察表	366	第232表	第44号溝跡出土遺物観察表	402
第199表	粘土採掘坑 (S X 54) 出土遺物観察表	367	第233表	第45号溝跡出土遺物観察表	402
第200表	粘土採掘坑 (S X 1) 出土遺物観察表	367	第234表	第48号溝跡出土遺物観察表	402
第201表	粘土採掘坑 (S X 11) 出土遺物観察表	367	第235表	第49号溝跡出土遺物観察表	403
第202表	粘土採掘坑 (S X 56) 出土遺物観察表	367	第236表	第50号溝跡出土遺物観察表	403
第203表	粘土採掘坑 (S X 57) 出土遺物観察表	367	第237表	第52号溝跡出土遺物観察表	403
第204表	粘土採掘坑 (S X 59) 出土遺物観察表	367	第238表	第57号溝跡出土遺物観察表	403
第205表	粘土採掘坑 (S X 60) 出土遺物観察表	367	第239表	第59号溝跡出土遺物観察表	403
第206表	粘土採掘坑 (S X 62) 出土遺物観察表	367	第240表	河川跡出土遺物観察表	404
第207表	粘土採掘坑 (S X 63) 出土遺物観察表	367	第241表	土壌計測表	419
第208表	粘土採掘坑 (S X 64) 出土遺物観察表	367	第242表	第12号土壌出土遺物観察表	428
第209表	方形区画溝跡出土遺物観察表	373	第243表	第14号土壌出土遺物観察表	428
第210表	溝跡計測表	375	第244表	第17号土壌出土遺物観察表	428
第211表	第1号溝跡出土遺物観察表	400	第245表	第41号土壌出土遺物観察表	428
第212表	第2号溝跡出土遺物観察表	400	第246表	第45号土壌出土遺物観察表	428
第213表	第3号溝跡出土遺物観察表	400	第247表	第55号土壌出土遺物観察表	429
第214表	第4号溝跡出土遺物観察表	400	第248表	第58号土壌出土遺物観察表	429
第215表	第5号溝跡出土遺物観察表	400	第249表	第64号土壌出土遺物観察表	429
第216表	第7号溝跡出土遺物観察表	400	第250表	第72号土壌出土遺物観察表	429
第217表	第15号溝跡出土遺物観察表	400	第251表	第73号土壌出土遺物観察表	429
			第252表	第75号土壌出土遺物観察表	429
			第253表	第84・85号土壌出土遺物観察表	429
			第254表	第92号土壌出土遺物観察表	429

第255表	第93号土城出土遺物観察表……………429	第282表	第228号土城出土遺物観察表……………431
第256表	第99号土城出土遺物観察表……………429	第283表	第229号土城出土遺物観察表……………432
第257表	第104号土城出土遺物観察表……………429	第284表	第238号土城出土遺物観察表……………432
第258表	第106号土城出土遺物観察表……………430	第285表	第239号土城出土遺物観察表……………432
第259表	第109号土城出土遺物観察表……………430	第286表	第247号土城出土遺物観察表……………432
第260表	第110号土城出土遺物観察表……………430	第287表	第2号茶昆跡出土遺物観察表……………435
第261表	第118号土城出土遺物観察表……………430	第288表	第1号土城基出土遺物観察表……………435
第262表	第121号土城出土遺物観察表……………430	第289表	第2号土城基出土遺物観察表……………436
第263表	第122号土城出土遺物観察表……………430	第290表	第1号道路跡出土遺物観察表……………441
第264表	第123号土城出土遺物観察表……………430	第291表	第2号道路跡出土遺物観察表……………441
第265表	第137号土城出土遺物観察表……………430	第292表	グリッド出土遺物観察表……………449
第266表	第141号土城出土遺物観察表……………430	第293表	第33号住居跡出土石器観察表……………462
第267表	第146号土城出土遺物観察表……………430	第294表	第126号住居跡出土石器観察表……………465
第268表	第157号土城出土遺物観察表……………430	第295表	第129号住居跡出土石器観察表……………468
第269表	第167号土城出土遺物観察表……………430	第296表	第173号住居跡出土石器観察表……………470
第270表	第171号土城出土遺物観察表……………430	第297表	第193号住居跡出土石器観察表……………472
第271表	第174号土城出土遺物観察表……………431	第298表	第196号住居跡出土石器観察表……………473
第272表	第175号土城出土遺物観察表……………431	第299表	第203号住居跡出土石器観察表……………478
第273表	第179号土城出土遺物観察表……………431	第300表	第269号住居跡出土石器観察表……………480
第274表	第183号土城出土遺物観察表……………431	第301表	第270号住居跡出土石器観察表……………483
第275表	第197号土城出土遺物観察表……………431	第302表	第273号住居跡出土石器観察表……………484
第276表	第198号土城出土遺物観察表……………431	第303表	第298号住居跡出土石器観察表……………489
第277表	第200号土城出土遺物観察表……………431	第304表	第305号住居跡出土石器観察表……………493
第278表	第202号土城出土遺物観察表……………431	第305表	第317号住居跡出土石器観察表……………496
第279表	第203号土城出土遺物観察表……………431	第306表	第318号住居跡出土石器観察表……………499
第280表	第204号土城出土遺物観察表……………431	第307表	第160号土城出土石器観察表……………501
第281表	第225号土城出土遺物観察表……………431	第308表	グリッド出土石器観察表……………512

図 版 目 次

遺跡周辺の地形（昭和35年）

図版 1 北東調査区全景（南から）

北東調査区全景（北から）

図版 2 第185・193号住居跡付近

第50号溝跡

図版 3 道路跡

第50・52・54・61・63号溝跡

図版 4 第124号住居跡

第125号住居跡

第127・147号住居跡

図版 5 第128号住居跡

第130号住居跡

第132・133号住居跡

図版 6 第134号住居跡

第135号住居跡

第136号住居跡

図版 7 第137号住居跡

第139号住居跡

第140号住居跡

図版 8 第141号住居跡

第141・142・151号住居跡

第142号住居跡

図版 9 第142号住居跡遺物出土状況

第143号住居跡

図版10 第144号住居跡

第145号住居跡

第149号住居跡

図版11 第149号住居跡遺物出土状況

第150号住居跡遺物出土状況

第153号住居跡

図版12 第155号住居跡遺物出土状況

第157号住居跡

第159号住居跡

図版13 第160号住居跡

第161号住居跡

第162・164号住居跡

図版14 第162号住居跡カマド

第163号住居跡

第165号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

図版15 第168号住居跡

第178号住居跡

第179号住居跡

図版16 第180号住居跡

第180号住居跡遺物出土状況

図版17 第181号住居跡

第182号住居跡

第183号住居跡

図版18 第183号住居跡遺物出土状況

第184号住居跡

第185号住居跡

図版19 第188号住居跡

第189号住居跡

第192号住居跡

図版20 第194号住居跡遺物出土状況

第197号住居跡

第197号住居跡カマド遺物出土状況

図版21 第197号住居跡カマド

第198号住居跡

第201号住居跡

図版22 第204号住居跡遺物出土状況

第205号住居跡

第206号住居跡

図版23 第208号住居跡遺物出土状況

第209号住居跡

第210号住居跡

図版24 第210号住居跡遺物出土状況

第211号住居跡

第211号住居跡遺物出土状況

図版25 第212号住居跡

第213号住居跡

	第214号住居跡	図版38	第254号住居跡カマド遺物出土状況
図版26	第215号住居跡		第254号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
	第217号住居跡		第255号住居跡
	第218号住居跡	図版39	第257・258号住居跡
図版27	第219号住居跡		第259号住居跡遺物出土状況
	第220号住居跡		第259号住居跡カマド遺物出土状況
	第221号住居跡	図版40	第259号住居跡遺物出土状況
図版28	第222号住居跡		第262号住居跡
	第223号住居跡		第263号住居跡
	第224号住居跡カマド	図版41	第264号住居跡
図版29	第226号住居跡		第265号住居跡
	第226号住居跡遺物出土状況		第267号住居跡
	第226号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版42	第267号住居跡遺物出土状況
図版30	第228号住居跡		第268号住居跡貯蔵穴
	第230号住居跡		第271・272号住居跡
	第230・231号住居跡	図版43	第273号住居跡
図版31	第230号住居跡貯蔵穴遺物出土状況		第274号住居跡
	第235号住居跡貯蔵穴遺物出土状況		第278号住居跡
	第235号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版44	第278号住居跡遺物出土状況
図版32	第236・237号住居跡		第279号住居跡
	第236号住居跡		第280号住居跡
	第238号住居跡	図版45	第280号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
図版33	第239号住居跡		第281号住居跡
	第244号住居跡		第281号住居跡カマド遺物出土状況
	第245号住居跡遺物出土状況	図版46	第281号住居跡粘上検出状況
図版34	第245号住居跡		第282号住居跡
	第246号住居跡 ⁵⁾ 跡		第286号住居跡
	第247号住居跡	図版47	第287号住居跡
図版35	第247号住居跡遺物出土状況		第287号住居跡遺物出土状況
	第247号住居跡遺物出土状況		第287号住居跡遺物出土状況
	第247号住居跡遺物出土状況	図版48	第289号住居跡
図版36	第248号住居跡		第291号住居跡
	第249号住居跡		第291号住居跡カマド遺物出土状況
	第250号住居跡	図版49	第292号住居跡
図版37	第251号住居跡		第293号住居跡
	第252号住居跡		第293号住居跡遺物出土状況
	第254号住居跡	図版50	第297号住居跡

	第299号住居跡		第203号住居跡
	第300号住居跡		第269号住居跡
図版51	第302号住居跡		第269号住居跡炉体土器
	第303号住居跡	図版62	第270号住居跡
	第304号住居跡		第273号住居跡
図版52	第304号住居跡カマド		第298号住居跡
	第307号住居跡		第298号住居跡遺物出土状況
	第308号住居跡	図版63	第305号住居跡
図版53	第309・322号住居跡		第305号住居跡炉跡
	第310号住居跡		第317号住居跡遺物出土状況
	第312号住居跡		第318号住居跡
図版54	第312号住居跡カマド遺物出土状況	図版64	第3号掘立柱建物跡
	第314号住居跡		第5号掘立柱建物跡
	第314号住居跡遺物出土状況		第6号掘立柱建物跡
図版55	第314号住居跡カマド周辺遺物出土状況		第7号掘立柱建物跡
	第314号住居跡カマド遺物出土状況		第8号掘立柱建物跡
	第311・315号住居跡		第9号掘立柱建物跡・第118号住居跡
図版56	第315号住居跡貯蔵穴遺物出土状況		第10号掘立柱建物跡
	第315号住居跡カマド遺物出土状況		第12号掘立柱建物跡
	第316号住居跡	図版65	第26号掘立柱建物跡
図版57	第319・320号住居跡		第5号井戸跡
	第321・325号住居跡		第6号井戸跡遺物出土状況
	第322号住居跡		第7号井戸跡
図版58	第324号住居跡		第7号井戸跡遺物出土状況
	第33号住居跡		第8号井戸跡
	第33号住居跡炉跡		第8・9号井戸跡
	第126号住居跡		第9号井戸跡
図版59	第129号住居跡	図版66	第15号井戸跡
	第131号住居跡		第16号井戸跡
	第148号住居跡		円形周溝状遺構 (S X 3)
	第148号住居跡炉体土器		第1号製鉄炉跡
図版60	第173号住居跡		第1号製鉄炉跡遺物出土状況
	第193号住居跡		第3号製鉄炉跡羽口出土状況
	第193号住居跡炉跡		第3号製鉄炉跡羽口出土状況
	第196号住居跡		焼上遺構 (S X 5)
図版61	第202号住居跡	図版67	粘土採掘坑 (S X 12)
	第202号住居跡炉跡		方形区画溝跡北側ビット群 (S D 42)

	方形区画溝跡北辺 (S D42)				
	第1・2号溝跡				
	第8・9・10号溝跡				
	第15号溝跡				
	第19号溝跡遺物出土状況				
	第49・59号溝跡				
図版68	第50号溝跡				
	第52号溝跡				
	第54号溝跡				
	第61号溝跡				
	第46号土壌・第1号上墳墓 (S K47)				
	第66号土壌				
	第92号土壌				
	第141号土壌				
図版69	第150号土壌				
	第195号土壌				
	第217号土壌				
	第225号土壌				
	第229号土壌				
	第231号土壌				
	第238号土壌				
	第239号土壌				
図版70	第247号土壌				
	第265号土壌				
	第266号土壌				
	第267号土壌				
	第268号土壌				
	第1号茶毘跡				
	第2号上墳墓				
	グリッド遺物出土状況				
図版71	第124号住居跡	第33図1			
	第132号住居跡	第38図2			
	第135号住居跡	第40図4			
	第135号住居跡	第40図7			
	第135号住居跡	第40図8			
	第135号住居跡	第40図9			
	第135号住居跡	第40図10			
	第139号住居跡	第44図1			
	第141号住居跡	第46図1			
	第141号住居跡	第46図2			
図版72	第141号住居跡	第46図3			
	第141号住居跡	第46図4			
	第141号住居跡	第46図5			
	第142号住居跡	第48図1			
	第143号住居跡	第49図3			
	第144号住居跡	第51図1			
	第144号住居跡	第51図2			
	第144号住居跡	第51図16			
	第146号住居跡	第54図2			
	第146号住居跡	第54図3			
図版73	第152号住居跡	第56図1			
	第152号住居跡	第56図2			
	第152号住居跡	第56図3			
	第155号住居跡	第61図1			
	第155号住居跡	第61図3			
	第155号住居跡	第61図4			
	第155号住居跡	第61図7			
	第161号住居跡	第66図2			
	第161号住居跡	第66図4			
	第162・164号住居跡	第71図9			
図版74	第168号住居跡	第73図1			
	第165号住居跡	第76図2			
	第165号住居跡	第76図3			
	第165号住居跡	第76図5			
	第165号住居跡	第76図6			
	第165号住居跡	第76図7			
	第190号住居跡	第79図1			
	第175号住居跡	第83図2			
	第175号住居跡	第83図7			
	第177号住居跡	第86図2			
図版75	第177号住居跡	第86図3			
	第177号住居跡	第86図4			
	第177号住居跡	第86図5			
	第179号住居跡	第90図1			

	第179号住居跡	第90图3		第198号住居跡	第111图7
	第180号住居跡	第92图1		第198号住居跡	第111图8
	第180号住居跡	第92图2		第198号住居跡	第111图9
	第180号住居跡	第92图3		第198号住居跡	第111图10
	第180号住居跡	第92图4		第198号住居跡	第111图11
	第182号住居跡	第94图2		第198号住居跡	第111图12
图版76	第182号住居跡	第94图3		第205号住居跡	第118图2
	第182号住居跡	第94图4		第206号住居跡	第119图1
	第182号住居跡	第94图5		第208号住居跡	第121图1
	第182号住居跡	第94图6	图版80	第209号住居跡	第122图1
	第182号住居跡	第94图7		第210号住居跡	第124图2
	第182号住居跡	第94图10		第210号住居跡	第124图3
	第183号住居跡	第95图1		第210号住居跡	第124图9
	第184号住居跡	第97图2		第210号住居跡	第124图10
	第184号住居跡	第97图5		第210号住居跡	第124图11
	第184号住居跡	第97图6		第212号住居跡	第130图1
图版77	第185号住居跡	第99图1		第212号住居跡	第130图2
	第185号住居跡	第99图2		第212号住居跡	第130图3
	第188号住居跡	第102图2		第212号住居跡	第130图4
	第188号住居跡	第102图3	图版81	第212号住居跡	第130图7
	第188号住居跡	第102图4		第213号住居跡	第132图4
	第195号住居跡	第105图1		第215号住居跡	第134图1
	第195号住居跡	第105图2		第218号住居跡	第137图1
	第197号住居跡	第108图3		第218号住居跡	第137图2
	第197号住居跡	第108图4		第218号住居跡	第137图3
	第197号住居跡	第108图5		第219号住居跡	第138图1
图版78	第197号住居跡	第108图6		第224号住居跡	第146图1
	第197号住居跡	第108图7		第224号住居跡	第146图2
	第197号住居跡	第108图8		第224号住居跡	第146图4
	第197号住居跡	第108图9	图版82	第224号住居跡	第146图5
	第197号住居跡	第108图10		第227号住居跡	第151图2
	第197号住居跡	第108图11		第227号住居跡	第151图3
	第198号住居跡	第111图1		第227号住居跡	第151图4
	第198号住居跡	第111图3		第236号住居跡	第160图1
	第198号住居跡	第111图4		第236号住居跡	第160图5
	第198号住居跡	第111图5		第236号住居跡	第160图6
图版79	第198号住居跡	第111图6		第236号住居跡	第160图7

	第237号住居跡	第161图 1		第292号住居跡	第222图 4
	第238号住居跡	第163图 1		第299号住居跡	第230图 1
图版83	第245号住居跡	第167图 2		第303号住居跡	第233图 1
	第245号住居跡	第167图 5		第307号住居跡	第241图 1
	第250号住居跡	第175图 1		第312号住居跡	第249图 2
	第250号住居跡	第175图 3	网版87	第312号住居跡	第249图 3
	第254号住居跡	第179图 2		第312号住居跡	第249图 4
	第254号住居跡	第179图 4		第312号住居跡	第249图 5
	第254号住居跡	第179图 5		第312号住居跡	第249图 6
	第254号住居跡	第179图 6		第312号住居跡	第250图25
	第254号住居跡	第179图 9		第314号住居跡	第251图 1
	第254号住居跡	第179图10		第315号住居跡	第255图 4
图版84	第257号住居跡	第184图 1		第315号住居跡	第255图 8
	第257号住居跡	第184图 2		第329号住居跡	第268图 2
	第257号住居跡	第184图 5		第 3号掘立柱建物跡	第272图 1
	第257号住居跡	第184图 6	网版88	第 3号掘立柱建物跡	第272图 4
	第257号住居跡	第184图 7		第 6号掘立柱建物跡	第275图 1
	第257·258号住居跡	第184图 8		第 6号掘立柱建物跡	第275图 2
	第257·258号住居跡	第184图 9		第 7号掘立柱建物跡	第277图 3
	第266号住居跡	第192图 1		第12号掘立柱建物跡	第280图 2
	第266号住居跡	第192图 2		第28号掘立柱建物跡	第297图 1
	第267号住居跡	第193图 2		第 5号井戸跡	第310图 4
图版85	第267号住居跡	第193图 3		第 5号井戸跡	第310图21
	第267号住居跡	第193图 5		第 5号井戸跡	第310图22
	第268号住居跡	第194图 1		第 5号井戸跡	第310图25
	第271号住居跡	第196图 1	网版89	第 5号井戸跡	第310图26
	第271号住居跡	第196图 3		第 5号井戸跡	第311图29
	第271号住居跡	第196图 4		第16号井戸跡	第314图 5
	第275号住居跡	第199图 2		第16号井戸跡	第314图 7
	第275号住居跡	第199图 3		第24号井戸跡	第316图19
	第278号住居跡	第203图 1		粘土採掘坑 (S X 12)	第331图 2
	第279号住居跡	第204图 1		粘土採掘坑 (S X 26)	第332图 6
图版86	第279号住居跡	第204图 3		粘土採掘坑 (S X 26)	第332图 7
	第281号住居跡	第207图 1		粘土採掘坑 (S X 26)	第332图 9
	第281号住居跡	第207图 2		粘土採掘坑 (S X 30·31·32)	第332图12
	第281号住居跡	第207图 6	图版90	粘土採掘坑 (S X 30·31·32)	第332图13
	第287号住居跡	第215图 2		粘土採掘坑 (S X 30·31·32)	第332图17

粘土採掘坑 (S X 33・34・35) 第333図32
 粘土採掘坑 (S X 40) 第334図38
 粘土採掘坑 (S X 54) 第334図43
 粘土採掘坑 (S X 54) 第334図46
 粘土採掘坑 (S X 54) 第334図48
 粘土採掘坑 (S X 60) 第335図9
 粘土採掘坑 (S X 63) 第335図11
 方形区画溝跡 第339図3
 図版91 方形区画溝跡 第339図4
 方形区画溝跡 第339図5
 方形区画溝跡 第339図15
 方形区画溝跡 第339図19
 第4号溝跡 第360図1
 第7号溝跡 第360図7
 第21号溝跡 第360図21
 第52号溝跡 第364図2
 第52号溝跡 第364図4
 第52号溝跡 第364図5
 図版92 第52号溝跡 第364図6
 第52号溝跡 第364図8
 第14号土壇 第380図3
 第141号土壇 第382図15
 第171号土壇 第383図1
 第1号土壇墓 第389図1
 第1号土壇墓 第389図2
 第1号土壇墓 第389図3
 第2号土壇墓 第390図1
 第2号土壇墓 第390図2
 図版93 第2号土壇墓 第390図3
 第2号土壇墓 第390図4
 第2号土壇墓 第390図5
 グリッド 第397図21
 グリッド 第397図22
 グリッド 第398図42
 グリッド 第398図44
 グリッド 第398図45
 グリッド 第398図46

グリッド 第398図48
 図版94 グリッド 第398図49
 グリッド 第398図51
 第136号住居跡 第42図2
 第149号住居跡 第42図15
 第155号住居跡 第61図10
 第161号住居跡 第66図1
 第161号住居跡 第66図10
 第161号住居跡 第67図12
 図版95 第161号住居跡 第67図14
 第168号住居跡 第73図2
 第168号住居跡 第73図3
 第168号住居跡 第73図4
 第165号住居跡 第76図1
 第165号住居跡 第76図4
 第175号住居跡 第83図9
 第177号住居跡 第86図6
 図版96 第177号住居跡 第86図7
 第177号住居跡 第86図8
 第177号住居跡 第86図9
 第177号住居跡 第86図16
 第179号住居跡 第90図7
 第179号住居跡 第90図9
 第184号住居跡 第97図11
 第184号住居跡 第97図12
 図版97 第185号住居跡 第99図3
 第185号住居跡 第99図13
 第188号住居跡 第102図5
 第188号住居跡 第102図6
 第192号住居跡 第103図1
 第192号住居跡 第103図2
 第197号住居跡 第108図14
 第198号住居跡 第112図26
 図版98 第204号住居跡 第117図3
 第204号住居跡 第117図8
 第210号住居跡 第124図8
 第210号住居跡 第124図12

	第210号住居跡	第124図13		第309号住居跡	第243図6
	第210号住居跡	第124図14		第312号住居跡	第249図9
	第210号住居跡	第124図15		第312号住居跡	第249図16
	第210号住居跡	第124図20		第314号住居跡	第251図18
図版99	第210号住居跡	第124図22		第314号住居跡	第252図27
	第210号住居跡	第124図23		第315号住居跡	第255図3
	第210号住居跡	第124図26		第315号住居跡	第255図6
	第210号住居跡	第125図39	図版104	第315号住居跡	第255図7
	第212号住居跡	第130図5		第315号住居跡	第255図15
	第212号住居跡	第130図6		第315号住居跡	第255図21
	第212号住居跡	第130図8		第315号住居跡	第256図29
	第212号住居跡	第130図9		第315号住居跡	第257図38
図版100	第212号住居跡	第130図10		第316号住居跡	第258図4
	第212号住居跡	第130図11		第316号住居跡	第258図5
	第218号住居跡	第137図4		第316号住居跡	第258図11
	第224号住居跡	第146図8	図版105	第7号掘立柱建物跡	第277図1
	第225号住居跡	第146図15		第30号掘立柱建物跡	第299図2
	第226号住居跡	第148図1		第5号井戸跡	第310図9
	第226号住居跡	第148図8		第5号井戸跡	第310図10
	第230号住居跡	第156図1		第5号井戸跡	第310図11
図版101	第230号住居跡	第156図2		第5号井戸跡	第310図12
	第247号住居跡	第170図1		第5号井戸跡	第310図13
	第247号住居跡	第170図2		第22号井戸跡	第315図8
	第247号住居跡	第170図8	図版106	粘土採掘坑 (S X30・31・32)	第332図18
	第247号住居跡	第170図11		粘土採掘坑 (S X31)	第333図30
	第248号住居跡	第172図1		粘土採掘坑 (S X33・34・35)	第333図33
	第250号住居跡	第175図10		粘土採掘坑 (S X33・34・35)	第333図34
	第254号住居跡	第179図12		方形区西溝跡	第339図17
図版102	第259号住居跡	第186図2		方形区西溝跡	第340図31
	第259号住居跡	第186図9		方形区西溝跡	第340図34
	第271号住居跡	第196図2		第21号溝跡	第360図17
	第280号住居跡	第205図1	図版107	第52号溝跡	第364図12
	第286号住居跡	第213図6		第14号土塼	第380図5
	第286号住居跡	第213図7		グリッド	第397図20
	第287号住居跡	第215図11		グリッド	第398図53
	第293号住居跡	第224図4		第124号住居跡	第33図6
図版103	第303号住居跡	第233図2		第127号住居跡	第35図2

图版108	第137号住居跡	第42图8	第198号住居跡	第111网20
	第137号住居跡	第42图12	第198号住居跡	第111网21
	第142号住居跡	第48图2	第200号住居跡	第114图3
	第142号住居跡	第48图3	第204号住居跡	第117图1
	第142号住居跡	第48图4	第204号住居跡	第117图5
	第142号住居跡	第48图7	图版115	第210号住居跡
图版109	第142号住居跡	第48图9		第210号住居跡
	第144号住居跡	第51图23		第210号住居跡
	第153号住居跡	第59图4		第210号住居跡
	第153号住居跡	第59图6		第210号住居跡
	第155号住居跡	第61图9		第210号住居跡
	第161号住居跡	第66图5	图版116	第210号住居跡
图版110	第161号住居跡	第66图6		第210号住居跡
	第161号住居跡	第66图7		第210号住居跡
	第161号住居跡	第66图9		第210号住居跡
	第161号住居跡	第66图11		第212号住居跡
	第162 - 164号住居跡	第71图11		第212号住居跡
	第165号住居跡	第77图9	图版117	第212号住居跡
图版111	第165号住居跡	第77图10		第212号住居跡
	第165号住居跡	第77图18		第212号住居跡
	第190号住居跡	第79图2		第212号住居跡
	第191号住居跡	第81图12		第212号住居跡
	第191号住居跡	第81图15		第212号住居跡
	第177号住居跡	第86图11	图版118	第212号住居跡
图版112	第180号住居跡	第92图9		第212号住居跡
	第185号住居跡	第99图14		第213号住居跡
	第185号住居跡	第99图15		第221号住居跡
	第185号住居跡	第99图16		第221号住居跡
	第194号住居跡	第104图10		第224号住居跡
	第197号住居跡	第108图13	图版119	第226号住居跡
图版113	第197号住居跡	第109图21		第226号住居跡
	第197号住居跡	第109图22		第226号住居跡
	第197号住居跡	第109图23		第229号住居跡
	第198号住居跡	第111图16		第229号住居跡
	第198号住居跡	第111图17		第230号住居跡
	第198号住居跡	第111图18	图版120	第235号住居跡
图版114	第198号住居跡	第111图19		第235号住居跡

	第247号住居跡	第170网 3		第315号住居跡	第255网14
	第247号住居跡	第170图 4		第315号住居跡	第255网23
	第247号住居跡	第170图 5		第315号住居跡	第256网26
	第247号住居跡	第170图 6	图版127	第315号住居跡	第256图27
图版121	第247号住居跡	第170图10		第315号住居跡	第256图30
	第247号住居跡	第170图13		第315号住居跡	第257图31
	第247号住居跡	第170网14		第315号住居跡	第257图32
	第250号住居跡	第175图 5		第315号住居跡	第257图34
	第250号住居跡	第175图 6		第316号住居跡	第258网 9
	第250号住居跡	第175图 7	图版128	第329号住居跡	第268网 3
图版122	第250号住居跡	第175图 8		第 5 号井戸跡	第311图31
	第254号住居跡	第179图14		第 5 号井戸跡	第311图32
	第254号住居跡	第180网17		第16号井戸跡	第314图10
	第255号住居跡	第181图 1		第21号井戸跡	第315网 6
	第259号住居跡	第186图 5		第28号井戸跡	第317网 1
	第259号住居跡	第186图 7	图版129	粘土採掘坑 (S X 30 · 31 · 32)	第333图22
图版123	第259号住居跡	第186网 8		粘土採掘坑 (S X 30 · 31 · 32)	第333网26
	第259号住居跡	第186图10		粘土採掘坑 (S X 31)	第333网27
	第259号住居跡	第186图11		粘土採掘坑 (S X 37)	第333图35
	第267号住居跡	第193图 6		粘土採掘坑 (S X 56)	第335图 4
	第271号住居跡	第196图 5		粘土採掘坑 (S X 63)	第335图13
	第271号住居跡	第196网 7	图版130	粘土採掘坑 (S X 64)	第336网 1
图版124	第271号住居跡	第196图10		方形区西溝跡	第340网29
	第271号住居跡	第196图11		方形区西溝跡	第340图32
	第271号住居跡	第196图14		第21号溝跡	第361图33
	第287号住居跡	第215图 7		第52号溝跡	第364图13
	第287号住居跡	第215网 9		第75号土壤	第381图11
	第307号住居跡	第241图 5	图版131	第127号住居跡	第35网 1
图版125	第312号住居跡	第249图20		第142号住居跡	第48图 5
	第312号住居跡	第249图21		第142号住居跡	第48图 6
	第314号住居跡	第252网24		第142号住居跡	第48图 8
	第314号住居跡	第252图25	图版132	第144号住居跡	第51网22
	第314号住居跡	第252图29		第152号住居跡	第56图 5
	第315号住居跡	第255图 9		第153号住居跡	第59图 5
图版126	第315号住居跡	第255网10		第161号住居跡	第67图15
	第315号住居跡	第255网12	图版133	第162号住居跡	第70图 1
	第315号住居跡	第255网13		第162号住居跡	第70图 2

- 第162号住居跡 第70図3
 第162号住居跡 第70図4
 図版134 第162号住居跡 第71図5
 第162号住居跡 第71図6
 第162・164号住居跡 第71図10
 第168号住居跡 第73図5
 図版135 第165号住居跡 第77図14
 第165号住居跡 第77図15
 第165号住居跡 第77図16
 第165号住居跡 第77図17
 図版136 第177号住居跡 第86図15
 第177号住居跡 第86図19
 第179号住居跡 第90図5
 第180号住居跡 第92図7
 図版137 第180号住居跡 第92図8
 第180号住居跡 第92図13
 第180号住居跡 第92図14
 第184号住居跡 第97図15
 図版138 第185号住居跡 第99図18
 第185号住居跡 第100図20
 第185号住居跡 第100図21
 第197号住居跡 第108図16
 図版139 第197号住居跡 第108図17
 第197号住居跡 第108図18
 第197号住居跡 第109図19
 第197号住居跡 第109図20
 図版140 第197号住居跡 第109図25
 第198号住居跡 第111図22
 第198号住居跡 第112図23
 第198号住居跡 第112図24
 図版141 第204号住居跡 第117図4
 第204号住居跡 第117図10
 第210号住居跡 第125図44
 第210号住居跡 第125図46
 図版142 第210号住居跡 第126図49
 第210号住居跡 第126図50
 第210号住居跡 第126図53
 第210号住居跡 第127図61
 図版143 第210号住居跡 第127図62
 第212号住居跡 第130図23
 第212号住居跡 第131図24
 第212号住居跡 第131図25
 図版144 第224号住居跡 第146図7
 第226号住居跡 第148図6
 第226号住居跡 第148図7
 第230号住居跡 第156図8
 図版145 第248号住居跡 第172図2
 第254号住居跡 第179図13
 第254号住居跡 第179図15
 第281号住居跡 第207図10
 図版146 第286号住居跡 第213図8
 第287号住居跡 第215図8
 第311号住居跡 第246図13
 第312号住居跡 第249図18
 図版147 第312号住居跡 第249図19
 第315号住居跡 第256図24
 第315号住居跡 第256図25
 粘土採掘坑 (S X 26) 第332図11
 図版148 第92号土塙 第382図1
 グリッド 第399図6
 緑釉陶器
 図版149 灰釉陶器
 青磁
 図版150 粘土採掘坑 (S X 37) 第334図37
 図版151 第2号製鉄炉跡 第324図2・4
 ミニチュア土器・土製品・土鍾
 図版152 第197号住居跡 第109図(1)
 第197号住居跡 第109図(2)
 図版153 砥石(1)
 砥石(2)
 図版154 砥石(3)・磨石(1)
 磨石(2)
 図版155 第7、16号井戸跡
 第313図2、第314図11・12

	第22号井戸跡 第316図11~15	X線写真(側面) 第167図8
図版156	紡錘車 石製品	第1号溝跡 第359図9 グリッド(三彩) 第397図1
図版157	鉄製品 第3号溝跡 第359図14 第21号溝跡 第360図20 第21号溝跡 第360図24 第2号土壇墓 第390図2	図版164 第33号住居跡 第404図14 第33号住居跡 第404図15 第33号住居跡 第404図18 第33号住居跡 第405図22
図版158	第178、181、223・224、309、 322号住居跡出土円筒埴輪 第208、291号住居跡出土円筒埴輪・ 形象埴輪	図版165 第118号住居跡 第412図1 第129号住居跡 第416図1 第129号住居跡 第416図2 第148号住居跡 第417図1
図版159	第304号住居跡出土円筒埴輪 第306号住居跡出土円筒埴輪	図版166 第269号住居跡 第427図1 第305号住居跡 第439図1 第317号住居跡 第442図1
図版160	第45、73号土壇、グリッド出土円筒埴輪 第178、208、291、304号住居跡、 第204号上城出土形象埴輪	第66号土壇 第447図3 図版167 第33号住居跡 第403図1 第33号住居跡 第403図2 第33号住居跡 第403図3 第33号住居跡 第403図4 第33号住居跡 第403図5 第33号住居跡 第403図6
図版161	第178号住居跡 第88図6 第278号住居跡 第203図3 第304号住居跡 第236図15 第304号住居跡 第236図16 第304号住居跡 第236図17 第304号住居跡 第237図21 第306号住居跡 第239図6 第21号溝跡 第362図44 グリッド 第400図79	図版168 第33号住居跡 第403図7 第33号住居跡 第403図8 第33号住居跡 第403図9 第33号住居跡 第403図10 第33号住居跡 第404図11 第33号住居跡 第404図12
図版162	第304号住居跡出土蓋形埴輪 第237図20 同上 上面 第306号住居跡出土動物埴輪脚部 第239図10 同上 上面 第306号住居跡出土女子埴輪 第240図12	図版169 第33号住居跡 第404図13 第33号住居跡 第404図16 第33号住居跡 第404図17 第33号住居跡 第404図19 第33号住居跡 第405図20 第33号住居跡 第405図21
図版163	第192号住居跡 第103図3 粘土探掘坑(SX15) 第331図15 第293号住居跡 第224図6 X線写真 第224図6 第245号住居跡 第167図8 X線写真 第167図8	図版170 第33号住居跡 第405図30 第126号住居跡 第414図1 第148号住居跡 第417図2 第193号住居跡 第419図1

- 第202号住居跡 第422図1
 第203号住居跡 第425図1
 図版171 第270号住居跡 第429図1
 第270号住居跡 第429図2
 第270号住居跡 第429図3
 第298号住居跡 第433図1
 第298号住居跡 第433図2
 第298号住居跡 第433図3
 図版172 第298号住居跡 第433図4
 第298号住居跡 第433図5
 第298号住居跡 第433図6
 第298号住居跡 第434図7
 第298号住居跡 第434図8
 第298号住居跡 第434図9
 図版173 第298号住居跡 第434図11
 第305号住居跡 第439図2
 第305号住居跡 第439図3
 第318号住居跡 第443図1
 第318号住居跡 第443図2
 第160号土壇 第447図12
 図版174 グリッド 第448図1
 グリッド 第448図2
 グリッド 第448図3
 グリッド 第448図4
 グリッド 第448図5
 図版175 第33号住居跡 第406図(1)
 第33号住居跡 第406・407図(2)
 図版176 第33号住居跡 第407・408図
 第33号住居跡 第408図
 図版177 第118、126号住居跡 第412・414図
 第203号住居跡 第425図
 図版178 第270号住居跡 第429・430図
 第298号住居跡 第434・435図
 図版179 第298号住居跡 第435図
 第305号住居跡 第439・440図
 図版180 第318号住居跡 第443・444図
 第318号住居跡 第444図
 図版181 グリッド 第448図
 グリッド 第448・449図
 図版182 グリッド 第449・450図
 グリッド 第450図
 図版183 グリッド 第451図
 石鏃
 図版184 石鏃・石匙・スクレイパー・異形石器・
 快状耳飾・裝飾品
 尖頭器・スクレイパー
 図版185 石核・礫器
 磨製石斧
 図版186 打製石斧(1)
 打製石斧(2)
 図版187 打製石斧(3)
 磨石(1)
 図版188 磨石(2)
 敲石・叩み石
 図版189 第298、317号住居跡 第436図70、
 第442図10
 第305号住居跡 第440図32
 図版190 グリッド 第456図199
 図版191 製鉄関連遺物(1)
 図版192 製鉄関連遺物(2)

旧新对照表

独立柱建物跡 Pit

		旧	新			旧	新			旧	新								
SB 1	旧	1	2	SB 11	1	2	SB 25	1	4	SB 33	1	1							
	新	1	1			2		5			2	2		2	2				
		2	10		SB 14	1		1			3	6		3	3				
		3	9					1	4			4	3		4	4			
		4	8					2	3			5	2		5	4			
		5	7					3	4			6	1		5	7			
		6	6					4	9		SB 27	7	7		6	5			
		7	5					5	5				2	1		7	8		
		8	4					6	8				3	2	SB 34	8	6		
		9	3					7	7				4	3			1	1	
		10	2					8	6				7	4			2	2	
		11	11			SB 18		1	1				8	5			4	3	
		12	12						1			4		9		6		4	7
		13	13						2			2	SB 28	10		7		5	4
		15	17						3			2				1	1		5
	16	16		4			7		2	2				6		5			
	17	15		6			6		3	3		SB 35		7		4			
	18	14		7	5			4	4					8					
SB 3	1	4		8	4			5	10					1		3			
	2	5	SB 19	1	1			6	5					2		4			
	3	6			2		2		7	9						3	5		
	4	7			3		3	SB 29	8	8				4		2			
	5	8			4		8			9	7					5	6		
	6	9			5		4			10	6				6	1			
	7	10			6		7			1	1			SB 30	8	7			
	8	1			7		6			2	2					9	6		
	9	2		SB 20	8	5			3	3					10	5			
	10	3				1	3			4	4					1	1		
	1	4				2	4			5	9				2	2			
	2	3				3	5			7	4				3	3			
	3	2				4	2			7	8				4	4			
	4	1			SB 7	5	6			8	7		5		10				
	1	4					6		1		9	6			6	5			
2	3					7	8		SB 30	10	5		7		4				
3	2		8			7				1	1		7		9				
4	1		8			7				8	8		9		7				
5	10	SB 21	1			1		10		6		10	6						
6	9					2	2			2	2		1		1				
7	8					4	3			3	3		2		2				
8	7					4	7			4	4		3	3					
9	6					5	6			4	10		4	10					
10	5			6		5		5		10		5	4						
SB 8	1		4	SB 23		7	4	SB 31		7	4		5	8					
	2		3				8			8		8	8		5	8			
	3		2				9			7		9	7		6	5			
	4		1				10			6		10	6		7	6			
	5		10			1	1				1	1		7	6				
	6		9			4	8				2	2		8	5				
	7		8			5	4			3	3		9	7					
	8		7			6	7			4	10		10	7					
	9		6		SB 24	8	5		SB 32	5	4		1	1					
	10	5				1	1				5	8		2	2				
	1	3				2	2				6	9		3	3				
	2	2				2	4				7	6		4	8				
	3	1				3	3				8	5		5	4				
	4	7				4	8				10	7		6	7				
	5	6				5	4				1	1		7	6				
6	5		6	7			2	2			8	5							
7	4		7	6			3	3			9	7							
			8	5			4	8			10	7							
			9				5	4			1	1							
			10				6	7			2	2							
			11				7	6			3	3							
							8	5			4	8							
							9				5	4							
						10			6	7									
						11			7	6									
									8	5									

SE	旧	新
	8	7
	9	8
	10	9
	11	10
	12	11
	13	12
	14	13
	15	14
	16	15
	17	16
	18	17
	19	18
	20	19
	21	20
	22	粘土探掘坑SX63
	23	21
	24	粘土探掘坑SX62
	25	
	26	22
	27	粘土探掘坑SX64
	28	粘土探掘坑SX57
	29	23
	30	粘土探掘坑SX56
	31	粘土探掘坑SX59
	32	粘土探掘坑SX60
	33	粘土探掘坑SX70
	34	粘土探掘坑SX58
	36	24
	37	粘土探掘坑SX71
	38	粘土探掘坑SX61
S X	2	第1号整穴状遺構
3	再彫削溝状遺構	
4	第2号整穴状遺構	
5	焼土遺構	
7	第3号整穴状遺構	
8	第4号整穴状遺構	
9	第5号整穴状遺構	
10	第2号土層跡	
44	埋戻ビット列	
S D	26	第3号道路跡
	28	
	42	方形区画溝
	46	SK272
	57	SD58
S K	47	第1号土層跡
	131	SE29
	140	SE26
	164	第1号土層跡
	176	SE25
	185	SE28
	248	第2号土層跡
	268	SE27

I 発掘調査の概要

1. 調査にいたるまでの経過

岡部町は、農業を中心とした町づくりから、産業構造の転換を図り、工業、商業、農業のバランスがとれた創造性豊かな活力に満ちた町づくりの実現に取り組んでいる。

事業の目玉となる道の駅おかべ、中宿歴史公園、古代倉庫復原など県指定史跡中宿遺跡を中心に史跡を活用した総合的な整備と、岡部駅周辺の区画整理事業が始まった。事業地内の係野遺跡の事前発掘調査も実施され、和同開珣や三彩陶柱などの注目すべき出土品から、熊野遺跡は律令時代の榛澤郡衙の中心地と推定されている。

こうした開発事業に対応するため、町は新たに平成5年度から文化財保護体制の整備と充実を図るため、教育委員会に文化財保護室を設置した。県はこれに応え県職員を派遣して体制の強化を支援している。

一方、町は工業の導入振興によって収税の増大と雇用の促進をはかるため、榛澤地区に開発面積231,000㎡の民間企業3社が進出する岡部町西部工業団地建設を誘致した。

工業団地建設予定地には埋蔵文化財包蔵地が所在するため、町は事業者とその取り扱いについて協議を重ねてきた。町教育委員会は平成8年9月から11月にかけて、予定地内の試掘調査を実施し、5ヵ所の遺跡の所在を確認した。遺跡の面積は合計約86,200㎡に達することが明らかとなった。

町は遺跡を出来るだけ保存する方向で開発企業3社に設計変更を要望して、調査期間の短縮、調査費用の削減をはかった。しかし、町文化財保護室の体制は区画整理や歴史公園建設、町史編さん事業等と並行して、工業団地の発掘調査に対応するだけの条件が整わず、町主体となつての発掘調査計画は暗礁に乗り上げた。

行き詰まった状況を何とか打開するため、岡部町

長は工業団地建設促進に伴う埋蔵文化財の発掘調査協力について、県の協力が得られるよう県教育委員会に陳情し、指導及び協力を依頼した。

町は苦しい財政状況の中で6人の専門職員を配し、文化財行政の積極的推進に努め先進的な体制造りに努力している。県はこうした町の姿勢を高く評価した。この上さらに工業団地の発掘調査を実施するだけの余力は残されていないと判断した。そこで県文化財保護課は調査の受皿として財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「埋文事業団」）が受託事業として実施できるかどうか検討に入り、関係各方面と調整を図り、受託条件等を整備した。そして同内の合意を得て市町村支援の観点から、埋文事業団が委託を受けて発掘調査を実施する旨、正式に町と事業者に伝え、理解と協力を求めた。その方針は、調査主体を埋文事業団とし、町も調査組織に職員を派遣して全面協力体制をとるものである。さっそく関係者間で具体的な調査期間、方法、経費を中心に協議が行われた。

かくして平成8年12月19日付け教文第1246号で県から事業者の鹿島道路株式会社・株式会社横森製作所・東洋エクステリア株式会社あて、岡部町と事業委託契約の締結を、岡部町は埋文事業団と事業委託契約の続きを行うよう通知した。

発掘調査に先立ち事業者からは文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届が、埋文事業団からは同法第57条第1項に基づく発掘調査届が提出され、平成9年1月6日から発掘調査が開始された。

それぞれに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘届 平成9年2月18日付け教文第3-689号
発掘通知

第1次 平成9年2月18日付け教文第2-203号

第2次 平成9年4月25日付け教文第2-13号

第4次 平成10年4月24日付け教文第2-9号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

岡部町西部工業団地造成用地内に所在する周知の遺跡は、大寄遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡の3遺跡である。各遺跡の範囲及び遺構確認を目的とした試掘調査は岡部町教育委員会によって行われた。その結果前記2遺跡において遺構が確認された。さらに新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡の存在が確認された。特に大寄遺跡、宮西遺跡については

濃密に遺構が分布することが明らかとなった。西浦北遺跡については、対象範囲では遺構は確認されなかった。以上の結果から前記5遺跡について調査を行うこととなった。

調査に当たっては文化財保護課、岡部町教育委員会、開発担当者代表である鹿島道路株式会社と綿密な協議を行い、各遺跡の調査時期と調査部分について決定した。各遺跡の調査期間及び面積は第1表に示したとおりである。

第1表 各遺跡の調査期間と面積

	平成8年度			平成9年度			平成10年度														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	
大寄遺跡 34,100㎡																					
沖田Ⅰ遺跡 3,700㎡																					
沖田Ⅱ遺跡 4,500㎡																					
沖田Ⅲ遺跡 4,800㎡																					
宮西遺跡 18,180㎡																					

以下に宮西遺跡に関する調査について記す。

調査

宮西遺跡は、西部工業団地用地内に所在する遺跡群の中では、南東部に位置する。調査は平成9年1月6日から平成10年8月31日まで3回に分けて行われた。調査面積は約18,180㎡である。

平成8年度は調査区中央部に東西に伸びる工業団地内の道路部分から調査を開始した。重機による表土掘削を行ったところ、各種の遺構が確認された。調査区東側では古墳時代前期頃の住居跡を壊して造られた古墳跡が検出された。中央部から西側にかけては住居跡が重複しながら濃密に分布している状態であった。調査区西端には自然流路が検出された。この流路は対岸の沖田Ⅲ遺跡との境をなすものである。調査は1月6日から開始し重機による表土除去を行ながら、遺構確認を進めた。14日には基準点測

量を始め、グリッド杭を設定した。あとはひたすら遺構を掘る毎日で、調査は次年度に継続された。8年度の調査面積は2,400㎡、検出遺構数は、縄文時代前期の住居跡及び古墳時代から平安時代に至る住居跡が計78軒、掘立柱建物跡4棟、古墳跡1基、井戸跡3基等、多数の遺構とそれに伴う遺物が検出された。

平成9年度には道路の北側と南側の一部を調査した。北側は沖田Ⅰ遺跡との間にある流路に向かって緩やかに傾斜しており、遺構は漸次疎らになっていく状況であった。道路南側は、調査区の西側にあたり前年度と同じように住居跡が幾重にも重なっていた。9年度の調査面積は7,280㎡、検出遺構数は縄文時代前期の住居跡及び古墳時代から平安時代に至る住居跡が計166軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡18基、土坑113基等多数の遺構とそれに伴う遺物が検

出された。

平成10年度は南側の残りの部分を調査した。調査区西側は前年度と同じ自然流路が蛇行し、南側は竪穴住居跡の分布が疎らになり、掘立柱建物が多くなる傾向が見られた。さらにその南は、溝を境として遺構がほとんど構築されていないことがわかった。調査は、平成10年4月6日から8月31日まで行われた。年度始めに前年度に済ませてあった表土除去部分の調査に入り、順調に作業を進めた。梅雨の雨などもあったが、7月末には航空写真撮影を行うことができ、引き続き遺構の図化作業を行い、図面の点検整理を済ませ、8月末に岡部町西工業団地造成にかかるすべての調査を終了した。平成10年度の調査面積は8,500㎡、検出遺構数は縄文時代前期の住居跡及び古墳時代から平安時代に至る住居跡が計83軒、掘立柱建物跡22棟、土坑56基等多数の遺構と

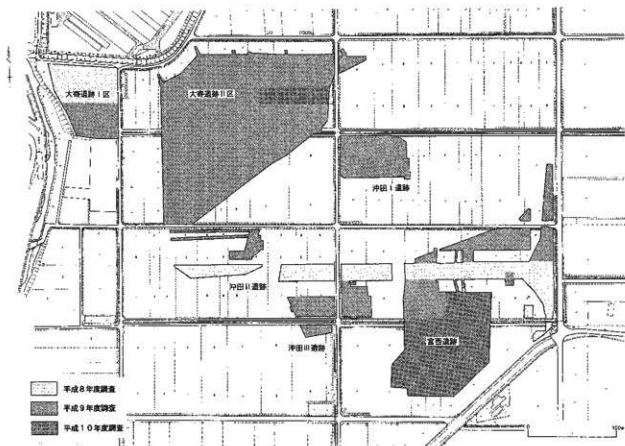
それに伴う遺物が検出された。

整理・報告書作成

整理事業は、平成14年度から3年度にわたって行った。報告書は2冊で、1冊は埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第288集「宮西遺跡Ⅰ」として、平成14年度に刊行されている。

平成15年度は平成15年10月1日から平成16年3月24日まで、平成16年度は平成16年4月1日から平成16年8月31日まで実施した。

平成15年度の作業は、遺物は接合・復原を行い、報告を要するものについて拓本を採り、実測図を作成した。遺構図は二次原因の作成、トレースなどを進めた。平成16年度は前年度の作業を継続し、遺構図・遺物図版の版組、遺物写真撮影、原稿執筆等を行い、1月刷付を作成し、入札をおこなった。校正を経て、3月本書の印刷を終了した。



第1図 年度別調査範囲

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部

(1) 発掘調査

平成8年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
主任 西沢 信行
主任 長滝 美智子
専門調査員兼経理課長 菊池 久
主任 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 夫
調査第二課長 大和 修
主任 元井 茂
主任 橋本 勉
主任 磯崎 一
主任調査員 木戸 春夫
主任調査員 宮瀬 由紀子

岡部町教育委員会

主任 烏羽 政之
主任 宮本 直樹

平成9年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 塩野 博
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

庶務課長 依田 透
主任 西沢 信行
主任 長滝 美智子
専門調査員兼経理課長 腰塚 雄二
主任 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

調査部

調査部副部長 今泉 泰之
調査第一課長 井上 尚明
主任 橋本 勉
主任 中村 倉司
主任 磯崎 一
主任調査員 富田 和夫
主任調査員 木戸 春夫

岡部町教育委員会

主任 平田 重之
臨時職員 松田 哲

平成10年度

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
主任 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

調査部

調査部長	谷井 彪	主 任	江田和美
調査部副部長	水村 孝行	主 任	長 滝美智子
調査第二課長	井上 尚明	主 任	福 田 昭美
上 任 調 査 員	磯 崎 一	主 任	腰 塚 雄二
主 任 調 査 員	石 坂 俊 郎	主 任	菊 池 久
岡部町教育委員会	福 田 聖	資料部	
臨 時 職 員	斎 藤 欣 延	資 料 部 長	高 橋 夫
		専門調査員兼資料部副部長	石 岡 憲 雄
		専門調査員	大 和 修
		統括調査員	磯 崎 一

(2) 整理・報告書作成事業

平成10年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進
管理部	
庶 務 課 長	金 子 隆
主 任	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美智子
主 任	腰 塚 雄二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
資料部	

資 料 部 長	増 田 逸 朗
上幹兼資料部副部長	小久保 徹
資料整理第二課長	市 川 修
主 任 調 査 員	木 戸 春 夫

平成11年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓
管理部	
管理部副部長兼経理課長	関 野 栄 一
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二

資料部

資 料 部 長	高 橋 夫
専門調査員兼資料部副部長	石 岡 憲 雄
専門調査員	大 和 修
統括調査員	磯 崎 一

平成12年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓
管理部	
管 理 部 副 部 長	関 野 栄 一
主 席 (庶務担当)	阿 部 正 浩
主 席 (施設担当)	野 中 廣 幸
主 任	菊 池 久
主 席 (経理担当)	江 田 和 美
上 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄二

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
資 料 副 部 長	鈴 木 敏 昭
主席調査員 (資料整理担当)	磯 崎 一
統括調査員	富 田 和 夫

平成13年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 舘 健
管理部	
管 理 幹 事	持 田 紀 男
主 任	江 田 和 美

主 任	長 滝 美智子	管 理 部 副 部 長	村 田 健 二
主 任	福 田 昭 美	主 席	田 中 由 夫
主 任	腰 塚 雄 二	上 任	江 田 和 美
主 任	菊 池 久	上 任	長 滝 美智子
調 査 部		主 任	福 田 昭 美
調 査 部 長	高 橋 一 夫	主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信	主 任	菊 池 久
主 席 調 査 員 (資 料 整 理 担 当)	磯 崎 一	調 査 部	
主 任 調 査 員	福 田 聖	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄

平成14年度

理 事 長	桐 川 卓 雄	調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
副 理 事 長	飯 塚 誠 一 郎	主 席 調 査 員 (資 料 整 理 担 当)	磯 崎 一
常 務 理 事 兼 管 理 部 長	大 館 健	統 括 調 査 員	木 戸 春 夫

管理部

管 理 幹 事	持 田 紀 男	理 事 長	福 田 陽 充
主 任	江 田 和 美	副 理 事 長	飯 塚 誠 一 郎
主 任	長 滝 美智子	常 務 理 事 兼 管 理 部 長	中 村 英 樹

管理部

主 任	福 田 昭 美	管 理 部 副 部 長	村 田 健 二
主 任	腰 塚 雄 二	主 席	田 中 由 夫
主 任	菊 池 久	主 任	江 田 和 美
調 査 部		主 任	長 滝 美智子
調 査 部 長	高 橋 一 夫	主 任	福 田 昭 美
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信	主 任	菊 池 久
主 席 調 査 員 (資 料 整 理 担 当)	磯 崎 一	主 事	石 原 良 了
統 括 調 査 員	木 戸 春 夫	主 事	海 老 名 健

平成15年度

理 事 長	桐 川 卓 雄	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
副 理 事 長	飯 塚 誠 一 郎	調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
常 務 理 事 兼 管 理 部 長	中 村 英 樹	主 席 調 査 員 (資 料 整 理 担 当)	磯 崎 一
管 理 部		統 括 調 査 員	木 戸 春 夫

管理部

II 遺跡群の立地と環境

1. 地理的環境

岡部町西部工業団地造成用地にかかる遺跡群は岡部町大字榛沢地内に位置する。この地域は岡部町の中でも最も西寄りにあたり、西側は小山川を挟んで本庄市と接する。最寄の交通はJR岡部駅で、駅から西北西に約3.2kmに位置する。周囲は畑と水田の広がる農村地帯で大規模な養鶏も行われている。特に畑作ではトウモロコシとブロッコリーが広く栽培され、岡部町のブロッコリーは日本一の生産量を誇る。

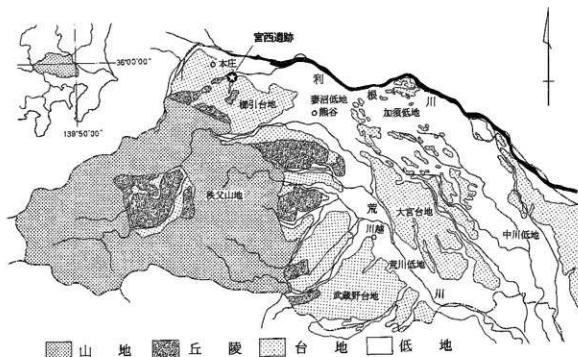
遺跡群の所在する岡部町は、埼玉県の西北部に位置する。荒川以北のこの地域は、西は神流川、北は利根川によって区切られ、東は妻沼低地に続く。全体的な傾斜は南西から北東に向かって低くなる。したがって等高線は利根川の流向にほぼ平行し、利根川に向かって高度を減じている。

河川は荒川左岸の上武山地が分水嶺となり、南面は荒川に注ぐが、北面は利根川に流れる。本地域に

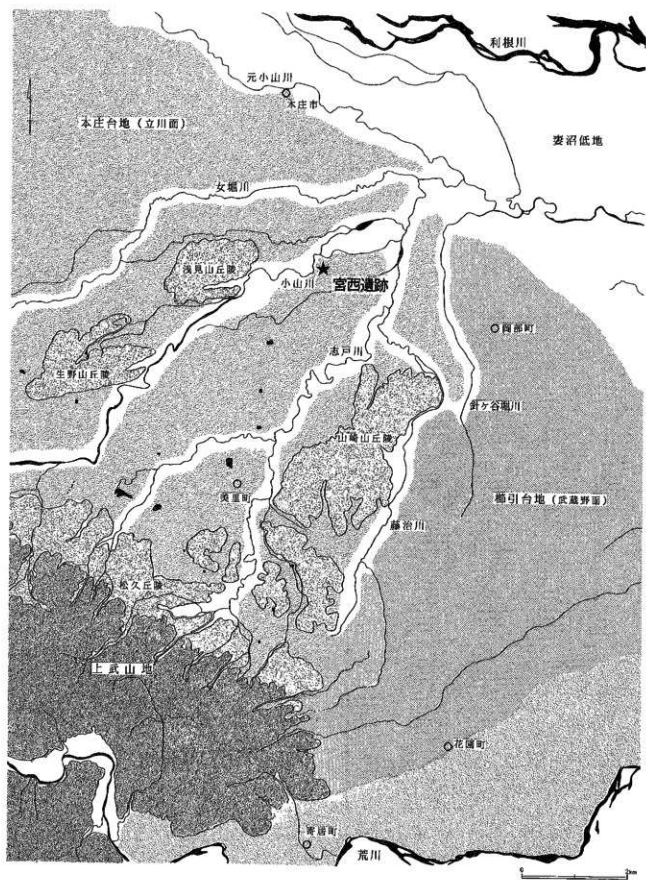
かかる河川は女堀川、見馴川(下流で小山川)、志戸川、藤治川等があり、いずれも傾斜にしたがっておおむね北東流し、利根川に注ぐ。

本地域の上武山地はその北東縁にあたり、見馴川を境として西は御荷鉾山地、東は不動山地に分けられる。

山地に続く丘陵は山麓に沿って帯状に展開するが、この丘陵地帯も見馴川を境として西は見玉丘陵、東は松久丘陵に区分される。さらにこれらの丘陵は、小河川によって浸食され、北東方向へ伸びる半島状の地形を呈する。丘陵の標高は100～130mを計る。丘陵に続く台地部分には見馴川の西側に牛野山(139m)、浅見山(105m)、東側には山崎山(117m)と呼ばれる残丘がある。(山崎山残丘は北半を山崎山、南半を諏訪山と呼ばれる。)これらの残丘は丘陵の発達方向と一致することから前者は見玉丘陵と、後者は松久丘陵と一連のものであるとされる。残丘はこの他に仙元山残丘(深谷市)、観音山残丘(熊谷市)がある。



第2図 埼玉県の地形



第3図 遺跡周辺の地形区分

台地は櫛引台地と本庄台地に分けられる。いずれも扇状地形を呈し本庄台地は神流川、櫛引台地は荒川によって生成された扇状地性台地である。

本庄台地は神川町池田付近が扇頂部にあたり標高約110mを計る。そこから北東方向に高度を減じ、本庄市諏訪町では約50mとなる。扇端は急崖となって妻沼低地と接する。西は神流川を境とし、東は志戸川支流の藤泊川で櫛引台地と面する。女堀川以東の地域は見明川、志戸川などによる浸食が進んでおり、低地として扇状地と自然堤防に分類されることもあるが(註1)、自然堤防とされる部分については本来の台地が浸食を受け、その上に堆積物がたまったものと推定される。本遺跡群はこのような地形に立地している。発掘調査では遺構の確認される面はローム面であり、基本的には集落はこのような台地上に形成されている。

櫛引台地は寄居町付近を扇頂部とし扇端までの標高は約100m～35mである。西は藤泊川で本庄台地に面し、南は荒川で区切られる。扇端部は西寄りの岡部町西田や岡付付近では、本庄台地と同じように急崖となって妻沼低地に続く。その東の普濟寺や深谷

市西島付近は比較的緩やかに低地に移行するが、更に東の深谷市東方付近から熊谷市西別府にかけてはまた急崖となる。扇端部には湧水が多く、古来人々の生活の場となっている。台地中央部は極めて平坦で起伏に乏しく、わずかに仙元山(98m)、観音山(77m)の小残丘が見られる。河川は少なく、唐沢などの小河川が見られるが浸食は進んでいない。台地面は2面に分けられ、高い面は櫛引面、南の低い面は寄居面と呼ばれる。寄居面は荒川によって櫛引面の南側が浸食された段丘面である。

低地は妻沼低地と呼ばれ、利根川の乱流によって形成された低地である。南は前述の台地に接し、北は利根川で限られ、東は加須低地へと続く。低地内にはおおむね利根川の流向に沿って多くの自然堤防が発達している。現在でも集落はこれらの自然堤防上に営まれ、「矢島」・「大塚島」などの地名に地形の特徴が表されている。

第4図は、明治18年測量の迅速図に埼玉県地質図等を参考にして作成した地形分類図である。細部については正確さに欠ける部分もあるので、正確には専門書を参考にされたい。

2. 周辺の遺跡

この地域は多くの遺跡が所在する所として知られており、特に古墳時代以降の遺跡はその量とともに内容において県内屈指のものである。調査件数も多く既に数多くの報告書等が刊行され歴史的背景についても分析が加えられている。ここでは本遺跡群周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は丘陵部に立地している。現在のところ、他時期の調査の折に単独で遺物が出土しているだけである。岡部町でこの時期の遺物を出土したのは北坂遺跡1ヶ所である。ナイフ形石器、彫器、尖頭器が出土している。これらの遺跡は台地上でありながらも、それぞれ河川に近い台地の縁辺部周辺に立地している。深谷市を含む櫛引台地ではこ

の時期の遺物は検出されていない。

縄文時代草創期～早期の遺跡は主に美型町などの丘陵部を中心に分布する。本庄市においても、浅見山残丘に見られる。岡部町では櫛引台地の縁辺部に立地する西谷遺跡、水久保遺跡から押し縄文、爪形文等、清水谷遺跡では押型文、条痕文系土器片が、東光寺裏遺跡では微隆起縄文、爪形文が出土している。この時期の遺跡は丘陵部に集中が見られ、台地部におけるありかたは旧石器のそれと共通するものがある。

前期になると丘陵部に集中する傾向は変わらないが、丘陵部における遺跡数はほぼ倍増する。またこの時期には丘陵の奥から山地にかかる場所まで遺跡

が見られるようになる。台地部では依然として密度は薄いが、荒川左岸の寄居町、花園町にも分布が広がる。また、妻沼低地に面する台地先端部、さらに妻沼低地の自然堤防上でも調査されている。

榛沢遺跡群周辺は見馴川と志戸川に挟まれた台地上に立地し、四十坂遺跡、西浦北遺跡で甌山式期の住居跡、茶臼山遺跡では諸磯a式期の土蔵、清水谷遺跡では諸磯b式期の遺物が、東光寺裏遺跡では諸磯b式期の住居跡3軒が検出され、菅原遺跡では諸磯c式期の土蔵が検出されている。北坂遺跡でも黒浜式期および諸磯式期の遺物が若干検出されている。

中期には掘引台地縁辺部に点々と遺跡が見られるようになり、さらには今まで遺跡密度の薄かった台地内部にもその痕跡が見られる。岡部町清水谷遺跡では加曾利E式土器が、原ヶ谷戸遺跡、大寄B遺跡では加曾利E式期の埋設土器が検出され、水窪遺跡、菅原遺跡はこの時期の拠点的な集落と考えられる。北坂遺跡においても加曾利E式期の遺物が少量ながら出土している。

後・晩期の遺跡はあまり調査されていないが分布の傾向は、前代において丘陵から台地にかけて集中的に展開していたものが散在するようになり、代って台地縁辺部及び低地に広がりが見られるようになる。特に深谷市域で国道17号深谷バイパスの調査により、妻沼低地においても該期の遺跡の存在が確認されるようになった。このような現象には生活基盤の大きな変化を窺わせるものがある。岡部町原ヶ谷戸遺跡では住居跡11軒が検出され、儀礼に伴う遺物や装飾品などが多量に出土している。砂田前遺跡では堀之内式期の住居跡が1軒、上宿遺跡では同期の敷石住居が検出されている。東谷遺跡では加曾利B式が、北坂遺跡では堀之内I式土器破片が少量出土している。四十坂下遺跡では住居跡が検出されている。菅原遺跡でもこの時期の遺物が少量ながら検出されている。

弥生時代の調査事例は少ないが、引き続き前代の遺跡分布と似たような傾向を取ると思われる。現状

では浅見山丘陵および見馴川周辺の扇状地部分に比較的多くの調査事例が見られる。深谷市、熊谷市域では上敷免遺跡、横間栗遺跡等があり、上敷免遺跡では遠賀川式土器が検出されており、古い時期の資料として注目される。近辺では四十坂遺跡で再葬墓が検出され、変形工字文を施した土器が出土している。大寄B遺跡では中期、後期の住居跡各1軒が検出されている。石葺A遺跡では櫛描文系や吉ヶ谷系土器が出土している。

古墳時代に入ると飛躍的に遺跡数が増加する。

集落は原ヶ谷戸遺跡、大寄B遺跡、石葺B遺跡、水窪遺跡、六反田遺跡、滝下遺跡等で前期の住居跡が検出されている。中期の住居跡は六反田遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡、東光寺裏遺跡等で検出されている。後期には六反田遺跡、砂田前遺跡などの大規模な集落が営まれる。

また、この周辺一帯は方形周溝墓、古墳の密に分布する地域である。石葺B遺跡は美里町の南志渡川遺跡とともに前方後方形周溝墓がよく知られている。原ヶ谷戸遺跡や大寄B遺跡では方形周溝墓が検出されている。古式の古墳としては兎玉町鷲山古墳があり、ついで美里町長坂型天塚古墳、川輪聖天塚古墳があげられる。安光寺遺跡、千光寺遺跡や台地先端部の四十坂遺跡、中宿遺跡にも方形墳が検出されている。

その後各所に群集墳が形成される。遺跡周辺では本庄市西五十丁古墳群、東五十丁古墳群、西山古墳群、千光寺古墳群、四十塚古墳群などがある。また、宮西遺跡では古墳跡が検出され、平安時代の住居跡では埴輪が甕の袖として転用されていたことなどから、椋沢地区内にも古墳群が存在することが予想される。主要な古墳としては前記の他に浅間山古墳、寅稻荷塚古墳、御手長山古墳等がある。これらの古墳を造り得る社会を支える生産基盤は、主に周辺の低地に求められる。石葺A遺跡では、既に古墳時代前期から灌漑を目的とした施設が造られていたと見られ、早くからこの地域に、水に対する管理技術

が取り入れられていたことがわかる。このような伝統的な生産基盤の上に条里制が施行されるようになる。遺跡周辺には兎玉条里、十条条里、岡部条里などがあり、調査例も増えている。

奈良・平安時代になると本遺跡群を含む小山川中流域の榛沢、後榛沢に加えて新たに、櫛引台地先端部の岡地区に集落が営まれるようになる。前者には六反田遺跡をはじめとして今回調査された大寄遺跡、宮西遺跡、石蒔遺跡や重要文化財に指定されている緑軸手付瓶等を出土した西浦北遺跡がある。後者には榛沢郡正倉跡に推定される県指定史跡中宿遺跡があり、7世紀後半から9世紀にかけての倉庫跡が検出されている。

中宿遺跡の南に広がる熊野遺跡は中宿遺跡とともに郡衙に関連する遺跡と推定されており、前代までと違った遺跡の有り方を示している。熊野遺跡から

は大型の掘立柱建物跡や石組井戸跡、道路跡のほか、多数の住居跡が検出されている。遺物では多数の畿内産土師器、唐三彩の陶枕、円面硯、帯金具など一般集落からは出土例の少ない遺物がみられ、郡衙を取り巻く集落の様相が判明しつつある。いずれ、政庁、正倉とともに周辺部を含めた具体的な郡衙像が明らかになるに違いない。

10世紀以降については本庄市大久保山遺跡、美里町向田遺跡、中宿遺跡等で竪穴住居跡、東光寺裏遺跡で羽釜などが出土している。本遺跡群の調査では大寄遺跡から該期の住居跡がまとまって検出されている。古代後半期の集落構造を具体的に窺うことのできる資料であり、その意義は大きい。

註1 『土地分類基本調査』では「見明川低地」として細区分しているが、『新編埼玉県史別編3』においてはなされていない。

参考文献

- 埼玉県 1978 『土地分類基本調査 高崎・深谷』
埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編1
埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2
堀川尚古他 1986 『埼玉県の地形と地質』『新編埼玉県史 別編3』埼玉県
堀川尚古他 1987 『荒川流域の地形』『荒川 自然』埼玉県
本庄市 1976 『本庄市史』資料編
増田進則他 1986 『埼玉県版古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
美里町 1986 『美里町史』通史編
村本達郎 1975 『埼玉県地理図集』



第1図 遺跡分布図

遺跡分布図の遺跡

1 沖田Ⅰ遺跡	2 沖田Ⅱ遺跡	3 沖田Ⅲ遺跡	4 大寄遺跡	5 宮西遺跡
6 西湖北遺跡	7 都荷塚遺跡	8 六反田遺跡	9 東光寺裏遺跡	10 伊勢塚遺跡
11 石碓A遺跡	12 石碓B遺跡	13 地神祇A遺跡	14 地神祇B遺跡	15 原ヶ谷戸遺跡
16 四十坂遺跡	17 新井遺跡	18 水窪遺跡	19 上宿遺跡	20 滝下遺跡
21 中宿遺跡	22 砂川前遺跡	23 岡部条里遺跡	24 岡遺跡	25 樋詰遺跡
26 内子遺跡	27 熊野遺跡	28 新田遺跡	29 菅原遺跡	30 上原遺跡
31 西能ヶ谷遺跡	32 水久保遺跡	33 西谷遺跡	34 石原山瓦窯遺跡	35 貉山祭礼遺跡
36 北坂遺跡	37 田端屋敷遺跡	38 笠ヶ谷戸遺跡	39 越津遺跡	40 元宮遺跡
41 七色塚遺跡	42 久下東遺跡	43 山根遺跡	44 大久保山遺跡	45 東谷遺跡
46 石勝寺北裏遺跡	47 古川端遺跡	48 村後遺跡	49 日の森遺跡	50 向尾遺跡
51 志渡川遺跡	52 南志渡川遺跡	53 石神遺跡	54 清水谷遺跡	55 安光寺遺跡
56 飯庭神社前遺跡	57 甘粕山遺跡群	58 神明ヶ谷戸遺跡	59 碧門寺西山遺跡	60 こぶヶ谷戸祭祀遺跡
61 峯遺跡	62 用上平遺跡	63 烏の上遺跡	64 矢島南遺跡	65 川輪聖天塚古墳
66 長坂聖天塚古墳	67 公卿塚古墳	68 前山1号墳	69 前山2号墳	70 浅間山古墳
71 寅稲荷古墳	72 御手長山古墳	73 愛宕神社古墳	A 塚合古墳群	B 御堂坂古墳群
C 鶴の森古墳群	D 東五十子古墳群	E 西五十子古墳群	F 東富田古墳群	G 浅見山古墳群
H 塚本山古墳群	I 西田古墳群	J 四十坂古墳群	K 水窪古墳群	L 白山古墳群
M 上原古墳群	N 中南古墳群	O 後榛沢古墳群	P 茶臼山古墳群	Q 千光寺古墳群
R 西山古墳群	S 諏訪山古墳群	T 猪山古墳群	U 大明神古墳群	V 木部山古墳群
W 羽黒山古墳群	X 善門寺古墳群	Y 猪俣北古墳群	Z 猪俣南古墳群	

Ⅲ 遺跡群の概要

1. 遺跡群の概要

岡部町西部工業団地は大字椋沢地内に位置する。この地域は本庄台地が小山川と志戸川によって開析された扇状地である。遺構の検出される面は基本的にローム面であり通常の台地でのあり方と同じであるが、遺跡は時に埋没河川を含みその埋積土によって複雑な状況を呈する。本遺跡群は椋沢地内の西寄りに当たり、小山川に面して本庄市と接している。小山川と台地との比高差は3～4mを測る。北側は小山川の古い流路によって形成されたと思われる急勾配の斜面によって低位面に続く。

この地域には六反田遺跡、西浦北遺跡を始めとして多くの遺跡が存在し、椋沢遺跡群の名称で呼ばれている。六反田遺跡は古墳時代前期から続く集落で、150軒以上の竪穴住居跡が調査されている。稲荷塚、大寄A、大寄B、西浦北、宮西の各遺跡は圃場整備に伴って一部が調査されている。

大寄A遺跡は水路部分の調査で、大寄遺跡Ⅱ区中央付近を東西に貫通する。大寄B遺跡は圃場整備によって完全に削平された部分の調査である。縄文時代中期の埋設土器、弥生時代中期及び後期の住居跡、古墳時代前期から奈良時代までの住居跡および方形周溝墓などが検出されている(佐藤1979)。この2遺跡はいずれも現在の大寄遺跡に含まれるもので、大寄B遺跡の所在した台地縁辺を北限とし、南西方向に伸びる微高地全面に及ぶと考えられる。

西浦北遺跡は、縄文時代前・中期の住居跡3軒、古墳時代中・後期の住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡49軒、製鉄・精錬遺構14基などが調査されている(佐藤1983)。4号住居跡から出土した緑釉手付瓶と灰種長頸瓶は重要文化財に指定されている。西浦北遺跡は独立した弧状を呈する畑の高まり部分に遺構が集中していたと思われる。遺跡南側の宮西遺跡と地形は独立しているが、内容は共通する部分

が多い。今回の調査では遺跡西側の低い部分が用地内にかかっていたが、試掘調査の結果、遺構は確認できなかった。

宮西遺跡は大寄A遺跡と同じく水路部分の調査が行われ、縄文時代前・中期の住居跡4軒、古墳時代後期の住居跡15軒、平安時代の住居跡2軒が検出されている。その一部が今回の調査区内に含まれている。遺跡は前述の古流路を西限として東に広がる。東側一帯は、大寄八幡神社があり、現在も集落が広がる居住域で、遺跡の範囲も相当の広がりを持つものと推測される。今回の調査では新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡が確認された。これらの遺跡は大寄遺跡と宮西遺跡の間にあるやや低い水田部分にあり集落跡の存在は予想されていなかったところである。試掘調査の結果、このような比較的低い部分にも小規模な微高地が確認され遺構が存在することが明らかとなった。このような小規模な微高地は開発が進んだ現在では地形図に表れることは始どないが、沖田Ⅰ遺跡については昭和36年の地図には畑としての高まりを見ることができる。

調査で検出された各遺跡の内容は概ね以下のとおりである。

沖田Ⅰ遺跡

縄文時代前期から平安時代の遺構、遺物が検出された。縄文時代の遺構は前期の竪穴住居跡6軒、土塚7基である。遺構は検出されなかったが中期の土器片もわずかながら出土した。古墳時代に属するものは竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、土塚5基、溝跡10条である。いずれも後期に属する。平安時代のものは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土塚18基である。

沖田Ⅱ遺跡

土塚3基、溝跡1条、河川跡1条、ピットが検出

された。遺物は縄文時代前期及び平安時代のものが出土している。

沖田Ⅲ遺跡

縄文時代前期から近世までの遺構、遺物が検出された。縄文時代に属するものは前期の竪穴住居跡3軒である。古墳時代前期では方形周溝墓7基、竪穴状遺構5基、後期では竪穴住居跡10軒、溝跡14条である。平安時代は井戸跡1基、道路状遺構1条、溝跡2条、土壇12基である。中世以降の所産としては土壇墓が1基検出されている。

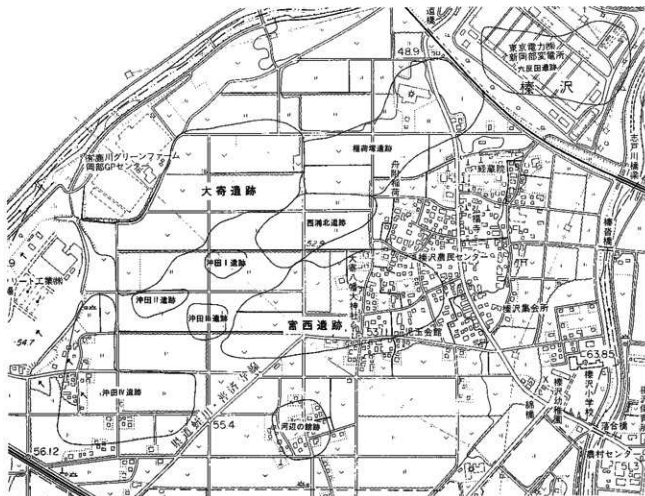
大寄遺跡

検出された遺構は、竪穴住居跡475軒、掘立柱建物跡91棟、井戸跡68基、土壇412基、茶毘跡1基、土壇墓4基、溝跡57条、柵列13条等である。

竪穴住居跡は縄文時代前期4軒、不明2軒、古墳時代後期～平安時代に至るものが469軒検出された。

縄文時代の集落は、群としての明確なまとまりをもたず散在的であった。古墳時代後期、特に6世紀前半代に位置づけられる集落は、南端の低地部に散在する。この段階では北側の台地部には集落が営まれない。北側に集落が進出するのは6世紀末葉～7世紀前後である。以降10世紀後半～11世紀に至る頃まで、安定的に集落域として機能したものと考えられる。特に10世紀後半以降の住居跡が多い点は本遺跡の最大の特徴といえ、該期の集落としては県内でも最大規模の一例である。

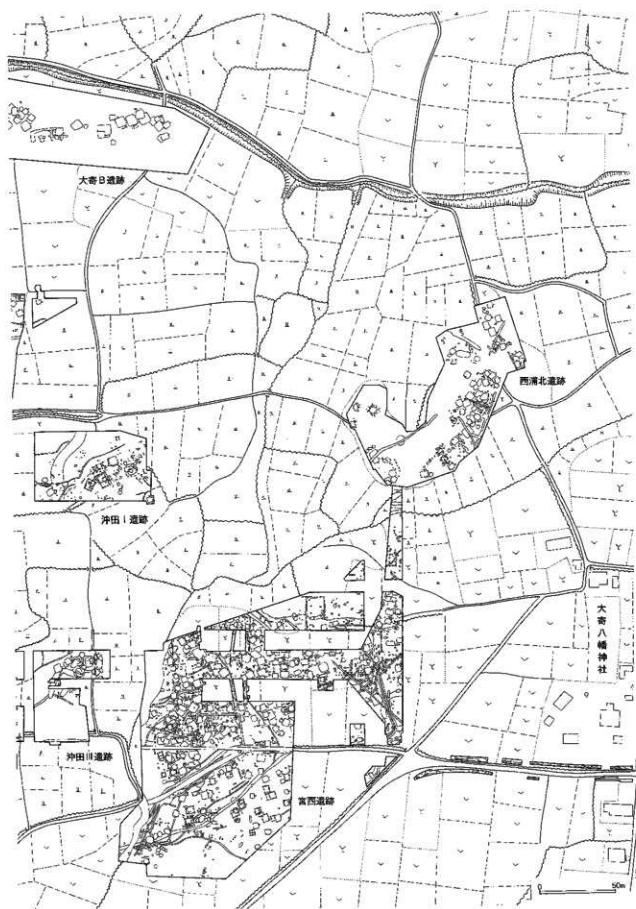
中世段階の様相はあまり明確ではない。1区南東部に方形で小型の柱穴が密集して検出され、おそらく、掘立柱建物跡群が存在したものと思われるが、具体的に建物として捉えられなかった。また、中世段階と思われる井戸跡、土壇、柵列、火葬墓(茶毘跡)が検出されている。



第5図 周辺の遺跡



第6図 関連遺跡遺構分布図



2. 宮西遺跡の概要

宮西遺跡は、本遺跡群の中では南東部に位置する。遺跡範囲は広大で東西約600m、南北約250mに及ぶ。遺跡のほぼ中央に大寄八幡大神社が鎮座し、これより東は榛沢の集落が展開する。西は主に畑として利用されてきた。調査区は神社の西側で遺跡範囲の西端にあたる。これより西側は畑や水田となっている。地形は現状では一見平坦に見えるが、小山川あるいはその分流と思われる旧流路が幾筋かあって、それらによって大寄遺跡や沖田遺跡などが隔てられている。宮西遺跡も旧流路によって西側の沖田Ⅲ遺跡や北側の西浦北遺跡と分けられている。この流路は遺跡の西から北側に廻り込んで本遺跡の範囲を限定しているが、調査区西端で古代の住居跡を侵食していたことから、流路が形成された時期はそれより新しいことがわかる。北側は緩い傾斜で低くなり流れが緩やかであったと思われる。遺構はこの流路に限られた高い部分に東西方向に密集していた。特に竪穴住居跡の密集度が高く西側ほど顕著である。東に向かってはやや密集度は低くなるものの集落はさらに東に続く。本事業とは別に平成9年度に本調査区東側の県道の拡幅工事に伴って大寄八幡神社の前を調査している。その時には竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡3棟などが検出されており、集落が東に続くことは明らかである。南に向かつては僅かに標高を減じていく。竪穴住居跡は散在するようになり、掘立柱建

物跡が多く見られる。

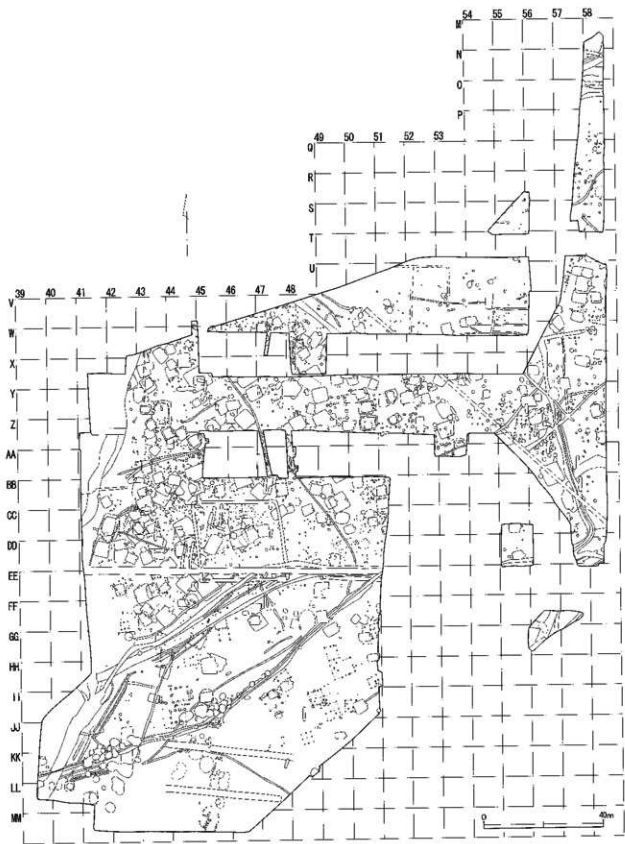
調査で検出された遺構は、竪穴住居跡327軒、掘立柱建物跡36棟、古墳跡1基、井戸跡21基、土壇270基、製鉄炉跡2基、粘土採掘坑、道路跡などがある。竪穴住居跡の時期は縄文時代前期、後期及び古墳時代から平安時代にわたる。

整理途中のため確定的ではないが、古墳時代でも5世紀段階の竪穴住居跡と6世紀以降の竪穴住居跡では、分布に特徴があることがわかってきた。古墳の築造に伴って生活域が影響を受けたものと考えられる。平安時代になると、竪穴住居跡のカマドの構築材に埴輪を使用した例がある。周辺の古墳のものを転用したと考えられるが、この時代既に古墳に対する意識が薄れていたことを示すものである。かわってこの時代には小金銅仏を出土する住居跡が出てくるようになる。

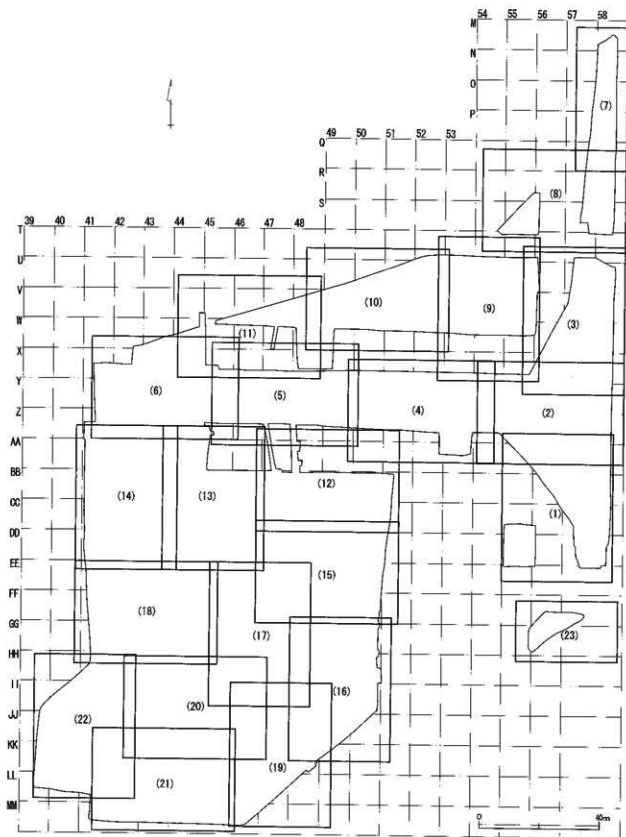
今回報告するのは、縄文時代の竪穴住居跡18軒、土壇7基、古墳時代から平安時代までの竪穴住居跡206軒、掘立柱建物跡37棟、井戸跡30基、竪穴状遺構5基、円形周溝状遺構1基、環状ピット列1基、製鉄炉3基、焼土遺構1基、粘土採掘坑55基、方形区西溝1条、溝跡61条、土壇265基、古墳跡1基、茶臼跡2基、土壇墓2基、岳跡1ヶ所、道路跡3条、河川跡1条である。

Ⅱ章・Ⅲ章は、以下の報告書を一部改変のうえ転載した。

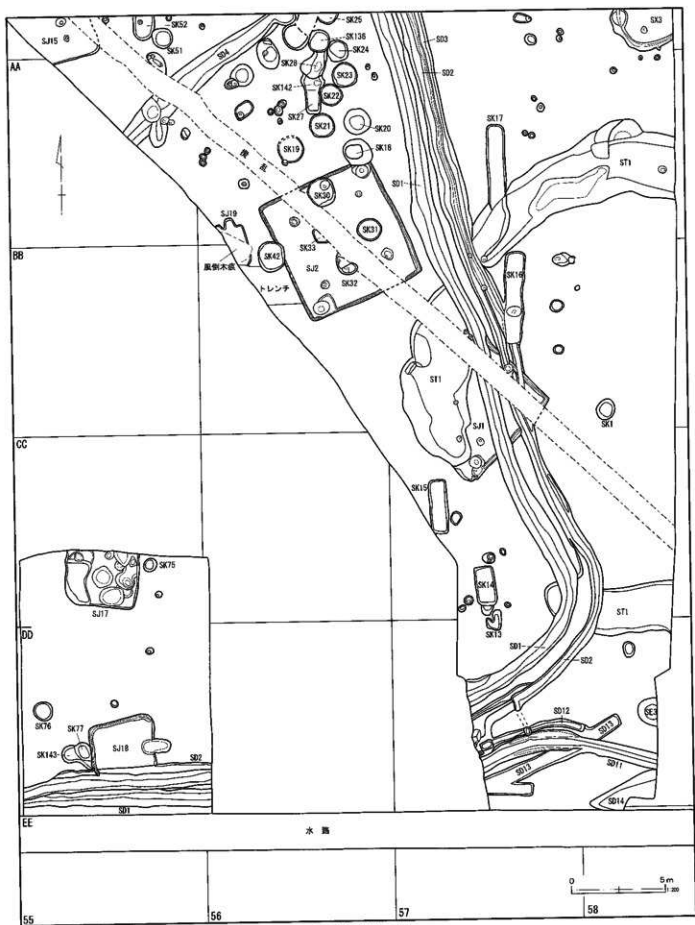
- | | | |
|------|------|-----------------------------------|
| 木戸春大 | 1998 | 『沖田Ⅰ／沖田Ⅱ／沖田Ⅲ』埼玉縣埋蔵文化財調査事業報告書第231集 |
| 高田和夫 | 2000 | 『大寄遺跡Ⅰ』埼玉縣埋蔵文化財調査事業報告書第268集 |
| 福田 聡 | 2002 | 『大寄遺跡Ⅱ』埼玉縣埋蔵文化財調査事業報告書第280集 |



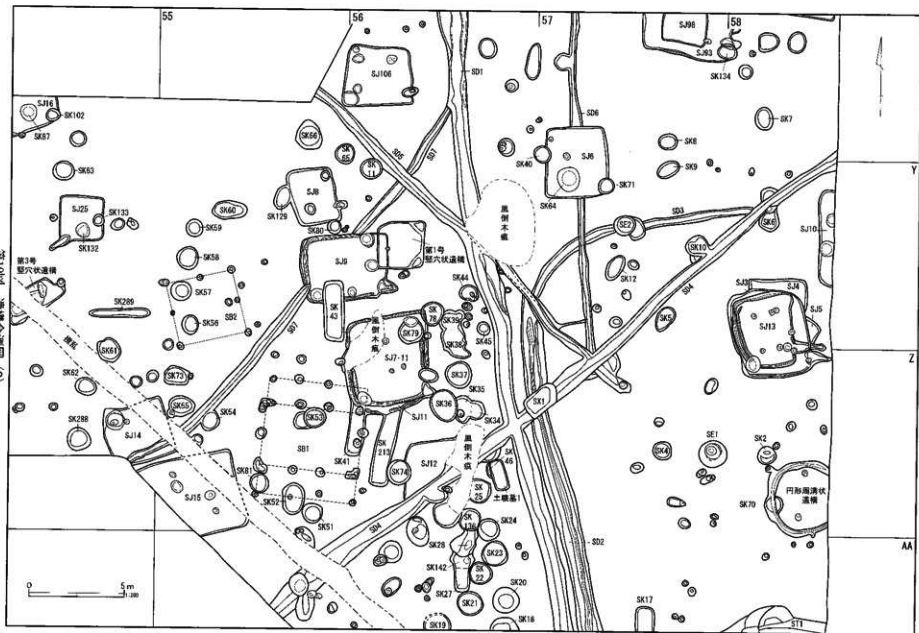
第7図 グリッド配置図



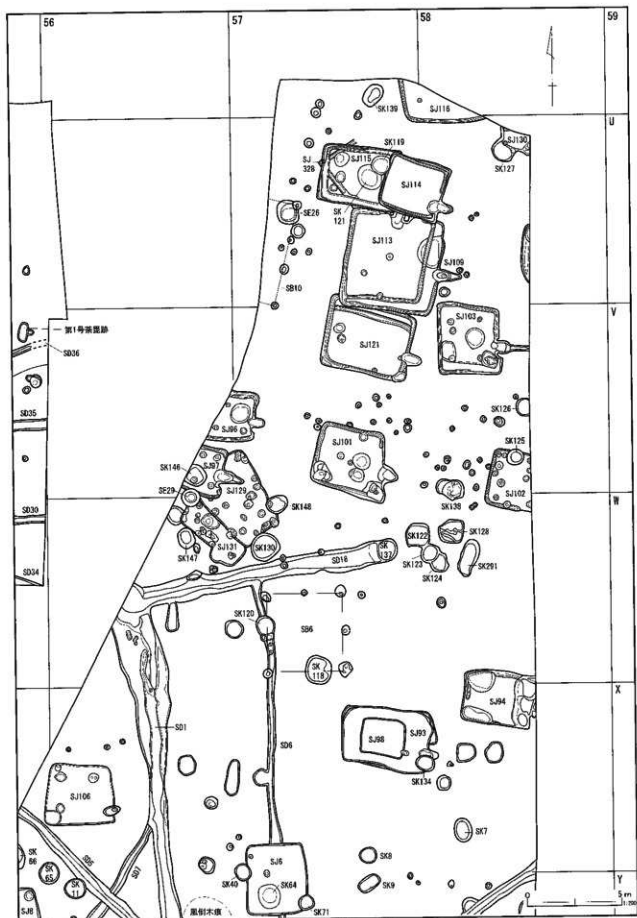
第 8 图 全测图区划图



第9図 遺構全測図(1)

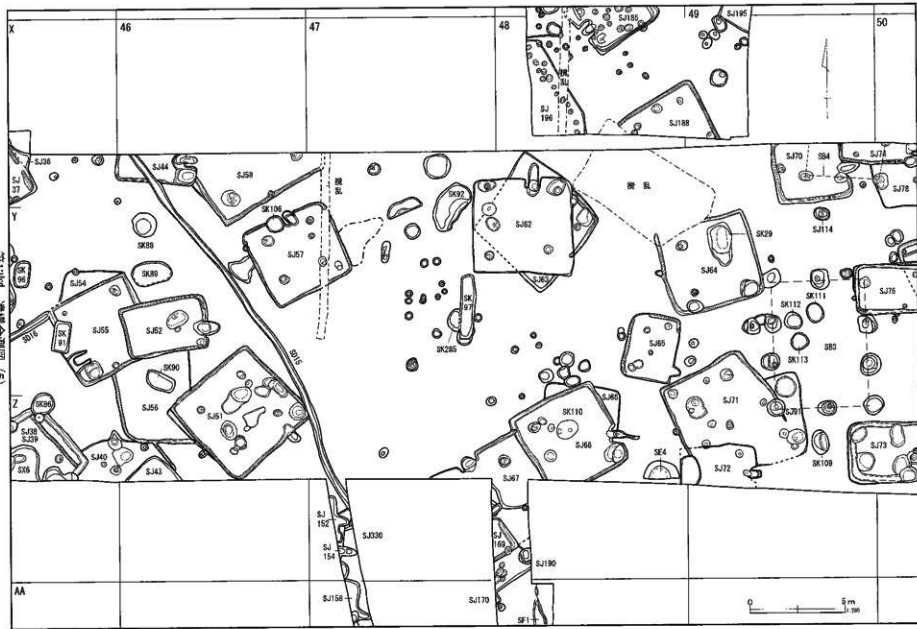


第10号 遺構全圖(2)



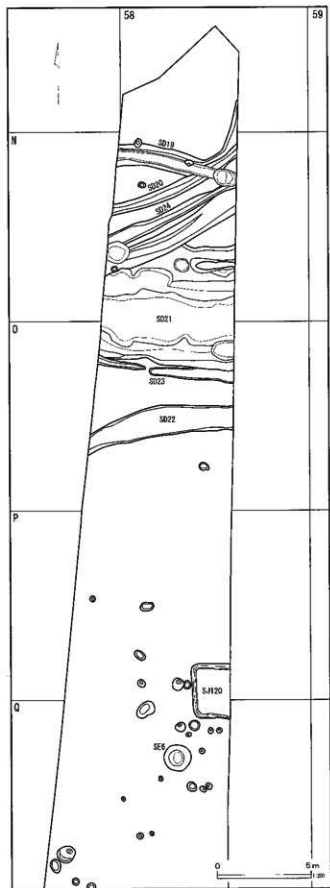
第111区 遺構全圖(3)

第13区 遺跡平面図(5)

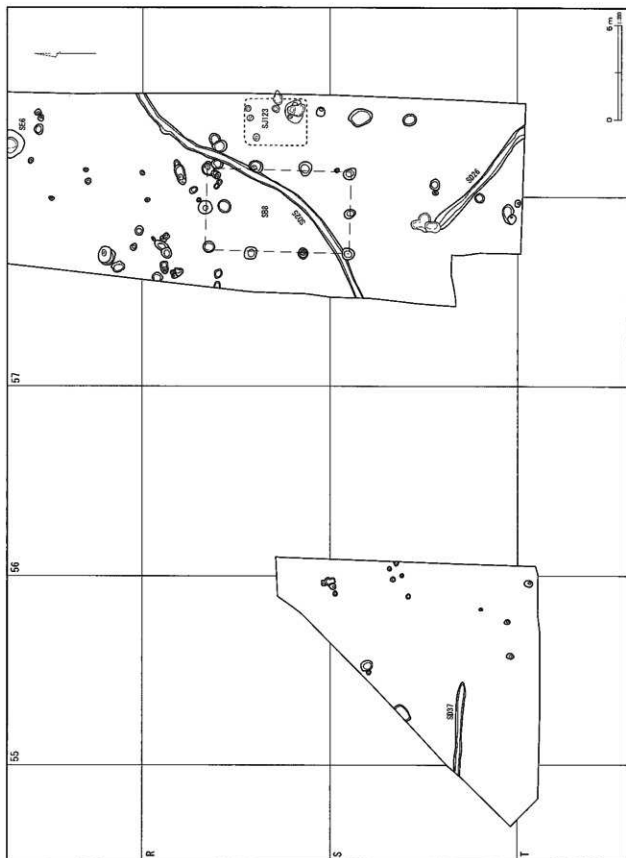


第14回 遺構全圖(6)

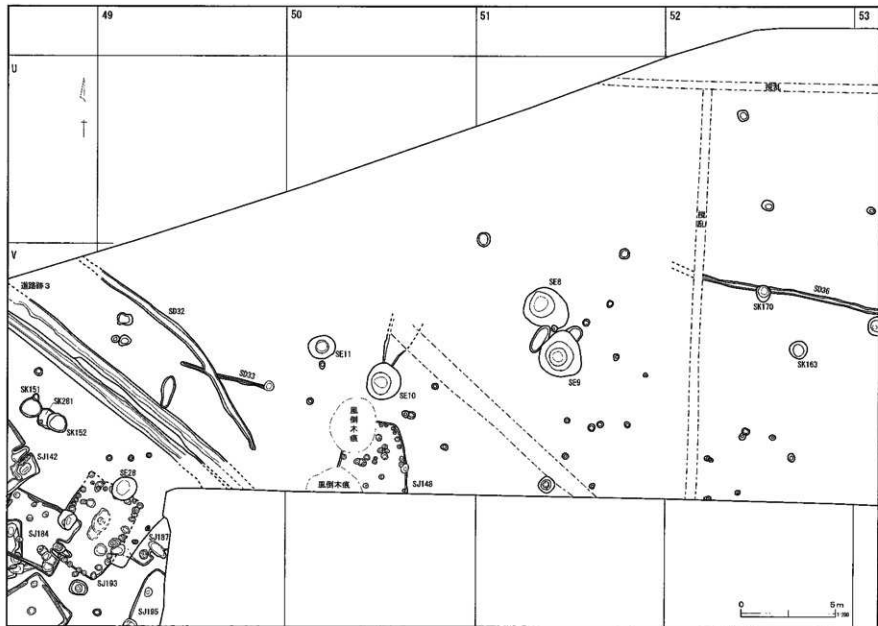




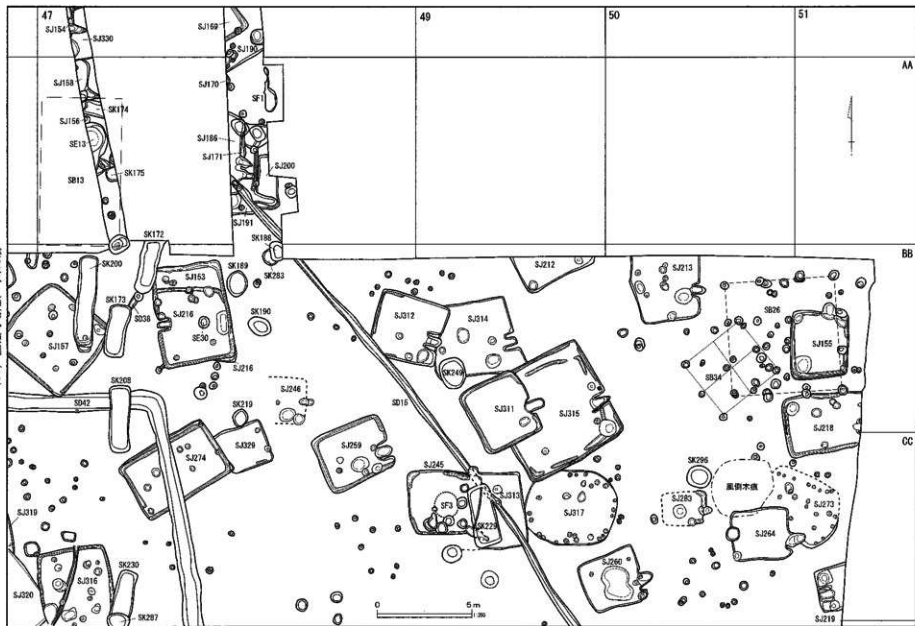
第15号 遺構全測図 (7)



第16図 遺構全測図 (8)



第18圖 遺構全圖(10)



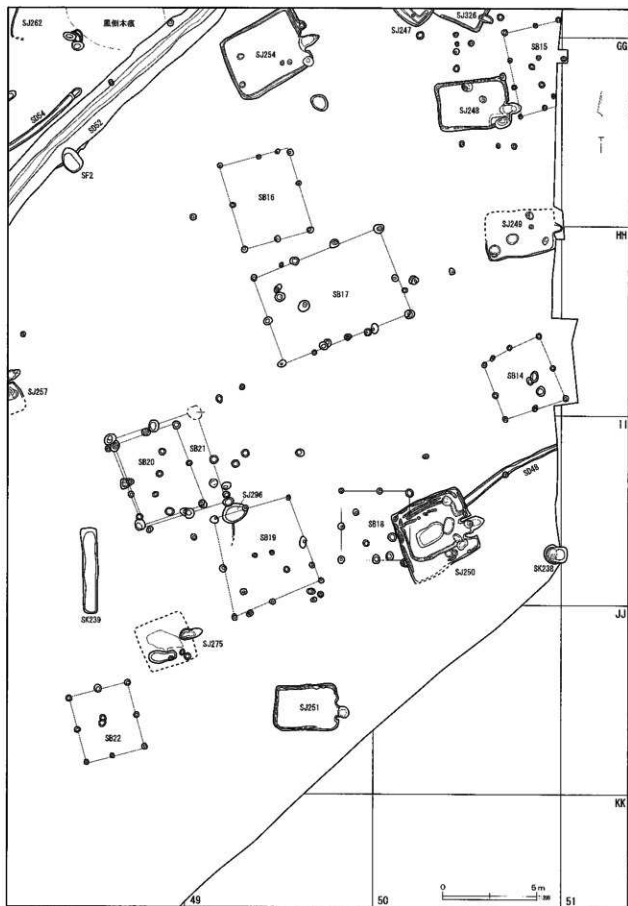
第20号 遗址全图 (12)



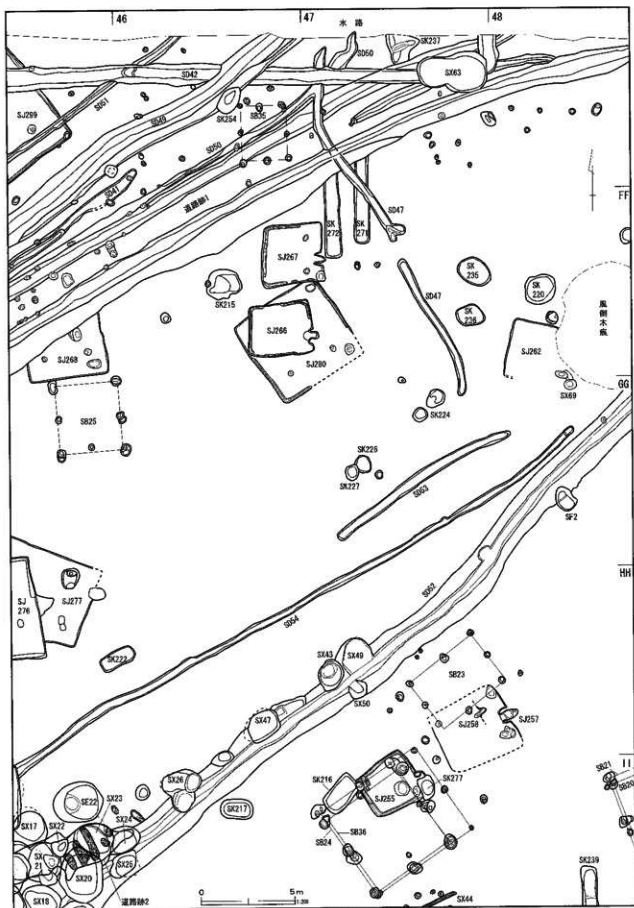
第21回 遺構全測図 (13)



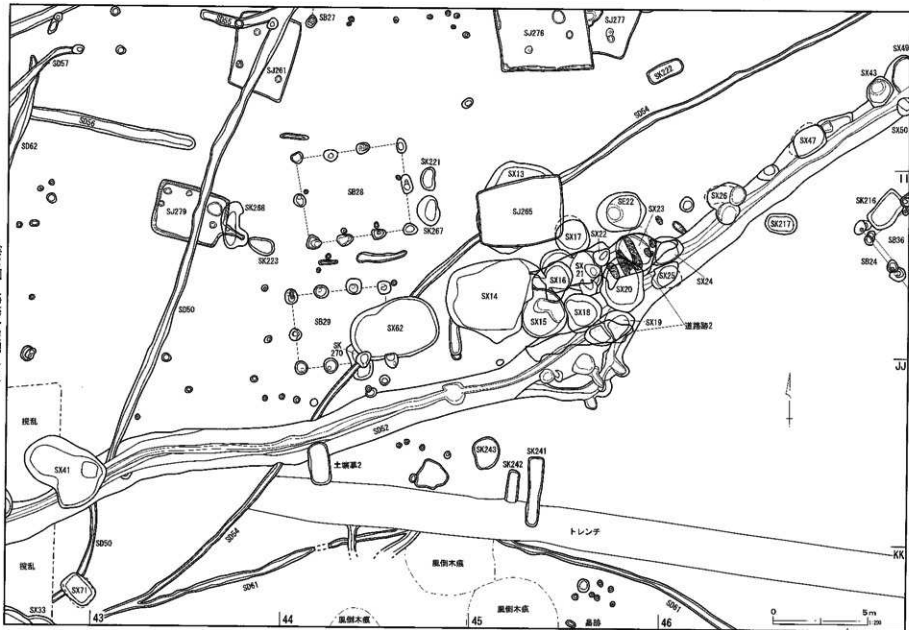
第22図 遺構全測図 (14)

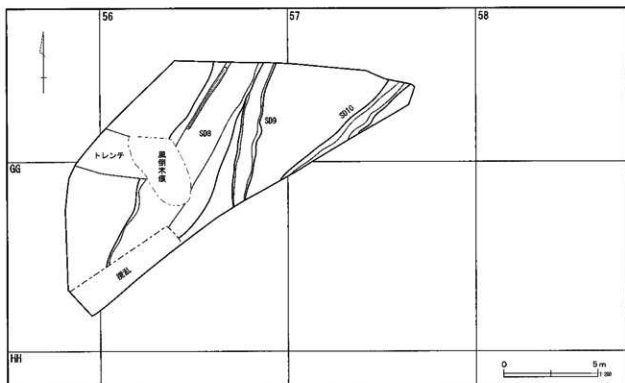


第24図 遺構全測図 (16)



第25図 遺構全測図 (17)





第31図 遺構全測図 (23)

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第124号住居跡 (第32区)

調査区の西側、W-44・X-44グリッドで検出された。西側には第49・50号住居跡、南には第36・37号住居跡が隣接するが、本遺構と直接重複する遺構はない。

平面形は方形である。規模は長軸が4.32m、短軸は4.18mである。深さは0.07mでごく浅い。主軸方向はN-83°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、カマドの前と住居跡中央部が硬化してやや低くなっていた。踏みしめられた結果と思われる。壁溝は全周していた。

カマドは東壁中央に検出された。燃焼部は壁内に収まる。火床面は床面より低く、煙道は検出されなかった。削平されたものと思われる。袖は向袖とも長さが約70cm残っていた。燃焼部の規模は、奥行き78cm、幅36cmである。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。長方形で大きさは100×84cm、深さは33cmである。主柱穴はP1からP4で、深さは何れも30cm前後である。

床下土壌は、P4寄りに1基検出された。110×86cmほどで深さ16cmである。

遺物は、土師器片、甕と磁石が出土した。出土状況は、貯蔵穴とその周辺及びP3付近から出土しており、貯蔵穴の脇からは坯がほぼ床面から、貯蔵穴内の破片は覆土中位に見られた。その他の遺物は床面からやや浮いた状態である。

時期は7世紀と考えられる。

第125号住居跡 (第34区)

調査区の西側、W-44グリッドに位置する。南側3mほどに第124号住居跡があるが、本遺構と直接重複する遺構はない。

小型の住居で平面形は西辺が東辺より長いためやや歪んだ方形を呈する。住居跡本体が小さいためカ

マドが大きく見え不均衡感がある。規模は西辺が2.2mで、東辺は1.8m、東西方向は2.2mである。深さは0.05mと非常に残りが悪かった。主軸方向は、N-45°-Eを指す。

床面はほぼ平坦である。壁溝は浅く南側の一部とカマド右側では検出されなかった。

カマドは北壁の東寄りに検出された。壁を大きく掘り込んで造られており、袖は短く左右とも30cmほど残存していた。右の袖は、カマドが東壁に寄っているためか、壁から斜めに張り出している。火床面は床面よりやや低い程度である。覆土は焼土粒を多量に含んでいたが、あまり良好な堆積状況ではなかった。

貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。

遺物は、少量出土したのみで罔化できたのは土師器の甕底部1点である。

時期を判断できるものはなかった。

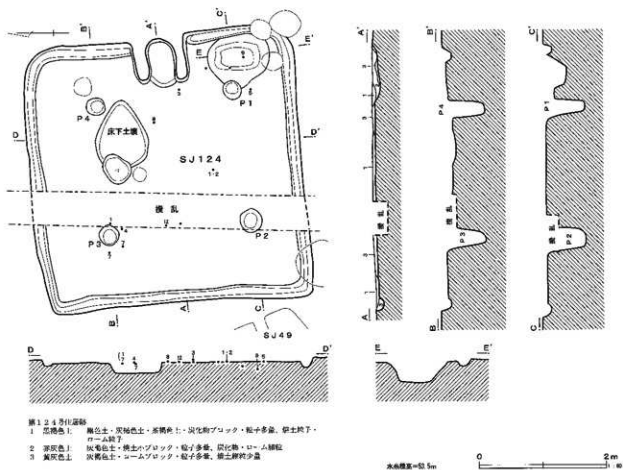
第127号住居跡 (第35区)

調査区北西部の、W-47グリッドに位置する。幅1mほどの調査部分だったため全容は不明である。第138・147号住居跡と重複関係にあり本住居跡が新しい。

平面形は方形ないしは長方形になるものと思われる。検出されたのは南側の壁が1.2mほどである。東壁は3.2mから3.3mくらいと推定される。深さは0.16mである。主軸方向は、およそN-70°-Eを指すものと思われる。

床面は検出された部分では平坦で、壁溝は検出されなかった。

カマドは調査区の壁にかかって一部が検出された。東壁の中央寄りに設置されていたことになる。燃焼部は壁を掘り込んで造られており、図示できなかったが、断面は焼土を多量に含んだ黒色土が堆積し、



第32図 第124号住居跡

天井部の赤く硬化した焼土が崩落することなく残っていた。火床面は床面よりやや低くなる程度であった。袖は検出できなかった。

遺物は、検出面で土師器甕が出土した。

時期は6世紀と考えられる。

第128号住居跡 (第36図)

調査区の中央Y・Z-50グリッドに位置する。第80・99・117・122号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が一番古い。

他の住居跡との重複部分が多く、残存していたのは床面の一部だけである。平面形は不明だが、長方形と推測される。規模は不明であるが、深さは0.04mとごく浅い。主軸方向は、南東壁でN-40°-Eと考えられる。

床面は残存部分が少ないが、平坦でやや軟弱であ

る。壁溝は南東壁際に検出されたが、南西壁際では検出されなかった。ピットは2基検出されたが柱穴かどうかは不明である。

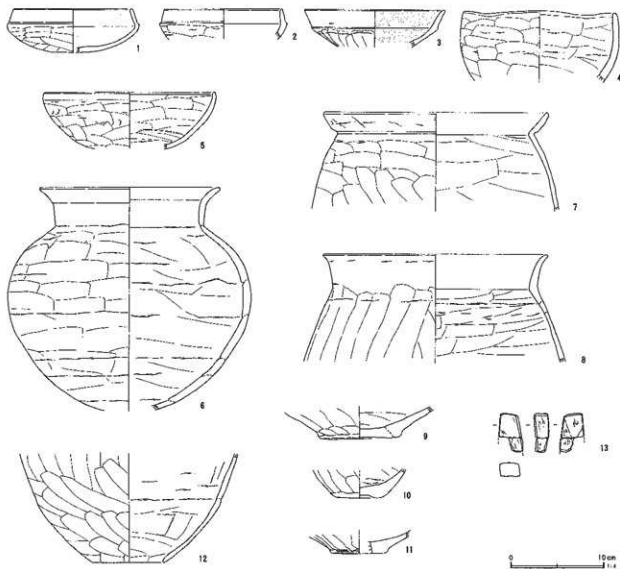
カマドは検出されなかった。

遺物はごく少量の破片が出土しただけで、図示できたのは甕の口縁部1点である。

第130号住居跡 (第37図)

調査区の北側、U-58グリッドに位置する。住居跡の南西部分が検出されただけで、大半は調査区外である。第127号土塼と重複する。調査時の所見では本住居跡の方が新しいと思われた。

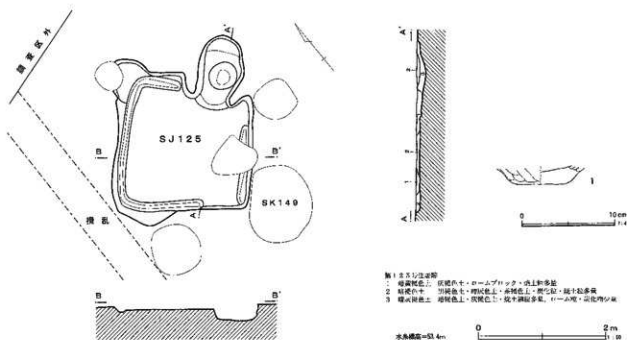
覆土は焼土粒を含んだ褐色土を基本とするが、下層にはロームブロックを含み、その上に炭化物を多量に含んだ層が堆積していることから、埋め戻しておりその際に何らかの原因で発生した比較的多量の



第33図 第124号住居跡出土遺物

第2表 第124号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.6)	4.6	-	ABEH	普通	褐灰	50	
2	土師器 坏	(12.4)	(3.2)	-	ABEH	普通	にぶい橙	40	
3	土師器 坏	(15.0)	(3.3)	-	ABEH	不良	にぶい赤褐	10	内面黒色処理
4	土師器 坏	(16.0)	(7.3)	-	ABEH	不良	にぶい赤褐	40	茶み大きい
5	土師器 坏	(18.0)	(6.0)	-	ABEH	普通	にぶい褐	30	器形やや歪む
6	土師器 甗	(19.0)	(23.4)	-	BDEH	普通	にぶい褐	40	
7	土師器 甗	(24.0)	(10.4)	-	ABDEHJ	普通	にぶい橙	15	やや茶みあり
8	土師器 甗	(24.0)	(11.4)	-	ABDEH	普通	褐	15	
9	土師器 甗	-	(3.2)	8.8	EH	不良	黒褐	20	
10	土師器 甗	-	(3.1)	5.2	AEHJ	普通	赤褐	60	
11	土師器 甗	-	(2.4)	(6.0)	ABDEHJ	普通	にぶい橙	15	
12	土師器 甗	-	(11.5)	7.6	ABEHJ	普通	褐	40	
13	砥石	残存長4.1cm 幅2.4cm 厚さ1.5cm 重さ17.4g							



第34図 第125号住居跡・出土遺物

第3表 第125号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	-	(1.9)	(0.6)	A B D H J	普通	にぶい橙	40	外面赤彩

炭化物を投げ込んだ可能性が考えられる。

平面形は方形あるいは長方形であろうが現状では不明である。検出されたのは南辺1.62m、西辺1.1mである。深さは0.25mであった。主軸方向は、N-72°-Wを指すものと思われる。

床面はほぼ平坦である。壁溝は確認されなかった。カマドは検出されなかった。調査区外の部分にあると思われる。

南壁際にピットが検出された。壁を外側に掘り込んで浅い段を持ち、床面は10cmほど掘り込んでいる。

遺物は、土師器碗、甕などが出土している。時期は9世紀と考えられる。

第132号住居跡 (第38図)

調査区の西側、W-45グリッドに位置する。第133号住居跡と重複関係にある。第133号住居跡を掘り下げたところ床面からカマドが検出されたことから本住居跡が古い。検出されたのはカマドの半分と住居跡の南隅部分だけで、ほとんどは調査区外であ

る。

平面形は不明である。検出部分は南辺が0.5mほどである。主軸方向は推定困難である。

床面部分は調査区外のため状況はわからない。

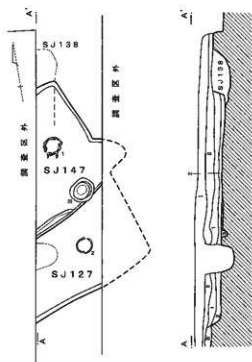
カマドは南側の半分だけが検出された。東壁に造られていたが住居跡の全容がわからないため東壁でどの位置を占めるか不明である。壁を掘り込んで構築されていると見られ深さは15cmであった。カマド内からは、支脚に使用したと考えられる被熱した自然石が斜位の状態でも出土した。袖は右袖が検出され30cmほど残存していた。袖の脇には貯蔵穴と考えられる掘り込みがこれも部分的に確認された。

遺物は袖と貯蔵穴の間に塊が伏せた状態で出土した。他には土師器甕などが少量出土した。

時期は9世紀と考えられる。

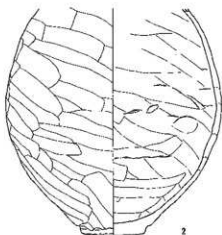
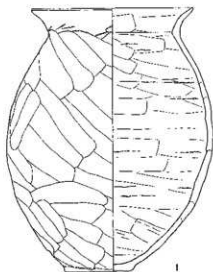
第133号住居跡 (第38図)

調査区の北側、W-45グリッドに位置する。第132号住居跡と重複関係にあり、これより新しい。



- 1 地上 雑草
 2 埴輪内土 焼土・灰土・瓦片・瓦片の割片多い
 3 埴輪外土 romeン多量
 第127号住居跡
 1 埴輪内土 焼土少量、romeン少量
 2 埴輪外土 焼土・灰土・romeン多
 第147号住居跡
 3 埴輪内土 romeンブロック多量

0 2m
 水平距離=52.7m



0 10cm

第35図 第127・147号住居跡・出土遺物

第4表 第127号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	17.1	27.9	7.3	B E H J	普通	にぶい褐	60	S J 147
2	土師器 甕	-	(23.8)	6.8	A B D E H J	普通	にぶい褐	60	

住居跡の南東部分が検出されただけで、大半は調査区外である。

平面形は長方形ないしは方形であろう。検出されたのは南辺が2.10mで東辺は0.88mである。深さは0.04mでごく浅い。主軸方向は南辺で、N-87°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で壁溝は検出されなかった。

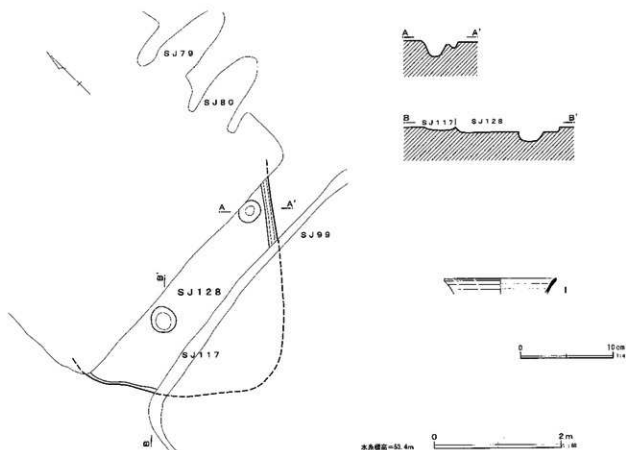
カマドやカは検出されなかった。調査区外に造られているものと考えられる。

遺物は剣形の滑石製模造品の他には出土せず時期を推定させるものはない。

第134号住居跡 (第39図)

調査区の北側、V-46グリッドに位置する。第135号住居跡が10cmほどの至近距離で東側に隣接する。検出されたのは住居跡南東部分の僅かな範囲で、大半は調査区外である。

平面形は不明である。検出されたのは南辺が1.32



第36図 第128号住居跡・出土遺物

第5表 第128号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(12.0)	(1.7)	-	HJ	良好	灰	5	

m、東辺が僅かに0.72mである。深さは0.09mで浅い。主軸方向は、南辺を基準にした場合 $N-80^{\circ}-W$ になる。

覆土は、ロームブロックを含む黒褐色上であった。床面は検出された範囲では平坦である。南壁際に溝状の掘り込みが検出された。壁沿いに調査区外に延びていることから壁溝と考えられる。東壁際には検出されなかった。

カマド等の施設は検出されなかった。調査区外にあると考えられる。

遺物は須恵器坏、土師器甕などの破片が出土しているが、坏と甕では时期的に隔たがりがある。

本住居跡の時期は、消極的に9世紀としておく。

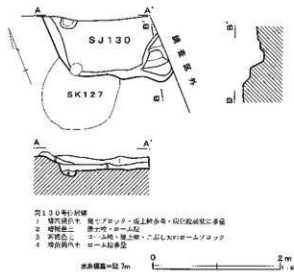
第135号住居跡 (第39図)

調査区の北側、V-46・47グリッドに位置する。西側に第134号住居跡が隣接する。南側の約半分ほどが検出され、北側は調査区外である。住居跡中央部を南北に暗渠排水の覆乱が走っている。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸3.94mで、短軸は1.70mが検出された。深さは0.15mである。主軸方向は、 $N-85^{\circ}-E$ を指す。住居跡の覆土は黒褐色土を基本とする。

床面はほぼ平坦であるが、カマド前面が硬化しておりカマドに向かって下がっていた。踏みしめられた結果と思われる。壁溝は東壁のカマド右側を除いて認められたことからほぼ全周していると思われる。

カマドは東壁に構築されていた。住居跡が長方形

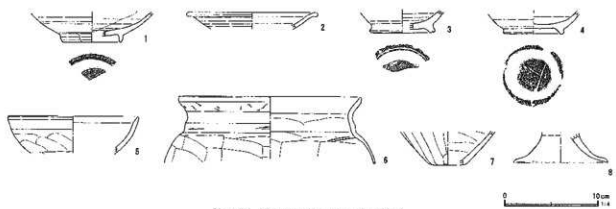


- 図130号住居跡
 1 壁内溝断面 灰土・ブロッコ、面土跡多量・段状破砕状に多量
 2 壁内溝断面 面土跡・ローム状
 3 溝断面 土・ローム・壁土跡、土跡に大のロームブロッコ
 4 溝断面 土・ローム跡多量

と推定されることから、東壁のほぼ中央に位置する
と考えられる。また、残存していた袖の状況から、
カマドは壁を掘り込まずに、灰白色の粘土を用いて
造っていたと考えられる。カマド底面は床面より約
10cm低く掘り込んでいた。火床面は9層と思われ、
天井崩落土が8層にあたるものと考えられる。燃烧
部の規模は奥行き1m、幅55cmで、袖は左袖が長さ
50cm、右袖が62cm残存していた。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは南壁際に1
基検出されたが柱穴とは考えられない。

遺物は、土師器杯、甕などがカマド内を中心とし



第37図 第130号住居跡・出土遺物

第6表 第130号住居跡出土遺物観察表

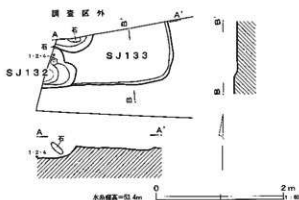
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰釉 碗	-	(3.3)	(6.0)	E	良好	灰白	15	
2	須恵器 皿	(14.0)	(1.7)	-	E H	青釉	灰	10	
3	ロクロ 高台付碗	-	(2.4)	(7.0)	A B J	普通	褐灰	20	
4	ロクロ 高台付碗	-	(2.4)	6.3	A D E H	不良	橙	80	
5	土師器 杯	(14.0)	(3.9)	-	A D E H	普通	橙	15	
6	土師器 甕	(19.4)	(7.0)	-	A B D E H	不良	橙	40	
7	土師器 甕	-	(3.5)	(4.0)	A D E J	普通	黒褐	15	
8	土師器 台付甕	-	(3.1)	(10.0)	A D E	不良	橙	25	内外摩耗著しい

てカマド周辺や南壁際から出土した。ほとんどが床
面から5~10cmほど浮いており、不安定な状態で出
上したことから住居廃絶後に投げ込まれたような状
況を示すものと考えられる。

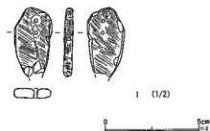
時期は9世紀後半と考えておきたい。

第136号住居跡 (第41図)

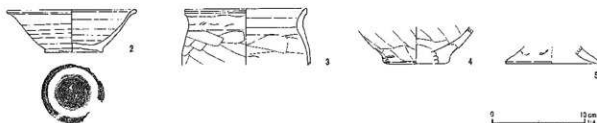
調査区の北側、V-47・W-47グリッドに位置す
る。第138・139・150号住居跡と重複関係にある。
また、第137号住居跡とほとんど接していることか
ら実際にはこれとも重複関係にある。これらの住居
跡は、そのほとんどが検出された段階で既に床面が
露出していた状態で、壁溝によって形状を確認した
ものである。したがって、それぞれの新旧関係は明



SJ 133



SJ 132



第38図 第132・133号住居跡・出土遺物

第7表 第132号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
2	ロクロ 高台付埴	(13.8)	4.5	6.2	B E H J	普通	にぶい褐	70	カマド
3	十脚器 小型埴	(13.0)	(6.0)	-	A B D E	普通	褐	25	カマド
4	土師器 変	(3.8)	(7.0)	-	A D E H J	普通	灰黄褐	15	
5	土師器 台付埴	-	(1.8)	(10.0)	A B D E	普通	褐	20	カマド

第8表 第133号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	残存長	幅	厚さ	孔径	重さ	残存率(%)	備考・出土位置
1	石製横道埴	3.7	2.0	0.5	0.15	5.3	90	剣型 滑石製

障にはつかめなかった。

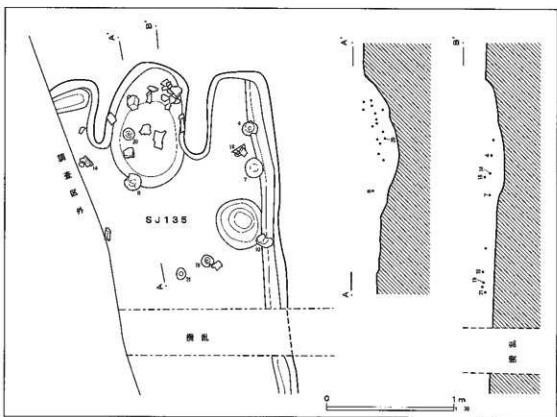
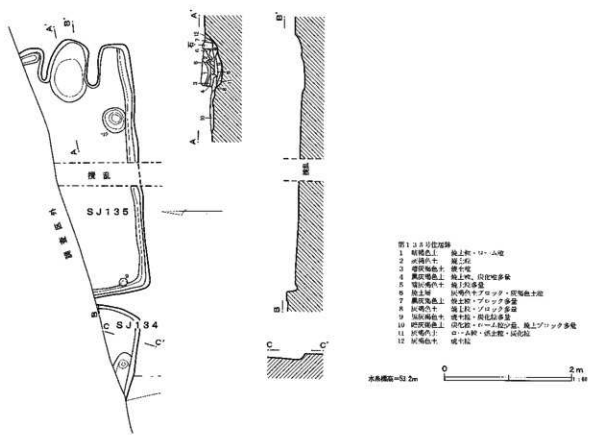
平面形は方形であるが、東壁に比べ西壁が短いためやや歪んで見える。規模は長軸3.30m、短軸3.00mである。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

床面は西側がやや高く、カマド前面から住居跡中央部が踏み固められて硬化していた。壁溝はカマドのある東壁際を除き確認された。西壁で一部切れているのは床面が部分的に削平されているためである。カマドの右側にやや広く落ち込みが確認されたが、比較的浅く、図示していないが底面は細かい単位で凹凸があることから、貯蔵穴ではなくむしろ床下土壌のような性格を考えたほうがよいと思われた。

カマドは東壁の中央に造られていたが、削平が及んでいて底面が残っている程度であった。壁を掘り込んで構築しているが袖などは遺存していなかった。遺物は遺憾ながら取り上げ時に第137号住居跡と一緒にってしまったが数量的にはわずかである。時期を推定させるほどの遺物は出土しなかった。

第137号住居跡 (第41団)

調査区の北側、V-47・W-47グリッドに位置する。第139・149号住居跡と重複関係にあり、第136号住居跡とも接している。遺構はほとんど床面まで削平されており、土層断面で新旧関係を把握する事

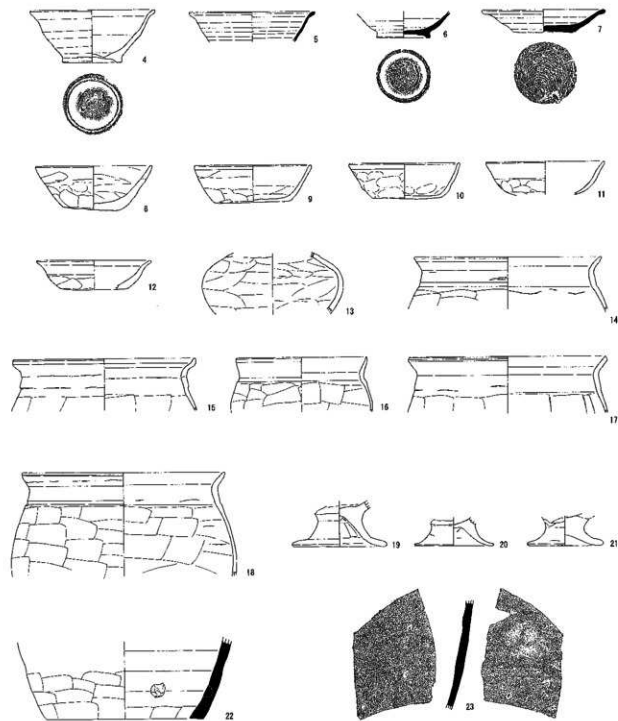


第39図 第134・135号住居跡・遺物出土状況

SJ 134



SJ 135



0 10cm
1/4

第40图 第134·135号住居跡出土遺物

第9表 第134号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(13.2)	3.2	(9.2)	B E H I	不良	にぶい橙	20	内外面摩耗著しい
2	土師器 甕	(20.0)	(5.5)	-	A H D F H	普通	にぶい橙	20	
3	土師器 甕	-	(2.4)	(8.0)	B E H I	普通	にぶい橙	15	

第10表 第135号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
4	須恵器 高台付埴	13.3	5.6	6.3	B E H J	良好	褐灰	90	
5	須恵器 埴	(13.4)	(3.2)	-	E H J	良好	灰	10	
6	須恵器 高台付埴	-	(2.8)	(5.8)	E H J	良好	灰	60	
7	須恵器 皿	13.2	2.4	6.6	E H J	良好	灰	100	やや歪む
8	土師器 坏	12.4	4.7	6.2	B E G H	普通	褐	80	
9	土師器 坏	12.4	4.0	8.2	A B D E H	普通	橙	100	口縁槽円形
10	土師器 坏	11.8	3.8	7.4	A B D E H	普通	橙	75	
11	土師器 坏	(12.6)	(3.5)	-	A B E H	普通	橙	15	
12	土師器 坏	(12.2)	3.1	(7.2)	B D E H	普通	にぶい橙	10	
13	土師器 甕	-	(6.4)	-	A B D E H	不良	にぶい赤褐	15	内外面摩耗著しい
14	土師器 甕	(20.0)	(5.8)	-	A B D E	普通	にぶい橙	20	
15	土師器 甕	(19.4)	(5.5)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	15	
16	土師器 甕	(14.0)	(5.7)	-	A B E H	普通	褐	25	
17	土師器 甕	(21.0)	(6.0)	-	D E H	不良	にぶい褐	20	
18	土師器 甕	(21.4)	(11.1)	-	D E H	普通	にぶい褐	15	
19	土師器 台付甕	-	(4.8)	10.2	A B D E H	普通	にぶい橙	100	
20	土師器 台付甕	-	(3.0)	8.6	A B D E H	普通	にぶい橙	100	
21	土師器 台付甕	-	(3.1)	8.2	B D E H	普通	褐	100	
22	須恵器 甕	-	(8.6)	(16.8)	E H J	良好	灰	15	
23	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	

は出来なかったが、出土遺物及び住居跡の形態から本住居跡が新しいと考えられる。

平面形は長方形である。規模は長軸2.96m、短軸2.08m、深さは計測できたところで0.04mと残りが悪い。主軸方向は、N-94°-Eを指す。

床面はほぼ平坦であるが北側が徐々に低くなる。

床面の南半分は踏み固められ硬化していた。壁溝は西壁の北側で45cmほど切れていたほかは廻っていた。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。壁を掘り込んでおり、カマド底面は床面より僅かに低い程度であった。袖は灰白色粘土で構築されており、右袖は24cm、左袖は30cm残存していた。カマド前面には70×90cm、深さ5cmのなだらかな落ち込みが見られた。この落ち込みについては、床下土層なのか灰き口部前面に見られる窪みなのか判然としなかったが、ここでは後者と考えておきたい。貯蔵穴は検出

されなかった。

遺物は埴、甕、羽釜などが出土した。羽釜はカマド前の落ち込みからの出土である。

時期は10世紀と考えられる。

第138号住居跡 (第41区)

調査区の北側、W-47グリッドに位置する。住居跡のほとんどは調査区外にあり、僅かにカマドの先端と住居跡北東部にある貯蔵穴の約半分が検出されただけである。第147・150号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が一番古いと考えられる。

平面形は、検出部分があまりにも少ないため不明である。規模なども不明で床面の状態、壁溝の有無などもわからない。

カマドは北壁の東寄りに設置されていたと考えられ、先端部分の焼土が残っていた。燃焼の状態や袖の有無は不明である。貯蔵穴は約半分が検出された

ものと考えられる。覆土には、焼土粒子を多く含む黒褐色土が堆積していたため、確認当初は第147号住居跡のカマドではないかと思われたが、検討した結果、本住居跡の貯蔵穴であると判明した。

遺物はカマド部分から甕の口縁部片が出土しているが遺構の重複関係と合わない。混入したものと思われる。

時期は第147号住居跡が6世紀と考えられる第127号住居跡より古いことから、さらにそれ以前と考えられる。

第139号住居跡（第43図）

調査区の北側、V・W-47グリッドに位置する。第136・137・138・150号住居跡と重複関係にある。いずれの住居跡も床面のみの検出のため新旧関係は判然としなかったが、調査時の所見では第138号住居跡より新しく、他の住居跡より古いように思われた。

平面形は長方形である。規模は長軸が4.00m、短軸は3.34mである。上軸方向はN-96°-Eを指す。

床面は第136・137・150号住居跡とともに平坦であるが、これらの住居跡との重複部分が多く純然たる本住居跡の床面はカマド周辺などごく僅かである。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。遺存状況が悪く底面が残っている程度であったが、壁を掘り込んで構築されている状況が窺えた。袖は残っていなかったがカマド覆土上面に灰色の粘質土が含まれていたことから灰褐色粘土でカマドを構築していたものと考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は土師器の環が出土している。この環は約半分弱が残っているが、形は長方形を思わせる。意識的にそうしたものか、あるいは単に歪んだものか判断に苦しむ。

時期はこの環1点しか出土していないので断定はできないが9世紀と考えておきたい。

第140号住居跡（第43図）

調査区の北側、W-47グリッドに位置する。南側半分が調査区域外にかかる。第149号住居跡と重複関係にあり調査時の所見では本住居跡が新しいと思われた。検出した段階で既に床面が出ていたため2~3cm程度掘り下げて住居跡の形が分かるようにした。

平面形は南側が調査区外のため不明であるが方形であろうか。検出されたのは東西方向（北壁）2.62m、南北方向（西壁）が1.56mである。主軸方向は、N-8°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝などは検出されなかった。

カマドは、北壁の東寄りに設置されていた。壁を掘り込んで造られていたが、底面と壁の下部が少し残っただけである。底面は10cmほど住居跡床面より低く、壁は被熱して赤化していた。赤化していたのは手前の一段低い部分であることから、先端の浅い部分は煙道になるものと考えられた。袖はもちろん残っておらず、貯蔵穴も検出されなかった。

遺物は出土しなかったため時期は不明である。

第141号住居跡（第45図）

調査区の北側V・W-48グリッドに位置する。第142・151号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。住居跡東側は暗渠排水が南北に通っており、カマド袖にあたる部分が壊されていた。

平面形は、南壁が北壁より0.5m短いめかなり歪んでいる。規模は北壁が3.4mで南壁は2.9m、南北方向（短軸）は3.16mである。検出時に床面が出ていたためほとんど深さはない。主軸方向は、N-89°-Eを指す。

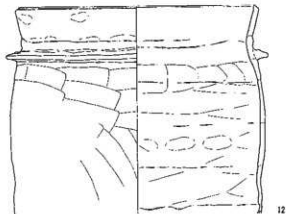
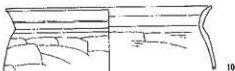
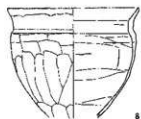
床面は平坦である。貼床されており堅く締まっていた。壁溝はカマド右側と南壁の東半分を除いて掘り込まれていた。柱穴は確認されなかったが、床下土壌が1基検出された。直径1mの円形で深さは15cmである。皿形の掘り込みで覆土にはロームブロックを含む黒褐色土が入っていた。

カマドは東壁の中央に壁を掘り込んで造られてい

SJ 136



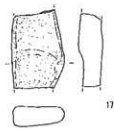
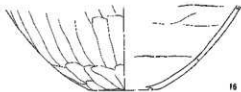
SJ 137



SJ 138



SJ 149



第42图 第136·137·138·149号住居跡出土遺物

第11表 第136号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付埴	-	(5.2)	6.8	F H J	普通	褐	60	
2	須恵器 甕	19.8	(8.1)	-	H J	良好	灰	60	S J 137
3	須恵器 甕	-	(6.5)	(14.0)	F H J	普通	にぶい橙	10	S J 137 外面摩耗著しい

第12表 第137号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
4	ロクロ 埴	(13.0)	4.1	(6.0)	A B D E H	不良	にぶい黄橙	10	
5	ロクロ 高台付埴	-	(4.0)	(6.0)	B E H J	普通	褐灰	80	
6	ロクロ 高台付埴	-	(3.6)	5.2	B E H J	普通	にぶい橙	15	
7	土師器 小型甕	(14.0)	(10.1)	-	A B D E H J	普通	にぶい橙	15	
8	土師器 台付甕	(14.0)	(11.6)	-	D E H	普通	にぶい黄褐	15	
9	土師器 甕	(22.0)	(6.5)	-	A B D E H J	普通	橙	15	
10	土師器 甕	(22.0)	(6.7)	-	A B E H	普通	橙	10	
11	土師器 甕	-	(5.1)	(4.4)	B D E H	普通	にぶい橙	20	
12	羽釜	(25.0)	(21.9)	-	A E H	普通	にぶい橙	30	内外面摩耗著しい

第13表 第138号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
13	土師器 甕	(21.0)	(10.8)	-	A B D E H	普通	にぶい黄褐	15	カマド

第14表 第149号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
14	土師器 埴	(12.0)	2.5	-	B D E H	普通	橙	15	カマド
15	土師器 小型甕	-	(7.4)	1.9	A D F H J	普通	にぶい赤褐	90	カマド
16	土師器 甕	-	(8.8)	7.5	A D H	普通	にぶい橙	30	カマド
17	砥石	残存長(8.2)cm	幅5.6cm	最大厚2.6cm	重さ202.9g				

た。火床面は床面より10cmほど低く、外側に70cmほど張り出している。幅は44cmである。袖は残っていなかった。貯蔵穴は確認されなかった。

遺物は埴がカマド右側の壁際から出土したほか皿・台付甕が検出された。

時期は9世紀後半と考えられる。

第142号住居跡(第47回)

調査区の北側、V・W-48グリッドに位置する。第141・151・184号住居跡と重複関係にある。第141号住居跡より古く、第151号住居跡より新しい。第184号住居跡については重複部分が僅かであるが本住居跡が古いと思われた。住居跡の西側は北東から南西方向に暗渠排水が通り、遺構の一部が壊されている。

平面形は長方形である。規模は長軸3.86mで、短軸は3.42m、深さは0.18mである。主軸方向は、N-55°-Eを指す。

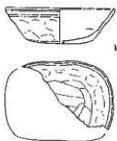
覆土は焼土粒子、炭化物を多量に含む床面からは大きめの炭化材が検出された。またカマド内やカマド脇には糞類が置かれたままのような状態で出土したことから、本住居跡は火災に遭ったものと推定される。

床面はほぼ平坦でカマド前面はよく踏み固められていた。壁溝は全周するが南壁際は幅広である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。壁は掘り込んでいない。火床面は床面より低く袖は灰白色粘土で造られていた。覆土は焼失住居ということもあって全体に焼土粒子が多く含まれていたが、9層が天井部の崩落土である。袖は左袖が76cm、右袖は74cmほど残存していた。貯蔵穴はカマド右側に掘り込まれていた。大きさは64cm×46cm、深さは38cmであった。上面の周囲にはL字型に周溝が残っていた。

床下土壌は中央から北西部にかけて検出された。円形ないしは不整形でロームブロックを含む暗褐色土が入っていた。

SJ 139



SJ 150

0 10cm
1:4

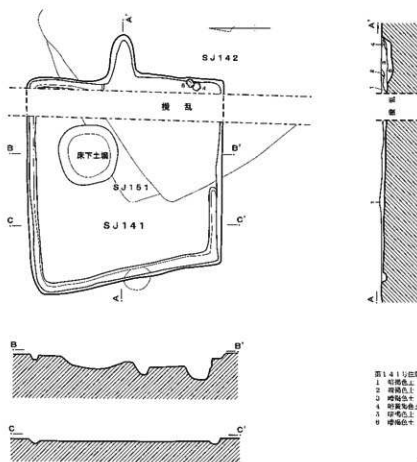
第44図 第139・150号住居跡出土遺物

第15表 第139号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(11.6)	3.8	(7.0)	A B D E H J	普通	褐色	40	舟型 長径11.6cm 短径8.5cm

第16表 第150号住居跡出土遺物観察表

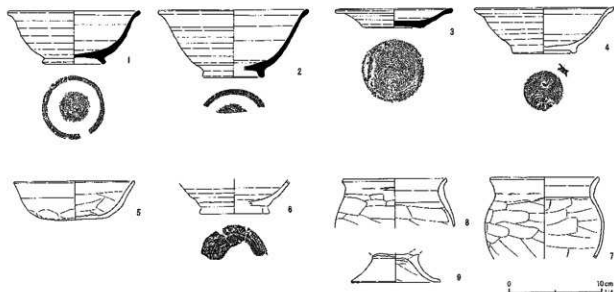
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 罎	(24.0)	(6.5)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	15	



- 第141号住居跡
- 1 褐色土 粘土・炭化物、H-A部少量
 - 2 黄褐色土 H-A部トップ部分
 - 3 黄褐色土 H-A部中央部
 - 4 暗褐色粘土 コム多量
 - 5 暗褐色土 H-A部多量、地上部少量
 - 6 暗褐色土 H-A部トップ、粘土少量

水深断面=0.3m 0 2m
1:10

第45図 第141号住居跡



第46図 第141号住居跡出土遺物

第17表 第141号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 高台付埴	(14.0)	5.6	6.8	E H J	良好	灰	70	擾乱 やや歪みあり
2	須恵器 高台付埴	(16.0)	7.2	(6.6)	E H J	良好	灰黄	40	やや歪みあり
3	須恵器 皿	12.6	2.0	6.5	H J	良好	灰	70	
4	ロクロ 高台付埴	15.0	4.8	(6.8)	A E H	普通	にぶい橙	80	S J 142
5	土師器 坏	13.0	4.1	7.4	A B E H	普通	にぶい橙	95	S J 142
6	ロクロ 高台付埴	-	(2.8)	(7.2)	A E H	不良	にぶい橙	40	
7	土師器 小型埴	(11.6)	(8.6)	-	A B E H	普通	褐	15	
8	土師器 小型埴	(11.0)	(5.1)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	20	
9	土師器 台付埴	-	(3.0)	9.5	A B D H	普通	にぶい橙	70	

おり、深さは火床面が床面と同じか、やや低い程度に掘り下げられていた。袖は残っていないかった。

貯蔵穴は検出されなかった。

住居跡の中央に床下土壌が確認された。大きさは1.08m×0.96m、深さ22cmで、覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土であった。

遺物は碗の他緑釉陶器などが出土している。

時期は9世紀である。

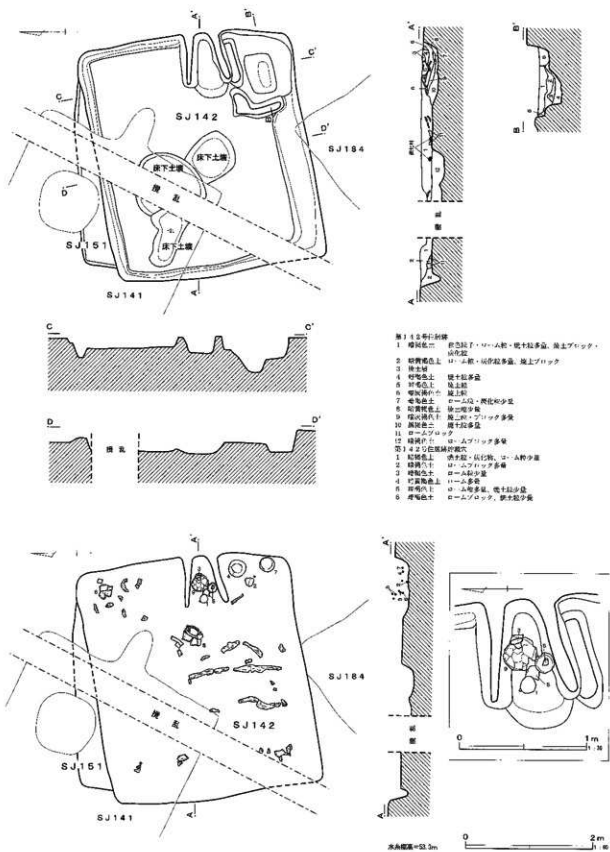
第144号住居跡 (第50図)

調査区の北側、V・W-53・54グリッドに位置する。第145号住居跡・第30号溝跡と重複関係にあり、前者より新しく後者より古い。

平面形は方形である。規模は長軸3.24m、短軸

2.78m、深さは0.12mで浅い。主軸方向は、N-80°-Eを指す。カマド左側の壁は段を持ち30cmほど外側に張り出しており、いわゆる棚状施設と思われる。床面は平坦で棚状施設からカマド前面を経て貯蔵穴の周囲は固く締まっていた。壁溝は床面が固く締まっていた範囲を除いてはぼろぼろだった。

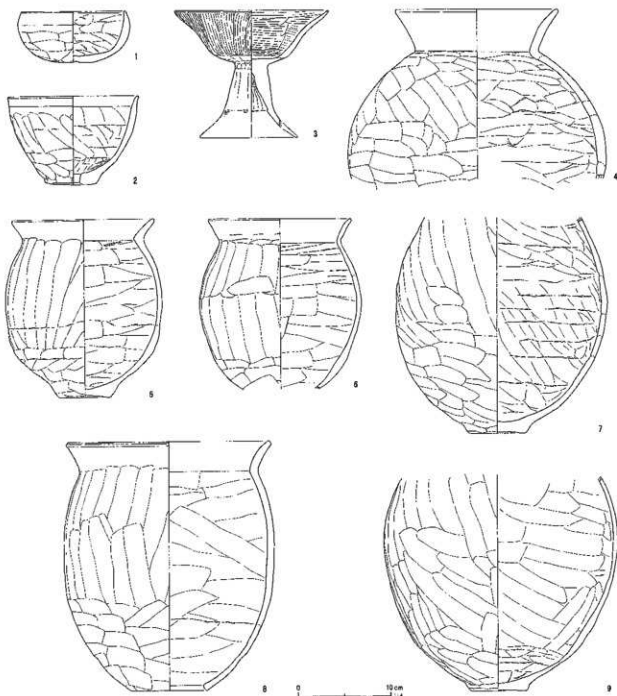
カマドは東壁のほぼ中央に造られていた。燃焼部は壁を掘り込んでおり、長さは0.96m、幅は0.54mであった。床面より10cmほど掘り下げてからローム混じりの褐色土で埋め戻し火床面としている。袖は遺存していないかったがカマドの覆土中に灰白色粘質土が多量に混入していることからそれを用いて構築されていたと考えられる。貯蔵穴はカマド右側で住居跡の南東隅に検出された。カマド側に浅い段を持



第115号住居跡

- 1 層間土 砂色粘土・ローム状・焼土粒多量、灰土ブロック、灰土層
 - 2 砂質褐色土 ローム状・灰土粒多量、灰土ブロック
 - 3 律土層
 - 4 砂色土 焼土粒多量
 - 5 砂色土 焼土粒
 - 6 褐色褐色土 焼土粒
 - 7 褐色褐色土 ローム状・焼土粒少量
 - 8 褐色褐色土 焼土粒少量
 - 9 埋土層下 焼土粒・ブロック多量
 - 10 埋土層土 焼土粒多量
 - 11 ロームブロック
 - 12 埋土層土 ロームブロック多量
- 第115号住居跡詳細図
- 1 埋土層上 赤土層・灰土層、ローム状少量
 - 2 埋土層下 ローム状少量
 - 3 埋土層土 ローム状少量
 - 4 埋土層上 ローム多量
 - 5 埋土層下 ローム多量、焼土粒少量
 - 6 埋土層土 ロームブロック、焼土粒少量

第47図 第142・151号住居跡・遺物出土状況



第48図 第142号住居跡出土遺物

第18表 第142号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 碗	11.1	5.4	-	ABEH	普通	橙	95	内外面黒色付着
2	土師器 碗	13.8	9.4	5.4	ABEH	普通	にぶい赤褐	100	
3	土師器 高坏	(16.4)	13.5	(10.5)	ABEHJ	不良	橙	70	
4	土師器 甕	(17.0)	(17.9)	-	ABEH	普通	にぶい赤褐	70	
5	土師器 甕	(15.0)	18.7	5.6	ABDEHJ	普通	にぶい橙	60	カマド
6	土師器 甕	(15.0)	(18.0)	-	ABEH	普通	褐灰	30	
7	土師器 甕	-	(22.8)	6.2	ABEHJ	普通	褐	80	
8	土師器 甕	(21.4)	26.3	8.2	ABDFH	普通	橙	70	
9	土師器 甕	-	(22.6)	6.2	ABEHJ	普通	褐灰	70	カマド

ち深さは19cmと浅めであった。覆土中から坏類が出土した。

ピットは北西部に1基検出されたほかには見られなかった。住居跡中央に床土層が検出された。土層断面を見ると深さ20cmほどの上層を掘りそれを埋めた後でさらに深さ75cmの土層を掘り込んでいる。断面ではその上に住居跡の覆土がかぶり明らかに住居跡より新しいものではないことが分かる。床土上層としては通常のものより深く特異である。

遺物は、覆土中から坏・埴・皿・甕・灰釉陶器などが出土した。また、前述のとおり貯蔵穴の覆土には坏類の破片が入っていた。さらに貯蔵穴の脇から坏が伏せた状態で出土したが床面から5cmほど浮いていた。

時期は9世紀後半である。

第145号住居跡 (第50図)

調査区の北側、V-53・W-53・54グリッドに位置する。第144号住居跡と重複関係にありこれより古い。第144号住居跡にカマドを含む東側を壊されている。

平面形は、西壁が東壁よりやや短く少し歪んでいるが方形と推定される。規模は長軸3.04m、短軸が3.04m、深さは0.11mであった。主軸方向は、N-80°-Eを指す。

床面は平坦で、全体に良く締まっていた。壁溝は北壁を除いて検出された。

カマドは東壁に造られていたと考えられるが、第144号住居跡に壊されている。貯蔵穴も検出されなかった。

ピットは床面北側に1基検出されただけで柱穴は分からなかった。

遺物は覆土中から埴、甕が出土している。

時期は9世紀前半である。

第146号住居跡 (第54図)

調査区の北西側、V-45・46グリッドに位置する。

住居跡の南西の角が検出されただけで、ほとんどは調査区外である。検出された範囲では重複する遺構はない。

平面形は、検出範囲が狭いため不明である。検出された規模は南辺が1.26m、東辺が0.46mである。深さは0.08mであった。主軸方向は、N-89°-Eを指す。

床面の状態も検出範囲が狭いためよく分からないが南東の隅は一段下がっていた。これが貯蔵穴状の施設に関連するものかどうかはわからなかった。壁溝も検出範囲では確認されなかった。覆土は灰褐色土を含んでおり多分に上層の影響を受けていると思われる。

カマドは調査区外の東壁あるいは北壁にあるものと考えられる。

遺物は覆土中から底部窪削りの坏などの破片が僅かに出土したが、時期の合わないものも含まれる。

時期は窪削りの坏の時期をとって8世紀第1四半期頃と考えておきたい。

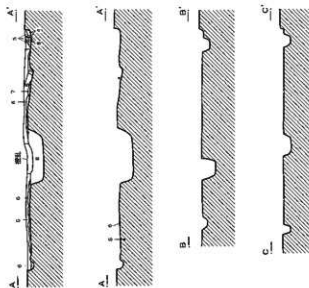
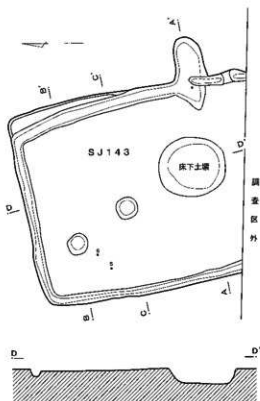
第147号住居跡 (第35図)

調査区の西側、W-47グリッドに位置する。幅1mほどの調査範囲だったため全容は不明である。第127・138号住居跡と重複関係にあり、第127号住居跡より古く、第138号住居跡より新しい。

平面形は不明である。検出された部分は南辺が1.36mである。深さは壁溝部分で0.11mである。ほかの部分については分かっていないことから、あるいは本住居跡を拡張して第127号住居跡を造ったと考えたほうがいいかもしれない。主軸方向は、N-21°-Wを指す。

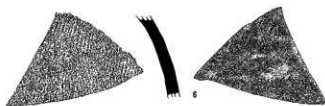
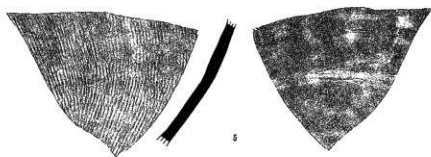
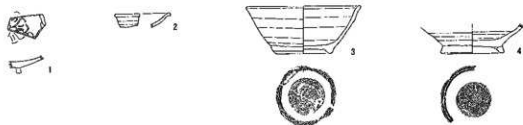
床面は第127号住居跡と重複しておりほとんど残っていなかった。壁溝は南壁際に一部確認された。同じ壁際に40×34cm、深さ55cmのピットが検出されたが本住居跡に伴う可能性は低く、むしろ掘立柱建物のなどの柱穴の可能性が高いように思われる。

ほかにカマドなどの施設は検出されなかった。



- 1 埋藏土上 粘土多量
 2 埋藏土上 粘土多量、ローム状少量
 3 埋藏土上 粘土少量
 4 埋藏土上 ローム状・粘土多量
 5 埋藏土上 ローム多量、粘土少量
 6 埋藏土上 ローム・粘土少量
 7 埋藏土上 ローム多量
 8 埋藏土上 ロームアソビ多量

水平縮尺=1/100
 0 2m
 100

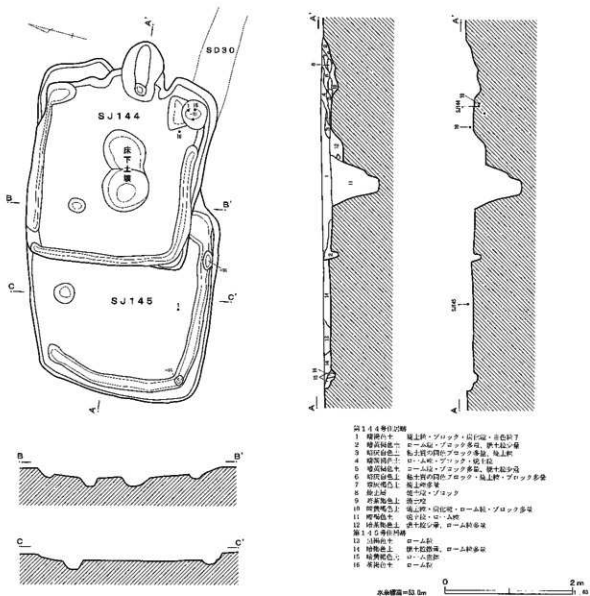


0 10cm
1:1

第49図 第143号住居跡・出土遺物

第19表 第143号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	練精 埴	-	(1.3)	(8.0)	E	良好	オリブ灰	破片	
2	灰釉 皿	-	-	-	F	良好	灰白	破片	
3	ロクロ 高台付埴	12.2	5.0	5.6	B D E H J	不良	灰褐色	80	
4	ロクロ 高台付埴	-	(3.0)	(6.8)	A B D H J	普通	にぶい黄褐色	40	
5	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	
6	須恵器 甕	-	-	-	F H J	良好	灰	-	



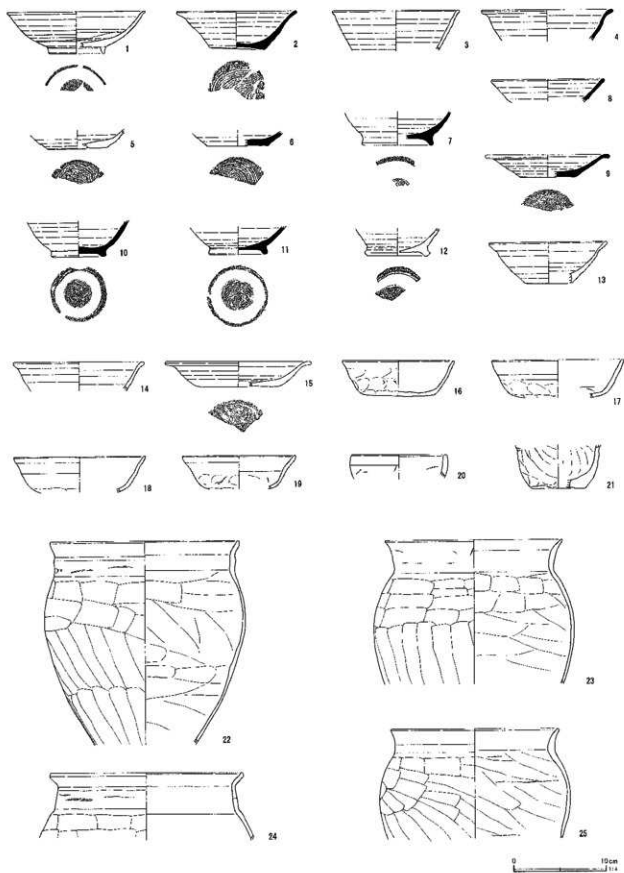
第50図 第144・145号住居跡

遺物は十師器の甕が本住居跡のものとして取り上げられているが10cm以上浮いた状態にあり第127号住居跡の遺物と考えられる。

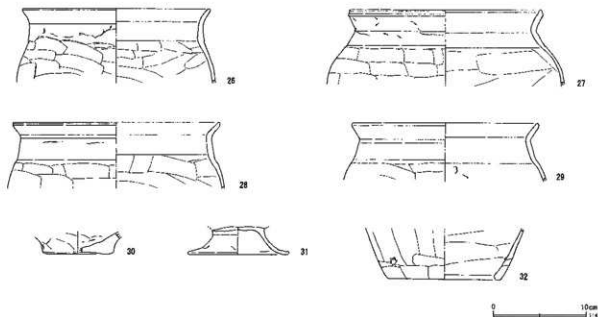
時期は第127号住居跡が6世紀と考えられることからそれ以前である。

第149号住居跡 (第41図)

調査区の北側、V・W-47グリッドに位置する。確認時には既に床面が露出していたため、壁溝で平面形を確認した。第137・140号住居跡と重複関係にあり、調査時の所見では本住居跡が最も古いと思わ



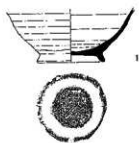
第51图 第144号住居跡出土遺物(1)



第52図 第144号住居跡出土遺物 (2)

第20表 第144号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰釉 碗	(14.6)	4.5	(5.8)	E	良好	灰白	20	
2	須恵器 坏	12.6	4.1	5.9	E H J	良好	灰	50	
3	須恵器 坏	(13.4)	(4.2)	-	E H J	不良	灰黄	15	カマド 軟質
4	須恵器 坏	(14.0)	(3.3)	-	E H J	良好	灰	15	カマド
5	須恵器 坏	-	(2.0)	(6.4)	A E H J	良好	灰黄褐	15	
6	須恵器 坏	-	(1.5)	(6.6)	E H J	良好	灰	15	
7	須恵器 高台付碗	-	(3.5)	(7.6)	E H	良好	灰	15	
8	須恵器 坏	(12.0)	(2.4)	-	E H	良好	灰	10	
9	須恵器 皿	(13.4)	2.5	(6.0)	E H J	良好	灰	20	
10	須恵器 高台付碗	-	(3.7)	5.9	E H	良好	灰	60	
11	須恵器 高台付碗	-	(2.9)	6.3	E H J	良好	灰	60	カマド
12	須恵器 高台付碗	-	(2.9)	(7.0)	E H	良好	灰黄褐	15	床下土層
13	ロクロ 坏	12.4	4.4	(5.0)	A E H J	不良	にぶい橙	15	
14	ロクロ 碗	(14.0)	(3.0)	-	A H	不良	褐	15	カマド
15	ロクロ 皿	(15.6)	2.6	(9.0)	A E H J	不良	橙	15	
16	土師器 坏	11.9	3.7	7.5	A B E H	普通	褐	100	
17	土師器 坏	(14.0)	(4.0)	-	A B D E H	普通	にぶい褐	10	カマド
18	土師器 坏	(14.0)	3.8	-	A B D E H	普通	にぶい赤褐	15	内外面やや摩耗
19	土師器 坏	(12.0)	(3.5)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	20	
20	土師器 碗	(10.0)	(2.5)	-	A B E H	不良	橙	15	
21	土師器 小型鉢	-	(4.6)	(5.8)	A B D E H	普通	橙	15	
22	土師器 甕	(20.0)	(21.5)	-	A B E H	普通	橙	60	カマド やや摩耗する
23	土師器 甕	(19.0)	(15.2)	-	A B E H J	普通	褐	30	カマド
24	土師器 甕	(20.4)	(7.2)	-	A B D E H	普通	橙	15	内面摩耗する
25	土師器 甕	(18.0)	(11.6)	-	A B D E H	普通	にぶい褐	10	カマド
26	土師器 甕	(20.0)	(7.9)	-	A D E H	普通	橙	20	カマド
27	土師器 甕	(20.4)	(8.1)	-	A B D E H	不良	黒褐	20	
28	土師器 甕	(22.0)	(7.0)	-	B E H J	普通	にぶい褐	15	床下土層
29	土師器 甕	(20.0)	(6.2)	-	A B D E H	普通	褐	10	床下土層
30	土師器 甕	-	(23.0)	(7.2)	A B E H	普通	橙	15	
31	土師器 台付甕	-	(3.0)	10.8	A B D E H	普通	にぶい褐	50	床下土層
32	土師器 甕	-	(5.4)	(12.0)	A B D E H J	普通	橙	50	カマド 床下土層 4ヶ所穿孔



第53図 第145号住居跡出土遺物

第21表 第145号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 高内付埴	-	(5.4)	7.1	E H J	良好	灰	70	カマド
2	土師器 甕	(22.0)	(2.7)	-	B D E H	普通	にぶい赤褐	20	

れた。

平面形は長方形であるが北西辺が大きく湾曲している。規模は長軸3.48m、短軸2.96mである。主軸方向は、N-156°-Eを指す。

床面はほぼ全面にわたって固く中央部は僅かに窪んでいた。壁溝は南西辺の西側を除いて通っていた。また、カマド両脇の袖にあたる部分は切れていた。

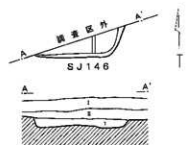
カマドは南東壁の中央に造られていた。燃焼部は壁内に取まっており、煙道部分が50cmほど壁外に張

り出している。底面は床面より25cm低く掘り下げられているが、実際の火床面は3層上面と思われる。袖は遺存していなかった。

遺物は土師器環・甕などが出土しているが混入が見られる。

時期は遺物が混入しており判断に苦しむが環の年代をとって8世紀としておきたい。

第150号住居跡 (第43図)



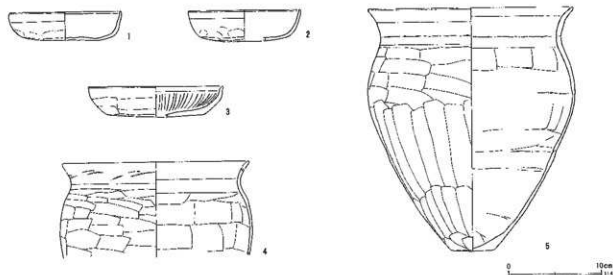
1 須恵器上
2 須恵器上
3 土師器上
4 土師器上 灰褐色土多量、H-AE・成土少少

水堀幅=0.7m

第54図 第146号住居跡・出土遺物

第22表 第146号住居跡出土遺物観察表

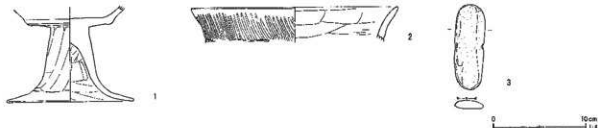
番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 環	-	(3.1)	(6.4)	E H J	良好	褐灰	15	内外面摩耗
2	土師器 環	12.7	3.4	10.3	B D E H	普通	にぶい橙	95	
3	土師器 環	(14.0)	3.2	(10.0)	D E H	普通	にぶい橙	40	
4	土師器 鉢	(13.0)	(2.8)	-	A E H	普通	橙	10	



第56図 第152号住居跡出土遺物

第23表 第152号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	11.9	3.1	9.9	ABDEH	不良	にぶい橙	70	カマド
2	土師器 坏	(11.8)	3.3	(9.7)	ABDEH	不良	にぶい橙	30	
3	土師器 坏	14.4	3.2	10.3	ABEH	普通	にぶい赤褐	80	内面哈文 摩耗著しい
4	土師器 甕	-	(9.3)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	30	カマド
5	土師器 甕	21.6	25.7	4.6	ADEH	普通	にぶい褐	40	カマド 外面粘土附着



第57図 第158号住居跡出土遺物

第24表 第158号住居跡出土遺物観察表

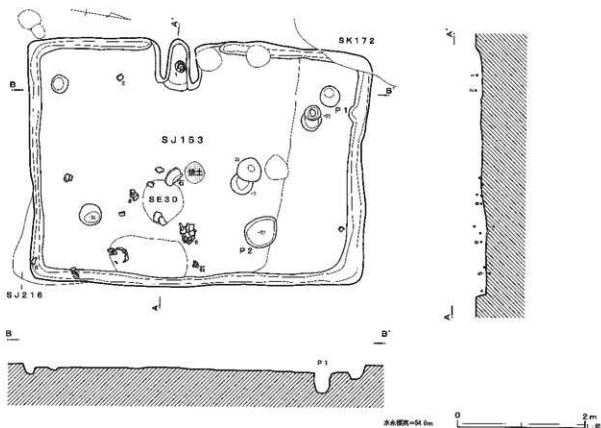
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	-	(10.0)	(13.6)	ABDEH	普通	橙	40	坏内面摩耗著しい
2	土師器 甕	(22.0)	(3.7)	-	E.H	普通	褐色	10	
3	砥石	長さ8.9cm 幅3.1cm 厚さ0.9cm 重さ48.7g							

調査区の北側、W-47グリッドに位置する。南側は調査区外に出ている。第136・138・139号住居跡と重複関係にある。検出段階で床面が露出していたため断面による新川関係をつかむことは出来なかったが、調査時の所見では本住居跡が最も新しい可能性があると思われた。

平面形は長方形になるものと思われる。規模は長

軸3.26m、短軸は1.94m検出できた。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面の状態は、少し削平を受けているため詳しくは分からないがほぼ平坦であったと考えられる。調査区際では貼り床が認められた。貼り床は、第138号住居跡のカマドの上に貼られており、これによっても本住居跡が新しいことが分かる。壁溝は西側際



第58回 第153号住居跡

が切れぎれになり、第136号住居跡の壁溝で壊されている。

カマドは東壁の中央と考えられる場所に造られていた。壁を掘り込んで先端を土壇状に造っている。底面は床面より低く、火床面は3層上面に該当する。

袖は遺存状態が良くなかったのではっきりしない。貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にある可能性が考えられる。

遺物は上師器の甕が出土している。

時期は10世紀と考えておきたい。

第151号住居跡 (第47回)

調査区の北側、W-48グリッドに位置する。第141・142号住居跡と重複関係にあり本住居跡が最も古い。第142号住居跡に遺構の大半を壊されており、残存していたのは北側のごく一部であった。

平面形は不明である。残存していたのは北辺が2.86mと西辺の0.46mである。深さは0.60mである。

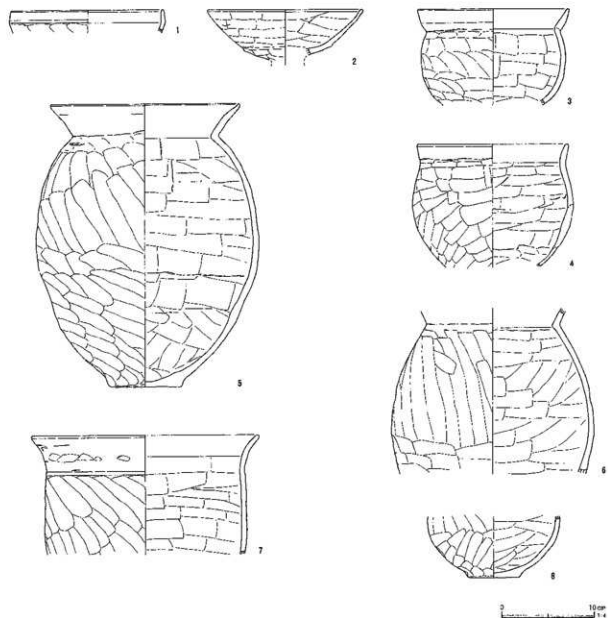
主軸方向は北辺でN-67°-Eを指す。

僅かに残っていた床面はほぼ平間で貼り床はされていないようであった。壁溝も検出されなかった。カマドや貯蔵穴なども壊されて痕跡を留めていなかった。

遺物も出土しなかった。時期は第142号住居跡が5世紀後半から6世紀にかかる頃と考えられるのでそれ以前となる。

第152号住居跡 (第55回)

調査区の中央、Z-47グリッドに位置する。第154号住居跡と重複関係にあり、これよりも新しい。さらに第154号住居跡は第330号住居跡と、第330号住居跡は第158号住居跡と重複しており、その関係は古い方から第158号住居跡→第330号住居跡→第154号住居跡→第152号住居跡という順になる。幅1m余の調査範囲のため、検出されたのは住居跡の東側のカマドを含む一部分であった。



第59図 第153号住居跡出土遺物

第25表 第153号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 碗	(16.0)	(2.4)	-	BEH	普通	にぶい橙	10	
2	土師器 高坏	16.5	(5.3)	-	A EH	普通	明赤褐	90	
3	土師器 奘	(16.0)	(10.2)	-	BEH J	普通	灰褐	15	
4	土師器 奘	(16.0)	(13.0)	-	ABDEH	普通	灰褐	30	
5	土師器 奘	(20.0)	29.9	7.8	A EH J	普通	にぶい橙	70	
6	土師器 奘	-	(17.2)	-	ABDHJ	普通	にぶい橙	80	
7	土師器 瓶	(24.0)	(12.6)	-	ABEH	普通	褐	10	
8	土師器 奘	-	(6.5)	5.6	ABEH	普通	明赤褐	40	

平面形は、大部分が調査区外にあるため不明である。検出されたのは東辺で長さ2.56mである。東西方向は僅かに0.36mが検出されたに過ぎない。深さは0.26mである。主軸方向は、N-83°-Eを指す。

床面の状態は、検出範囲が狭いためよく分からない。壁溝はカマドの左側には検出されたが、右側では確認されなかった。

カマドは、東壁の中央に壁を約50cm掘り込んで造られていた。底面を住居跡の床面より10cmほど低く掘り下げた後、床面と同じ高さまで埋め戻し火床面としていた。3層は天井崩落土と考えられる。袖は遺存状態が悪く分かりにくかったが、土層断面で見ると灰白色の粘土を用いて構築されていたことがわかる。また、左袖には土師器の壁を心材として使っていた。貯蔵穴はカマド左側の調査区際に落ち込みの際が僅かにかかっていたが、これが該当する可能性はある。

遺物は、カマドの覆土中から土師器の環・甕が出土している。

時期は9世紀前半である。

第153号住居跡（第58図）

調査区の中央、BB-47グリッドに位置する。第216号住居跡、第172号土塼、第30号井戸跡と重複関係にある。第172号土塼より古く第216号住居跡、第30号井戸跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸5.60m、短軸3.74m、深さは0.05mである。主軸方向は、N-11°-Eを指す。

床面は平坦で、カマド周辺がやや硬化していた。壁溝は幅17~25cm、深さは床面から10cmほどで全周していた。北壁際がほかより幅広であった。

カマドは西壁の南寄りに造られていた。壁は掘り込まず住居跡内に収まっている。灰白色粘土を用いて構築しており、袖は右袖が60cm、左袖は65cm残っていた。両袖とも焚き口に近い方がよく焼けていた。住居跡中央に、直径約30cmの円形に焼土が見られた。

焼土部分の床面は僅かに焼けている程度でしっかりしたものではないため、その性格についてはよく分からない。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマドから土師器甕が出土したほかは、焼土付近から甕、高環の坏部などが出土している。

時期は6世紀前半であろう。

第154号住居跡（第55図）

調査区の中央、Z-47グリッドに位置する。第152・330号住居跡と重複関係にあり、第152号住居跡より古く第330号住居跡より新しい。幅1m余の調査範囲のため、検出されたのは住居跡のカマドを含む一部分であった。

平面形は、大部分が調査区外にあるため不明である。検出されたのは東辺で長さ1.90mである。東西方向は僅かに0.34mが検出されたに過ぎない。深さは0.2mである。主軸方向は、N-97°-Eを指す。

床面の状態は、検出範囲が狭いためよく分からない。壁溝は確認されなかった。

カマドは東壁に造られていた。壁を掘り込んでおり、煙道を含めて80cmほど壁外に伸びていた。カマドの構築は、始めに住居跡の掘り方を掘った後、埋め戻して住居跡の床面を造り、それからカマドを掘り込んでいる。灰層である⑥層下面が火床面で④層が天井部である。袖は明確にはつかめなかったが⑧層がカマドの下を通り、カマドの左右で厚みを持っており、これが袖の痕跡になるのかもしれない。貯蔵穴は検出された範囲では確認されなかった。

時期を推定させる遺物は出土しなかったが、本住居跡より新しい第152号住居跡が9世紀前半と考えられることから、それ以前としか捉えられない。

第155号住居跡（第60図）

調査区の中央、BB-50・51グリッドに位置する。第26号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

平面形は、方形で、規模は長軸3.64m、短軸3.06

m、深さ0.10mである。主軸方向は、 $N-1^{\circ}-E$ を指す。

床面は平坦で住居跡中央部が踏み固められて硬化していた。壁溝は東壁の一部を除いて廻っていた。

カマドは北壁の東寄りに造られていた。壁を外側に50cmほど掘り込んでいた。燃烧部の規模は92cm×68cmで、火床面は床面よりやや低い。袖は残っていなかった。

柱穴等は検出されなかった。

遺物は、カマド及びカマド周辺から土師器片が、カマドの反対側の壁近くから坏が2個体出土した。

時期は9世紀後半頃である。

第156号住居跡 (第55図)

調査区の中央、AA-47グリッドに位置する。第13号井戸跡、第174号土壌と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。幅1m余の調査範囲のため、検出されたのは住居跡の一部であった。断面で見ると南北方向に3.3mの範囲で本住居跡の上層の堆積が見られ、地山面からの深さは8cmである。その他

の詳細については、検出部分の殆どを第13号井戸跡と土壌に壊されており不明である。

遺物は出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

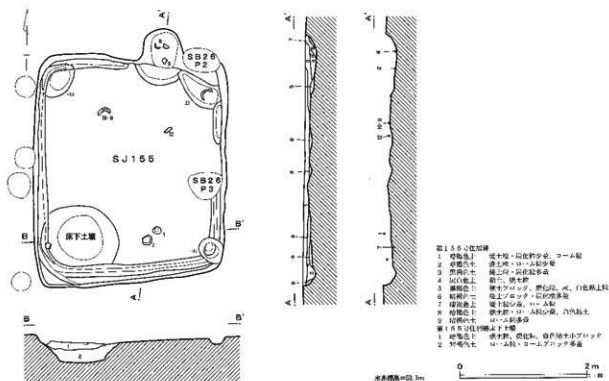
第157号住居跡 (第62図)

調査区の西側、BB-46・47グリッドに位置する。第42号溝跡、第173・200号土壌と重複関係にあり、各土壌より古い。第42号溝跡との重複は南の角の僅かな部分だったため、遺構での新旧関係は確認できなかったが、出土遺物より本住居跡が古い。

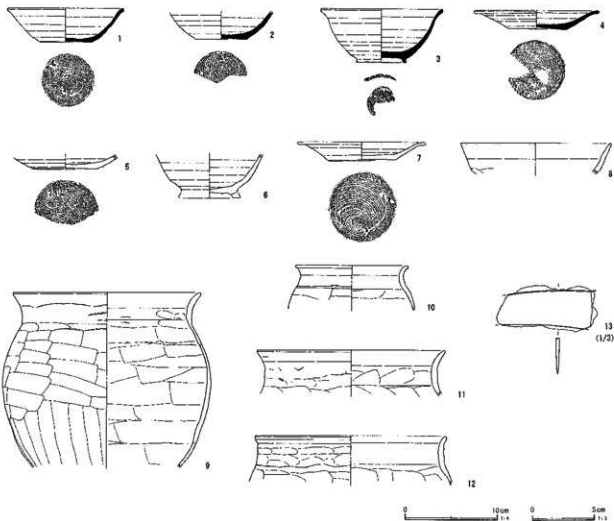
平面形は方形である。規模は長軸が4.84m、短軸が4.64m、深さ0.10m残存していた。主軸方向は、 $N-48^{\circ}-W$ を指す。

床面は、ほぼ平坦で主柱穴に囲まれた中がよく硬化していた。壁溝は南角が切れていたがほかは廻っていた。柱穴は4本対角線上に検出された。

カマドは東壁に造られていたが、第200号土壌によって壊されていた。僅かに左袖が崩壊した粘土とごく少量の焼土が検出されたに過ぎない。貯蔵穴は



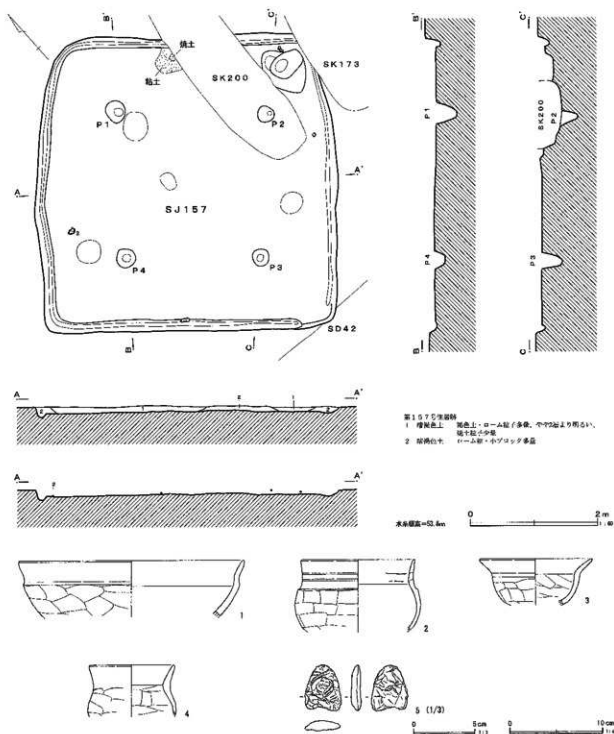
第60図 第155号住居跡



第61図 第155号住居跡出土遺物

第26表 第155号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置	
1	須恵器 坏	(12.4)	3.6	5.5	EHJ	良好	灰	70		
2	須恵器 坏	-	(3.0)	(5.7)	EJ	良好	灰	30	カマド	
3	須恵器 高台付坏	(13.0)	(5.0)	-	EHJ	良好	灰	40	器形の重み大きい	
4	須恵器 皿	13.3	1.9	6.2	EJ	良好	灰	60		
5	須恵器 皿	-	(1.5)	7.0	A E J	普通	灰褐色	40		
6	ロクロ 高台付埴	-	(4.4)	-	A E H	普通	褐	30		
7	ロクロ 埴	13.6	2.1	7.3	E H J	良好	灰褐色	90	貯蔵穴	
8	土師器 埴	(16.0)	(3.2)	-	A B H	普通	にぶい橙	10	カマド	
9	土師器 甕	(20.0)	(18.5)	-	A D E H	普通	にぶい褐	40		
10	土師器 甕	(12.0)	(4.7)	-	A E H	普通	にぶい褐	20	カマド	
11	土師器 甕	(20.0)	(4.8)	-	A D E G H	普通	褐	10		
12	土師器 甕	(20.2)	(5.2)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	10		
13	鉄製品	残存長7.5cm 最大幅3.0cm 厚さ0.2cm				重さ33.0g				鎌



第62図 第157号住居跡・出土遺物

第27表 第157号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 鉢	(24.0)	(6.0)	-	B F H J	普通	褐色	10	
2	土師器 鉢	(12.0)	(7.6)	-	A H J	不良	にぶい橙	30	内外面摩耗著しい
3	土師器 鉢	12.0	(4.8)	-	A B E H	普通	橙	10	
4	土師器 甑	(9.0)	(5.4)	-	A B E H	普通	にぶい橙	15	やや摩耗する
5	不明土製品	長さ3.6cm 幅2.9cm		-	A E G	普通	にぶい橙	100	重さ7.1g

カマド右側に、第173号土塼と第200号土塼に扶まれる形でかろうじて残っていた。やや歪んでいるが長方形を意識したものと考えられ、84cm×68cm、深さは最大で34cmであった。

遺物は、土師器の甕、鉢などが出土している。

時期は6世紀と考えられる。

第158号住居跡 (第55区)

調査区の中央、Z・A A-47グリッドに位置する。第330号住居跡、第13号掘立柱建物跡、第174号土塼と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。また、第174号土塼を扶んで南に第156号住居跡がありこれとも重複していると考えられるが新旧関係は確認できない。この部分の調査範囲は幅1m余だったため、検出されたのは住居跡の東側のカマドを含む一部分であった。

平面形は大部分が調査区外にあるため不明である。検出されたのは東辺で長さ2.60m、東西方向は0.74m、深さは0.18mであった。主軸方向は、N-105°-Eを指す。覆土にはローム粒子やロームブロックが多量に含まれており、その状況から埋め戻された可能性も考えられる。

床面の状況は検出範囲が狭いため全体的なことは分からないが、調査された範囲では平坦で壁溝は確認されなかった。ピットが1基検出されたがこれが柱穴であろうか。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は壁内であったと考えられ、煙道は壁を70cmほど掘り込んでおり、先端には立ち上がり部のピットが検出された。カマドは南側半分が第13号掘立柱建物跡の柱穴によって壊されていたが、破壊を免れた部分でも燃焼部の痕跡は明瞭には残っておらず、袖も確認できなかった。貯蔵穴は調査区外にあると思われる。

遺物は土師器の高坏、甕の口縁部が出土している。

時期は5世紀末～6世紀初頭であろう。

第159号住居跡 (第63区)

調査区の中央、BB-44・45グリッドに位置する。第160・161・176号住居跡と重複関係にあり、第161・176号住居跡より新しい。第160号住居跡との新旧関係は、確認時に本住居跡が見えたため新しいと考えられるが、出土遺物には大きな時期差は見られない。

平面形は長方形である。規模は長軸4.62m、短軸3.66m、深さは0.03mである。主軸方向は、N-28°-Wを指す。

床面は平坦であったが中央部が貼り床されていた。壁溝はほぼ全周する。床下七城が1基検出されたが本住居跡に伴うものか、第160号住居跡に伴うものか定かでない。直径65cmの円形で、深さは35cmである。覆土はロームブロックが多量混入していた。

カマドは北壁のやや東寄りに検出された。壁を掘り込んで燃焼部と煙道を造っている。燃焼部と煙道を含めた長さは1.3m、燃焼部の幅は0.78mである。床面から25cmほど掘り込んでから埋め戻し、住居跡の床面から5cm下がったところで火床面としている(7層下面)。6層は天井崩落土である。袖は残っていなかった。貯蔵穴はカマド右側に掘り込まれていた。長方形で大きさは68cm×52cm、深さは21cmである。中からの遺物の出土はなかった。

遺物は、土師器杯、甕、土鍾などが少量出土した。

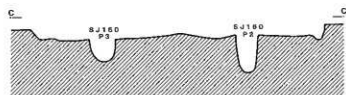
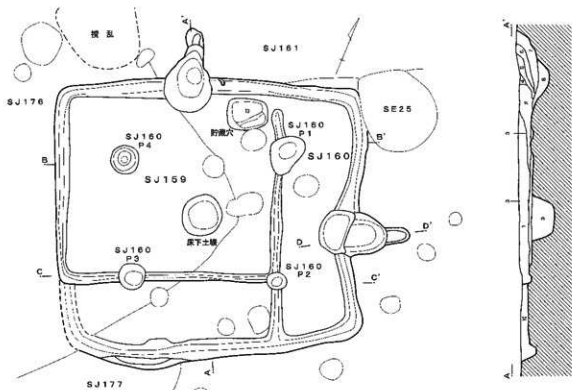
時期は7世紀末～8世紀初頭頃と思われる。

第160号住居跡 (第63区)

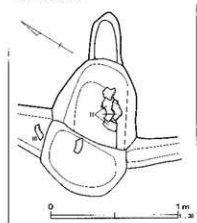
調査区の中央、BB-44・45グリッドに位置する。第159・161・176・177号住居跡、第25号井戸跡と重複関係にあり、第159号住居跡より古く、遺物から第177号住居跡より新しい。第176号住居跡との新旧関係は確認できなかったが、他の住居跡との重複関係から本住居跡が新しいと考えられる。

平面形は、長方形である。規模は長軸5.00m、短軸4.26m、深さ0.18mである。主軸方向は、N-64°-Eを指す。

床面は第159号住居跡によって大部分が壊されて



SJ160カマド

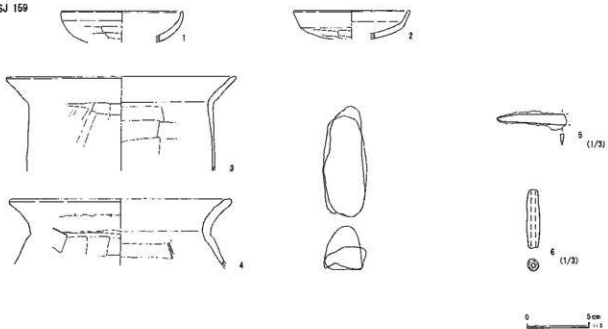


- 第159・160号住居の部
- 1 黒砂土上 灰白土3層、ローム粘土・地上約千巻
 - 2 黒砂土上 1層に厚板、黒土和了
 - 3 黒砂土上 ローム土層状 (厚74)
 - 4 黒砂土上 ローム粘土層
 - 5 黒砂土上 灰土の層
 - 6 黒砂土上 地上フロッグ・埃ニアブロック多量 (カマド火具部埋込)
 - 7 黒砂土上 延平瓦・瓦作の少量、灰・瓦、焼瓦上フロッグ多量
 - 8 黒砂土上 ロームブロック多量 (カマド軸り)
 - 9 黒砂土上 ロームブロック多量
 - 10 黒砂土上 ローム粘土・灰土約千巻
- 第160号の電線納付
- 1 黒砂土上 ローム粘土・地上約千巻
 - 2 黒砂土上 灰土の層
 - 3 黒砂土上 埃ニアブロック多量、灰土和了
 - 4 黒砂土上 地上瓦・灰土和了・ローム粘土
 - 5 黒砂土上 灰・灰土
 - 6 黒砂土上 ローム粘土・ロームブロック多量

本尺程度=33.3m 0 2m

第63図 第159・160号住居跡・遺物出土状況

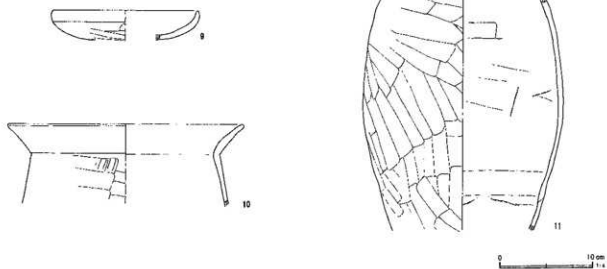
SJ 159



SJ 159-160-176-177



SJ 160



第64図 第159・160・176・177出土遺物

第28表 第159号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.8)	(3.3)	-	AH	普通	にぶい橙	15	カマド
2	土師器 坏	(12.2)	(3.0)	-	E G H	普通	橙	20	
3	土師器 甕	(24.0)	(9.9)	-	E G H	普通	橙	15	カマド
4	土師器 甕	(23.0)	(7.4)	-	E G H	普通	にぶい橙	15	
5	鉄製品	残存長5.6cm 幅0.8cm		厚さ0.2cm	重さ7.2g				刀子(刃部)
6	土師器 土師器	残存長4.6cm 底径1.0cm		E H	普通	橙	95	重さ3.7g	
	磁物石	長さ11.6cm 幅4.3cm		厚さ4.5cm	重さ353.4g				
	磁物石	長さ10.6cm 幅4.7cm		厚さ2.4cm	重さ166.7g				

第29表 第159・160・176・177号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
7	土師器 甕	(22.4)	(9.2)	-	E H	普通	にぶい橙	20	
8	土師器 甕	-	(4.0)	(7.6)	A E H	普通	橙	20	

第30表 第160号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
9	土師器 坏	(15.4)	(3.1)	-	E G H	普通	にぶい橙	15	
10	土師器 甕	(24.8)	(8.4)	-	E G H	普通	にぶい橙	20	S J 159
11	土師器 甕	-	(24.7)	-	E G H	普通	にぶい橙	60	カマド

いるが、平坦で貼床は無かった。壁溝は、全周していたと考えられる。床下上域は住居跡中央に円形の土壌が1基確認されたが、第159号住居跡のものである可能性もある。

カマドは東壁のやや南よりに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んでいた。火床面は床面より下がっている。3層が天井崩落土と考えられ、5層が灰層であるから6層上面を火床面と考えておきたい。袖と貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は4本確認された。30～50cmの円形で深さは38～60cmであった。

遺物は、土師器の坏・甕が少量出土している。

時期は7世紀末としておく。

Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は南隅が切れているほかは全周する。床面からは複数のピットが検出されたが主柱穴を特定することはできなかった。

炉と貯蔵穴は検出されなかった。貯蔵穴は調査区外にかかる部分にあるのかもしれない。

遺物は、床面や床面直上から塊、高坏、甕等が検出されたが、出土状況は壁から一定の距離を置いて円形に分布していることから、住居跡絶後に捨てられた可能性が高いと思われる。3は混入で第160号住居跡の物と考えられる。

時期は5世紀である。

第161号住居跡 (第65図)

調査区の西側、A A-44・45・B B-44・45グリッドに位置する。第159・160・176号住居跡、第14・25号井戸跡と重複関係にある。東側の角は調査区外にかかる。井戸と土壌との新旧関係は掴めなかったが、重複する住居跡の中では本住居跡が最も古い。

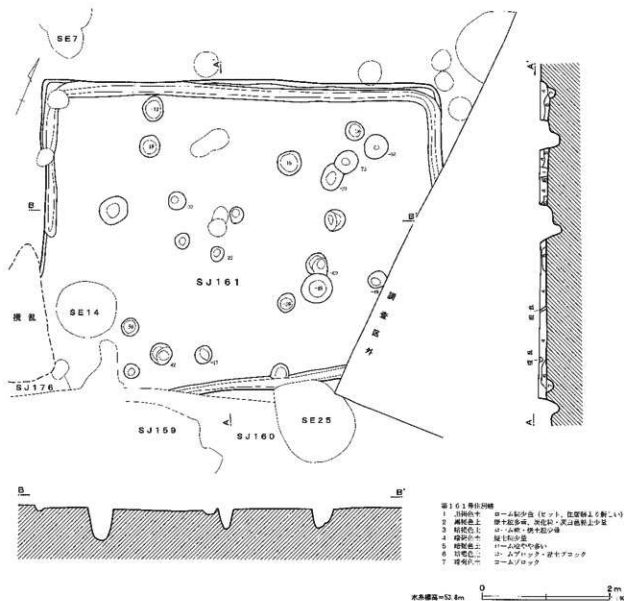
平面形は長方形で、規模は長軸6.60m、短軸5.00m、深さは0.10mである。主軸方向は、N-65°-

第162号住居跡 (第68図)

調査区の西側、Z-44・45・A A-44グリッドに位置する。第163・164・166・168号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.30m、短軸3.64m、深さは0.04mである。主軸方向は、N-55°-Eを指す。

床面は平坦で、貼り床などは見られなかった。壁溝はカマドの内側を除いて掘りこまれていたと考え



第65図 第161号住居跡

られる。柱穴は検出できなかった。南東側の壁から0.6mほど内側に壁溝が検出された事から本住居跡は拡張されたものと考えられる。拡張前の住居跡については調査時に第164号住居跡の番号を振るためそのまま使用する。

カマドは北東壁のやや東寄りに構築されていた。燃焼部は壁を掘り込まず、住居跡内に設定されていた。火床面は床面より僅かに下がっている程度であり差はない。2層が天井崩落土と考えられる。袖は両袖とも長さ60cmほど遺存しており先端部は土師器甕を用いて構築材としていた。焚き口部をいれた

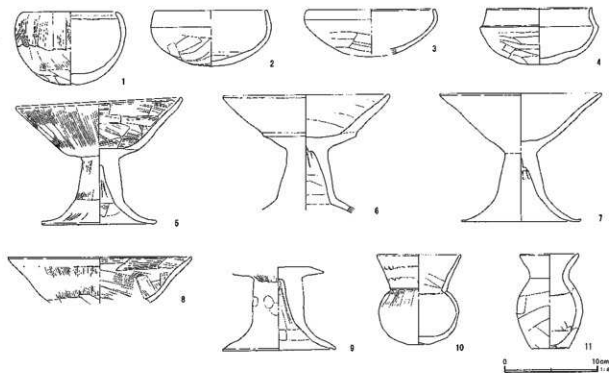
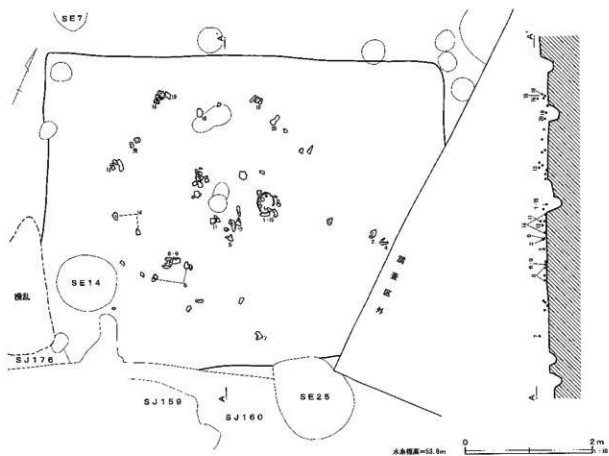
燃焼部の規模は長さ1.2mで袖の先端から20cmほど内側に支脚に使用した石が据えられていた。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、カマド及びその周辺から出土したが復原できたのは甕が殆どである。ほかには紡錘車が出土した。

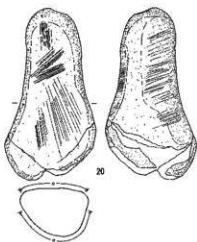
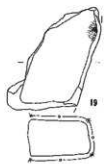
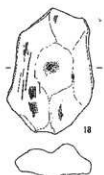
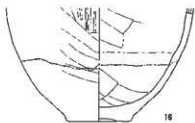
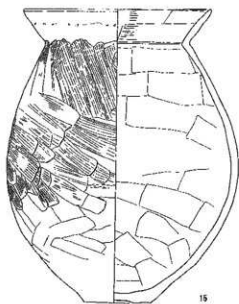
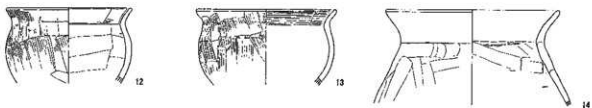
時期は甕の形態から判断するしかないが7世紀の終わり頃から8世紀にかかる頃としておきたい。

第163号住居跡 (第74図)

調査区の西側、A A-44・45グリッドに位置する。



第66図 第161号住居跡遺物出土状況・出土遺物(1)



第67図 第161号住居跡出土遺物 (2)



第31表 第161号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口徑	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 埴	(10.0)	7.7	-	ADEH	普通	橙	80	器面単純する
2	土師器 埴	(11.8)	5.9	-	AEH	良好	橙	50	
3	土師器 埴	(13.4)	(4.7)	-	AHI	普通	橙	25	
4	土師器 埴	(10.0)	6.0	-	ADEGH	普通	明赤褐	70	
5	土師器 高坏	17.6	13.3	12.2	AEH	普通	橙	90	
6	土師器 高坏	17.4	(12.1)	-	AEGH	普通	明赤褐	90	
7	土師器 高坏	(17.2)	13.5	(12.8)	DEGH	普通	にぶい橙	40	
8	土師器 高坏	(19.4)	(4.8)	-	EGH	普通	明赤褐	25	
9	土師器 高坏	-	(7.8)	12.0	EGH	普通	明赤褐	60	
10	土師器 小型壺	(8.8)	9.5	-	EHJ	普通	にぶい橙	50	
11	土師器 小型壺	(6.0)	10.0	(4.0)	AEH	良好	にぶい橙	60	
12	土師器 鉢	(13.0)	(8.0)	-	EH	普通	明赤褐	45	
13	土師器 鉢	(14.6)	(8.0)	-	AEH	普通	橙	30	
14	土師器 甕	(18.5)	(10.1)	-	ADEH	普通	にぶい黄橙	70	
15	土師器 甕	19.9	31.0	7.1	ABEH	普通	にぶい橙	25	
16	土師器 甕	-	(12.0)	6.8	ABH	普通	橙	25	
17	石製模造品	長さ(3.5)cm 幅(1.5)cm 厚さ(0.35)cm 孔φ0.15cm					重さ2.7g		
18	砥石	長さ13.3cm 幅9.1cm 厚さ3.5cm					重さ213.53g		
19	砥石	長さ(10.9)cm 幅(10.0)cm 厚さ3.9cm					重さ431.98g		
20	砥石	長さ18.1cm 幅9.7cm 厚さ5.1cm					重さ1047.58g		
21	編物石	長さ10.9cm 幅5.9cm 厚さ3.1cm					重さ304.5g		
22	編物石	長さ12.4cm 幅4.9cm 厚さ3.1cm					重さ251.09g		
23	編物石	長さ17.0cm 幅5.2cm 厚さ2.2cm					重さ325.94g		
24	編物石	長さ13.1cm 幅4.4cm 厚さ3.2cm					重さ259.84g		

第162・168号住居跡、第177・178号上城、第39・40号溝跡と重複関係にあるが、本住居跡が最も古いと思われる。

平面形は、長方形で、規模は長軸3.10m、短軸2.58m、深さ0.10mである。主軸方向は、N-1°-Eを指す。

残存状態が悪く浅い事から、床面は殆ど残っていない可能性が高い。壁溝や柱穴は検出されなかった。

カマド或いは炉も検出されなかった。

遺物も出土しなかった。時期は不明である。

第164号住居跡 (第68図)

調査区の西側、Z-44・45グリッドに位置する。本住居跡は前述のとおり第162号住居跡の拡張前の住居跡である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.64m、短軸3.38m、深さ0.03mである。主軸方向は、N-44°-Eを指す。

カマドは拡張後の第162号住居跡と同じ位置にあ

ったと思われる。

第165号住居跡 (第75図)

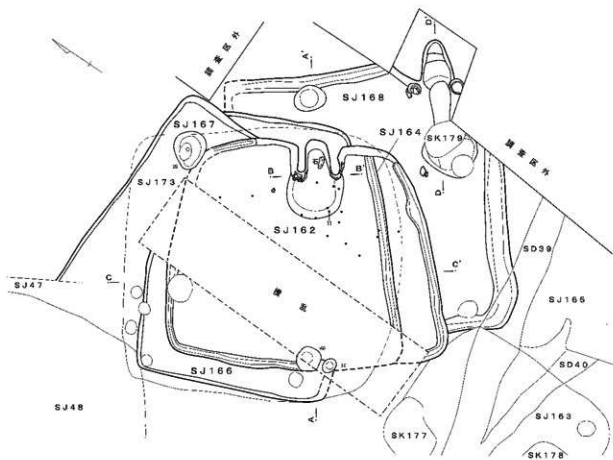
調査区の西側、Z-45・A A-45グリッドに位置する。東側の大半は調査区外に出る。第168号住居跡、第39・40号溝跡と重複し、本住居跡が最も古い。

平面形は方形ないしは長方形であろうが、調査区外にかかる部分が多量に、重複があり不明である。規模はカマドを軸とした東西方向で1.82m、南北方向は1.86m検出した。主軸方向は、N-106°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝はカマドの袖際から掘り込まれていた。柱穴は確認されなかった。

カマドは西壁に造られていた。燃焼部はあまり壁の外側には出ず、先端はピット状に掘り込まれていた。覆土は全体に焼上を含むが、4層が天井崩落土と考えられ、8層が燃焼面と思われる。袖は長さ60cm残存しており、燃焼部の幅は40cmである。

貯蔵穴はカマドの左側に検出された。直径90cmの



第166号住居断面A-A'

- 1 基礎土 砂利層・地上段下多量、①・②土中少量、地土約10%
- 2 埋戻土 ①砂利層、②砂利、ローム層、③土中少量、土中多量
- 3 基礎土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 4 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 5 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 6 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 7 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 8 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 9 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 10 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量

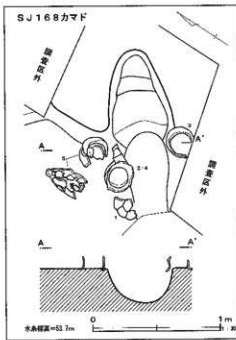
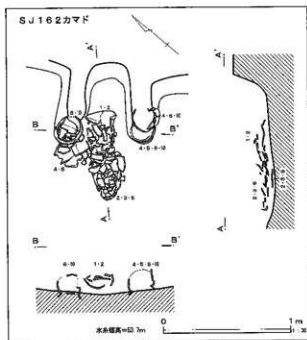
第162・164・166号住居断面C-C'

- 1 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 2 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 3 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 4 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 5 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 6 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 7 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 8 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 9 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量
- 10 埋戻土 ①砂利層、②砂利、③土中少量、土中多量

水平縮尺=1/50m



第68号 第162・164・166・167・168号住居跡



第99図 第162・168号住居跡遺物出土状況

円形で深さは53cmである。中から甕が2個体と高坏が転落したような状態で出土した。

遺物は貯蔵穴の他にカマド周辺から環類が出土し、調査区際からも纏まって出土した。6は第168号住居跡の遺物と思われる。

時期は5世紀末から6世紀初頭頃と考えられる。

第166号住居跡 (第68図)

調査区の西側、Z-44・45グリッドに位置する。第48・162・164・167・168号住居跡と重複関係にあり、第162・164号住居跡より古く、第167・168号住居跡より新しいが他の遺構との新旧関係は確認できていない。

平面形は長方形である。規模は長軸4.36m、短軸3.16mで深さは0.1mである。主軸方向は、N-66°-Eを指す。

床面は第162号住居跡によって殆どが壊されているため詳細は不明である。壁溝は検出された範囲ではなかった。柱穴も不明である。

カマドや貯蔵穴も検出されなかった。第162号住

居跡によって壊された可能性が考えられる。

遺物は、出土しなかった。時期は第162号住居跡より古く、第168号住居跡より新しい事から8世紀初頭頃と考えておきたい。

第167号住居跡 (第68図)

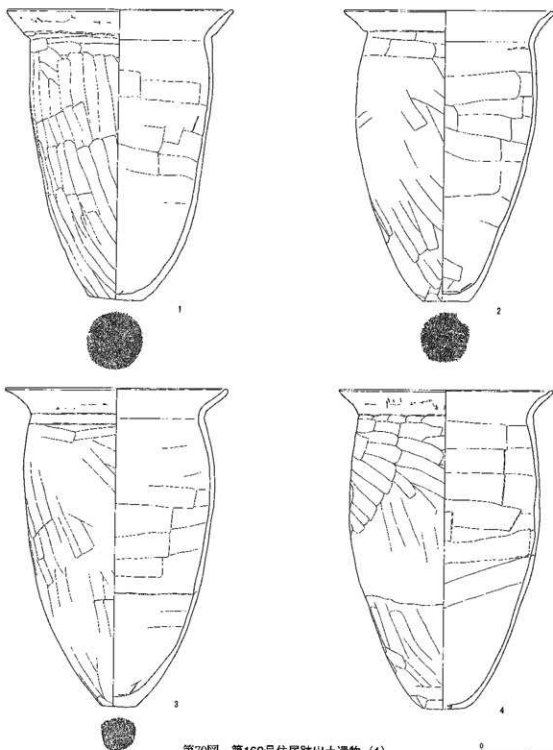
調査区の西側、Z-44・45グリッドに位置する。

第47・162・166・168号住居跡と重複関係にあり、第162・166号住居跡より古い、他の遺構との新旧関係は不明である。

平面形は重複が激しく不明であるが検出されたのは東西方向が3.66mで、南北方向は1.30mである。深さは4cmであった。方向は、N-90°-Eを指す。

床面はほぼ平坦であるが残存範囲が狭く詳細は不明である。北東の隅に60cmほどの楕円形の掘り込みが検出されたが住居跡に伴うものかどうかはわからない。壁溝は検出された範囲では見られなかった。カマドや柱穴などは検出されなかった。

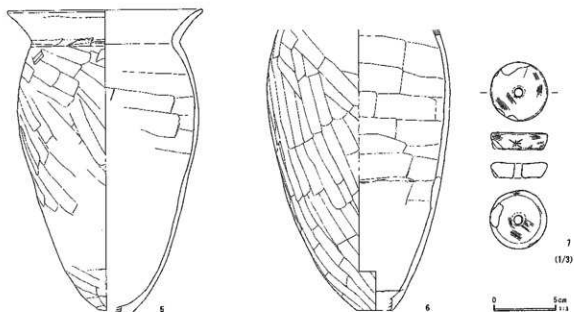
遺物は、出土していない。時期は不明である。



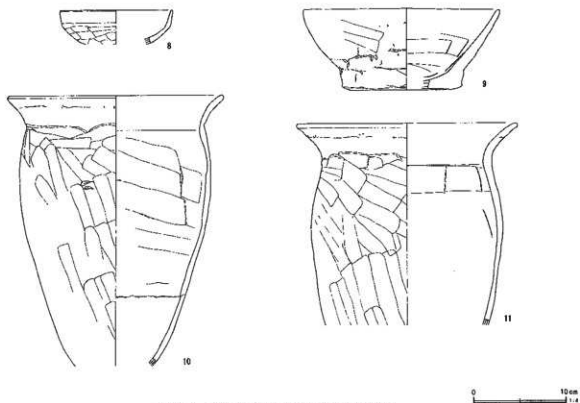
第70図 第162号住居跡出土遺物 (1)

第32表 第162号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	23.7	30.8	6.9	DEGH	普通	橙	80	
2	土師器 甕	22.0	30.7	5.0	EGH	普通	橙	95	カマド S J 162・164
3	土師器 甕	23.3	33.7	3.6	A E H	普通	橙	95	カマド
4	土師器 甕	(22.7)	33.7	(4.7)	E H	良好	にぶい黄橙	75	カマド
5	土師器 甕	(20.4)	33.1	(3.1)	A E H	普通	橙	50	カマド
6	土師器 甕	-	(29.5)	(3.9)	A D E H	普通	橙	80	カマド S J 162・164
7	石製紡錘車	長径4.5cm	短径3.8cm	厚さ1.3cm	孔径0.6cm	重さ46.2g		95	標高不明 滑石製



SJ 162・164



第71図 第162・164号住居跡出土遺物(2)

第33表 第162・164号住居跡出土遺物観察表

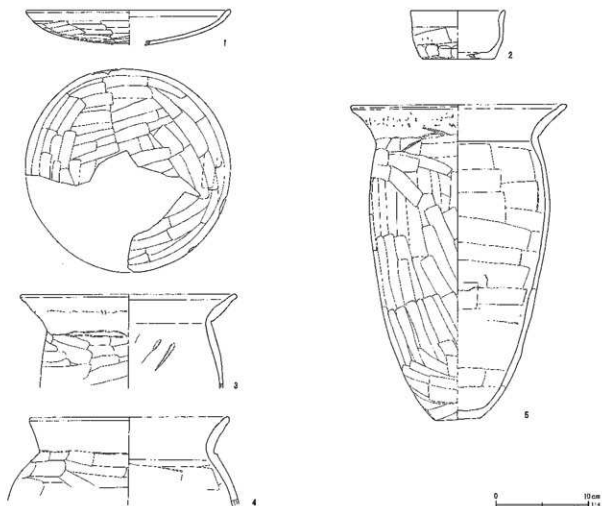
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	青(平%)	備考・出土位置
8	土師器 坏	(11.8)	(3.6)	-	DE	普通	にぶい、黄橙	25	
9	土師器 鉢	20.7	8.5	(12.8)	ECH	普通	明赤褐	75	S J 162・164
10	土師器 甕	22.6	(28.6)	-	A EGH	普通	橙	60	S J 162カマド
11	土師器 甕	23.0	(21.2)	-	DEH	普通	橙	70	S J 162



第72図 第164号住居跡出土遺物

第34表 第164号住居跡出土遺物観察表

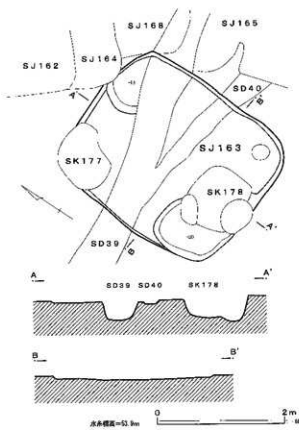
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考・出 土 位 置
1	瓶石	(11.0)	5.8	4.0	279.7 g	凝灰岩	陥面4面



第73図 第168号住居跡出土遺物

第35表 第168号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	飛灰率(%)	備考・出土位置
1	土師器 皿	21.1	3.8	-	E G H	普通	にぶい椀	60	カマド
2	土師器 小型鉢	(10.0)	5.1	(7.8)	D E G H	普通	にぶい椀	50	
3	土師器 甕	22.8	(19.9)	-	E G H	普通	椀	80	内外面摩耗する
4	土師器 甕	20.9	(9.6)	-	A D E H	普通	椀	70	
5	土師器 甕	22.4	33.4	4.7	A E H	普通	椀	70	



第74図 第163号住居跡

第168号住居跡 (第68図)

調査区の西側、Z・A A-45グリッドに位置する。第162・164・165・166・167号住居跡、第179号土壌、第39号溝跡と重複関係にある。第165号住居跡より新しく第162・164・166号住居跡より古い。他の遺構との新旧関係は不明である。

平面形は方形である。規模は、長軸が4.40mで、短軸は4.38m、深さは0.10mである。主軸方向は、N-46°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は全周していたものと思われる。東壁際に柱穴が検出されたが本住居跡の柱穴かどうか不明である。

カマドは東壁の南寄りに検出された。燃焼部は壁を少し外側に掘り込んでいる。6層下面が燃焼面で4・5層が主な天井崩落土と思われる。袖は掘りすぎたため短くなっているが、土師器甕が構築材として残っている事から70cmほどの長さがあったと考えられる。燃焼部の幅は約90cmである。

遺物は主に土師器甕が出土している。

時期は7世紀終わり頃である。

第169号住居跡 (第78図)

調査区の中央、Z-47・48グリッドに位置する。排水溝部分であるため幅2mの調査で、住居跡の殆どは調査区外である。第190号住居跡と重複関係にあり、これより新しい。

平面形は不明である。検出できたのは南北方向に2.04m、東西方向は1.52mである。深さは0.2mである。主軸方向は、N-31°-Wを指す。

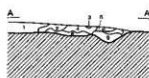
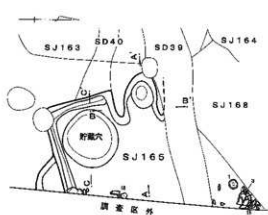
床面の詳細は不明である。壁溝は検出された範囲では掘り込まれており、おそらくきちんとした周溝が全周していると思われる。

カマドは東壁に造られていた。検出されたのは右袖の一部と煙道の先端部分だけであるため詳細はわからない。貯蔵穴や柱穴なども検出された範囲では確認できなかった。

遺物は出土しなかったため、時期も不明である。

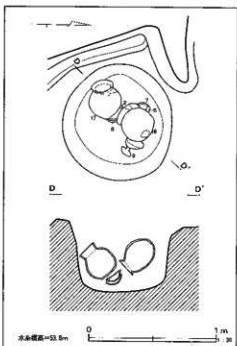
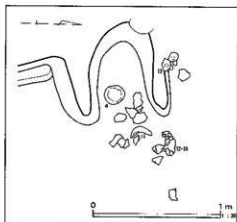
第170号住居跡 (第78図)

調査区の西側、A A-47グリッドに位置する。第190号住居跡と重複関係にあり、これより新しい。検出されたのはカマド先端と住居跡の東南角であり詳細は不明である。

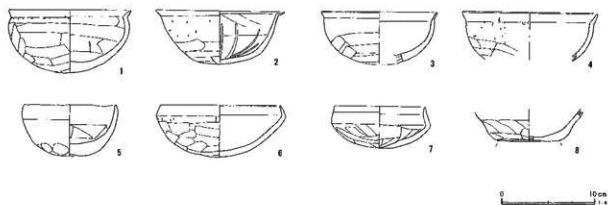


水深標高=53.5m 0 2m

- 第165号住居跡
- 1 埴輪土 灰土粒少量、口・A粒多量
 - 2 埴輪土 灰土粒多量、口・A粒少量
 - 3 灰土 粘質土
 - 4 埴輪土 粘土ブロック、灰土粒少量多量
 - 5 埴輪土 灰土粒少量、口・A粒
 - 6 埴輪土 埴土
 - 7 埴輪土 埴土、埴土粒、口・A粒少量
 - 8 埴輪土 埴土、ロームブロック少量
- 第165号住居跡断面図
- 1 埴輪土 口・A粒多量、埴土粒、灰土粒
 - 2 埴輪土 埴土粒、灰土粒
 - 3 粘土質埴土、ロームブロック
 - 4 埴輪土 口・A粒、埴土粒、灰土粒少量
 - 5 埴輪土 灰土粒少量

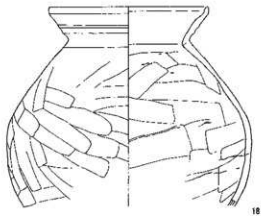
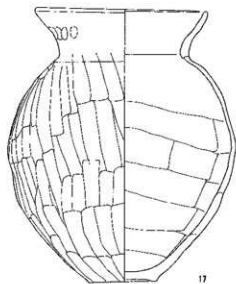
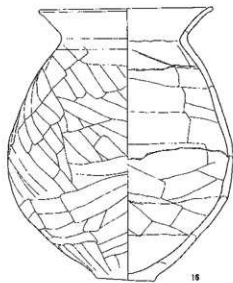
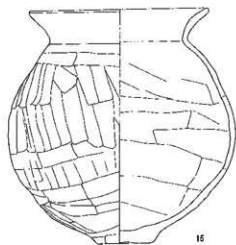
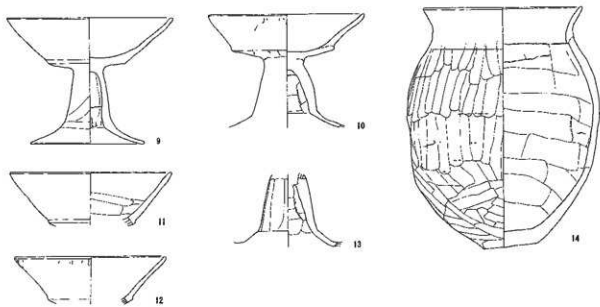


第75図 第165号住居跡・遺物出土状況



0 10cm

第76図 第165号住居跡出土遺物(1)



第77图 第165号住居跡出土遺物(2)

0 10 cm

第36表 第165号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	13.0	6.6	-	E H	普通	橙	100	
2	土師器 坏	13.6	5.7	-	E H	普通	橙	95	貯蔵穴 少し歪み楕円形
3	土師器 坏	(12.3)	(5.4)	-	A E H	普通	明赤褐	30	
4	土師器 坏	14.3	(5.1)	-	E H	普通	明赤褐	80	カマド
5	土師器 塊	9.7	5.4	-	E H	良好	明赤褐	100	貯蔵穴
6	土師器 坏	12.7	5.5	-	B E H	普通	明赤褐	100	貯蔵穴
7	土師器 坏	9.5	4.4	-	E H	普通	明赤褐	100	貯蔵穴
8	土師器 坏	-	(3.4)	(6.4)	A E H	普通	明赤褐	25	
9	土師器 高坏	17.5	13.5	12.0	B E H	普通	橙	100	貯蔵穴
10	土師器 高坏	16.4	(6.8)	-	E G H	普通	明赤褐	50	カマド
11	土師器 高坏	17.1	(5.7)	-	E G H	普通	明赤褐	60	カマド
12	土師器 高坏	(16.0)	(5.0)	-	D E H	普通	橙	25	カマド
13	土師器 高坏	-	(7.5)	-	E G H	良好	明赤褐	75	カマド
14	土師器 甕	(16.8)	25.5	5.7	A D E H	普通	橙	75	
15	土師器 甕	19.0	25.0	6.0	D E H	普通	にぶい黄橙	80	
16	土師器 甕	18.4	28.7	6.3	A B E H	良好	橙	100	貯蔵穴
17	土師器 甕	17.9	29.1	7.3	A E H I	普通	にぶい黄橙	100	貯蔵穴
18	土師器 甕	(17.0)	(12.1)	-	E H	普通	橙	60	

遺物は土師器甕の底部破片が検出されただけで図示できるものはない。

時期は、甕の底部破片から平安時代のものとしておきたい。

第171号住居跡 (第80区)

調査区の中央、A A-47・48グリッドに位置する。第170号住居跡などと同じく排水溝の調査であったため一部分の検出に留まった。第186・191号住居跡、第15号溝跡と重複し、第186号住居跡より古いと考えられるが第191号住居跡との新旧は不明である。

平面形は不明である。検出されたのは、カマドのある東壁で4.40mである。軸方向には0.8m検出されただけである。深さは0.08mでごく浅い。主軸方向は、N-92°-Eを指す。

床面の状況はあまりよくわからないが、ほぼ平坦で壁溝は検出されなかった。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は壁内に収まっているが煙道が壁外に0.5m延びている。袖は両袖とも確認できたが、長さ30cmの残存で状態は良くない。焚き口を含めた燃焼部の規模は長さ約1m、幅0.45mである。

貯蔵穴や柱穴は検出された範囲では確認できな

った。

遺物は、羽口が出土している。他の遺物は少量だったが混入が多い。3の壺口縁部は第191号住居跡出土品と同一個体と考えられるが、これも混入である。

時期は9-10世紀と考えておきたい。

第174号住居跡 (第82区)

調査区の西側、A A-44グリッドに位置する。第175・176・182・225号住居跡、第17号井戸跡と重複関係にあり、第175号住居跡と井戸跡より古いが他の遺構との新旧関係は不明である。

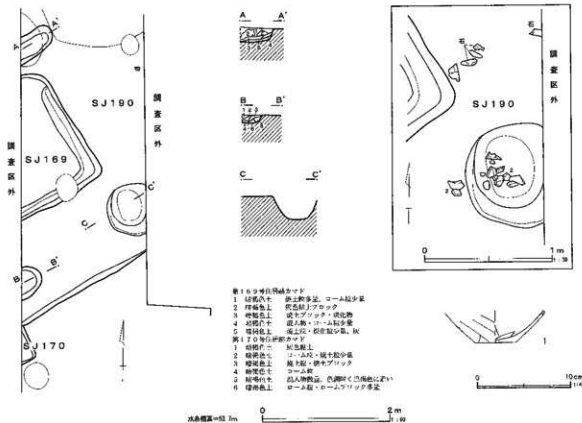
平面形は方形と推定され、規模は東西方向が5.5m、南北方向は5.4mで、深さは0.12mである。主軸方向は、N-48°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。ピットは住居跡の北隅に直径43cmの円形のピットが1基検出されただけである。

カマドや炉も検出されなかった。

遺物は、須恵器坏が出土しているが重複する第175号住居跡の遺物と考えられる。

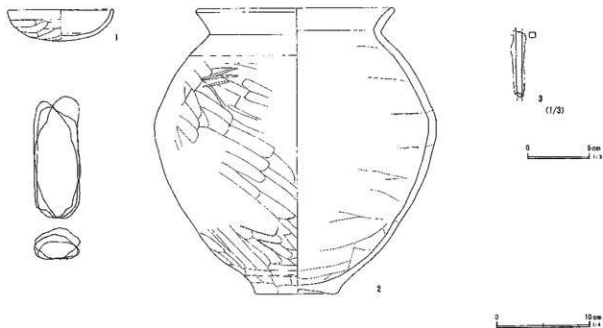
時期は6世紀である。



第78図 第169・170・190号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第37表 第170号住居跡出土遺物観察表

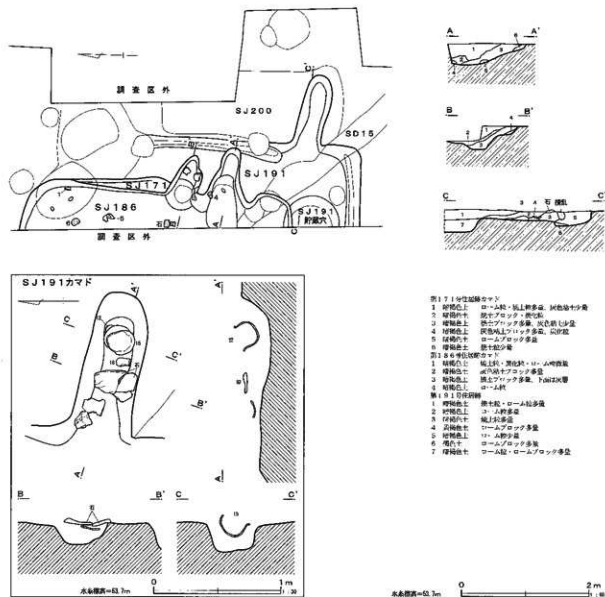
番号	器種	口径	器高	底径	胎上	構成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	-	(3.4)	(4.6)	A D E H	普通	緑	25	



第79図 第190号住居跡出土遺物

第38表 第190号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	11.0	3.3	-	A D E H	普通	明褐色	35	貯蔵穴 様状不明品
2	土師器 甕	(20.7)	30.3	8.8	A D E H J	普通	にぶい赤褐色	10	
3	鉄製品	残存長さ5.2cm	断面0.4×0.5cm	重さ7.4g					
4	礫物石	長さ12.3cm	幅5.0cm	厚さ3.3cm	重さ255.68g				
5	礫物石	長さ11.7cm	幅4.3cm	厚さ1.9cm	重さ164.62g				
6	礫物石	長さ12.9cm	幅4.8cm	厚さ2.6cm	重さ195.76g				



第80図 第171・186・191号住居跡・遺物出土状況

第175号住居跡 (第82図)

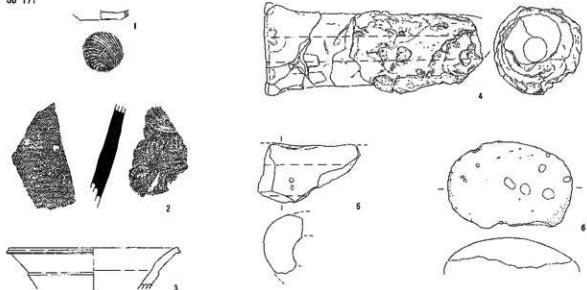
調査区の西側、AA・BB-44グリッドに位置する。第174・176号住居跡、第17号井戸跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.30m、短軸

3.24mである。深さは0.25mである。主軸方向は、N-78°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝は北隅にだけ検出された。ピットは北側に寄って確認されたが主柱穴と考えられるものはなかった。

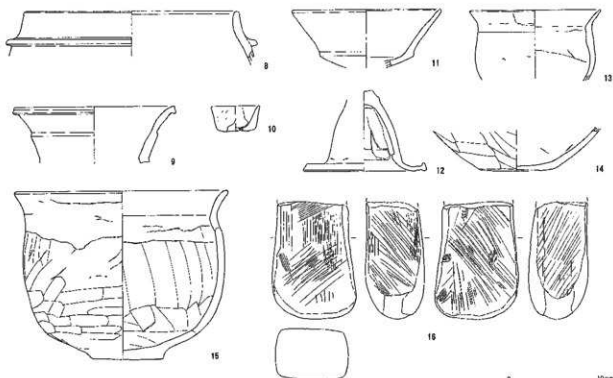
SJ 171



SJ 186



SJ 191



第81图 第171·186·191号住居跡出土遺物



第39表 第171号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 小皿	-	1.0	4.4	E H	普通	にぶい橙	90	S J 200 カマド土間に転用 厚さ8.2cm 重さ1210.0g 厚さ4.2cm 重さ203.1g
2	須恵器 甕	-	-	-	A E H J	普通	灰黄	-	
3	土師器 壺	(17.8)	(4.4)	-	A D E	普通	にぶい橙	20	
4	羽I	長さ23.1cm	幅9.0cm	-	E I	普通	橙	-	
5	羽II	長さ10.9cm	幅6.3cm	-	B E J	普通	にぶい橙	-	
6	不明石製品	最大長(13.2)cm	最大幅(9.2)cm	最大厚(3.2)cm	-	-	-	重さ389.0g	

第40表 第186号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
7	土師器 甕	(23.6)	(9.1)	-	A D E G J	普通	橙	15	カマド

第41表 第191号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置	
8	ロクロ 羽釜	(22.0)	(4.8)	-	A D E H	普通	にぶい黄橙	15	カマド S J 200	
9	土師器 壺	(16.8)	(5.8)	-	A D E	普通	にぶい橙	15		
10	手づくね上器	(5.0)	2.6 (4.0)	-	A D E	普通	橙	25		
11	土師器 高坪	(15.8)	(6.1)	-	A D E	普通	明赤褐	25		
12	土師器 高坪	-	(8.6)	13.1	A D E H	良好	明赤褐	70		
13	土師器 鉢	(13.8)	(7.3)	-	A D E G	普通	にぶい赤褐	20		
14	土師器 甕	-	4.3 (8.0)	-	A E G H	普通	にぶい橙	25		
15	土師器 甕	22.2	17.7	7.5	A D E G H	普通	にぶい赤褐	80		
16	砥石	長さ(12.5)cm	幅9.0cm	厚さ5.3cm	-	-	-	重さ1106.7g		カマド 全面に褐鉄付着

カマドや貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は、土師器の坏類が出土しているが、混入が多く、大部分は重複する第174号住居跡の遺物である可能性が高い。

時期は9世紀である。

第176号住居跡 (第84図)

調査区の西側、BB-44グリッドに位置する。第159・160・161・174・175・177号住居跡、第191号土壌と重複関係にある。新旧関係は、第159・160・175号住居跡より古く、第161・174・177号住居跡より新しい。第191号土壌との新旧は不明である。

平面形は方形である。規模はカマドの軸方向で6.00m、直行する方向は6.10mである。深さは0.29mである。主軸方向は、N-56°-Wを指す。

床面は平坦であるがカマドの左側は本住居跡より古い第174号住居跡の上に貼床をしていた。全体に壁に近い周辺部が遺構の重複が多いためか貼床状に汚れていた。壁溝は全周する。柱穴はP1-P3を検出したが、4番目の柱穴は貼床部分で見逃した可

能性がある。床下土壌は住居跡中央のP2寄り1に基検出した。直径1mの円形で、深さは33cmである。

カマドは北壁の中央に造られていた。燃焼部は壁内に収まる。火床面は床面よりやや低く、3層が天井崩落土と考えられ、4・5層はカマド掘り方の埋土である。カマド前の焚口部は殆ど張り出さず燃焼部の長さは約0.9mになる。袖は白色粘土を混ぜて造られていた。左袖が長さ70cm、右袖は95cmあった。

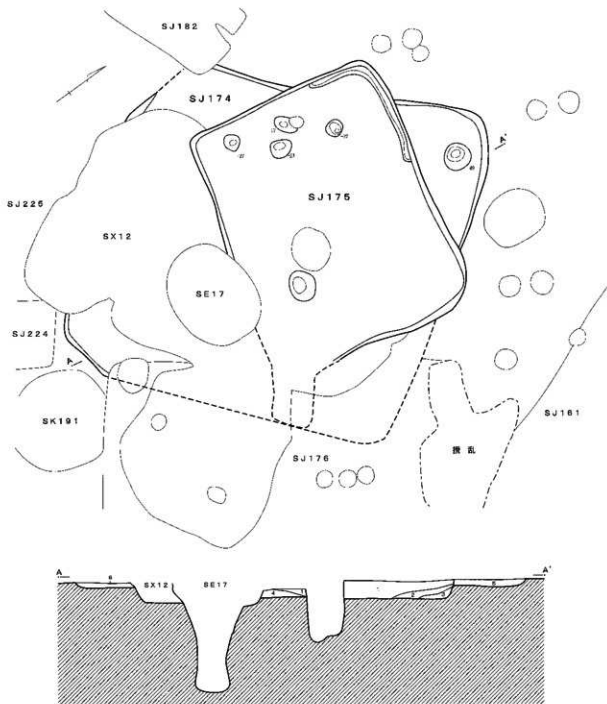
貯蔵穴はカマド右側に掘り込まれていた。隅丸長方形で、長軸90cm、短軸65cm、深さは38cmであった。

遺物は出上しなかった。時期は不明だが、重複する住居跡の時期から6世紀以降であることは確実で、住居跡の形態から6世紀に収まるものと思われる。

第177号住居跡 (第85図)

調査区の西側、BB-44グリッドに位置する。第160・176号住居跡、第42号溝跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は隅丸長方形と思われるが北側が重複で失われているため詳細は不明である。規模はカマドの



第175号住居跡

- 1 堀切土 白土層知事御説、堀上げ・ロム段
- 2 埋め土 堀上げ・B-A段
- 3 埋め土 堀上げ
- 4 埋め土 堀上げ・コンクリート・コンクリート多量

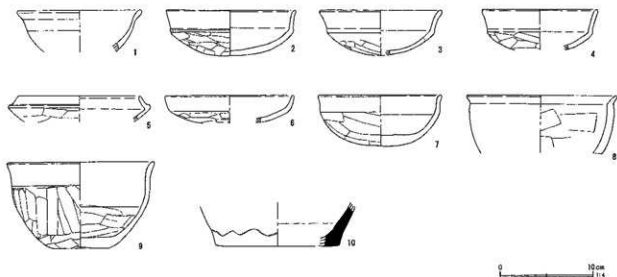
第174号住居跡

- 1 埋め土 堀上げ御説、ロム段・ロムブロック多量
- 2 埋め土 三谷瓦御説、赤土御説

水平縮尺=1/500



第82図 第174・175号住居跡



第83図 第175号住居跡出土遺物

第42表 第175号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.0)	(4.4)	-	E I	普通	灰	20	器面摩耗する
2	土師器 坏	13.5	4.8	-	E H I J	普通	明志褐	80	
3	土師器 坏	(12.8)	4.8	-	A E H	普通	概	25	
4	土師器 坏	(12.0)	(4.3)	-	A E H	普通	概	20	
5	土師器 坏	(12.8)	(2.7)	-	E H	普通	にぶい褐	20	やや器面摩耗する
6	土師器 坏	(13.4)	(2.9)	-	F H	普通	概	20	
7	土師器 坏	(12.9)	5.4	-	A G	普通	概	30	
8	土師器 坏	(15.8)	(6.1)	-	D E H	普通	にぶい概	25	
9	土師器 鉢	(15.6)	9.1	5.8	E H I	普通	にぶい黄概	50	
10	須恵器 葉	-	(4.6)	(13.0)	E I	普通	灰	20	

軸方向で4.40mであるが、他は3.40mの残存であった。深さは0.12mである。主軸方向は、N-82°-Eになる。

床面はほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。柱穴は2本検出されたが、他の2本は新しい住居跡によって失われていた。柱穴の直径は45cmほどで、深さはP1が53cm、P2が60cmであった。

カマドは東壁の中央と思われる位置に設置されていた。燃焼部は壁内に収まっている。火床面は床面よりやや低く、4層がそれぞれにあたると思われる。燃焼部の規模は奥行きが93cm、幅は55cmである。袖は左袖が75cm、右袖が60cm残存していた。

貯蔵穴はカマドの右脇の掘り込みかと思われるが第42号溝跡によって壊された可能性もある。

遺物は、床面及び床面から10cm程度浮いた状態で

出土した。分布は壁際とP2周辺及びカマド前面に縹まりがあるが、壁際に出土した物も浮いているものがあり、捨てられたものであろう。

時期は、6世紀である。

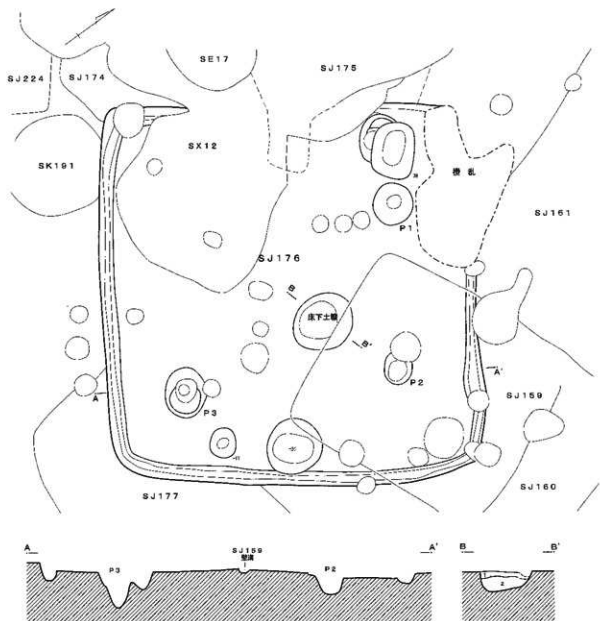
第178号住居跡 (第87図)

調査区の西側、Z-43グリッドに位置する。第24・181号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は方形である。規模は長軸3.94m、短軸3.80mで深さは0.05mと浅い。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面は、残存状況が浅いため殆ど削られており、貼床面が残っていただけである。壁溝はカマド対面の西壁部分に確認された。柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁の南隅に造られていた。燃焼部は床



第176号住居跡
 1 拉瑪色土 焼土層・ハート形土層
 2 褐色黄粘土 焼土ブロック・灰色粘土・ロームブロック多量

北東磁気=53 km



第84図 第176号住居跡

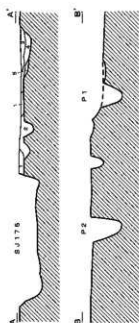
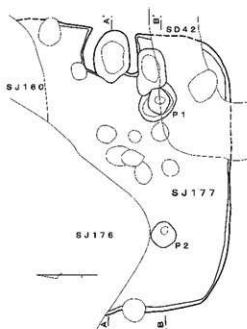
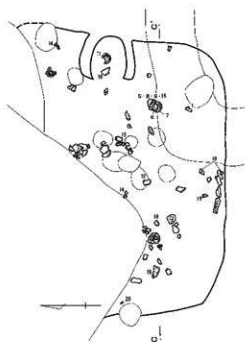
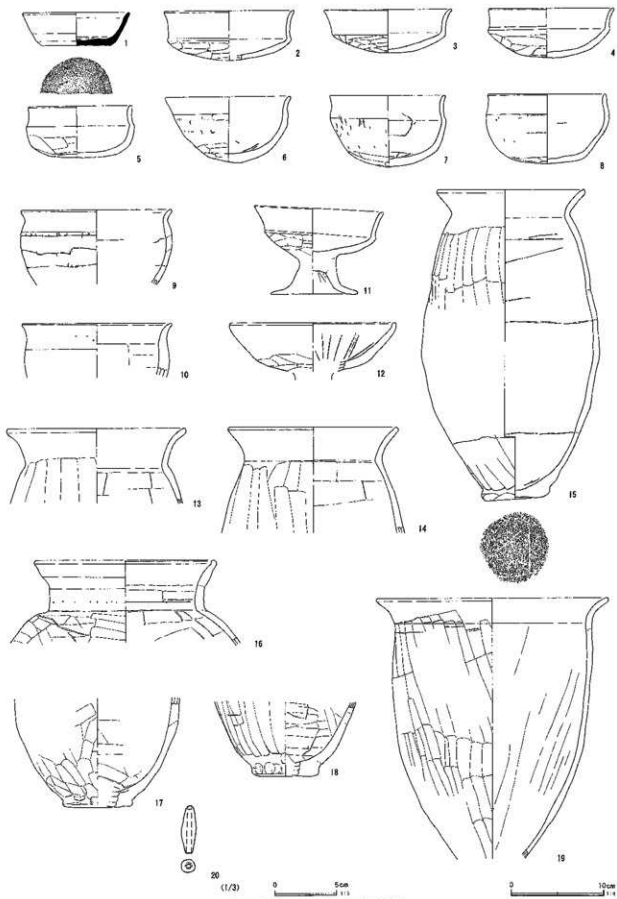


図177 居住区概観
 1 雑草層上、土中・仏舎利少量、ローム粒多数、ロームブロック
 2 雑草層上、土中・炭化粒・ローム粒少量、土器多数
 3 赤褐色土、土中・土下
 4 雑草層上、土中・土下、炭化粒・ローム粒多数
 5 雑草層上、雑草層上・土中・ローム粒・ロームブロック多数



水糸標高=51.8m 0 2m

第85図 第177号住居跡・遺物出土状況



第86图 第177号住居跡出土遺物

第43表 第177号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.2)	3.5	(7.2)	E I	普通	灰	25	
2	土師器 坏	(13.8)	(5.2)	-	E H	普通	にぶい橙	25	P-1
3	土師器 坏	13.5	4.6	-	A E G	普通	橙	45	カマド カマド支脚に使用か?
4	土師器 坏	12.2	5.2	-	A E H	普通	橙	50	P-2
5	土師器 坏	(10.9)	5.4	-	A E H	普通	にぶい橙	60	外面摩耗
6	土師器 埴	13.1	7.1	-	A E H	普通	灰褐色	70	
7	土師器 埴	12.2	7.7	-	A E G H	普通	にぶい橙	90	
8	土師器 埴	12.3	7.3	-	A E H J	普通	にぶい黄橙	90	
9	土師器 鉢	(15.8)	(7.9)	-	A E G H	普通	にぶい橙	30	
10	土師器 鉢	(15.8)	(5.7)	-	A E H J	普通	にぶい橙	20	SJ159・160・176・177
11	土師器 高坏	13.6	9.3	9.2	A E G H	普通	橙	95	カマド
12	土師器 高坏	(17.4)	(5.1)	-	A E G H	普通	にぶい橙	25	
13	土師器 甕	(18.8)	(7.9)	-	A B E H I J	不良	橙	25	
14	土師器 甕	(17.6)	(11.2)	-	A B D E H I J	普通	橙	25	
15	土師器 甕	(15.5)	32.8	6.0	A E H J	普通	橙	40	
16	土師器 甕	19.0	(9.0)	-	A B E H J	普通	橙	80	
17	土師器 甕	-	(12.4)	(7.4)	A E J	普通	にぶい黄橙	20	P-2
18	土師器 甕	-	(7.8)	(6.8)	A B E H J	普通	にぶい橙	25	P-1・2
19	土師器 甕	24.6	(27.5)	-	A B E H I J	良好	橙	40	P-2・3
20	土師	長さ3.7cm	直径1.2cm	-	A E H	普通	明赤褐	95	孔径0.3cm 重さ4.0g

面より僅かに低く、幅20cmの煙道が1mほど延びる。煙道の壁は炎の引きが強かった事を窺わせるように、先端まで焼土化している。袖は左袖が75cmの長さがあるが、右袖は不明瞭で握りすぎてしまった。袖の先端には構築材として円筒埴輪が用いられていた。

カマドの反対側の南西隅に掘り込まれていた円形の掘り込みが貯蔵穴と思われる。直径約60cmで深さは50cmである。中からは出土したものはない。

遺物は、カマドに使用されていた埴輪の他には殆どなく、僅かに坏底部が出土した。

時期は住居跡の形態と坏の時期をとって9世紀と考える。

第179号住居跡 (第89図)

調査区の西側、AA-43グリッドに位置する。第39・40号汚跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。

平面形は、方形である。規模は、長軸4.00m、短軸3.74mで深さは0.15mである。主軸方向は、N-87°-Eを指す。

床面はほぼ平坦であるが、中央部が踏みしめられて固く締まっていた。壁溝はカマド対面の両隅が切

れていた。柱穴は四隅の対角線上に検出された。大きさにややばらつきがあり、深さは20~30cmであった。

カマドは東壁の中央に設置されていた。燃焼部は壁内に収まり、火床面は床面とほぼ同じ高さである。

上層断面の5層が天井崩落土で、6層が火床面と考えられる。袖は白色粘土で造られており、左袖は60cm、右袖は約40cm残存していた。燃焼部の奥行きは約50cm、幅は40cmである。

貯蔵穴はカマド右側の住居跡の隅に掘り込まれていた。85cm×70cmの楕円形で、深さは52cmである。中から遺物は出土しなかった。

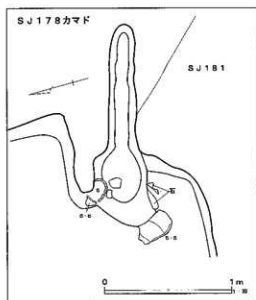
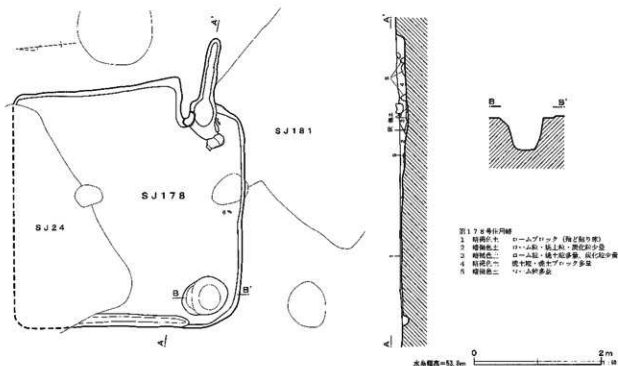
遺物は、カマドとその右隣の床面から甕が、住居跡中央のP4寄りに甕が出土した。住居跡中央から出土したものは床面から約15cm浮いていた。

時期は6世紀前半である。

第180号住居跡 (第91図)

調査区の西側、Z-44グリッドに位置する。第27・46号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

平面形は長方形である。規模は長軸が3.40m、短



第87図 第178号住居跡・遺物出土状況

軸が3.00mで、深さは0.18mである。主軸方向は、 $N-90^{\circ}-W$ を指す。

床面は北側に多少下がっているように見えるが、これは第46号住居跡によって北半分が削られているため本来は平坦であったと思われる。壁溝は東角の脇が約80cm切れている。柱穴は1基検出したが、他は確認できなかった。

カマドは西壁の中央に設置されていた。燃焼部は壁内に入っているが、煙道は一段高い位置に短く張り出している。煙道先端は煙出しを上から掘り込んだピット状を呈する。覆土は2層が天井崩落上で3層上面が火床面であったと考えられる。袖は両袖とも長さ60cmで、燃焼部の奥行きは62cm、幅は約40cmである。カマド内からは上師器甕と坏が出土した。甕のうち1個はカマドに掛けられた状態だったと思われる。

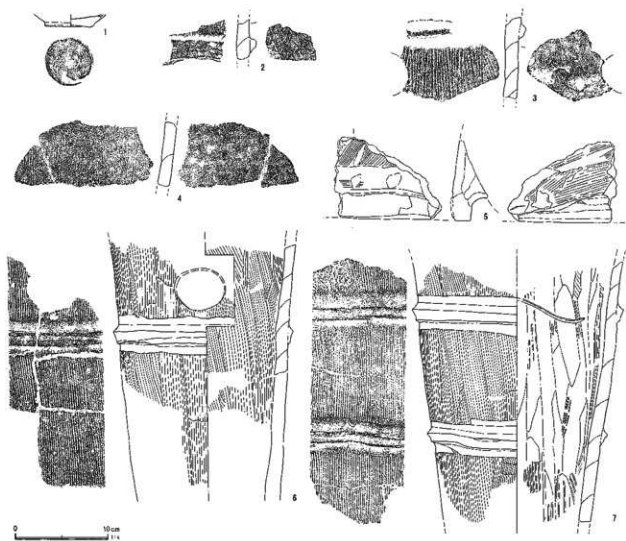
貯蔵穴はカマドの左側に検出された。直径60cmの円形で、深さは55cmである。貯蔵穴からは遺物は出土しなかった。

遺物は、前述のカマド内から出土した他、カマド左脇に甕、住居跡中央付近から甕等が検出された。いずれも床面或いは床面から僅かに浮いている程度であった。

時期は6世紀と考えておきたい。

第181号住居跡 (第93図)

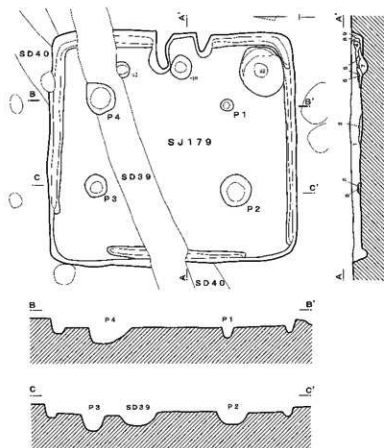
調査区の西側、Z-43・AA-43グリッドに位置する。第178号住居跡と重複し、これより古い。



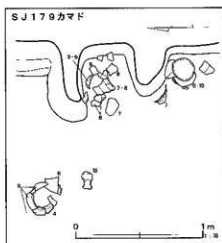
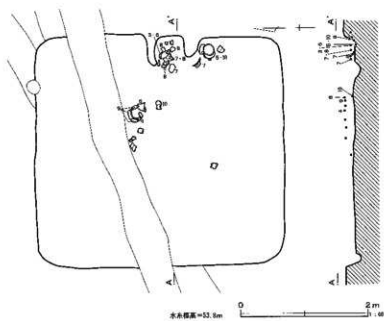
第88図 第178号住居跡出土遺物

第44表 第178号住居跡出土遺物観察表

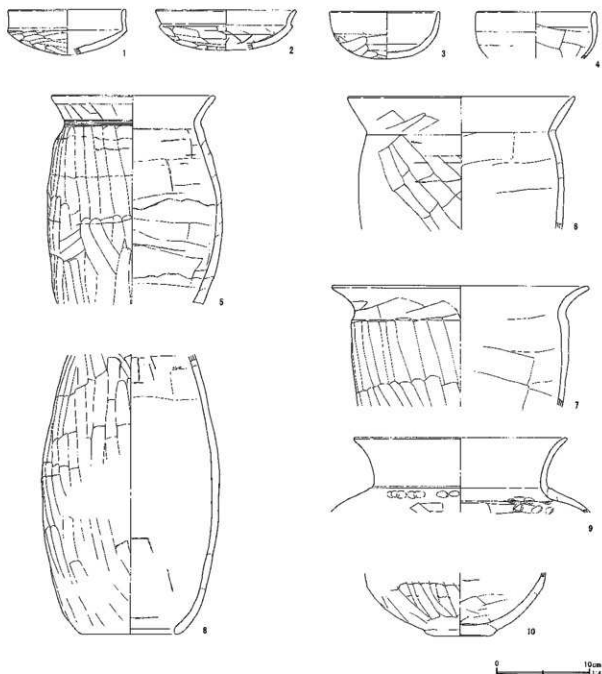
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	口コ 坏	-	(1.3)	5.2	ADE	普通	にぶい模	80	
2	円筒埴輪	-	(4.3)	-	ABGI	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ 内面ナデ
3	円筒埴輪	-	(8.6)	-	ABDGI	普通	明赤褐	破片	外面タテハケ 内面ナデ
4	円筒埴輪	-	(6.8)	-	ADEH	普通	橙	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
5	形象埴輪	長さ(8.5)	幅(11.5)	-	ABDEJ	良好	橙	破片	馬形埴輪碎泥 胎土に軽石を含む
6	円筒埴輪	-	(25.8)	-	ADFHJ	良好	橙	70	カマド 外面タテハケ 内面ナメハケ
7	円筒埴輪	-	(27.7)	-	ABDEH	良好	明赤褐	30	カマド 外面タテハケ 内面ナデ・ヘラ付き



- 第179号住居跡
- 1 礎石地上 コーシ多量、中位の礎石
 - 2 礎石層上 塩化カルシウム・石灰
 - 3 砂礫層上 ハームゴッチ
 - 4 礎石地上 焼土層、炭化層少量
 - 5 礎石層上 焼土・灰白土多量 (中位の灰白土)
 - 6 砂礫層上 焼土層、炭化層・灰
 - 7 礎石地上 焼土
 - 8 礎石層上 コーシ多量
 - 9 砂礫層上 ハームゴッチ



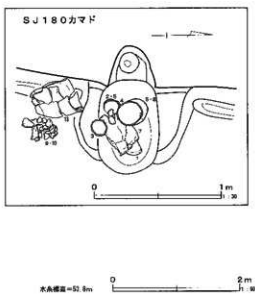
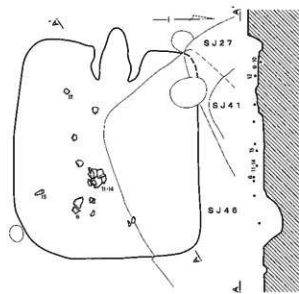
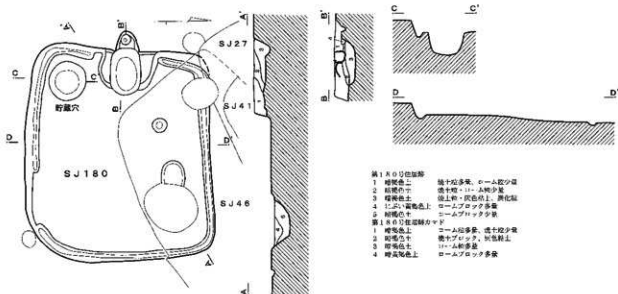
第89図 第179号住居跡・遺物出土状況



第90図 第179号住居跡出土遺物

第45表 第179号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.4)	(4.7)	-	ADE	普通	明赤褐	25	S J 178
2	土師器 坏	(14.6)	(4.1)	-	BDHJ	普通	にぶい橙	25	
3	土師器 坏	(11.6)	5.0	-	EH	普通	にぶい橙	60	
4	土師器 瓊	(12.6)	(4.9)	-	DEH	普通	にぶい黄橙	20	
5	土師器 甕	17.0	(22.0)	-	ABEHJ	普通	橙	90	
6	土師器 甕	(23.8)	(14.1)	-	AEHJ	普通	にぶい橙	20	
7	土師器 甕	(27.0)	(13.0)	-	EHJ	普通	橙	20	
8	土師器 甌	-	(29.5)	(10.0)	EHJ	普通	橙	25	
9	土師器 甕	(22.4)	(8.0)	-	ADEH	普通	橙	25	
10	土師器 甕	-	(6.7)	7.2	ADEH	普通	にぶい褐	60	



第91図 第180号住居跡・遺物出土状況

平面形は方形であるが西辺が東辺より長く歪んでいる。規模は長軸3.30m、短軸3.26m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-44°-Wを指す。

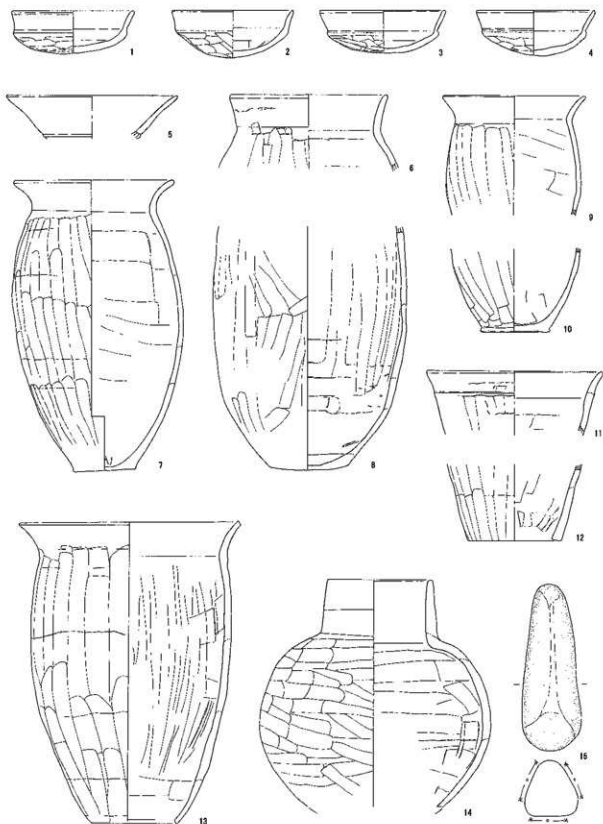
床面は平坦だが中央部が踏み固められやや高くなっていた。壁溝は南角に見られただけだった。ピットは住居跡中央やや南寄りに1基検出された。直径40cmで深さは26cmである。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は壁内に取まり、煙道が壁外に延びるが先端は第178号住居跡によって失われている。覆土には明確

な焼土層などは見られなかったが、2層はカマド掘り方の埋土と考えられる事から、火床面は床面とほぼ同じ高さであったと考えられる。袖は長さ65cmで、燃焼部の奥行きは75cm、幅は40cmである。

貯蔵穴はカマドの右側にあるものが該当すると思われる。直径45cmの円形で、上端は片方が広がっている。深さは31cmである。

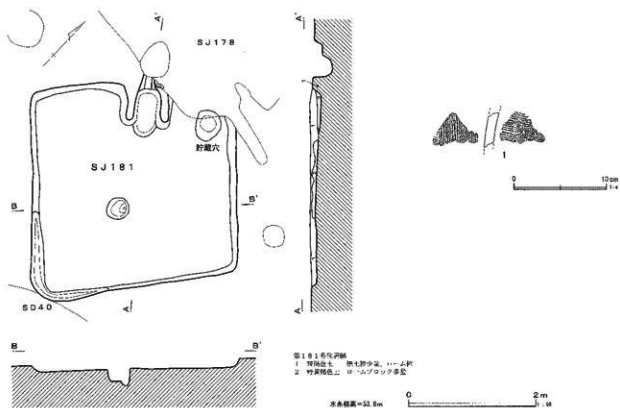
遺物は、輪軸破片が1点出土したが、第178号住居跡のカマドに使われていたものが調査時に混入したと思われる。これ以外には時期を推定できる



第92图 第180号住居跡出土遺物

第46表 第180号住居跡出土遺物観察表

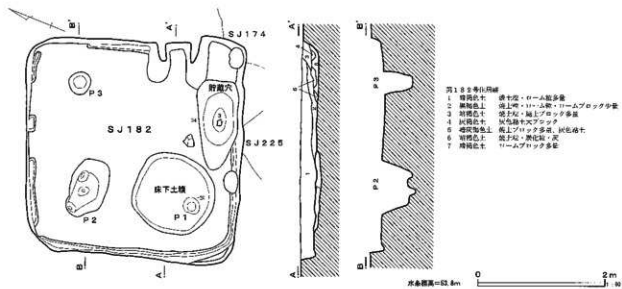
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	12.8	4.5	-	ADEHIJ	普通	橙	80	カマド
2	土師器 坏	12.7	5.1	-	ABDEHIJ	普通	橙	95	カマド
3	土師器 坏	13.2	4.5	-	ADEKH	普通	橙	25	カマド
4	土師器 坏	12.4	4.8	-	ADEH	良好	にぶい褐	80	
5	土師器 高坏	(18.0)	(4.5)	-	AEG	普通	橙	25	カマド
6	土師器 甕	(16.6)	(7.7)	-	ABDEIJ	普通	にぶい橙	20	
7	土師器 甕	(16.6)	30.8	6.6	ADEHJ	普通	にぶい黄橙	90	カマド
8	土師器 甕	-	(25.6)	8.2	AEGHJ	普通	橙	80	カマド
9	土師器 小型甕	(15.0)	(7.6)	-	ABDEKHJ	普通	にぶい褐	60	
10	土師器 鉢	-	(8.8)	7.3	ABEHIJ	普通	にぶい黄橙	40	
11	土師器 瓶	(18.6)	(6.7)	-	ADEHJ	普通	橙	15	
12	土師器 瓶	-	(8.0)	(5.0)	ABDGHJ	普通	淡黄	20	
13	土師器 瓶	23.0	32.0	9.0	AEGHJ	普通	橙	95	
14	土師器 壺	-	(23.9)	-	AEGH	普通	橙	50	
15	磁石	最大長17.6cm 最大幅6.3cm 最大厚5.9cm 重さ856.7g							



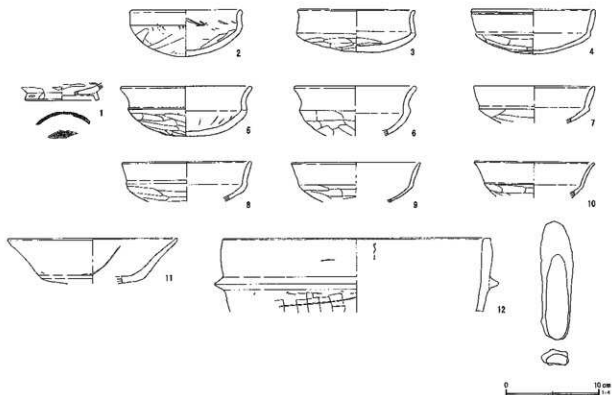
第93図 第181号住居跡・出土遺物

第47表 第181号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	円筒埴輪	-	(3.6)	-	ADEHJ	普通	明赤褐	破片	外面タデハケ 内面ナメヨコハケ



- 第182号住居の地層
- 1 層褐色土 焼土層・ローム層多量
 - 2 黒褐色土 焼土層・ローム層・ロームブロック多量
 - 3 新褐色土 焼土層・焼土ブロック多量
 - 4 灰褐色土 灰土層・焼土ブロック多量
 - 5 暗褐色土 焼土層・ローム層多量・灰土層
 - 6 新褐色土 焼土層・灰土層・灰
 - 7 層褐色土 ロームブロック多量



第94図 第182号住居跡・出土遺物

ような遺物はない。

時期は不明であるが、本住居跡と重複する第178号住居跡は9世紀以降と考えられる。

第182号住居跡 (第94図)

調査区の西側、AA-43・BB-43グリッドに位

置する。第174・225号住居跡と僅かに重複しているが、新旧関係はわからなかった。

平面形は方形で、規模は長軸3.46m、短軸は3.40m、深さは0.25mであった。主軸方向は、N-67°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は南壁から西壁にかけては通

第48表 第182号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰釉 皿	-	(1.8)	(8.0)	E	普通	淡黄	20	
2	土師器 坏	11.7	5.0	-	A E G H	普通	橙	95	貯蔵穴
3	土師器 坏	(12.2)	4.5	-	A E G H	普通	橙	45	
4	土師器 坏	(13.0)	4.7	-	A D E H J	普通	橙	30	
5	土師器 坏	13.7	5.2	-	A D E G H	普通	橙	80	
6	土師器 坏	(12.6)	(5.2)	-	A E H	普通	橙	25	
7	土師器 坏	(12.8)	(3.9)	-	E H	普通	橙	20	
8	土師器 坏	(13.6)	(4.2)	-	A D E H	普通	橙	20	
9	土師器 坏	(13.6)	(4.2)	-	A D E	普通	橙	20	
10	土師器 坏	(12.6)	(3.8)	-	A D E	普通	橙	50	
11	土師器 高坏	(18.0)	(4.8)	-	D E H	普通	明赤褐色	15	
12	土師器 羽釜	(28.6)	(7.8)	-	B D E G H J	普通	にぶい黄橙	15	P-1
13	編物石	長さ12.5cm 幅3.5cm 厚さ1.6cm 重さ89.3g							
14	編物石	長さ9.0cm 幅2.5cm 厚さ1.2cm 重さ40.4g							

常のとおりであるが、北壁から東壁にかけては断続的である。柱穴は3基確認したがカマド前の1基が確認されなかった。柱穴の規模はP3の場合直径30cm、深さは40cmである。床下土壌がカマド対面に検出された。円形で直径1.35m、深さ8cmである。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部は壁の内側に収まり、煙道は検出されていない。土層は4・5層が天井崩落土で6層が燃焼面と考えられる。袖は上端がかなり崩れているが、左袖の長さが60cm、右袖が75cmである。燃焼部の奥行きは約70cm、幅は約35cmである。

貯蔵穴はカマド右側に検出された。長さ1.43m、幅0.7mの長方形を崩したような形態で、深さは0.34mである。貯蔵穴にしては大形であるが、位置や形状から貯蔵穴と判断した。中からは土師器坏片が出土した。

遺物は坏が主なもの他に高坏などが出土した。1の灰釉陶器や12の羽釜は混入である。

時期は6世紀である。

第183号住居跡 (第95団)

調査区の西側、AA-42・43・BB-42グリッドに位置する。第189・197号住居跡、第40号溝跡と重複関係にあり、第40号溝跡より古く他の住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.06m、短軸2.64mである。深さは0.12mである。主軸方向は、N-77°-Eを指す。

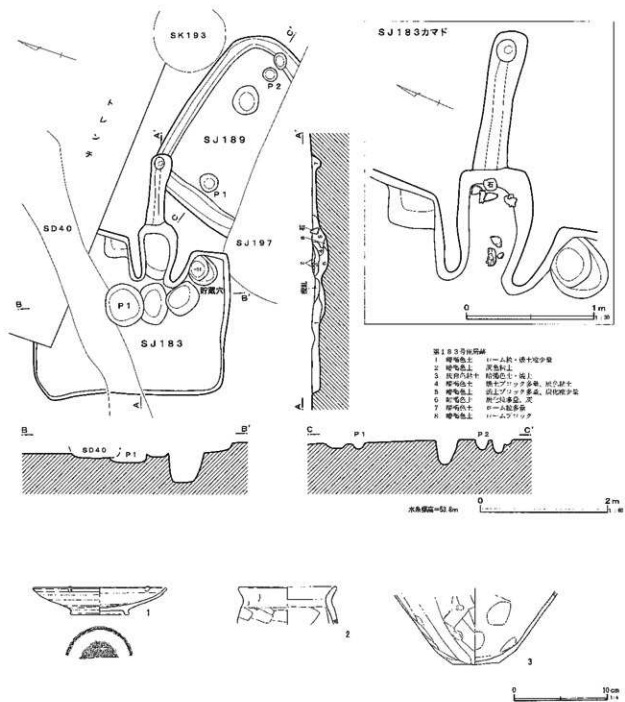
覆土は焼土粒子を含む暗褐色土である。床面は平坦で、カマド前面から対面の壁下にかけて非常に硬く締まっていた。壁溝及び柱穴は確認されなかった。カマドの前に土壌状の掘り込みが3基連続して確認された。2基は浅く皿状であるが、1基は深さ50cmである。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。壁を少し掘り込んでおり、煙道が1.14m延びる。煙道の先端は煙出しを上から掘り込んだピット状の窪みが見られる。燃焼部の掘り方は床面より約15cm掘り下げているが、覆土の6層が灰層である事から、それを埋め戻すことなく火床面としたようである。2層～4層が天井崩落土と考えられる。袖は両袖とも残存していたが、右袖は内側に湾曲しているように見えた。左袖は長さ62cm、右袖は60cmである。燃焼部の奥行きは90cm、幅は60cmである。

貯蔵穴はカマドの右脇に掘り込まれていた。直径40cmの円形で一方に浅い段を持つ。深さは34cmである。貯蔵穴内からの遺物の出土はなかった。

遺物は、カマドから僅かに出土した。

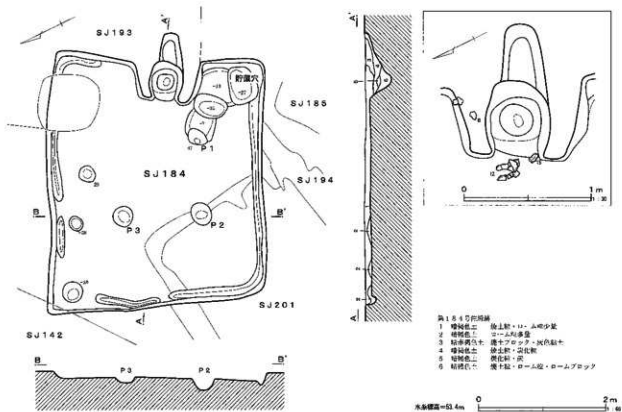
時期は灰釉陶器の時期をとって9世紀後半としておく。



第95図 第183・189号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第49表 第183号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	発浮率(%)	備考・出土位置
1	灰釉 皿	(14.0)	2.9	(6.0)	F	良好	灰白	25	輪花付
2	土師器 小型鉢	(10.0)	(4.9)	-	DE II	普通	灰白 にふい橙	25	
3	土師器 甕	-	(7.4)	(4.8)	A DE H	普通	にふい橙	60	



第96図 第184号住居跡・遺物出土状況

第184号住居跡 (第96図)

調査区の西側、W-48グリッドに位置する。第142・193・194・201号住居跡と重複関係にある。第142・194号住居跡より新しい。第193号住居跡は縄文時代の住居跡である。

平面形は長方形である。規模は長軸4.16m、短軸3.45mで、深さは0.08mである。主軸方向は、N-63°-Wを指す。

床面は平坦で、カマドの前面とカマド対面の壁際が硬化していた。壁溝は北西隅部分が断続的に切れる。柱穴は中央から3基検出されたが1基は検出できなかった。他に北壁寄りに3基検出されたが、本住居跡に伴うものか不明である。

カマドは東壁のやや右寄りに設置されていた。燃焼部は壁内にあり、煙道は0.45m外に延びる。煙道の先端は煙出しを上から掘り込んだビット状の窪みが見られる。燃焼部の掘り方は床面より約15cm掘り下げているが、覆土の6層が灰層である事から、そ

れを埋め戻すことなく火床面としたようである。2層~4層が天井崩落土と考えられる。袖は両袖とも残存していたが、右袖は内側に湾曲しているように見えた。左袖は長さ62cm、右袖は60cmである。燃焼部の奥行きは90cm、幅は60cmである。

貯蔵穴はカマドの右側で住居跡の内に掘り込まれていた。長軸60cm、短軸35cmの隅丸長方形で深さは25cmである。

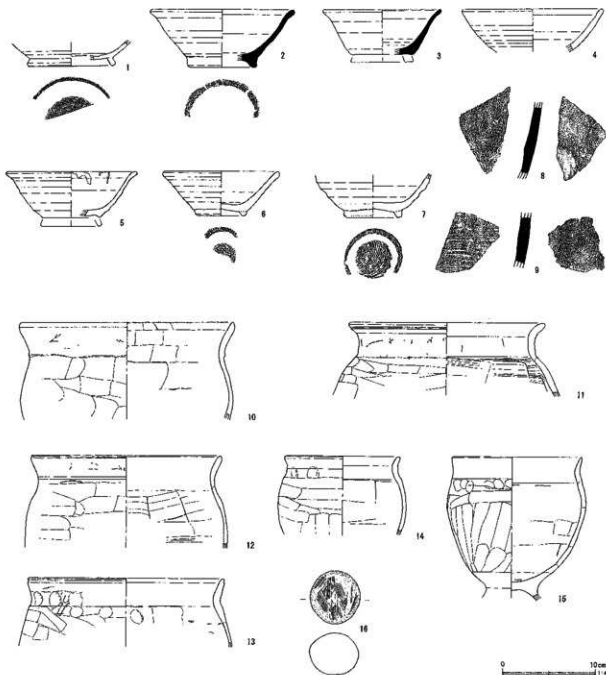
遺物は、覆土中及びカマドの前から高台環や甕が出土した。

時期は9世紀後半である。

第185号住居跡 (第98図)

調査区の西側、W-48・X-48グリッドに位置する。北西の角を掘乱によって壊されているが、他の遺構との重複はない。

平面形は長方形である。規模は長軸4.16m、短軸3.28mである。深さは0.15mである。主軸方向は、



第97図 第184号住居跡出土遺物

N-127°-Wを指す。

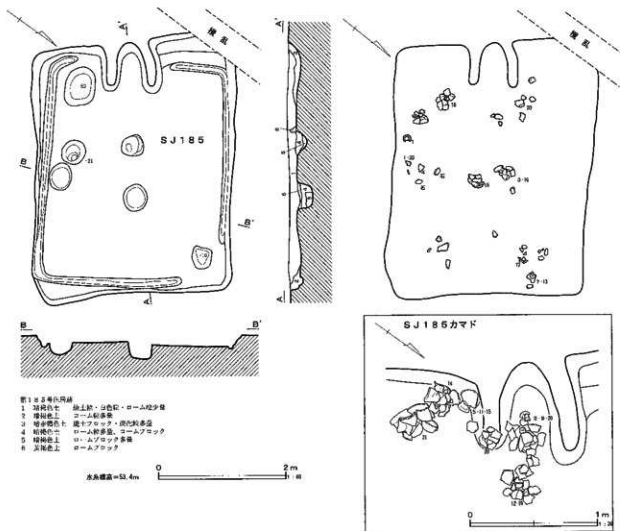
床面は平坦で、住居跡中央及びカマド右側の北壁沿いが固く締まっていた。壁溝は北の隅が切れているが他は廻っている。住居跡の外形が周溝より外側に張り出している部分があるが、掘り過ぎた可能性がある。ピットは5基確認された。中央にカマドの軸線に沿って2基並んでいるのが柱穴かとも考えら

れるが、ピットの覆土は埋め戻されたような形跡があり確信が持てない。

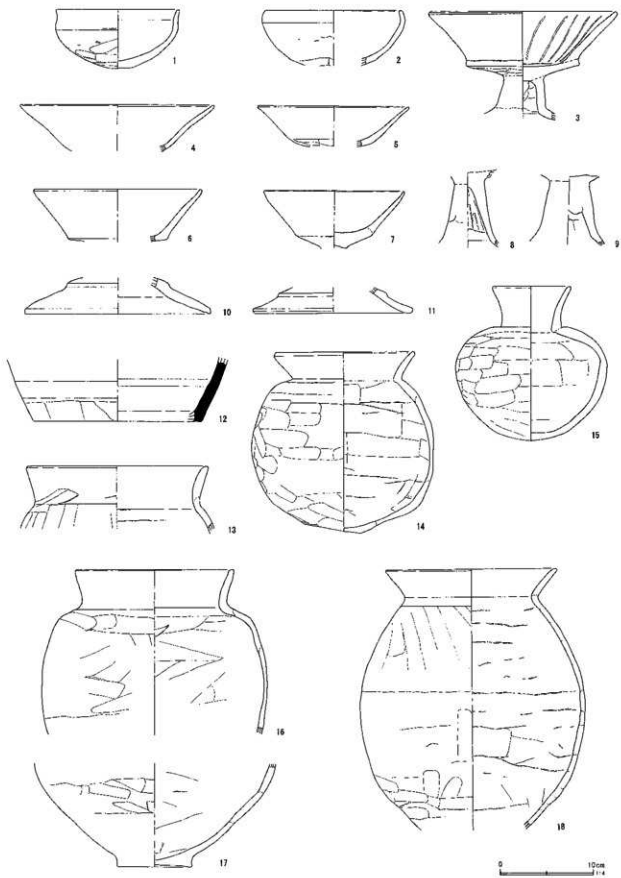
カマドは西壁やや左寄りに設置されていた。燃焼部は壁内に収まり、煙道は検出されていない。火床面は床面より僅かに低い程度である。袖は白色粘土で造られており、左袖が長さ50cm、右が80cm残存していた。燃焼部の奥行きは80cm、幅は45cmである。

第50表 第184号住居跡出土遺物観察表

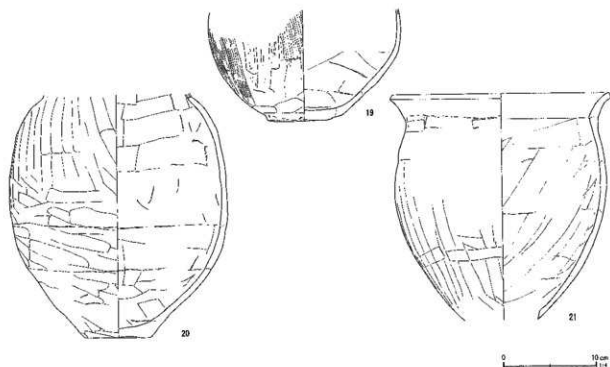
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰種 埴	-	(2.5)	(8.8)	E	良好	灰白	20	S J 194
2	須恵器 高台付埴	(15.0)	6.1	(6.8)	ADE	普通	灰白	50	
3	須恵器 高台付埴	(12.4)	(4.7)	-	A E I	普通	灰	20	
4	ロクロ 坏	(14.4)	(4.5)	-	E H J	普通	にぶい橙	15	
5	ロクロ 高台付埴	(13.7)	(4.9)	-	D E H	普通	橙	55	
6	ロクロ 高台付埴	(12.2)	(4.7)	(4.8)	A B E G H I J	普通	橙	30	
7	ロクロ 高台埴	-	(4.5)	(5.2)	B E H J	普通	浅黄	40	
8	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	灰	-	
9	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	灰	-	
10	土師器 甕	(22.6)	(10.2)	-	A D E H	普通	橙	15	
11	土師器 甕	(20.8)	(7.6)	-	A D E G H	普通	にぶい橙	30	
12	土師器 甕	(20.0)	(9.7)	-	A D E G H	普通	明赤褐	15	
13	土師器 甕	(20.6)	(7.2)	-	A D E H	普通	にぶい褐	25	
14	土師器 台付甕	(12.0)	(8.2)	-	A E G H	普通	にぶい赤褐	15	
15	土師器 台付甕	(13.7)	(14.8)	-	A D E H	普通	にぶい褐	60	
16	磨石	長さ5.6cm 幅5.3cm 厚さ4.4cm 重さ186.4g							



第98図 第185号住居跡・遺物出土状況



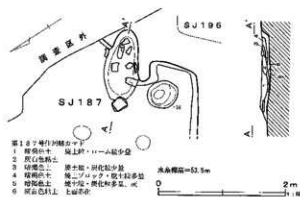
第99图 第185号住居跡出土物(1)



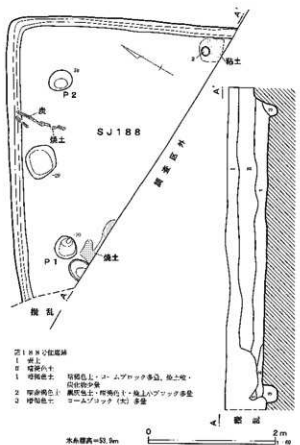
第100図 第185号住居跡出土遺物(2)

第51表 第185号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	12.9	6.2	-	A D E H	普通	黒	90	
2	土師器 坏	(14.2)	(5.8)	-	A D E H	普通	にぶい黄橙	60	カマド
3	土師器 高坏	19.4	(10.8)	-	A D E	普通	明赤褐	95	
4	土師器 高坏	(20.6)	(4.9)	-	A D E H	普通	橙	20	
5	土師器 高坏	(16.0)	(4.3)	-	D E H	普通	にぶい橙	15	
6	土師器 高坏	(17.6)	(5.5)	-	D E H	普通	橙	20	
7	土師器 高坏	(14.8)	(6.0)	-	E G	普通	明赤褐	40	
8	土師器 高坏	-	(7.2)	-	A D E	普通	明赤褐	90	
9	土師器 高坏	-	(7.0)	-	A D E H	普通	にぶい黄橙	90	カマド
10	土師器 高坏	-	(3.8)	(19.8)	D E H	良好	明赤褐	50	
11	土師器 高坏	-	(2.7)	(16.6)	A D E H	普通	にぶい赤褐	20	
12	須恵器 甗	-	(6.5)	(9.0)	E	普通	灰	5	
13	土師器 甗	(19.0)	(6.6)	-	B E H I J	普通	橙	50	
14	土師器 甗	14.5	19.1	6.0	A B D E H J	普通	にぶい橙	75	
15	土師器 小型甗	(8.0)	16.3	-	A D E H	普通	灰褐	50	
16	土師器 甗	(16.6)	(17.3)	-	A D E H	普通	灰褐	25	
17	土師器 甗	-	10.9	(8.0)	A D E H	普通	にぶい橙	15	
18	土師器 甗	(18.0)	(27.4)	-	A D E H I	普通	にぶい黄橙	60	
19	土師器 甗	-	(11.6)	6.8	A D E H	普通	明赤褐	80	カマド
20	土師器 甗	-	(25.6)	(7.0)	A D E H	普通	明黄褐	30	カマド
21	土師器 甗	23.2	(23.9)	-	A D E G H J	普通	浅黄橙	90	甗の転用か?



第101図 第187号住居跡



カマド内からは支脚に使われたと思われる高坏と甕が出土した。

貯蔵穴はカマドの左脇に検出された。長軸60cm、短軸45cmの隅丸長方形で深さは53cmである。中からは、遺物は出土しなかったが、上面の脇に直径30cmの範囲に白色粘土が見られた。

遺物は、カマドの他にカマド左袖の外側や貯蔵穴上面、住居跡内から高坏、甕等が出土したが、いずれも床面からやや浮いた状態であった。

時期は6世紀前半である。

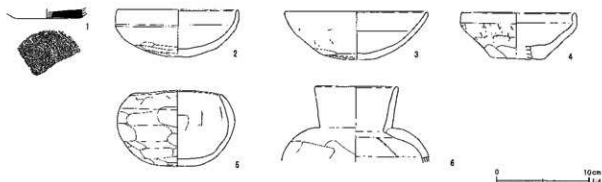
第186号住居跡 (第80図)

調査区の中央、A A-47・48グリッドに位置する。排水溝の調査であったため一部分の検出に留まった。第171・191号住居跡と重複関係にあり、本住居が新しい。

平面形は住居跡の殆どが調査区外のため不明である。検出されたのはカマド側の東辺で長さ3m、東西方向は0.66mの検出に留まった。深さは0.08mでごく浅い。主軸方向は、N-96°-Eを指す。

検出された範囲では、床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。柱穴や貯蔵穴も検出されていない。

カマドは東壁の右寄りに設置されていた。燃烧部は壁外に張り出しており、煙道が約30cm残存していた。火床面は床面より10cmほど下がっている。粘土を使って構築されていたようで、土層断面の2層が天井崩落土と考えられ、3層底面が灰層である。灰



第102図 第186号住居跡・出土遺物

第52表 第188号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	-	1.1	(6.3)	F	普通	灰	25	
2	土師器 坏	12.8	5.1	2.3	ADEH	普通	にぶい赤褐	75	
3	土師器 坏	15.1	5.1	-	ADEH	普通	にぶい橙	75	
4	土師器 坏	11.9	5.0	5.7	ADEGH	普通	橙	75	
5	土師器 塊	9.9	7.5	-	ADEH	普通	にぶい橙	90	
6	土師器 小型壺	(8.6)	(7.9)	-	ADEH	普通	赤褐	25	

層は比較的厚く、煙道基部から中頃まで壁が焼上化していた。袖は第171号住居跡によって壊されて残っていなかった。カマド内には、支脚に使われた高环脚部が逆位で残されていたが、被熱して脆くなり復原する事は出来なかった。

遺物は土師器片が少量出土したが、図示できたのは2点である。

時期を判断できる遺物が少ないが、10世紀と考えるておく。

第187号住居跡 (第101図)

調査区の西側、W-49グリッドに位置する。縄文時代の第193号住居跡と重複する。東側は調査区外にかかる。

平面形は不明である。検出されたのは東西方向が2.8m、南北方向が1.04mである。深さは0.03mと非常に残りが悪かったために殆ど床面が消失しており、第193号住居跡と重複する部分は検出できなかった。主軸方向はN-128°-Eである。

床面の状況は不明であるが、壁溝は検出された範囲ではないようである。

カマドは東壁に設置されていた。住居跡の壁を掘り込んでおり、火床面は床面よりやや下がっている。覆土は2層から4層が天井崩落土と考えられ、5層の灰層が火床面であろう。6層は粘上で上面が赤化している事から下に粘土を貼っていたと考えられる。袖は右側だけが検出された。長さ40cmの残存である。構築材は白色粘土の他に片岩を使っており、袖の内壁及びカマド内に片岩が散乱していた。燃焼部の奥行きは1.1m、幅は50cmである。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。円形で外側に浅い段を持ち、直径45cm、深さは30cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第188号住居跡 (第102図)

調査区の西側、X-48・49グリッドに位置する。西側を攪乱によって壊されている。住居跡の対角線状に南側が調査区外になっている部分は、前回報告分であるが、遺憾ながら住居跡は検出されていない。

対角線状に半分の検出のため平面形はわからないが、方形の可能性が高いと思われる。検出されたのは北西辺が4.26m、北東辺は3.60mである。深さは0.11mである。軸方向はN-60°-Eである。

床面はほぼ平坦で中央及び北東壁に寄った部分が固く締まっていた。壁溝は検出された範囲では全て運っていた。柱穴はかなり壁に寄っているがP1とP2と考えられる。北西の壁際に炭化材が検出された。北東の壁際には40cm×36cmの方形の範囲に白色粘土が見られた。焼土や炭化物は含まれず、掘り込みも確認されなかったことから、床面に粘土が置かれていたものと考えられる。中に坏が1個体検出された。粘土が検出された場所の対角にあたるP1の脇に焼上の広がり認められたが、薄く床面には掘り込み等はなかった。初潮的なカマドなのかあるいは壁際に検出された炭化材とあわせて焼失住居なのか判断に苦しむ。

遺物は、土師器坏などが少量出土した。図の須恵器は混入である。

時期は5世紀末～6世紀始め頃。

第189号住居跡 (第95図)

調査区の西側のA A-42・43・B B-42・43グリッドに位置する。第183・197号住居跡と重複関係にあり、最も古いと考えられる。

平面形は第197号住居跡に大半を壊され不明である。検出されたのは東西方向が3.00m、南北方向は1.60mである。深さは0.03mと浅く非常に残りが悪い。軸方向は、N-73°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝は全周していたものと思われる。ピットは4基検出したが、壁溝の内側にある2基が該当すると考えておく。

カマドや貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は出土せず時期は不明であるが、本住居跡より新しい第197号住居跡は6世紀前半から中頃にかかる時期と考えられる。

第190号住居跡 (第78図)

調査区の中央、Z-47・48・A A-47グリッドに位置する。第67・169・170号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。排水溝部分の調査のため遺構の大部分は調査区外になる。

平面形は不明で、検出されたのは南辺の2.32mである。深さは0.09mとごく浅い。南辺の方向はN-55°-Eである。

床面は残存面積が少なくよくわからないが、壁溝及び柱穴は検出されなかった。

カマドも検出されなかったが、貯蔵穴が壁際に検出された。壁側に浅い段を持ち上端の径が1.1mと大型のものである。深さは35cmで覆土中から甕の破片が出土した。

遺物は貯蔵穴付近から出土した他は殆どなく図示できたのは少ない。

時期は貯蔵穴から出土した甕の時期から6世紀第1四半期と考えておきたい。

第191号住居跡 (第80図)

調査区の中央、A A-47・48グリッドに位置する。

排水溝部分の調査のため遺構の大部分は調査区外になる。第171・186・200号住居跡と重複関係にある。第171・186号住居跡より古く、第200号住居跡より新しい。

平面形は不明である。検出されたのはカマド側の東辺で3.32m、東西方向は1.30mである。深さは0.17mである。軸方向は、N-90°-Eを指す。

床面は殆ど残っていないため詳細は不明である。壁溝はカマド部分を除いて全周していたものと思われる。柱穴は検出されていない。

カマドは東壁の右に寄った所に造られていた。煙道が1.1m伸びているが、燃焼部ははっきりせず袖も確認できなかった。煙道から片岩が出土したがカマドの構築材に使われていた可能性がある。

貯蔵穴と考えられる掘り込みが、カマドからやや離れた位置に確認された。直径90cmの円形と考えられる。

遺物は覆土中から土師器蓋、高坏などが出土した。羽釜は第186号住居跡のものと考えられる。9の壺口縁部は第171号住居跡出土品と同一個体と考えられるが、第200号住居跡出土破片と接合しており、混入品と思われる。

時期は遺物に混入が多く、不明点が多い。

第192号住居跡 (第103図)

調査区の西端、B B-41・42グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、すぐ西側に新しい時期の自然流路がある。

平面形は長方形で、規模は長軸3.56m、短軸3.16m、深さ0.26mである。軸方向は、N-59°-Eを指す。

床面は平坦で、住居跡中央と南壁寄りが踏み固められていた。壁溝はカマド左側と北西角及び良く踏み固められていた南壁際には確認されなかった。ピットは2基検出されたが支柱穴は検出できなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は浅い皿状に掘り込まれ、壁から突出している。火床

面は床面とほぼ同じで、その上に天井部の崩落土が見られる。袖は白色粘土で造られ、左が長さ30cm、右は25cmの残存であった。燃焼部の奥行きは90cm、幅は50cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は拳大の礫が散漫な状況で検出されたが、土器は少なく図示できたのは土器2点と白玉1点である。

時期は6世紀である。

第194号住居跡 (第104図)

調査区の中央、W-48グリッドに位置する。第184・201号住居跡と重複関係にある。第184号住居跡より古い。第201号住居跡は検出面で確認できず

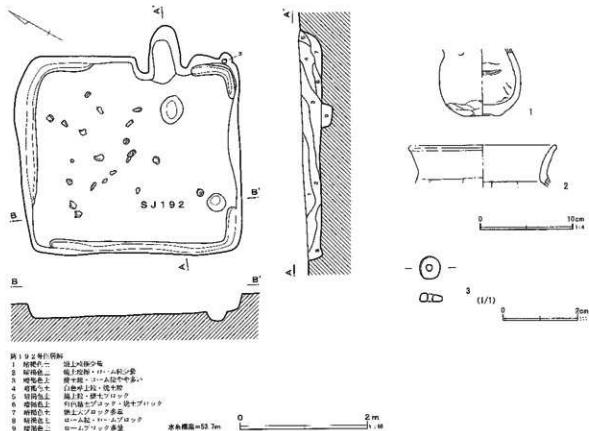
床面で確認したが、土層断面の観察により本住居跡より新しい事が判った。

平面形は方形である。規模は長軸3.36m、短軸3.30m、深さは0.14mである。軸方向は、北壁でN-84°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、周溝は確認されなかった。

柱穴と考えられるものは確認していない。

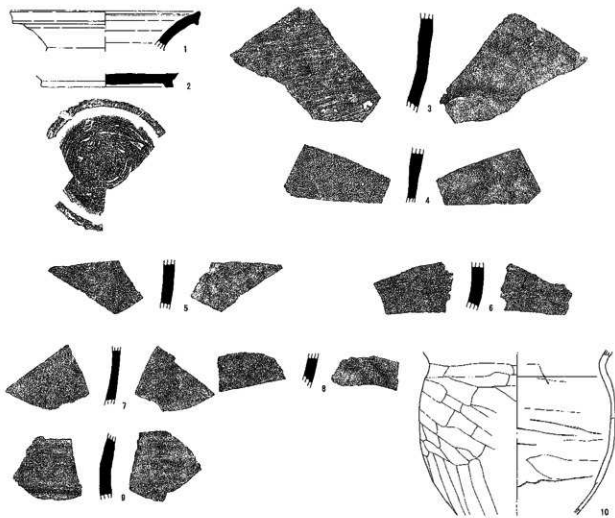
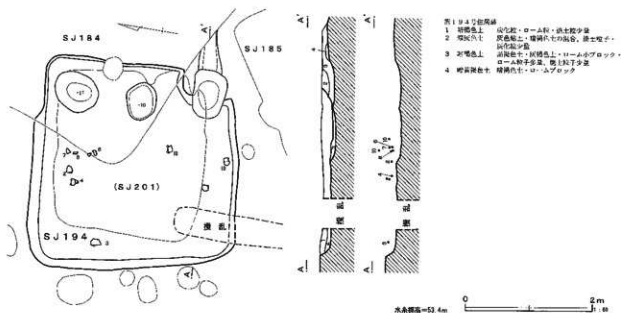
カマドは東壁の南隅に検出された。燃焼部は壁内にあり煙道が伸びるが、先端は第184号住居跡によって壊されており、1.1m残存しているのみであった。袖は左袖が長さ55cmで、右袖は住居の壁を僅かに残して袖としている。燃焼部の奥行きは75cm、幅は50cmである。



第103図 第192号住居跡・出土遺物

第53表 第192号住居跡出土遺物観察表

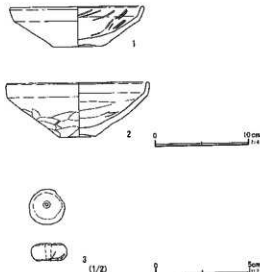
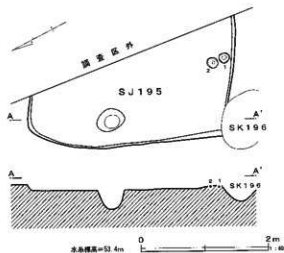
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 小型壺	-	(7.0)	3.9	A D E H	普通	にぶい・橙	75	
2	土師器 小型壺	(15.5)	(4.4)	-	A E H	普通	橙	30	
3	白玉	直径0.6cm	厚さ0.1~0.2cm	孔径0.15cm					重さ5.3g



第104図 第194号住居跡・出土遺物

第54表 第194号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 甕	(12.0)	(4.2)	-	F	普通	灰	15	カマド
2	須恵器 短頸壺	-	(1.5)	14.1	E	普通	灰	50	
3	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	灰	-	
4	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	暗オリーブ灰	-	
5	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	灰	-	
6	須恵器 甕	-	-	-	BEI	普通	灰	-	
7	須恵器 甕	-	-	-	DE	普通	褐灰	-	
8	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	黄灰	-	
9	須恵器 甕	-	-	-	BEI	普通	灰	-	
10	土師器 甕	-	(17.1)	-	ADEG	普通	にぶい褐	15	S J 184



第105図 第195号住居跡・出土遺物

第55表 第195号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 環	14.1	4.2	5.1	ADEG	良好	明赤褐	95	
2	土師器 環	14.9	5.6	3.7	ADEH	普通	明赤褐	95	
3	上玉	直径1.9cm 厚さ0.9cm			DEG	普通	にぶい赤褐	100	孔径0.35-0.15cm 重さ3.1g

貯蔵穴は、カマド左側で住居跡の北東隅にある楕円形の掘り込みと考えておきたい。長軸72cm、短軸60cmで、深さは17cmである。

遺物は須恵器片や土師器甕が取り上げられているが第201号住居跡の遺物の可能性が高い。

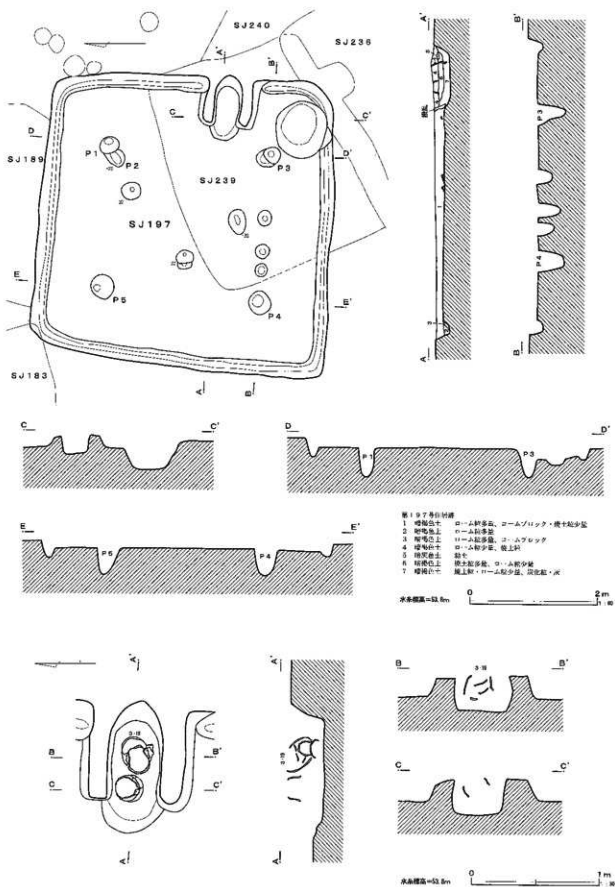
時期は、取り上げられた遺物が9世紀代であり、住居跡の形態もその時期のものである事から、第201号住居跡との時期差はあまり無いものと考えておく。

第195号住居跡 (第105図)

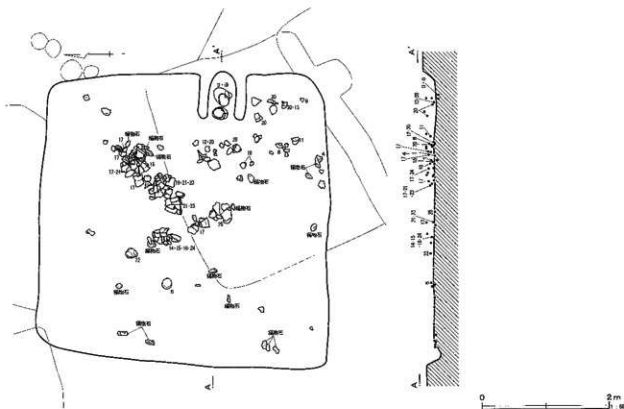
調査区の中央、W・X-49グリッドに位置する。第196号土壌と重複するが新旧関係はつかんでいない。東側の大半は調査区外に出る。

平面形は不明である。検出された規模は西辺が3.14m、南辺は1.94mである。深さ0.08mである。軸方向は、西辺でN-28°-Eとなる。

床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。ピットは西壁際に検出されたが主柱穴となるかどうかははっきりしない。



第106図 第197号住居跡・遺物出土状況(1)



第107図 第197号住居跡遺物出土状況(2)

カマドやか、貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。

遺物は上師器の坏が2個体南壁際に出土した。

時期は5世紀後半である。

第197号住居跡(第106図)

調査区の西側、BB-42・43グリッドに位置する。第183・189・236・239・240号住居跡と重複関係にある。第183号住居跡より占く、他の住居跡より新しいと考えられる。

平面形は方形で、規模は長軸4.7mで、短軸は4.65mほどである。深さは0.17mである。主軸方向は、N-95°-Eを指す。

床面はほぼ平坦であるが、カマド前面がやや下がり、主柱穴の内側と貯蔵穴の前が固く締まっていた。壁溝は全周する。主柱穴は住居跡の対角線状に検出された。P1・P3・P4・P5が該当し、P3とP4の間には3基のピットが並ぶ。P2は遺物が出土したために番号を付した。他に主柱穴の内側に3

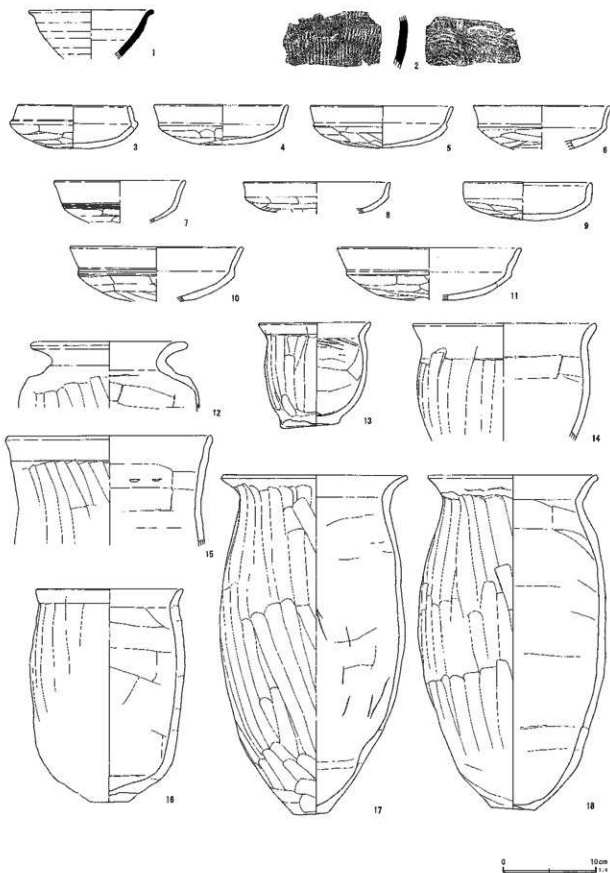
基のピットが検出されたが、本住居跡に伴う可能性は少ないと思われる。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部は壁から出ず、煙道は検出されなかった。火床面は床面より8cmほど低い。土層は、灰を含む事から7層が火床面と考えられ、5層・6層が天井崩落上である。袖は白色粘土で造られていた。長さは左袖が75cm、右袖が80cm残存していた。燃焼部の奥行きは104cm、幅は44cmである。カマド内からは甕が2個体と坏と小型の甕が出土した。坏と小型の甕は伏せて重ねられた状態だった事から、支脚のようにして使われた可能性がある。

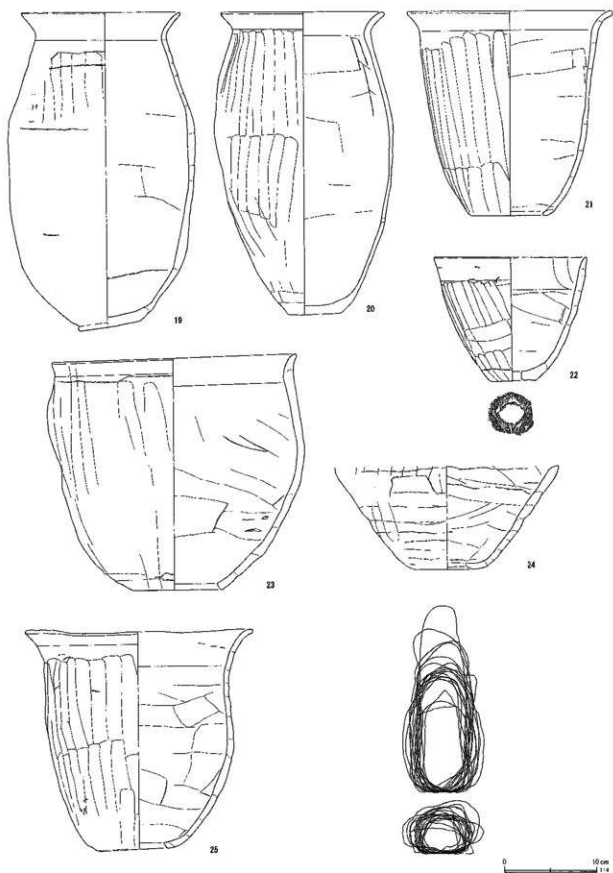
貯蔵穴はカマドの右側に掘り込まれていた。85cm×80cmの隅丸長方形で、深さは30cmである。中からは遺物は出土しなかった。

遺物は主柱穴の内側に纏まって出土し、貯蔵穴の周囲にも見られた。また、カマド対面の壁際に雑物石が2~3個纏まって出土した。

時期は6世紀中頃である。



第108图 第197号住居跡出土遺物 (1)



第109图 第197号住居跡出土遺物(2)

第56表 第197号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(12.0)	(5.1)	-	E J	普通	灰黄	15	
2	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	暗灰黄	-	P-5
3	土師器 坏	11.9	5.5	-	A G H J	普通	にぶい褐	60	カマド
4	土師器 坏	14.1	4.2	-	A D E H	普通	にぶい褐	50	
5	土師器 坏	14.9	5.5	-	A E G	普通	橙	100	
6	土師器 坏	(14.4)	(4.6)	-	A D K	普通	橙	15	
7	土師器 坏	(13.8)	(4.5)	-	A D H	普通	橙	30	
8	土師器 坏	(15.4)	(3.3)	-	A E	普通	明赤褐	80	
9	土師器 坏	(13.3)	4.1	-	E G H	普通	橙	40	カマド
10	土師器 坏	(18.4)	(5.8)	-	D H J	普通	橙	25	
11	土師器 坏	19.6	(5.5)	-	A B E H I J	普通	明褐	20	
12	土師器 小型甕	(16.0)	(7.0)	-	A B D E I J	普通	にぶい黄橙	20	
13	土師器 小型甕	11.7	6.2	6.3	B D E G J	普通	にぶい黄褐	95	
14	土師器 甕	19.3	(12.3)	-	B D E H I J	普通	にぶい橙	70	
15	土師器 甕	(21.4)	(11.4)	-	A B D E H J	普通	にぶい橙	15	
16	土師器 甕	15.4	(21.9)	-	A B D E H I J	普通	橙	90	
17	土師器 甕	19.4	35.8	4.0	A D E H I J	普通	褐	60	
18	土師器 甕	17.7	35.4	4.6	D E H J	普通	明赤褐	75	
19	土師器 甕	(16.6)	33.7	6.6	A E H J	普通	橙	25	カマド
20	土師器 甕	17.0	31.9	5.7	A B D E H I J	普通	橙	70	カマド
21	土師器 甕	21.7	21.6	7.7	B D E G H I J	普通	明赤褐	90	
22	土師器 甕	16.0	13.1	4.8	A D E H	普通	明褐	55	
23	土師器 甕	25.7	24.7	9.4	A D E H J	普通	にぶい橙	70	P-3 甕の転用か?
24	土師器 甕	-	(10.8)	(5.8)	A B D E H I J	普通	橙	40	甕の転用か?
25	土師器 甕	23.9	23.3	7.1	A B D E H I J	普通	橙	95	全体に垂む

第57表 第197号住居跡出土編物石計測表

番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考	番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考
26	12.8	6.3	4.9	569.85		36	17.2	6.4	3.7	638.28	
27	14.3	(7.1)	(2.7)	380.49		37	(10.7)	(4.3)	(3.6)	207.90	
28	15.9	5.8	4.9	637.67		38	9.6	6.1	4.9	377.03	
29	19.6	(7.4)	4.1	723.82		39	15.7	6.3	5.2	682.36	
30	12.2	7.1	4.5	536.79		40	13.7	5.9	4.1	526.01	
31	14.6	6.1	4.2	488.51		41	13.0	7.2	4.0	499.16	
32	12.8	8.7	4.6	654.10		42	12.1	5.0	4.2	389.93	
33	12.6	5.2	(3.3)	319.47		43	12.3	6.0	4.2	396.22	
34	13.1	8.0	5.6	746.17		44	(9.0)	(4.9)	3.9	236.02	
35	11.9	5.7	3.7	334.75							

第198号住居跡 (第110図)

調査区中央、D11-42・43グリッドに位置する。第234号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

平面形は長方形で、規模は長軸4.00mで、短軸は3.18m、深さは0.12mである。主軸方向は、N-116°-Eを指す。

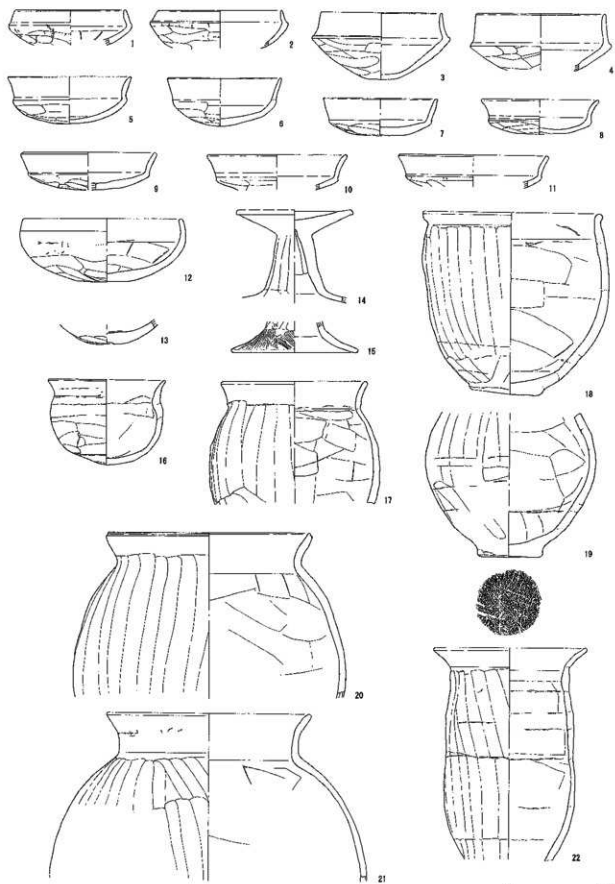
床面は平坦で、住居跡中央が硬く締まっていた。壁溝は全周している。柱穴は検出されなかった。

カマドは東壁のやや南寄りに設置されていた。燃

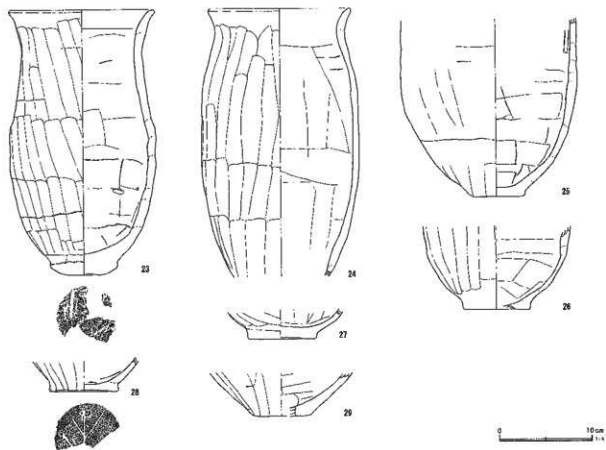
焼部は壁内にあり、煙道は残っていなかった。火床面は床面よりやや低く設定している。天井部は白色粘土を用いて構築しており、土層の3層・4層が崩落して顕著に認められた。袖は両袖とも長さ80cmで、燃焼部の奥行きは100cm、幅は40cmである。

貯蔵穴はカマドの右側に掘り込まれていた。長軸75cm、短軸65cmの隅丸方形で深さは40cmである。

遺物は上面で出土したが、中からは出土しなかった。



第111图 第198号住居跡出土遺物 (1)



第112図 第198号住居跡出土遺物(2)

第201号住居跡(第115図)

調査区の中央、W-48グリッドに位置する。第184・194号住居跡と重複関係にあり、第184号住居跡より古く、第194号住居跡より新しい。

平面形は長方形で、長軸2.6m、短軸2.4mで、深さは、確認が第194号住居跡の床面となっていたために、殆どない。壁溝や柱穴も確認できなかったが、床下土層がカマド前面と住居跡の北西に検出された。

カマドは東壁の前寄りに設置されていた。燃焼部は住居跡内にあり、煙道は遺存していない。火床面は、カマド掘り方をローム混じりの土で埋め戻し、床面よりやや低い状態に設定している。袖は白色粘土で構築されており、残存状態は良くないが長さ30cmほど残っていた。燃焼部の奥行きは50cm、幅も50cmである。

遺物は本住居跡としては取り上げられていないが第194号住居跡の遺物が本住居跡の物である可能性が高く、9世紀と考えられる。

第204号住居跡(第116図)

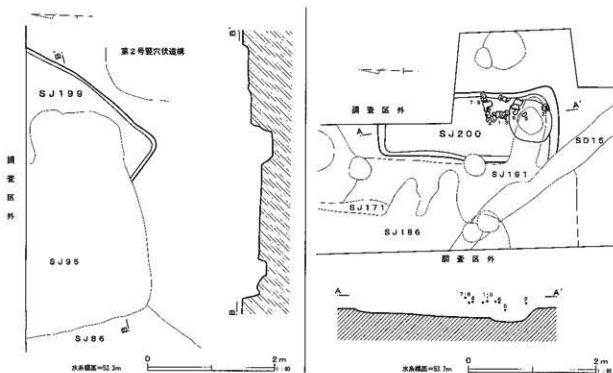
調査区の中央、CC-42・DD-42グリッドに位置する。第234号住居跡、第196号土壌と重複関係にある。第234号住居跡より新しく、第196号土壌より古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.00m、短軸3.34mである。深さは0.02mでごく浅い。主軸方向は、N-81°-Eを指す。

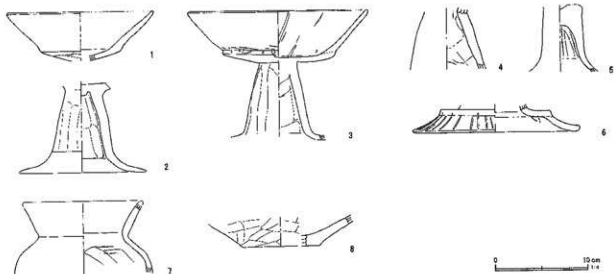
床面は検出時に殆ど床面が出ている状態であったが、ほぼ平坦で、カマド対面の西壁際が固く締まっていた。壁溝は検出されなかった。ピットはP1・P2を柱穴と考えておくが他は不明である。

第58表 第198号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	保存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(11.8)	(3.7)	-	ADEH	普通	にぶい褐	40	
2	土師器 坏	13.0	(4.1)	-	ADE	普通	にぶい褐	50	
3	土師器 坏	(13.0)	7.0	-	ADEH	普通	にぶい褐	10	
4	土師器 坏	(13.4)	(6.0)	-	ADEH	普通	橙	15	
5	土師器 坏	13.2	5.0	-	DEGH	普通	橙	50	
6	土師器 坏	(12.0)	5.2	-	DEGJ	普通	にぶい黄褐	15	カマド
7	土師器 坏	(12.2)	4.1	-	ADEH	普通	にぶい橙	30	
8	土師器 坏	(12.4)	3.8	-	DEG	普通	橙	20	
9	土師器 坏	(14.0)	4.1	-	ADEH	普通	にぶい黄橙	40	
10	土師器 坏	(14.6)	(3.7)	-	ADEH	普通	明褐	20	
11	土師器 坏	(15.6)	(3.4)	-	DEH	普通	灰黄褐	15	
12	土師器 坏	(16.5)	6.7	-	ABEGH	普通	にぶい黄橙	40	
13	土師器 坏	-	(2.6)	-	ADEGH	普通	にぶい赤褐	30	
14	土師器 高坏	-	(9.8)	-	DEH	普通	にぶい赤褐	50	貯蔵穴
15	土師器 高坏	-	(3.3)	(13.0)	ABEG	普通	にぶい赤褐	25	
16	土師器 鉢	12.2	9.1	-	ADEH	普通	にぶい黄橙	95	貯蔵穴
17	土師器 甕	(15.0)	(13.0)	-	ABEHJ	普通	明赤褐	30	
18	土師器 甕	19.1	19.4	7.5	ABDEHJ	普通	橙	90	
19	土師器 甕	-	(15.2)	-	ABDEHJ	普通	にぶい黄褐	30	
20	土師器 甕	(21.4)	(17.6)	-	ABDEHJ	普通	橙	30	
21	土師器 甕	(21.4)	(17.6)	-	ADEH	普通	にぶい褐	20	
22	土師器 甕	(16.0)	(22.3)	-	ABDEHJ	普通	橙	40	
23	土師器 甕	(15.0)	28.1	(7.2)	ADEH	普通	にぶい褐	40	
24	土師器 甕	(14.8)	(28.5)	-	ABEHJ	普通	明黄褐	50	
25	土師器 甕	-	(18.7)	5.5	ABEH	普通	橙	50	S J 204
26	土師器 甕	-	(8.8)	7.2	ABDE	普通	橙	50	
27	土師器 甕	-	3.2	7.0	DEH	普通	にぶい褐	70	
28	土師器 甕	-	(3.6)	7.0	BDEH	普通	にぶい褐	30	
29	土師器 甕	-	(4.6)	(6.0)	ADEGH	良好	明赤褐	20	



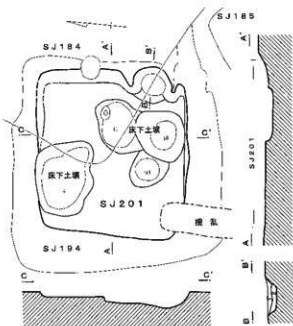
第113図 第199・200号住居跡



第114図 第200号住居跡出土遺物

第59表 第200号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	(15.6)	(5.2)	-	A E H	普通	にぶい赤褐	10	S J 191カマド
2	土師器 高坏	-	(9.4)	(13.5)	A D E	普通	にぶい褐	60	
3	土師器 高坏	(8.8)	(13.7)	-	D E G	普通	明赤褐	40	
4	土師器 高坏	-	6.6	-	E G	普通	明赤褐	45	S J 191カマド
5	土師器 高坏	-	(7.0)	-	A D E H	普通	橙	45	
6	土師器 高坏	-	(2.9)	17.8	A D E H	普通	橙	50	
7	土師器 小形壺	-	(7.5)	-	D E	普通	明赤褐	15	
8	土師器 甕	-	(3.1)	(8.0)	A D E H	普通	灰褐	20	



第201号住居跡断面
1 遺構土 2 灰土 3 灰土
4 灰土 5 灰土 6 灰土 7 灰土 8 灰土

第115図 第201号住居跡

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。壁を掘り込んでるように思われるが、燃焼部が長いのか煙道に続く部分なのかは、第196号土壌によって壊されているためはっきりしなかった。火床面は、掘り方をローム混じりの暗褐色土で埋め戻し、床面よりやや低い状態で使用している。袖は白色粘土を用いており、長さ65cm残存していた。燃焼部の奥行きは焚き口部分を含めて1.2m、幅は50cmである。

貯蔵穴はカマド右側の掘り込みかと思われる。住居跡の壁から離れ、やや小さめである。隅丸方形を意識していると思われ、大きさは55cm×45cm、深さは18cmであった。

遺物は、貯蔵穴周辺とカマド左脇及び住居跡中央から、土師器甕などが出土した。

時期は6世紀前半である。

第205・243号住居跡 (第118図)

調査区の中央、CC-42・43グリッドに位置する。本住居跡は拡張されており、調査時に拡張前の住居跡に第243号の番号をつけている。第207・228・232・233・238号住居跡と重複関係にあり、木住居跡がもっとも新しいと考えられる。

平面形は長方形である。規模は長軸4.15m、短軸3.65m、深さ0.06mである。検出面が下がっているため遺構が浅く床面の残りも良くない。壁溝はカマド部分を除いて全周する。柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁の中央やや左寄りに設置されていた。壁を掘り込み、底面は斜めに上がって煙道部に続くと思われる。袖は遺存していなかった。燃焼部の奥行きは1.3m、幅は95cmである。

貯蔵穴は検出されなかった。

拡張前の住居跡はカマドをとおる軸方向に長方形

で短軸は3.00mであることから南に1.15m拡張したことになる。拡張後のカマドよりやや内側に、カマドの掘り方と思われる土塊状の掘り込みが見られた。壁溝はカマド対面の西辺から南辺の一部に見られただけである。また、ピットが中央と西壁際に検出されたが柱穴が確認できない。

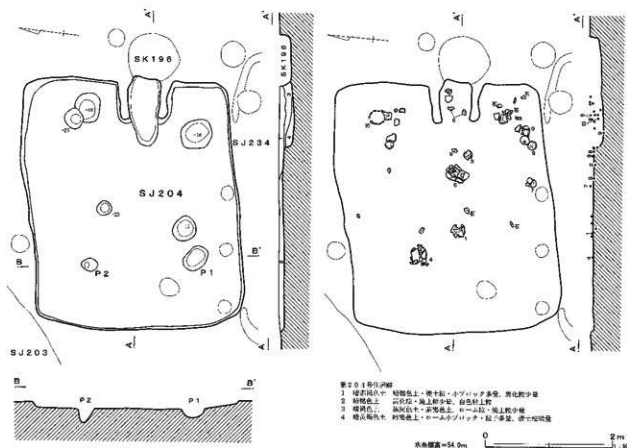
遺物は住居跡中央から僅かに出土しただけである。

第206号住居跡 (第119図)

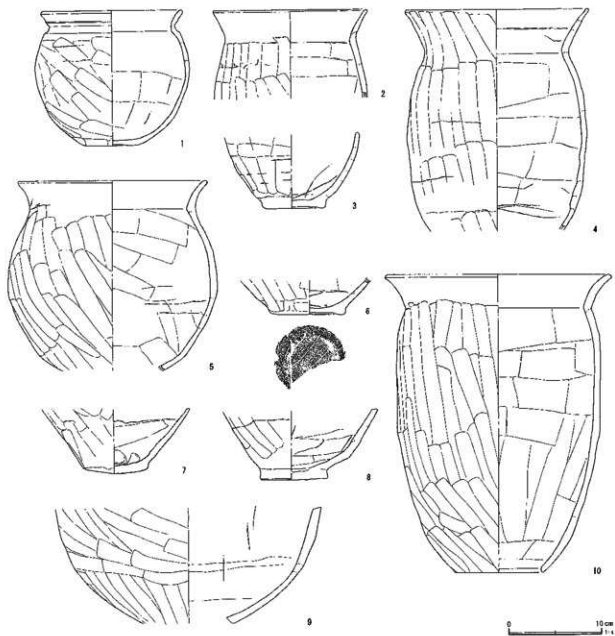
調査区の中央、CC・DD-44グリッドに位置する。第220・221号住居跡と重複関係にありいずれの住居跡よりも新しい。

平面形は方形である。規模は2.8m×2.7mで、深さは0.01mである。主軸方向はN-85°-Wである。

床面は平坦で、壁溝は南西隅が検出されなかった。柱穴も確認されていない。



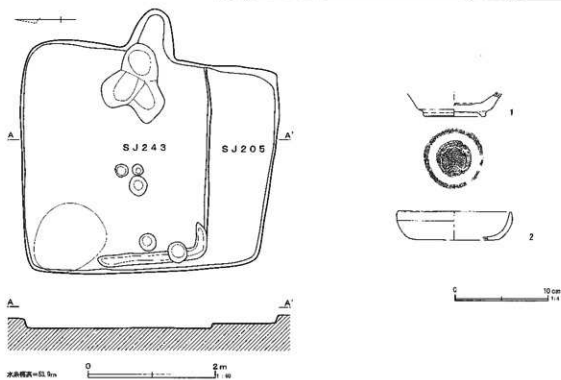
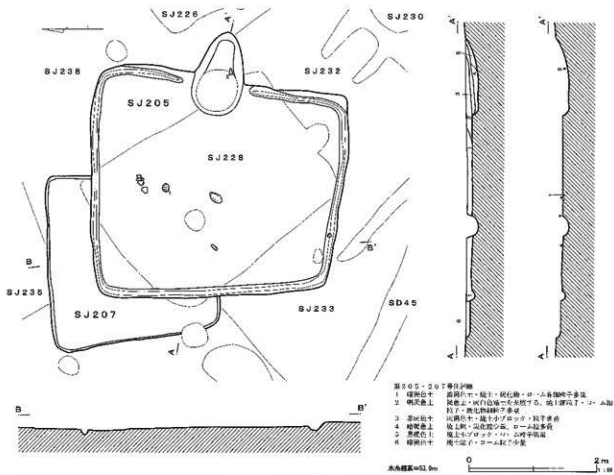
第116図 第204号住居跡・遺物出土状況



第117図 第204号住居跡出土遺物

第60表 第204号住居跡出土遺物観察表

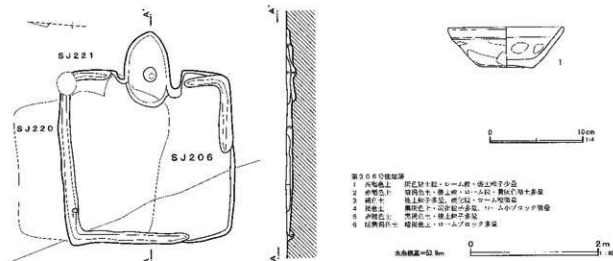
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(14.6)	14.3	6.3	DEHJ	普通	褐色	45	
2	土師器 甕	(16.0)	(9.3)	-	ABDEHJ	普通	橙	20	カマド
3	土師器 甕	-	(7.9)	6.6	ABDEH	普通	橙	70	
4	土師器 甕	(19.4)	(23.3)	-	ADEHIJ	普通	橙	45	摩耗著しい
5	土師器 甕	19.9	20.1	(10.5)	ADEHIJ	普通	橙	70	
6	土師器 甕	-	(3.9)	7.6	ABDEH	普通	にぶい橙	45	カマド
7	土師器 甕	-	(6.8)	6.6	ADE	普通	にぶい橙	60	
8	土師器 甕	-	(7.3)	7.1	ABDEHJ	普通	明褐	85	
9	土師器 甕	-	(12.2)	-	ABDEHJ	普通	にぶい橙	30	カマド 内面門形刺離
10	土師器 甕	(23.6)	31.4	9.2	ABDEHIJ	普通	橙	45	



第118図 第205・207・243号住居跡・出土遺物

第61表 第205号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付陶	-	(2.6)	6.0	A B D E G	普通	にぶい褐	60	
2	土師器 坏	(11.8)	3.0	(9.4)	A D E	普通	粗	15	カマド



第119図 第206号住居跡・出土遺物

第62表 第206号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(2.1)	3.3	6.1	A B D E H I	普通	にぶい褐	95	

カマドは東壁中央に検出された。壁を大きく掘り込んでおり、袖は短く煙道は検出されなかった。火床面は床面より低く、中央に支脚を立てたと思われるピットが見られた。燃焼部の奥行きは1.2m、幅は70cmである。

遺物は北側の壁溝から土師器坏が1点出土しただけである。

時期は10世紀である。

第207号住居跡 (第118図)

調査区の中央、C C-42・43グリッドに位置する。第205・228・233・235・238号住居跡と重複関係にあり、第205・228号住居跡より古く第235・238号住居跡より新しい。第233号住居跡との新旧は確認していない。

平面形は北辺より南辺が短くやや歪んでいるが、方形が基調と思われる。規模は北辺が2.95m、西辺

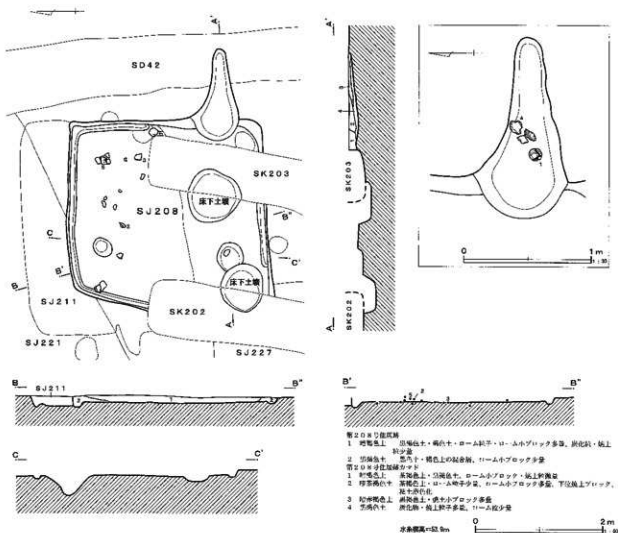
は2.65mである。深さは0.03mと極めて浅い。方位は北辺でN-87°Eである。

床面は残りが極めて浅く、大半が第205号住居跡と重複しているため詳細は不明である。壁溝は無いようである。柱穴やカマドなどの施設も検出されなかった。

遺物は出土しなかった。時期は不明であるが本住居跡より新しい第228号住居跡は7世紀代と考えられ、本住居跡より古い第238号住居跡は6世紀代である。カマドなどが無かったので、住居跡の形状から判断する事も難しいが、第228号住居跡に近い時期と考えておきたい。

第208号住居跡 (第120図)

調査区の中央、C C・D D-44グリッドに位置する。第211・227号住居跡、第202・203号土壌と重複関係にあり、第211号住居跡より新しく、土壌より



第120図 第208号住居跡・遺物出土状況

古い。第227号住居跡との新旧は不明である。

平面形は北辺が南辺より短く歪んでいるため台形状を呈する。規模は、長軸3.20m、短軸2.96mで、深さは0.10mである。主軸方向は、N-92°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝は東壁の中ほどから西壁まで廻るが南壁は一部切れるようである。ピットは2基検出されたが柱穴となるかどうか分からない。床下土壇が2基検出された。カマドの前と住居跡南西隅にあり、円形で直径が90cmと80cmである。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んで煙道に続く。底面は段を持たず斜めに上がって煙道に続く。火床面は床面より僅かに低

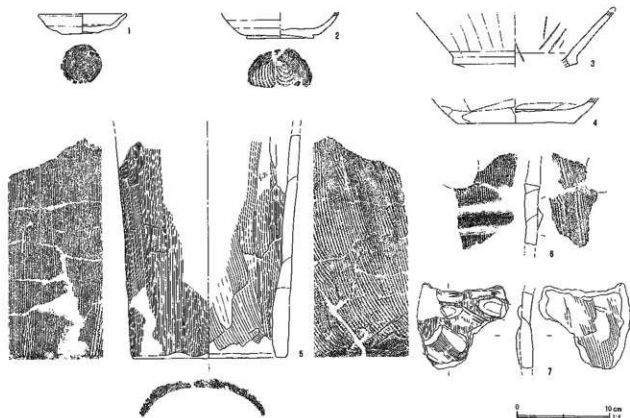
い程度である。土層は2層が天井崩落土である。袖は確認されなかった。

遺物は土師器が少量と埴輪が出土している。埴輪は床面からかなり浮いた状態であった。高坏は混入である。

時期は10世紀以降である。

第209号住居跡（第122図）

調査区の中央、C C-45グリッドに位置する。第309・322号住居跡、第197・198号土壇と重複関係にあり、土壇より古く他の住居跡より新しい。北側の床面は殆ど残っていないが、染み状に残った部分を繋いで平面形を推定した。



第121図 第208号住居跡出土遺物

第63表 第208号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 小皿	9.1	2.3	4.1	ABDHJ	普通	椀	100	カマド
2	ロクロ 坏	-	(2.7)	(7.0)	ADEG	普通	にぶい黄緑	30	
3	土師器 高坏	-	(5.9)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	15	
4	土師器 甕	-	(2.6)	(11.4)	ABHJ	普通	灰褐	30	カマド
5	円筒埴輪	-	(23.4)	(16.6)	ABDE	良好	明赤褐	40	外面タテハケ 内面ナメハケ
6	円筒埴輪	-	(9.5)	-	ABDEJ	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ 内面タテハケ
7	形象埴輪 人物	-	(9.1)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	胸に手をあて悲願の意を表す

平面形は長方形になると思われる。規模は長軸が3.20mまで確認でき、短軸は約2.80mと推定される。深さは0.10mで、主軸方向は、N-98°-Eである。

床面などは殆ど残っていなかったため詳細は不明である。

カマドは東壁の南端に造られていた。住居跡の南東の角にあたる。燃焼部及び煙道は壁を掘り込んで斜めに張り出している。掘り方の段階では、燃焼部と煙道の底面には高さの差はなく、煙道部先端を埋め戻して傾斜を造っていたようである。そのため燃焼部と煙道との境ははっきりしない。火床面は床面

より低くしていたようである。底面には小ビットが2基確認された。支脚を立てたものと考えられるが2基とも支脚を据えたものかどうかはわからない。袖は左袖が僅かに残存していた。右袖は無く、住居跡の壁を利用して天井部を構築していたものと考えられる。カマドからは坏や片岩の破片などが出土したが、遺物が検出された部分は壁がよく焼けて赤化していた。

遺物はカマドから出土しただけで片岩の他には土師器坏が出土している。

時期は11世紀と考えられる。

第210号住居跡（第123図）

調査区の中央、BB-46グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。遺構の北側の大半は調査区外に出る。

平面形は不明であるが方形に近い形が予想される。検出された規模は、東西方向が5.64m、南北方向は3.86mで、深さは0.20mである。主軸方向はN-70°-Eである。

床面はほぼ平坦で、一面に薄く炭化物が見られたが炭化材などは検出されなかった。壁溝は検出されなかった。柱穴は、南壁際に直径30cm、深さ15~30cmのピットが2基検出されたものを充てておきたい。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。当初は多量の焼土と粘土が僅かに検出されたためカマドと予想して調査したが、袖などの確認が難しくうまく掘れなかった。壁から内側に10cmほど離れているようである。燃焼部は90cm×50cmの楕円形で、床面を僅かに掘り穿めている。袖などの上部構造には粘土を殆ど用いず、暗褐色土で構築されるため、住居跡覆土と区別するのが極めて困難である。

貯蔵穴はカマドの右脇に検出された。110cm×85cmの隅丸長方形で、深さは52cmである。中からは遺物は出土せず、覆土にはローム粒子を多量に含むことから埋め戻された可能性もある。

遺物は土師器環や高坏、甕等が多量に出土した。出土状況は、床面に近いものもあるが殆どは5~10cm浮いており、床面の炭化物の上で出土したことから投げ込まれたものと考えられる。

時期は5世紀後半と考えられる。

第211号住居跡（第128図）

調査区の西側、CC-44・DD-44グリッドに位置する。第208・221号住居跡、第202・203号土城と重複関係にある。土城と第208号住居跡より古く、第221号住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.44m、短軸2.58mで、深さは0.07mである。主軸方向はN-

95°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝は全周する。柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは西壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んでおり、煙道は検出されなかった。火床面は床面とほぼ同じ高さに造られており、中央部には支脚を立てた痕跡が検出された。袖は右袖が僅かに残っていたが左袖は検出できなかった。

遺物は、カマドの前から被熱して割れた礫と覆土中から土師器の破片が極少量出土したが図示できるものは無い。

時期を推測できる遺物が無いため不明であるが本住居跡より新しい第208号住居跡は10世紀と推定される事から本住居跡も9世紀後半から10世紀ごろと考えておきたい。

第212号住居跡（第129図）

調査区の中央、BB-49グリッドに位置する。重複する遺構は無いが、住居跡の北側の大半は調査区外である。

平面形は不明である。検出された規模は南辺が4.24mで、西辺は2.36mである。深さは0.08mである。方位は南辺でN-64°-Eを指す。

検出された範囲では床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。ピットは2基検出されたが柱穴となるかどうかは不明である。

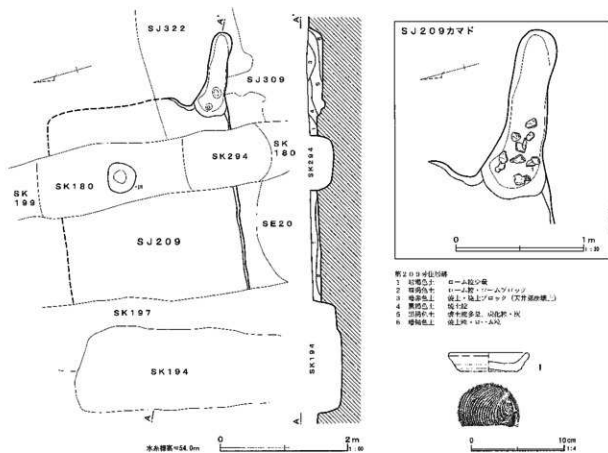
カマドや貯蔵穴も検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。

遺物は、検出範囲が狭かった割には多く出土した。土師器環、高坏、甕類が検出されたが、出土状況は床面からかなり浮いているものもあり、住居跡絶後に投げ込まれたものと考えられる。

時期は5世紀と考えられる。

第213号住居跡（第132図）

調査区の中央BB-50グリッドに位置する。重複する遺構は無いが、住居跡の北側は調査区外にかか



第122図 第209号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第64表 第209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%) ¹	備考・出土位置
1	ロクロ 小皿	(8.2)	2.0	6.0	ADEG	普通	にぶい粧	50	カマド 裏面多量含む

る。

平面形は、カマドの対面が膨らみ変形しているが、長方形と推定される。検出された規模は南北方向に3.64m、東西方向に3.58mである。深さは0.07mで、主軸方向はN-85°-Eを指す。

覆土はローム粒を多量に含み、床面から炭化材が検出された事から、焼失して埋められた可能性がある。床面はほぼ平坦で、南側が硬化していた。壁溝は検出されなかった。ピットは南壁と西壁の中央及び住居跡中央に検出されたが主柱穴とは考え難い。西壁際にはピットが2基並んで検出されたが、入り口に関する施設と思われる。

カマドは東壁の右寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んで突出している。火床面は床面とほぼ

同じ高さである。袖は左右とも35cm残っていた。燃焼部の奥行きは95cm、幅は40cmである。

カマドの右袖の前面に床下土層と思われる掘り込みを検出した。1m×0.8mの楕円形で、深さは23cmであった。覆土には炭化粒と焼土粒を多量に含んでいるが、位置的に貯蔵穴や灰ピットのようなものではないと思われる。

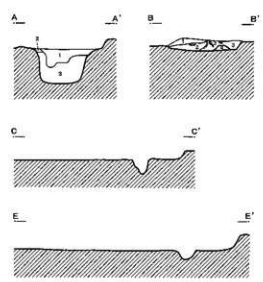
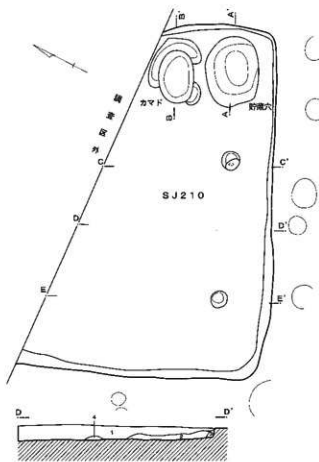
遺物は、須恵器の帯などが少量出土している。

時期は9世紀と考えられる。

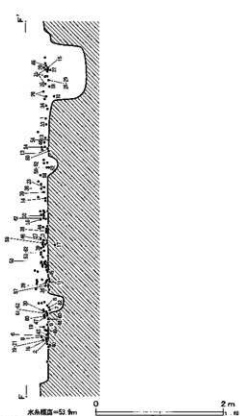
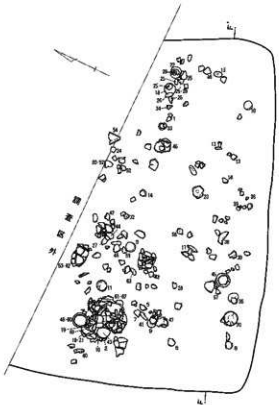
第214号住居跡 (第133図)

調査区の中央、BB-45グリッドに位置する。重複する遺構はない。

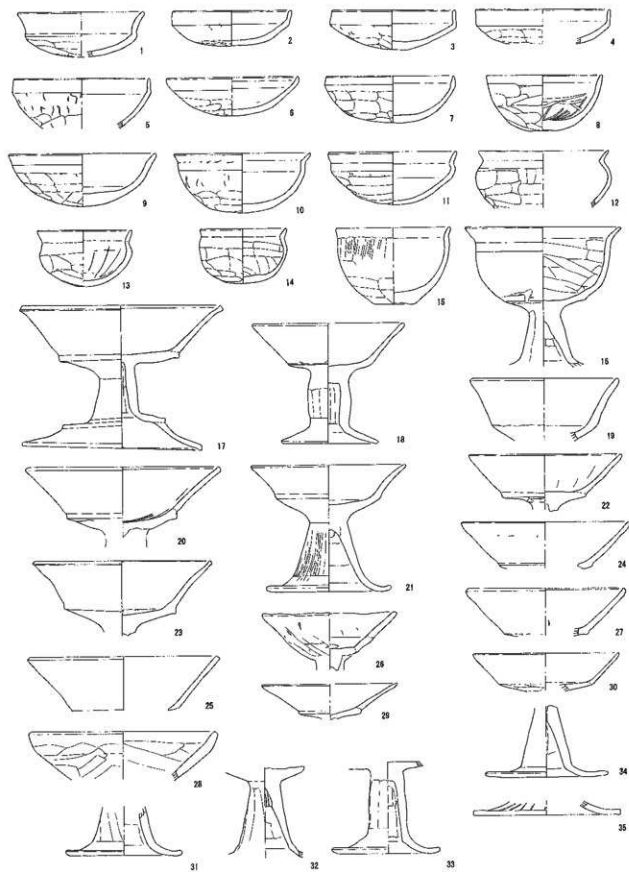
平面形は方形であるが、カマドのある南東の角は



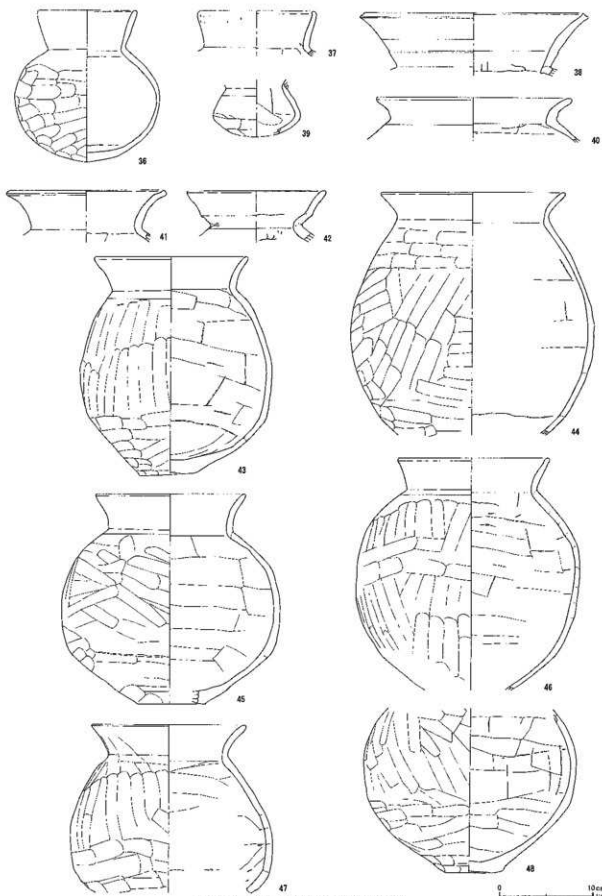
- 第210号住居跡
- 第1 段地層
 1 粘質赤土 黄褐色土・褐色土・灰褐色土の混合層。ローム粒子・小砂粒・
 焼子灰・多量片多量
 2 粘質赤土 褐色粘質土・中粒砂・ローム粒・ローム小ブロック少量
 赤土・砂粒・土上灰・上部片多量
 3 粘質赤土 粘褐色土・ロームブロック多量、粘土粒豊富
 4 白色砂土
- 第2 段地層
 1 粘質赤土 中・高粘質土・ローム粒少量、焼上小ブロック・砂粒
 2 粘質赤土 粘褐色土・ローム粒・粗粒砂・泥木ブロック・赤褐色多量
 3 粘質赤土 (粘り少ない) 赤土・砂粒少量、ローム粒少量
 4 粘質赤土 カマド跡
- 第3 段地層
 1 粘質赤土 粘質粘土少量、赤土粒豊富、灰化土・ローム粒
 2 粘質赤土 ローム粒・ロームブロック多量
 3 粘質赤土 ローム粒多量、赤褐色豊富



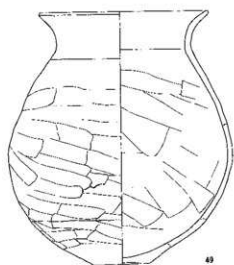
第123図 第210号住居跡・遺物出土状況



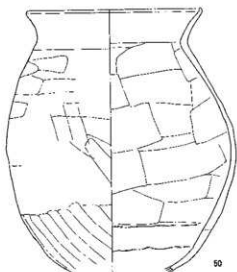
第124图 第210号住居跡出土遺物 (1)



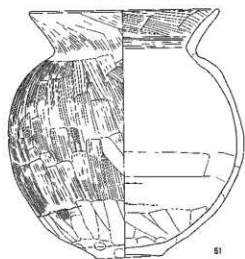
第125图 第210号住居跡出土遺物(2)



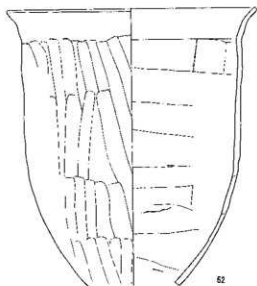
49



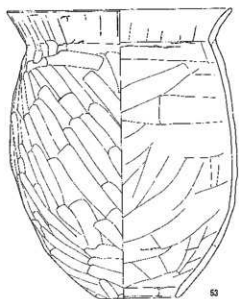
50



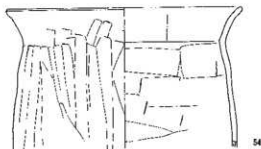
51



52



53



54



58



59



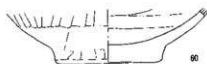
55



56



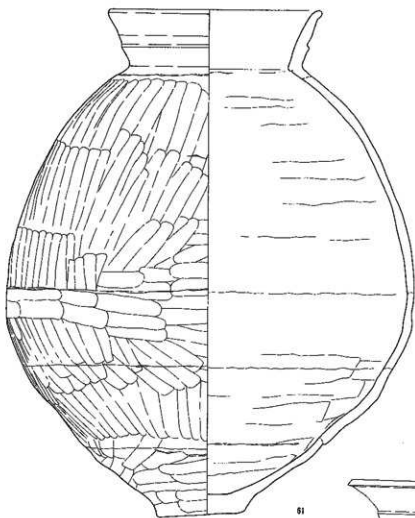
57



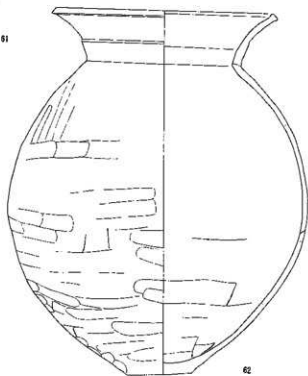
60



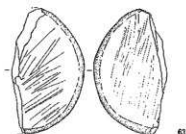
第126图 第210号住居跡出土遺物 (3)



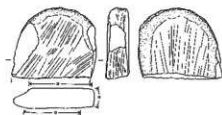
61



62



63



64

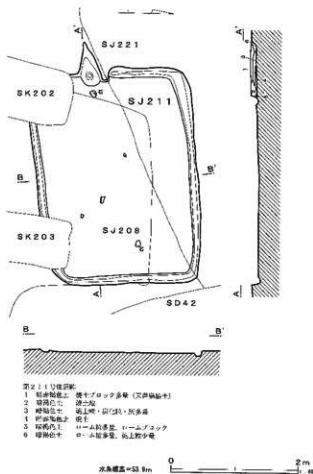


第127図 第210号住居跡出土遺物 (4)

第65表 第210号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(13.1)	4.8	-	ADE	普通	橙	40	カマド
2	土師器 坏	12.3	3.9	-	AEG	普通	にぶい橙	60	
3	土師器 坏	12.9	4.2	-	ADEG	普通	橙	100	
4	土師器 坏	(14.0)	(3.7)	-	AFG	普通	にぶい赤褐	20	貯蔵穴
5	土師器 坏	(14.1)	(5.3)	-	ADEH	普通	橙	15	
6	土師器 坏	(13.7)	4.1	-	ADEJ	普通	灰褐	40	
7	土師器 坏	(12.8)	5.0	-	ADEGH	普通	明赤褐	45	
8	土師器 埴	12.2	5.8	3.1	ADEH	普通	明赤褐	55	
9	土師器 坏	15.0	5.6	-	ADEHJ	普通	橙	80	
10	土師器 埴	14.4	6.3	-	EG	普通	にぶい褐	95	
11	土師器 埴	13.5	6.6	-	ADEGH	普通	明赤褐	95	
12	土師器 埴	13.7	(6.0)	-	DFH	普通	明赤褐	45	
13	土師器 小型埴	9.9	6.0	-	ABDEH	普通	にぶい橙	70	
14	土師器 小型埴	9.0	5.8	-	DEH	普通	橙	60	
15	土師器 埴	(12.0)	8.0	4.2	ADEH	普通	橙	35	器面摩耗する
16	土師器 高坏	16.5	(14.3)	-	ADE	普通	明赤褐	75	
17	土師器 高坏	21.0	15.4	18.8	ADE	良好	明赤褐	70	
18	土師器 高坏	15.8	12.7	(10.3)	DE	普通	にぶい赤褐	80	
19	土師器 高坏	(15.6)	(6.6)	-	DEG	普通	明赤褐	50	
20	土師器 高坏	20.2	(7.2)	-	ADEH	普通	にぶい赤褐	100	
21	土師器 高坏	(16.1)	13.3	(13.2)	BDE	普通	明赤褐	45	
22	土師器 高坏	16.2	6.2	-	DEH	普通	明褐	100	カマド
23	土師器 高坏	18.7	(7.8)	-	DEG	普通	明赤褐	60	
24	土師器 高坏	(17.8)	(5.0)	-	ADEG	普通	明赤褐	40	
25	土師器 高坏	19.8	(5.7)	-	DE	普通	明赤褐	60	カマド
26	土師器 高坏	14.2	(5.0)	-	DE	普通	橙	100	
27	土師器 高坏	(16.6)	(5.0)	-	ADE	普通	橙	20	
28	土師器 高坏	19.4	(5.1)	-	ADEH	普通	明赤褐	15	
29	土師器 高坏	(14.4)	(3.8)	-	DEH	普通	明赤褐	50	カマド
30	土師器 高坏	(15.4)	(4.0)	-	DE	普通	橙	20	
31	土師器 高坏	-	(5.2)	(12.4)	DE	普通	明赤褐	20	
32	土師器 高坏	-	9.6	-	DE	普通	橙	60	
33	土師器 高坏	-	(9.7)	(11.5)	ADE	普通	明褐	40	
34	土師器 高坏	-	(7.3)	(13.0)	AE	普通	橙	40	カマド
35	土師器 高坏	-	(1.4)	(15.6)	ABDE	普通	明褐	15	
36	土師器 用	10.3	16.0	-	AEH	普通	明赤褐	95	
37	土師器 用	(12.0)	(4.6)	-	ADEH	普通	にぶい橙	25	
38	土師器 甕	(23.2)	(6.6)	-	DE	普通	橙	45	
39	土師器 小型壺	-	(5.9)	-	ADEH	普通	明赤褐	40	
40	土師器 甕	20.6	(4.6)	-	ADEHJ	普通	にぶい黄橙	45	
41	土師器 甕	(16.4)	(5.4)	-	ADE	普通	橙	30	
42	土師器 甕	(14.6)	(5.4)	-	ADEH	普通	橙	20	
43	土師器 甕	16.1	23.2	6.2	BDEHJ	普通	にぶい褐	95	
44	土師器 甕	(19.2)	(25.6)	-	ADEHJ	普通	にぶい黄橙	30	
45	土師器 甕	15.8	22.1	(7.4)	ADEHI	普通	にぶい橙	60	
46	土師器 甕	15.9	(24.4)	-	ABDEHJ	普通	橙	65	
47	土師器 甕	16.2	(17.7)	-	ADEHJ	普通	橙	80	
48	土師器 甕	-	(17.4)	5.2	ABEHJ	普通	にぶい橙	75	
49	土師器 甕	(17.6)	26.8	5.9	ABDEHIJ	普通	にぶい褐	70	
50	土師器 甕	(18.3)	(27.8)	-	ABDEHJ	普通	灰褐	85	
51	土師器 甕	19.9	26.1	6.9	ADEHJ	普通	にぶい黄橙	80	内面円形刺繍
52	土師器 甕	(26.2)	(29.2)	-	ABDEH	普通	にぶい褐	15	
53	土師器 甕	23.7	30.7	8.4	ADE	普通	橙	95	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
54	土師器 甌	(25.0)	(14.8)	-	BDE	普通	黒褐色	15	
55	土師器 甕	-	(3.1)	(5.0)	ADEH	普通	にぶい黄褐色	30	
56	土師器 甕	-	(3.9)	8.0	ADEH	普通	にぶい黄褐色	70	
57	土師器 甕	-	3.1	6.8	ADEH	普通	橙	60	
58	土師器 甕	-	(2.5)	4.1	ADEH	普通	橙	60	
59	土師器 甕	-	(2.2)	(7.6)	DEHJ	普通	にぶい黄褐色	50	
60	土師器 甕	-	(5.7)	11.0	ADE	普通	にぶい黄褐色	50	
61	土師器 甕	23.0	52.6	9.2	AEGHJ	普通	明赤褐色	80	
62	土師器 甕	23.0	38.7	7.0	AEH	普通	橙	80	
63	砥石	長さ(13.2)cm 幅(7.8)cm		厚さ3.9cm	重さ539.8g				
64	砥石	長さ(7.5)cm 幅(9.0)cm		厚さ2.2cm	重さ221.3g				



第128図 第211号住居跡

隅切状になっていた。規模は長軸4.10m、短軸3.86m、深さは0.08mである。主軸方向は、N-88°-Eである。

床面は平坦で、カマド前面が踏み固められていた。壁溝は、カマド対面の西壁とカマド部分には検出されなかった。ピットは3基検出されたが、支柱穴と断定できるものはなかった。P1としたものは住居

跡の南隅にあり、60cm×45cmの隅丸長方形で、貯蔵穴の可能性も考えられる。床下土壌に住居跡のほぼ中央に検出された。1辺約1.5m、深さ28cmの方形で、ロームを多量に含む暗褐色土で埋められていた。

カマドは東壁の南寄りに設置されており、その部分は隅切状になっていた。燃焼部は壁を掘り込んで突出し、そのまま煙道に続いていったものと思われる。火床面は住居跡床面と同じ高さで、先端に向かって緩やかな傾斜で上がる。袖は検出されなかったが、隅切状の壁を掘り込んだ部分に礎が検出された。直径15cmから20cmの棒状の礎で、燃焼部の壁の両側に立てた状態で据えられていたと考えられる事から、カマドの補強材として使われたものであろう。この事から本住居跡のカマドは、最初から袖は無く、隅切状にした壁を使ってカマド本体が構築されていたと考えられる。

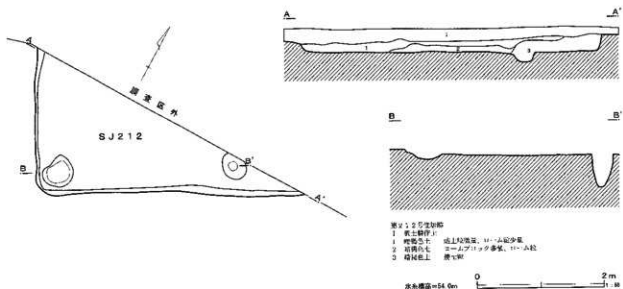
遺物はカマド内から土師器甕等が少量検出された。時期は10世紀と考えられる。

第215号住居跡 (第134図)

調査区の西側、D D-43・44グリッドに位置する。直接重複する遺構はないが南側は水路によって壊されている。

平面形は長方形である。規模は長軸4.74m、短軸4.06m、深さは0.16mである。主軸方向は、N-38°-Wを指す。

床面は中央部が固く踏みしめられていた。壁溝は、西壁側が検出されなかったが、西側は遺構確認時に



第129図 第212号住居跡

は不明瞭であったため、やや掘り過ぎているかもしれない。ピットは複数確認されたが、P1については柱穴と思われるが他は断定できない。

カマドは北西壁の右寄りに造られていた。燃焼部は壁内にほぼ収まり、火床面は床面よりやや下がっている。袖は白色粘土を混合して造られており、長さは60cmほどである。燃焼部の奥行きは70cm、幅は30cmである。

貯蔵穴はカマドの右側で、壁との間に掘り込まれていた。長径82cm、短径70cmの隅丸方形で、深さは20cmである。中からは土師器甕の破片が出土した。

遺物は貯蔵穴の他に床面から浮いた状態で少量出土している。

時期は、7世紀後半である。

第216号住居跡 (第135区)

調査区の中央、BB-47グリッドに位置する。第153号住居跡、第30号井戸跡と重複関係にあり、本住居跡が凸い。第153号住居跡の床面で検出されたもので、カマドの火床面下部と掘り方及び壁溝の一部などが残存していた。

平面形は、方形と思われる。規模は長軸が4.32mまで残存し、短軸は約3.9mと考えられる。主軸方向は、N-93°-Eを指す。

床面等の状況は不明である。壁溝は北側が検出されただけである。

カマドは東壁のやや左寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んではいなかったと思われる、火床面は床面より低かったようである。

遺物は脚の付いた破片が1点上げられているが第153号住居跡に伴う可能性もある。

時期は、不明であるが第153号住居跡は6世紀前半と考えられる事からそれ以前となる。

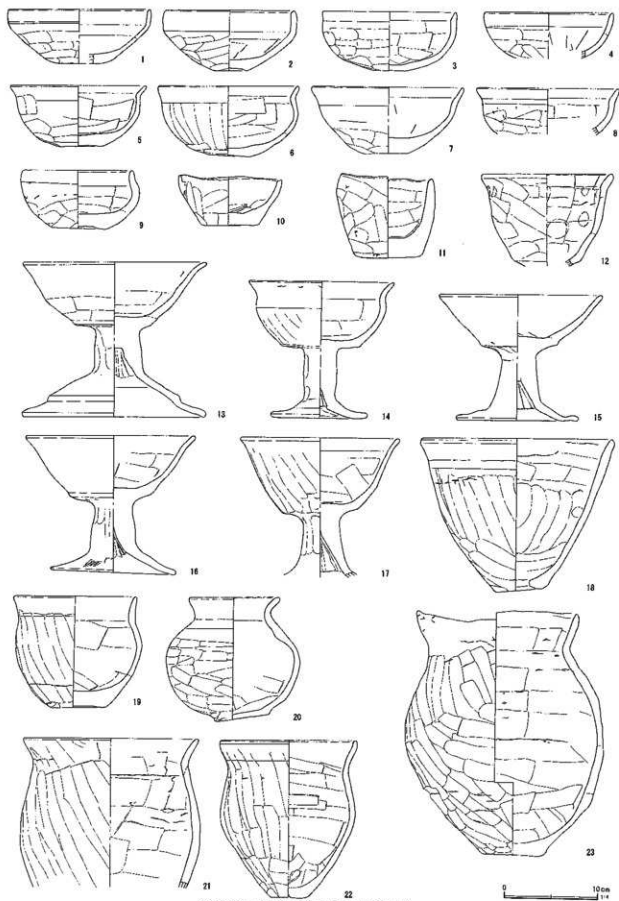
第217号住居跡 (第136区)

調査区の西側、DD-44・45グリッドに位置する。第42号溝跡と重複関係にあり、本住居跡のほうが古い。

平面形は方形である。規模は長軸3.80m、短軸3.74mである。殆ど床面で検出したため、深さは0.03mと非常に浅い。主軸方向はN-119°-Eを指す。

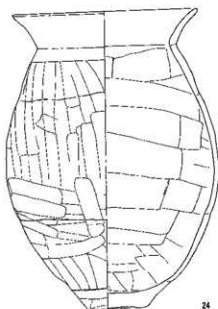
床面はカマド前から対面の壁際にかけて踏みめられ硬化していた。壁溝はカマドのある東壁を除いて廻っていた。ピットは3基検出されたが、支柱穴は不明である。

カマドは東壁中央に検出された。壁を約60cm掘り込んでいるが、残存状態が悪く、袖も僅かにあるよ

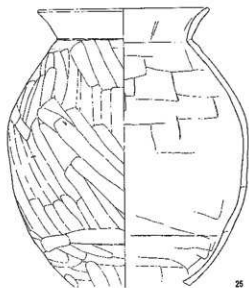


第130号 第212号住居跡出土遺物 (1)

0 10mm



24



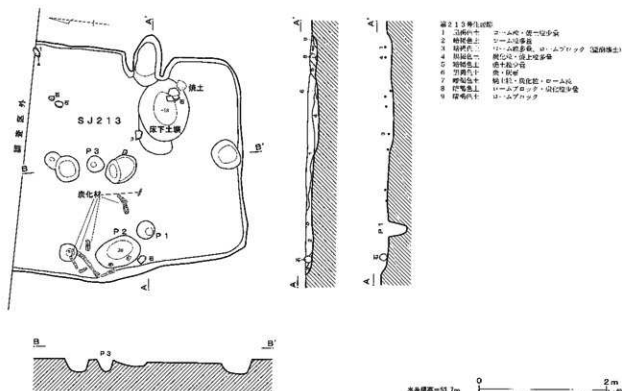
25



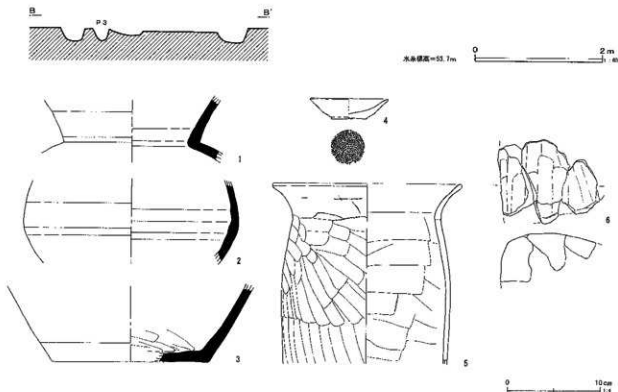
第131図 第212号住居跡出土遺物(2)

第66表 第212号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	長率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(15.0)	5.7	(5.2)	ADEH	普通	明赤褐	30	
2	土師器 坏	(13.6)	6.4	3.5	ADEH	普通	明赤褐	55	
3	土師器 坏	14.1	6.2	3.6	DE	普通	橙	95	
4	土師器 坏	(15.6)	(4.8)	-	ADH	普通	明赤褐	35	
5	土師器 坏	14.2	6.5	4.6	ADE	普通	明赤褐	95	
6	土師器 坏	14.7	7.5	4.2	AEG	普通	暗褐	50	
7	土師器 坏	(16.0)	7.0	4.5	ADE	普通	明赤褐	55	カマド付近
8	土師器 坏	14.9	4.9	-	ADEG	普通	にぶい褐	90	
9	土師器 塊	11.4	6.3	5.8	AEH	普通	橙	80	
10	土師器 鉢	10.9	5.3	6.2	AEG	普通	明赤褐	80	掘り縁
11	土師器 鉢	9.6	8.9	6.8	ADEJ	普通	明赤褐	95	カマド付近
12	土師器 鉢	(13.6)	(9.7)	-	ADEH	普通	明赤褐	20	
13	土師器 高坏	19.4	16.3	19.3	DE	普通	橙	80	
14	土師器 高坏	(15.2)	14.4	(10.2)	AEG	普通	明赤褐	50	カマド付近
15	土師器 高坏	(17.1)	13.3	(13.0)	AHH	普通	明赤褐	50	
16	土師器 高坏	(17.8)	14.6	13.4	DEG	普通	橙	60	カマド付近
17	土師器 高坏	(16.6)	(14.8)	-	DFH	普通	明赤褐	90	
18	土師器 甕	20.2	16.2	4.8	ABHI	普通	にぶい橙	95	
19	土師器 甕	12.8	11.9	5.7	ADEH	普通	にぶい褐	95	
20	土師器 甕	9.4	7.1	5.8	ADEH	普通	にぶい黄橙	55	カマド付近
21	土師器 甕	(18.4)	(15.7)	-	ADEG	普通	明赤褐	25	
22	土師器 甕	14.2	16.6	(3.9)	ABDEHJ	普通	にぶい橙	50	カマド付近
23	土師器 甕	16.9	25.8	6.5	AEGH	普通	にぶい赤褐	80	カマド付近
24	土師器 甕	(17.0)	31.6	6.8	ADEHJ	普通	にぶい褐	50	カマド付近
25	土師器 甕	(18.0)	(29.3)	-	ADEH	普通	にぶい黄褐	80	カマド付近



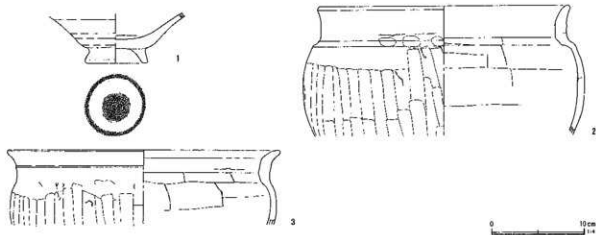
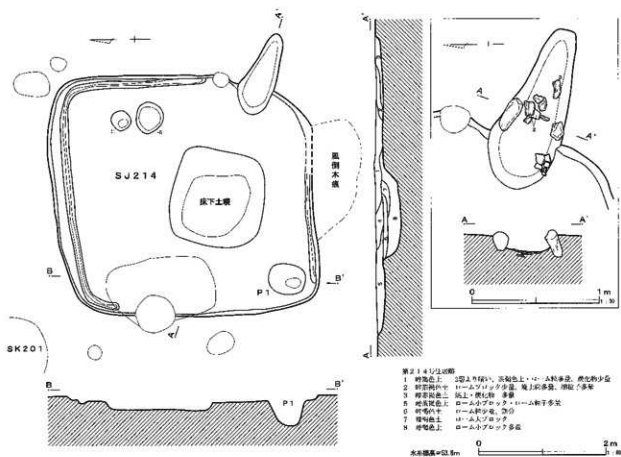
- 第213号住居跡
- 1 土坑内土 コーモ灰・灰一層少量
 - 2 焼灰土上 シーム状多量
 - 3 焼灰土上 シーム状多量、ロームブロック (炭屑混入)
 - 4 土坑内土 灰化土・土上少量
 - 5 焼灰土上 土坑少量
 - 6 土坑内土 灰・灰層
 - 7 焼灰土上 焼1層・灰化土・ローム混
 - 8 焼灰土上 ロームブロック・灰化土少量
 - 9 焼灰土上 シームブロック



第132図 第213号住居跡・出土遺物

第67表 第213号住居跡出土遺物観察表

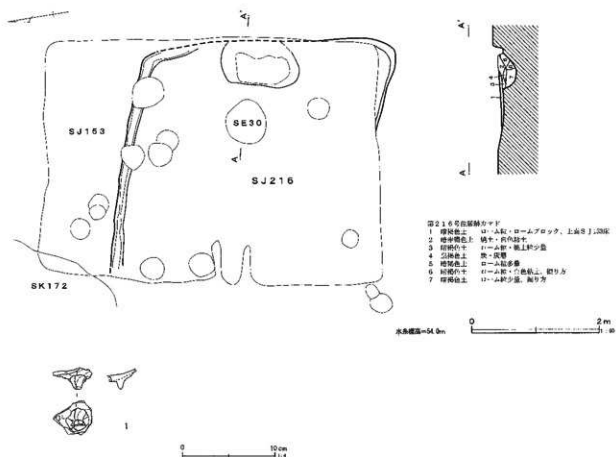
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 甕	-	(8.5)	-	E J	普通	灰	25	
2	須恵器 甕	-	(8.8)	-	E J	普通	灰黄	10	床下土塊
3	須恵器 甕	-	8.3	(16.6)	E J	普通	灰	20	
4	ロクロ 小皿	8.1	2.1	3.6	D E G	普通	灰褐	45	外面煤付否か?
5	土師器 甕	(20.3)	(18.9)	-	A D E H J	普通	明赤褐色	30	カマド
6	不明土製品	(8.9)	(10.8)	(5.2)	A E G	普通	にぶい褐色	-	二次焼熱により脆い



第133図 第214号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第68表 第214号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ	高台付端	(5.2)	6.4	AEG	普通	明褐色	40	
2	土師器	甕	(26.6)	(13.6)	ADEHIJ	普通	にぶい褐色	10	
3	土師器	甕	(28.6)	(7.8)	ADEHI	普通	にぶい黄褐色	15	カマド



第135図 第216号住居跡・出土遺物

第70表 第216号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 ミニチュア	-	(2.3)	-	ABEH	普通	にぶい樹	-	

うに思えたが詳しくはつかめなかった。貯蔵穴は確認されなかった。

遺物は出土せず、時期も不明である。

第218号住居跡 (第137図)

調査区の中央、BB-50・51、CC-50・51グリッドに位置する。第26号堀立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。東側は調査区外に出る。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸が4.30m横出し、短軸は3.30mである。深さは0.09mで、主軸方向はN-79°-Eを指す。

床面はカマド前から住居跡中央部が硬化していた。

壁溝は北壁際の両端が切れているが、他は廻っている。ピットは複数検出されたがいずれも浅く主柱穴を断定できない。

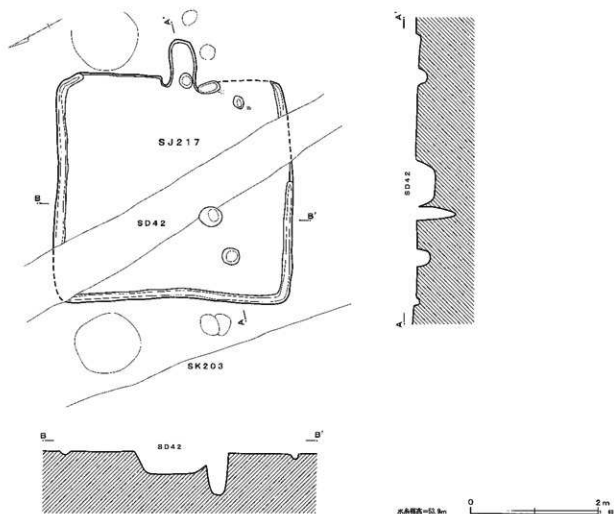
カマドは東壁の右寄りに検出されたが、袖の先端が確認されたのみでその先は調査区外に出ているため詳細は不明である。貯蔵穴はカマド脇の調査区外にあるのか、或いは住居跡北西隅の土壇状の掘り込みが該当すると思われる。

遺物は、主にカマドから環類が少量出土した。

時期は9世紀である。

第219号住居跡 (第138図)

調査区の中央、CC-51グリッドに位置する。重



第136図 第217号住居跡

複する遺構はないが、東側が調査区外に掛かる。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸が2.34m検出され、短軸は1.72mである。深さは0.24mで、主軸方向は、N-96°-Wを指す。

床面はカマド前が踏みしめられてややどがっていた。壁溝は検出されなかった。柱穴は検出された範囲では確認できなかった。

カマドは西壁の左寄りに造られていたが、大きめの貯蔵穴が右側の壁との間にあり、その結果として左に寄ったものと考えられる。このことは当然のことながら、カマドと貯蔵穴は一体として造られ、本住居跡の場合、カマドの位置は貯蔵穴の大きさによって決められたと考えられる。カマドは壁を掘り込まず、燃烧部は住居跡内にある。遺存状態は良好で白色粘土をふんだんに使って構築されていた。検出

時には焼土と白色粘土が混じり合った状態で方形に確認された。カマドの掘り方は浅く、灰層が厚く見られる事から火床面は床面より僅かに低いか同程度だったと思われる。袖は90cmの長さがあり、燃烧部の奥行きもほぼ同じである。幅は奥が狭くなるが40cm前後である。

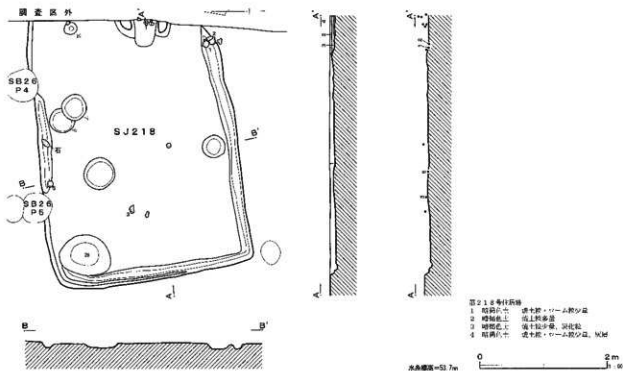
貯蔵穴はカマドの右側にあり、1辺70cmの方形に掘り込まれる。深さは20cmである。

遺物は、カマドの周周から土師器の坏・高环・壺が出土したが、床面より浮いていた。

時期は5世紀後半である。

第220号住居跡 (第139図)

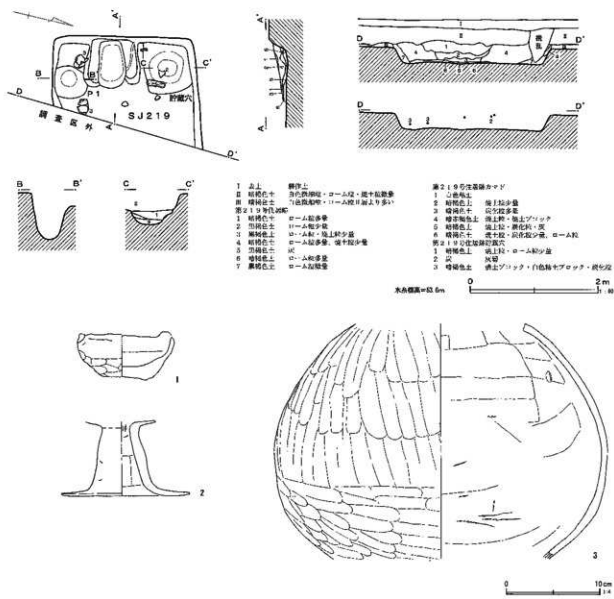
調査区の西側、C C-44グリッドに位置する。第206・221号住居跡と重複関係にあり、前者より古く、



第137图 第218号住居跡・出土遺物

第71表 第218号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 皿	(12.0)	3.0	6.8	A D E J	普通	にぶい・黄橙	60	
2	須恵器 高台付埴	14.7	5.7	7.2	B E J	普通	灰	60	
3	須恵器 高台付埴	(14.9)	5.8	7.1	E H J	普通	暗灰黄	35	
4	ロクロ 高台付埴	(13.8)	6.9	(7.4)	A B E J	普通	にぶい・褐	65	
5	ロクロ 高台付埴	-	(2.6)	8.2	A E G J	普通	にぶい・橙	100	
6	ロクロ 高台付埴	-	4.2	(7.2)	A E J	普通	橙	50	
7	砥石	長さ(5.8)cm 幅4.2cm 厚さ1.2cm 重さ57.5g							



第138図 第219号住居跡・出土遺物

第72表 第219号住居跡出土遺物観察表

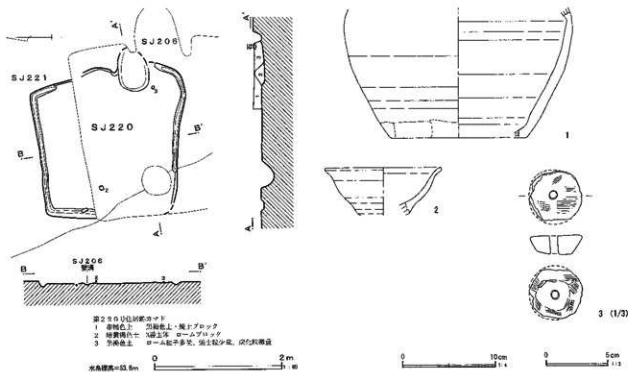
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	手づくね土器	9.8	4.9	4.7	A D E H J	普通	にぶい橙	60	カマド
2	土師器 高杯	-	(7.9)	(13.6)	A D E H J	普通	橙	70	
3	土師器 甕	-	(24.8)	-	A E H I J	普通	橙	30	内面彫刺雑多

後者より新しい。

平面形はかなり歪んでいるが長方形と考える。規模は長軸2.44m、短軸2.20m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-84°-Eと指す。

床面は平坦で住居跡中央が硬化していた。壁溝は北辺と南辺に見られたがピットは検出されなかった。

カマドは東壁の右寄りに設置されていた。第206号住居跡に壊されて残存状況はあまり良くなかった。焼成部は壁を30cmほど掘り込んでいた。火床面の状況は良く分からないが、カマド掘り方が住居跡床面より5cmほど低い事から、火床面は床面とほぼ同じか若干低いくらいであったと思われる。袖は左の基



第139図 第220号住居跡・出土遺物

第73表 第220号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 甕	-	(13.7)	(14.4)	E G H J	普通	灰黄	20	
2	ロクロ 高台付埴	(12.2)	(4.9)	-	A E G H J	普通	明褐	20	
3	台製紡錘車	長径4.2cm 短径2.6cm		厚さ1.5cm	孔径0.6cm	重さ25.5g			凝灰岩

部が若干残っていたが、他は遺存していなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマドの右手前から紡錘車が出土した。他には西壁際に坏片と甕片が出土したのみである。

時期は9世紀と思われる。

第221号住居跡 (第140図)

調査区の西側、C・C-D・D-44グリッドに位置する。第206・208・211・220号住居跡、第42号溝跡と重複関係にあり、これらの中で最も占む。

平面形は、ほぼ方形を呈し、規模は長軸6.44m、短軸6.26m、深さ0.1mである。主軸方向は、N-62°-Eを指す。

床面は平坦であるが、特に強い硬化面は見られなかった。壁溝は全周していた。主柱穴はP4~P7である。他にP6を除いて各柱穴の外側に小ピット

が見られた。床下土層はカマドの前とカマド対面に2基検出された。

カマドは東壁の右寄りに造られていた。燃焼部は住居内にあり床面より10cm低く掘り込まれる。先端は第42号溝跡によって壊されているため煙道があったかどうかは分からない。火床面は床面とほぼ同じ高さかやや低かったと思われる。袖は右袖の基部が壊されているが、左袖の長さは65cmである。

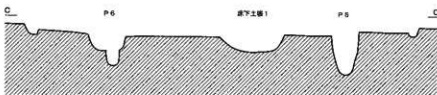
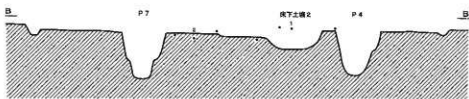
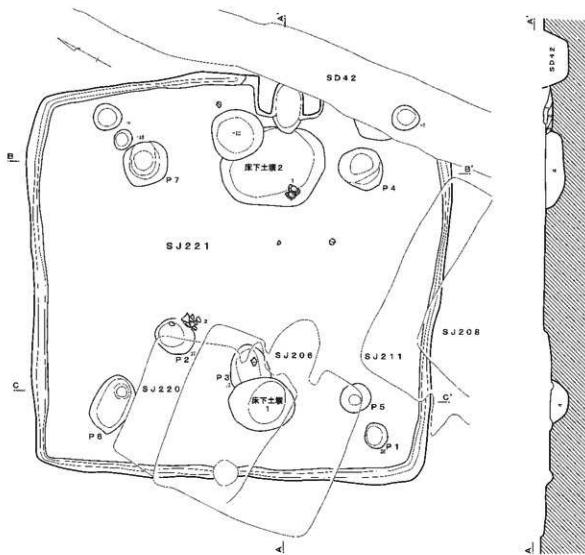
貯蔵穴は、カマドの右側にあり上端の一部が僅かに確認されたが、大半は第42号溝跡によって壊されていた。

遺物は、土師器の甕等が少量出土した。

時期は6世紀である。

第222号住居跡 (第142図)

調査区の西側、D・D-43グリッドに位置する。重



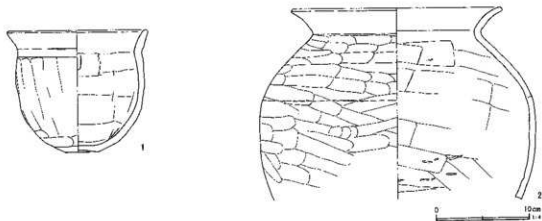
第221号住居跡

- 1 稲穂形瓦上 黒粒土上・黒土小アロッタ構造、灰土層・ローム状・白色粘土状の沙土
 2 土間床土 赤土・黒土・黒粒砂多量、壁の厚さ少量
 3 稲穂形瓦上 赤土・黒土多量、灰土表層状
 4 稲穂形瓦上 コームアロッタ構造

第140図 第221号住居跡

水平縮尺=1/50m

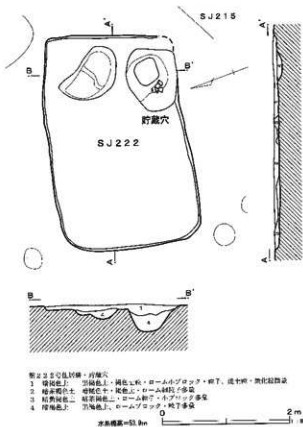




第141図 第221号住居跡出土遺物

第74表 第221号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 小碗	14.9	12.9	3.5	ABHJ	普通	にぶい赤褐色	70	二次焼熱か外面脆い
2	土師器 甕	(22.0)	(20.2)	-	A E G H J	普通	黒褐色	50	



第142図 第222号住居跡

復する遺構はない。

平面形は長方形である。規模は長軸が3.44m、短軸は2.24mである。深さは0.05mである。主軸方向はN-85°-Wとなる。

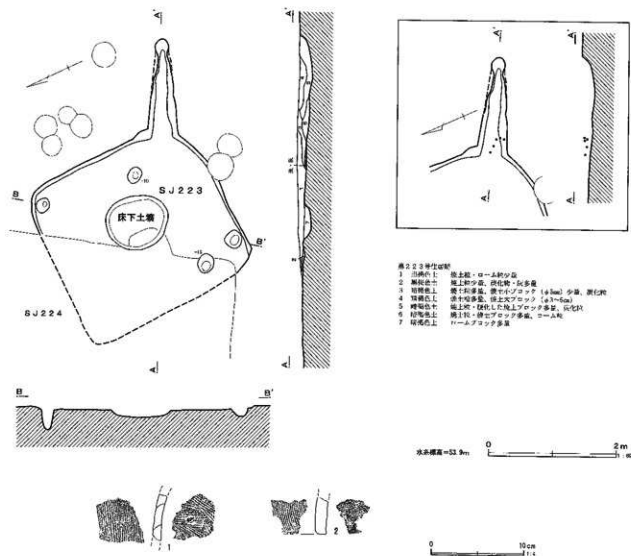
床面は平坦で貯蔵穴の周辺、特に住居跡中央寄りがやや硬化していた。壁溝や柱穴は確認されなかった。住居跡北東に不整形円形の床下土壌が確認された。

カマドは東壁に設置されていたと思われ、東壁中央に焼土が僅かに残っていたが、カマドそのものは遺存していなかった。

貯蔵穴は南東隅に掘り込まれていた。105cm×80cmで深さは35cmである。覆土上面から土師器破片が出土した。

遺物は貯蔵穴上面から出土した甕の胴部破片のみで、図示できるものはなかった。

出土した甕の胴部破片の時期は、6世紀のものと思われることから、住居跡の時期もその頃のものと考えておきたい。



第143図 第223号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第75表 第223・224号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	飛出率(%)	備考	出土位置
1	円筒埴輪	-	(4.9)	-	ADEFH	普通	明赤褐	破片	外面タテハケ	内面ヨコハケ
2	円筒埴輪	-	(3.8)	-	ADKHJ	普通	橙	破片	外面タテハケ	内面ナデ、指紋あり

第223号住居跡 (第143図)

調査区の中央、BB-43・44グリッドに位置する。

第224号住居跡と重複し、これより新しい。

平面形は方形である。

規模は長軸2.9m、短軸2.7m、深さ0.02mである。

主軸方向は、N-90°-Eとなる。

床面は平坦で、壁溝はなかった。ピットは南北の角に対角に掘られたものと、内側に2基の4基検出

されたがどれが支柱穴となるか不明である。床下土壙が住居跡中央に検出された。1m×0.95mの楕円形で深さは10cmを測り、断面は皿状を呈する。

カマドは南東の角に造られていた。燃焼部は住居跡の角から斜めに伸び、煙道との境は明瞭でない。煙道先端までの長さは1.5mである。燃焼部から煙道にかけて非常に良く焼けており、上層断面の5層は天井崩落上である。火床面は床面より僅かに下が

っている程度である。袖は検出されなかった。遺物の出土する位置から見ても、第209号住居跡や第214号住居跡と同じく、カマド本体は住居跡内には造らず、住居跡の角に外側に張り出して造ることによって袖がない構造の可能性を考えておきたい。ただし、埴輪片が出土していることから、埴輪を補強材として使っていたことは考えられる。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、主にカマド内から土師器片が少量出土したが図示できたのは埴輪片のみである。

時期は同じような構造を持つ他の住居跡の例から10世紀と考える。

第224号住居跡 (第144図)

調査区の西側、BB-43・44グリッドに位置する。第223・225・236号住居跡と重複関係にある。第223号住居跡より占く、土層断面では第225号住居跡より占いと観察された。第236号住居跡との新旧関係は捉えていない。

平面形は方形である。規模は長軸5.38m、短軸5.1m、深さ0.13mである。主軸方向は、N-60°-Wとなる。

床面は平坦で、住居跡中央部は踏みしめられて非常に固くなっていた。壁溝はカマドのある西壁際には検出されなかった。柱穴は複数検出されたが、主柱穴と思われるのは、床面では北隅の1基だけで、掘り方を下げていないため他は検出できなかった。

カマドは北西壁の左寄りに造られていた。燃焼部はほぼ壁内に取まっている。火床面は床面より約5cm下がっており、土層断面の3層が天井崩落上と考えられる。袖は両側とも約1mの長さがあり、白色粘土を混合して造られていた。燃焼部の規模は、110cm×48cmである。

貯蔵穴はカマドの左側に掘り込まれていた。長軸100cm、短軸65cmの長方形で、深さは26cmである。覆土は少量の焼土とロームを多量含んでおり、埋め戻された可能性がある。遺物は覆土上位から土師器

坏片などが少量出土した。

カマド対面の南東壁の右寄りに焼土と白色粘土を含む掘り込みが検出された。カマド跡と思われる、本住居跡はカマドを付け替えているものと推定された。旧カマドは壁を40cmほど掘り込んでおり、掘り方は円形を呈する。旧カマドに対応する貯蔵穴は、やや小さいがカマド右側の掘り込みと考える。

遺物は、カマドと貯蔵穴周辺から、土師器坏、甕等が出土した。また、住居跡の南西壁際に沿って編物石が出土した。

時期は6世紀前半を考える。

第225号住居跡 (第144図)

調査区の西側DD-44グリッドに位置する。第182・224号住居跡、粘土採掘坑と重複関係にある。第224号住居跡、粘土採掘坑よりは新しいが、第182号住居跡との新旧関係はつかんでいない。住居跡は、確認面が下がってしまったため残りが悪く北辺は検出できなかった。

平面形は長方形となる。規模は長軸4.4m、短軸3.3m、深さ0.1mである。主軸方向は、N-63°-Wとなる。

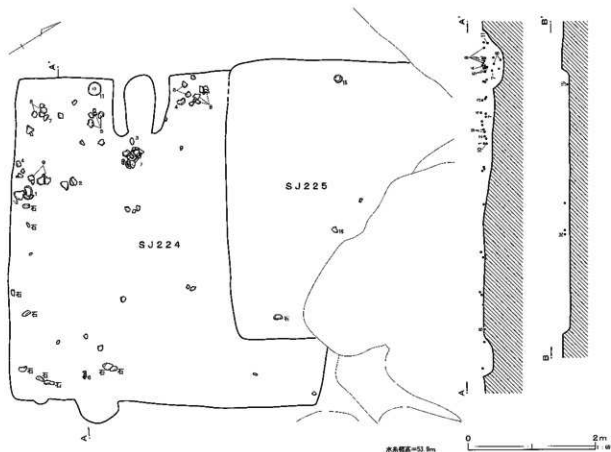
床面は平坦で、壁溝は確認されなかった。ピットは4基確認されたが確実に主柱穴と言えるものはない。可能性としては西壁際と東壁際に対面するものが考えられる。

カマドは残っていないが、調査時の所見では北壁の東寄りに造られていた可能性が考えられている。貯蔵穴とは断定できないが北隅に直径1m、深さ15cmの円形の掘り込みが検出された。

遺物は、主に住居跡の東隅から出土しているが、粘土採掘坑と重複する部分で、床面をやや掘り過ぎている部分があるため、粘土採掘坑に捨てられた遺物の可能性も捨てきれない。

遺物の時期は6世紀前半である。

第226号住居跡 (第147図)



第145図 第224・225号住居跡遺物出土状況

調査区の西側、DD-43グリッドに位置する。第232・244号住居跡、第204号土壇と重複関係にある。第204号土壇より古く、第244号住居跡より新しい。第232号住居跡との新旧はわからなかった。

平面形は長方形である。規模は長軸4.40m、短軸3.36m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-70°-Eである。

床面は平坦で中央部が硬化していたが、カマドの前は第204号土壇によって壊されていたため詳しい状況は不明である。壁溝は検出されなかった。ピットはカマド対面の内壁際に1基検出されたが他には見られず主柱穴は不明である。床下土壇が住居跡中央と南隅寄りに2基検出された。中央のものは2段の掘り込みで深さ65cmと他のものより深い。

カマドは東壁のやや右寄りに造られていた。検出面が低いために残存状況は必ずしも良くないが、燃焼部はほぼ壁内に収まり、火床面は床面よりやや低

い程度である。土層断面では天井崩落土はすでに削平されているものと思われる。袖は両側とも先端が壊されているが、長さは0.9mほどであったと思われる。燃焼部の奥行きも同程度であろうが、幅はやや狭く35cm-40cmである。

貯蔵穴はカマドの右側に造られていた。長さ82cm、幅68cmの隅丸長方形で、深さは45cmである。中から土師器壺等がカマド側から転落したような状況で出土した。

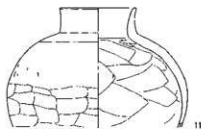
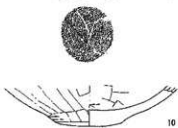
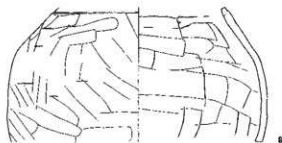
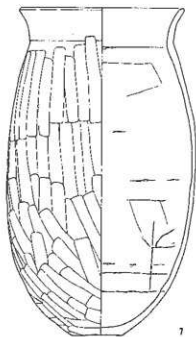
遺物は、主に貯蔵穴及びカマドから出土している。壺は貯蔵穴内と、カマド右側の貯蔵穴との間から出土し、埴、甗などは貯蔵穴から出土している。

時期は5世紀末から6世紀初め頃と考えられる。

第227号住居跡 (第150図)

調査区の西側DD-44グリッドに位置する。第208・253号住居跡、第193・202号土壇、第45号溝跡

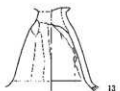
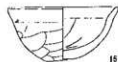
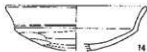
SJ 224



SJ 224-225



SJ 225



第146图 第224・225号住居跡出土遺物

第76表 第224号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	13.5	4.2	-	ADEH	普通	灰黄褐	95	
2	土師器 坏	(14.7)	5.0	-	ABEGH	普通	橙	60	
3	土師器 坏	(14.4)	(3.7)	-	ADEFGH	普通	褐灰	30	
4	土師器 坏	(12.8)	5.3	-	ADEH	普通	橙	50	
5	土師器 坏	12.7	5.4	-	ADEGH	普通	明赤褐	90	
6	手づくね土器	6.4	4.7	(5.0)	DEGH	普通	にぶい黄橙	50	
7	土師器 甕	(17.0)	34.6	5.5	ADEHJ	普通	橙	75	P-2 貯蔵穴
8	土師器 甕	-	(14.2)	-	ABDEHJ	普通	橙	70	貯穴 SJ224・225
9	土師器 甕	-	(14.2)	-	ADEHJ	普通	橙	40	貯蔵穴
10	土師器 甕	-	(4.3)	7.1	ABDEHJ	普通	黄灰	70	
11	土師器 壺	(8.0)	(12.6)	-	ABEGHJ	普通	にぶい橙	90	

第77表 第224・225号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
12	土師器 高坏	-	(3.0)	-	ADEGH	普通	明褐	60	
13	土師器 高坏	-	(8.6)	-	ADEH	普通	にぶい橙	50	

第78表 第225号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
14	土師器 坏	(14.8)	(4.7)	-	AEH	普通	明赤褐	25	
15	土師器 埴	11.5	5.7	2.6	AEGHJ	普通	明赤褐	95	
16	土師器 高坏	-	(1.8)	-	ADEGHJ	普通	明赤褐	90	

と重複関係にある。土壌と溝跡より古い、他の住居跡との新旧は不明である。

平面形は方形である。規模は長軸4.10m、短軸4.00m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-4°-Wである。

住居跡中央には複数の土壌が検出された。その多くは覆土に焼土粒子と炭化物を含みロームブロックが充填されたものであるが、SK2としたものは灰と炭を敷いて埋め戻し、上面は極めてよく焼けた焼土が認められたことから、火を扱う工房跡と考えられる。このような遺構には小鍛冶などが考えられるが、羽口や鉄滓などの遺物は出土していない。壁溝は北東の角とおよび南壁の西側だけ検出された。ピットは通常の住居跡より多く検出された。主柱穴は位置的にはP1-P3かと思われるが断定は出来ない。

カマドは西壁の左寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んでおり、火床面は床面と同じ高さである。土層の3層は天井崩落土である。袖は検出されなかったが土層の状況からカマドは白色粘土を使っ

て構築されていたと考えられる。燃焼部の規模は長さ90cm、幅50cmである。カマド左側の、住居跡の壁との境及び底面は非常によく焼けており、カマドの壁は焼けて煉瓦状のブロックになり、底面は掘り方の下まで赤化していた。遺物は甕片が僅かに出土して他は磨石を転用した支脚が出土した。

住居跡から出土した遺物は坏、小皿等少量である。時期は10世紀後半と考えられる。

第228号住居跡 (第152団)

調査区の西側CC-42・43グリッドに位置する。第205・207・232号住居跡と重複関係にあり、第207号住居跡より新しく、第205号住居跡より古い。第232号住居跡との新旧は不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.50m、短軸2.70mで、深さは第205号住居跡に切られているため0.03mと残りが悪い。主軸方向は、N-144°-Eである。

床面は平坦で、カマド対面の北西側が硬化していた。壁溝は全周し、ピットは本道構に伴うものはな

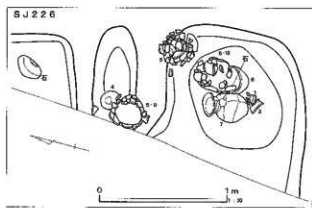
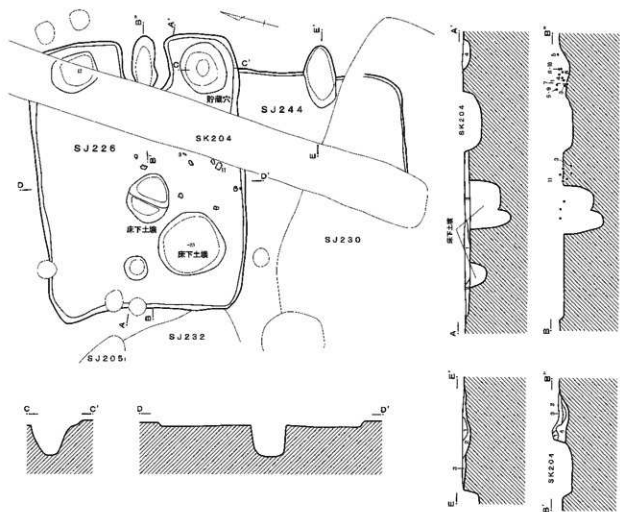


図344 居住部跡

- 1 埋藏地： 地上ブリック・壁や窓・ローム材・灰白地土粒少量
- 2 埋藏地中： 焼付土粒、ローム多量
- 3 埋藏地上： ロームブロック・ローム多量

図345 居住部跡

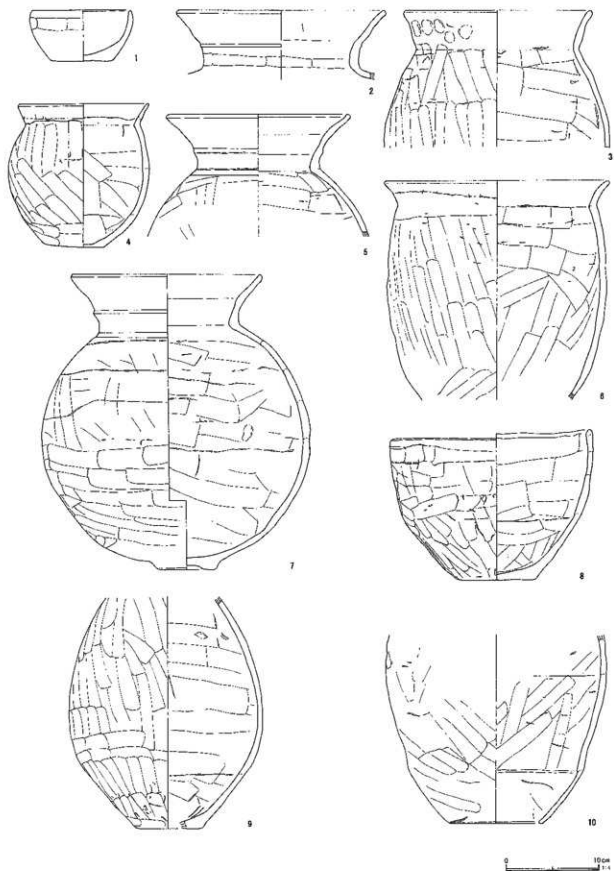
- 1 埋藏地中： ローム埋跡下・粘土質土粒
- 2 埋藏地上： 焼付土粒・ロームの下部・ロームブロック多量、焼土粒・灰化跡少量
- 3 埋藏地の上： 灰化土多量、焼土粒、ロームブロック多量
- 4 埋跡上： 黄灰色土粒多量、方孔多量

図346 居住部跡

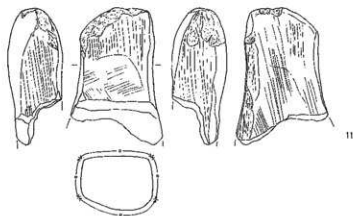
- 1 埋藏地中： 灰土質土・ローム多量
- 2 埋藏地上： 灰白色土・ローム・焼土・灰化跡多量
- 3 埋藏地中： 灰白色土・ロームブロック少量
- 4 埋藏地の上： 埋跡上・ロームブロック少量



第147図 第226・244号住居跡・遺物出土状況



第148图 第226号住居跡出土遺物(1)



第149図 第226号住居跡出土遺物(2)

第79表 第226号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 埴	(10.4)	5.4	6.4	A D E H	普通	黒褐色	50	貯蔵穴
2	土師器 甕	(21.8)	(7.4)	-	A B D E H J	普通	にぶい黄褐色	25	
3	土師器 甕	(19.6)	(14.5)	-	A B D E H J	普通	にぶい黄褐色	40	貯蔵穴
4	土師器 小型甕	13.7	15.2	6.2	A D E H	普通	橙	100	カマド
5	土師器 甕	(18.8)	(13.0)	-	A E G H	普通	橙	50	カマド外側
6	土師器 甕	(23.6)	(23.1)	-	A D E H	普通	明赤褐色	40	貯蔵穴
7	土師器 甕	20.0	31.4	7.4	A D E H	普通	明赤褐色	90	貯蔵穴
8	土師器 甕	21.1	15.8	8.4	A B D G H J	普通	にぶい橙	95	貯蔵穴 掘り跡
9	土師器 甕	-	(24.5)	7.4	A B D E H J	普通	橙	60	カマド
10	土師器 甕	-	(20.0)	(10.0)	A E H J	普通	明赤褐色	25	貯蔵穴
11	砥石	長さ(14.4)cm 幅(9.8)cm		重さ859.1g					砥面4面

かった。

カマドは南東壁の右寄りに造られていた。燃焼部の半分は壁を掘り込んでおり、大きさは長さ88cm、幅43cmを測るが残存していたのは底面のみで上部は壊されているため袖などは残っていなかった。貯蔵穴も検出されなかった。

遺物は、少なく図示できたのは土師器坏1点と棒状の礫を利用した砥石と思われるもののみである。

時期は7世紀と考えておきたい。

第229号住居跡(第154図)

調査区の西側、D D-41・42グリッドに位置する。第195号土壌、第44号溝跡と重複関係にあり、いずれよりも古いと考えられる。

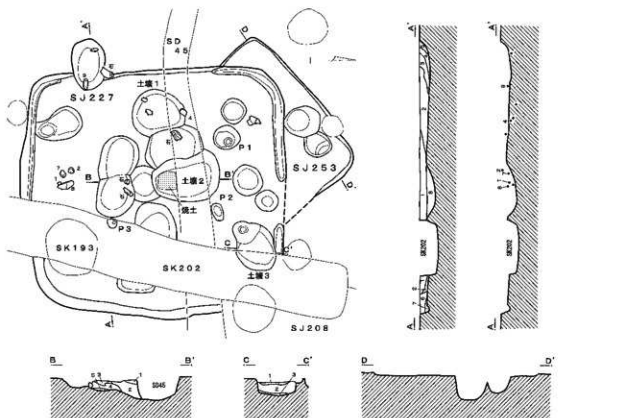
平面形は方形である。規模は長軸5.46m、短軸5.32mで、深さは0.02mと非常に残りが悪い。主軸

方向は、N-105°-Eである。

床面は平坦で柱穴の内側が良く踏み固められている。壁溝はカマド部分を除いて全周していたと思われる。柱穴は住居跡の対角線状に検出された。直径25cm程度でP4以外は深さが50cmを超える。床下土壌が南西隅に掘り込まれていた。隅丸長方形で浅い皿状を呈する。

カマドは東壁のやや右寄りに検出された。燃焼部は壁の中に入っているが、残存していたのは掘り方の底部だけであった。袖などは残っていなかったため詳細は不明である。

貯蔵穴はカマド右側に検出されたが、カマドからは離れて住居跡の角に掘り込まれていた。直径約60cmの円形で深さは20cmであった。中からは土師器高坏が3個体出土した。覆上位からの出土で貯蔵穴が埋まる過程で転落若しくは捨てられたものと思わ



第227号住居跡

- 1 西側内室 ローム小ブロック・粘土多量、礎石少量
- 2 礎石土 土壌1
- 3 礎石土 礎石上・土壌1
- 4 西側内室 礎石上・土壌1
- 5 西側内室 礎石上・土壌1
- 6 西側内室 礎石上・土壌1
- 7 西側内室 礎石上・土壌1
- 8 西側内室 礎石上・土壌1
- 9 西側内室 礎石上・土壌1

第227号住居跡土壌2

- 1 礎石 礎石上
- 2 礎石土 礎石上・土壌1
- 3 礎石土 礎石上・土壌1
- 4 礎石土 礎石上・土壌1
- 5 礎石土 礎石上・土壌1
- 6 礎石土 礎石上・土壌1
- 7 礎石土 礎石上・土壌1
- 8 礎石土 礎石上・土壌1
- 9 礎石土 礎石上・土壌1

第150号 第227・253号住居跡

れる。

遺物は貯蔵穴から出土したものである。高坏3個体が図示できた。いずれも短い脚を持つもので6世紀後半に位置付けられる。

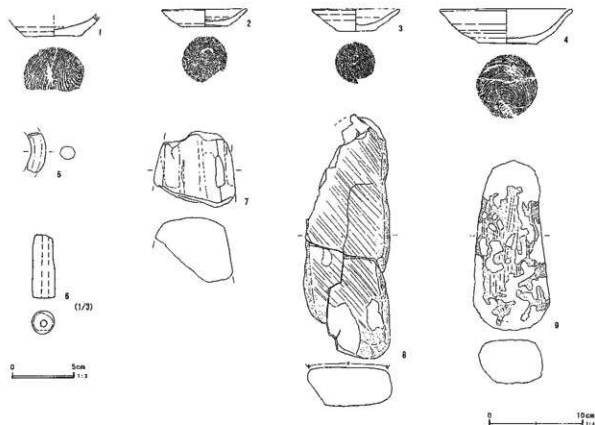
第230号住居跡 (第155図)

調査区の中央、CC・DD-43グリッドに位置する。第231・244号住居跡、第204号土壌、第45号溝跡と重複関係にある。床面で検出したため土層の観察が出来ず、遺構の新旧関係ははっきりしないが第204号土壌は形態から中世以降の土壌と考えられ、第45号溝跡は本住居跡より新しいと思われる。第231号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸5.30m、短軸4.34mで、深さは床面で検出したため殆どない状態である。主軸方向は、N-95°-Eである。

床面の残存状態はあまり良くないため詳細は不明である。壁溝は西側の両角が切れているが本来は浅くあった可能性もある。ピットは西壁沿いに検出されたが主柱穴とはならない。北西隅に小土城状の掘り込みが2基並んで検出され、1基からは遺物が出土した。

カマドは東壁の右寄りに造られていたが、残存状態が非常に悪く、焼土粒を含みロームブロックを主体とする掘り方の底部が検出されただけである。燃焼部は壁内に取まっていたようであるが、火床面の



第151図 第227号住居跡出土遺物

第80表 第227号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 環	-	(2.4)	6.2	A E H I	普通	にぶい褐	50	酸化焰焼成
2	ロクロ 小皿	8.9	1.9	4.8	A D E G	普通	にぶい橙	100	雲母多量含む
3	ロクロ 小皿	9.2	2.4	4.1	A D E G H	普通	にぶい黄橙	60	
4	ロクロ 環	13.9	3.7	6.3	A D E G H	普通	にぶい黄橙	90	
5	不明上製品	長さ(4.2)cm	幅1.5cm		A D E G J	普通	灰褐色	100	断面径1.5cmの槽円形 把手状
6	土鐘	長さ4.9cm	直径1.8cm		A D E G	普通	橙	100	S K 2 孔径0.5cm
7	不明上製品	長さ(8.1)cm	幅(8.7)cm		E G	普通	明赤褐	50	二次焼成により脆い
8	砥石	長さ25.7cm	幅9.8cm	厚さ4.1cm	重さ1511.1g				
9	支脚	長さ(18.0)cm	幅(8.1)cm	厚さ(4.6)cm	重さ1046.0g				カマド 砥石を支脚に転用

状況などはわからない。袖も残っていないかった。

貯蔵穴は前述の西壁際に検出された土塊状の掘り込みと考えられる。直径58cmの円形で、深さは22cmである。壁との隙間が殆どない状態で、土師器甕、高環などが継まって入っていた。また、甕の中には、鉢が入れ子状態で入っていた。

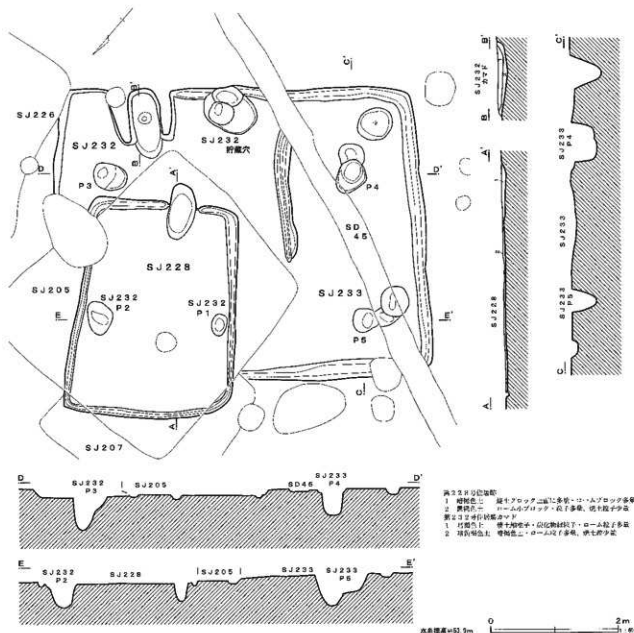
遺物は貯蔵穴から出土したものである。土師器甕、高環、鉢であるが、甕は胴部が寛ケズリされるが頸部にはハケ目が残っている。

時期は5世紀末から6世紀初め頃と考えられる。

第231号住居跡 (第155図)

調査区の中央、DD-43グリッドに位置する。第230号住居跡、第45号溝跡と重複関係にある。第45号溝跡よりは古いと思われるが、第230号住居跡との新旧関係はよくわからなかった。

平面形は、第230号住居跡によって大部分が壊されているため不明であるが、おそらく長方形と推定される。残存していた規模は南北方向に2.30m、東西方向は1.10mである。主軸方向は、N-103°-Eである。



第152図 第228・232・233号住居跡

床面で検出したため残存状況は良くない。壁溝やピットは検出されなかった。

カマドや貯蔵穴も検出されなかった。

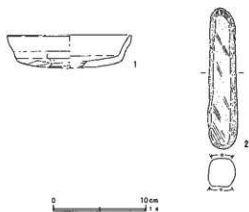
遺物も出土しなかったため、時期は不明である。

第232・233号住居跡 (第152図)

調査区の中央C C-42・43グリッドに位置する。

床面で検出しやや深めに掘った。第205・207・226・228号住居跡、第45号溝跡と重複関係にある。

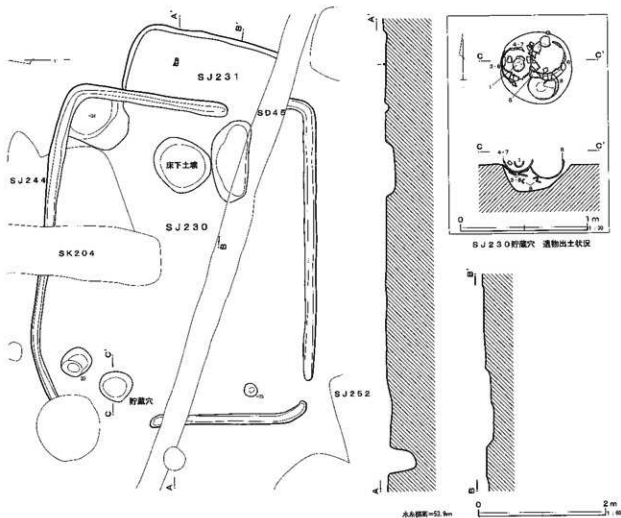
床面で検出したため他の遺構との新旧関係はわから



第153図 第228号住居跡出土遺物

第82表 第229号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	淵高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	(15.5)	9.6	10.0	A D E G H	普通	明赤褐	65	内形剝離多
2	土師器 高坏	15.4	10.1	9.9	A B D E G H	普通	明赤褐	95	
3	土師器 高坏	-	7.0	(11.0)	A D E H I	普通	明赤褐	60	



第155図 第230・231号住居跡・遺物出土状況

なかったが、第45号溝跡よりは古いと思われる、他の住居跡の時期や形態から第205・207・228号住居跡よりは古いと思われる。

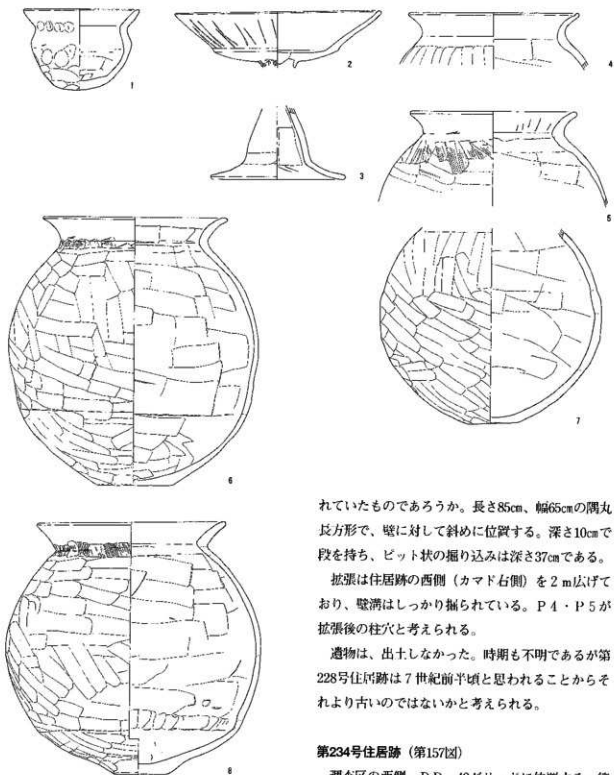
住居跡の1/3ほどに壁溝状の溝が検出された事から、調査時に本住居跡は拡張していると判断し、拡張後の住居跡について第233号の番号を付した。この溝については、住居跡内の仕切りを示すという見方もできようが、ここでは拡張しているという前提で記述する。拡張前の住居跡はカマドの軸方向に長方形を呈し、長軸4.65m、短軸3.9mを測る。主軸方

向は、 $N-142^{\circ}-E$ である。

床面の状態はよく分からないが壁溝はカマドの左から北壁には検出されなかった。柱穴はP1-P3の3基を検出したが1基は検出できなかった。

カマドは北東壁に造られていた。燃焼部はほぼ壁内に収まっている。火床面は床と同じ高さであったと思われる、袖は長さ90cmである。燃焼部の規模は110cm×50cmで中央に支脚を立てた小ビットが検出された。

貯蔵穴は、カマドの右側に、壁に接して掘り込ま



第156号 第230号住居跡出土遺物

れていたものであろうか。長さ85cm、幅65cmの隅丸長方形で、壁に対して斜めに位置する。深さ10cmで段を持ち、ピット状の掘り込みは深さ37cmである。

拡張は住居跡の西側（カマド右側）を2m広げており、壁溝はしっかり掘られている。P4・P5が拡張後の柱穴と考えられる。

遺物は、出土しなかった。時期も不明であるが第228号住居跡は7世紀前半頃と思われることからそれより古いのではないかと考えられる。

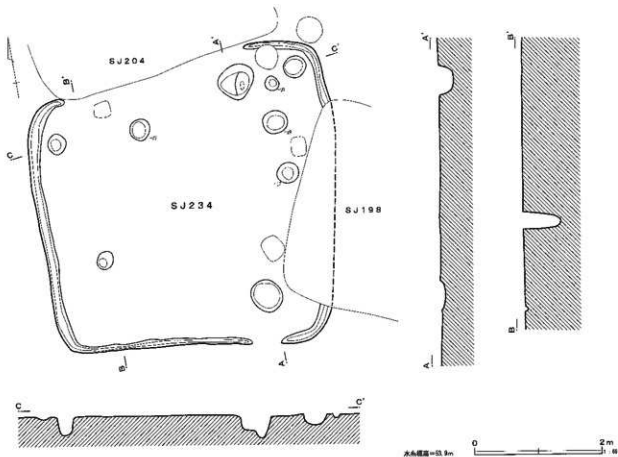
第234号住居跡（第157号）

調査区の西側、DD-42グリッドに位置する。第198・204号住居跡と重複関係にある。床面を検出したので土層による観察は出来なかったが、他の遺構の状況から本住居跡が最も古いと考えられる。

平面形は東辺が西辺より長く台形状を呈する。規模は、長軸（東西）4.86mで、短軸は東辺が4.82m、

第83表 第230号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 鉢	(12.0)	8.5	-	ADEGHI	普通	明赤褐	70	土器群
2	土師器 高坏	21.6	6.1	-	ADEH	普通	明赤褐	90	
3	土師器 高坏	-	(7.8)	(14.2)	AEG	普通	明赤褐	25	土器群その1
4	土師器 甕	(17.6)	(5.9)	-	ABDEHJ	普通	褐	15	土器群その1
5	土師器 甕	(17.4)	(10.0)	-	ABDEHI	普通	褐	25	
6	土師器 甕	19.7	26.7	5.7	ADEH	普通	にふい黄褐	60	土器群その1
7	土師器 甕	-	(20.7)	4.6	ABEGHIJ	普通	にふい赤褐	50	土器群その1
8	土師器 甕	19.2	28.4	7.9	ADEGHI	普通	黒褐	75	



第157図 第234号住居跡

西辺は4.13mと約70cmの差があった。軸方向は、N-88°-Eとなる。

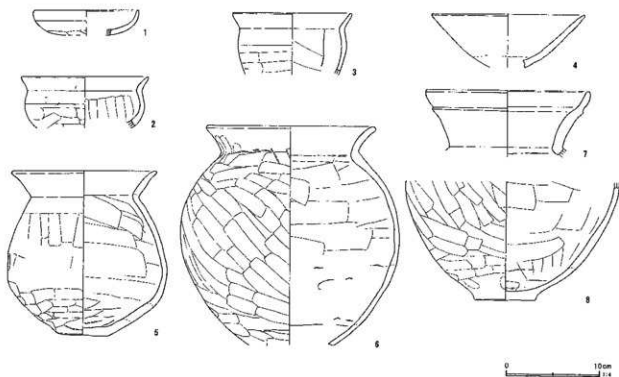
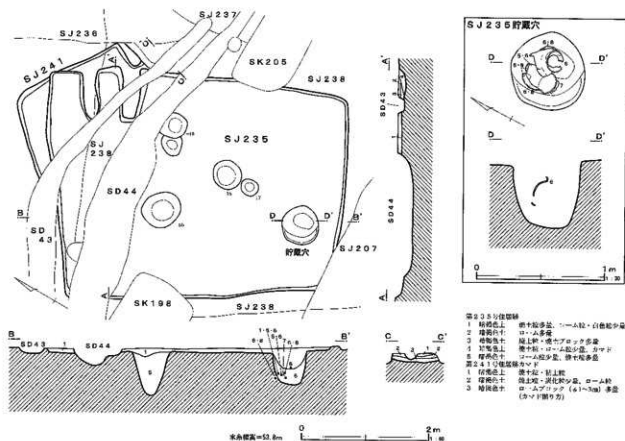
床面は、あまり残存状態が良くないため詳細は不明である。壁溝は他の遺構と重複する部分や、浅くなる部分で切れているが基本的には全周していたものと思われる。ピットは住居跡の北東寄りを中心に複数検出されたが、主柱穴を断定する事は出来なかった。

カマドや炉、貯蔵穴も検出されなかった。

遺物も出土せず時期は不明であるが、第198・204号住居跡は共に6世紀前半と考えられることから、それ以前に求める事が出来る。

第235号住居跡 (第158図)

調査区の西側BB・CC-42・43グリッドに位置する。第207・238・241号住居跡、第198・205号土塼、第43・44号溝跡と重複関係にある。第241号住居跡よりは新しいが、他の遺構より古いと考えられ



第158図 第235・241号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第84表 第235号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	(11.0)	(2.6)	-	ADEH	普通	橙	25	貯蔵穴
2	土師器 埴	(13.4)	5.9	-	ADEG	普通	にぶい橙	15	
3	土師器 埴	(12.6)	(6.6)	-	ADEH	普通	にぶい赤褐	20	
4	土師器 高坏	(16.2)	(6.6)	-	ADEGH	普通	明赤褐	20	
5	土師器 小型甕	15.1	17.3	5.6	ARDEGHJ	普通	明赤褐	95	貯蔵穴
6	土師器 甕	17.5	(23.2)	-	ABDEHI	普通	暗赤褐	90	貯蔵穴
7	土師器 甕	17.0	(7.9)	-	ADEH	普通	にぶい黄褐	100	貯蔵穴
8	土師器 甕	-	(12.5)	6.5	ADEH	普通	にぶい黄褐	70	貯蔵穴

る。

平面形は長方形である。規模は長軸4.80m、短軸3.50m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-61°-Eとなる。

床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。ピットは中央部に三角形の配置で検出されたが主柱穴とは考え難い。

カマドは東壁の左寄りに造られていた。第43号溝跡が斜めに貫通し残存状態は良くない。燃焼部は壁内に収まっており、袖は長さ70cm前後である。

貯蔵穴はカマドと対角線上の住居跡南隅に検出された。直径約1.2mの円形で一方に浅い段を持ち、深さは52cmである。中には土師器甕、壺口縁部、高坏などが纏まって入っていた。

遺物は、主に貯蔵穴から出土したものであるが、1の坏は混入である。

時期は6世紀初め頃と考えておきたい。

第236号住居跡 (第159図)

調査区の西側BB-42・43、CC-43グリッドに位置する。第197・224・237・238・239・240・241号住居跡、第205号土壌、第43・44号溝跡と重複関係にある。溝跡と土壌より古く、住居跡では第197・224・237号住居跡より古く、第239・240・241号住居跡より新しい。第238号住居跡との新旧は不明である。

平面形はほぼ方形である。規模は長軸5.70m、短軸5.50m、深さ0.1mである。主軸方向はN-59°-Eである。

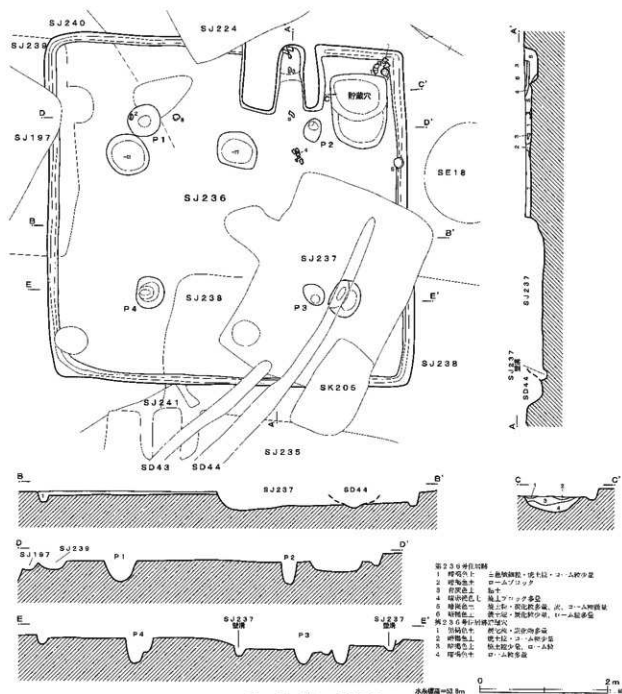
床面は平坦で、壁溝は全周する。柱穴はP1-P4と考えられる。P1についてはカマドに近すぎるため疑問が残るが、他に該当するものが無いためこれを充てておく。

カマドは東壁の右寄りに造られていた。白色粘土を使用しており、検出時にはこの白色粘土が約1.3m×1mのきっちりした長方形に確認された。向かって右側半分は燃焼部の焼土が見られ、左半分は白色粘土のみであった事から、カマドの左袖が異様に幅広くなる。何らかの目的があってこのような形態となったのであろうが、この部分の上部構造に興味を持たれる。燃焼部は壁内に収まっており、カマドの壁はよく焼けていた。燃焼部の幅は40-50cmである。上層断面の3層、4層は天井崩落土であり、5層が火床面の覆土にあたると思われる。カマド奥の底面が低く、壁際で立上る構造となっており、天井崩落土の状況からは土器の掛け口がカマド手前側にあったとは考え難く、炎の引きの強い壁際に掛け口があったと見るべきであろう。その場合煙道が問題となるが、壁際で立上った後、ある程度の高さで外に出す構造と考えるほかなさそうである。

貯蔵穴はカマドの右側に掘り込まれていた。1.2m×0.9mの長方形で、カマドと壁の間に嵌めこんだような位置である。手前側半分は浅く深さ12cmほどで、奥は深さ25cmである。

遺物は少ないが、住居跡の北東隅、貯蔵穴の脇から土師器坏が出土した他、カマドの前及びカマド内から出土した。須恵器坏身模倣坏が目立つ。

時期は6世紀前半である。



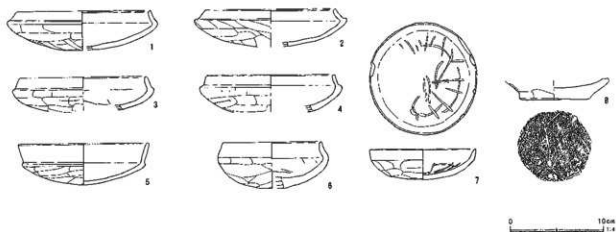
第159図 第236号住居跡

第237号住居跡 (第161岡)

調査区の西側BB・CC-43グリッドに位置する。第236・238号住居跡、第205号上墳、第43・44号溝跡と重複関係にある。溝跡と上墳より古く住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.30m、短軸2.30m、深さ0.20mである。主軸方向は、 $N-0^\circ$ である。

床面は貼床され硬く締まっていた。特にカマドの前は踏みしめられて窪んでおり非常に硬くなっていた。壁溝は北壁の内側だけ切れていたが他は幅15cm前後で廻っていた。ピットは検出されなかった。床下土壌が住居跡中央に検出された。南側は第44号溝跡によって壊されているが、直径1.1mの円形で深さは35cmを測る。断面は他の住居跡の床下土壌のような皿状を呈するものではなく、壁はほぼ垂直に立



第160図 第236号住居跡出土遺物

第85表 第236号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	14.2	4.3	-	ADEGH	普通	にぶい褐	80	貯蔵穴
2	土師器 坏	(13.8)	(3.9)	-	ADEGH	普通	黒褐	25	
3	土師器 坏	(13.2)	(3.5)	-	ADEH	普通	にぶい橙	25	
4	土師器 坏	(13.4)	(3.9)	-	ADEGH	普通	明赤褐	20	
5	土師器 坏	13.6	4.4	-	ADEGH	普通	にぶい黄褐	100	
6	土師器 坏	10.4	4.9	-	ADECH	普通	明赤褐	75	
7	土師器 坏	11.3	3.2	-	ADEGH	良好	明赤褐	100	
8	土師器 甕	-	(2.1)	7.4	ABEHIJ	普通	明赤褐	100	

上っていた。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で埋め戻されていた。

カマドは北壁のやや右寄りに造られていた。燃焼部は壁を大きく掘り込んでおり、壁外に出る。白色粘土で構築されていたもようので七層断面の2層・3層は天井崩落土若しくはその影響を受けていると考えられる。5層は火床面の灰層である事から、火床面は床面とほぼ同じ高さかやや低い程度である。袖は両側とも内側に僅かに認められるが、燃焼部が外側にあるという構造からすれば、必要以上に住居跡内に袖部分を伸ばす必要はなかったであろう。カマド内からは構築材に使われていたと思われる片岩が散乱した状態で出土した。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、カマドの左袖の前から坏が出土した他は土師器甕等が少量出土しただけである。

時期は9世紀前半を考慮しておきたい。

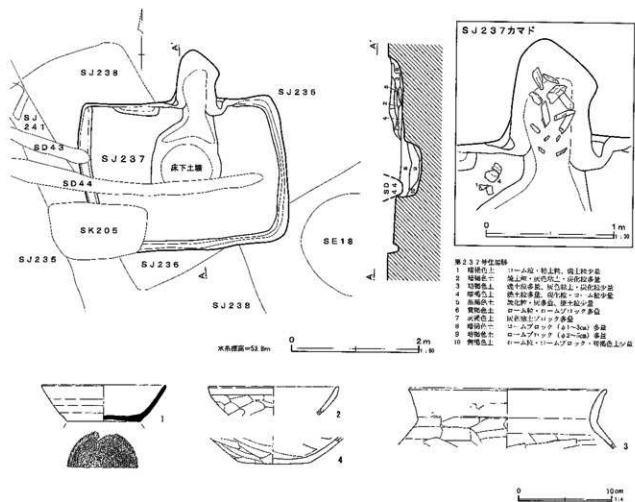
第238号住居跡 (第162図)

調査区の西側BB・CC-42・43グリッドに位置する。第205・207・235・236・237・241号住居跡、第198・205・211号上層、第43・44号溝跡と重複関係にある。第205・237・207・236号住居跡よりは占く、第235・241号住居跡より新しいと考えられる。また、土壌と溝跡よりも占いと考えられる。

平面形はほぼ方形である。規模は長軸6.36m、短軸6.20m、深さ0.11mである。主軸方向は、N-29°-Wとなる。

床面は他の住居跡や溝跡によって壊されており、状態は良くない。住居跡東側に見られたが西側では検出できなかった。ピットは南側を中心に多く検出されたが全てが木遺構に伴うかは分らない。P1~P4を主柱穴と考えておく。

カマドは検出されなかった。おそらく第237号住居跡によって壊されているものと思われる。貯蔵穴も検出されなかった。



第161図 第237号住居跡・遺物出土状況・出土遺物

第86表 第237号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.0)	3.8	7.8	EH	普通	灰白	40	
2	土師器 坏	(13.6)	(3.0)	-	DH H	普通	明褐色	25	
3	土師器 坏	(20.8)	(6.2)	-	ADEGH	普通	橙	25	
4	土師器 甕	-	(2.9)	7.7	ADEFGH	普通	褐色	70	

遺物は、土師器の坏などが僅かに出土している。時期は6世紀と考えておきたい。

第239号住居跡 (第164図)

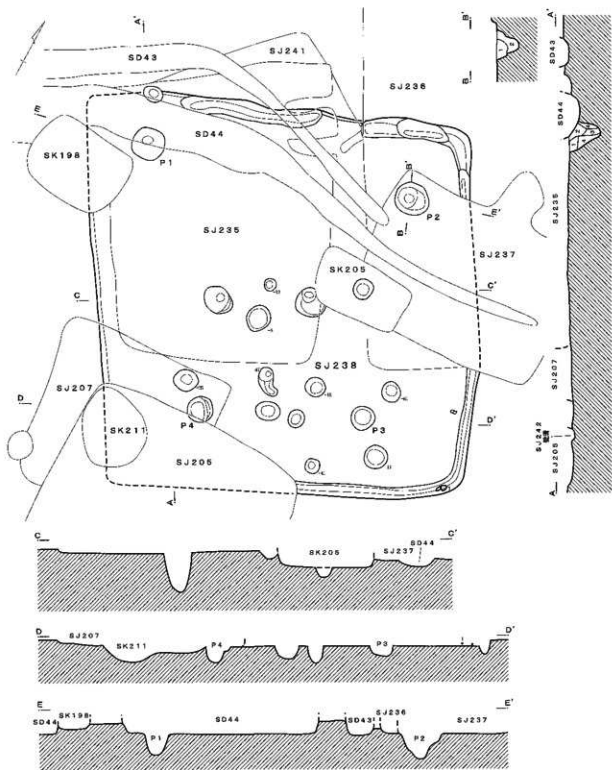
調査区の西側BB-42・43グリッドに位置する。第197・236・240号住居跡と重複関係にある。第197・236号住居跡よりは古いが、第240号住居跡との新旧関係はよくわからなかった。

平面形はカマドのある南壁の左側が内側に斜めに入るため、方形が崩れている。規模は長軸3.46m、

短軸3.22m、深さ0.05mと浅い。主軸方向は、N-155°-Eとなる。

床面は第197号住居跡によって大部分が壊されていたため、詳細は不明である。壁溝は北壁側だけ検出された。ピットは北壁際の中央と東壁際に検出されただけで支柱穴となるものはなかった。

カマドは南壁の左寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込んでいるが、第236号住居跡が上にあっため残存状態は良くない。おそらく火床面の下部がかろうじて残っている程度と思われる。袖は検出



第238号住居跡A-A'

- 1 砂質土: 11-ム多量, ロ-ムブロック少量
 - 2 砂質土上: コ-ム・ロ-ムブロック少量
 - 3 砂質土上: コ-ム・ロ-ムブロック多量
 - 4 砂質土上: 11-ムブロック多量
- 第238号住居跡跡地 ②
- 1 褐色土: ロ-ム・ロ-ムブロック少量
 - 2 砂質土: 11-ム多量, 灰褐色土少量

水糸厚さ=0.5m



第162図 第238号住居跡

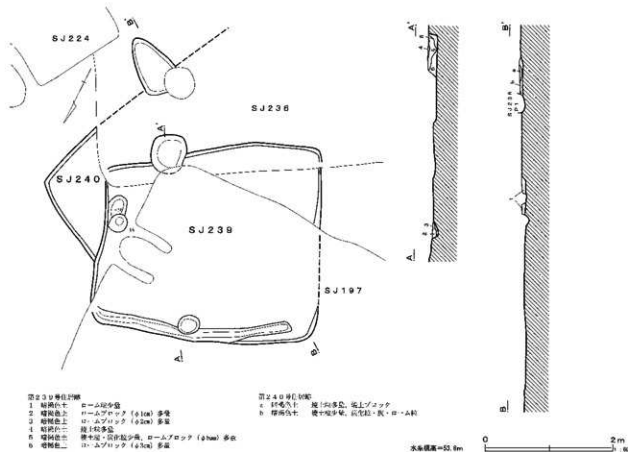


第163図 第238号住居跡出土遺物



第87表 第238号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	試径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 鉢	(19.2)	(6.9)	-	A D E H	普通	にぶい橙	30	
2	土師器 小型壺	(9.4)	(5.3)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	25	



第164図 第239・240号住居跡

されなかった。

遺物は、出土しなかった。

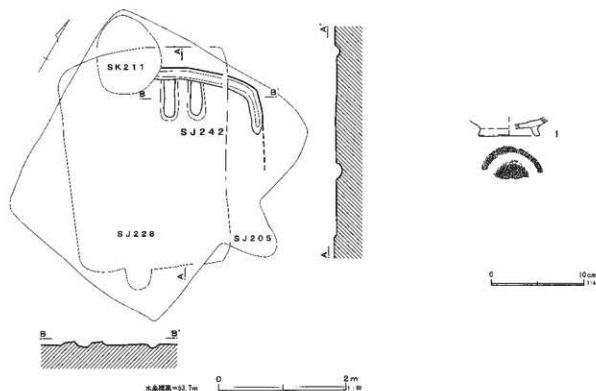
時期は不明であるが第197・236号住居跡はいずれも6世紀代の住居跡と考えられ、これより古いと考えられる。

第240号住居跡 (第164図)

調査区の西側、BB-43グリッドに位置する。第

197・236・239号住居跡と重複関係にある。第197・236号住居跡よりは古いのが、第239号住居跡との新旧関係はわからなかった。

平面形は、新しい住居跡に埋されて不明である。残存していたのは住居跡北東部の角とカマド底部のみであった。検出されたのは住居跡北辺が1.5m、東辺はカマドからの長さを考慮しても2.8mである。深さは殆どない、主軸方向はN-151°-Eである。



第165図 第242号住居跡・出土遺物

第88表 第242号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付碗	-	(2.0)	(6.5)	A D E G J	普通	にぶい樹	50	カマド

床面は殆ど残っていないため状況は不明である。壁溝やピットなどは検出されなかった。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は壁から出るものと思われるが、火床面がかろうじて残っている程度であった。袖が残っていなかった。

遺物は出土しなかったため、時期も不明である。

第241号住居跡 (第158図)

調査区の西側、BB-42・43グリッドに位置する。第235・238・236・237号住居跡、第205号土壌、第43・44号溝跡と重複関係にあり、重複状況から本住居跡が最も古いと考えられる。

平面形は新しい住居跡に壊されて不明である。残存していたのは住居跡北東部とカマドの左半分のみであった。検出されたのは住居跡北東辺がカマドの左側の残存で1.85m、北西辺は1.30mであった。深

さは非常に浅く床面も残存状況は良くない。主軸方向は、N-35°Eである。

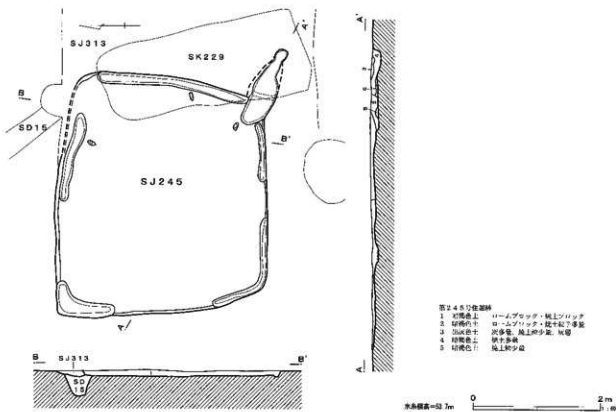
壁溝やピットなどは検出されなかった。

カマドは北東壁に造られていた。左袖の下部と燃焼部底面の焼上が残っていたが、右袖とカマド先端部から右側は第236号住居跡と第43号溝跡によって壊されていたため、詳しい状況は不明である。

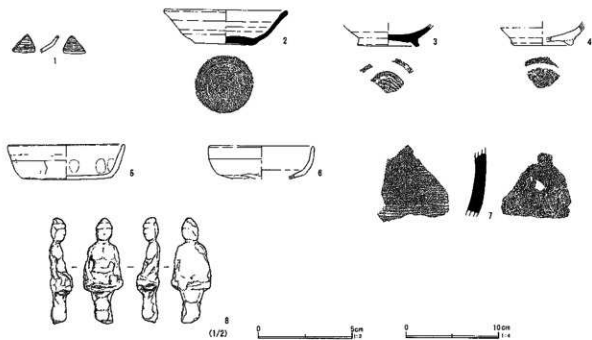
遺物は出土しなかったため時期も不明であるが、重複している住居跡の年代を考慮すると6世紀の古い時期と考えられる。

第242号住居跡 (第165図)

調査区の西側CC-42・43グリッドに位置する。第205・207・228号住居跡と重複関係にある。これらの住居跡の床面下で検出したことから、本住居跡が最も古いと考えられる。



第166図 第245号住居跡



第167図 第245号住居跡出土遺物

第89表 第245号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	埴輪 覆輪	-	-	-	E	良好	オリーブ灰	-	
2	須恵器 坏	13.0	3.4	6.3	BEJ	普通	灰白	60	
3	須恵器 高台付埴	-	(2.4)	(6.6)	AE	普通	灰	25	
4	ロクロ 高台付埴	-	2.5	(6.0)	A EH	普通	明赤褐色	25	
5	土師器 牙	(12.2)	3.7	(9.5)	A DEH	普通	にぶい黒	50	
6	土師器 坏	(11.0)	(3.5)	-	A DEH	普通	黒	25	
7	須恵器 甕	-	-	-	E	普通	灰黄	-	
8	金銅仏	総高5.6cm 像高3.5cm		白産高0.5cm	台座高2.0cm	重さ22.7g			金箔剥落

検出したのはカマドの底部と壁溝の一部のみで、他の部分は新しい遺構によって壊されていたため詳細は不明である。

遺物は出土しなかったため、時期も不明である。

第244号住居跡(第147岡)

調査区の西側CC-43グリッドに位置する。第226・230号住居跡、第204号土壌と重複関係にあり、重複関係から本住居跡が最も古いと思われる。

検出されたのはカマドのある東辺と南辺の一部で北辺は第226号住居跡によって、南辺の西側は第204号土壌と第230号住居跡によって壊されていた。また、西辺は検出されなかった。よって平面形は不明といわざるを得ない。検出されたのは東辺が2.66m、南辺1.50mである。深さは殆どなかった。主軸方向はN-72°-Eである。

床面の状況は不明で、壁溝は無かったようである。ピット等の施設も検出されなかった。

カマドは東壁に造られていた。底部が残っていただけであるが、やや右に寄っていると思われ、燃焼部は半分ほど壁外に出ているようである。残っていた覆土から白色粘土を使っていたことが窺われる。袖は残存していなかった。

遺物は出土しなかったため、時期も不明である。

第245号住居跡(第166岡)

調査区の中央CC-48・49グリッドに位置する。第13号住居跡、第3号製鉄炉跡、第229号土壌、第15号溝跡と重複関係にあり、第313号住居跡、第229

号土壌、第15号溝跡より新しい。第3号製鉄炉跡との新旧関係は、本住居跡が新しいと思われるが、覆土が薄くはっきりしない。

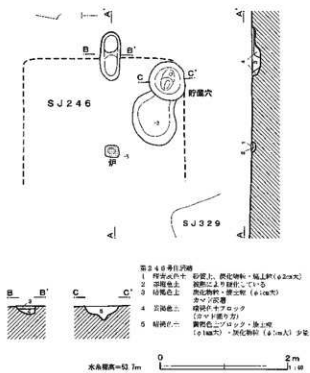
平面形は北辺が南辺より長く台形を呈する。北辺は長さ3.85m、南辺は3.10mである。南北は3.45mを測る。主軸方向は、N-90°-Eである。

床面は、北西側が比較的硬化していた。壁溝は所々切れており、東壁以外は各壁の中央が切れているのが目立つ。柱穴は検出されなかった。

カマドは南東角に作られていた。燃焼部は外側に掘り込んでおり、その先に長さ60cmの煙道が延びる。煙道先端は直径20cmの円形の煙出しとなる。土層断面では灰層が検出面から見られることから、かなり上面が削平されていると思われる。貯炭穴は検出されなかった。

床面精査中に灰底と思われる円形の還元面、不定形の焼土を伴った浅い窪みなどが検出された。このため、鍛冶関係の工房と推定し調査を進めた。しかし、整理の段階で出土した鉄滓が製鉄滓であることがわかり、遺構は住居跡に製鉄炉が重複していたものと考えられる。製鉄炉については、第3号製鉄炉跡として後述する。

遺物は、遺構確認中に、金銅製の仏像が出土した。如来坐像である。銅製で、X線写真(図版163)からも明らかに中実であることがわかる。背面は平坦であることから、単合范による一鑄と思われる。金箔は既に剥落しており、胸部及び腰部にスが見られる。土中に入ったためか、全体に緑青が吹いており日鼻立ちなどははっきりせず、細部は明瞭でない。



第168図 第246号住居跡

台座は小さく、これも詳細ははっきりしない。湯口は像底で、湯道が削られないまま残っている。他には須恵器片、緑釉陶器片などが覆土中から出土しているが、混入もかなり見られる。

時期は10世紀後半から11世紀を考慮しておきたい。

第246号住居跡 (第168図)

調査区の中央、BB-48グリッドに位置する。非常に残りが悪く、カマド底部と貯蔵穴、それに炉と思われる方形の焼土を確認しただけである。

住居跡は東にカマドを持つものと思われるが、規模や床面の状態などは不明である。

カマドは底部の掘り込みが、長さ70cm、幅30cm残っていた。灰層が僅かに残っており、掘り方は10cmほどで段を持って煙道に続くものと思われる。袖は残っていなかった。

貯蔵穴はカマドの右にあり、直径60cmのほぼ円形である。深さは、確認面から13cmで中央がビット状に窪む。貯蔵穴の西側に接して長さ70cm、深さ3cm

の楕円形の落ち込みが見られた。

炉はカマドから約1mの距離にあり、住居跡の中央付近にあったと考えられる。長軸24cm、短軸19cmの長方形で、深さは7cm遺存していた。中央部が還元しており、周囲は熱により赤化していた。この状況から第245号住居跡と同様の性格の遺構と考えられる。位置的にも、本住居跡は第245号住居跡と約7mしか離れておらず、内容から同じような性格の遺構と考えられる。

遺物が出土しなかったため、時期を推定できないが、第245号住居跡と時期的に人さくずれることはないと考えておきたい。

第247号住居跡 (第169図)

調査区の南側、FF-50グリッドに位置する。位置的には第326号住居跡と重複関係にあるが、第326号住居跡は残存状態が悪く、遺構としての重複は確認できない。しかし、遺構や遺物の内容から本住居跡が古いことは明らかである。

平面形は長方形である。規模は長軸2.94m、短軸2.44m、深さ0.24mである。主軸方向は、N-48°-Wとなる。

床面は平坦で陸床されるが、住居跡南西部が特に顕著であった。壁溝及び柱穴は検出できなかった。

東壁から60cmほど離れて炉が検出された。直径30cmの円形で、特に強く焼けているというわけではないが焼土が見られた。貯蔵穴は検出されなかった。

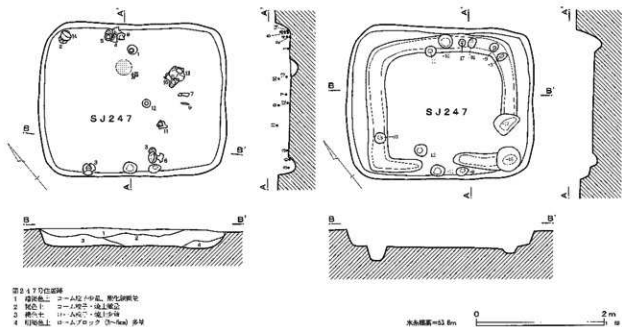
掘り方は住居跡の壁に沿って周囲を深く掘り下げ、中央部は高く掘り残されるものである。周囲の深く掘り下げられた部分に、ビット状の掘り込みが複数見られたが、いずれも柱穴とはならない。

遺物は、覆土中及び床面から土師器の甕、高環などが出土している。

時期は5世紀後半を考慮しておきたい。

第248号住居跡 (第171図)

調査区の南側、GG-50グリッドに位置する。第



第169図 第247号住居跡

15号塚立柱建物跡と重複する位置にあるが、直接重複する柱穴はなく新IIは不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸4.00m、短軸2.80m、深さ0.10mである。主軸方向は、 $N-82^{\circ}-E$ を指す。

床面はカマドの前面がよく踏み固められ硬化していた。壁溝はカマドと貯蔵穴部分を除いて全周する。調査時には、南壁際の壁溝は、幅5cmほどの黒色土が確認されたが、実際には幅は10cmほどに広がったことから、黒色土は壁を抑えるための板状の補強材の痕跡であった可能性もある。ピットは2基確認されたが柱穴となるかどうか断定できない。床下土壌が北壁際に検出された。長径55cm、短径50cmの楕円形で、覆土は暗褐色土にロームブロックを多量に含むものであった。

カマドは東壁の右寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、壁から出ている。火床面は床面よりやや低く、土層断面の2層は天井崩落土、3層が火床面になると思われる。燃焼部の規模は、長さ1.1m、幅0.55mである。袖は白色粘土で造られ、左袖が30cmほど残っていたが、右袖は短く、10cmほどしか検出されなかった。袖の先は貯蔵穴の周縁に

続いていた。或いはこの貯蔵穴の周縁部分に袖が乗っていた可能性も考えられる。

貯蔵穴はカマドの右側で、住居跡の南東隅に掘り込まれていた。長さ85cm、幅55cm、深さ40cmの長方形で、幅10~15cm、高さ5cmの周縁帯があった。周縁帯はロームブロックと白色粘土を少量含む黄褐色土で造られていた。覆土は暗褐色土で下方にロームブロックを含んでいた。

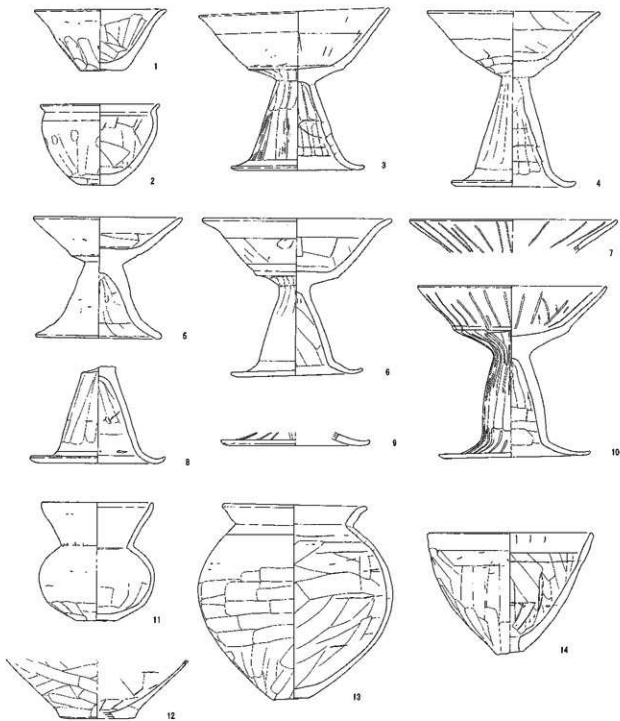
遺物は少量であったが、土師器甕、砥石などが出土した。カマドからは土師器甕の口縁部が出土した。時期は10世紀と考えておきたい。

第249号住居跡 (第173図)

調査区の南側、GG・HH-50グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。残存状況が悪く、確認した段階で既に床面が出ており、中央部には貼床が残っていたが、北側半分は遺存していなかった。

平面形は長方形と思われる。規模は長軸3.88mで、短軸は約2.5mと推定される。主軸方向は、 $N-82^{\circ}-E$ である。

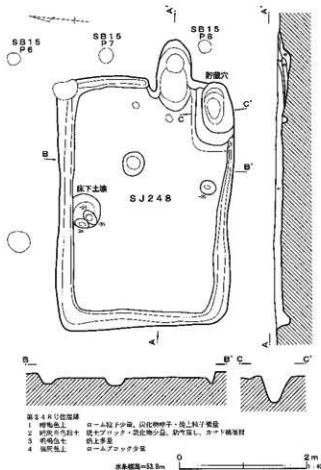
床面の状況は悪く詳細は不明である。壁溝も確認できなかった。ピットは住居跡の東寄りに3基検出



第170图 第247号住居跡出土遺物

第90表 第247号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 鉢	13.8	6.6	4.6	ABDEGH	普通	明赤褐	95	
2	土師器 埴	12.5	8.6	4.2	ADEG	普通	にぶい赤褐	90	
3	土師器 高坏	20.2	17.2	14.2	ADEGH	普通	橙	95	
4	土師器 高坏	18.1	18.5	(13.2)	ADEGH	普通	明赤褐	70	
5	土師器 高坏	(15.8)	12.8	13.4	ADEGH	普通	明赤褐	80	
6	土師器 高坏	20.0	16.8	14.0	ADEGH	普通	橙	95	
7	土師器 高坏	(22.0)	(3.5)	-	ADEGH	普通	明赤褐	30	
8	土師器 高坏	-	10.2	14.4	ADEGH	普通	橙	96	
9	土師器 高坏	-	(1.4)	(15.8)	ADEGH	普通	明赤褐	25	
10	土師器 高坏	20.0	18.2	(16.1)	ADEGH	普通	明赤褐	70	
11	土師器 小型甕	(11.6)	(12.5)	(4.3)	ADEH	普通	明赤褐	80	
12	土師器 甕	-	6.3	8.1	ADEGH	普通	明赤褐	60	
13	土師器 小型甕	15.0	20.7	3.8	ADEH	普通	にぶい赤褐	90	
14	土師器 甕	17.2	12.8	3.0	ADEGH	普通	明赤褐	100	



第171図 第248号住居跡

されたが柱穴となるかどうか断定できない。南西隅に直径60cm、深さ16cmの、円形の土塊状の掘り込みが検出されたが、本住居跡には伴わない可能性がある。中央部に残っていた貼床下から床下土壌が1基検出された。長径65cm、短径60cmの楕円形で、ローム粒子を含む黒灰色土で埋められていた。

カマドは東壁のほぼ中央と思われる位置に造られていた。燃焼部は住居跡の掘り方と同じ深さに掘られ、火床面は床面と同じ高さである。袖は右袖の基部が僅かに残っていたが、もともと袖は長くないものと思われる。確認時にカマド周辺に白色粘土が見られたことから、カマドはこの白色粘土を使って造られていたものと思われる。貯蔵穴は検出されなかった。

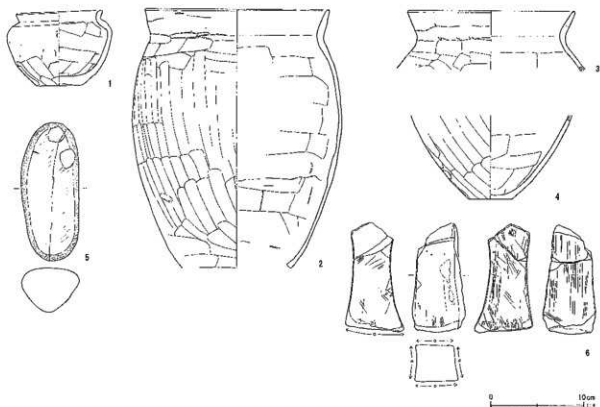
遺物は少量で、図示できたのは土師器の坏・甕が各1点である。

時期は8世紀前半と思われる。

第250号住居跡 (第174図)

調査区の南側、I I—50グリッドに位置する。第18号堀立柱建物跡、第48号溝跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また住居跡の南東部は新しい倒木痕によって壊されている。

平面形は方形である。規模は長軸4.00m、短軸は3.84m、深さ0.25mである。主軸方向は、N—65°—



第172図 第248号住居跡出土遺物

第91表 第248号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 壺	8.9	8.0	4.6	A D E H	普通	にぶい橙	100	床直
2	土師器 甕	(19.4)	(27.3)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	25	カマド
3	土師器 甕	(17.4)	(6.4)	-	A D E G H	普通	にぶい橙	25	カマド 貯蔵穴
4	土師器 甕	-	(8.9)	4.6	A D E H	普通	橙	50	カマド
5	磨石	長さ14.7cm 幅6.2cm 厚さ4.6cm 重さ588.5g							
6	磨石	長さ(11.5)cm 幅6.2cm 厚さ3.9cm 重さ379.7g							紙面5面

Eである。

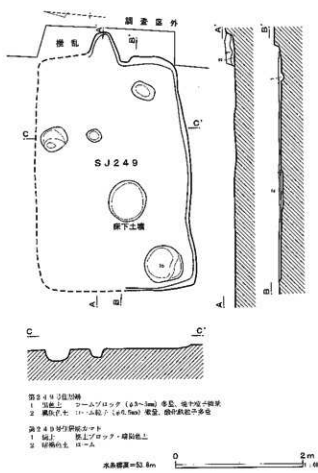
床面は平坦で、カマド前面と住居跡中央部が硬化していた。壁溝は切れ切れに廻っていた。ピットは住居跡の南壁寄りに2基検出されたが、柱穴かどうか断定できなかった。床下土壌が2基検出された。住居跡の中央部で、1基は長さ95cm、幅50cmの隅丸長方形、他方は長さ155cm、幅95cmの不整長方形とも言えるべき形である。

カマドは東壁の右寄りに壁を掘り込んで造られていた。掘り方は浅く先端は斜めに上がる。袖は両袖とも残っていた。長さは70cmで右袖は外側に張り出しやや不自然な格好に見えるが、これは煙道に続く

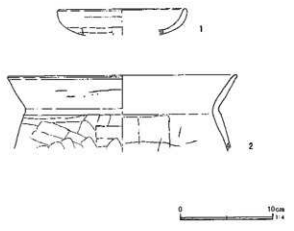
部分が左に寄って狭くなっているためであろう。煙道部分は奥行き50cm、幅60cmで、煙道部分が70cmである。カマド周囲には広い範囲に白色粘土が散布していた。この粘土は、本住居跡が拡張住居であることから古いカマドを撤去した際の粘土を敷いたとも考えられる。

貯蔵穴はカマドの右側に掘り込まれていた。大きさは57cm×40cmの長方形で、深さは33cmであった。覆土は暗褐色土で炭化粒子を少量混入していた。

貼床を除去したところ、壁溝が検出され、本住居跡が拡張されていることがわかった。拡張前の大きさは長軸3.1m、短軸2.75mである。拡張前の北側の



第249号住居跡
 1 土壇上 ワームブロック (43×3cm) 単列、幅巾40cm
 2 焼酎土: 11×6cm (4.5m) 単列、幅巾約20cm
 第249号住居跡の土壇
 1 土壇 土上ブロック・焼酎土
 2 壁跡土 土上



第173号 第249号住居跡・出土遺物

壁溝は3条検出されたことから、拡張は3回行われた可能性がある。

遺物は、須恵器環、土師器の環・甕、紡錘車などが出土している。6はカマドの左袖に構架材として使われていたものであるが、口縁部が「く」の字状を呈し他の甕と明らかに形態上の差が認められる。

時期は9世紀前半である。

第251号住居跡 (第176号)

調査区の南側、J J-49グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

平面形は長方形である。規模は長軸が3.48m、短軸は2.48mである。深さは0.20mである。主軸方向は、N-90°-Eを指す。

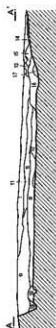
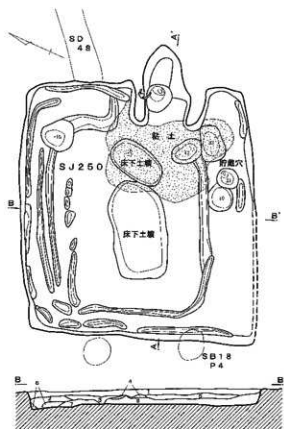
床面は平坦で、東側2/3ほどが踏み締められて硬化していた。壁溝は東壁と南壁の東側を除いて廻っていた。幅15cm、深さ10cmほどで、ローム粒を多量に含む黒褐色土で埋められていた。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃燒部は円形の上壇状に掘り込まれ、壁から突出している。燃燒部は直径60cmのほぼ円形に、袖が僅かにつく状態である。掘り方底面は床面から10cmほど掘り下げ、ロームを多量に含む暗褐色土で埋め戻している。火床面は床面とほぼ同じ高さである。土層断面の6層が大井崩落上になると思われる。5層は新しい時期のピットの可能性が高い。袖は短く、左袖が壁から僅かに張り出す程度、右袖は25cmの残存であったが、いずれも混入物の少ない灰白色粘土で造られており、本来あまり長い袖ではなかったと思われる。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は殆ど出土しなかったが、柄木が残存している刀子の基部が1点出土した。

第92表 第249号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 環	(13.4)	(2.7)	-	A D E	普通	にぶい橙	15	
2	土師器 甕	(24.0)	(8.1)	-	A D E H	普通	暗褐	20	



- 第250号住居断面
- 1 特殊土 腐食層 (silt) 赤層
 - 2 特殊土 腐食層、焼土粒多量
 - 3 特殊土 焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 4 特殊土 焼土・焼土ブロック
 - 5 特殊土
 - 6 特殊土
 - 7 特殊土 腐食層、焼土粒多量
 - 8 特殊土 腐食層、焼土粒多量、コーム粒多量
 - 9 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 10 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 11 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 12 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 13 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 14 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 15 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 16 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層
 - 17 特殊土 腐食層、焼土粒多量 (silt) 赤層

第174図 第250号住居跡

第93表 第250号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	1J径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	13.0	3.8	7.1	E I J	普通	灰	60	床底
2	須恵器 高台付埴	-	(2.5)	8.6	E J	普通	灰	80	
3	土師器 坏	(14.0)	3.6	-	A D E	普通	にぶい黄褐色	50	
4	土師器 坏	(12.0)	(2.8)	-	D E	普通	にぶい黄褐色	25	
5	土師器 甕	(21.1)	(21.7)	-	A D E G H	普通	にぶい黄褐色	80	
6	土師器 甕	(20.0)	(19.2)	-	A D E H	普通	にぶい黄褐色	20	カマド
7	土師器 甕	(18.8)	(15.5)	-	A D E H	普通	にぶい赤褐色	25	カマド袖
8	土師器 甕	(22.6)	(15.2)	-	A B D E H	普通	明褐色	20	カマド
9	土師器 甕	(19.6)	(9.6)	-	A E G H	普通	にぶい黄褐色	25	カマド
10	土師器 甕	(19.8)	(11.4)	-	A D E H	普通	にぶい黄褐色	40	
11	土師器 甕	-	(4.6)	4.6	A B D E H J	普通	にぶい黄褐色	75	カマド
12	土製紡錘車	径(6.0)×(5.4)cm 厚さ1.4cm 孔径(0.7)cm					明赤褐色	-	カマド袖 表面欠損
13	鉄製品	残存長3.8cm 幅2.2cm 厚さ0.4cm 重さ20.59g							刀か?

時期を推定できる遺物はないが、住居跡の形状から9世紀以降と思われる。

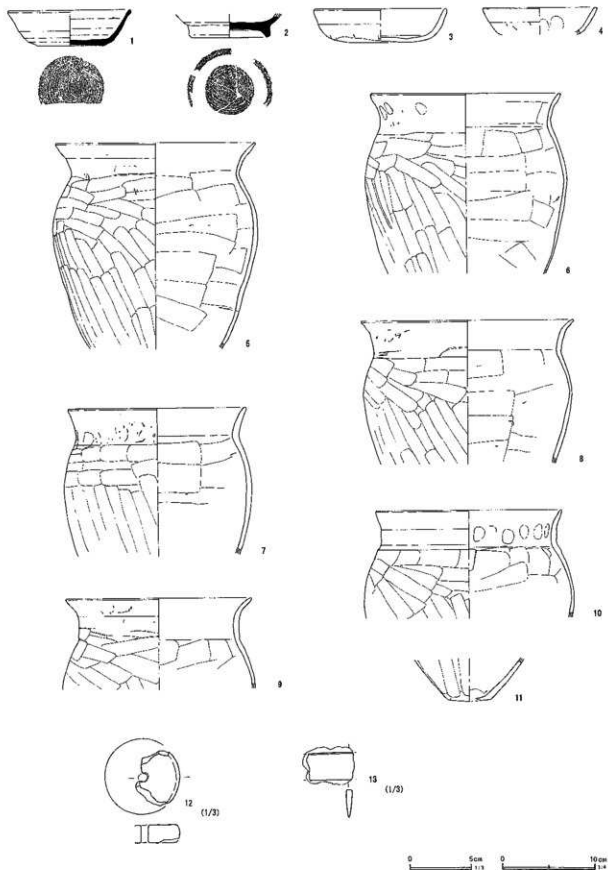
第252号住居跡 (第177図)

調査区の西側、D D-43グリッドに位置する。第274・275号土庫と重複関係にあるが、新旧は不明である。検出時には既に床面が出ており、識別するた

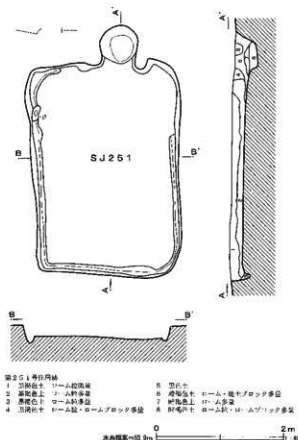
めに3cmほど掘り下げた。

平面形は長方形である。規模は、長軸が4.44mで、短軸は3.84mである。主軸方向は、N-20°-Wを指す。

床面の状況はあまりよくなかった。壁溝はないようである。ピットは8基検出された。深さは10cmから20cm前後であるが柱穴と断定できるものはない。



第175图 第250号住居跡出土遺物



第176図 第251号住居跡・出土遺物

第94表 第251号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置
1	鉄製品	(2.0)	0.8	0.2	3.3	刀子(茶室) 木質(橋木)残存

平面形は長方形である。規模は長軸4.54m、短軸3.40m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-61°-Eを指す。

床面は平坦で住居跡中央部がよく踏み固められていた。壁溝は、幅10~15cm、深さ4cm前後で、カマドと貯蔵穴の間を除いて全周する。南壁部分は壁溝が壁から離れているが、若干壁を掘りすぎているかもしれない。ピットは7基検出された。P1~P3を主柱穴と考えておくといずれも深さは10cm前後と浅く、カマド対面の右側の位置には検出されなかつ

た。カマドはなく、炉跡や貯蔵穴も検出されなかった。遺物も出土しなかったため時期は不明であるが、住居跡の形態から5世紀以前のもと考えておきたい。

第253号住居跡 (第150図)

調査区の西側、D D-44グリッドに位置する。第227号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。

第227号住居跡に南東側の半分以上を壊されているため、平面形はわからない。検出されたのは北西壁が2.64mで、直行方向に1.1mである。軸方向は、N-48°-Eを指す。

床面は、殆どが第227号住居跡によって壊されているため詳しい状況は不明である。壁溝はなかったらしく、ピットも検出されなかった。北隅に寄った所に土塊状の掘り込みが2基検出された。南寄りの1基は直径50cm、深さ40cmで貯蔵穴のようにも感じられるが、遺物は出土していない。

カマドや炉は検出されなかった。

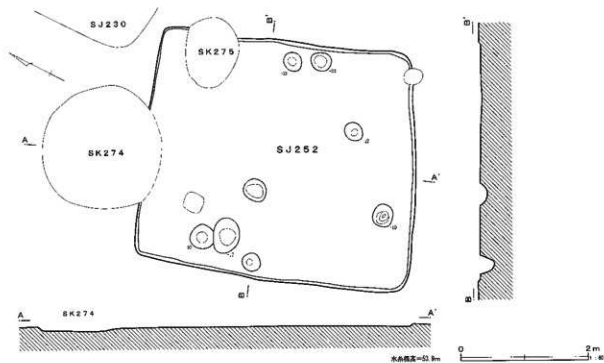
住居跡の時期は不明である。

第254号住居跡 (第178図)

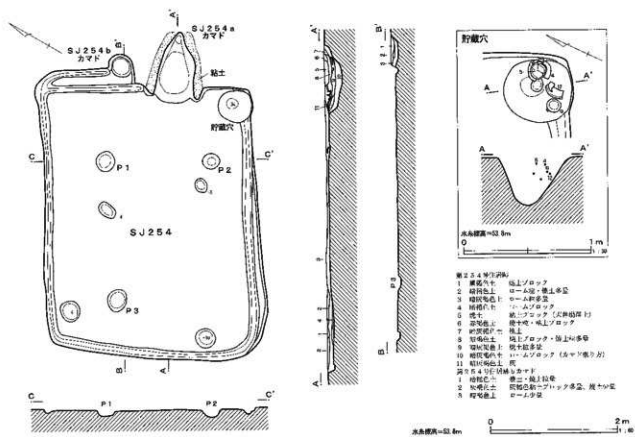
調査区の南側、F F・G G-49グリッドに位置する。重複する遺構はない。

た。

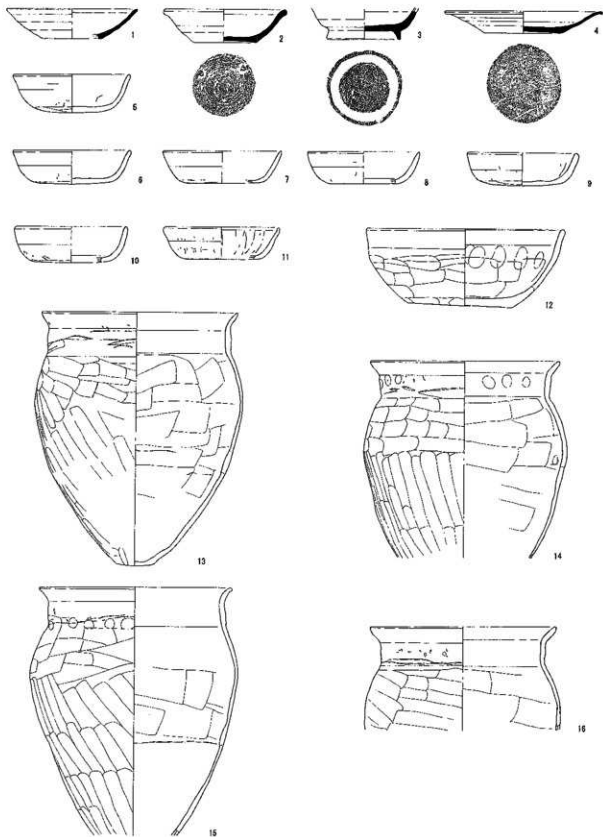
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は、壁を大きく掘り込んで張り出している。掘り方を床面から15cm掘り下げルームブロックで埋め戻して火床面としている。火床面は床面よりやや低く、上層断面の9層、11層が該当する。5層は天井崩落土である。袖はごく僅かに張り出していたが、殆ど袖らしいものではない。カマド外縁には、幅6~10cmで白色粘土が見られたことから、カマドは住居跡本体の外側までこの粘土で造られていたと考えられる。



第177図 第252号住居跡

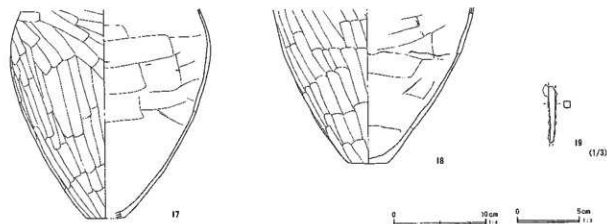


第178図 第254号住居跡・遺物出土状況



0 10cm
1:4

第179図 第254号住居跡出土遺物(1)



第180図 第254号住居跡出土遺物 (2)

第95表 第254号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.8)	(3.1)	(6.4)	E J	普通	灰白	20	
2	須恵器 坏	(12.7)	3.7	6.7	B D E J	普通	黄灰	60	貯蔵穴
3	須恵器 高台付埴	-	(3.4)	7.9	E I J	普通	灰白	70	カマド
4	須恵器 皿	16.6	2.4	8.0	BF	普通	黄灰	80	貯蔵穴
5	土師器 坏	12.2	4.1	-	A D E G H	普通	にぶい橙	95	貯蔵穴
6	土師器 坏	12.2	3.6	-	A D E H J	普通	橙	100	
7	土師器 坏	(12.4)	(3.4)	-	A D E G	普通	橙	25	
8	土師器 坏	(11.8)	3.3	-	A E G	普通	橙	25	
9	土師器 坏	11.5	3.5	-	A B D E G H	普通	明赤褐	100	貯蔵穴
10	土師器 坏	11.6	3.8	-	A D E G H	普通	にぶい褐	50	
11	土師器 坏	(12.0)	3.4	-	A D E G	普通	橙	20	カマド
12	土師器 鉢	21.0	8.4	11.1	A D E G H J	普通	にぶい褐	90	カマド 貯蔵穴 床直
13	土師器 甕	(20.7)	26.7	3.9	A E G	普通	橙	60	カマド
14	土師器 甕	19.9	20.7	-	A D E H J	普通	橙	50	カマド
15	土師器 甕	20.3	(26.1)	-	A D E H J	普通	橙	95	カマド
16	土師器 甕	(19.6)	(10.9)	-	A D E H J	普通	明赤褐	20	カマド
17	土師器 甕	-	(22.0)	4.3	A D E G H	普通	橙	80	カマド
18	土師器 甕	-	(16.3)	4.2	A D E G H	普通	にぶい黄褐	60	床直
19	鉄製品	残存長4.4cm 断面 辺0.5cm 重さ2.86g							釘?

粘土の遺存状態は非常によく、袖を含めて造られた時の形は崩れていないと思われる。遺物は土師器甕、須恵器高台埴などが纏まって出土した。甕は5個体分出土しており、カマドの前半分に集中していた。かなり破片化していたが、口縁部の位置から横位にあったと思われ、カマド天井の構築材に使われていたものであろう。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。長径55cm、短径50cmの楕円形で、深さは33cmである。覆土上位及び中位から土師器坏、甕などが出土した。5の坏は1の甕口縁部に蓋をするような状態で検出された。

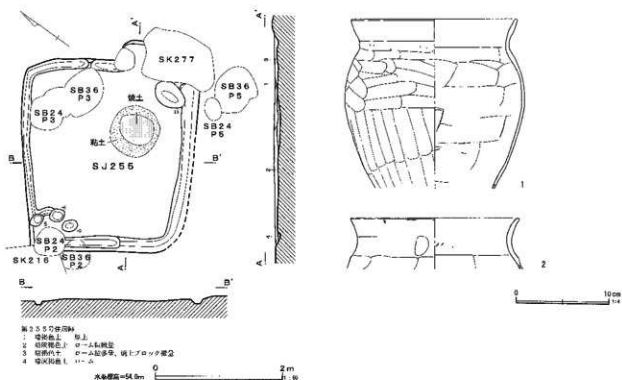
9は伏位で出土した。

遺物はカマド及び貯蔵穴を中心に出土したが、他に鉄製品が出土している。19は釘と思われる棒状の製品で両端を欠失する。

時期は9世紀前半である。

第255号住居跡 (第181図)

調査区の南側、HH・I I-47グリッドに位置する。第24・36号掘立柱建物跡、第216・277号上城と重複している。第277号土城よりは古いと思われる。第24・36号掘立柱建物跡との新旧は確認していない



第181図 第255号住居跡・出土遺物

第96表 第255号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(17.4)	(17.9)	-	ADEH	普通	橙	30	焼上Pit
2	土師器 甕	(17.8)	(5.4)	-	ADEFGH	普通	にぶい橙	25	焼上Pit

が、遺物からは本住居跡が新しいと考えられる。

平面形はカマドのある北東辺が対面より長く逆台形を呈する。規模は、北東辺は角を第277号土塚に壊されているが2.85mほどと推定され、南西辺は2.3mで、軸方向には3.04mである。深さは0.05mと浅い。主軸方向は、N-58°-Eを指す。

床面は平坦で、中央部が硬化していた。壁溝は西側が内側に入り込んでいるが、基本的には全周する。幅は12~25cmで、カマド周辺が広い。深さは5~10cmである。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。壁を30cmほど掘り込んでいる。掘り方は浅く、床面と殆ど変わらない。袖にあたる部分は第277号土塚とピットによって壊されているが、おそらく袖は短いものか、なかった可能性も考えられる。

貯蔵穴は、カマド右側にある土塊状の掘り込みを

考えておきたい。楕円形で長軸54cm、短軸35cm、深さ18cmである。

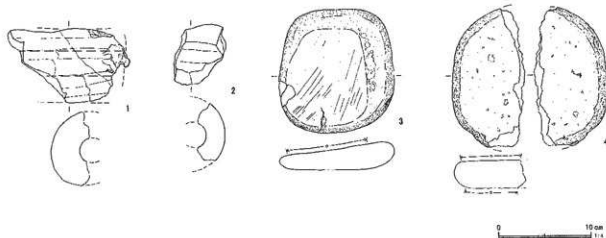
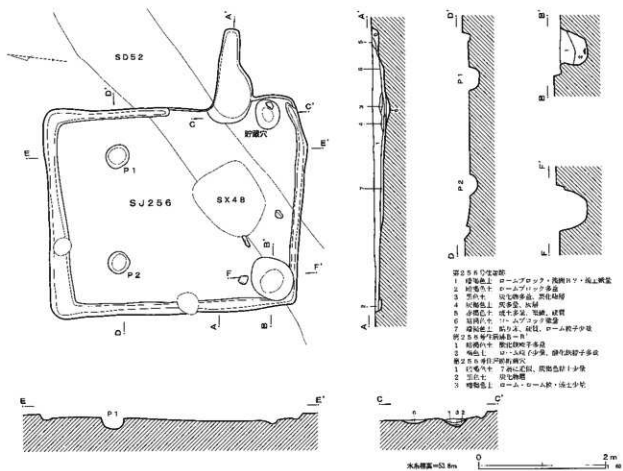
カマドの前に50cmの距離をおいて粘土と焼土が検出された。直径75cmの円形に白色粘土が見られ、その中心に、直径約50cmの範囲が焼けていた。掘り方は床面を浅い皿状に掘り込んで粘土を充填していた。遺物は、上面から土師器破片が全体に散在した状態で出土した。

遺構は住居跡覆土を除去した段階で床面において検出されたもので、住居跡に伴うものであることは明らかであるが、住居内で土器を焼いたとは考え難くその性格については不明である。

他に住居跡内からの遺物の出土はなかった。

時期は10世紀後半と思われる。

第256号住居跡 (第182図)



第182図 第256号住居跡・出土遺物

第97表 第256号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	計測値	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	羽I	長さ13.0cm 幅7.7cm	BEHJ	普通	灰黄	-	厚さ4.0cm 重さ286.3g
2	羽I	長さ5.8cm 幅6.1cm	BEJ	普通	灰白	-	厚さ3.2cm 重さ76.7g
3	瓶口?	長さ13.0cm 幅12.2cm	厚さ3.0cm	重さ679.2g			表面面磨面
4	瓶口?	長さ(14.6)cm 幅(7.8)cm	厚さ2.9cm	重さ525.2g			表面面磨面

調査区の南側、FF-48・49グリッドに位置する。第52号溝跡、粘土採掘坑(SX48)と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.20m、短軸3.32m、深さ0.09mである。主軸方向は、N-82°-Eを指す。

床面は平円で、第52号溝跡、粘土採掘坑(SX48)の上に貼床をしている。壁溝はカマドの脇を除いて全周する。幅は10~30cmで、深さは5cm前後である。柱穴と考えられるものは北側に2基検出されたが南側は確認できなかった。柱穴は直径35cm前後で深さは20cm程度である。

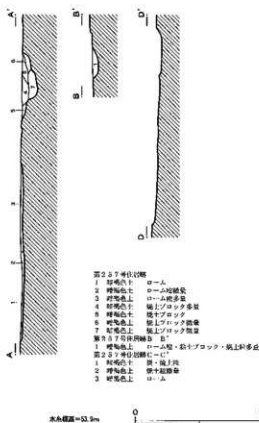
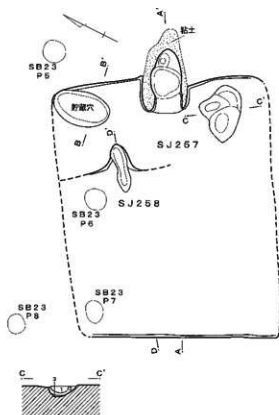
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁外に85cm突出し、一段浅くなって更に煙道が約50cm延びている。火床面は床面とほぼ同じ高さである。3層、4層が炭及び灰層で、カマド床面は硬く焼けていることからかなりの熱を受けていたことがわか

る。袖は検出されなかったが、始めからなかった可能性も考えられる。

貯蔵穴はカマドの右側の掘り込みと考慮しておく。長径45cm、短径38cmで、深さは14cmと浅めである。中から滓が出土した。南西隅に楕円形の土塊が検出された。長径75cm、短径64cmで、深さは42cmである。

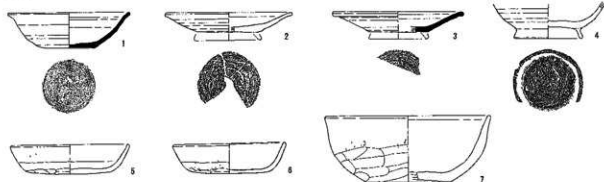
遺物は、土器類は出土しなかったが、羽口片と扁平な礫が出土している。この遺物が本住居跡にどのようにかかわりを持つ出土状況からは明確でないが、カマド底面が他の住居跡に比べ非常によく焼けていることと関係する可能性はあると思われる。

時期を推定できる遺物はないが、覆土中に浅間B火山灰ではないかと思われる粒子が微量ながら見られる。分析をしていないので確定はできないが、これが浅間Bならばそれに近い時期を考慮してもよいと思われる。

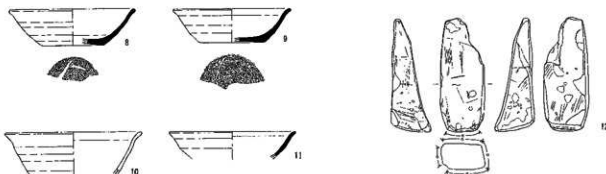


第183図 第257・258号住居跡

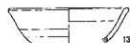
SJ 257



SJ 257-258



SJ 258



第184図 第257・258号住居跡出土遺物

0 10cm
1:4

第98表 第257号住居跡出土遺物観察表

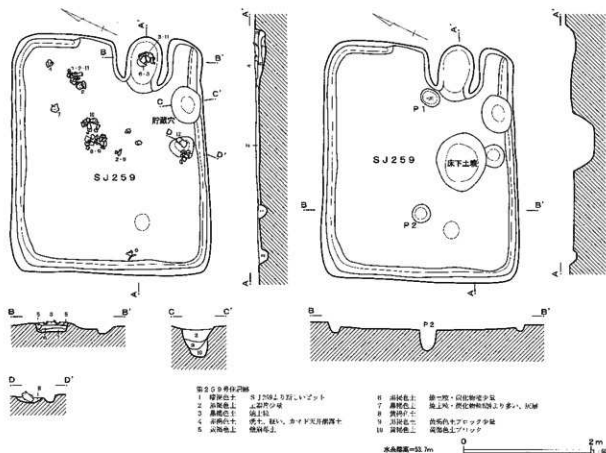
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	12.8	3.8	5.4	A E J	良好	灰	75	カマド 貯蔵穴 SJ258 南北企業
2	須恵器 高台付皿	13.2	(2.2)	-	A E J	普通	にぶい黄橙	80	貯蔵穴 酸化焙焼成
3	須恵器 高台付皿	(14.0)	(2.1)	(6.0)	BE	普通	灰	15	カマド
4	ロクロ 高台付碗	-	(3.9)	7.2	A B E G H J	普通	にぶい黄橙	60	カマド
5	土師器 坏	(12.2)	3.1	(9.0)	A D E G H J	普通	橙	50	貯蔵穴
6	土師器 坏	11.8	3.2	8.4	A B D E G H I	普通	橙	100	床下
7	土師器 钵	(17.2)	7.0	(9.0)	D E G J	普通	橙	45	内外面摩耗

第99表 第257・258号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
8	須恵器 坏	(13.0)	3.8	(6.8)	E J	普通	灰	20	SJ258
9	須恵器 坏	(12.4)	3.6	(7.0)	E J	普通	灰オリーブ	50	
10	須恵器 坏	(14.4)	(4.6)	-	A B E	普通	にぶい黄橙	50	酸化焙焼成
11	須恵器 坏	(13.4)	(2.9)	-	A E J	普通	灰	30	SJ257カマド SJ258
12	砥石	長さ12.0cm	幅4.8cm	厚さ2.7cm	重さ225.5g				縦面5面 全面円形刺摩多

第100表 第258号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
13	ロクロ 坏	(12.4)	(3.8)	-	A E	普通	にぶい橙	25	



第185図 第259号住居跡・遺物出土状況

第257号住居跡 (第183図)

調査区の南側、H H-47・48グリッドに位置する。第258号住居跡、第23号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第258号住居跡より新しいと思われるが、第23号掘立柱建物跡との新旧は不明である。

遺構確認時には既に床面まで削られていたため、痕跡から住居跡の範囲を推定した。カマド側とその対面の壁はかろうじて残っていた。平面形は長方形と推定される。規模は、長軸4.16m、短軸4.10mと推定される。主軸方向は、N-65°-Eを指す。

床面の状態は不明である。壁溝はなかったのではないと思われる。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。壁を掘り込んでおり、袖を含めてカマド外縁を白色粘土で構築していた。掘り方は比較的深く、15cmほど埋めて火床面としている。火床面は床面より10cm程度低かったと思われる。袖は、左が長さ56cm、右袖は

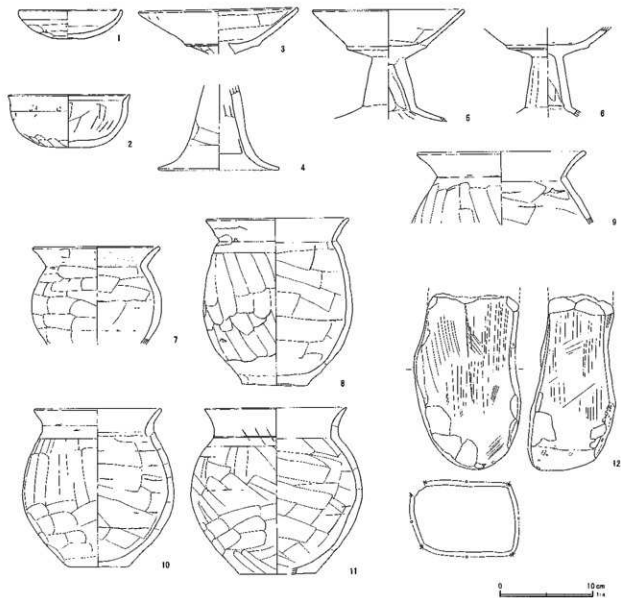
46cmあり、燃焼部の奥行きは97cm、幅は47cmである。

貯蔵穴は、調査時の認識ではカマドの左側に住居跡の北隅にあるものを貯蔵穴としている。カマドの右隅にも掘り込みがあり、位置としてはこれを貯蔵穴としても不自然ではないが、ここでは調査時の認識に従っておく。楕円形で長軸92cm、短軸54cm、深さは13cmを測る。覆土は粘土ブロックや焼土粒子を多量に含む暗褐色土単層であった。上面から須恵器坏や土御器坏が出土した。カマド右側の掘り込みはやや不整形であるが80cm×70cmほどで深さは最大で17cmである。覆土は3層からなるが炭化粒子や焼土粒子を含むものであった。

遺物は、貯蔵穴の他にカマドから須恵器皿が出土したほか、坏類と砥石が出土している。

時期は9世紀中頃である。

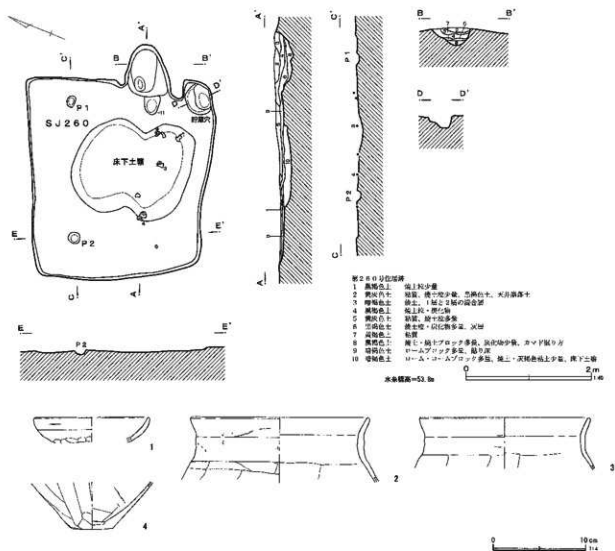
第258号住居跡 (第183図)



第186図 第259号住居跡出土遺物

第101表 第259号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	焼成率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(10.6)	3.0	3.2	A E G H J	普通	明赤褐	25	カマド 貯蔵穴 内外面口縁・外面胴部上半赤彩
2	土師器 碗	12.7	5.5	-	A D E G	普通	灰褐	95	
3	土師器 高坏	16.7	(4.9)	-	D E G	普通	明赤褐	80	
4	土師器 坏	-	(8.9)	(6.3)	A D E G H	普通	明褐	70	
5	土師器 高坏	15.9	(11.8)	-	A D E G H	普通	にぶい赤褐	70	
6	土師器 高坏	-	(9.4)	-	A D E H	普通	明赤褐	70	
7	土師器 小型甕	(13.2)	(10.3)	-	A D E H J	普通	灰褐	25	
8	土師器 小型甕	(13.1)	16.6	6.6	A D E H J	普通	にぶい橙	70	
9	土師器 甕	(17.6)	(7.7)	-	A B D E H J	普通	にぶい褐	40	
10	土師器 小型甕	(14.8)	17.7	6.9	A B D E H	普通	にぶい橙	80	
11	土師器 小型甕	(15.0)	17.5	(8.0)	A D E H J	普通	にぶい黄橙	50	
12	砥石	長さ(18.5)cm 幅11.5cm 厚さ7.1cm 重さ2278.0g							



第187図 第260号住居跡・出土遺物

第102表 第260号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.2)	(2.6)	-	ADEH	普通	にぶい赤褐色	20	
2	土師器 甕	(18.8)	(6.9)	-	AEGH	普通	明赤褐色	25	貯蔵穴
3	土師器 甕	(18.0)	(5.4)	-	ADEH	普通	にぶい橙	20	
4	土師器 甕	-	(5.0)	4.5	ADEGH	普通	にぶい黄褐色	70	

調査区の南側、HH-47グリッドに位置する。第257号住居跡、第23号堀立柱建物跡と重複関係にあり、第257号住居跡より古いと思われる。第23号堀立柱建物跡との新旧は不明である。

第257号住居跡の下にカマド部分だけが残存していたため、平面形などの詳細は不明である。

カマドは東壁に造られていたと思われる。細長い

カマド掘り方の底部が検出された。長さ74cm、幅は16-24cmである。

遺物は、ロクロ土師器坏片が1点取り上げられているが、第257号住居跡の遺物の可能性が高いと思われる。

時期は不明であるが、第257号住居跡が9世紀中頃であるとすればそれ以前となる。

第259号住居跡 (第185図)

調査区の中央、BB・CC-48グリッドに位置する。重複する遺構はない。

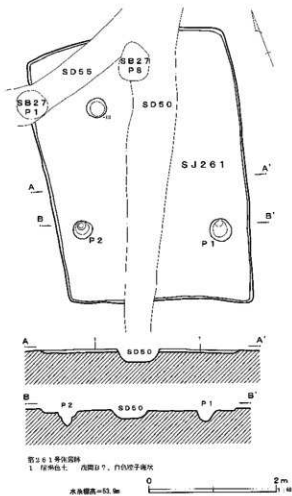
平面形は長方形である。規模は長軸3.78m、短軸3.20m、深さ0.06mである。主軸方向は、N-66°-Eを指す。

床面は平坦で、住居跡中央部から南辺の中央にかけて硬化していた。壁溝はカマドの両脇を除いて掘られている。幅は15cm前後、深さは8~15cmである。ピットは住居跡中央に軸方向に沿って2基検出された。主柱穴と考えておきたい。直径30cm前後で、深さはP1が26cm、P2は32cmである。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は住居跡内に土床状に掘り込まれていた。掘り方は床面から10cm掘り下げて埋め戻すことなく、火床面として使用していたようである。4層は天井崩落土で5層はカマド壁の崩落土である。最下層の7層が灰層で5cm以上の厚さがある。袖は両袖とも残っており左袖は長さ62cm、右袖は80cmあり先端は内側に湾曲した状態であった。燃焼部の奥行きは90cm、幅は58cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

床下土壌がカマドの正面50cmの位置に検出された。長軸93cm、短軸80cmの楕円形で、深さは35cmである。覆土はロームを含む黒褐色土で、上面は厚さ5cmほどをロームで貼っていた。

遺物は、カマドと住居跡中央からカマド寄りに出土した。カマドからは、土師器小型甕と高坏が出土した。出土位置は3層中でカマドが崩れてからのものである。住居跡からは、同じく土師器高坏、小型甕、坏などが出土した。また、床面から砥石が出土している。住居跡南壁際の中央部から出土したもので直径36cm、深さ8cmの円形の掘り込み中に据えられていた。4面及び端面まで丁寧に使用されていることから、何度か据直しているものと考えられる。石材は凝灰岩と思われ、一端が欠けているが現存長18.5cmあり、幅11.5cm、厚さは7.1cmである。砥石の大きさや出土した状況から、砥石であることは問



第185図 第261号住居跡

違いない。

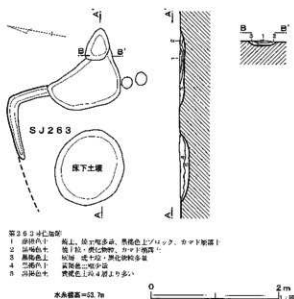
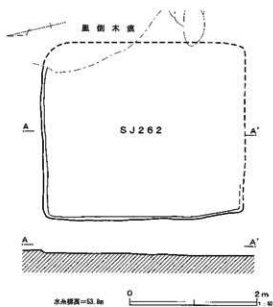
時期は6世紀前半である。

第260号住居跡 (第187図)

調査区の中央、CC-49・50グリッドに位置する。重複する遺構はない。

平面形は方形である。規模は、長軸は3.16mで、短軸は2.90mである。深さは2cmと非常に浅い。主軸方向は、N-68°-Eを指す。

床面は平坦であったが、壁溝は検出されなかった。ピットは北側に2基検出された。直径20cm前後で、深さはP1が6cm、P2は3cmと浅いが柱穴と考えておきたい。南側の2本は検出できなかった。床下土壌が住居跡中央に検出された。ふたつの楕円形を横に連結したような形である。1.62m×1.60m、深



第189図 第262・263号住居跡

さは最大で12cmである。覆上はロームブロックを主体とし、粘土と焼土を少量含んでおり、その上を貼床していた。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、壁外に突出している。掘り方を床面から18cmほど掘り下げ、10cm前後に埋め戻して火床面としている。6層が灰層で厚く堆積している。2層は大井崩落土である。袖は灰白色粘土を用いて造られていた。左袖が僅かに張り出しており、右袖も34cmと短い。燃焼部の奥行きは80cm、幅は袖の基部で58cmである。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出された。長軸50cm、短軸36cmの隅丸長方形で、袖と壁との間に収まる。袖側に段を持ち、深さは15cmである。

遺物は住居跡中央付近から少量出土した。土師器環と甕で、全て破片である。図示できたのは4点である。

時期は甕の時期をとって9世紀としておく。

第261号住居跡 (第188図)

調査区の南東側、HH-43・44グリッドに位置する。第50・55号溝跡、第27号堀立柱建物跡と重複関係にある。第50・55号溝跡より古いが、第27号堀立

柱建物跡との新旧は不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸4.32m、短軸3.20m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-12°-Eを指す。

床面は中央部が硬化していたが、第50号溝跡が中央を縦に貫通しているため硬化面の残存範囲は広くない。壁溝は検出されなかった。ピットは3基検出された。P1は直径45cm、深さ27cm、P2は直径30cm、深さ24cmで柱穴と考えられるが、他の1基については位置的に合わない。床下土壌は検出されなかった。

カマドや炉は検出されなかった。住居跡の形態から、おそらく第50・51号溝跡によって壊された部分にカマドか炉があったものと思われる。

遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

第262号住居跡 (第189図)

調査区の中央、FF-48グリッドに位置する。重複する遺構はないが、風倒木によって北東側を壊されている。遺構確認時には床面がかなり露出しており、東壁及び南壁は消失していた。

平面形は東壁と南壁がわかっていないが、長方形を呈するものと思われる。検出された規模は、西壁

が3.24m、北壁は2.40mまでであった。深さは北側の残りのよいとことで0.04mである。主軸方向は、N-103°-Eを指す。

床面の詳細は不明である。壁溝やピットは検出されなかった。

カマドや炉も検出されていない。

遺物も出土せず、時期は不明である。

第263号住居跡（第189図）

調査区の中央、DD-50グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。検出時には床面の殆どが削平されていた。残っていたのはカマドと住居跡北側部分だけである。

平面形は不明である。残存していたのはカマドを含む東辺が1.9m、北辺は周溝部分1mである。主軸方向は、N-65°-Eを指す。

削平されていたため、床面の状態は不明である。壁溝は北側の隅が残存していた。幅16cmで、深さは2cm残っていた。ピットは検出されなかった。床下土壌と考えられる土壌がカマドの前に検出された。楕円形で長径1.23m、短径1.08m、深さ12cmである。覆土はローム混じりの黒褐色土で埋め戻されていた。

カマドは東壁に造られていた。掘り方は皿状に大きく掘られている。底面に灰層が見られ、1層は天井崩落土であることから、埋め戻さずにそのまま使用したと考えられる。火床面は床面より5cm以上は低かったと思われる。袖は残存していなかった。貯蔵穴も検出されなかった。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第264号住居跡（第190図）

調査区の中央、CC-50グリッドに位置する。第273号住居跡と重複するが、第273号住居跡は縄文時代の住居跡である。検出時には殆ど床面が露出しており、2~3cm掘り下げた。

平面形は方形である。規模は長軸3.02m、短軸2.78mである。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

床面は平坦で中央部がやや高く、硬化していた。壁溝はなかった。ピットは検出されず、南内隅に床下土壌が検出された。長方形で、長軸50cm、短軸38cmで深さ20cmである。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は上壊状に掘り込まれ、奥がやや深くなっている。床面より10cm程度深く、殆ど埋め戻さずに使用したようである。火床面は床面より低く、灰層がよく発達していた。灰を掻き出したためであろうかカマド前面まで延びていた。灰層中に焼土ブロックが見られ、その上に炭化物層があるが、これは使用中に天井が剥落した可能性が考えられる。最終的な天井崩落土は2層・3層である。袖は右袖が長さ35cm残っていた。内側に湾曲しており、白色粘土で構築されていた。燃焼部の奥行きは1.02m、幅は60cmである。燃焼部の外側に、被熱して硬化した粘土が2箇所見られた。長径10cmの楕円形で、カマドに付属して機能したのかどうかかわからないが、想像をたくましくすれば、カマドの外側に粘土柱が立っていたような状況が想定される。

遺物は、極めて少なく南壁際から須恵器破片及び土師器破片が出土し、図示できたのは3点である。

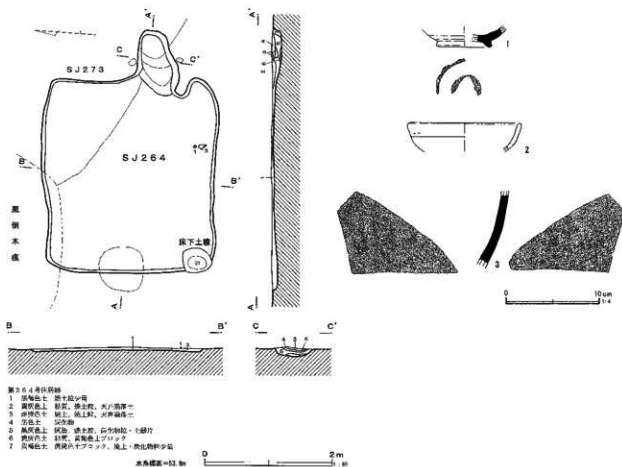
時期は10世紀前半と考えておきたい。

第265号住居跡（第191図）

調査区の南側、HH-45・II-44・45グリッドに位置する。第54号溝跡、粘土採掘坑（S X 13・17）と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。カマドや炉などの施設は全く検出されず、竪穴状遺構としたほうがいいかもしれない。

平面形はやや歪んでおり平行四辺形に近いが、基本的には長方形と思われる。規模は長軸4.50m、短軸3.30m、深さ0.04mである。主軸方向は、N-76°-Eを指す。

床面は平坦で、あまり踏み固められた部分も見られなかった。壁溝やピットは検出されなかった。覆土は2層である。いずれも暗褐色土で、上層は砂質



第190図 第264号住居跡・出土遺物

第103表 第264号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 高台付埴	-	(2.3)	(5.9)	E	普通	灰	30	カマド
2	土師器 埴	(11.6)	(3.1)	-	ADG	普通	灰褐色	20	カマド
3	須恵器 甕	-	-	-	E J	普通	灰	破片	

で、下層は焼土ブロックを多量に含んでいた。

遺物は、土師器埴が1点出土した。

遺物の時期は8世紀後半である。

第266号住居跡 (第192図)

調査区の中央、F F-46・47グリッドに位置する。

第280号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸が3.48m、短軸は2.86m、深さは0.05mである。主軸方向は、N-85°-Eを指す。

床面は平坦で、ほぼ全周にわたって硬化していた。

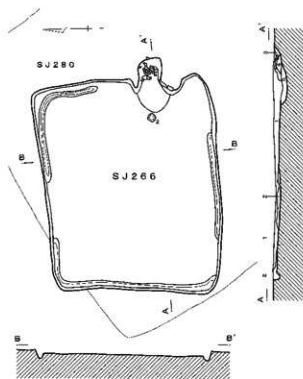
壁溝は、カマドの両脇と北壁中央、南壁両側は検出

されなかった。ピット及び床下土層は検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土層状に掘り込まれ、半分ほど壁外に出ている。掘り方は床面より10cm下げ、焼土混じりの暗褐色土で埋めている。火床面は床面とほぼ同じ高さである。天井部は黄白色粘土で造られ、3層の天井崩落がきれいに残っていた。袖は短く両袖とも約25cmであった。燃焼部の奥行きは54cm、幅は38cmである。袖の手前の焚口部を入れると奥行きは85cmとなる。

貯蔵穴は検出されなかった。

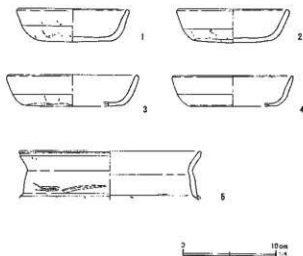
遺物は、主にカマドから土師器埴・甕が出土した。



第266号住居1階

- 1 存残粘土 白色粘土灰次、壁十趾子残片
- 2 存残赤土 ロームアロップ多量
- 3 埋戻赤土 灰白粘地土アロップ多量、カマド天井面遺土
- 4 埋戻赤土 灰土多量
- 5 埋戻赤土 灰土・灰化粘土多量、カマド掃り方

水深調査=53.3m



第192図 第266号住居跡・出土遺物

第105表 第266号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	11.6	3.4	8.0	ADEGH	普通	にぶい褐	95	
2	土師器 坏	11.6	3.5	8.3	ADEGJ	普通	橙	95	
3	土師器 坏	(13.0)	3.3	(10.8)	ADEGH	普通	にぶい黄橙	20	カマド
4	土師器 坏	(12.6)	3.2	(9.4)	ADEG	普通	にぶい褐	40	
5	土師器 甕	(19.0)	(5.1)	-	ADEH	普通	橙	45	カマド

め、北側が斜めに失われている。また、検出時には既に床面が出ており、貼床面を僅かに掘り下げた。

平面形は方形か長方形か判断できない。規模は南壁が4.30mで、東壁は3.22m残存していた。主軸方向は、 $N-80^{\circ}-E$ を指す。

床面は既に露出していたので、詳しい状況は不明である。壁溝は検出できなかった。ピットは2基検出された。南壁寄りに並び、主柱穴と考えられる。P1は楕円形で、長径約30cm、深さ24cm、P2は直径24cmの円形で、深さは36cmである。北側の柱穴は道路跡によって壊されたと思われる。

東壁の中央と思われる部分に焼土が検出された。カマドの痕跡と思われる。焼土は壁に接して半円形を呈する。白色粘土が混在していたことから、粘土を用いて構築されていたと考えられる。

遺物は、貯蔵穴上面から土師器の高杯・鉢破片が出土した。また、貯蔵穴底面から5cm浮いた状態で坏が出土した。

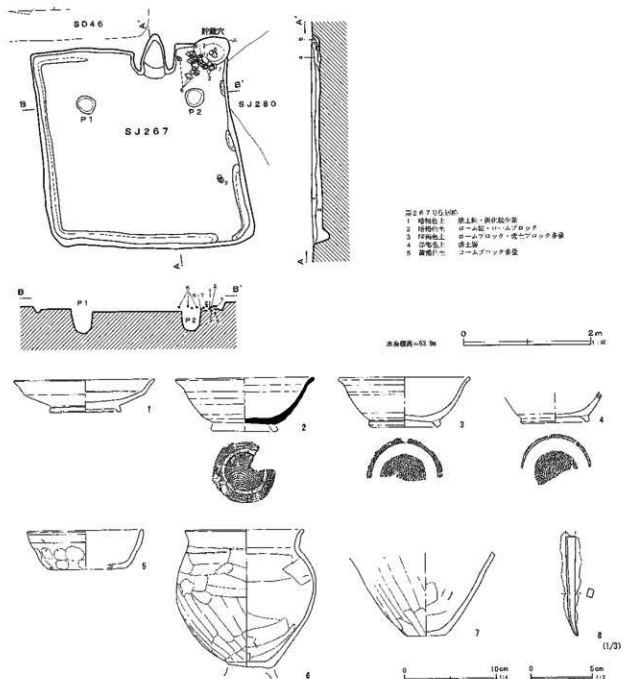
時期は6世紀中葉である。

第271号住居跡 (第195図)

調査区の南側、G・G-44・45グリッドに位置する。第50号溝跡、道路跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。住居跡の北側が道路跡によって失われている。また、道路跡に掛かる部分に第250・261号土壌が重複する位置にあるが新旧は不明である。

平面形は方形と思われる。規模は南東辺が5.10mで、南西辺は4.74mまで検出された。深さは0.10mである。主軸方向は、 $N-151^{\circ}-W$ を指す。

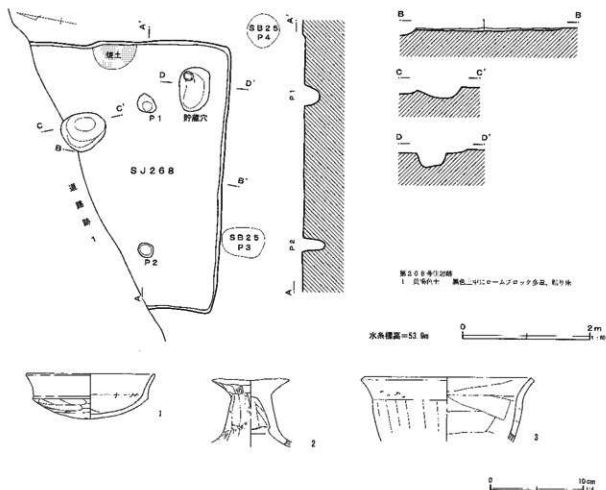
床面は平坦で、中央部が硬化していた。壁溝は南西と北東側に検出されたが、南東壁には見られなかった。幅は8~15cm、深さは4~9cmである。ピット



第193図 第267号住居跡・出土遺物

第106表 第267号住居跡出土遺物観察表

番付	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	埴輪 皿	(14.8)	3.4	(7.6)	E	良好	灰オリーブ	20	
2	須恵器 高台付埴	(14.4)	(5.0)	-	E J	普通	灰	60	貯蔵穴
3	ロクロ 高台付埴	(13.6)	5.2	6.8	A E G	普通	樹灰	50	
4	ロクロ 高台付埴	-	3.1	7.2	E J	普通	灰褐	50	貯蔵穴
5	土師器 坏	12.2	4.1	8.3	E G	普通	にぶい靑	60	
6	土師器 台付甕	12.3	(14.6)	-	A D E G	普通	にぶい靑	80	貯蔵穴
7	土師器 甕	-	(8.7)	4.2	A D E G II	普通	にぶい黄褐	45	貯蔵穴
8	鉄製品	残存長7.9cm	断面0.6×0.4cm	重さ16.85g					釘



第194図 第268号住居跡・出土遺物

第107表 第268号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 環	13.6	4.8	-	A D E H J	普通	明褐色	100	貯蔵穴
2	土師器 高坏	-	7.2	-	A B D E H	普通	にぶい褐色	80	P-2
3	土師器 鉢	(17.8)	(6.9)	-	A E G H	普通	灰褐色	25	P-2

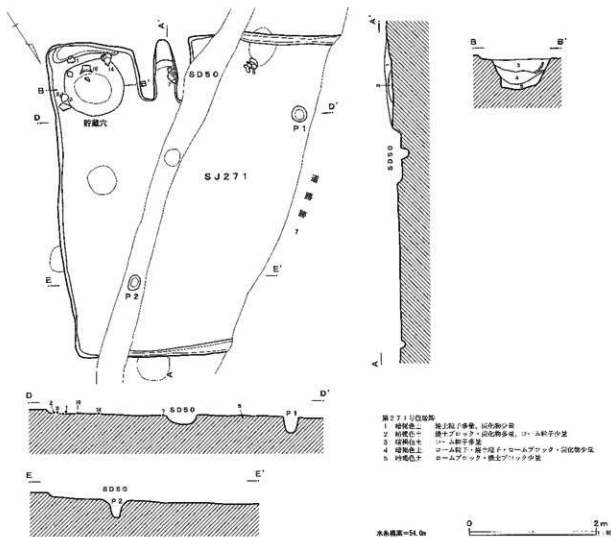
トは2基検出された。P1は直径24cm、深さ24cmである。P2は第50号溝跡の底に検出された。いずれも上柱穴と考えられるが他には検出できなかった。

壁寄りに焼土が検出されたため、カマドと想定して調査した。焼土は南西壁の南寄りに検出された。遺構は明瞭でなく、燃焼部は住居跡内にあったと考えられる。袖の形を想定して掘りすずめ、最終的に凶のような形になったが、かなり無理がある。高坏が倒位で出土しており、支脚に使われたものと考えられるが、坏部が右袖の裾に入っていることから、燃焼部は更に幅が広いものと考えられる。初源的な

カマドの場合、その形態を把握するのが困難なことが多いが、本例も例外ではなく、遺憾ながら納得できる調査結果とはならなかった。

貯蔵穴はカマドの左側に掘り込まれていた。やや楕円形を呈し、長さ94cm、短径88cm、深さ48cmを測る。覆土は3層で、基本的にロームと焼土粒子を含むものであった。上面付近から甌や坏類が出土した。また、底面付近から板状の炭化材が検出されたが取り上げることはできなかった。

遺物は、カマドから支脚に使われたと思われる高坏が出土した他は、主に貯蔵穴からの出土である。



第195図 第271号住居跡

時期は5世紀後半と考えられる。

第272号住居跡 (第197図)

調査区の南側、F F・G G-45グリッドに位置する。第50号溝跡、道路跡と重複関係にあり、道路跡より古いと思われるが、第50号溝跡との新旧は不明である。

検出時には既に床面は失われていたが、痕跡拾って住居跡の範囲を推定した。平面形は、道路跡が住居跡の北側部分に大きく重複しているため不明である。推定した残存部分は東辺が2.55m、南辺は1.5mである。主軸方向は、N-40°-E付近を指す。

床面の状況は不明である。貯溝やピットも検出さ

れなかった。

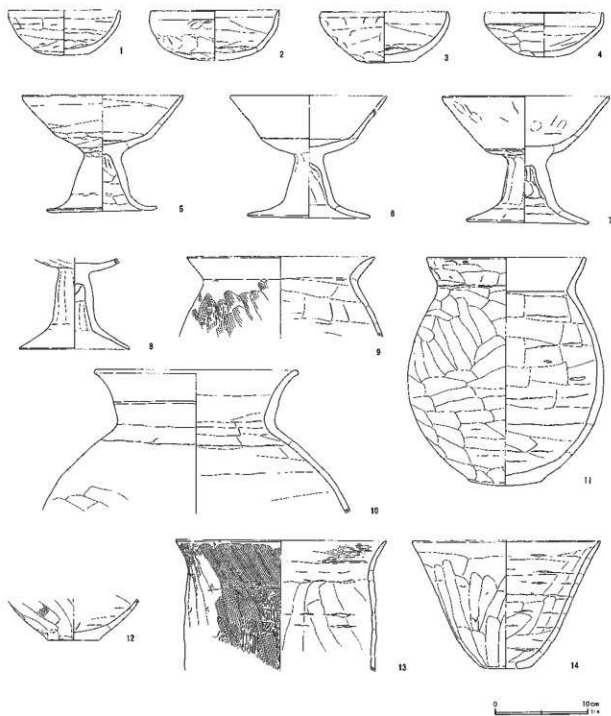
カマドや貯蔵穴は検出されなかった。

遺物も出土せず、時期も不明である。

第274号住居跡 (第198図)

調査区の中央、B B・C C-47グリッドに位置する。第329号住居跡・第42号溝跡と重複関係にある。第42号溝跡より古い。また、調査時には本住居跡を第329号住居跡より先に調査しているが、出土遺物からは本住居跡が古いと考えられる。

平面形は長方形である。検出された規模は、長軸が5.22m、短軸は3.42mである。深さは0.06mである。主軸方向はN-58°-Eを指す。



第196図 第271号住居跡出土遺物

床面は平坦で、中央部から東側にかけて硬化していた。壁溝は南隅が切れているだけで、他は全周する。幅は14~24cmで、深さは5~8cmである。ピットは7基検出された。直径30cm前後のものが最も多く、深さは9~16cmである。主柱穴は判断しがたい。カマドやカは検出されなかった。第42号溝跡によ

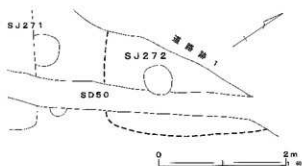
って壊された可能性もある。

遺物は、殆ど出土しなかった。図化できたのは坏1点である。

時期は幅を持たせて8世紀後半~9世紀前半としておく。

第108表 第271号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	12.0	4.8	6.2	BDE	普通	にぶい赤褐	60	
2	土師器 坏	13.7	5.3	-	ABE	普通	にぶい赤褐	100	
3	土師器 坏	(13.2)	5.4	6.0	BDE	普通	にぶい赤褐	70	
4	土師器 坏	(12.4)	4.7	-	BDE	普通	明赤褐	60	
5	土師器 高坏	(17.0)	12.3	11.8	BDE	普通	明赤褐	80	床面
6	土師器 高坏	-	(11.5)	(13.0)	BDE	普通	橙	60	貯蔵穴 内外面摩耗著しい
7	土師器 高坏	17.6	13.4	(13.0)	BDE	普通	橙	90	カマド
8	土師器 高坏	-	(19.6)	(11.8)	BDE	普通	橙	40	貯蔵穴 床面
9	土師器 甕	(20.0)	(8.4)	-	ABD	普通	にぶい褐	15	内外面やや摩耗する
10	土師器 甕	21.6	(15.1)	-	ABD	普通	にぶい橙	60	貯蔵穴 床面
11	土師器 甕	(17.0)	24.0	(8.0)	ABD	普通	にぶい褐	50	貯蔵穴 器形歪み大きい
12	土師器 甕	-	(4.3)	5.4	BE	普通	明赤褐	40	内外面やや摩耗する
13	土師器 甕	(22.4)	(13.8)	-	BE	普通	にぶい褐	15	床面
14	土師器 甕	(20.0)	13.4	(5.2)	ABD	普通	にぶい橙	30	器形歪みあり



第197図 第272号住居跡

第275号住居跡 (第199図)

調査区の南側、J・J-48・49グリッドに位置する。重複する遺構はない。検出時には床面は中央部以外には失われていたが、痕跡を拾って住居跡の範囲を推定した。

平面形はほぼ方形であったと思われる。規模は一边が2.6m前後であったと推定される。主軸方向は、カマドの向きからN-75°Eと思われる。

床面は中央部が僅かに残っていただけであるが、ローム混じりの暗褐色土が僅かに硬化していた。壁溝は検出されなかった。ピットは床下土壌中に1基検出されたが主柱穴となるか断定できない。貯蔵穴の脇に灰白色粘土が検出された。34×26cmの楕円形の範囲に塊状になっていた。カマドの補強用などに使ったものであろうか。床下土壌が1基検出された。長軸1.46m、短軸0.6mの長方形で中間がやや括れて

いる。深さは11cmである。

カマドは東壁のほぼ中央と思われる位置に検出された。燃焼部は上横状に掘られ半分ほど壁外に出ていた状況が残われる。2層、3層が天井崩落土と考えるなら、火床面は床面より15cm程度は低かったと考えられる。袖は残っていない。

貯蔵穴は、カマドの右側に検出された。長径36cm、短径32cm、深さ10cmのピット状である。礎石として使ったと思われる礫と須恵器環が出土した。

遺物は、貯蔵穴とカマドから出土した。カマドからは須恵器蓋と土師器環が出土した。

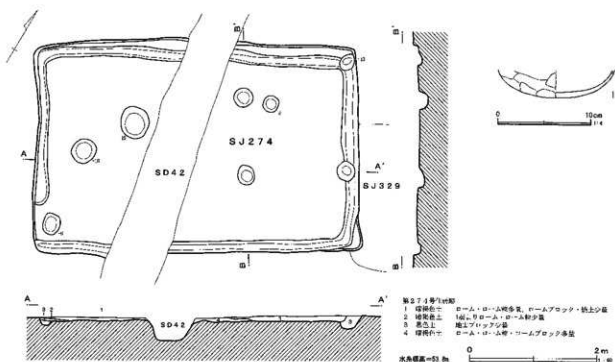
時期は9世紀前半である。

第276号住居跡 (第200図)

調査区の南側、G・G・H・H-45グリッドに位置する。第277号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。検出時には、床面が露出していた部分がある。

平面形は長方形であるが、西辺より東辺が長くやや歪んでいる。長軸が5.44m、短軸は4.76m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-81°Eを指す。

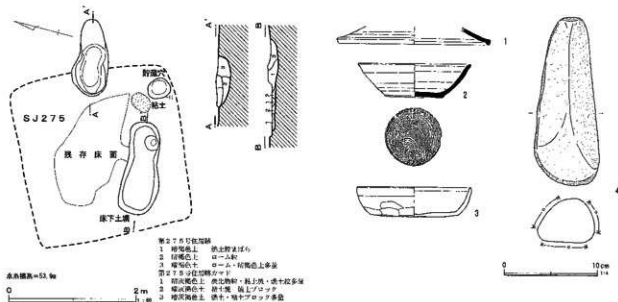
床面は中央部から西側寄りが硬化していた。壁溝は切れており、カマドの右側と西壁の殆どには見られなかった。幅は14~24cmで、深さは5~10cmである。柱穴はP1からP3の3基が検出されたが、南



第198図 第274号住居跡・出土遺物

第109表 第274号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	-	(2.9)	-	A B D	普通	橙	70	内外面摩耗著しい



第199図 第275号住居跡・出土遺物

第110表 第275号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 蓋	(16.0)	(1.8)	-	E	良好	灰	10	カマド
2	須恵器 坏	12.0	3.6	6.1	E	良好	灰	100	
3	土師器 坏	(12.0)	3.1	(9.0)	B D)	普通	にぶい橙	40	カマド
4	底石	長さ17.7cm 幅6.9cm 厚さ4.6cm 重さ818.16g							

東の1基は検出できなかった。P1は直径38cm、深さ30cmで、P2、P3は直径26cmで、深さは27cmと47cmである。カマドの前1mの所に楕円形の土壇が検出された。長径74cm、短径60cmで、深さは5cmであった。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は段を持って壁外に出ているが、高さの差は僅かで、調査時には白色粘土と焼土の広がりが見られ、数センチメートル見られたことから、住居跡内にも入っていた可能性がある。袖は検出されなかったが、左袖の基部には白色粘土が残っていた。貯蔵穴は確認されなかった。

カマドの右手前に炉の底部と思われる焼土が検出された。隅丸長方形で長軸36cm、短軸30cmを測る。全体が焼土化しているというよりは、焼土ブロックが入っている状態であった。炉底の下方或いは葺の掘り方部分ではないかと考えておきたい。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器坏片などが少量出土したが、図示できたのは3点である。この他に3~5cm程度のスサ入りの粘土塊が数点出土した。スサの径は3~4mm程度で、直接被熱してはいない。カマド或いは葺の構築材と考えられる。また、住居跡北隅付近から鉄分(塊?)或いは滓のようなものが出土した記録があるが、傷みが激しかったのか、取り上げられていない。

遺物の時期は9世紀後半としておきたい。

第277号住居跡(第200図)

調査区の南側、GG・HH-45グリッドに位置する。第276号住居跡と重複関係にあり、これよりも古い。検出時には殆ど床面が出ており、浅く掘り下げた。

平面形は長方形である。規模は長軸5.54m、短軸4.60mである。主軸方向は、N-113°-Eを指す。

床面はほぼ平坦であるが、カマド左側の部分は既に壁が消滅しており、南西側は第266号住居跡によって壊されていた。壁溝は検出されなかった。柱穴

はカマド側に検出された2基を考えておきたい。

カマドは東壁の北寄りに造られていた。壁を掘り込んで突出している。掘り方底部が残存していた。残存していた部分は長さ1m、幅0.6mである。袖は残っていなかった。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、土師器小片などが僅かに出土しており、図示できたのは3点である。

時期は9世紀中頃と考えられる。

第278号住居跡(第203図)

調査区の南寄り、EE-44グリッドに位置する。第299・303号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

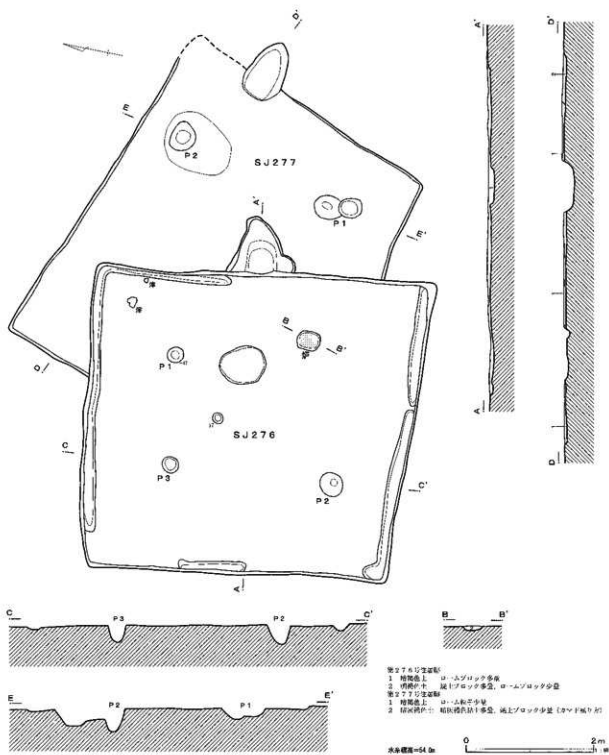
平面形は長方形である。規模は南北方向が2.74m、東西方向は1.80mである。深さは0.07m、主軸方向は、N-92°-Wを指す。

床面はカマドの前が硬化していた。壁溝及び柱穴は検出されなかった。カマド対面の東壁際に炭化物が集中して認められた。長径1mの範囲で、下の第299号住居跡のものが出てしまっている可能性もある。

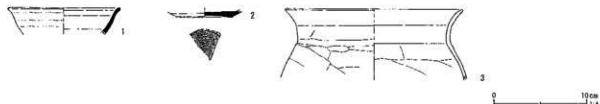
カマドは西壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁外にかかり、そのまま煙道に続く。燃焼部と煙道には、形態的に明瞭な差はなく、先端に向かって幅が狭くなるだけで、底面の高さもほぼ同じである。煙道先端は、煙出しとして直径30cmのピットが上から掘り込まれている。袖は検出されていないが焚口にあたる部分に崩落した粘土とともに片岩が検出された。天井部を構築していたものと思われる。また、確認段階で円筒埴輪が出土しており、同じくカマド構築材として使われていたものと考えられる。カマドの規模は煙道先端まで含めて、長さ1.58m、幅は、焚口部が40cm、先端では28cmである。

遺物は少量の出土で、図示できたのは土師器皿、埴輪、刀子の3点である。土師器皿はカマドの前から伏せた状態で出土した。

時期は11世紀と考えられる。



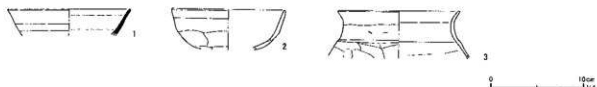
第200図 第276・277号住居跡



第201図 第276号住居跡出土遺物

第111表 第276号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(12.0)	(2.8)	-	E	良好	灰	10	
2	須恵器 坏	-	(0.7)	(6.0)	E	良好	黄灰	10	
3	土師器 甕	(19.0)	(7.5)	-	BDE	普通	褐	25	床下



第202図 第277号住居跡出土遺物

第112表 第277号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.0)	(12.8)	-	E	良好	灰	15	カマド
2	土師器 坏	(12.0)	(4.2)	-	ABE	不良	にぶい橙	15	カマド 内外面摩耗著しい
3	土師器 甕	(13.0)	(5.0)	-	BD	普通	褐	15	カマド

第279号住居跡 (第204図)

調査区の南側、I I-43グリッドに位置する。第50号溝跡・第268号土壌と重複関係にあり、第50号溝跡より古く、第268号土壌より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.86m、短軸2.90m、深さは0.20mである。主軸方向は、N-13°-Eを指す。

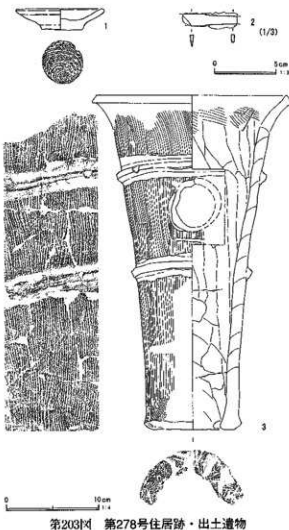
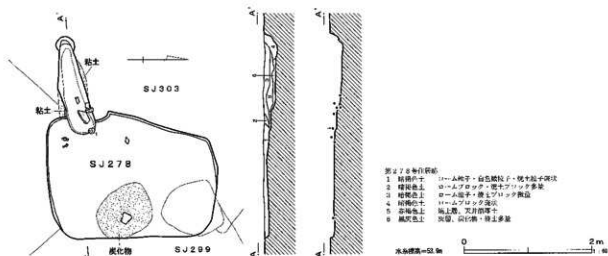
覆土はロームを多く含んでいるが、自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で、カマド前面から住居跡南側にかけて硬化していた。壁跡は全周し、幅は10cm前後で、深さは10~13cmである。住居跡に伴うピットは検出されなかった。住居跡北西隅に土壌状の掘り込みを検出した。歪んだ長方形で長軸80cm、短軸66cm、深さ18cmを測る。検出面では炭化粒子と焼上の小ブロックがかなり密に見られた。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。壁を

掘り込んで突出している。燃焼部は幅56cm、奥行き50cmほどで、長さ85cmの煙道に続くが底面の深さはほぼ一定で、煙道底面に傾斜は殆どない。カマド掘り方は、床面から約10cm掘り下げている。殆ど埋め戻さずに使用したと思われる。9層が顕著な灰層で、7層が天井崩落土である。住居跡断面ではその下に更に灰層と焼上粒を含む間層が見られるが、カマド内では部分的に壁や天井の崩落があり、修復や崩落土の片付けを行うが、使用に影響の少ない壁際などではそのまま堆積したと考えられる。袖は検出されなかった。

遺物は東壁際から土師器坏、土錘、刀子などが出土した。刀子は柄木の本質が残っていた。刀身先端を欠失するが、刃部は使い込まれてかなり減っている。

時期は7世紀末から8世紀初頭と考えられる。



第280号住居跡 (第205区)

調査区の中央、調査区の南寄り、FF-46・47、GG-46グリッドに位置する。第266・267号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

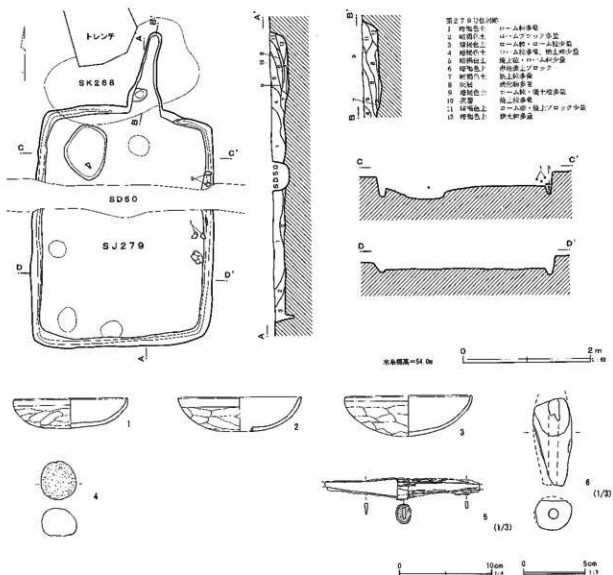
平面形は方形である。規模は長軸5.20m、短軸4.90m、深さは0.02mでごく浅い。主軸方向は、N-52°-Eを指す。

床面は、第266号住居跡が殆ど入り込んでいるために約半分がなくなっており、また、貯蔵穴のある北東側が壁が失われているため、僅かに低くなったが他はほぼ平坦である。壁溝は東壁と南角を中心に検出された。南壁は失われているが壁溝があった可能性はある。柱穴は対角線状に4基検出された。直径は30cm前後で、深さは36~38cmでP1は53cmと深い。岡面ではP4はやや小さく見えるが、これは第266号住居跡の床面で検出したためで、他の柱穴と底面の高さは同じである。住居跡北隅に楕円形の土塊状の掘り込みが検出された。長径50cm、短径40cmで、深さは9cmであった。

カマドや伊は検出されなかった。おそらく、伊があったものと思われるが、第266号住居跡によって

第113表 第278号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 小皿	9.4	2.3	4.4	A B D	普通	にぶい黄褐色	100	カマド
2	竹筒短輪	21.2	35.3	10.4	A D E H	良好	明赤褐色	45	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
3	鉄製品	残存長4.3cm 幅1.0cm		厚さ0.2cm	重さ5.52g				刀子



第204図 第279号住居跡・出土遺物

第114表 第279号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	12.0	3.1	-	ABD	不良	橙	100	内外面やや摩耗する
2	土師器 坏	(13.0)	3.6	-	ARD	不良	橙	20	内外面やや摩耗する
3	土師器 坏	13.4	4.3	-	ABD	不良	橙	95	
4	磨石	長さ4.1cm 幅3.7cm 厚さ(2.9)cm 重さ62.93g							カマド 安山岩
5	鉄製品	長さ(12.3)cm 刃身長(5.3)cm 幅1.4cm 納元金具径1.5×1.2cm 重さ18.12g							刀了 木質(桐木) 残存
6	土鏝	長さ(6.8)cm 直径(2.8)cm			B.F.	普通	にがい輝	60	孔径0.8cm

失われたと考えられる。

貯蔵穴が住居跡東隅に検出された。隅丸長方形で、規模は長軸56cm、短軸50cm、深さ21cmである。覆土中位からほぼ完形の土師器碗が1点出土した。

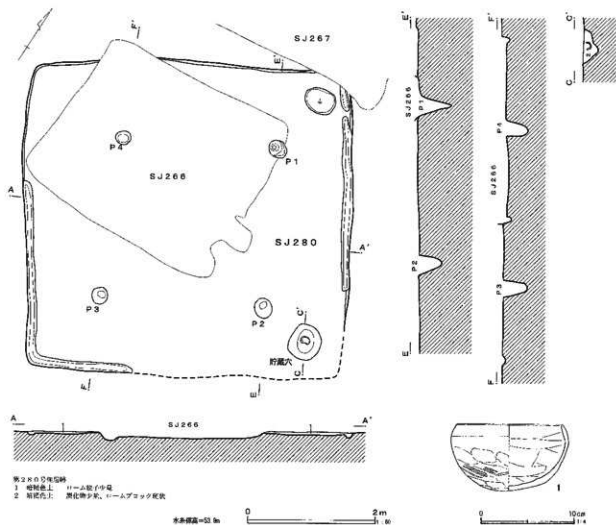
遺物は、貯蔵穴出土の埴の他は小片が少量出土し

たのみである。

時期は5世紀である。

第281号住居跡(第206図)

調査区の西側、E E-42グリッドに位置する。第



第205図 第280号住居跡・出土遺物

第115表 第280号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 埴	11.0	7.0	-	A B D E J	普通	明赤褐	90	内外面やや摩耗する

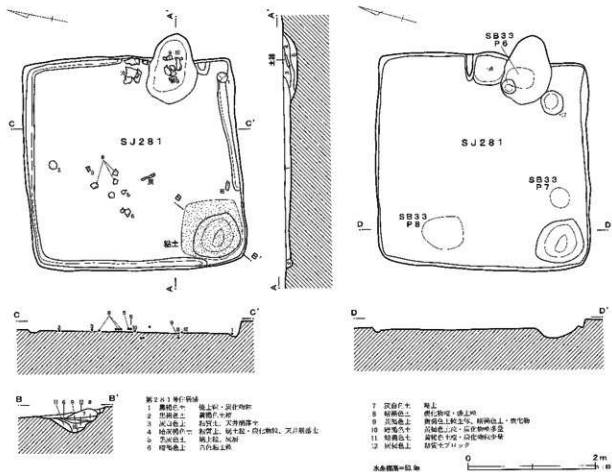
33号掘立柱建物跡と重複関係にある。第33号掘立柱建物跡の柱穴は床面下から検出されたことから本住居跡が新しいと考えられる。

平面形は方形である。規模は長軸3.40m、短軸3.40m、深さは0.10mでごく浅い。主軸方向は、N-75°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、中央部が硬化していた。壁溝はカマドと南隅にある土壌部分を除いて廻っていた。幅は10~25cmで、深さは3~7cmである。ピットは検出されなかった。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。土塊状に

掘り込んで、半分ほど壁の外に出ている。掘り方は床面より10cm掘り下げている。覆土は明瞭で、最下層の5層が灰層で、4層は流入上及び天井崩落土の混合上と考えられる。3層は天井部本体の崩落上である。袖は、右袖が20cm残存していたのみである。燃焼部の規模は、奥行き1.12m、幅0.78mである。床面を剥したところ、カマドの左脇に更にカマドが1基検出された。燃焼部はほぼ住居跡内に入っており左袖の基部が残存していた。掘り方は深さ10cmで、袖の長さは42cmであった。右袖部分は新しいカマドに壊されていることから、カマドを付け替えたもの



第206図 第281号住居跡

と考えられる。

住居跡南隅に灰白色粘土の広がりが見られた。粘土は住居跡の隅から一辺1mほどの、ほぼ方形の範囲に広がり、壁際ほど厚く残っていた。最も厚い所では約15cm残っていた。粘土を除去したところ土塊状の掘り込みが確認された。楕円形状で長軸74cm、短軸64cm、深さ30cmを測る。覆上は炭化物粒子を含む暗褐色土が主体で粘土はその上に乗っていた形である。

遺物は、カマド内及び周辺から土師器瓶、須恵器蓋が出土し住居跡中央付近からは土師器環類が出土した。

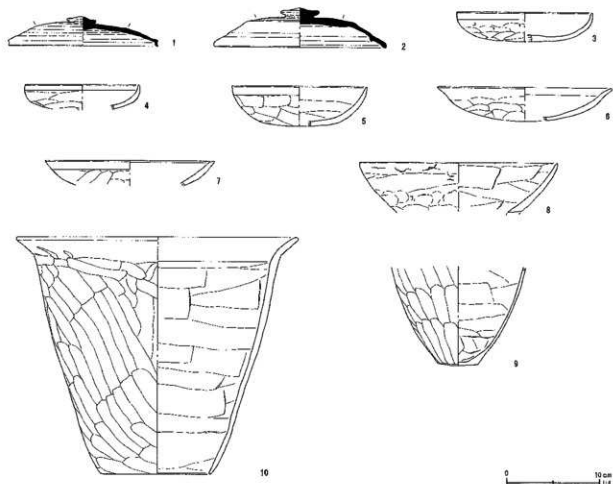
時期は8世紀前半と考えられる。

第282号住居跡 (第208図)

調査区の東側EE・FF-44グリッドに位置する。第298号住居跡と重複関係にあるが第298号住居跡は縄文時代の住居跡である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.24m、短軸2.58m、深さは0.03mでごく浅い。主軸方向は、N-87°-Eを指す。

床面は住居跡中央及びカマドの前がやや硬化していた。壁溝はカマドの設置される東壁にはなかったが、それ以外は廻っている。幅は14-24cmで、深さは3-6cmである。ピットは西壁寄りに2基検出された。直径30-38cmで、深さは5-13cmであるが、主柱穴となるかどうか断定できない。床下土塊は、住居跡中央のやや東寄りに検出された。楕円形で長径1.92m、短径0.67m、深さ7cmを測る。灰褐色粘質土で埋められていた。



第207図 第281号住居跡出土遺物

第116表 第281号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 蓋	15.8	3.1	-	E	良好	灰	95	つまみ直径3.1cm
2	須恵器 蓋	(18.0)	4.2	-	E J	良好	黄灰	60	つまみ直径4.0cm
3	土師器 坏	(14.4)	3.1	-	A B D	普通	橙	30	
4	土師器 坏	(12.0)	2.6	-	B D	普通	にぶい橙	15	
5	土師器 坏	(14.4)	4.2	-	A B D	普通	橙	40	
6	土師器 甕	(18.6)	(3.5)	-	B D	普通	にぶい褐	40	
7	土師器 甕	(18.0)	(3.6)	-	B D	普通	橙	10	
8	土師器 鉢	(21.0)	(5.2)	-	B D	普通	にぶい橙	40	
9	土師器 甕	-	(10.5)	4.3	B D E	普通	褐	60	
10	土師器 甕	(30.0)	25.0	(11.5)	A B D E	普通	にぶい橙	60	カマド

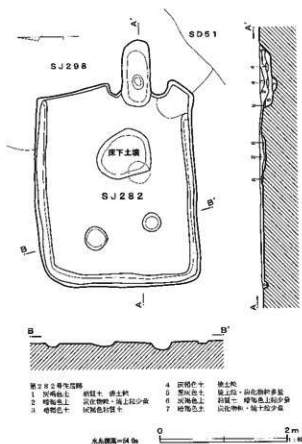
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は大きく壁外に出る。掘り方は長楕円形で、床面より15cm低く掘り下げている。先端はほぼ45°の傾斜で立ち上がる。底面には支脚を立てた痕跡と思われるピットがある。土層は明瞭でないが、5層が火床面と思われる。袖は両袖とも確認されたが長さは25cm前後と短い。袖の部分だけ灰白色粘土で造られてい

た。燃焼部の規模は、奥行き1.06m、幅0.44mである。貯蔵穴は検出されなかった。

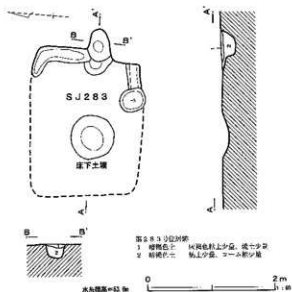
遺物は、殆ど出土せず図示できるものもない。時期は不明である。

第283号住居跡 (第209図)

調査区の中央、C C-50グリッドに位置する。重



第208図 第282号住居跡



第209図 第283号住居跡・出土遺物

第117表 第283号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(12.0)	3.3	(5.4)	E	良好	灰	15	カマド

複する遺構はない。検出時には床面は殆ど失われており壁溝の一部とカマドの底部などが残っているのみであった。床面の痕跡を追って平面形を推定した。

平面形は長方形と推定した。規模は、おおよそ長軸2.3m、短軸1.7mと思われる、主軸方向は、N-85°-E前後を指す。

床面の状態は不明である。壁溝は東辺と南辺の東側だけが残存していた。ピットは検出されなかった。床下土壇と思われる掘り込みがカマドから1.5mの位置に検出された。円形で、直径は70cmを測り、深さは12cm残っていた。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。壁を掘り込んである。掘り方は上壊状態で、深さは24cmあり他の住居跡のものより深めである。土層断面から、掘り方の大部分を埋め戻して火床面としたと考えられる。軸は残っていないかった。

遺物は、カマドから須恵器坏片が1点出土した。時期は9世紀前半と考えられる。

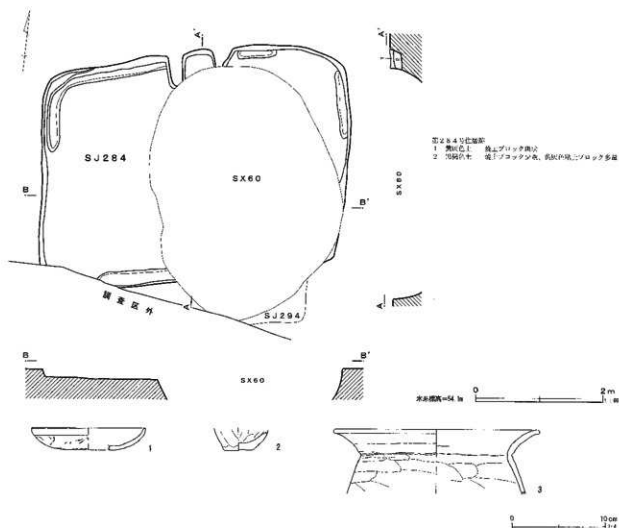
第284号住居跡 (第210区)

調査区の南西側、L L-41グリッドに位置する。すぐ南側に第9号住居跡がある。第294号住居跡、粘土採掘坑(S X 60)と重複関係にあり、粘土採掘坑より古い、第294号住居跡より新しいと思われる。

平面形は長方形である。規模は長軸4.90m、短軸3.66m、深さは0.14mである。主軸方向は、N-11°-Wを指す。

床面の東側半分が粘土採掘坑によって壊されてい





第210図 第284号住居跡・出土遺物

第118表 第284号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 杯	(12.0)	2.3	-	A B	普通	にぶい橙	15	カマド
2	土師器 ミニチュア	(2.3)	3.2	-	B D	普通	橙	60	
3	土師器 甕	(22.0)	(6.9)	-	A B D E	普通	にぶい濁	10	

るため、詳細は不明であるが、残存部分の状況から中央部から西壁中央にかけて硬化していたようである。壁溝は切れぎれで、カマドの両脇、東壁北側、南壁に検出された。ピットは検出されなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に造られていたが、前半分を粘土探掘坑によって壊されているため全容はわからない。燃焼部は壁内に取まり、袖は長さ50cmほどと推定される。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、カマドから土師器の杯と甕が出土した。

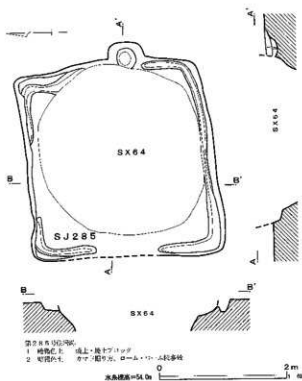
時期は8世紀前半としておきたい。

第285号住居跡 (第211区)

調査区の南西端、KK・LL-40グリッドに位置する。粘土探掘坑(SX64)と重複関係し、これより古い。

平面形は方形である。規模は長軸3.14m、短軸3.10m、深さは0.15mである。主軸方向は、N-84°-Eを指す。

床面は、その殆どを粘土探掘坑によって壊されているため、詳細は不明である。壁溝は北壁と西壁の中央が切れる。幅は12~24cmで、深さは4~8cmで



第211図 第285号住居跡

ある。柱穴などの床面の施設は不明である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。壁を土塊状に掘り込んでいる。

遺物は小破片が少量出土したが図示できるものはない。

時期は不明であるが、粘土採掘坑が住居跡の中に掘り込まれているという共通性から、第284号住居跡と同じような時期と考えておきたい。

第286号住居跡 (第212図)

調査区の西側、F F-43・44グリッドに位置する。南東側が第51号遺跡とわずかに重複し、本住居跡が占むと思われる。

平面形は方形である。規模は長軸5.36m、短軸5.14m、深さは0.15mである。主軸方向は、N-50°-Eを指す。

覆土の除去中に、床面から5~7cm上で焼土の広がりを見出した。住居跡中央から東側にかけての範囲で、一辺2.2mほどのほぼ方形の範囲に、炭化粒を含む黒褐色土とともに広がっていた。土層断面で

は、その範囲が床面から盛り上がっているのが明瞭に認められた。住居跡からは他に炭化材などは検出されておらず、火災住居とも思われなことから、何を意味するのか不明であるが、その堆積状況から、おそらく住居廃絶後、あるいは廃絶時に床面上で火を使う何らかの作業が行われたものであろう。

床面は平円で主柱穴の内側が硬化していた。壁溝は、西隅が切れている以外は廻っている。幅は20cm前後と安定し、深さは5~10cmである。柱穴はP1~P4である。P2は位置がずれるが、深さからこれが該当すると思われる。柱穴はP2以外は直径40cm前後で、深さは45cm前後である。P3は72cmと深い、底を掘り抜いた恐れがある。

カマドは北東壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は壁内に取まり、煙道が外に延びる。掘り方は奥行きよりも幅の広い土塊状に掘られ、底には厚く灰層が見られる。火床面はこの灰層の上面で床面とあまり変わらない高さだったと思われる。袖は、白色粘土を混ぜて造られており、左が40cm、右が60cm残存していた。燃焼部の奥行きは64cm、幅は66cmで、煙道の長さは48cmである。

貯蔵穴は、カマドとは反対側の南隅に確認された。

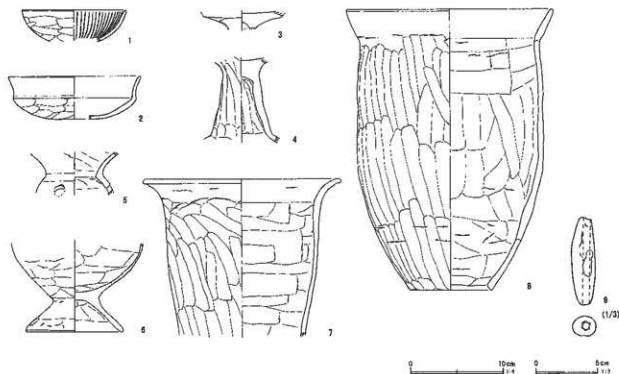
長方形で長軸64cm、短軸52cm、深さ22cmである。

遺物は、カマド右脇から台付甕の胴部下半が出土した。他には土師器が少量出土した程度であるが、5は土師器とされる。遺物量は少ないが混入が多く、2・7は混入と思われる。

第287号住居跡 (第214図)

調査区の西側、F F-43グリッドに位置する。第288号住居跡、第31号掘立柱建物跡、粘土採掘坑(S X 56)と重複関係にあり、粘土採掘坑より古く、第288号住居跡より新しい。第31号掘立柱建物跡との新旧は不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.80m、短軸3.32m、深さは0.15mである。主軸方向は、N-47°-Eを指す。



第213図 第286号住居跡出土遺物

第119表 第286号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(11.0)	(3.3)	-	BD	普通	明赤褐	20	
2	土師器 坏	(14.0)	4.5	-	AB	不良	明褐	30	貯蔵穴
3	土師器 高坏	-	(2.0)	-	BD	普通	明赤褐	90	
4	土師器 高坏	-	(8.9)	-	BE	普通	にぶい赤褐	60	
5	土師器 球	-	(4.6)	-	BDE	普通	にぶい褐	20	
6	土師器 台付甕	-	(9.3)	10.3	BDE	不良	にぶい褐	80	外面被熱著しい
7	土師器 甕	(21.0)	(16.7)	-	ABDE	普通	橙	30	甕形の歪み著しい
8	土師器 甕	(22.0)	29.7	8.8	ABE	普通	にぶい黄橙	40	貯蔵穴
9	土錘	長さ7.0cm	直径1.9cm	-	AB	普通	灰黄褐	90	孔径0.6cm 重さ18.9g

カマドの右前にピット状の掘り込みを検出した。直径30cmで、深さは18cmである。貯蔵穴であろうか。

遺物は、住居跡の東側に多く出土した。出土状況は、かなり床面に近いが壁際ほど高い位置にある。7の甕はカマド右袖の脇に正位で据えられた状態で出土した。紡錘車はカマド左脇の壁際で、確認面から3cm下がった位置で出土した。住居跡が埋没する過程で流れ込んだものと思われる。

時期は7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

第288号住居跡 (第214図)

調査区の西側、FF-42・43グリッドに位置する。

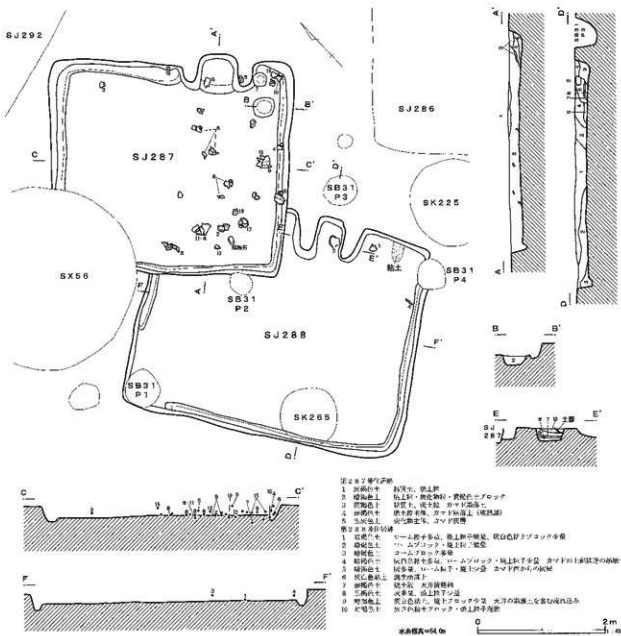
第287号住居跡、第31号掘立柱建物跡、第265号土城と重複関係にあり、第287号住居跡、第31号掘立柱建物跡より古く、第265号土城より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.52m、短軸3.62m、深さは0.18mである。主軸方向はN-56°-Eを指す。

住居跡の北側約1/4を第287号住居跡によって壊されている。床面は平坦で、壁溝は西隅とカマドのある東壁際には見られない。幅は12~20cmで、深さは3~10cmである。柱穴は検出されなかった。

カマドは白色粘土で構築され、東壁のやや南寄り

に検出された。燃焼部は壁内に収まる。掘り方はご



第214図 第287・288号住居跡

く浅い皿状で、そのまま火床面としている。8層の灰層が見られ、6層、7層は天井崩落上で明瞭に認められた。袖は両袖とも長さ60cm前後である。燃焼部の規模は、奥行き70cm、幅46cmである。

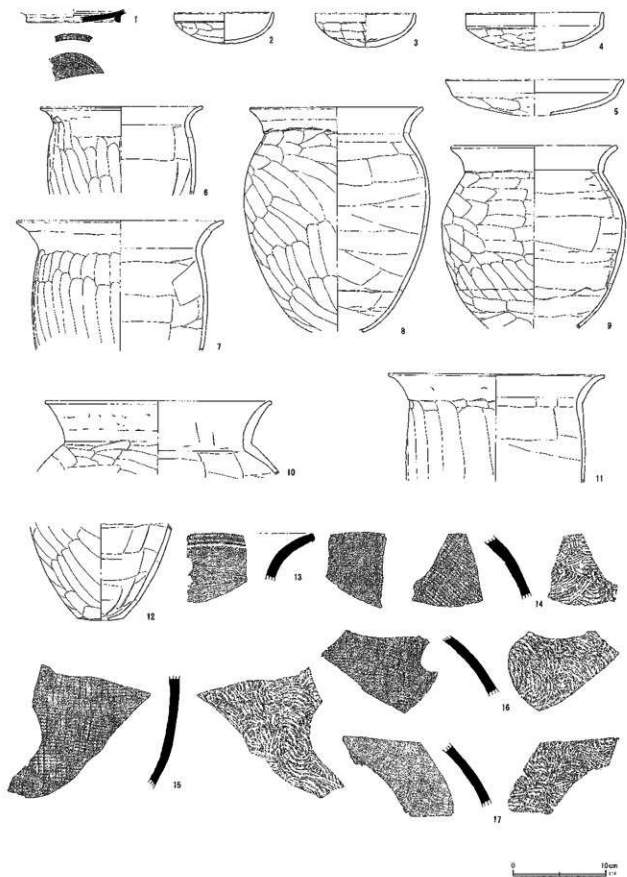
遺物は、土師器が少量出土した。3はカマドの天井崩落土の上から出土した。2は混入である。

時期は7世紀後半から末頃としておきたい。

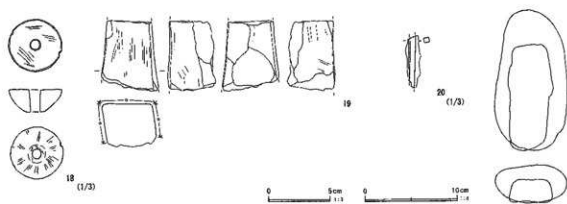
第289号住居跡 (第218図)

調査区の西側、E E-43・44グリッドに位置する。第290号住居跡、第30号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古いと思われる。

検出時には、重複する第290号住居跡の床面は殆ど消失しており、本住居跡も一部床面が出ていた。掘り下げられたのは灰溝のみで、カマドも底面が残っている程度という状況であった。平面形は長方形である。規模は長軸3.34m、短軸2.74m、深さ0.04mである。主軸方向は、N-52°-Eを指す。



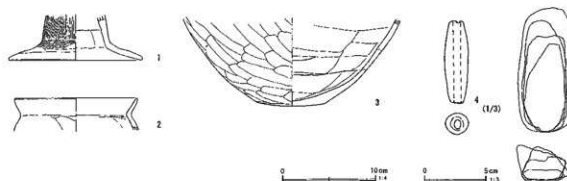
第215图 第287号住居跡出土遺物(1)



第216図 第287号住居跡出土遺物(2)

第120表 第287号住居跡出土遺物観察表

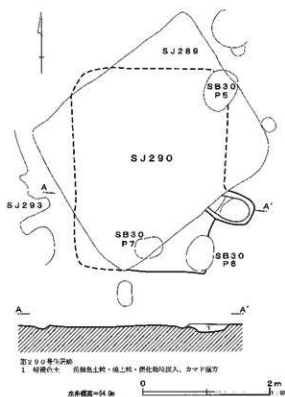
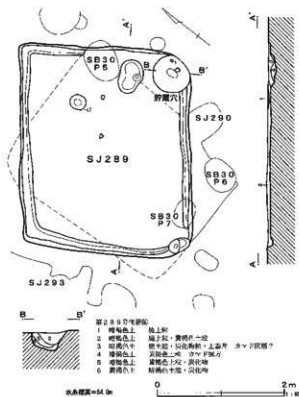
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 高台付埴	-	(1.3)	(10.0)	B E F	良好	にぶい黄橙	15	南北倉庫
2	土師器 坏	10.6	3.3	-	B D	普通	橙	80	
3	土師器 坏	(10.6)	3.6	-	A B D	普通	橙	40	
4	土師器 坏	(14.6)	(3.7)	-	B E F	普通	にぶい赤褐	20	
5	土師器 皿	(19.0)	3.8	-	B D J	普通	橙	20	内外面摩耗する
6	土師器 甕	(17.2)	(9.2)	-	A B D E	普通	にぶい橙	30	器形もみ大きい
7	土師器 甕	22.0	(13.7)	-	A B E	普通	橙	60	
8	土師器 甕	18.4	(23.9)	-	B E	普通	灰褐	60	カマド
9	土師器 甕	(17.8)	(19.2)	-	A B E	普通	にぶい橙	40	
10	土師器 甕	(24.0)	(7.7)	-	A B D E	普通	橙	25	
11	土師器 瓶	23.0	(11.4)	-	B	普通	橙	60	摩耗著しい
12	土師器 甕	-	(10.2)	(5.0)	B	普通	褐	25	
13	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	
14	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	
15	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	
16	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	
17	須恵器 甕	-	-	-	E	良好	灰	-	カマド
18	石製紡車	直径4.2cm	厚さ1.8cm	孔径0.8cm	面さ39.6g				滑石製
19	砥石	長さ(7.5)cm	幅6.0cm	厚さ(4.5)cm	重さ307.3g				
20	鉄製品	残存長4.1cm	断面0.4×0.4cm	重さ4.9g					棒状品 釘?
21	編物石	長さ14.7cm	幅7.6cm	厚さ3.9cm	重さ676.1g				
22	編物石	長さ11.1cm	幅4.8cm	厚さ2.4cm	重さ235.7g				



第217図 第288号住居跡出土遺物

第121表 第288号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	-	(4.8)	(14.2)	A B D E	普通	靑	40	カマド 孔径60.6cm 重さ19.3g
2	土師器 小型甕	(13.0)	(3.4)	-	A B	普通	にぶい赤褐	15	
3	土師器 甕	-	(9.2)	7.0	A B E	普通	靑	60	
4	土師	長さ6.5cm	直径1.9cm	-	A B E	普通	靑	100	
5	編物石	長さ13.0cm	幅5.7cm	厚さ3.7cm	-	-	-	重さ401.5g	
6	編物石	長さ11.7cm	幅4.7cm	厚さ2.5cm	-	-	-	重さ215.0g	
7	編物石	長さ10.0cm	幅4.6cm	厚さ3.5cm	-	-	-	重さ236.2g	
8	編物石	長さ(9.3)cm	幅4.3cm	厚さ1.1cm	-	-	-	重さ70.7g	



第218図 第289・290号住居跡



第219図 第289号住居跡出土遺物

床面はほぼ平坦で、壁溝はカマド部分と南側を除いて廻っている。幅は10~18cm、深さは5cm前後である。ピットは1基確認されたが他は検出できなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られており、壁内にある。検出時には白色粘土と微量の焼土が見られ、壁

第122表 第289号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 ミニチュア	-	(3.2)	-	A B D	普通	にぶい靑	80	貯蔵穴 高坏型

についていたが、既に袖はなく粘土を除去したところ掘り方底部の掘り込みだけとなった。遺構実測図では掘り方底部が離れているため、カマドが壁から離れている印象を受けるが、実際は壁についていたものである。

貯蔵穴はカマドの右に検出された。楕円形で長径62cm、短径54cm、深さ23cmを測る。覆土上層から高環型のミニチュア土器の脚部が出土した。

遺物は、土師器破片が少量出土したが、図示できたのは貯蔵穴出土のミニチュア土器だけである。

時期を測定できる遺物はないが、甕の底部破片は6世紀前半のものと考えられる。

第290号住居跡 (第218図)

調査区の西側 E E-43・44グリッドに位置する。第289号住居跡、第30号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第289号住居跡より新しいと思われるが、第30号掘立柱建物跡との新旧は不明である。

検出時には殆ど床面が消失しており、確認できた

のはカマドとその右側部分である。北側の角は痕跡を辿って推定した。

平面形は長方形で、規模は長軸が約3.3m、短軸は約2.3mと推定される。主軸方向は、N-93°-E付近である。

床面などの状況は不明である。壁溝やピットは検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りには造られていた。残存していたのは掘り方の底部のみであった。

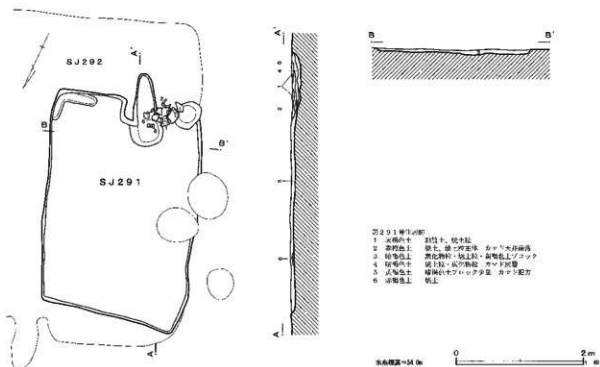
遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第291号住居跡 (第220図)

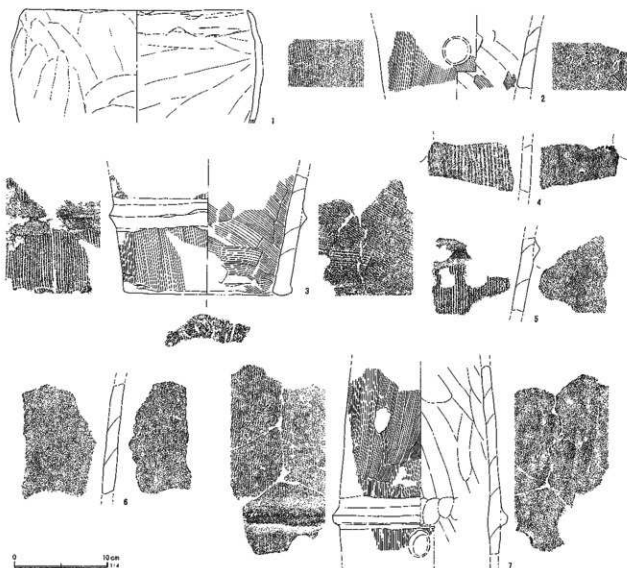
調査区の東側、E E-42・43、F F-43グリッドに位置する。第292号住居跡と重複関係にあり、これよりも新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.44m、短軸2.44m、深さは0.04mでごく浅い。主軸方向は、N-160°-Eを指す。

床面は、東側が硬化していたが、本住居跡は第



第220図 第291号住居跡



第221図 第291号住居跡出土遺物

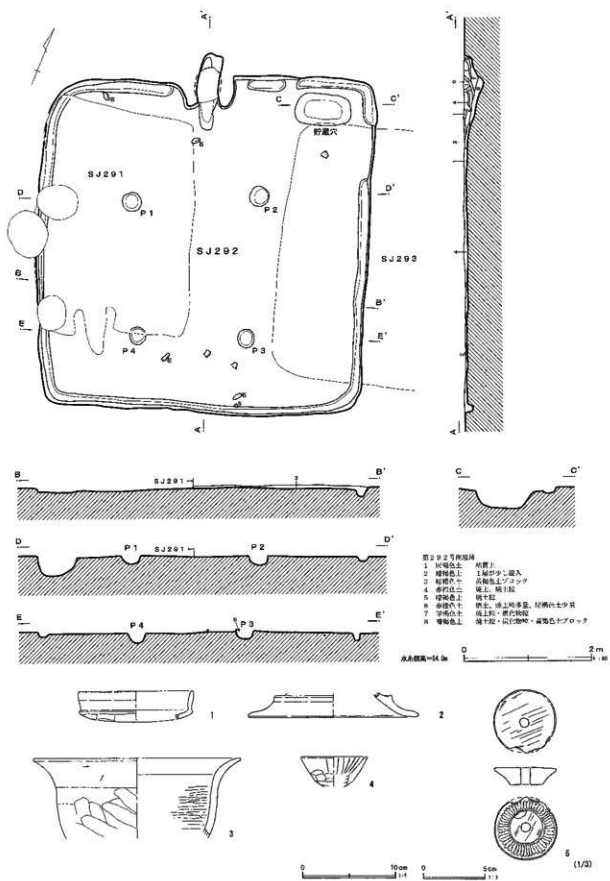
第123表 第291号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(24.0)	(11.8)	-	ABE	普通	にぶい赤褐色	15	カマド
2	形象埴輪 白部	-	(6.5)	-	ABDE	良好	にぶい橙	50	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
3	円筒埴輪	-	(12.7)	(18.0)	ABDEJ	良好	にぶい赤褐色	35	カマド 外面タテハケ 内面ナメハケ
4	円筒埴輪	-	(5.0)	-	ABDJ	普通	浅黄橙	30	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
5	円筒埴輪	-	(7.9)	-	ABDE	良好	にぶい赤褐色	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナメハケ新ナデ
6	円筒埴輪	-	(11.5)	-	ABCDJ	良好	にぶい橙	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
7	形象埴輪 白部	-	(19.8)	-	ABDE	良好	にぶい橙	30	カマド 外面タテハケ 内面ナデ

292号住居跡の覆土中に掘り込まれており、床面の高さがほぼ同じであるため、硬化面は第292号住居跡のものである可能性もある。壁溝は南東角だけ検出された。ピットは検出されなかった。

カマドは南壁の西寄りに造られていた。燃焼部は

住居跡内にあるが、煙道部は壁を掘り込んでいる。掘り方は細長い土塚状で、断面では燃焼部と煙道部の境は不明瞭であるが、平面では燃焼部は長方形で煙道は幅がやや狭くなる。掘り方底部を埋めて火床面としているが、埋め方は先端の煙道部を高くし、



第222図 第292号住居跡・出土遺物

第124表 第292号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.0)	(3.0)	-	B	普通	黒褐色	10	内外面黒色
2	土師器 高坏	-	(2.5)	(18.0)	A B E	普通	橙	15	
3	土師器 鉢	(22.0)	(8.4)	-	B D E	普通	にぶい褐色	10	
4	土師器 ミニチュア	(7.0)	(3.2)	-	A D E G	普通	灰青褐色	60	
5	石製紡錘車	長径5.0cm 短径2.5cm		厚さ1.3cm	孔径0.7cm	重さ40.5g			

火の引きを良くしているようである。袖は、左袖が長さ44cmある。右袖には片岩と円筒埴輪を構築材として使っていた。円筒埴輪は袖の芯に、片岩は袖の先端に使われていた。遺構図では右袖部分が幅が広がっているが、カマド内側を十分に掘り切っていない恐れがある。カマド全体の長さは115cmである。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。楕円形で長さ48cm、短径40cm、深さ12cmである。

遺物は、カマド構築材に使われていた埴輪を除くと殆どない。図示できたのは、埴輪以外にはカマドから出土した土師器壘1点である。

時期は10～11世紀と考えられる。

第292号住居跡 (第222号)

調査区の西側、E E・F D-42・43グリッドに位置する。第291・293号住居跡と重複関係にあり、これらよりも古い。

平面形は方形である。規模は一辺5.40mで、深さは0.03mでごく浅い。主軸方向は、N-24°-Wを指す。

床面は平坦で中央部が硬化していた。壁溝はカマドの右側と東壁の一部が切れるが、他の部分は全て纏っている。幅は10～18cmで、深さは5～10cmである。主柱穴は4本検出されたが、やや南西に寄っているためカマドの前と東壁沿いに広い空間がとられている。直径は30cm前後で、深さは10～15cmであった。

カマドは北壁のやや西寄りに造られていた。燃焼部は半分壁外に出る。掘り方は深く、床面から30cm掘り下げている。10cmほど埋め戻して火床面としている。袖は両袖とも45cm前後残っていたが、焚口の

長さに比べるとやや短く思われることから、先端が欠失している可能性がある。カマドの規模は奥行きが焚口部を含めて1.2m、幅は46cmである。

貯蔵穴はカマドの右側であるが、カマドから離れて住居跡北東の隅に掘り込まれていた。長方形を呈し、長軸90cm、短軸50cm、深さ19cmを測る。

遺物は少量の出土であるが、土師器の坏、ミニチュア土器、紡錘車などが出土した。4のミニチュア土器は外面艶ケズリされ、内面は篋状工具によると思われる沈着が放射状に施されていることから、高坏の坏部と思われる。紡錘車は、南壁沿いの壁溝の屑部に検出された。

時期は6世紀前半としておきたい。

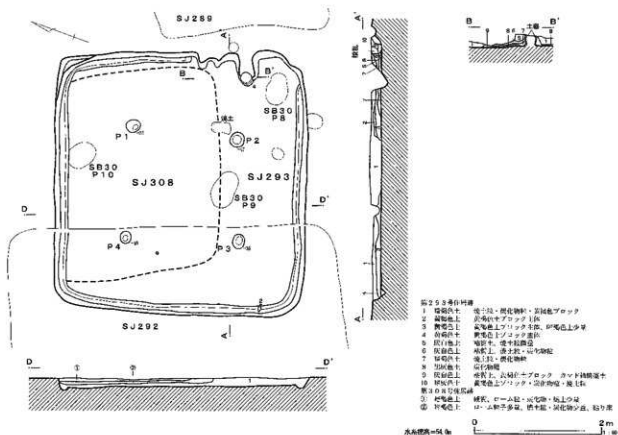
第293号住居跡 (第223号)

調査区の西側、E E-43グリッドに位置する。第292・308号住居跡、第30号掘立柱建物跡と重複関係にある。第292号住居跡より新しく、第308号住居跡より古い。覆土の掘り下げ作業時に、覆土中にあった第308号住居跡の貼床を掘り抜いてしまった。第30号掘立柱建物跡よりも古い。

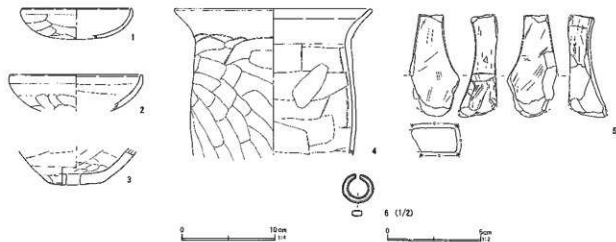
平面形は方形である。規模は長軸4.16m、短軸4.10m、深さは0.18mである。主軸方向は、N-71°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝はカマドと貯蔵穴部分以外は全周する。幅は15～20cmで、深さは5cm前後である。柱穴は対角線上に4基検出された。直径は20cm前後で、深さは35～47cmと深めである。

カマドは東壁の南寄りに灰白色粘土で造られていた。燃焼部は壁内に取まっている。左袖から燃焼部の左手前にかけて、第308号住居跡によって壊され



第223図 第293・308号住居跡



第224図 第293号住居跡出土遺物

第125表 第293号住居跡出土遺物観察表

番号	器	種	口徑	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器	坏	(11.6)	3.2	-	B D	普通	にぶい粉	30	カマド
2	土師器	坏	(14.0)	(3.8)	-	A D E G	普通	にぶい赤褐	10	
3	土師器	瓶	-	(3.8)	6.0	A B F	普通	にぶい赤褐	60	
4	土師器	甕	21.0	(15.4)	-	A B D E	普通	にぶい粉	60	カマド
5	磁石		長さ10.8cm 幅5.1cm 厚さ4.0cm 重さ199.9g							

ている。掘り方は殆どなく、床面上に直接カマドを構築したかに見受けられる。底面に薄く炭化物層（8層）が見られ、その上にカマド構築材の粘土（5・6層）が崩落している。右袖は長さ50cm残っており、先端に補強材としての甕が倒位で検出された。左袖は第308号住居跡によって壊されていたが、基部には甕を抜き取ったような半円形の痕跡が見られた。貯蔵穴は、検出されなかった。

出土遺物は、少量で土師器杯、甕、紙石等であるが、P3寄りから耳環が出土した。金銅製で金はかなり剥落しているが、内側及び外側の一部にはまだ残っている。長さ1.6cm、短径1.4cmで、厚さ0.3cm、重さは2.4gである。

時期は7世紀末頃と考えられる。

第294号住居跡（第225図）

調査区の南西側、L L-41グリッドに位置する。第284号住居跡、粘土採掘坑（S X 60）と重複関係にあり、これらより古いと考えられる。

第284号住居跡と粘土採掘坑によって、住居跡の大半を壊されているため詳細は不明であるが、平面形は規模一辺4mほどの方形と推定される。主軸方向は、僅かに西に振れている。

床面の状況は遺存状態がよくなかったため詳細は不明である。壁溝は北辺と南辺に僅かに検出された。ピットは、第284号住居跡の床面の下から3基検出された。P1、P2が主柱穴と考えられ、直径は46cm前後である。

カマドは、調査時の記録では北壁にあり、第284号住居跡のカマドの下に重なるように痕跡があったが図化できるほどではなかった。

遺物は、出土していない。

時期は不明であるが、第284号住居跡が7世紀末から8世紀初頭頃であることからそれ以前となる。

第295号住居跡（第226図）

調査区の西側、E E-42グリッドに位置する。第

291・292号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複関係にある。検出時には床面が既に失われており、遺構による新旧の確認はできなかったが、遺物から第291号住居跡より古く、第292号住居跡より新しいと考えられる。第33号掘立柱建物跡との新旧は不明である。また、北側に第301号住居跡のカマドがあることから、位置的にはこれとも重複していると思われるが、新旧は不明である。

平面形は、床面の痕跡で見ると長方形と推定される。規模は長軸約4m、短軸約3.5mと思われる。主軸方向は、N-4°-Eを指す。

床面の状況は不明である。壁溝はカマドの右側だけ残っていた。柱穴はP1、P2と考えておきたい。南辺際に直径60cmの上堀状の掘り込みが検出されたが、本住居跡に伴うという断定はできない。

カマドは北壁の西寄りに造られていた。残存していたのは底面の灰層部分である。掘り方を埋め戻すことなく、そのまま火床面として使用していたようである。

遺物は、カマドから土師器杯が出土している。

時期は8世紀前半と考えられる。

第296号住居跡（第227図）

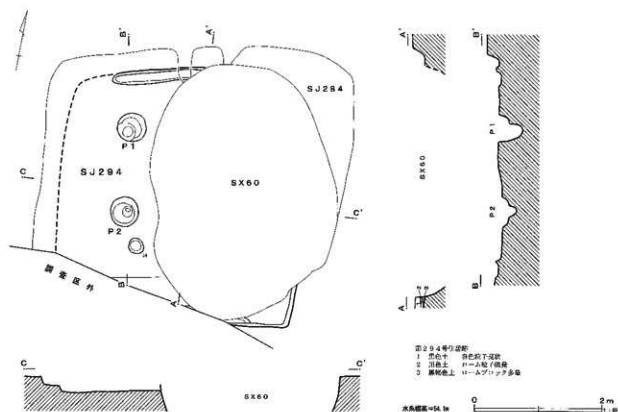
調査区の南側、I I-49グリッドに位置する。検出時には、既に床面は消失しており、カマド底部が残存するのみであった。第19・20・21号掘立柱建物跡と位置的に重複するが、新旧は不明である。

平面形や規模など具体的なことは不明である。

カマドは、その向きから東壁に造られていたと考えられる。右側に掘り方の立ち上がりが見え残っており、その位置から、燃焼部は半分ほど壁外に出ていたことがわかる。残っていた覆土はカマド使用時或いは廃棄後に流れ込んだものと思われることから、掘り方を埋め戻さずに使用していた可能性が考えられる。

遺物は、土師器杯と須恵器杯が出土した。

時期は9世紀前半としておきたい。



第225図 第294号住居跡

第297号住居跡 (第228図)

調査区の西側、DD・FE-44グリッドにある。検出されたのは、住居跡の南西隅にあたる壁溝だけであった。本住居跡は、岡部町で調査した第3号住居跡と同一で、岡部町調査時の調査区外に掛かる部分を検出されたことになる。第303号住居跡、第202号土壌と重複関係にあり、第303号住居跡より新しく、第202号土壌よりも古いと思われる。

検出されたのは壁溝だけで南辺1.6m、西辺1.1m分である。岡部町の調査によれば、住居跡は隅丸方形で、規模は4×3.6mと報告されている。

今回の調査では、遺物は出土しなかった。

第299号住居跡 (第229図)

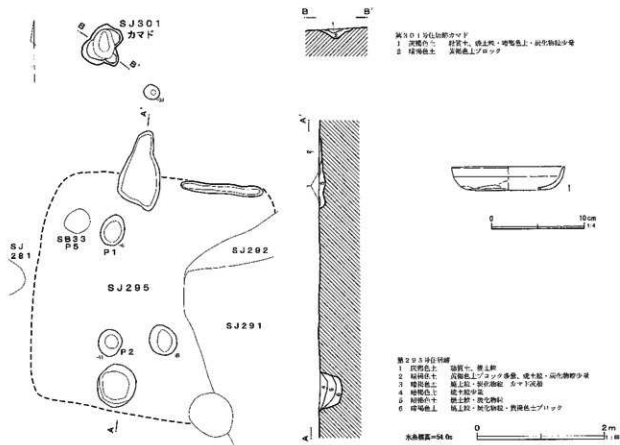
調査区の中央、FE-44・45・FF-45グリッドに位置する。岡部町調査の第5号住居跡と同一である。第278・303号住居跡、第42・51号溝跡と重複関係にあり、第278号住居跡、第42・51号溝跡より古く、第303号住居跡より新しい。

平面形は方形である。規模は長軸6.92m、短軸6.86m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-38°-Wを指す。

床面はほぼ平坦であるが、支柱穴の内側がやや高く、硬化の度合いが非常に高かった。壁溝は南隅が僅かに切れるが、ほぼ全周している。幅は12~20cmで、深さは8~12cmである。柱穴は対角線上に4基検出された。P4はやや四角に掘れたが、他は円形で直径は44~50cm、深さは35~65cmを測る。

カマドは北壁の東寄りに造られていた。燃焼部は住居跡外には出ないようである。白色粘土で造られており、遺存状態はあまりよくないが、もともと形態のつかみ難いカマドであったと思われる。袖は最終的に遺構図のようになったが、壁には強く被熱した痕跡はあまり認められず、むしろ手前側に焼土が多いことから、カマドの奥壁は住居跡壁際ぎりぎりくらいの所において、燃焼部はやや中に入っていた可能性が高いと考えられる。

貯蔵穴はカマドの右脇に検出された。楕円形を呈



第226図 第295・301号住居跡・出土遺物

第126表 第295号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 環	(12.0)	2.4	(8.8)	D	普通	にぶい程	15	カマド

し、長径80cm、短径75cm、深さ22cmを測る。

遺物は、貯蔵穴周辺から土師器環、甕が出土し、南壁際から土師器高環の脚部が出土している。出土位置によって時期的に大きな差が認められる。これは、貯蔵穴周辺は以前に調査が行われた部分であり、埋め戻されている。また第42号溝跡と重複している。第42号溝跡は、7世紀後半から8世紀初頭頃の遺物を多量に含んでおり、この遺物が混入したものと考えられる。住居跡の形態と規模からは、その時期とは考え難く、遺構に伴う、或いは近い時期の遺物は南壁際から出土した高環脚部と考えるのが妥当であろう。カマドの形状も古い時期のものと考えられることができる。報告には「(前略) 120×60cmの範囲に土師器小残片と粘土の混じった青灰色粘土が固く付着

していた。」とある。

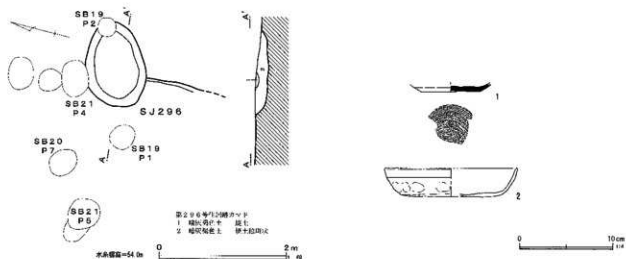
時期は土師器高環の時期をとって5世紀末頃と考えておきたい。

第300号住居跡 (第231図)

調査区の南側、GG-43グリッドに位置する。第24号井戸跡、第49号溝跡と重複関係にあり、これらよりも古い。

南側を対角線に第49号溝跡によって壊され、北壁には第25号井戸跡がかかる。平面形は不明と言わざるを得ないが、検出された規模は東西方向が3.36m、南北方向は2.38m、深さは0.08mである。軸方向は、N-82°-Eを指す。

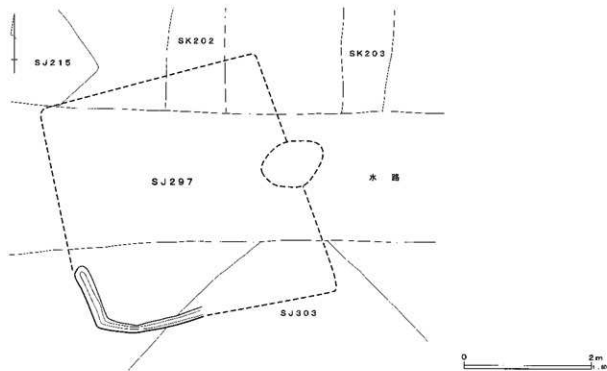
床面は、残存面積が少ないがほぼ平坦である。壁



第227図 第296号住居跡・出土遺物

第127表 第296号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	-	(1.0)	(6.2)	E	良好	灰	25	
2	土師器 坏	(14.0)	3.0	(10.4)	B D	普通	橙	20	



第228図 第297号住居跡

溝や柱穴は検出されなかった。

カマドや炉跡、貯蔵穴なども検出されなかった。

遺物は、土師器の細片が少量出土したが、図示できるものはなく、時期を判断できるものもなかった。

第301号住居跡（第226図）

調査区の西側、E E-42グリッドに位置する。カマド底面のみを検出である。位置的には第295号住居跡と重複するものと思われるが、新旧関係などは不明である。

住居跡の平面形なども不明である。

カマドは、おそらく北壁あるいは北東壁に造られていたものと思われる。長さ70cm、幅42cmほどの掘り込みが残存していた。残っていた覆土からは、掘り方の底部を埋め戻してから火床面としていた状況が窺える。

遺物は出土しなかった。時期も不明である。

第302号住居跡（第232図）

調査区の東側、GG-42グリッドに位置する。第51号溝跡、粘土採掘坑（S X 57）と重複関係にあり、これらよりも古い。西側は調査区外にかかり、南側は乱石によって壊されている。残りの床面の半分は粘土採掘坑によって壊されている。

平面形は不明である。検出されたのは北辺が5.62m、東辺が2.36mである。深さは0.14mであった。軸方向は、ほぼN-90°-Eを指す。

床面の状況は、残存面積が少なく詳細は不明である。壁溝は残存していた範囲では廻っている。幅は14~30cmで、深さは5~9cmである。柱穴は検出されなかった。

カマドは検出されなかった。

遺物は、粘土採掘坑の縁にかかるように土師器の坏、甕片が出土した。

時期は8世紀前半としておきたい。

第303号住居跡（第233図）

調査区の西側、E E-44グリッドに位置する。検出時には床面は消失し、掘り方が出ていた。第278・297・299号住居跡と重複関係にあり、第278・297号住居跡より古い。第299号住居跡との新旧は確認していない。

平面形は方形である。規模は長軸5.40m、短軸5.10mである。主軸方向は、N-48°-Eを指す。

床面の状況は不明で、壁溝の有無などもわからない。柱穴は対角線上に4基検出された。直径26~35cmで、深さは40~55cmである。

掘り方は中央部を砲台状に掘り残していた。幅は80cm前後で、深さは10cm前後である。掘り方底部に浅い土城状の掘り込みが2箇所見られた。

カマドや炉は残存していなかった。

遺物は掘り方中から土師器など少量出土した。時期は5世紀と考えられる。

第304号住居跡（第234図）

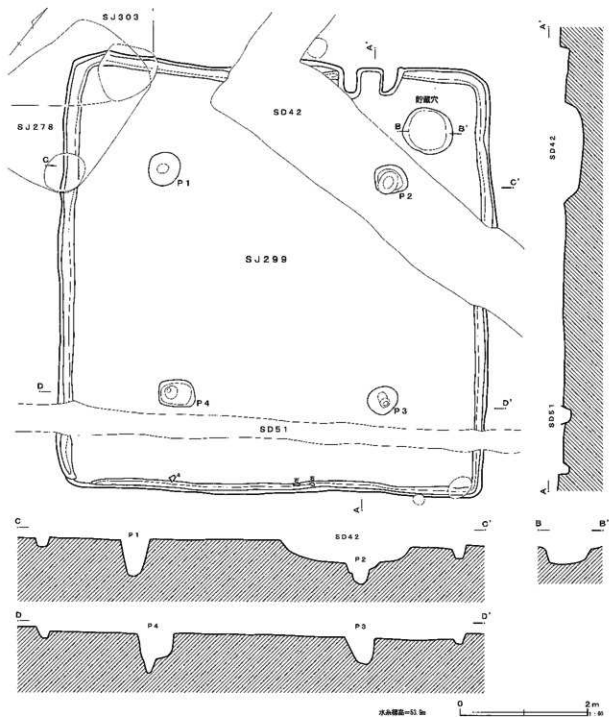
調査区の中央、C C-46グリッドに位置する。第318・319・320・321・325号住居跡と重複関係にあり、位置的には第306号住居跡とも重複している。重複が激しかったため、検出時には、カマドだけが見えたが住居跡の平面を押さえることができず、カマドを残して掘り下げた。遺構の新旧関係は、本住居跡が最も新しい。

平面形は不明である。検出されたのは北東辺が3.86m、北西辺が3.00mである。主軸方向は、N-54°-Eを指す。

床面などの状況は不明である。壁溝はカマドの左側には見られるが、右側には検出されなかった。

カマドは北東壁に造られていた。燃焼部は壁内に収まり、煙道が長く伸びる。カマドには掘り方は殆どなく床面上に直接カマドを造ったように思われる。

煙道は長さ80cmで、先端は煙出しのピットが上から掘られたものと思われる。ピットの直径は26cmほどである。カマドの壁は煙道先端まで非常によく焼けており、灰の引きがよかったと思われる。軸は、



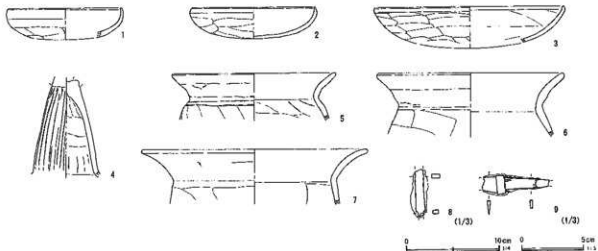
第229図 第299号住居跡

長さ50cm残存していた。構築材として埴輪を使用しており、カマド周辺にも埴輪片が散乱していた。埴輪は円筒埴輪のほか、形象埴輪も含まれていた。左袖の先端には直径の1/4ほどに割れた大破片を、少なくとも3重に埋め込んでいた。燃焼部には横位に落ち込んでおり、構築材としても使われていたこと

がわかる。

遺物は、カマドに使われていた埴輪以外は殆どないが、周辺から緑釉塊の破片が出土した。その他の土師器高坏は、重複する古い住居跡のものと考えられる。

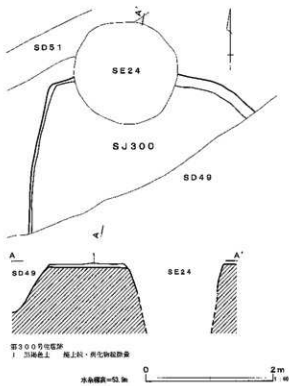
住居跡の構築時期を断定する遺物に欠けるが、カ



第230図 第299号住居跡出土遺物

第128表 第299号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.0)	(3.1)	-	AB	普通	明赤褐	20	
2	土師器 坏	(13.0)	3.3	-	BDE	不良	明赤褐	15	
3	土師器 坏	(20.0)	(3.8)	-	ABEG	普通	橙	40	
4	土師器 高坏	(17.4)	(10.5)	-	AB	普通	にぶい赤褐	90	
5	土師器 甕	(17.4)	(5.0)	-	BD	普通	にぶい褐	10	
6	土師器 甕	(20.0)	(6.6)	-	AEGH	普通	橙	10	
7	土師器 甕	(24.0)	(5.8)	-	ABD	普通	にぶい赤褐	20	
8	鉄製品	残存長3.8cm 幅0.7cm 断面0.3×0.7cm 重さ6.2g							不明棒状品
9	鉄製品	残存長5.3cm 幅1.3cm 厚さ0.2cm 重さ8.16g							刀子



第231図 第300号住居跡

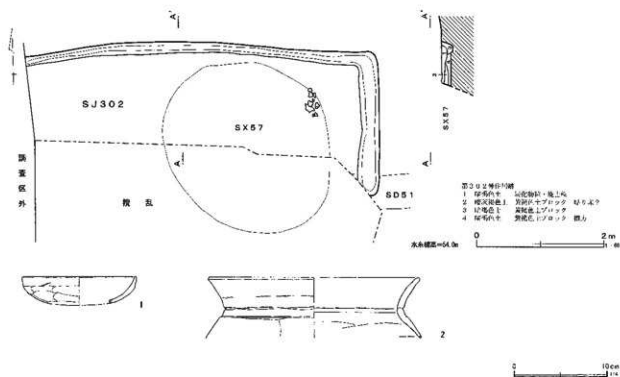
マドに埴輪を使用する他の住居跡の例から10世紀後半～11世紀としておきたい。

第306号住居跡 (第238図)

調査区の中央、CC-46グリッドに位置する。カマドの一部分だけが残存していた。位置的には第304・309・321号住居跡などと重複するものと思われるが、上層による新旧関係の把握はできない。遺物からは第309号住居跡より新しく、遺構の特徴から第321号住居跡より新しいと考えられる。第304号住居跡との新旧関係は推定できない。

住居跡の平面形や規模は不明である。

カマドは北壁に造られていたと推定される。残存していたのは燃焼部だけである。長さ1m、幅46cm残っており、先端部が焼土化している。形状は煙道先端部のように見えるが、構架材と思われる埴輪が



第232図 第302号住居跡・出土遺物

第129表 第302号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.0)	(2.8)	-	B D	普通 に白い粒	15	S X 57
2	土師器 甕	(22.4)	(6.3)	-	B E	普通 橙	15	S X 57

検出され、中央部には支脚と思われる石が立った状態で残っていたことから燃焼部であることは間違いないであろう。

遺物は、埴輪の他に土師器甕が出土した。埴輪には女性を表した形象埴輪が含まれていた。

時期は甕の年代や、第304号住居跡と同じくカマドに埴輪を使用するという共通性から10世紀後半～11世紀としておきたい。

第307号住居跡 (第241図)

調査区の中央、BB・CC-44・45グリッドに位置する。第42号溝跡と重複関係にあり、これよりも古いと思われる。遺構検出時には、既に床面は削平されていたため、痕跡で平面形を推定した。

平面形は長方形と推定される。規模は、長軸が約3.1mまで推定できたが、西側は第42号溝跡にかか

る。短軸は約2.8mと推定される。主軸方向は、N-81°-Eを指す。

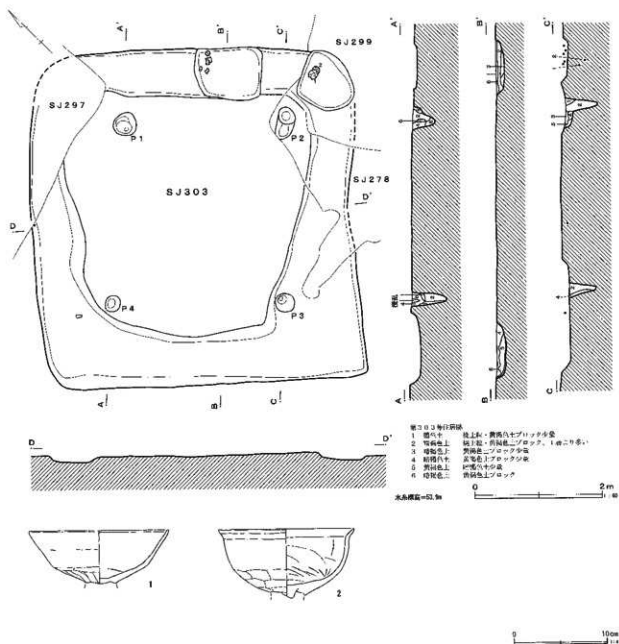
床面の状況は不明である。壁溝は住居跡の痕跡を辿ってやや強引であるが、復原的に描ったものである。ピットは3基確認されたが柱穴は断定できない。

東壁からやや離れて、貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。覆土はロームブロックを多く含み、焼土ブロックが混入していた。隅丸長方形で長軸74cm、短軸68cm、深さ30cmを測る。中から土師器坏、小型甕などが出土した。

時期は5世紀と考えられる。

第308号住居跡 (第223図)

調査区の西側、E E-43グリッドに位置する。第292・293号住居跡、第30号独立柱建物跡と重複関係にある。第292・293号住居跡より新しい。遺構確認



第233図 第303号住居跡・出土遺物

第130表 第303号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	14.9	(5.6)	-	ABE	普通	にぶい赤褐色	80	
2	土師器 高坏	14.4	(7.3)	-	AHDE	普通	明赤褐色	100	

時に認識できず、第293号住居跡の調査中に土層断面で確認したものである。第293号住居跡中に掘り込まれ入れ子状になっていた。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸3m、短軸2.5mほどではなかったかと思われる。

床面などの状況は不明であるが、第293号住居跡の土層断面では貼床が認められる。

カマドは南壁の東寄りに造られていたようで、第293号住居跡の床面に燃焼部の痕跡と考えられる焼土が残っていた。

遺物がないため時期は特定できない。第293号住居跡で取り上げられた破片遺物の中にも、第293号住居跡の時期を降るような遺物は見られなかった。

第309号住居跡 (第242図)

調査区の中央、C C-45・46グリッドに位置する。第209・310・322号住居跡、第180・207・228号土塼と重複関係にある。各土塼および第209号住居跡より古い、第310号住居跡とは床面の状態から本住居跡が新しい可能性がある。第322号住居跡との新旧関係はつかめなかった。住居跡の北西部分と南西の角を土塼に壊され、カマドの煙道先端を第209号住居跡によって壊されている。

平面形は方形である。規模は長軸3.94m、短軸3.94m、深さは0.05mである。主軸方向は、N-7°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝は南壁の両側が切れている。幅は15cm前後で、深さは5~10cmである。柱穴

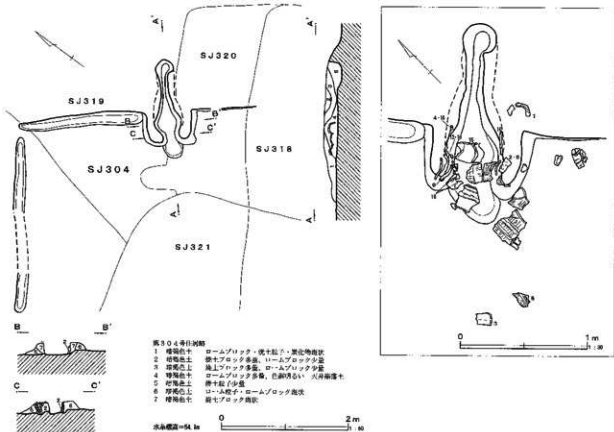
は2基確認された。直径は40~50cmで、深さは30cm前後である。

カマドは北壁のやや西寄りに造られていた。燃焼部から煙道が続くが、先端は第209号住居跡のカマドによって壊されている。掘り方は、浅い皿状で煙道底面は緩やかに斜めに上がる。掘り方は埋め戻さずに火床面として使用したようである。土層の3層は煙道部の天井崩落土と考えられる。燃焼部には自然石を利用した支脚が、立ったままの状態が残っていた。袖はごく短く、白色粘土を混ぜて構築されていたようである。

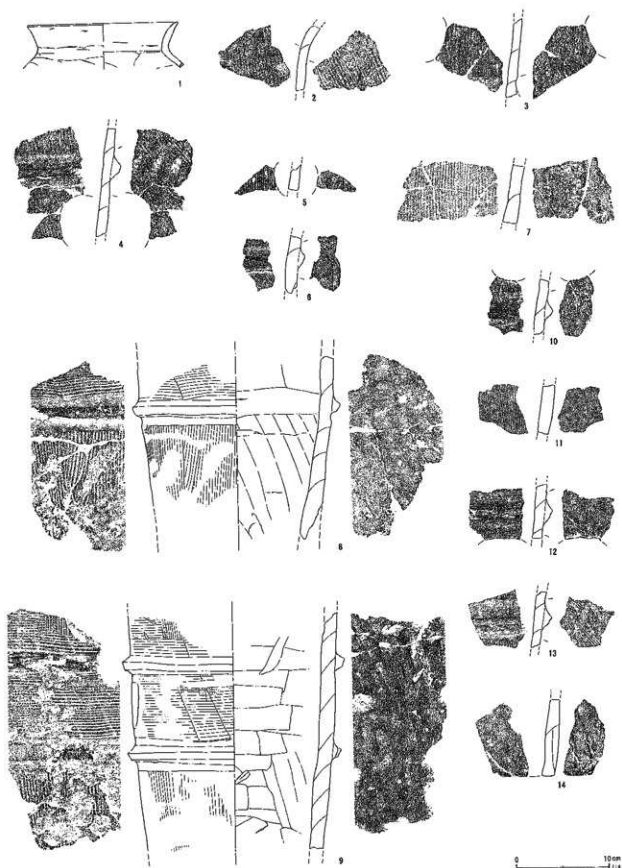
貯蔵穴は検出されなかった。第180号土塼に壊された部分にあった可能性が考えられる。

遺物は少量の出土であったが、かなり混入が見られる。土師器小皿と埴輪片は、第209号住居跡のものと考えられ、高坏や須恵器線は第322号住居跡のものである可能性が考えられる。

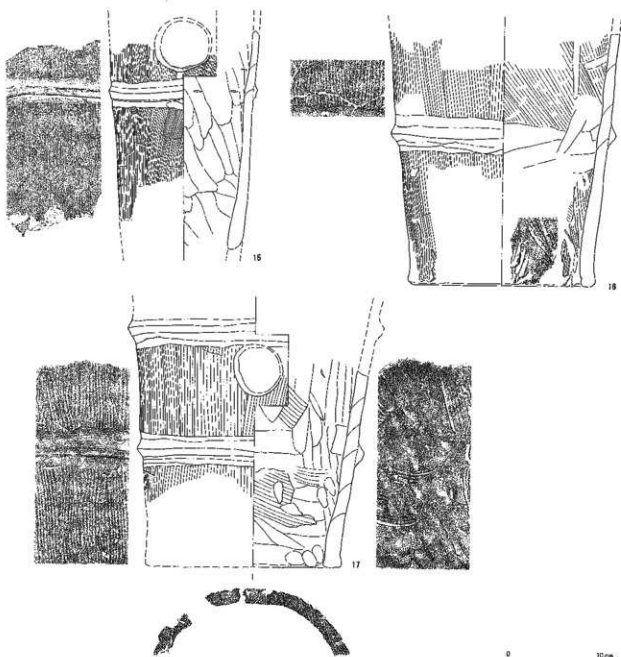
時期は、土師器環の時期をとって7世紀末頃と考



第234図 第304号住居跡・遺物出土状況



第235图 第304号住居跡出土遺物 (1)



第236図 第304号住居跡出土遺物 (2)

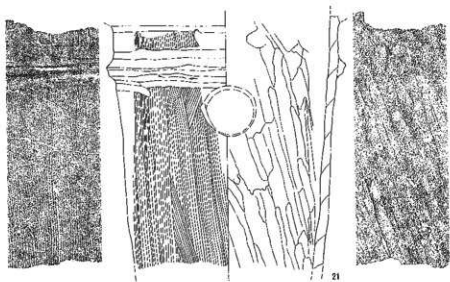
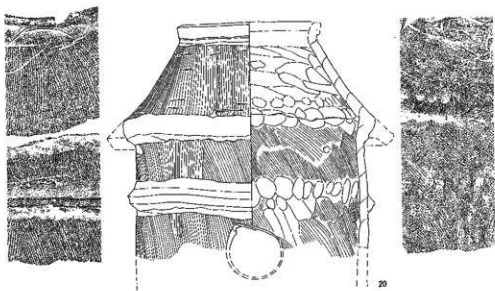
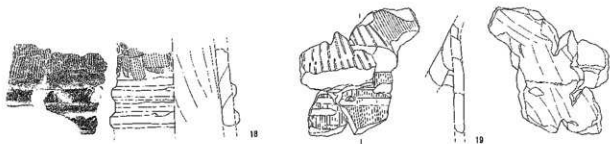
えておきたい。

第310号住居跡 (第245岡)

調査区の中央、CC-45グリッドに位置する。第209・305・309・322号住居跡、第212号井戸跡、第180・194・197・207・206・228号土壇と重複関係にある。新旧関係は各土壇と井戸跡より古く、床面の状態から第309号住居跡より古い可能性がある。第

209号住居跡は第309号住居跡より新しいことから、本住居跡が古いといえよう。第305号住居跡は縄文時代の住居跡である。第322号住居跡との新旧は不明である。

住居跡の北側は、これらの遺構の重複が激しく平面形を押さえられない。検出されたのは南辺と西辺の南側で、南辺は5.92mあり、西辺は3.7mしか残っていなかった。主軸方向は、N-94°-Eを指す。



0 10 cm 1:1

第237图 第304号住居跡出土遺物(3)

第131表 第304号住居跡出土遺物観察表

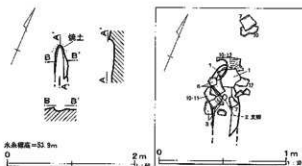
番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(16.0)	(4.9)	-	BDE	普通	褐色	40	カマド
2	円筒埴輪	-	(7.0)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナメハケ
3	円筒埴輪	-	(8.4)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	カマド外面タテハケ 内面ナデ
4	円筒埴輪	-	(11.4)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナメハケ
5	円筒埴輪	-	(2.8)	-	ADEH	良好	赤褐	破片	外面タテハケ 内面ナデ 透孔
6	円筒埴輪	-	(6.1)	-	ADEH	不良	橙	破片	器表面風化により摩耗 内面ナデ
7	円筒埴輪	-	(6.2)	-	ABDEH	普通	橙	破片	外面タテハケ 内面指ナデ
8	円筒埴輪	-	(19.2)	-	ABCGI	良好	明赤褐	30	カマド 外面 二次ココハケ 内面ナデ
9	円筒埴輪	-	(24.9)	-	ADFGI	良好	明赤褐	25	47° 外面B4横ココハケ 内面ナデ
10	円筒埴輪	-	(6.9)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
11	円筒埴輪	-	(5.3)	-	ADEH	普通	にぶい橙	破片	外面タテハケ 内面ナデ
12	円筒埴輪	-	(5.7)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
13	円筒埴輪	-	(5.9)	-	ABDE	良好	明赤褐	破片	外面タテハケ 内面ナメハケ
14	円筒埴輪	-	(8.0)	-	ADEH	不良	橙	破片	器表面風化により摩耗 R接合
15	円筒埴輪	-	(23.1)	-	ADEH	良好	明赤褐	90	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
16	円筒埴輪	-	(26.9)	(20.0)	ABDGH	良好	赤褐	40	カマド 基部内外面施修痕
17	円筒埴輪	-	(27.4)	(20.8)	ABEHI	普通	橙	80	カマド外面タテハケ 内面ナデ ハケ
18	形象埴輪	-	(8.2)	-	ABEGI	良好	明赤褐	40	器形埴輪 大刀か 外面タテハケ
19	形象埴輪 不明	長(13.4)	幅(13.0)	-	ABDHJ	良好	明赤褐	破片	カマド 基部貼付 外面破割
20	器形埴輪	-	(25.0)	(15.2)	ABDEH	良好	明赤褐	80	カマド 笠部先端を欠損
21	形象埴輪	-	(26.7)	-	ADEH	良好	橙	30	カマド 器台部 外面タテハケ 内面ナデ

床面は残存部分が少なく、また検出時には既に露出していたため、詳細は不明である。西辺と南辺の大部分は壁溝で平面形を確定した。柱穴は南西部分に1基確認した。直径35cmで、深さ31cmである。

カマドは東壁に造られていた。東壁は失われているためカマド位置について詳細はわからない。第309号住居跡の床面に掘り方底部が残存していたのみである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、図示できるものはない。

時期は不明であるが、第309号住居跡の年代から7世紀以前としておきたい。



第238図 第306号住居跡・遺物出土状況

第311号住居跡 (第246図)

調査区の中央、BB・CC-49グリッドに位置する。第314・315号住居跡と重複関係にあり、これらよりも新しい。

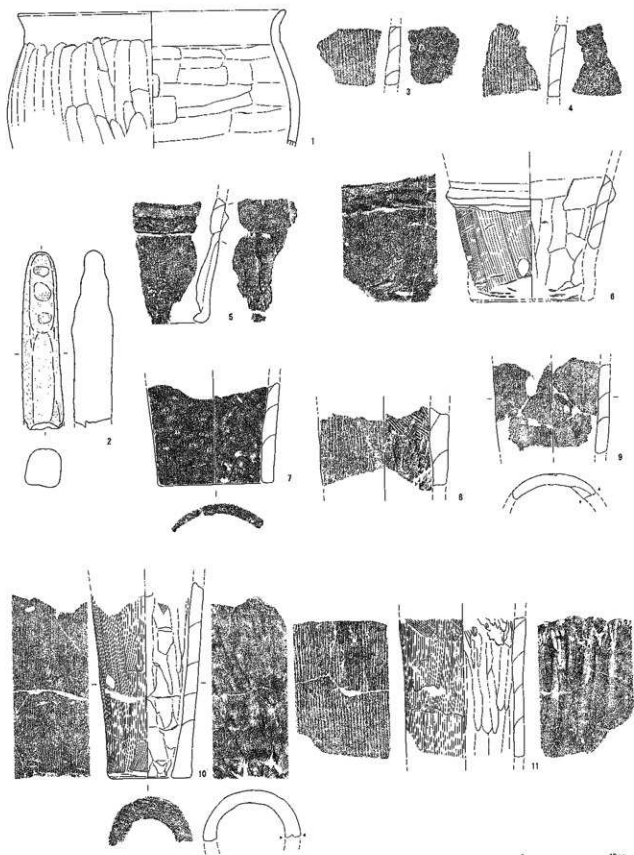
平面形は方形である。規模は長軸3.60m、短軸3.30m、深さは0.07mである。主軸方向は、N-60°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、第315号住居跡にかかる部分には貼床が認められた。壁溝は、カマドの左側を除いて全周する。幅は10-16cm、深さは4cm前後である。柱穴は検出されなかった。

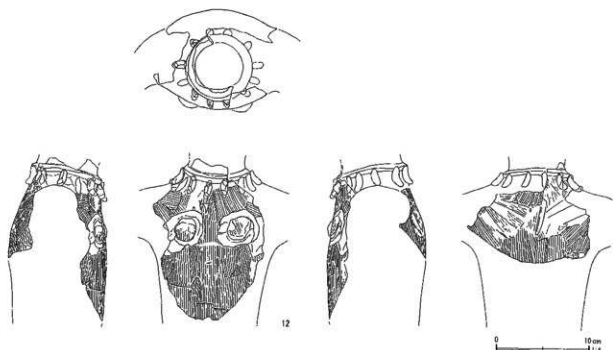
カマドは東壁の南寄りに造られ、壁を掘り込んで突出している。掘り方は浅い土腐状で、埋め戻さずに火床面としていたようである。袖は短く、左袖の長さは36cmである。カマドの奥行きは1.08m、幅は0.5mで、煙道として燃焼部と区別できる部分はなかった。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。楕円形で、長径58cm、短径46cm、深さ12cmを測る。

遺物は、カマド上面から土師器甕が出土したが、これは貯蔵穴周辺から出土した破片と接合している。



第239图 第306号住居跡出土遺物 (1)



第240図 第306号住居跡出土遺物(2)

第132表 第306号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	七脚器 甕	(24.8)	(14.4)	-	BDE	良好	橙	15	カマド
2	支脚	長さ18.5cm	幅4.3cm	厚さ4.3cm	重さ531.3g				カマド
3	円筒埴輪	-	(6.2)	-	ADEH	良好	橙	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
4	円筒埴輪	-	(7.6)	-	ADEH	良好	橙	破片	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
5	円筒埴輪	-	(13.0)	-	ADEH	普通	にぶい黄橙	破片	カマド 外面厚牒 内面ナデ
6	円筒埴輪	-	(13.2)	-	ADEH	普通	にぶい黄橙	60	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
7	円筒埴輪	-	(10.5)	(12.4)	AEGIJ	良好	橙	40	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
8	円筒埴輪	-	(8.2)	-	ABDH	良好	橙	40	カマド 外面タテハケ 内面ナデ、ナメハケ
9	形象埴輪	-	(9.4)	-	ADGH	良好	にぶい黄橙	破片	カマド 動物埴輪脚部 切斷再接合
10	形象埴輪	-	(20.6)	(9.0)	ADEH	良好	にぶい橙	45	カマド 動物埴輪脚部 切斷再接合
11	円筒埴輪	-	(14.7)	-	ABDEH	良好	明赤陶	50	カマド 外面タテハケ 内面ナデ
12	女子埴輪	-	(17.1)	-	ABDE	良好	橙	破片	カマド 彫部残存 頸飾り装着

他には須恵器環、土師器環などが出土している。

時期は8世紀と考えられる。

第312号住居跡(第247図)

調査区の中央、BB-48・49グリッドに位置する。

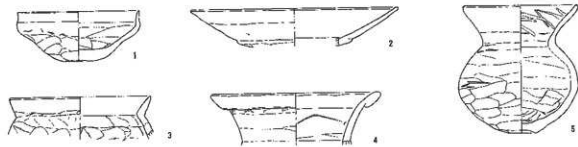
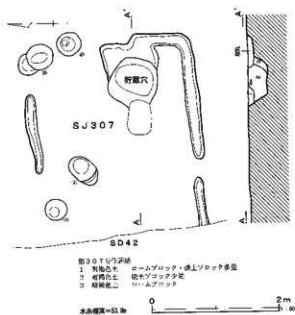
第314号住居跡、第15号溝跡と重複関係にあり、第314号住居跡より新しい。第15号溝跡との新旧は、調査時の所見では本住居跡が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.70m、短軸3.40m、深さは0.12mである。主軸方向は、N-105°-Eを指す。

床面は平坦でカマドの前から中央にかけて硬化していた。燃溝は北壁の西側と、西壁及び南壁の一部に検出されただけである。幅は10~13cm、深さは4cm前後である。ピットは2基検出されたが、位置的に主柱穴とは考えられない。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁内に取まっている。掘り方はごく浅い皿状に掘られ、そのまま火床面としていた。覆土には灰屑と天井崩落土が顕著に見られることから、煙道は既に失われている可能性が高い。袖は黄灰色粘土で造られ、長さ70~80cm残っていた。燃焼部の奥行きは90cm、

幅は45cmである。カマド内には甕が3個体出土した。三角形に配置され、いずれもほぼ正位で、土層視察では天井崩落上を貫いてあることから、3点掛けのカマドであったと考えられる。奥と手前右は長胴の甕で、手前左は小型の甕である。奥の甕の最大径は胴部にあるもの、口縁部との差は僅かである。貯蔵穴は、カマドの右側に検出された。一辺60cm



0 10cm

第241図 第307号住居跡・出土遺物

第133表 第307号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色澤	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	12.9	5.3	3.7	ABDE	普通	橙	90	貯蔵穴
2	土師器 高坏	(22.0)	(4.0)	-	BEJ	普通	にぶい赤褐	15	貯蔵穴 器形やや変
3	土師器 甕	(15.0)	(4.5)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	40	貯蔵穴
4	土師器 壺	(18.0)	(5.5)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	20	貯蔵穴
5	土師器 小型壺	12.0	13.5	2.8	ABDEG	普通	にぶい赤褐	100	貯蔵穴

の不整形で、深さは15cmである。

遺物は、主に住居跡中央から土師器環などが出土した。床面から3~10cm程度浮いているものが多い。貯蔵穴周辺の壁際からも環類が出土したが、一部は流れ込みの様相が窺われる。

時期は6世紀前半である。

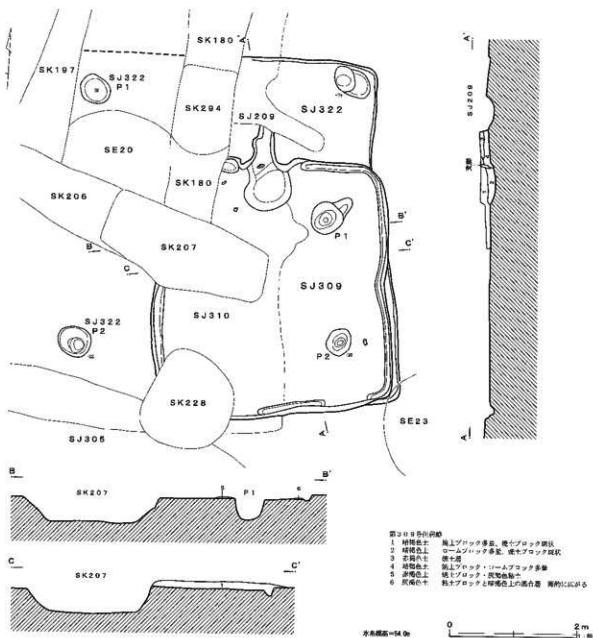
第313号住居跡 (第253区)

調査区の中央、CC-49グリッドに位置する。第245号住居跡、第229号土層、第15号溝跡と重複関係にあり、これらよりも古いと思われる。

検出時には既に床面が消失しており、掘り方部分であった。また、第245号住居跡と重複する西側は検出できなかった。平面形は長方形と思われる。検出されたのは東辺が3.86m、北辺は3.38mである。主軸方向は、N-0°を指す。

床面や壁溝などの状況は不明である。

カマドは北壁に造られていた。壁を掘り込んでいるが、底面が残存していただけである。僅かに焼土が見られたが、袖の有無などは不明である。貯蔵穴



第242図 第309・322号住居跡

も検出されなかった。

遺物は出土せず、時期も不明である。

第314号住居跡 (第247図)

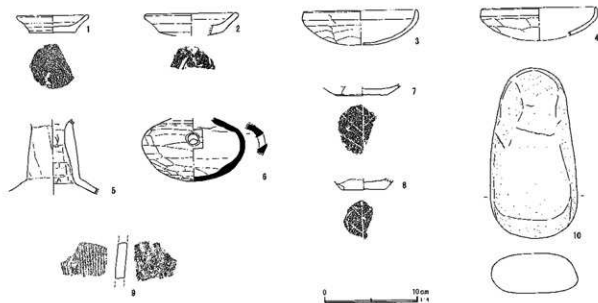
調査区の中央、BB-49グリッドに位置する。第311・312・315号住居跡、第249号土壌と重複関係にあり、各住居跡より古い。第249号土壌との新旧は捉えていない。

平面形は長方形である。規模は長軸4.60m、短軸3.88m、深さは0.03mでごく浅い。主軸方向は、

N-58°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、カマドの前から北側が硬化していた。壁溝は検出されなかった。ピットは住居跡中央に軸方向に並んで2基検出された。直径は40cmと36cmで、深さは30cmと23cmである。これ以外に検出されなかったため、柱穴と考えておきたい。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃燒部は壁内に収まっている。検出時に壁の輪郭が見えていたために、土層断面を壁に合わせて設定したが、結果的には袖材として使われた壁であることがわかつ



第243図 第309号住居跡出土遺物

第134表 第309号住居跡出土遺物観察表

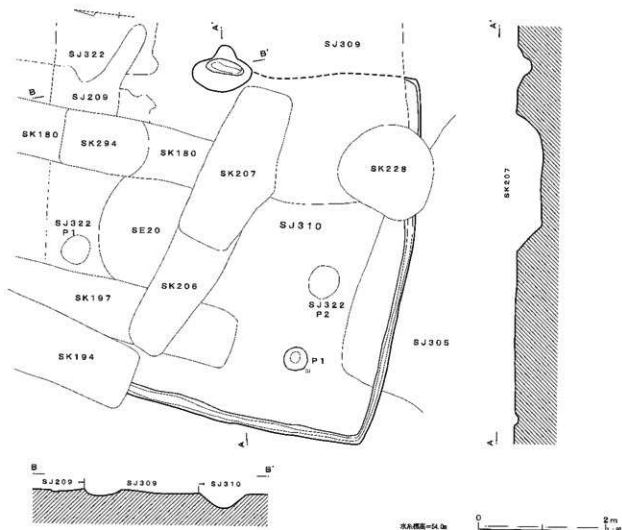
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 小皿	(7.6)	1.8	4.8	ABDG	普通	にぶい橙	60	雲母多量含む
2	ロクロ 小皿	(10.0)	2.3	(6.8)	ABG	普通	にぶい橙	10	
3	土師器 坏	(12.0)	3.6	-	BD	普通	にぶい橙	20	
4	土師器 坏	(12.0)	(3.0)	-	A	不良	橙	15	
5	土師器 高坏	-	(7.0)	-	ABD	普通	にぶい赤褐	15	
6	須恵器 碗	-	(5.2)	-	E	良好	褐灰	60	
7	土師器 甕	-	(1.1)	5.5	AB	普通	褐	40	
8	土師器 甕	-	(1.1)	4.6	ABE	普通	にぶい褐	50	
9	円筒埴輪	-	(3.8)	-	ABDEH	普通	にぶい橙	破片	
10	磨石	長さ18.0cm	幅9.2cm	厚さ4.2cm	重さ1209.0g				



第244図 第322号住居跡出土遺物

第135表 第322号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	円筒埴輪	-	(7.9)	-	ABDE	普通	橙	破片	P-1 外面タテハケ 内面ナデ・ハケ
2	羽口	長さ3.9cm	幅4.1cm	-	EJ	普通	灰黄褐	-	P-1 厚さ2.2cm 重さ22.0g



第245図 第310号住居跡

た。掘り方は浅い皿状で、袖は灰白色粘土を混ぜて造られていたが、あまり明瞭なものではなかった。袖は、右袖が76cmあり先端に先述の甕が検出された。カマド内からは、甕、高環が出土したが検出面付近の浮いた位置にあった。

貯蔵穴は、カマドの右手前にあるものをおきたい。不整形形で長径80cm、短径70cm、深さ39cmである。

遺物は、カマドとカマド右側に纏まって見られたほか、中央付近からも出土した。土師器の環のほか、高環と甕が多い。

時期は5世紀末から6世紀初頭としておきたい。

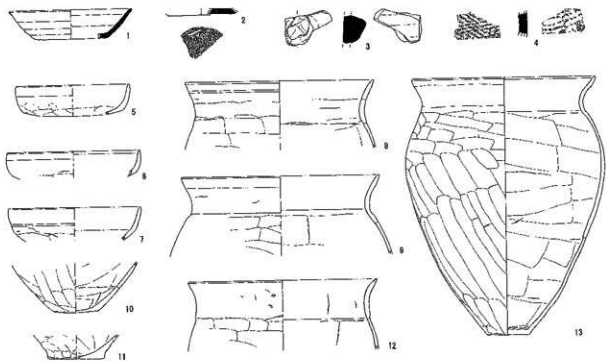
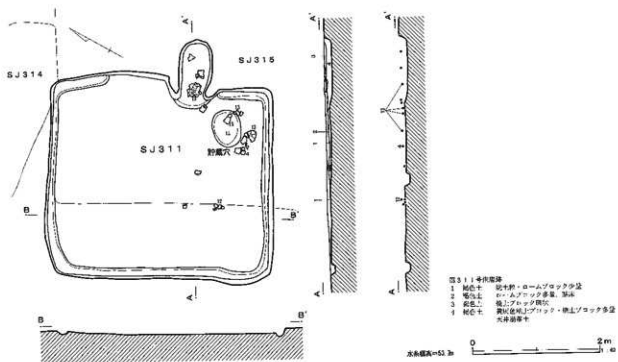
第315号住居跡 (第254図)

調査区の中央、BB-49・50、CC-49グリッドに位置する。第311・314・317号住居跡と重複関係にあり、第311号住居跡より古く、第314号住居跡より新しい。第317号住居跡は縄文時代の住居跡である。

平面形は方形である。規模は長軸5.90m、短軸5.88m、深さは0.09mである。主軸方向は、N-58°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、中央及びカマド対面の西壁際が硬化していた。壁溝はほぼ全周していた。柱穴は対角線上に4基検出された。残りの良好なP2・P3は、直径34cmで、深さは28cmと33cmを測る。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁内に入っている。床面から約10cm掘り込んで火床



第246図 第311号住居跡・出土遺物

第136表 第311号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.0)	3.1	(7.4)	A B H J	普通	にぶい黄橙	20	摩耗著しい
2	須恵器 坏	-	(0.6)	(7.0)	F J	普通	灰	20	やや摩耗する
3	須恵器 甕	-	-	-	B	普通	灰	-	
4	須恵器 甕	-	-	-	B F	良好	灰白	-	
5	土師器 坏	(12.0)	(3.2)	(10.4)	B D	普通	にぶい褐	10	
6	土師器 坏	(14.0)	(2.8)	-	A B D	普通	にぶい褐	15	
7	土師器 坏	(14.0)	(3.5)	-	B D	普通	にぶい褐	15	
8	土師器 甕	(20.0)	(7.2)	-	A B D	普通	にぶい橙	10	
9	土師器 甕	(21.0)	(8.4)	-	B D E	普通	橙	20	
10	土師器 甕	-	(5.2)	4.8	B D E	普通	にぶい褐	60	貯蔵穴
11	土師器 甕	-	(2.5)	6.0	B D E H	普通	にぶい橙	40	
12	土師器 甕	(20.0)	(7.4)	-	A B E	普通	にぶい橙	10	
13	土師器 甕	19.6	27.0	4.5	A B D E	普通	橙	80	カマド

面とし、床面と同じ高さまで灰層が見られた。先端は5cmほどの高さの段となる。検出面が低いため、その先が煙道となるか、そのまま煙出しとなるかは不明である。袖は、暗褐色土と白色粘土を混合して構築している。遺構図では右袖が長い、袖が崩れて白色粘土の混じった部分が掘り足りない可能性がある。左袖は長さ70cm残存していた。燃焼部の奥行きは88cm、幅は52cmである。中からは土師器甕、高環などが出土した。甕はカマドに掛けられた状態に近いが、他は落ち込んだものが多いと思われた。

貯蔵穴はカマドの右側に検出された。直径90cm、深さ60cmの楕円状を呈し、覆土中位から坏、高環などが出土した。

床面をやや下げたところ、内側に壁溝と焼上が検出され、本住居跡が拡張住居であることが判明した。焼上はカマドの左脇にあり、古いカマドがあったと思われる。壁溝はこのカマド痕跡から切れぎれに続き、住居跡の内側を廻っていた。規模は、軸方向に5.2m、他方は5.08mである。

遺物は、高環、甕などが多く出土した。

時期は6世紀初頃から前半と考えられる。

第316号住居跡 (第258図)

調査区の東側、C C-46・47グリッドに位置する。第320号住居跡・第230号土壌と重複関係にある。第230号土壌より古い、第320号住居跡との新旧は捉

えられなかった。検出時には床面が殆ど出ており、覆土は一部に僅かに残る程度であった。

平面形は方形である。規模は長軸3.90m、短軸3.80mである。上軸方向は、N-7°-Wを指す。

床面の詳細は不明である。壁溝は全周していた。主柱穴は、対角線上に4基検出された。直径23~38cmで、深さは32~50cmを測る。床下土壌と思われる掘り込みが2基検出された。1基は南壁際内にあり不整形長方形を呈する。長径77cm、短径58cmで深さは47cmである。他方は柱穴内にあり、住居跡内側に5cmほどの段をもつ円形で、直径58cm、深さは82cmを測る。

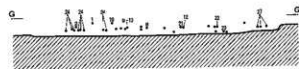
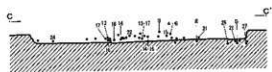
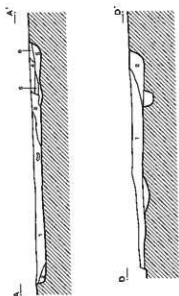
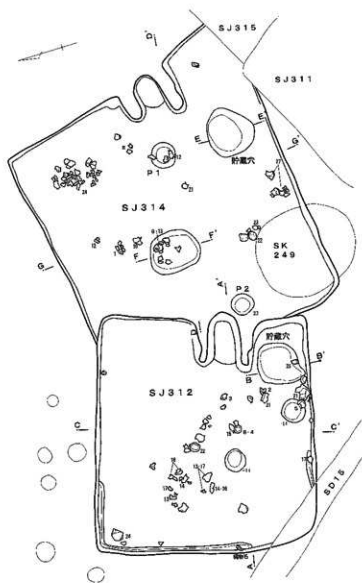
南西隅に粘土や灰を伴う楕円形の掘り込みを検出した。住居跡の角に軸方向を斜めにして掘られていた。長軸1.07m、短軸74cmで、高環、甕などが出土した。遺構の遺存状態が悪く性格はわからないが、可能性としてカマドのようなものも考えられる。

遺物は、土師器坏、高環、甕などが出土した。

時期は5世紀後半としておきたい。

第319号住居跡 (第259図)

調査区の中央、C C-46グリッドに位置する。検出時には既に床面は失われ、掘り方のみが残存する状態だった。第304・320・321・325号住居跡と重複関係にあり、調査時の所見ではこれらよりも古いと思われたが、第325号住居跡との新旧は不明である。



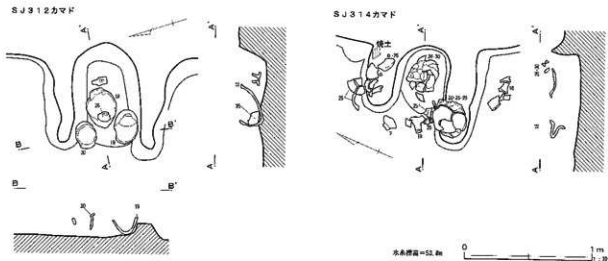
- 第312号住居跡
- 1 貯蔵土 romeン粒・romeンアブロック破片
 - 2 褐色土 romeン粒多数
 - 3 褐色土 褐色土層
 - 4 貯蔵土 褐色土層・romeン粒破片
 - 5 褐色土 romeン粒多数 (貯蔵)
 - 6 貯蔵土 romeン粒多数 (貯蔵)
 - 7 貯蔵土 romeン粒多数・褐色土層

- 第314号住居跡
- 1 貯蔵土 romeン粒多数
 - 2 貯蔵土 romeン粒・romeン粒多数
 - 3 貯蔵土 romeン粒多数
 - 4 貯蔵土 romeン粒・褐色土層

水鳥標高=52.8m



第247図 第312・314号住居跡



第248図 第312・314号住居跡遺物出土状況

平面形は、第320号住居跡などによって壊されているため不明である。残存していたのは西辺が3.56m、東辺が3.44mである。主軸方向は、 $N-97^{\circ}-W$ を指す。

床面や壁溝などの詳細は不明である。柱穴も検出されなかった。住居跡の掘り方は壁沿いに幅70cmの溝状に掘られていたが、所々切れていた。

西壁際に、直径約40cmの円形に焼土が検出されたが、これがカマドの痕跡になると思われる。

遺物は出土していない。時期は不明である。

溝底部が残っていたが、他の部分にもあったかどうかは不明である。

カマドは北壁に造られており、掘り方が残存していた。長い土壇状に掘られ壁外に出ている。覆上からは底部をロームで埋め戻してから火床面としていたことが窺える。

遺物は、住居跡中央寄りの掘り方壇上から土師器破片などが僅かに出土した。

時期は6世紀前半頃としておきたい。

第320号住居跡 (第259図)

調査区の中央、CC-46グリッドに位置する。第304・316・318・319・321・325号住居跡と重複関係にあり、調査時の所見では、第304・321号住居跡より古く、第319・325号住居跡より新しいと思われた。第318号住居跡は縄文時代の遺構である。第316号住居跡との新旧は確認していない。

西側が第321号住居跡と重複しているが、平面形はほぼ方形になると思われる。規模は長軸が4.96mで、短軸は約4.8mと推定される。主軸方向は、 $N-33^{\circ}-W$ を指す。第319号住居跡と同じく、検出時には床面は失われて掘り方底部が残存しているだけであった。

床面などの状況は不明である。カマドの右側に壁

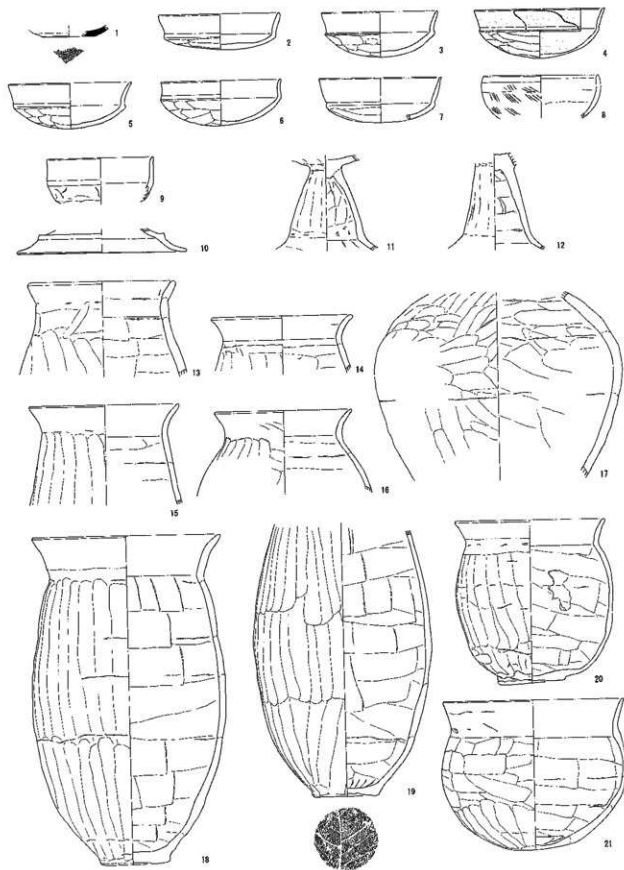
第321号住居跡 (第261図)

調査区の中央、CC・DD-46グリッドに位置する。検出時には床面が消失しており、掘り方のみが残存していた。第304・306・318・319・320・325号住居跡、第23号井戸跡、第210号土壇と重複関係にある。第319・320・325号住居跡より新しく、第304・306号住居跡より古いと考えられる。第318号住居跡は縄文時代の遺構である。

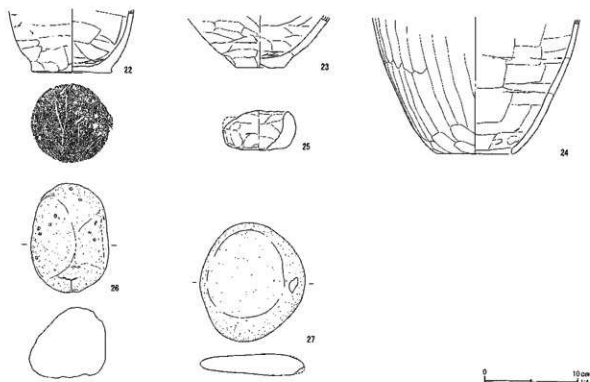
平面形は方形である。規模は長軸6.14m、短軸5.84mである。主軸方向は、 $N-15^{\circ}-W$ を指す。

床面の状況や壁溝の有無などは不明である。柱穴も検出されなかった。

北壁の東寄りに焼土が残っていた。カマドの痕跡と思われるが、残存は僅かであり詳細はわからない。貯蔵穴は検出されなかった。



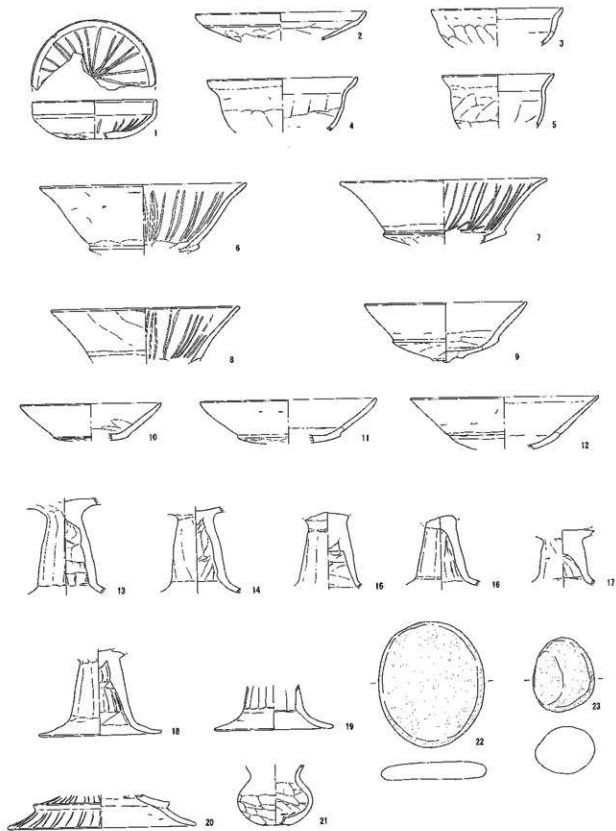
第249图 第312号住居跡出土遺物 (1)



第250図 第312号住居跡出土遺物(2)

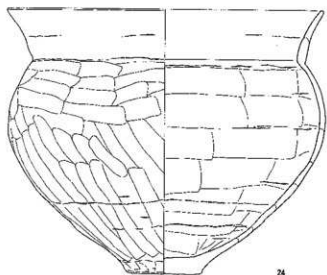
第137表 第312号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	量(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	-	(1.1)	(6.0)	E J	良好	灰	10	
2	土師器 坏	12.9	3.8	-	ABD	普通	橙	80	
3	土師器 坏	(12.4)	4.8	-	B D H	普通	にぶい橙	30	外面に赤彩?
4	土師器 坏	14.0	5.2	-	B H	普通	にぶい赤褐	90	内外面赤彩 I 線部ヘラ記号
5	土師器 坏	13.2	4.9	-	ABE	不良	橙	90	
6	土師器 坏	12.8	4.8	-	ABDEH	不良	橙	100	内外面摩耗著しい
7	土師器 坏	(13.0)	(4.5)	-	ABD	普通	にぶい橙	15	
8	土師器 坏	(12.0)	(4.6)	-	B D	普通	にぶい赤褐	10	
9	土師器 坏	(11.5)	(4.7)	-	B H	普通	灰褐	30	
10	土師器 高坏	-	(2.5)	(18.0)	ABD	普通	にぶい赤褐	10	
11	土師器 高坏	-	(10.0)	-	ABDE	普通	明赤褐	40	カマド
12	土師器 高坏	-	(10.2)	-	ADEG	普通	にぶい橙	80	カマド 七面 S J 314確認面
13	土師器 甕	(15.8)	(10.1)	-	B	普通	灰褐	15	
14	土師器 甕	(15.0)	(6.1)	-	AB J	普通	にぶい褐	25	
15	土師器 甕	(16.0)	(10.6)	-	ABD H J	普通	にぶい黄褐	20	カマド 上面
16	土師器 甕	14.7	(8.8)	-	B H J	普通	にぶい黄褐	60	
17	土師器 甕	-	(19.7)	-	ABE H J	普通	にぶい黄褐	30	
18	土師器 甕	(20.0)	34.7	7.2	ABDEH	普通	にぶい褐	70	カマド 外面粘土付着
19	土師器 甕	-	(27.8)	7.0	ABDEH	普通	にぶい褐	70	カマド
20	土師器 甕	(16.0)	17.4	7.0	BDE	普通	褐	60	カマド
21	土師器 鉢	19.3	16.9	7.2	ABD	普通	橙	70	
22	土師器 鉢	-	(9.7)	8.5	AB	普通	褐	70	
23	土師器 甕	-	(5.5)	5.2	B H	普通	にぶい褐	60	貯蔵穴
24	土師器 瓶	-	(14.2)	(8.0)	BEH	普通	灰黄褐	30	器形やや歪む
25	不明七製品	-	(4.2)	6.5	GH	普通	灰黄褐	80	孔径約2.0~3.0cm
26	磨石	長さ11.5cm	幅8.2cm	厚さ7.2cm	重さ517.7g				断面3面
27	磨石	長さ12.5cm	幅11.0cm	厚さ2.3cm	重さ471.7g				

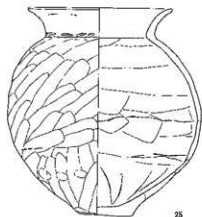


第251图 第314号住居跡出土遺物 (1)





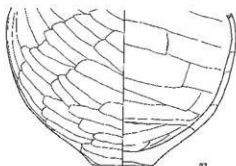
24



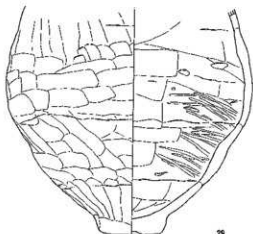
25



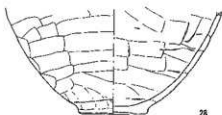
26



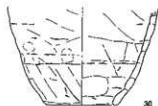
27



28



29



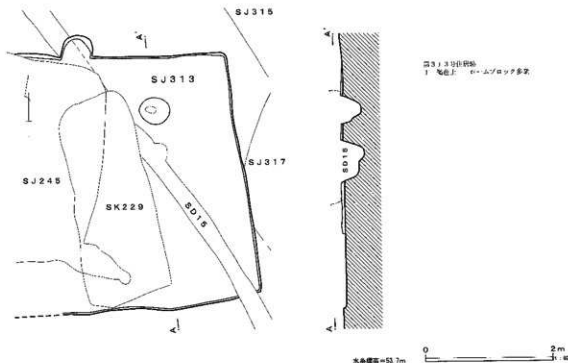
30



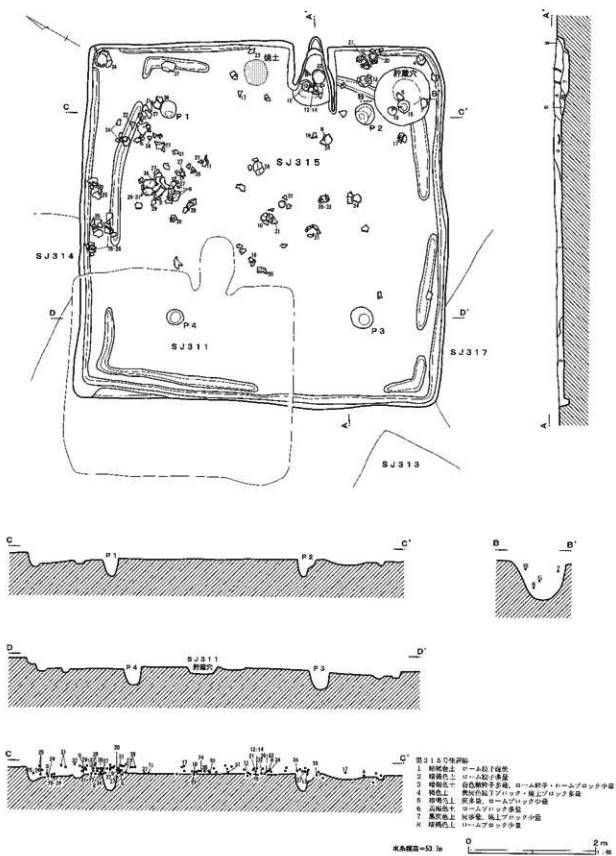
第252页 第314号住居跡出土遺物 (2)

第138表 第314号住居跡出土土物観察表

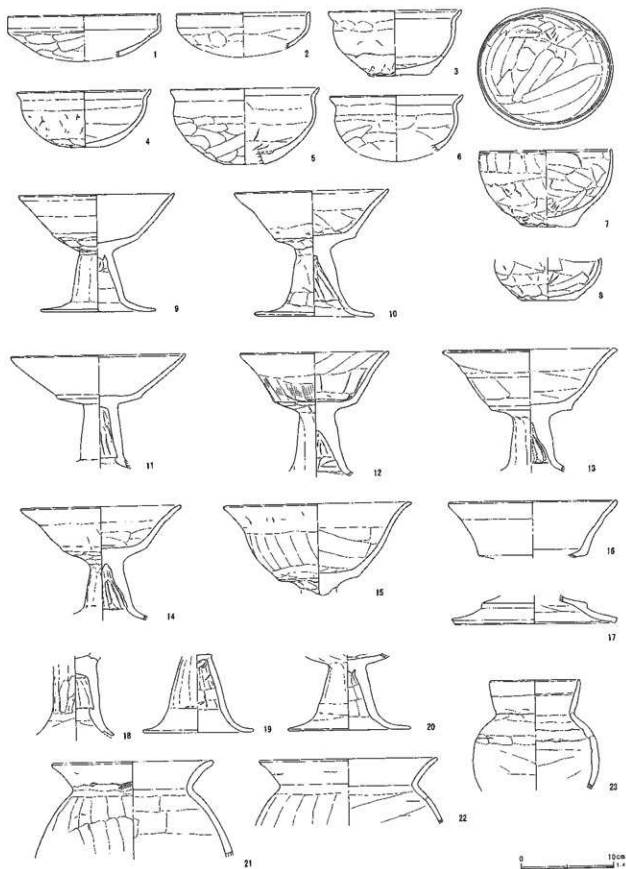
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	13.2	4.1	-	A E G	普通	明赤褐	50	略文
2	土師器 坏	(18.0)	(3.0)	-	B D J	普通	にぶい褐	10	
3	土師器 鉢	(14.0)	(4.0)	-	E G H	普通	にぶい赤褐	10	
4	土師器 鉢	(16.0)	(5.6)	-	A D H	不良	にぶい赤褐	15	やや摩耗する
5	土師器 鉢	(12.0)	(5.7)	-	B D E H	不良	にぶい褐	10	
6	土師器 高坏	(22.0)	(7.2)	-	A E G	普通	にぶい橙	40	
7	土師器 高坏	(22.0)	(6.8)	-	A D E G	普通	にぶい橙	15	
8	土師器 高坏	(20.0)	(6.1)	-	D E G	普通	にぶい赤褐	15	
9	土師器 高坏	(17.2)	(6.3)	-	A B D E H	普通	にぶい赤褐	40	
10	土師器 高坏	(15.0)	(3.9)	-	A E G	普通	にぶい赤褐	15	
11	土師器 高坏	(18.6)	(4.6)	-	B D E	普通	にぶい褐	10	
12	土師器 高坏	(20.0)	(5.5)	-	B D E	普通	にぶい赤褐	30	
13	土師器 高坏	-	(10.0)	-	B D E H	普通	にぶい赤褐	100	やや摩耗する
14	土師器 高坏	-	(9.2)	-	B D E	普通	橙	100	
15	土師器 高坏	-	(8.0)	-	A D E G	普通	にぶい橙	100	
16	土師器 高坏	-	(7.6)	-	A B D E	普通	橙	90	外面やや摩耗する
17	土師器 高坏	-	(6.0)	-	A D E	普通	橙	40	
18	土師器 高坏	-	(9.0)	13.1	A B D E	普通	明赤褐	95	
19	土師器 高坏	-	(4.7)	(12.6)	A B E	普通	にぶい橙	50	
20	土師器 高坏	-	(3.4)	(20.0)	E G	普通	橙	20	
21	土師器 小型壺	-	(6.4)	(2.8)	A B D E H	普通	にぶい橙	40	
22	磨石	長さ13.2cm 幅11.2cm 厚さ1.8cm 重さ442.3g							
23	磨石	長さ7.8cm 幅6.5cm 厚さ5.0cm 重さ368.3g							
24	土師器 甕	(33.4)	28.0	8.0	A B D E H	普通	明赤褐	60	
25	土師器 甕	15.5	22.0	6.0	A B D E H	普通	褐	70	カマド
26	土師器 甕	(19.6)	(15.0)	-	B D F H J	普通	褐	20	カマド
27	土師器 甕	-	(16.5)	6.5	A B H J	普通	褐	60	カマド 貯蔵穴
28	土師器 甕	-	(11.0)	7.2	A E H J	普通	灰黄褐	30	
29	土師器 甕	-	(24.0)	6.5	A B D H	普通	にぶい赤褐	60	
30	土師器 甕	-	(10.0)	(7.0)	B D E H	普通	褐	40	



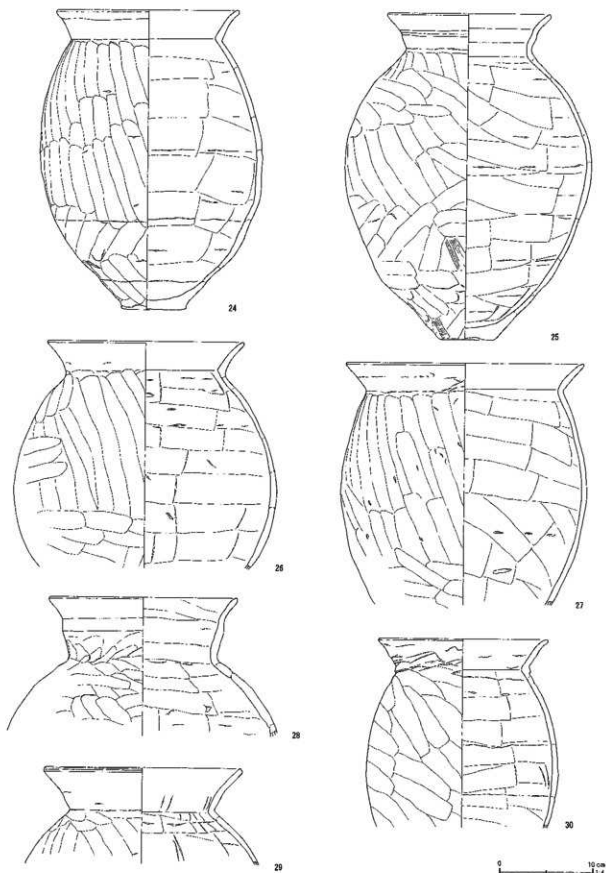
第253図 第313号住居跡



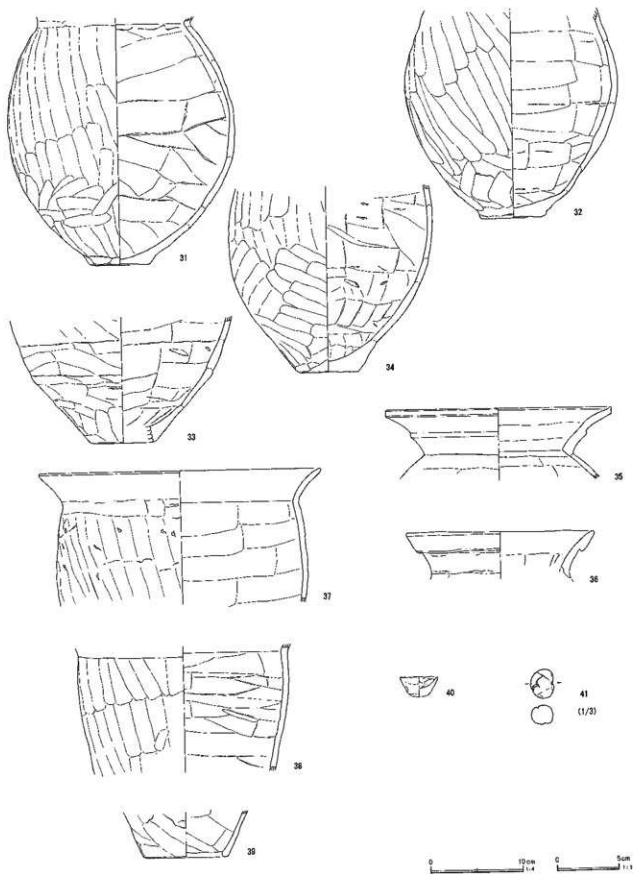
第254図 第315号住居跡



第255图 第315号住居跡出土遺物 (1)



第256图 第315号住居跡出土遺物(2)



第257图 第315号住居跡出土遺物 (3)

第139表 第315号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(16.0)	(4.5)	-	ADEH	不良	橙	20	カマド
2	土師器 坏	(14.0)	(3.9)	-	EKG	普通	にぶい赤褐	20	
3	土師器 埴	14.1	6.9	6.6	ABDE	普通	明赤褐	90	内面やや摩耗する
4	土師器 埴	14.3	5.9	-	ABE	普通	にぶい赤褐	90	
5	土師器 埴	(15.8)	8.0	(4.4)	BDEH	普通	にぶい赤褐	15	貯蔵穴
6	土師器 埴	(14.0)	(6.0)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	15	やや歪む
7	土師器 埴	(14.0)	8.1	6.0	ABDGH	普通	橙	100	口縁歪む
8	土師器 小型甕	-	(4.3)	5.6	BDEHJ	普通	にぶい黄褐	80	
9	土師器 高坏	16.5	12.5	12.3	ABH	普通	にぶい赤褐	90	坏部内面摩耗
10	土師器 高坏	16.4	13.4	12.6	ABDE	普通	にぶい赤褐	95	
11	土師器 高坏	(18.6)	(11.9)	-	ABDEH	不良	橙	40	摩耗著しい
12	土師器 高坏	15.8	(13.1)	-	ABG	普通	にぶい赤褐	90	
13	土師器 高坏	18.6	(13.0)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	90	カマド
14	土師器 高坏	(17.0)	(12.0)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	60	器形歪む
15	土師器 高坏	20.0	(9.6)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	95	
16	土師器 高坏	(18.0)	(6.0)	-	ABEH	不良	橙	30	カマド 摩耗著しい
17	土師器 高坏	-	(3.0)	17.0	BDE	普通	明赤褐	60	やや歪む
18	土師器 高坏	-	(8.5)	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	90	
19	土師器 高坏	-	(8.2)	11.8	ABDE	普通	橙	80	
20	土師器 高坏	-	(8.0)	(13.0)	BDE	不良	にぶい褐	60	
21	土師器 甕	17.2	(10.2)	-	ABDGH	普通	にぶい褐	60	
22	土師器 甕	(19.0)	(7.0)	-	BEH	普通	灰黄褐	15	やや歪む
23	土師器 甕	(9.6)	(11.6)	-	ABDGH	普通	にぶい褐	25	
24	土師器 甕	19.3	30.7	(6.7)	ABH	普通	にぶい褐	80	
25	土師器 甕	17.2	34.4	5.8	ABEH	良好	橙	60	
26	土師器 甕	(21.0)	(24.0)	-	ABDEH	不良	褐	30	
27	土師器 甕	25.0	25.5	-	ABEH	良好	橙	60	Flt
28	土師器 甕	(20.0)	(15.6)	-	ABDGH	普通	にぶい黄褐	30	
29	土師器 甕	(20.8)	(10.1)	-	ABDEH	良好	にぶい橙	40	
30	土師器 甕	(18.0)	(19.8)	-	ABHJ	普通	灰褐	40	
31	土師器 甕	-	(26.0)	(6.4)	BEH	普通	灰黄褐	70	
32	土師器 甕	-	(22.0)	7.0	ABEH	普通	にぶい褐	60	カマド
33	土師器 甕	-	(13.0)	(7.0)	ABDEH	普通	黒褐	30	SJ311
34	土師器 甕	-	(19.5)	6.5	BDEHJ	普通	にぶい褐	60	
35	土師器 甕	(24.0)	(7.7)	-	ABEH	普通	橙	20	摩耗著しい
36	土師器 甕	(20.0)	(4.9)	-	BEHG	良好	にぶい赤褐	25	
37	土師器 甕	(30.0)	(14.1)	-	BDEHJ	良好	にぶい黄褐	20	掘り方
38	土師器 甕	-	(13.2)	-	ABEH	普通	にぶい赤褐	40	
39	土師器 甕	-	(4.8)	(9.0)	ABEH	普通	にぶい赤褐	50	
40	土師器 ミニチュア	(4.0)	2.1	-	EH	普通	橙	50	底み大きい
41	土五	長さ2.3cm	幅1.8cm	厚さ1.5cm	重さ5.7g			100	穿孔なし ひび多い

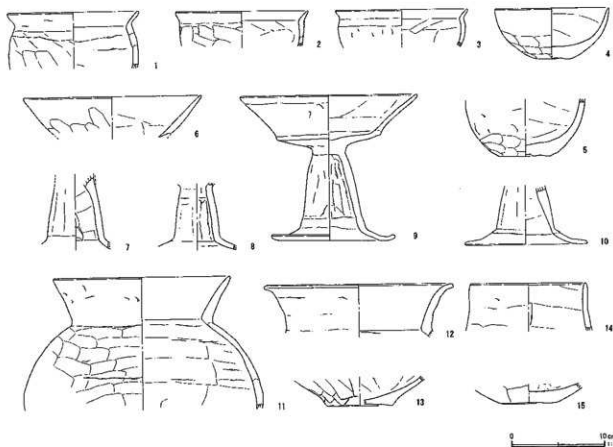
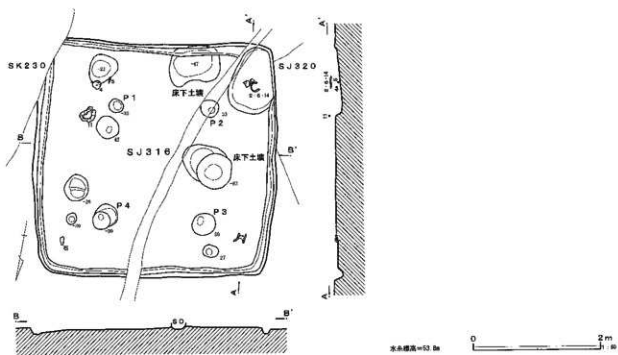
住居跡の掘り方は、壁沿いに溝状に掘り込んで中央を砲台状に残していた。掘り込みの幅は0.9～1.2mであるが、西辺の南側だけは幅が20cmと狭くなっていた。

遺物は出土していない。時期は不明である。

第322号住居跡 (第242図)

調査区の中央、C-C-45グリッドに位置する。第209・309・310号住居跡、第21号井戸跡、第180・206・207・294号土壌と重複関係にある。第209・309号住居跡、第21号井戸跡、各土壌より古い。第322号住居跡との新旧は不明である。

各遺構の重複が激しく、検出されたのは住居跡の北東部分のみであった。残存していたのは北辺が



第258図 第316号住居跡・出土遺物

第140表 第316号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 鉢	(14.0)	(6.0)	-	A D E G H	普通	にぶい橙	15	掘り方
2	土師器 埴	(14.0)	(3.7)	-	D E H	普通	にぶい赤褐	30	カマド
3	土師器 埴	(14.0)	(4.0)	-	D E G H	普通	にぶい橙	20	
4	土師器 埴	12.0	5.4	4.0	A B E G H	普通	橙	80	S J 311 やや摩耗 やや歪む
5	土師器 埴	-	(6.0)	5.6	A E G H	普通	にぶい赤褐	60	掘り方
6	土師器 高坏	(19.0)	(4.3)	-	D E H	普通	橙	20	カマド
7	土師器 高坏	-	(8.0)	-	E H	普通	にぶい橙	40	
8	土師器 高坏	-	(7.0)	-	E H	普通	にぶい赤褐	60	
9	土師器 高坏	(18.8)	15.4	13.0	A B D E H	良好	橙	80	
10	土師器 高坏	-	(6.2)	(13.0)	A B D E H	普通	にぶい橙	25	やや摩耗する
11	土師器 甕	(19.0)	(12.0)	0.0	A E G H	普通	橙	60	外面やや摩耗する
12	土師器 甕	(20.0)	(5.7)	-	A D G H	普通	橙	30	
13	土師器 甕	(12.0)	(5.1)	-	A E G H	普通	灰褐	20	
14	土師器 甕	-	(3.1)	(7.0)	B D F E H	普通	にぶい褐	40	カマド
15	土師器 甕	-	(2.0)	6.3	A E G H	不良	橙	60	掘り方 摩耗著しい

2.04m、東辺は1.80mであるが、推定される柱穴の位置などから、一辺が5～5.5m程度の方形ないし長方形と考えられる。深さは0.06mである。方向は北辺で測ると、N-88°-Wとなる。

残存部分が少ないため床面などの詳しい状況は不明である。壁溝は検出された範囲では認められなかった。柱穴は西側の2基が検出された。

カマドや炉、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、円筒埴輪片と羽口片が出土しているが、これらの遺物は第209号住居跡の遺物で混入したものである。

時期は不明である。

第323号住居跡 (第262図)

調査区の南西側、J J-42グリッドに位置する。第57・62号溝跡と重複関係にあり、これらよりも古いと思われる。

全体に残存状況が悪く、特に第57号溝跡の西側は消失しているが、平面形は方形で規模は長軸3.0m、短軸2.7mと推定される。主軸方向は、N-61°-Eを指す。

床面の状況はよくないため詳細は不明である。壁溝は残存している範囲では検出されなかった。柱穴も検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は

壁内にあり、掘り方は浅いが軽く埋め戻して火床面としていたようである。袖は右袖の基部が長さ35cm残っていた。白色粘土を混合して造られていた。

カマドの右脇に、径7cmのビット状の掘り込みが検出されたが貯蔵穴と考えるには小さいようである。遺物は、土師器破片が出土したのみである。

時期は8世紀頃と考えておく。

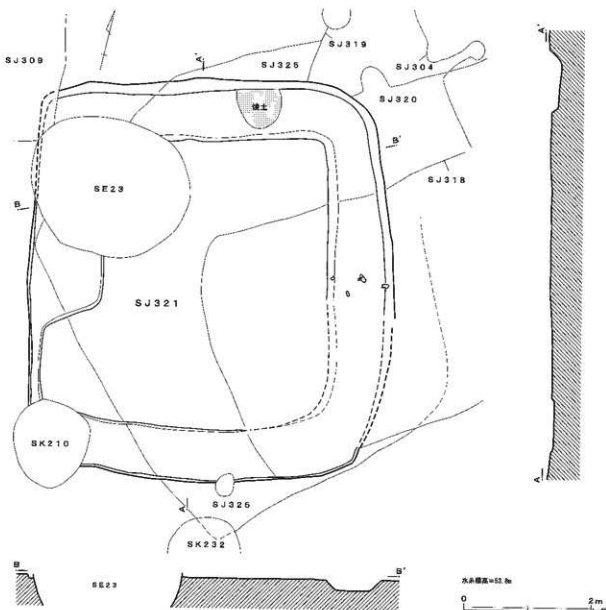
第324号住居跡 (第263図)

調査区の南西側、K K-41グリッドに位置する。第52号溝跡、粘土採掘坑(S X 40)と重複関係にあり、これらよりも古い。住居跡の南に接するように第63号溝跡があるが、これも本住居跡が古いと思われる。

平面形は長方形である。規模は長軸2.90m、短軸2.60m、深さは0.04mでごく浅い。主軸方向は、N-17°-Wを指す。

床面は、第52号溝跡と粘土採掘坑によってその大部分が壊されているため、詳しい状況はわからない。壁溝は検出されなかった。柱穴も粘土採掘坑によって失われたものと思われる。

カマドは北壁に造られていた。掘り方は浅く、最下層に灰層が認められることから、そのまま火床面としていたことがわかる。上部は削平されており、天井崩落土は残っていなかった。袖は検出されな



第261図 第321号住居跡

ったがカマドの左側は壁が右側より内側に入っており壁に直接構架していた可能性も考えられる。燃焼部の奥行きは68cm、幅は33cmである。

遺物は土師器甕の破片が出土したが、小破片であり時期を断定することはできない。

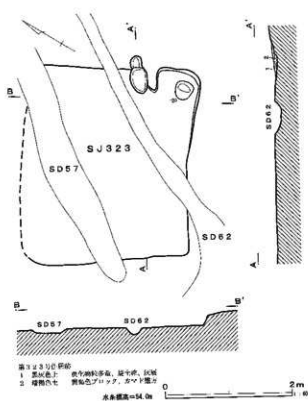
第325号住居跡 (第264図)

調査区の中央、C C・D D-46グリッドに位置する。重複が激しく、検出されたのは掘り方の底部だけである。第304・318・319・320・321号住居跡、第23号井戸跡と重複関係にある。第304・320・321

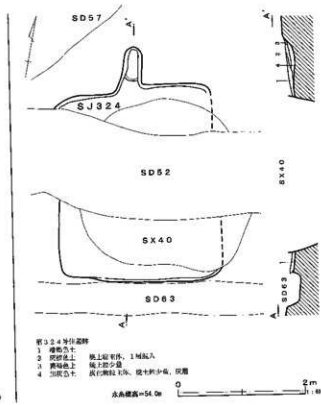
号住居跡、第23号井戸跡より古い。第319号住居跡との新旧は不明である。第318号住居跡は縄文時代の遺構である。

平面形は、掘り方のシミ状の痕跡を辿って推定したが、激しい重複によって失われた部分が多くなり変形してしまった。規模は南北方向が約5.7m、東西方向は約3.7mと推定した。方向は、N-44°-Wを指す。

床面の状況や壁溝などの施設は一切不明である。遺物は出さず、時期も不明である。



第262図 第323号住居跡・出土遺物



第263図 第324号住居跡・出土遺物

第142表 第323号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 罎	(12.0)	(2.8)	-	D E H	不良	橙	15	摩耗著しい

第143表 第324号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 罎	(20.0)	(6.0)	-	A B E H	普通	橙	5	

第326号住居跡 (第265図)

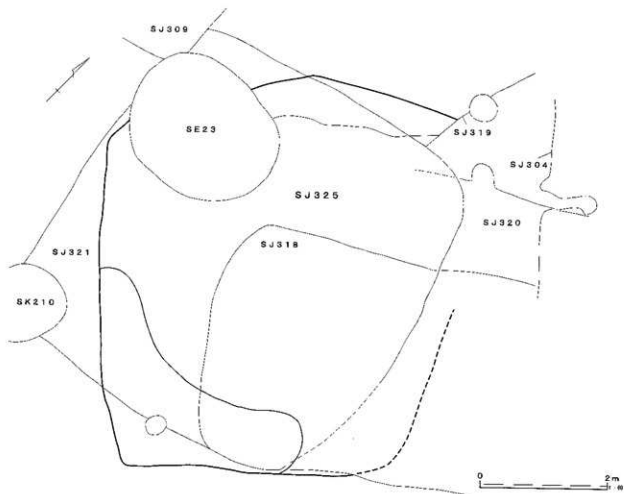
調査区の中央、F F-50グリッドに位置する。第247号住居跡と重複関係にあり、これよりも新しいと思われる。

検出時には床面は削平されており、カマド底面が残っていただけである。平面はシミ状の痕跡を拾って推定したが、西側はわからなかった。壁溝はかなりの強引に推定したものである。平面形は長方形にな

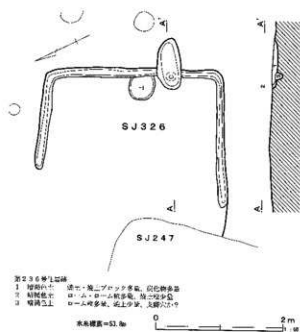
るのではないと思われる。規模は東辺が約3.0m、南辺は約2.2mまで推定できた。主軸方向は、N-117°-Eを指す。

床面などの状況は不明である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部の大部分は壁外に出る。掘り方は、浅い土塚状に掘り込んでおり、炭化物層が残っていることから、そのまま火床面とした。袖は両袖とも確認されたが先端



第264図 第325号住居跡



第265図 第326号住居跡

は第117号住居跡が重複しているようである。カマドの左脇に浅い掘り込みが検出されたが、貯蔵穴とは考えられず、掘り方の一部と考えておきたい。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第327号住居跡 (第266図)

調査区の中央、FF-50グリッドに位置する。重複する遺構はないが東側は調査区外に掛かり、検出されたのは全体の西側半分程度と思われる。

平面形は不明である。検出されたのは西辺が3.02mで、北辺は1.4mにとどまった。深さは0.20mである。方向は、西辺で測るとN-5°-Wとなる。覆土は、途中まで埋められたような堆積を示す。

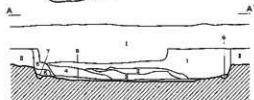
床面はほぼ平坦で、広い範囲にわたって踏み固められ硬化していた。壁溝は検出された範囲では廻っ

ていた。幅は12~15cmで、深さは5cm前後である。柱穴は、検出された範囲では確認できなかった。

カマドは検出されなかった。調査区外にあるものと考えられる。

遺物は少量の出土で、岡化できたのは2点だけである。

時期は10世紀と考えておきたい。



- 1 灰褐色土 砂質(灰土)
- 2 灰褐色土 砂質(灰土)
- 3 灰褐色土 砂質(灰土)
- 4 灰褐色土 砂質(灰土)
- 5 灰褐色土 砂質(灰土)
- 6 灰褐色土 砂質(灰土)
- 7 灰褐色土 砂質(灰土)
- 8 灰褐色土 砂質(灰土)
- 9 灰褐色土 砂質(灰土)

水深調査=44.3m

0 2m



0 10cm

第266図 第327号住居跡・出土遺物

第328号住居跡 (第267図)

調査区の東側、U-57グリッドに位置する。第113・114・115号住居跡、第119・121号土壌と重複関係にあり、これらよりも古いと思われる。

第115号住居跡の床面で壁溝の一部を確認したのみで、平面形などは不明である。検出されたのは西辺が3.36m、北辺が2.3mである。方向は、西辺でN-38°-Wを指す。

床面などの状況は不明である。壁溝は幅25cm前後である。

カマドや伊などの施設は検出されなかった。

遺物は出土せず、時期も不明である。

第329号住居跡 (第268図)

調査区の東側、BB・CC-47・48グリッドに位置する。第274号住居跡、第219号土壌と重複関係にある。土層での確認はできなかったが、遺物から第274号住居跡より新しいと思われる。検出時には床面が消失しており、痕跡を辿ってやや低めに掘り下げた。

平面形は長方形である。規模は長軸が3.76m残存し、短軸は3.56mであった。主軸方向は、N-68°-Eを指す。

床面の状況や壁溝などの詳細は不明である。主柱穴と考えられるものも検出されなかった。

調査時には、東壁の南寄りにあるビット状の掘り込みをカマドとして捉えたが、確実にカマドといえるかどうか断定できない。

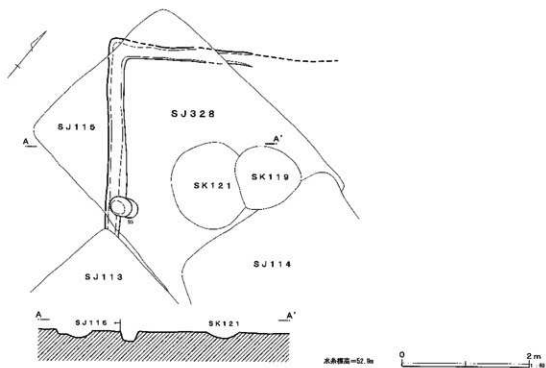
遺物は、カマドと捉えたビット状の掘り込みから須臾器坏など3個体が出土した。

時期は9世紀と考えられる。

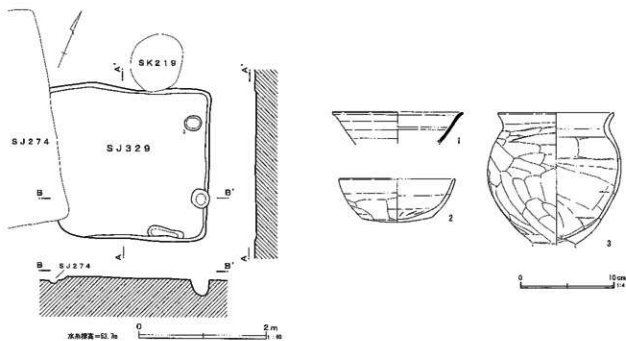
第330号住居跡 (第55図)

第144表 第327号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	出土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付埴	-	(4.6)	6.0	E H J	良好	灰褐色	90	
2	磁石	長さ(11.8)cm	幅8.6cm	厚さ2.8cm					重さ316.1g



第267図 第328号住居跡



第268図 第329号住居跡・出土遺物

第145表 第329号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(4.0)	(4.4)	-	B II J	普通	灰黄	10	カマド
2	土師器 坏	(12.4)	4.6	7.5	B D E H	普通	褐	70	カマド
3	土師器 台付甃	12.3	(13.8)	-	A G D H	普通	にぶい・黄橙	60	カマド

調査区の中央、Z-47グリッドに位置する。第152・154・158号住居跡と重複関係にあり、第154号住居跡より古く、第158号住居跡より新しい。

調査区が狭く、検出されたのは住居跡のごく一部であるため、平面形は不明である。規模は南北方向に約2.9mあるが、東西方向は調査区幅の1.0mしか

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第269図）

調査区の東側、Z-55・56グリッドに位置する。第7・11号住居跡、第41・52・53・81号土塊と重複する。第41号土塊より古い、他の遺構との新旧は不明である。

3間×2間の東西棟の側柱建物跡である。北と南の2面に庇が付いている。規模は桁行5.10m、梁行3.40m、面積17.34㎡である。主軸方向は、N-85°-Wである。柱間間隔は桁行1.80mで、P7-P8間は1.50mである。梁行は1.70mで等間隔に揃っている。庇の出は南側が1.40m、北側は1.30mである。

柱穴の形態は四隅がL字型を呈する。P4は第41号土塊の底面で検出したために掘り方のL字部分がなくなっている。間の柱穴は方形が基調であるが崩れて円形に近いものもある。規模は長軸42~54cm、短軸38~52cmである。概ね径40~50cmに収まるようである。深さは20~60cmと幅があるが、四隅の柱穴は42~49cmとほぼ一定している。庇部分の柱穴は円形で、直径が24~50cmと幅がある。深さも5~30cmとばらつきがあり、全体としては浅めである。

遺物は出土していない。時期は、第7・11号住居跡との新旧がつかめていないことから断定できないが、L字型の掘り方は明らかに古代の建物に見られる特徴であることから、第7号住居跡より古い可能性が高い。第7号住居跡は10世紀後半から11世紀と考えられ、本建物跡はそれ以前となろう。

第2号掘立柱建物跡（第270図）

検出してない。

床面はほぼ平坦であるが、検出範囲が狭いため詳細は不明である。

カマドなどの施設も検出されていない。調査区外にあるものと考えられる。

遺物は出土せず、時期も不明である。

調査区の東側、Y・Z-55グリッドに位置する。位置的に第56・57号土塊と重複するが、直接重複する柱穴はなく、新旧関係は不明である。

2間×2間の建物跡で、ほぼ正方形である。規模は桁行3.60m、梁行3.50mで、面積は12.60㎡である。主軸方向は、N-79°-Eである。柱間間隔は桁行1.80m、梁行1.75mで等間であるが、梁行南側は中間の柱穴が検出されなかった。一辺だけ中間の柱が見られないという平面形態は第25号掘立柱建物跡に類似する。P1は外側に張り出す形態で、抜き取られたものと思われる。

柱穴の配置で特徴的なのは、四隅の柱穴が大きく深いに対し、間の柱穴は小さく浅いことである。中間のものは柱ではなく束かもしれない。

柱穴の形態は円形である。四隅の柱の規模は、直径が32~34cmと一定で、深さは54~72cmと深い。これに対し中間の柱穴は、直径20~24cmで、深さは6~8cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第3号掘立柱建物跡（第271図）

調査区の中央、Y・Z-49グリッドに位置する。第64・71・75・91号住居跡、第111・112・113号土塊と重複する。第64・71・91号住居跡より新しく、第75号住居跡より古い。土塊との新旧関係は不明である。

3間×2間の南北棟の側柱建物跡で、本遺跡で検出された掘立柱建物跡の中でも大型の部類に入る。規模は桁行6.90m、梁行4.80mで、面積は33.12㎡で

ある。主軸方向は、 $N-4^{\circ}-W$ である。柱間隔は桁行のP6-P7、P8-P9間は2.40mで、中央のP7-P8間は2.10mと狭い。梁行は2.40mで等間隔に揃っている。角の柱穴は、P4やP9のように斜めに配置する意識が窺われる。

柱穴の形態は円形、あるいは隅丸方形である。規模は長軸94cm～1.53m、短軸78cm～1.05mと幅があるが、概ね径90cm～1.0mに収まるようである。深さは48～72cmであるが、概ね50～60cmである。掘り方には、底面が平らなもの(P4・6・9)と、柱の当たりの部分のみ掘り下げてあるものの2種類がある。

遺物は須恵器環・蓋、土師器の環が出土している。時期は9世紀と考えられる。

第4号掘立柱建物跡 (第273図)

調査区の中央、X-49グリッドに位置する。第70・74・78号住居跡と重複し、本建物跡が新しい。

北側は調査区外に掛かるため全容はわからないが、柱穴規模などから仮に3間×2間の建物とするなら、第7号掘立柱建物跡と同程度の規模を持つものと考えられる。検出されたのは南側の2間と東側の1間分である。規模は南辺が3.90mである。東辺は1間分の1.95mである。主軸方向は、南北に仮定すると $N-3^{\circ}-E$ となる。柱間隔は1.95m等間と考えられる。

柱穴の形態は楕円形のものが多い部分である。P2は南東側に張り出しがある。規模は長軸68～86cm、短軸52～78cmである。深さは56～62cmとほぼ一定している。

遺物は土師器甕の底部が出土しているが伴うかどうかわからない。

時期は、遺構の重複から8世紀以降と考えられる。

第5号掘立柱建物跡 (第274図)

調査区の中央、Y-Z-51・52グリッドに位置する。第83号住居跡と重複し、第92号住居跡が東側に

隣接する。第83号住居跡より新しい。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。

規模は桁行4.90m、梁行4.20m、面積20.58㎡である。主軸方向は、 $N-87^{\circ}-W$ である。柱間隔は桁行2.45m、梁行2.10mで等間隔である。

柱穴には重複或いは抜き取り状の痕跡を残すものがある。形態は円形が主体である。規模は長軸57cm～1.00m、短軸42cm～73mである。深さは18～80cmと幅がある。概ね径50～70cm、深さ50cm前後に収まる。P6は規模が小さく、浅めである。また、P5は掘り方が建物の外側に向かってL字型をしており、通例と違っているが南東方向には建物の跡が見当たらないことから本建物跡のものと考えておく。

遺物は土師器の細片が出土しているが、図示できるものはなかった。

時期を断定できる遺物はないが、第83号住居跡が9世紀前半とすれば新田川関係からそれ以後ということになる。

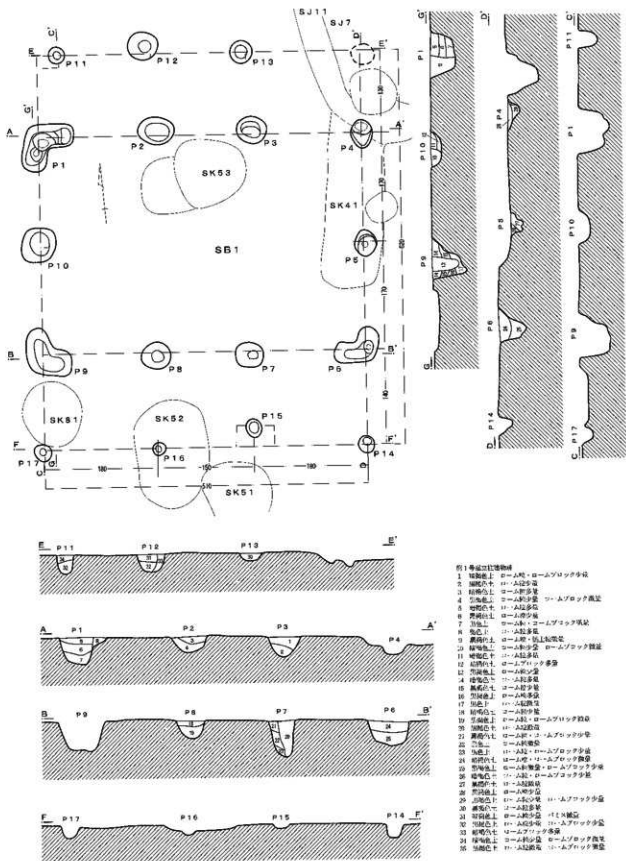
第6号掘立柱建物跡 (第275図)

調査区の東側、W-57グリッドに位置する。第6号溝跡、第118・120号土坑と重複する。土層断面による確認はしていないが本掘立柱建物跡が古いのではないと思われる。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。規模は桁行4.20m、梁行3.90m、面積16.38㎡である。主軸方向は、 $N-87^{\circ}-E$ である。柱間隔は桁行2.10m、梁行1.95mで、等間隔である。南側のP5-P6間は第118号土坑によって失われている。

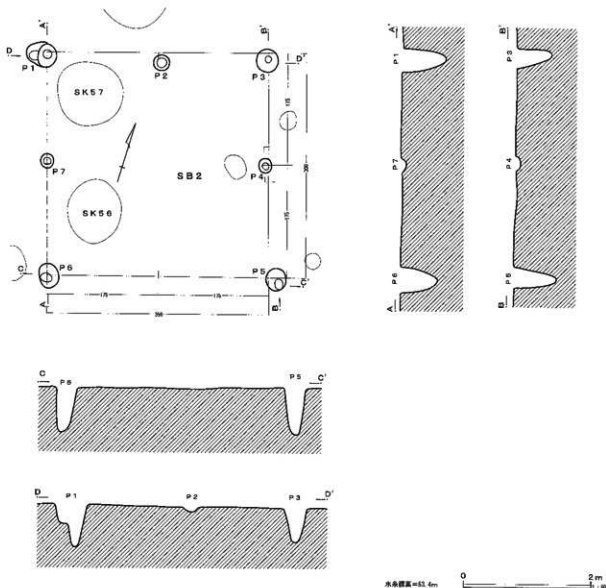
柱穴の形態は円形で、四隅の柱穴が大きく、中間の柱穴が小さい。規模は、四隅の柱穴は長軸47～66cm、短軸44～60cmである。深さは60～75cmと幅がある。中間の柱穴は長軸35～50cm、短軸30～44cmで、深さは10～25cmと四隅の柱穴に比べると浅い。

遺物は、P3から須恵器及び土師器環が出土した。時期は9世紀のものと考えられる。



- 第1号孤立柱建物跡
- 1 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 2 柱礎石上 ①-人形多数
 - 3 柱礎石上 ①-人形多数
 - 4 柱礎石上 ①-人形多数
 - 5 柱礎石上 ①-人形多数
 - 6 柱礎石上 ①-人形多数
 - 7 柱礎石上 ①-人形多数
 - 8 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 9 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 10 柱礎石上 ①-人形多数
 - 11 柱礎石上 ①-人形多数
 - 12 柱礎石上 ①-人形多数
 - 13 柱礎石上 ①-人形多数
 - 14 柱礎石上 ①-人形多数
 - 15 柱礎石上 ①-人形多数
 - 16 柱礎石上 ①-人形多数
 - 17 柱礎石上 ①-人形多数
 - 18 柱礎石上 ①-人形多数
 - 19 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 20 柱礎石上 ①-人形多数
 - 21 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 22 柱礎石上 ①-人形多数
 - 23 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 24 柱礎石上 ①-人形・ロームブロック多数
 - 25 柱礎石上 ①-人形多数
 - 26 柱礎石上 ①-人形多数
 - 27 柱礎石上 ①-人形多数
 - 28 柱礎石上 ①-人形多数
 - 29 柱礎石上 ①-人形多数
 - 30 柱礎石上 ①-人形多数
 - 31 柱礎石上 ①-人形多数
 - 32 柱礎石上 ①-人形多数
 - 33 柱礎石上 ①-人形多数
 - 34 柱礎石上 ①-人形多数
 - 35 柱礎石上 ①-人形多数
 - 36 柱礎石上 ①-人形多数

第269図 第1号孤立柱建物跡



第270図 第2号独立柱建物跡

第7号独立柱建物跡 (第276図)

調査区の中央、Z・A A-52・53グリッドに位置する。第85号住居跡と重複し、これより新しい。付近には5号独立柱建物跡がある。

3間×2間の側柱建物跡で、第29号独立柱建物跡と規模的に類似する。平面形は長方形である。規模は桁行5.10m、梁行3.90m、面積19.89㎡である。主軸方向は、N-21°-Wである。柱間間隔は桁行が1.80m、1.50m、1.80mで中間が狭い。梁行1.95mで等間隔である。

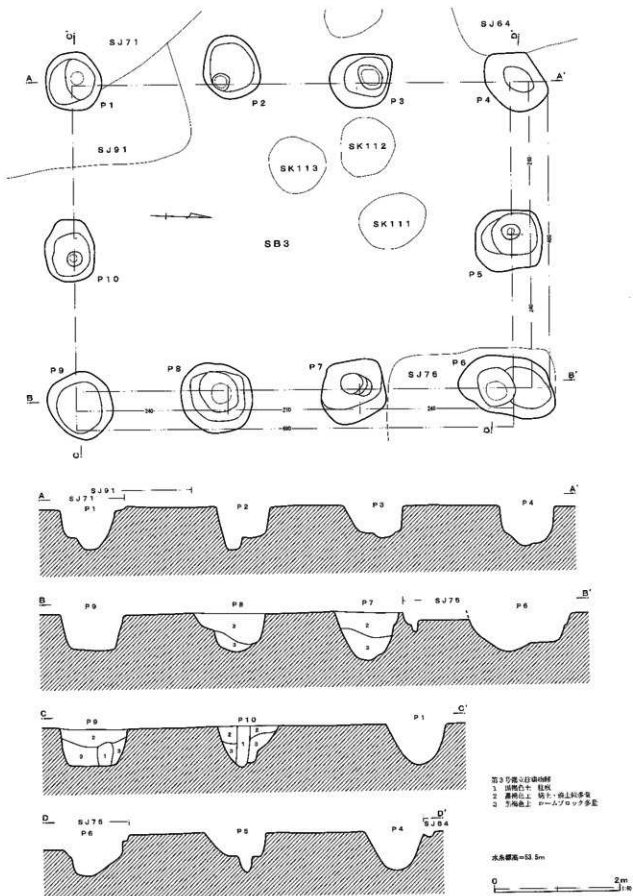
柱穴の形態は隅丸方形ないしは円形である。規模

は長軸50~92cm、短軸48~90cmである。深さは49~84cmと幅がある。概ね径50~60cm、深さ50~60cmの範囲に取まる。掘り方はP5を除き、いずれも底面が平坦である。上層断面からは、柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は、P10からクワ七脚器が出土している。時期は10世紀である。

第8号独立柱建物跡 (第278図)

調査区の北側、R・S-57・58グリッドに位置する。調査区の中で最も北側に位置する。第25号溝跡



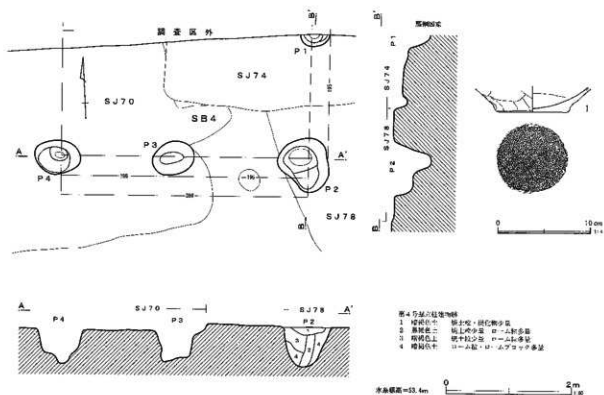
第271図 第3号掘立柱建物跡



第272図 第3号掘立柱建物跡出土遺物

第146表 第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 釜	(17.0)	3.1		ABE	普通	灰黄	75	P-4 色みあり つまみ径3.0cm
2	須恵器 坏	(12.4)	3.6	(6.6)	BEJ	普通	灰	20	P-10
3	土師器 坏	(13.2)	3.9	(8.3)	ADEGH	普通	橙	25	P-9
4	土師器 坏	(13.0)	3.2	(9.2)	ADEG	普通	橙	25	P-2



第273図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物

第147表 第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

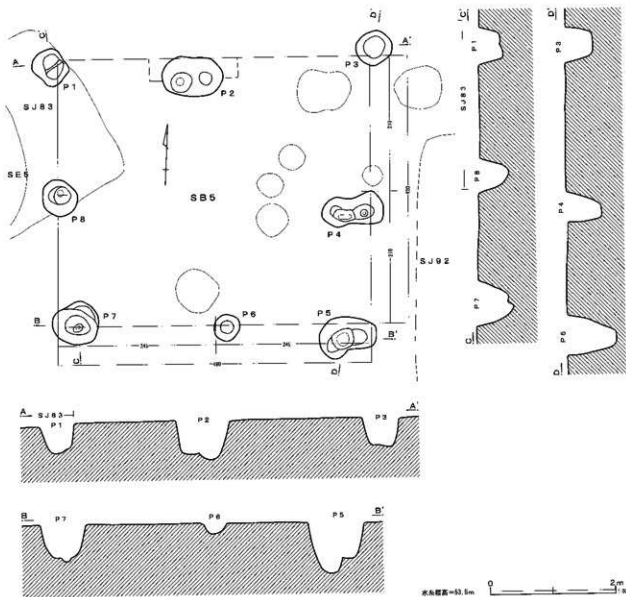
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	-	(2.6)	7.6	A B D E H	普通	にぶい黒	80	P-2 摩耗著しい

と重複する。P1とP7が第25号溝跡と重複し、これより新しい。

3間×2間の偏柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行7.50m、梁行4.20m、面積31.50㎡である。主軸方向は、N-2°-Eで、僅かに東

に振れている。柱間隔は桁行2.52m、梁行2.10mで等間隔である。

柱穴の形態は円形ないしは隅丸方形である。規模は長軸54~72cm、短軸48~70cmである。深さは24~96cmと幅がある。径は概ね60cm前後に収まるが、深



第274図 第5号掘立柱建物跡

さはばらつきが多い。特にP4は浅い。P2は小型で浅いが、底面に柱の当りが見られる。

遺物はP8から土師器壺の小片が出七した。

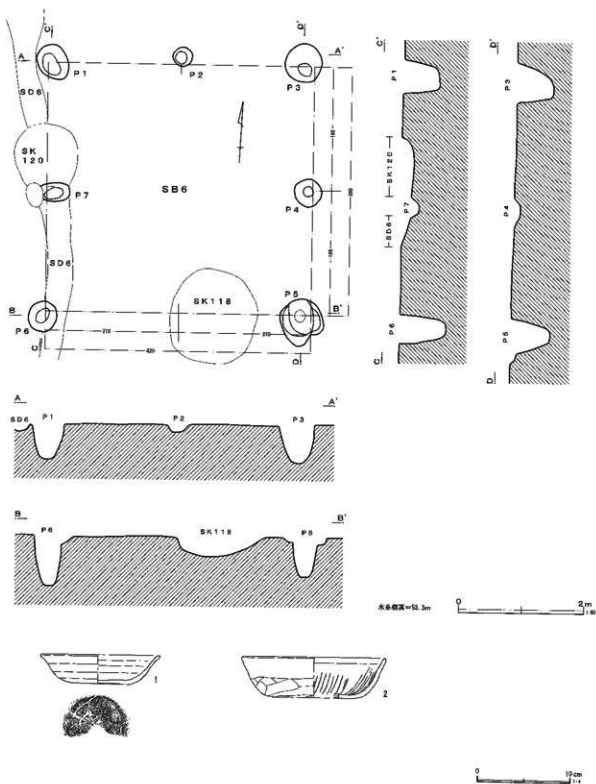
時期は9世紀である。

第9号掘立柱建物跡 (第279図)

調査区の中央、X-51・52、Y-52グリッドに位置する。竪穴住居跡が密集しており、第89・90・111・112・118号住居跡と重複する。第112号住居跡より新しいが、第89・90・111号住居跡との新旧は不明である。第118号住居跡は縄文時代の遺構であ

る。北側は調査区外にかかり、建物の全容を把握することはできなかった。

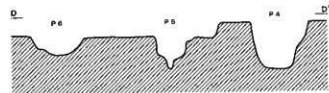
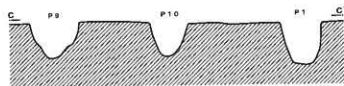
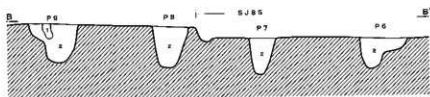
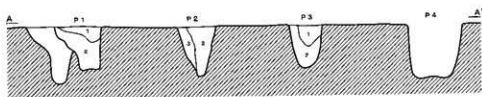
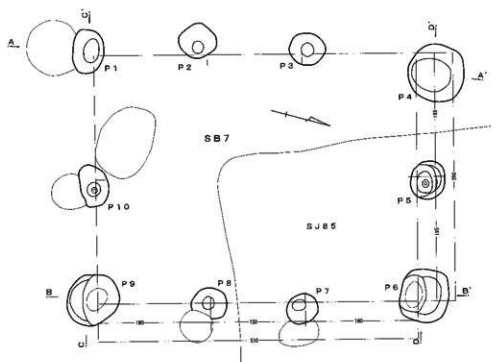
検出されたのは2間×2間分であるが、北辺の中央には柱穴が検出されなかったことから、更に北側に延びるのは確実で、おそらく第3号掘立柱建物跡と同程度の規模を持つ、3間×2間の側柱建物になると考えられる。検出されたのは、桁行が2間分で4.20m、梁行は4.50mである。主軸方向は、N-18°-Wである。柱間間隔は桁行が2.40m、1.80m、梁行は2.25mで等間隔である。桁行きは中間が狭くなるものと思われる。



第275図 第6号獨立柱建物跡・出土遺物

第148表 第6号獨立柱建物跡出土遺物觀察表

番号	器種	口徑	器高	底徑	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須惠器 坏	(13.0)	3.1	6.0	A B E J	普通	にぶい黄橙	45	P-3 酸化焼成
2	土師器 坏	(15.1)	4.3	(10.6)	A E G	普通	橙	35	P-3 暗文

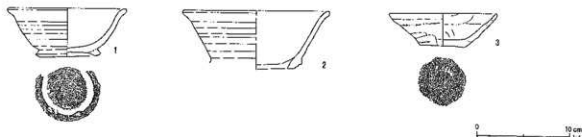


影ノ骨柱ハ柱遺物跡
 1 3層色土 ②→A柱跡 残土附少量
 2 4層色土 ③→A柱跡 ロープアロツク多量
 3 6層色土 ④→A柱跡

水深標高=33.5m



第276図 第7号掘立柱建物跡



第277図 第7号掘立柱建物跡出土遺物

第149表 第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付埴	(12.3)	5.1	6.9	E G H	普通	オリーブ黒	60	P-10
2	ロクロ 高台付埴	(15.4)	(6.1)	-	A B E G	良好	灰黄褐	20	P-10
3	上師器 埴	(11.6)	3.6	5.0	A D E G H	普通	にぶい橙	60	P-10

柱穴の形態は隅丸長方形で、角の柱穴は斜めに配置され、他の柱穴はそれぞれ桁行き方向、或いは梁行方向に長軸を描いている。規模は長軸92~128cm、短軸62~100cmと大きく、深さは42~76cmである。掘り方は、いずれも底面が平坦である。P1の底面に見られるピットが当りであるかは確認していない。

遺物は細片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。

時期は第112号住居跡より新しいとすれば9世紀後半以降となろう。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第11号掘立柱建物跡 (第280図)

調査区の西側、W-44グリッドに位置する。第126号住居跡と重複し、第5号竪穴状遺構(SX9)が殆ど接している。第126号住居跡は縄文時代の住居跡で、本遺構が新しい。第5号竪穴状遺構(SX9)とは直接の重複がないため新旧はわからない。

南北1間分の検出で、北側は調査区外にかかる。ただし、検出されたのは柱穴2基のみであるため、建物がどの方向をさすのか不明である。柱穴は、上層断面では、柱底こそ確認されなかったが、形態、掘り方の特徴から、明らかに柱穴と考えられた。平面形態は捉えられなかったが、掘立柱建物跡として捉えておきたい。北側の柱穴は約半分が調査区外にかかっているが、柱間は2.00mとしておく。或いは2.10m程度あるのかもしれない。方向は、N-32°-Wである。

柱穴の形態は隅丸長方形である。P1の規模は長軸94cm、短軸76cmで、深さは88cmである。P2は、やや浅いものの同程度の大きさと思われる。掘り方は、底面が平坦で柱の当りは見られない。覆土の状況や、平面形態にやや不規則な段を持つことから、柱は抜き取られた可能性も考えられる。

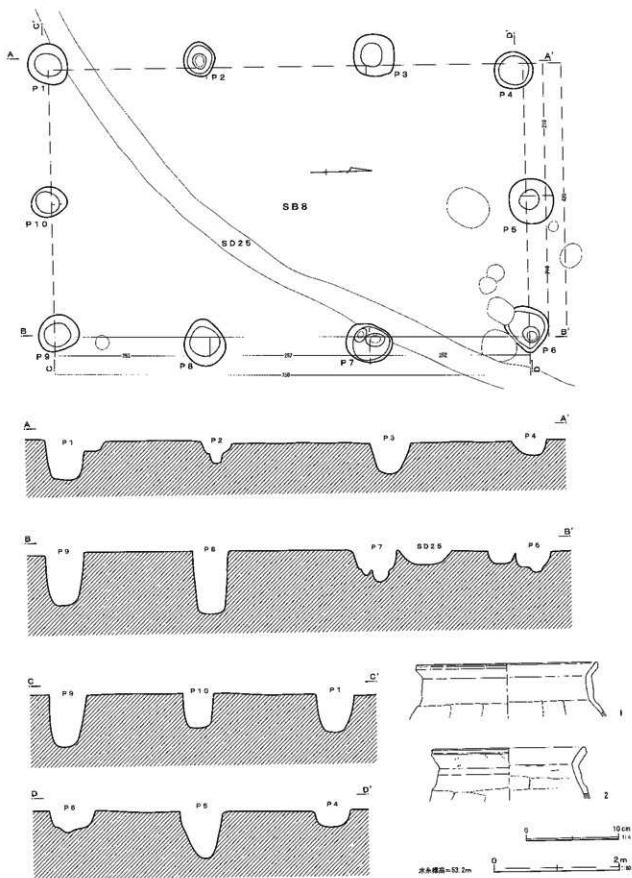
遺物はP1から羽口片が出土したが、本遺構に伴う可能性は低いと思われる。

第10号掘立柱建物跡 (第280図)

調査区の東側、U-57グリッドに位置する。第140号土塚と重複する。P4が第26号井戸跡と重複し、本遺構が古い。

検出されたのは南北3間分で、西側は調査区外にかかる。おそらく3間×2間の南北棟の側柱建物と推測され、東側が検出されたものと思われる。規模は5.40mで第27・29号掘立柱建物跡と同程度の建物と思われる。主軸方向は、N-14°-Eである。柱間間隔は1.90m、1.60m、1.90mで中間が狭い。

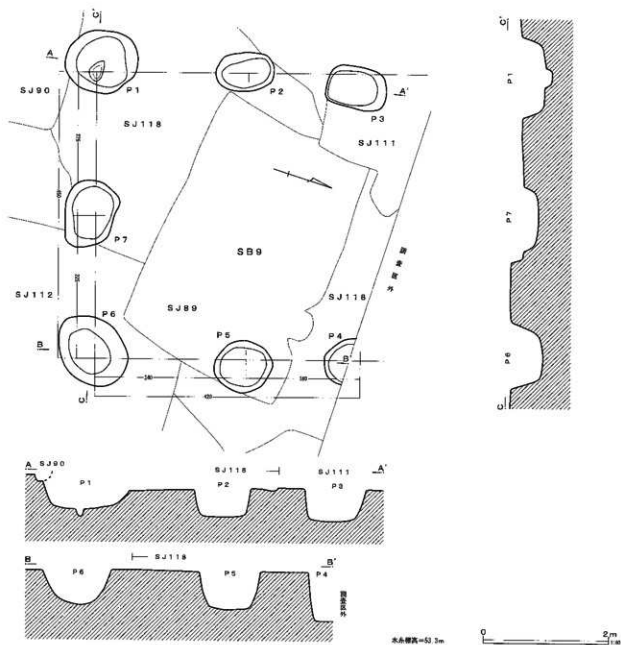
柱穴の形態は円形である。規模は長軸36~48cm、短軸32~46cmで、他の掘立柱建物跡に比べるとやや小規模である。深さは24~54cmと幅がある。径は概ね30~40cm台で、深さはP4を除けば30cm以下と浅めである。



第278图 第8号掘立柱建物跡・出土遺物

第150表 第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(19.2)	(5.8)	-	A D E H J	普通	橙	20	P-8 内外面単純する
2	土師器 甕	(16.0)	(5.5)	-	A E G H	普通	にぶい赤褐	20	P-8



第279図 第9号掘立柱建物跡

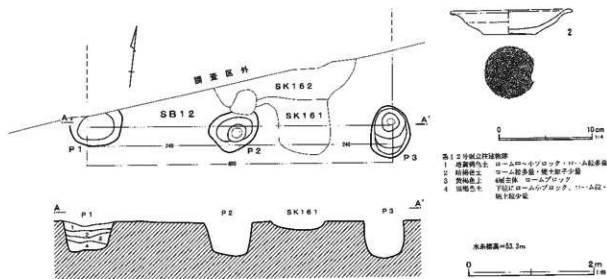
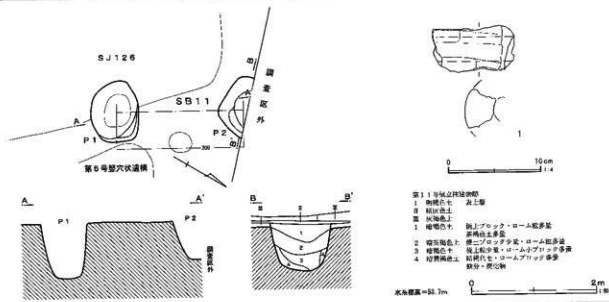
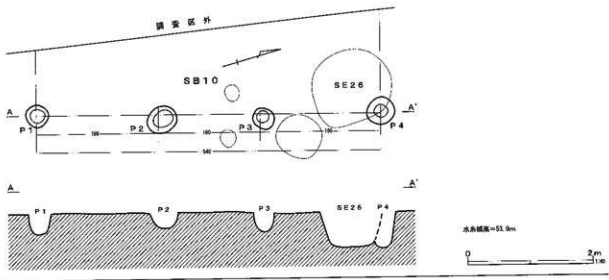
時期は不明と言わざるを得ない。

第12号掘立柱建物跡 (第280図)

調査区の北側、V-47・48グリッドに位置する。位置的に第161・162号土壌と重複するが、直接重複

する柱穴はなく、新旧関係は不明である。

東西2間分の検出で、北側は調査区外にかかる。規模は4.80mで、柱間間隔は2.40m等間である。方向は、N-83°-Eである。建物規模が3間×2間となるのか、2間×2間かは分からないが、前者



第280図 第10・11・12号孤立柱状建物跡・出土遺物

第151表 第11号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	羽	8.8	4.9	3.1	A B D E H I J	普通	にぶい黄橙	-	P-1 電さ115.1g

第152表 第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
2	ロクロ皿	(12.7)	2.6	5.5	A D E J	普通	にぶい黒	40	P-1

であれば第27号掘立柱建物跡、後者なら第36号掘立柱建物跡と同程度の規模を持つものと考えられる。

柱穴の形態は隅丸長方形である。規模は長軸78～82cm、短軸62cmで、深さは50～58cmと揃っている。P2・P3には底面に当たりが見られる。

遺物は、P1から礫と皿が出土している。

時期は10世紀と思われる。

第13号掘立柱建物跡 (第281図)

調査区の中央、F F・G G-50グリッドに位置する。第156・158号住居跡、第13号井戸跡、第174・175号土壌と重複する。第156・158号住居跡、第13号井戸跡より古いのが、第174・175号土壌との新旧関係は不明である。

調査時にP1を検出し、掘立柱建物跡の角に位置する柱穴と判断したが、その時点では建物規模を把握することはできなかった。整理の段階で、図のような3間×2間の側柱建物跡を推定した。

規模は桁行7.80m、梁行4.20mで、面積は32.76㎡になると思われる。形態的には第8号掘立柱建物跡に類似し、やや大きくなる。主軸方向は、N-1°-Eで、僅かに東に振れている。柱間間隔は桁行2.60m、梁行2.10m等間と考えておく。

柱穴の形態は隅丸長方形である。P1は角の柱穴で斜めに配置される。規模は長軸106cm、短軸86cmで、深さは70cmを測る。覆土は柱痕が見られ、周りをロームを含む土層を層状に充填している。

遺物は出上せず、時期は第158号住居跡との関係からは6世紀以降としか捉えられないが、他の類似する掘立柱建物跡の年代からは9世紀以降と考えられる。

第14号掘立柱建物跡 (第282図)

調査区の南側、H H-50グリッドに位置する。周辺には第15～21号掘立柱建物跡がある。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。平面形は方形である。規模は桁行3.60m、梁行3.30mである。面積は11.88㎡である。主軸方向は、N-23°-Wである。柱間間隔は桁行1.70m、1.90mで、梁行は1.65mで等間隔であるが、桁行き西側はやや短くなっている。

柱穴配置で特徴的なのは、北側のP1とP3の間に柱穴が1基(P2)入ることである。P2がこの位置に入ることによって、なぜかP1が梁行の並びからずれている。これと全く同じ柱穴配置を取るものに第16号掘立柱建物跡がある。P2とP3の柱間間隔は1.05m、P1、P2間は0.60mである。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸22～32cm、短軸22～29cmで、殆どが20cm台と小さい。深さは10～26cmと浅い。

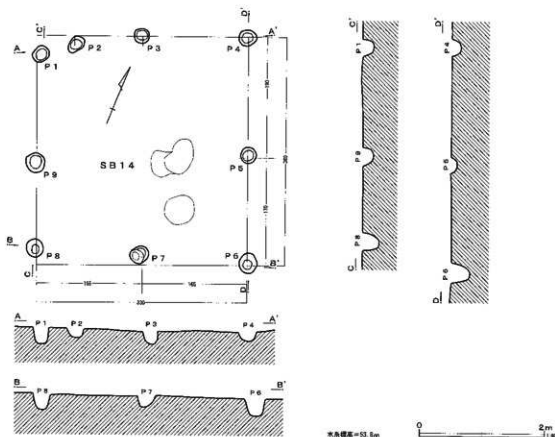
遺物は図示できるものはない。

時期を推定できる遺物がないため、不明である。

第15号掘立柱建物跡 (第283図)

調査区の南側、F F・G G-50グリッドに位置する。第248号住居跡と重複するが、直接重複する柱穴はなく、新旧関係は不明である。東側は調査区外にかかる。

南北は3間で、東西は2間分が検出された。東側はP4の存在から梁行2間と考えておく。南北棟の総柱建物跡ということになる。平面形は長方形と思われる。規模は桁行4.50m、梁行3.00m、面積13.50㎡である。主軸方向は、N-9°-Wである。



第282図 第14号掘立柱建物跡

する。面積は16.72㎡である。主軸方向は、N-17°-Wである。柱間間隔は桁行2.40m、2.00m、梁行は南側で1.80mで等間隔である。

柱穴配置は第14号掘立柱建物跡と同一で、P4とP6の間にP5が入り、P6が梁行の並びからずれるのも同じである。また、P4、P5間は1.05m、P5、P6間は0.60mと間隔も同じであり、この部分に関しては同一の規格で造られていることがわかる。

柱穴の形態はほぼ円形である。規模は直径が20cm代で、30cmを越えても33cmまでで小さいものが多い。深さは14~34cmと幅があるが、P5が15cmである以外は20~30cm代でばらつきは少ない。

遺物は出させず、時期は不明である。

第17号掘立柱建物跡（第285図）

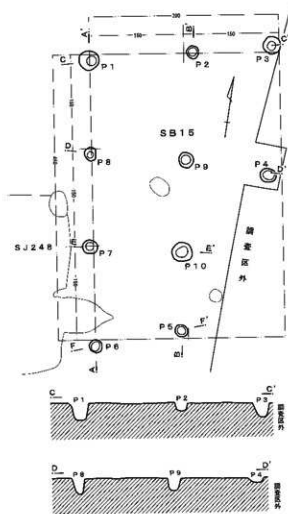
調査区の南側、GG・HH-49、HH-50グリッドに位置する。重複する遺構はないが、掘立柱建物

が集中して分布する部分にあり、周囲には多くの掘立柱建物跡がある。北側には第16号掘立柱建物跡が隣接している。

3間×2間の東西棟の側柱建物跡で、平面形は長方形である。規模は桁行7.20m、梁行4.80mで、面積は34.56㎡である。主軸方向は、N-68°-Eである。柱間間隔は桁行北側及び梁行は2.40mで等間隔である。桁行き南側は中間に小ビットが入り、両側が2.10mで、中間の2間は1.50mとなっている。また、建物内部のP2とP9の間に柱穴が1基見られる。柱筋がほぼ通ることから遺構に伴うものと考えておきたい。

柱穴の形態は、隅丸方形ないしは円形である。規模は長軸34~59cm、短軸32~48cmである。深さは12~66cmと幅があり、50~60cmのものが多い。

遺物はP7から土師器環の破片が出上している。時期は8世紀と考えられる。



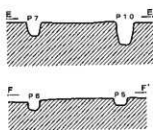
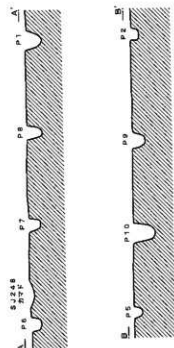
第283図 第15号掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡 (第286図)

調査区の南側、I I - 49・50グリッドに位置する。周辺には掘立柱建物集中し、西側には第19号掘立柱建物跡が隣接する。第250号住居跡と重複し、本建物跡が古い。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。規模は桁行3.60m、梁行3.40m、面積12.24㎡である。主軸方向は、N-0°である。柱間間隔は桁行1.80m等間隔で、梁行は1.90m、1.50mである。

柱穴の形態は円形である。規模は直径30~40cm台が殆どで、P 1は直径24cmで最も小さい。深さはP 1が14cm、P 4が42cmであるが他は全て30cm台である。掘り方は、全て底面が平坦である。覆土は1層が柱痕で、他は掘り方埋土である。P 3、P 4間の柱穴は第250号住居跡によって消失している。



本画縮尺=5:1m

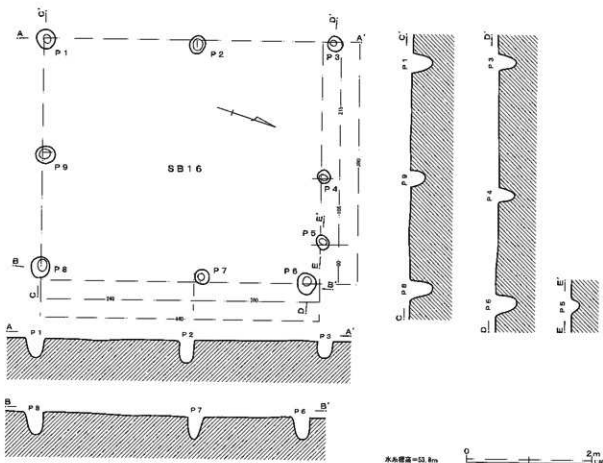


遺物はP 4から土師器破片が出土している。時期は、出土した遺物で断定することは困難である。

第19号掘立柱建物跡 (第287図)

調査区の南側、I I・J J-49グリッドに位置する。周辺には掘立柱建物集中し、東側には第18号掘立柱建物跡が隣接し、北側には第20・21号掘立柱建物跡が殆ど距離をおかず存在する。また、第206号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

2間×2間の建物跡である。北辺が短いためかなり歪んだ平面形となるが、西辺の柱穴も並びが通っているため1棟の建物跡と推定した。規模は南辺が4.90mに対し北辺は4.00mである。東辺は4.70mであるが西辺は5.20mとなっている。面積は22.17㎡である。



第284図 第16号掘立柱建物跡

ある。主軸方向は、 $N-67^{\circ}-E$ である。柱間隔は北辺が $1.6m \times 2.4m$ 、南辺は $2.1m \times 2.8m$ 、東辺は $2.5m \times 2.2m$ 、西辺は $2.6m$ 等間隔である。

柱穴の形態は、円形である。規模は直径が $30cm$ 台のものが多く、 $P3$ 、 $P5$ が $20cm$ 台である。深さは $18-50cm$ とばらつきがある。覆土は、2層が柱痕で他は掘り方埋土である。掘り方は、底面が平坦である。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第20号掘立柱建物跡 (第288図)

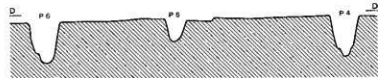
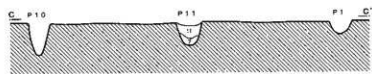
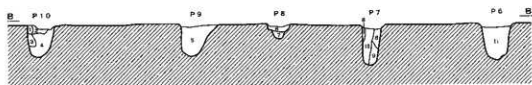
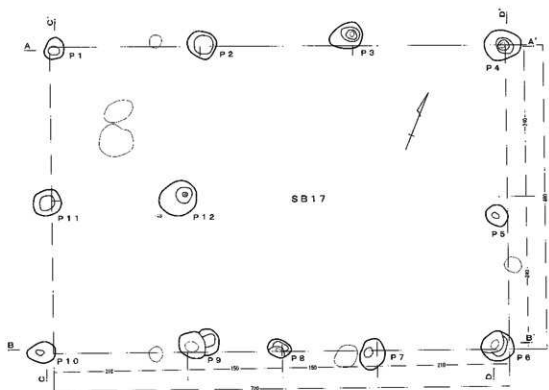
調査区の南側、 $HH-48$ 、 $II-48 \cdot 49$ グリッドに位置する。周辺には掘立柱建物跡が集中し、南側には第19号掘立柱建物跡が接している。第21号掘立柱建物跡と重複する。第21号掘立柱建物跡は本掘立柱

建物跡と方向を同じくし、本掘立柱建物跡の外側にあることから建て直したものと考えられる。また、位置的には第296号住居跡と重複するが、第296号住居跡はカマドしか残存していなかったため、新旧関係は不明である。

2間 \times 2間の南北棟の側柱建物跡と考えられる。規模は桁行 $4.20m$ 、梁行 $3.30m$ 、面積 $13.86m^2$ である。主軸方向は、 $N-18^{\circ}-W$ である。柱間隔は桁行 $2.10m$ 、梁行 $1.65m$ で等間隔である。

柱穴の形態は円形ないしは楕円形である。深さは $30-80cm$ で、幅がある。掘り方は、当りがあるものが多い。覆土は2層が柱痕で、それ以外は掘り方埋土である。

遺物は $P8$ から須恵器破片が出土しているが、時期を推定できるような遺物は出土していない。



- 图1 7号孤立柱建物跡
- 1 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 2 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 3 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量 (a) (b) 単位
 - 4 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 5 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 6 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 7 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 8 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 9 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 10 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量
 - 11 柱穴跡 土 - 土色砂多量, 白色砂多量



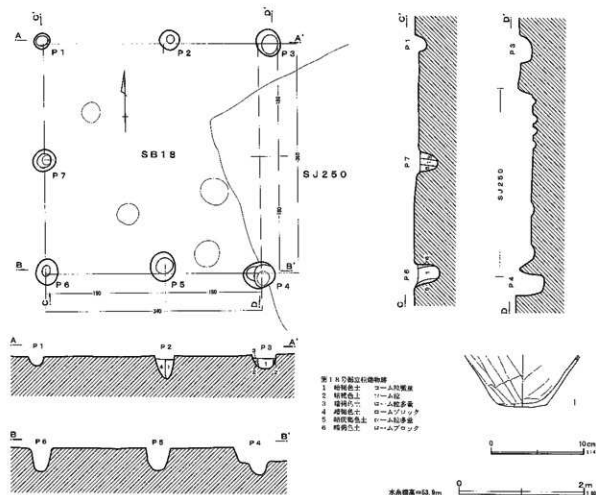
0 10cm

0 2m

第285图 第17号孤立柱建物跡・出土遺物

第153表 第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(13.0)	(2.9)	(11.8)	AEG	普通	にぶい橙	15	P-7



第286図 第18号掘立柱建物跡・出土遺物

第154表 第18号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	-	(5.5)	5.1	ADEGH	普通	橙	60	P-4

第21号掘立柱建物跡 (第289図)

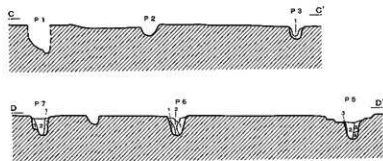
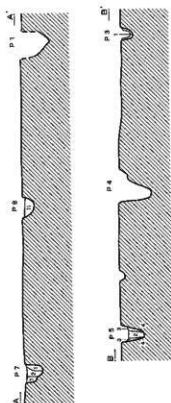
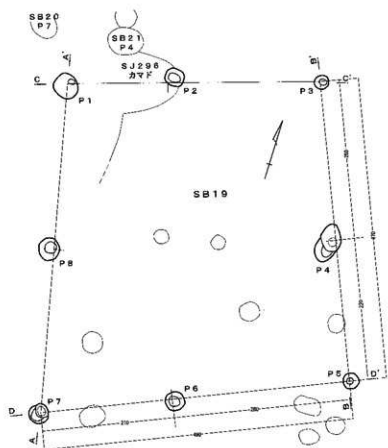
調査区の南側、HH-48・II-48・49グリッドに位置する。第296号住居跡、第20号掘立柱建物跡と重複する。第20号掘立柱建物跡が内側にあり、方向がほぼ同じであることから第20号掘立柱建物跡を建て直したものと考えられる。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。平面形は正方形である。北東の角は擾乱によって柱穴が失われている。規模は桁行4.80m、梁行4.80mで、面積は

23.04㎡である。主軸方向はN-18°-Wである。柱間間隔は2.40mであるが、南辺は2.70×2.10mと東側が狭い。

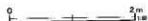
柱穴の形態は隅丸長方形を意識しているものと思われる。規模は長軸42~67cm、短軸38~54cmである。P3はやや小さいが、他は50~60cm台である。深さは70~94cmと深い。覆土は3・10層が柱痕である。

遺物はP2から須恵器坏、P4から土師器坏が出土している。



- 第1号遺跡の柱遺跡
1. 硬質土
 2. 硬質土
 3. 硬質土
 4. ロームブロック

水深標高=52.3m



第287図 第19号掘立柱建物跡

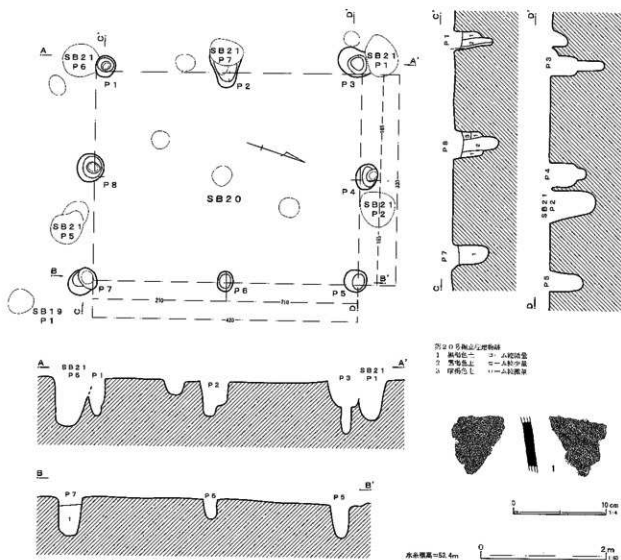
遺物の時期は9世紀後半と考えられる。

第22号掘立柱建物跡 (第290図)

調査区の西側、JJ-48グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する部分の最も南に位置する。重複する遺構はないが、北東に近接して第275号住居跡があるが、この住居跡はカマドと床面の一部しか残存していなかったため、全体の規模は明らかでない。

中央の柱穴がやや西にずれているが、2間×2間の総柱建物跡と考えられる。平面形は南北方向にやや長い。類似する遺構としては、第34号掘立柱建物跡がある。規模は桁行3.40m、梁行3.20m、面積10.88㎡である。主軸方向はN-15°-Wである。柱間間隔は桁行1.70mで等間隔、梁行は1.60mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は直径20~32cm、深さは24~34cmでほぼ同規模であるが、P2は真徑



第288図 第20号獨立柱建物跡・出土遺物

第155表 第20号獨立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 壺	-	-	-	E	普通	黄灰	-	P-8

44cm、深さ46cmである。掘り方の底面はいずれも平坦である。

遺物はP2から土師器製の破片が出上している。

遺物の時期は8世紀と考えられる。

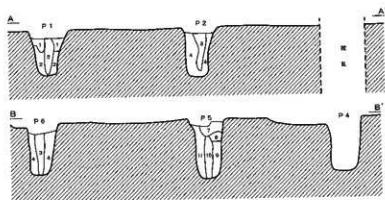
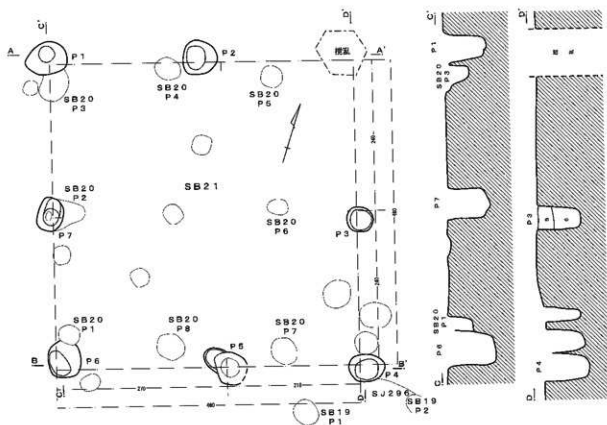
第23号獨立柱建物跡 (第291図)

調査区の南側、HH-47グリッドに位置する。

第257・258号住居跡と重複するが、両住居跡とも床面まで削平されているため、新旧関係は不明であ

る。獨立柱建物跡の集中する部分にあり、西側には軸をほぼ同じくして、第24・36号獨立柱建物跡がある。

2間×2間の東西棟の側柱建物跡である。桁行きの柱間が揃っていないが、梁行の柱穴が通っていることから1棟と推定した。検出された2間×2間の獨立柱建物跡の中では最も長方形を呈する。規模は桁行4.20m、梁行2.70m、面積11.34㎡である。主軸方向はN-54°-Eである。柱間間隔は南側の桁行



- 第21号独立柱建物跡
- 1 黄褐色土 灰土層・ローム状少砂
 - 2 黄褐色土 コーム状コップ
 - 3 黄褐色土 ローム状少砂 (約4割) 黄砂
 - 4 黄褐色土 コーム状コップ (約4割) 黄砂
 - 5 黄褐色土 コーム状少砂
 - 6 黄褐色土 ローム状少砂
 - 7 灰褐色土 コーム状少砂
 - 8 黄褐色土 コーム状少砂
 - 9 黄褐色土 コーム状少砂
 - 10 灰褐色土 ローム状黄砂
 - 11 黄褐色土 コーム状少砂

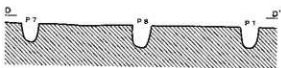
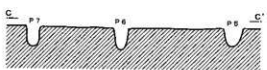
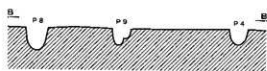
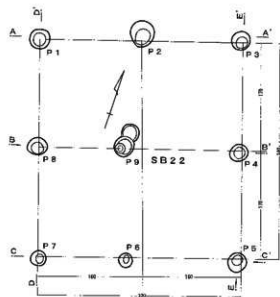
基本建高=53.9m

0 10m

第289图 第21号独立柱建物跡・出土遺物

第156表 第21号独立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須臾型 坏	(12.3)	3.6	(6.6)	DE I J	将瀬	灰白	20	P-2
2	上器型 坏	(13.4)	(3.7)	-	A DE G	将瀬	明褐	15	P-4



最大幅員=54.0m

0 2m

第290図 第22号掘立柱建物跡・出土遺物

が西から1.70×2.50m、北側は同じく2.30×1.90mで、梁行は1.35mで等間隔である。

柱穴の形態は円形ないし楕円形である。規模は長軸30～52cm、短軸30～42cmで、P2以外はほぼ同規模である。深さは20～46cmで、P4は浅めである。掘り方の底面はいずれも平坦であるが、P2、P3は抜き取られた可能性がある。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第24号掘立柱建物跡 (第292図)

調査区の南側、HH・1 I-47グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する部分の最も西にあたる。北東に軸をほぼ同じくして第23号掘立柱建物跡があり、南にはピットが円形に並ぶ環状ピット列(SX44)がある。第255号住居跡、第36号掘立柱建物跡、第216・277号土壌と重複する。第36号掘立柱建物跡より新しく、第216号土壌より古い。第255号住居跡、第277号土壌との新旧関係は不明である。第36号掘立柱建物跡とは、規模や建物方向が同じであり、一部の柱穴が重なることから建替えたものと考えられる。

2間×2間の側柱建物で、東側に庇が付く。規模は桁行5.10m、梁行4.60m、面積24.48㎡である。庇の出は1.60mである。主軸方向はN-35°-Wである。柱間間隔は桁行が2.55mの等間隔で、梁行は西から2.40m、2.20mである。

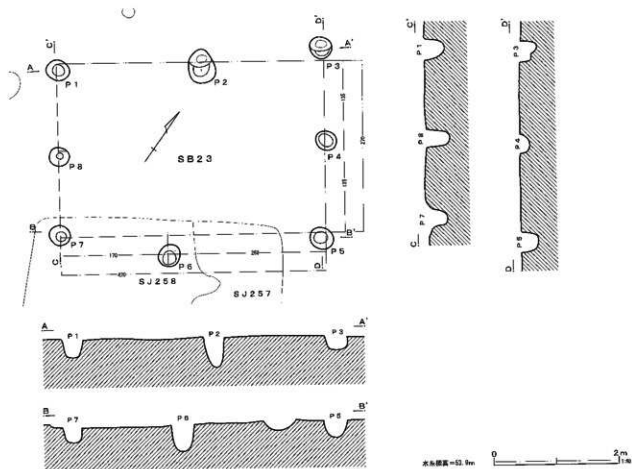
柱穴の形態は身舎が隅丸長方形で、庇は円形である。規模は長軸38～80cm、短軸28～66cmで差がある



0 10cm

第157表 第22号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(19.4)	(5.3)	-	A B D E H I J	普通	褐	15	P-2



第291図 第23号掘立柱建物跡

が、これはP4が小さいため、他は50～60cm台が中心である。深さは32～60cmで、P4が浅めであるが、他は50cm台が中心である。P1・P7・P8には当りが見られた。P5・P6・P8は上層の状態から、柱が抜き取られたものと考えられる。底部分の柱穴は直径25～32cmで、深さは48～68cmと深めである。

遺物は、P11から未野産の須恵器坏片、P3から土師器破片が出土した。

時期は須恵器の時期をとって9世紀以降と考えておきたい。

第25号掘立柱建物跡 (第294図)

調査区の南寄り、FF-45、GG-45・46グリッドに位置する。直接重複する遺構はないが、第268号住居跡が北側にまさにと接しており、位置的には重

複していると言える。

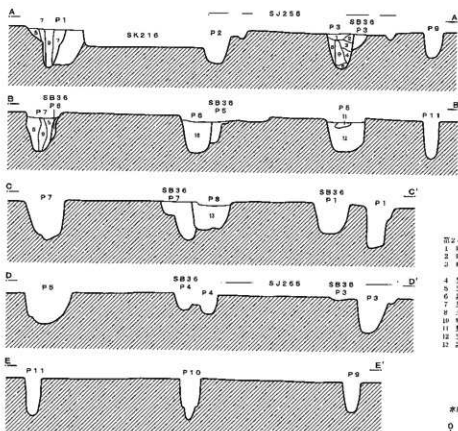
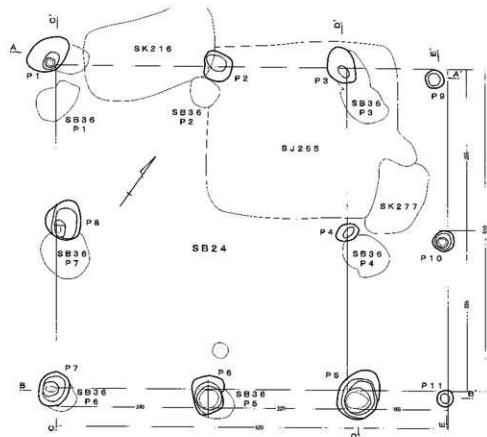
2間×2間の倉庫風の建物跡である。平面形は正方形で、第2・33号掘立柱建物跡と類似する。規模は桁行3.40m、梁行3.40m、面積11.56㎡である。主軸方向はN-7°-Wである。柱間隔は1.70mの等間隔である。北側の中間の柱穴は検出されなかった。

柱穴の形態は、凹形もしくは隅丸方形である。規模は長軸33～63cm、短軸33～53cmで、深さは25～44cmである。四隅の柱穴は他に比べやや大きい。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第26号掘立柱建物跡 (第295図)

調査区の中央、BB-50・51グリッドに位置する。第155・218号住居跡、第34号掘立柱建物跡と重複する。第155・218号住居跡との新旧関係は確認できな



- 第24号柱立柱建物跡
- 1 埋戻土上 1階土留少
 - 2 埋戻土上 1階土留少
 - 3 埋戻土上 1階土留少
 - 4 埋戻土上 1階土留少
 - 5 埋戻土上 1階土留少
 - 6 埋戻土上 1階土留少
 - 7 埋戻土上 1階土留少
 - 8 埋戻土上 1階土留少
 - 9 埋戻土上 1階土留少
 - 10 埋戻土上 1階土留少
 - 11 埋戻土上 1階土留少
 - 12 埋戻土上 1階土留少

水鳥調査=34.0m



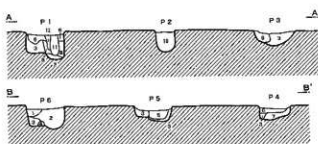
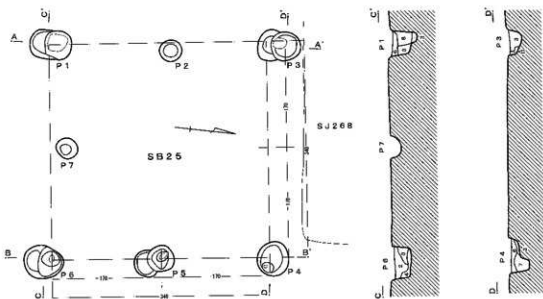
第292図 第24号掘立柱建物跡



第293図 第24号掘立柱建物跡出土遺物

第158表 第24号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 杯	(12.4)	3.8	(6.0)	E F	普通	灰白	20	P-11 南北余座
2	土師器 小型炭	(12.0)	(4.9)	-	A E G	普通	灰褐	20	P-3



- 高さ5m掘立柱建物跡
- 1 欄柵七 須入形少量
 - 2 須入形七 須入形少量
 - 3 須入形七 須入形少量
 - 4 須入形七 須入形少量
 - 5 須入形七 須入形少量
 - 6 須入形七 須入形少量
 - 7 須入形七 須入形少量
 - 8 須入形七 須入形少量
 - 9 須入形七 須入形少量
 - 10 須入形七 須入形少量
 - 11 須入形七 須入形少量
 - 12 須入形七 須入形少量
 - 13 須入形七 須入形少量
 - 14 須入形七 須入形少量
 - 15 須入形七 須入形少量

水深程度=54.6m



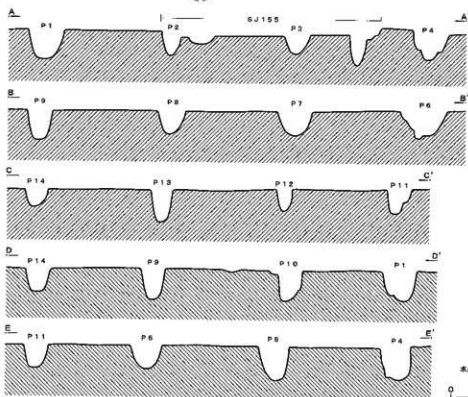
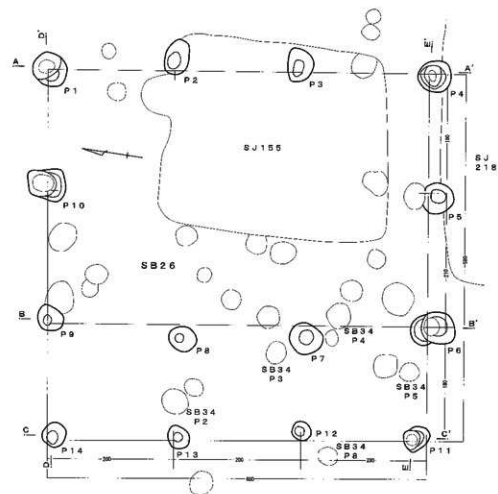
第294図 第25号掘立柱建物跡

かった。第34号掘立柱建物跡と直接重複する柱穴はなく、新旧関係は不明である。

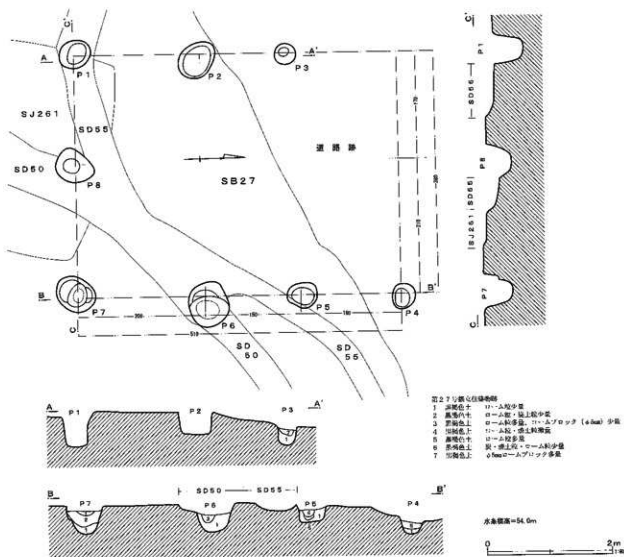
3間×2間の側柱建物跡で、西側に庇が付く。規模は桁行6.00m、梁行4.00mである。面積24.00㎡である。庇の出は1.80mである。主軸方向はN-5°-Wである。柱間間隔は桁行2.00mで等間隔、梁行は西から2.10m、1.90mである。

柱穴の形態は、不整形円形もしくは隅丸長方形である。規模は長軸40~58cm、短軸38~52cmである。深さは35~50cmである。庇部分の柱穴は円形もしくは楕円形で、径は30~40cm、深さは27~50cmである。遺物は出土していない。

時期は、同様に庇を持つ第24号掘立柱建物跡と同じような時期と考えるなら、9世紀以降と考えられ



第295号 第26号掘立柱建物跡



第296図 第27号掘立柱建物跡

る。

第27号掘立柱建物跡 (第296図)

調査区の西側、GG・HH-43・44グリッドに位置する。第261号住居跡、第50・55号溝跡、道路跡と重複する。道路跡、第50号溝跡より古い。また、第55号溝跡よりも古いと思われる。第261号住居跡との新旧関係は不明である。

3間×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。平面形や規模は第7号掘立柱建物跡に類似する。北側は道路跡によって柱穴が2基消失し、2基は上部が削られている。規模は桁行5.10m、梁行3.80m、面積19.38㎡である。主軸方向はN-3°-

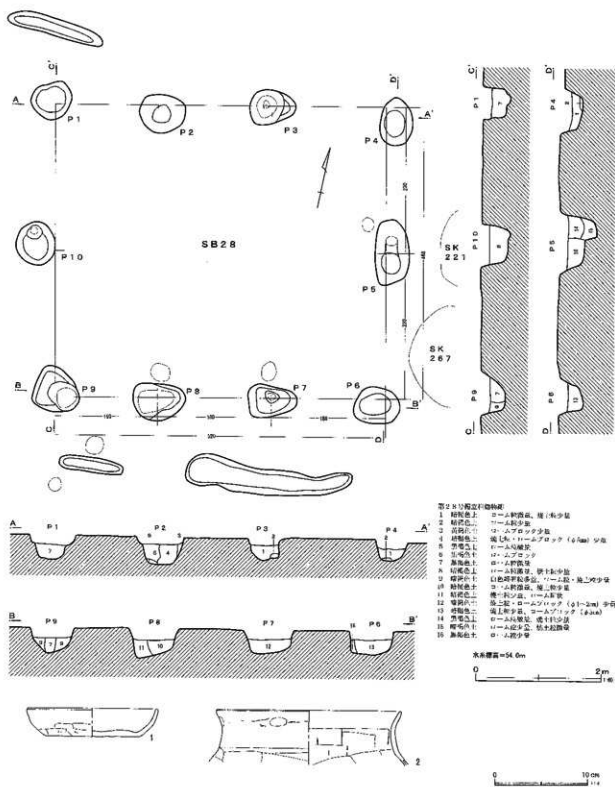
Wで、僅かに西に振れている。柱間間隔は桁行が北から1.60×1.50×2.00mで、梁行は西から1.70×2.10mである。

柱穴の形態は、不整楕円形である。規模は長軸48~70cm、短軸40~60cmである。深さは、上面が失われている柱穴が多く28~55cmとばらつきがあるが、底面の標高差は最大で20cmである。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆土は明らかに柱痕と認められるものはなく、抜き取られた可能性が高い。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第28号掘立柱建物跡 (第297図)

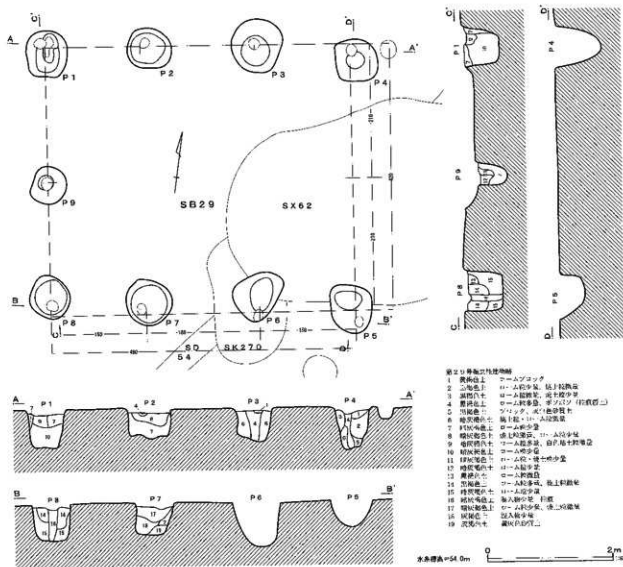
調査区の西側、HH-43・44、II-44グリッド



第297図 第28号掘立柱建物跡・出土遺物

第159表 第28号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(13.7)	3.0	3.0	A D E G	普通	橙	25	P-4
2	土師器 甗	(19.4)	(5.7)	-	A B D E G I I	普通	仁赤い橙	25	P-1



第298図 第29号掘立柱建物跡

に位置する。重複する遺構はない。南側3mに方向をほぼ同じくして第29号掘立柱建物跡がある。

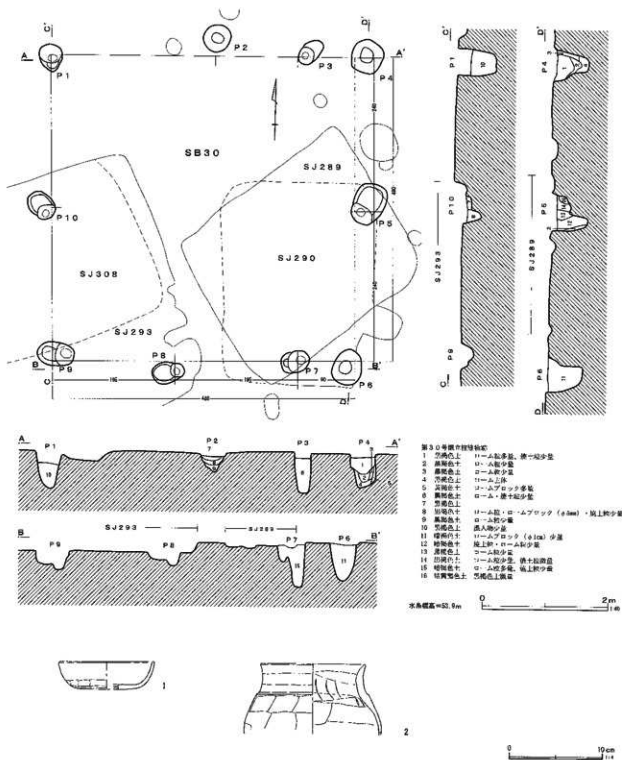
すぐ東側には第221・267号土壌が本建物跡に並ぶようにあるが、有機的な関係があるかどうかはわからない。

3間×2間の東西棟の掘立柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.20m、梁行4.60m、面積23.92㎡である。主軸方向はN-79°-Eである。柱間間隔は桁行が西から1.70m、1.80m、1.80m、梁行は2.30mの等間隔と推定される。

柱穴の形態は、かなり崩れたものもあるが隅丸長方形を意識していると思われる。規模は長軸62～

103cm、短軸50～67cmである。深さは31～58cmである。掘り方の底面は、当りの見られるものもあるが、大半は平坦である。覆土はP8の7層が柱痕かと思われるが、他は明瞭なものではなく抜き取られた可能性が高い。

桁行きの外側にある溝状のものは、雨落ち溝の可能性が考えられる。南側のものは途中切れているが4.70mにわたっている。幅は24～50cmで、深さは幅の広い所で14cmであるが、狭いほうは4cmである。柱穴との距離は80～90cmである。北側は、西側の梁行より約80cm西に飛び出るが、梁行との距離は90cmである。長さは1.6mである。



第299図 第30号掘立柱建物跡・出土遺物

第160表 第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(9.9)	2.9	(7.6)	ADEGH	普通	橙	40	P-8
2	土師器 甕	11.2	(7.3)	-	ABDE	普通	橙	40	S J 293

遺物はP4から土師器環、P1から土師器甕の破片が出土している。

時期は9世紀前半頃と考えられる。

第29号掘立柱建物跡(第298図)

調査区の西側、I I-43・44、J J-44グリッドに位置する。第54号溝跡、第270号土塼、粘土探掘坑(SX62)と重複し、本遺構が最も新しい。北側3mに方向をほぼ同じくして第28号掘立柱建物跡がある。

3間×2間の側柱建物跡である。梁行東側の間の柱穴は本来存在したものであるが、粘土探掘坑の覆土にまぎれて見落とした可能性が高い。平面形は長方形である。規模は桁行4.80m、梁行4.20m、面積20.16㎡である。主軸方向はN-81°-Eである。柱間間隔は桁行が1.50m、1.80m、1.50mで中央が広く、梁行は2.10mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは隅丸長方形である。規模は長軸58~85cm、短軸56~80cmである。深さは42~70cmと幅がある。掘り方の底面は、P1以外はいずれも平坦である。覆土は4・16層が柱底で他は掘り方土である。検出時には、平面で柱痕が確認できたことから柱は抜き取られていないと考えられる。

遺物は出土せず、時期は不明である。

第30号掘立柱建物跡(第299図)

調査区の西側、E E-43グリッドに位置する。第289・290・293・308号住居跡と重複する。第289・293号住居跡より新しく、第308号住居跡よりも新しいと思われる。第290号住居跡との新旧関係は不明である。南側7.5mには第31号掘立柱建物跡が、軸を同じくし東辺と、本建物跡の西辺が直線上に乗る位置にある。

3間×2間の建物跡である。平面形は正方形である。一見すると倉庫風の建物に見えるが、北辺と南辺の東側の柱間にそれぞれ小ピットが入り、変則的な柱穴配置となっている。規模は桁行4.80m、梁行

4.80m、面積23.04㎡である。主軸方向はN-0°である。柱間間隔は北辺が西から2.60m、1.30m、0.90m、南辺は同じく1.95m、1.95m、0.90mで東西辺は2.40mの等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは隅丸長方形である。規模は長軸42~68cm、短軸28~50cmである。覆土の状況から柱は全て抜き取られたものと考えられる。

遺物は土師器の環・甕が出土している。

時期は8~9世紀と考えられる。

第31号掘立柱建物跡(第300図)

調査区の西側、F F-42・43グリッドに位置する。第287・288号住居跡と重複する。第288号住居跡より新しく、第287号住居跡との新旧関係は不明である。北側7.5mには第30号掘立柱建物跡が、軸を同じくし西辺と、本建物跡の東辺が直線上に乗る位置にある。西側3mには、軸方向は違うが小型の第32号掘立柱建物跡がある。

2間×2間の側柱建物跡である。規模は桁行4.40m、梁行4.20m、面積18.48㎡である。主軸方向はN-90°-Eである。柱間間隔は桁行が2.20mで等間隔、梁行は2.10mで等間隔である。桁行き南側の左の柱間には、小ピットが2基入る。入り口を想定させるような配置である。

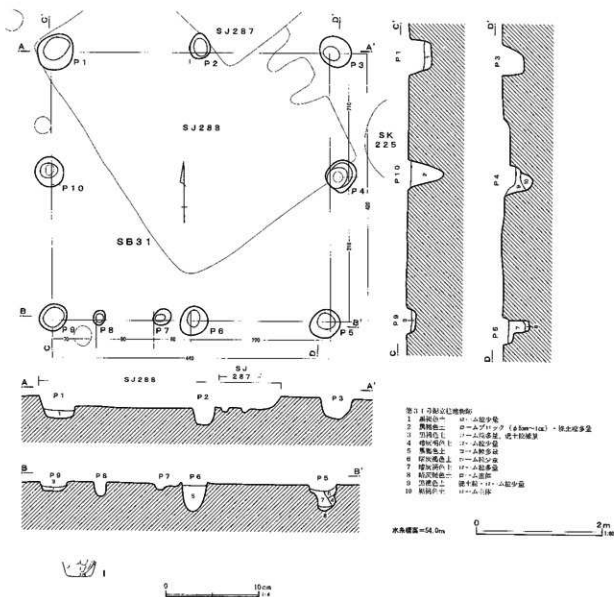
柱穴の形態は不整円形ないしは隅丸長方形である。規模は長軸40~62cm、短軸34~56cmで、深さは16~56cmと幅がある。P7・P8は直径20cm台で、深さはそれぞれ11cm、22cmと浅い。

遺物は、P4から土師器のミニチュア土器が出土した。

時期は不明だが、7世紀後半から末頃と考えられる第288号住居跡より新しいことから、8世紀以降としておきたい。

第32号掘立柱建物跡(第301図)

調査区の西側、F F-42グリッドに位置する。重複する遺構はない。東側3mには、軸方向は違うが



第300図 第31号掘立柱建物跡・出土遺物

第161表 第31号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	透率(%)	備考・出土位置
1	土師器 ミニチュア	-	(1.6)	(2.5)	EG II	普通	にぶい橙	25	P-4

第31号掘立柱建物跡がある。

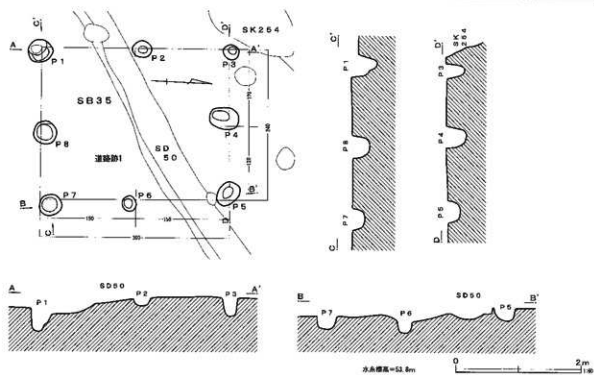
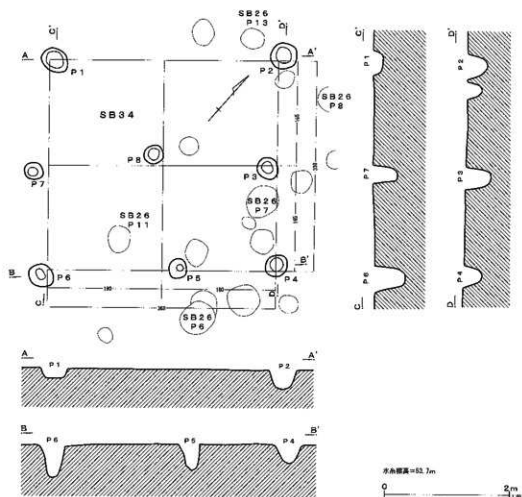
2間×2間の倉庫風の建物跡である。規模は桁行2.30m、梁行2.20m、面積5.06㎡である。面積的には検出された中で最も小さな建物である。主軸方向はN-83°-Eである。柱間間隔は桁行が2.30m、梁行2.20mである。

柱穴の形態は不整形円形もしくは隅丸方形を意識していると思われる。規模は長軸0.30~0.50m、短軸

30~50cmである。深さは16~43cmと幅があり、P5・P6が浅めである。掘り方はP3・P4を除き、底面が平坦である。

遺物は出土せず、時期は不明であるが周辺の掘立柱建物跡と同様の時期と考えるなら、8世紀以降となろう。

第33号掘立柱建物跡 (第301図)



第302图 第34·35号掘立柱建物跡

調査区の西側、E E-42グリッドに位置する。第281・295号住居跡と重複する。第281号住居跡より古いと考えられ、第295号住居跡との新旧関係は不明である。付近には東に第30号掘立柱建物跡、南には第31・32号掘立柱建物跡がある。

2間×2間の倉庫風の建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.60m、梁行3.60m、面積21.96㎡である。主軸方向はN-62°-Wである。柱間隔は1.80m等間隔と考えられる。

柱穴の形態は円形もしくは隅丸方形である。規模は長軸0.30~0.64m、短軸28~52cmで、P 8以外は30~40cm台である。深さは17~63cmでばらつきがある。掘り方は当りのあるものと、底面が平坦なものがある。

遺物は出土していない。時期は不明だが、第281号住居跡より古いと考えられることから8世紀前半以前ということになる。

第34号掘立柱建物跡 (第302図)

調査区の中央、B B-50グリッドに位置する。第26号掘立柱建物跡と重複する。直接重複する柱穴がないため新旧関係は不明である。

2間×2間で、第22号掘立柱建物跡と同じく総柱建物と考えられる。平面形はやや長方形となる。規模は桁行3.60m、梁行3.30m、面積8.28㎡である。主軸方向はN-51°-Eである。柱間隔は桁行1.80m等間隔と考えられ、梁行は1.65mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸30~44cm、短軸28~40cmである。深さは17~51cmで、P 1が浅くP 6が深い他は30cm台で揃っている。掘り方は、いずれも底面が平坦である。

遺物は出土せず、時期は不明であるが、同じ総柱建物である第22号掘立柱建物跡と同時期と考えるなら8世紀と考えられ、重複する第26号掘立柱建物跡の年代が9世紀以降であるのと矛盾しない。

第35号掘立柱建物跡 (第302図)

調査区の中央、E E-46グリッドに位置する。第50号溝跡、第1号道路跡と重複する。道路跡より古い、第50号溝跡とは重複する柱穴がないため新旧関係は不明である。

2間×2間の建物跡である。平面形はやや長方形になる。規模は桁行3.00m、梁行2.40mで、面積は6.48㎡と狭く、第32号掘立柱建物跡に次いで小規模な建物である。主軸方向はN-4°-Wで、僅かに西に振れている。柱間隔は桁行1.50m、梁行は1.20mで等間隔である。

柱穴の形態は円形ないし楕円形である。規模は長軸22~46cm、短軸22~36cmの範囲で、概ね径30cm台である。深さは16~38cmで、全体的に浅いが、南側の柱穴は道路跡に上面を削平されているため本来の深さを表していない。掘り方は、底面が平坦である。

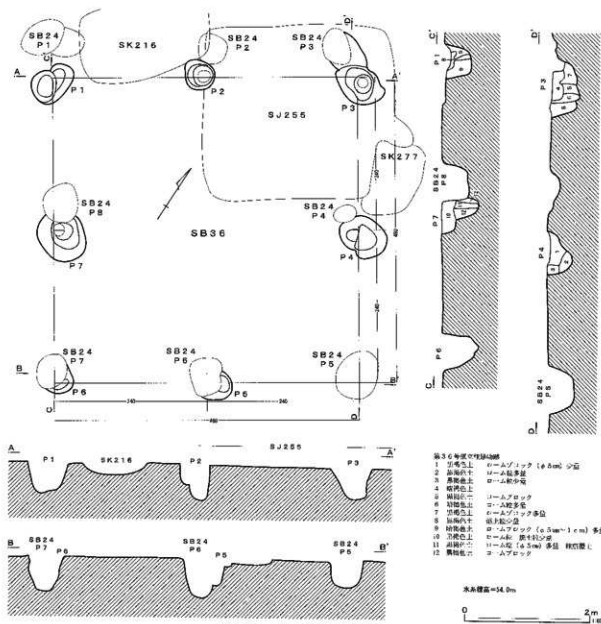
遺物は出土せず、時期は不明である。

第36号掘立柱建物跡 (第303図)

調査区の南側、H H-47、I I-46・47グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する部分の最も西にあたる。北東に軸をほぼ同じくして第23号掘立柱建物跡があり、南にはピットが円形に並ぶ環状ピット列(S X 44)がある。第255号住居跡、第24号掘立柱建物跡、第216号土壇と重複する。第24号掘立柱建物跡より古い。第255号住居跡、第216号土壇との新旧関係は不明である。第24号掘立柱建物跡とは、規模や建物方向が同じであり、一部の柱穴が重なることから、代替えたものと考えられ、本建物跡は建替え前の遺構と見られる。

2間×2間の建物跡で、第24号掘立柱建物跡には東に庇が付くが、本建物跡にはそれがなく、一見すると倉庫風の建物に見える。平面形は正方形である。規模は桁行4.80m、梁行4.80m、面積23.04㎡である。主軸方向はN-35°-Wである。柱間隔は全て2.40mで等間隔である。

柱穴の形態は、第24号掘立柱建物跡と重複して形



を残さないものが多いが、不整形形とでも言うべきであろう。規模は計測可能なもので長軸38~74cm、短軸27~67cmの範囲である。深さは38~55cmと比較的一定している。掘り方は、底面が平坦である。

遺物は出土していない。時期は、第24号掘立柱建物跡の年代とあまり変わらないと思われ、9世紀以降と考えられる。

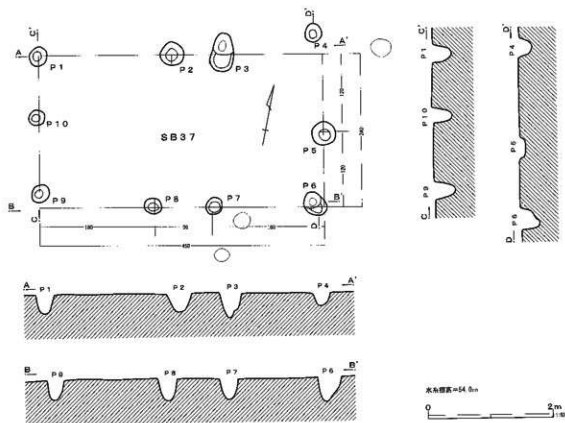
第37号掘立柱建物跡 (第304区)

調査区の南側、GG・HH-44グリッドに位置する。重複する遺構はない。西側4mに第27号掘立柱

建物跡がある。調査時には、建物跡として認識していなかったものであるが、柱筋がほぼ通ることから整理の段階で掘立柱建物跡として推定した。

3間×2間の東西棟の側柱建物跡である。規模は桁行4.50m、梁行2.40m、面積10.80㎡である。主軸方向はN-78°-Eである。柱間隔は、桁行の中央の2基が寄っており、南側では西から1.80m、0.90m、1.80mとなっている。梁行は1.20mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸26~60cm、短軸24~38cmの範囲で、P3以外は概ね径20~30cm



第304図 第37号掘立柱建物跡

である。深さは21～58cmで、ほとんどが30～40cmまでである。掘り方は、底面が平坦である。覆土の状

況は確認できなかった。

遺物は出せず、時期は不明である。

3. 井戸跡

宮西遺跡で検出された井戸跡は30基である。平面形は円形で、上面が石組みされていた可能性のあるものが1基あるが、他は全て素掘りである。

形態は以下のように分類することが可能である。

- 1類 直径1m未満で筒状を呈し、壁は垂直である。
- 2類 直径1m以上で底径が小さく、壁は垂直でない。
- 3類 漏斗状を呈し、深さが1.5m程度のもの。
- 4類 上部が漏斗状の掘り込みで、下部は筒状を呈するもの。深さは2mを目安に浅いものと深いものに細分可能である。

時期を推定できたのは全体の約2/3であるが、1類は6世紀以前、2類は時期を推定できないものが多く、1基だけ中世と推定される。3類は9世紀～10世紀、4類は9世紀～中世と推定される。

第1号井戸跡（第305図）

調査区の東側、Z-57グリッドに位置する。重複する遺構はない。

素掘りの井戸で、平面形は円形である。規模は直径1.44m、底径0.74m、深さ1.24mである。上部は漏斗状に掘り込まれ、確認面から0.40mで筒状となる。筒部の径は0.80mである。底面は中央部が10cmほど窪んでいる。覆土は、自然堆積である。

遺物は出土せず、時期は不明であるが、分析はしていないものの覆土上層に浅間B火山灰と思われる粒子を多量に含んでいることが、平安時代以前と考えられる。3類に分類される。

第2号井戸跡（第305図）

調査区の東側、Y-57グリッドに位置する。第3号溝跡と重複し、本井戸跡が新しいと考えられる。

平面形は円形で、規模は直径1.12m、底径0.98m、深さ1.04mである。確認面からは、ほぼ筒状に掘り込まれている。2類に分類される。

遺物は出土しなかった。

第3号井戸跡（第305図）

調査区の東側、D D-58グリッドに位置する。重複する遺構はない。東側半分は調査区外に掛かる。

平面形は円形と思われる。規模は直径1.43m、底径0.64mで、深さは1.70mである。筒状に掘り込まれている。2類に分類される。

遺物は出土しなかった。

第4号井戸跡（第305図）

調査区の中央、Z-48グリッドに位置する。重複する遺構はないが、南側は調査区外に掛かり、北東方向約6mには第3号掘立柱建物跡がある。

平面形は円形と思われ、規模は直径1.98mである。深さは約1.60mまで掘り下げたが崩落の危険があり底面は検出できなかった。上部は漏斗状に掘り込まれている。検出面から約60cmで筒状になるが、筒部の直径は0.8mである。覆土は、ロームブロックを多く含み、しまりに欠けることから埋め戻された可能性がある。4類と推定される。

遺物は殆ど出土せず、図示できたのは須恵器甕の破片1点である。時期は9世紀以降と考えておきたい。

第5号井戸跡（第305図）

調査区の中央、Z-51グリッドに位置する。第83号住居跡と重複し、本井戸跡が新しい。

平面形は円形で、第83号住居跡の大きさに合わせて掘り込んでいる。規模は直径2.89mと大型で、第21号井戸跡と並んで検出された井戸跡の中で最大級である。上面から漏斗状に掘り込まれ、確認面から約1mで、直径約1mの筒状となる。また、深さは2m以上あることが判明し、手掘りでは危険と判断し、重機によって半掘した。その結果、現場の略測で、検出面から約3.20mの深さがあり、底面は礫層に達していた。底径は約80cmである。土層は水分が多く含まれ下部からは湧水し、短時間で崩れたため

図面を作成することはできなかったが、底面近くは黒色のやや腐食質土であった。地山は約1.3mで黄灰色粘上となり、約2.5mで青灰色に変化していた。4類に分類される。

遺物は土師器環・甕、須恵器環・高台付塊・皿・長頸瓶・甕・鉢、灰釉皿、瓢箪などが出土している。これらは、崩落した覆土の中から拾い集めたため、出土層位は不明であるが、須恵器鉢に関しては底部からの出土であった。また、瓢箪は切断して半球状にし、縁の両側に小穴を開けて棒を通し、柄杓状の容器としたものと推定されたが、材質が脆く保存できなかった。須恵器鉢と同じく底部からの出土であった。

時期は9世紀後半から10世紀ごろと考えられる。

第6号井戸跡 (第305図)

調査区の北側、Q-58グリッドに位置する。北側に第120号住居跡が、南には第8号掘立柱建物跡がある。重複する遺構はない。

平面形は円形で、規模は直径1.50m、底径0.58mで、深さは0.72mと浅い。上面から漏斗状に掘り込まれ、底部が僅かに筒状になる。底面から5cmほど深い所に人頭大の石が6個纏まって検出された。3類に分類される。

遺物は、須恵器蓋、土師器環・甕の小破片と土錘が出土している。

時期は、10世紀である。

第7号井戸跡 (第306図)

調査区の北西側、W-46グリッドに位置する。

平面形はやや楕円形で、規模は長径1.18m、短径1.08mである。深さは、湧水したため約1mまでの調査にとどまった。検出面から0.5mまで漏斗状に掘り込まれ、筒状に移行する。下半部の径は0.58mである。覆土は、ロームブロックが多く含まれ、埋め戻されたものと考えられる。1mの深さに礫が投げ込まれたような状況で纏まって検出された。礫は、

円礫と片岩があり、一部には被熱しているものが見られた。4類に分類される。

遺物は、土器は出土しなかったが、礫石や面取りされた礫が出土している。

時期は不明である。

第8号井戸跡 (第306図)

調査区の北側、V-51グリッドに位置する。重複する遺構はないが、南側に殆ど上端を接して第9号井戸跡がある。

平面形は楕円形である。規模は、長径2.49m、短径2.08mで、底径0.68m、深さは1.06mである。径の大きさに対して、掘り込みは浅い。漏斗状に掘り込まれるが、東側に偏って傾斜が緩い。覆土は、自然堆積と考えられる。3類に分類される。

遺物は、須恵器環・甕、灰釉陶器皿、土師器甕などが破片で出土している。

時期は9-10世紀と思われる。

第9号井戸跡 (第306図)

調査区の北側、V-51グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形である。規模は長径2.52m、短径2.20m、深さ1.20mである。漏斗状に掘り込まれ、底面は中央が窪む。覆土は自然堆積と思われる。第6号井戸跡と同じく、底面近くから人頭大の礫が検出された。3類に分類される。

遺物は、須恵器環・高台付塊・甕、灰釉陶器塊が破片で出土している。

時期は第8号井戸跡と同じく9-10世紀と思われる。

第10号井戸跡 (第306図)

調査区の北側、V-50グリッドに位置する。

平面形は不整円形である。規模は直径1.90m、底径0.70m、深さ0.81mである。平面の大きさに比べ深さが浅い。漏斗状に掘り込まれるが、第8号井戸跡と同じく東側の傾斜が緩い。覆土は自然堆積と思

われる。地形は、井戸跡の北側が低く、低地状になり緩く傾斜している。その低地に向けて排水していたようで、深さ5～10cmの浅い溝状の落ち込みが扇形に延びている。おそらく、溝として掘り込んだものではなく、排水によって自然にできたものと思われる。3類に分類される。

遺物は、出土しなかった。

時期は不明であるが、近接する第8・9号井戸跡と形態的に共通することから、同じような年代と考えられる。

第11号井戸跡（第306図）

調査区の北側、V-50グリッドに位置する。東側に第8～10号井戸跡があり、本井戸跡を含めて4基の井戸跡が纏まって分布している。

平面形は不整形円形で、規模は長径1.46m、短径1.28m、底径0.55m、深さ0.80mである。平面規模は第8～10号井戸跡より一回り小さい。漏斗状に掘り込まれ、下半は筒状となる。3類に分類される。

遺物は、須恵器甕の破片が出上した。

時期は、第8～10号井戸跡と同じ時期のものと考えておきたい。

第12号井戸跡（第306図）

調査区の西側、AA-44グリッドに位置する。重複する遺構はないが、住居跡が密集する区域に位置する。

平面形は不整形円形で、規模は直径0.66mと小さい。短径0.55m、深さは約80cmまで掘り下げたがそれ以上は調査できなかった。上面がやや開き気味になるものの、下は直径47cmの筒状に掘り込まれている。覆上は暗褐色土で自然堆積のように見受けられた。1類に分類される。

遺物は、出土しなかった。

時期は不明である。

第13号井戸跡（第306図）

調査区の中央、AA-47グリッドに位置する。第156号住居跡と重複し、これより新しい。また南側上面を新しい土層によって埋されている。西側は調査区外に掛かり全体を調査することはできなかった。

平面形は円形と思われる。規模は直径1.9mほどと推定される。深さは、約1.7m掘り下げた段階で危険と判断し、調査を中止した。上面は僅かに漏斗状に掘り込まれ、筒状の形態に移行する。4類に分類される。

遺物は、出土しなかった。

時期は不明である。

第14号井戸跡（第307図）

調査区の西側、BB-44グリッドに位置する。第161号住居跡と重複するが、新旧関係は確認していない。

平面形はやや楕円形を呈する。規模は長径1.05m、短径0.97m、底径1.07m、深さ1.04mである。筒状に掘り込まれ西側はややオーバーハングしている。

遺物は、上器は出土しなかったが、底面から、長さ40cm、幅20cmほどの片岩が2枚重なり出上した。板破片である可能性は否定できないが、文字などは刻まれていなかった。2類に分類される。

時期は不明であるが、中世であることは間違いないであろう。

第15号井戸跡（第307図）

調査区の西側、Z-44グリッドに位置する。第46・48号住居跡と重複する。第48号住居跡より新しいと思われる。

平面形は楕円形である。規模は長径1.72m、短径1.50mである。深さは約0.9mまで掘り下げたが、それ以下は断念した。上面は漏斗状に掘り込んでおり、検出面から50cmで筒状になる。漏斗状の部分は第8号井戸跡と同じく東側の傾斜が緩いという特徴をもつ。4類と推定される。

遺物は、土師器破片が出上した。

時期は不明であるが、重複関係から5世紀以前である。

第16号井戸跡 (第307図)

C C-41グリッドに位置する。縄文時代の第203号住居跡と重複し、これより新しい。

平面形は楕円形で、規模は長径1.56m、深さ3.06mである。上面は僅かに漏斗状を呈し、径を減じながら筒状となる。最小径は0.46mでその直下は水袋状に膨らんで底部となる。水袋状の部分の直径は0.84mである。底面は平坦で、直径は約0.60mである。検出面から深さ50cmまで、拳大から人頭大の礫が密集して検出された。中央が径約50cm開いており、上面が石組みされていたものと考えられる。4類に分類される。

遺物は、須恵質の鉢が出土し、他に灰釉陶器皿や須恵器環、土師器環・甕などが出土している。

時期は、10世紀以降と考えておく。

第17号井戸跡 (第307図)

B B-44グリッドに位置する。第174・175号住居跡と重複し、これより新しい。

平面形は、上面は楕円形で規模は長径1.61m、短径1.26mである。漏斗状に掘り込まれ、最小径は深さ1.3mのところ0.44mを測る。その下はやや膨らみ、底径は0.56mである。深さは1.74mである。覆土は自然堆積と考えられる。4類に分類される。

遺物は、出土しなかった。

時期は不明であるが、第175号住居跡は9世紀と考えられることから、これ以降となる。

第18号井戸跡 (第307図)

C C-43グリッドに位置する。

平面形は円形である。規模は直径1.76m、底径0.70m、深さ1.81mである。上面は漏斗状に掘り込まれるが、中位以下は筒状で、中心は西側に寄っている。北東側の深さ70cmに地山を掘り残して小さい

段が見られた。井戸を掘る際に足場として残したものであろう。4類に分類される。

遺物は青磁連弁碗の口縁部破片が出土した。

時期は、13世紀後半頃と考えられる。

第19号井戸跡 (第308図)

C C-44グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

平面形は円形である。規模は直径1.12m、底径0.48m、深さは1.59mである。上面は漏斗状に掘り込まれ、覆土は自然堆積と考えられる。4類に分類される。

覆土中位から、人頭大の礫が数個検出されたが、土器類は出土しなかった。

時期は不明である。

第20号井戸跡 (第308図)

C C-45グリッドに位置する。第209・321号住居跡、第180・197・206・207号土壇と重複する。住居跡より新しく、土壇より古い。

平面形は円形で、直径1.84mを測る。深さは1.85mまで掘り下げたが、安全上の理由から完掘することが出来なかった。確認面から約0.6mまで漏斗状に掘り込まれ、以下は筒状になる。径は0.84mである。覆土はロームブロックを多量に含み、埋め戻しと判断される。4類と推定される。

遺物はごく少量の出土で、図示できたのは須恵器甕片1点である。

時期は古代であり、それ以上は不明である。

第21号井戸跡 (第308図)

K K-48グリッドに位置する。重複する遺構はないが、南東側は調査区外にかかる。

平面形は円形と推定される。直径2.84mで、深さは1.25mまで掘り下げたが、安全上の理由から完掘することが出来なかった。漏斗状に掘り込まれている。覆土は自然堆積である。4類と推定される。

遺物は、土師器環、須恵器甕などが出土した。第307図5は、片岩であるが縁が立ち上がるように加工されている。

時期は9世紀後半と考えられる。

第22号井戸跡（第308図）

I I-45グリッドに位置する。粘土採掘坑の底面で検出したが、土層断面の観察をしていないため遺構による新旧関係は不明である。ただし、粘土採掘坑が他の地点で検出されているものと同じく平安時代と考えるなら、遺物からは本井戸跡が新しいといえる。

平面形は円形で、筒状部分の直径は0.90m、底径0.40m、深さは3.69mである。4類に分類される。

遺物は、常滑産甕片、在地産片口鉢・かわらけの他、砥石や石製品が出土した。第308図11～15は、角閃石安山岩で中央部が削られ窪んでいる。大寄遺跡、菅原遺跡などで同様の遺物が出上している。

時期は13世紀後半から14世紀と考えられる。

第23号井戸跡（第308図）

C C-46グリッドに位置する。第321号住居跡と重複し、これより新しい。

平面形は楕円形である。規模は長径2.56m、短径2.28mで、深さは1.2mまで掘り下げたが安全上の理由から完掘することが出来なかった。漏斗状に掘り込まれている。4類と推定される。

遺物は、片口鉢が出土した。第308図18は須恵甕である。

時期は、13世紀頃と思われる。

第24号井戸跡（第309図）

G G-43グリッドに位置する。第300号住居跡、第51号溝跡と重複するが、新旧関係は確認していない。

平面形は歪んだ円形である。規模は直径1.70m、底径1.00m、深さ1.47mである。漏斗状に掘り込ま

れているが、底面の径が大きく、浅いため他のものとはやや様相を異にする。3類に分類される。

遺物は、上層から土師器環などが少量出土した。時期は9世紀前半である。

第25号井戸跡（第309図）

B B-45グリッドに位置する。第160・161号住居跡と重複し、第160号住居跡より古く、第161号住居跡より新しい。

平面形は円形である。規模は直径1.27m、底径0.52m、深さ0.92mである。掘り方は、筒状の部分から底部にかけて狭まっている。覆土は自然堆積である。2類に分類される。

遺物は、出土しなかった。

第26号井戸跡（第309図）

V-57グリッドに位置する。第10号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認していない。

平面形はやや長方形に近い楕円形である。規模は長径1.22m、短径1.16m、底径0.54m、深さ0.96mである。掘り込みは、検出面から約0.6mで段を持つ。3類に分類される。

遺物は出土しなかった。

第27号井戸跡（第309図）

L L-45グリッドに位置する。重複する遺構はないが、倒木痕がかかっている。

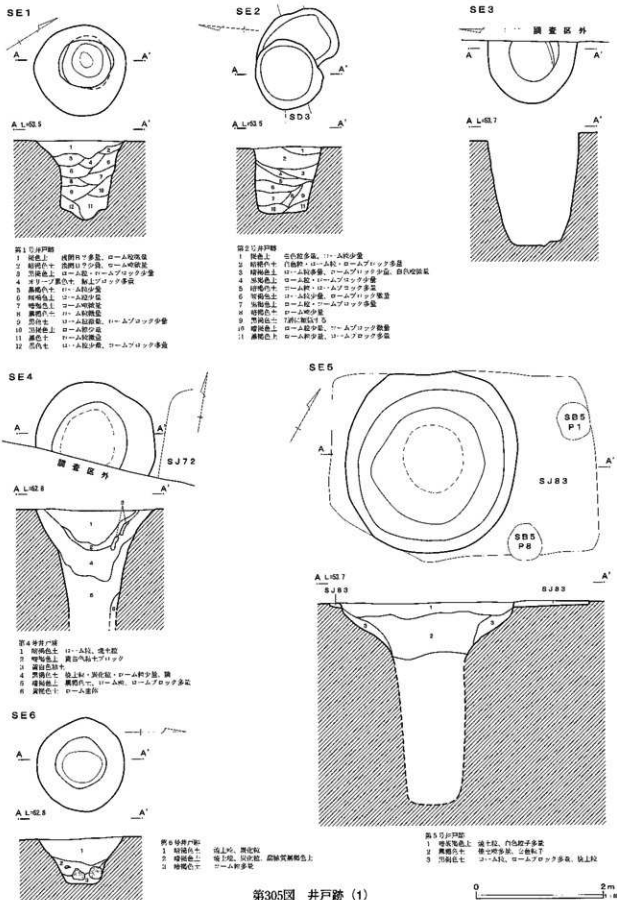
平面形は円形である。規模は直径1.70m、底径0.44m、深さ0.84mである。漏斗状に掘り込まれている。3類に分類される。

遺物は、出土していない。

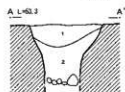
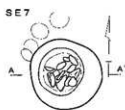
第28号井戸跡（第309図）

W-49グリッドに位置する。第193号住居跡と重複し、これより新しい。

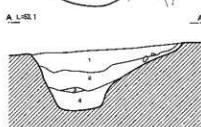
平面形は楕円形である。規模は長径1.37m、短径1.12m、底径0.63m、深さ0.93mである。掘り方は



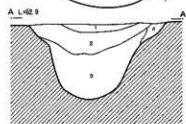
第305図 井戸跡 (1)



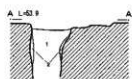
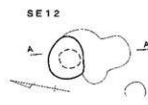
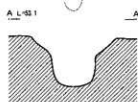
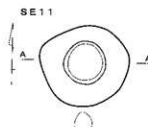
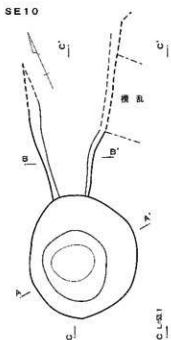
SE7の形と層
1 焼成土上 灰土層、ロームブロック、中厚成土
2 焼成土上 ロームブロック多量



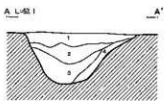
SE8の形と層
1 焼成土上 灰土層多量
2 焼成土上 焼成土、硬土層
3 灰成土上 灰成土、白色焼土ブロック
4 土間層内土、砂質、粘り強い



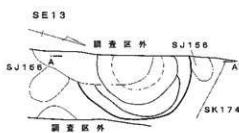
SE9の形と層
1 焼成土上 灰土層、ブロック
2 焼成土上 ローム多量
3 焼成土上 硬土層、土間層、土間層
4 焼成土上 硬土層、焼成土層



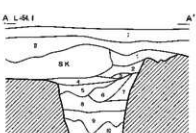
SE12の形と層
1 焼成土上 ローム多量、ロームブロック
2 焼成土上 ロームブロック多量



SE13の形と層
1 焼成土上 灰土層、白色焼土多量
2 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
3 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
4 焼成土上 灰土層多量、ローム多量、ロームブロック



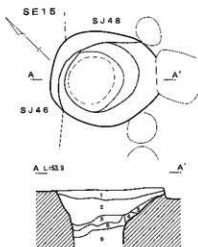
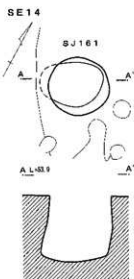
SE13の形と層
1 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
2 焼成土上 ローム多量、灰土層多量
3 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
4 焼成土上 灰土層多量、ローム多量、ロームブロック



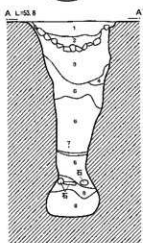
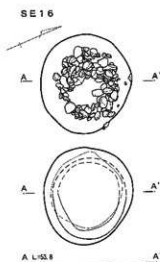
SE14の形と層
1 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
2 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
3 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
4 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
5 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
6 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
7 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
8 焼成土上 灰土層多量、ローム多量
9 焼成土上 灰土層多量、ローム多量

第306図 井戸跡 (2)

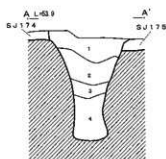
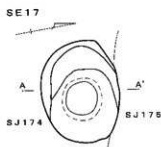




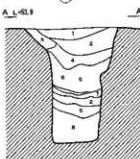
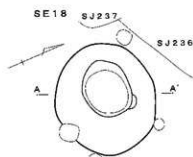
- 第15号井戸群
- | | |
|-------|---------------|
| 1 埴輪土 | 縄文期、II-A段、竪穴群 |
| 2 埴輪土 | II-A段 |
| 3 埴輪土 | II-A段 |
| 4 埴輪土 | II-A段 |
| 5 埴輪土 | II-A段 |
| 6 埴輪土 | II-A段 |



- 第16号井戸群
- | | |
|-------|-------|
| 1 埴輪土 | II-A段 |
| 2 埴輪土 | II-A段 |
| 3 埴輪土 | II-A段 |
| 4 埴輪土 | II-A段 |
| 5 埴輪土 | II-A段 |
| 6 埴輪土 | II-A段 |
| 7 埴輪土 | II-A段 |
| 8 埴輪土 | II-A段 |
| 9 埴輪土 | II-A段 |



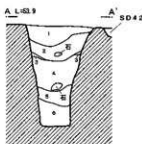
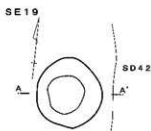
- 第17号井戸群
- | | |
|-------|-----------------|
| 1 埴輪土 | 白土層、II-A段、II-B段 |
| 2 埴輪土 | II-A段 |
| 3 埴輪土 | II-A段 |
| 4 埴輪土 | II-A段 |



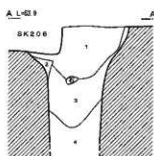
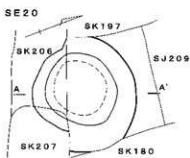
- 第18号井戸群
- | | |
|-------|-------------|
| 1 埴輪土 | II-A段、II-B段 |
| 2 埴輪土 | II-A段 |
| 3 埴輪土 | II-A段 |
| 4 埴輪土 | II-A段 |
| 5 埴輪土 | II-A段 |
| 6 埴輪土 | II-A段 |
| 7 埴輪土 | II-A段 |
| 8 埴輪土 | II-A段 |

0 2m

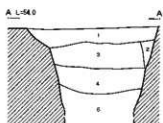
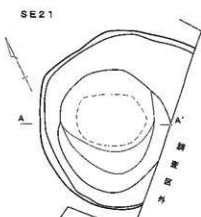
第307図 井戸跡 (3)



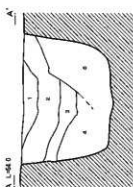
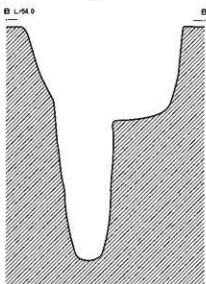
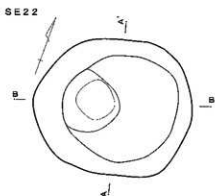
- 第19号井跡
- 1 埴埴土 コーム状、ロームブロック多量、焼土砂少量、炭内胎少数量
 - 2 埴埴内土 コーム状、ロームブロック少量
 - 3 埴埴土 コーム状、ロームブロック少量
 - 4 埴埴土 コーム状多量、炭、炭化灰
 - 5 埴埴土 コームブロック多量
 - 6 埴埴土 コームブロック多量



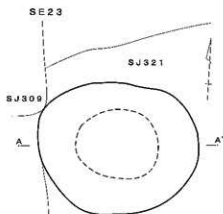
- 第20号井跡
- 1 埴埴土 コームブロック、灰白色粘結土ブロック多量
 - 2 埴埴内土 厚層状
 - 3 埴埴土 コーム状少量
 - 4 埴埴土 コーム状多量の埴埴土層との互層



- 第21号井跡
- 1 埴埴内土 埴埴土、炭化灰少量
 - 2 埴埴土 埴埴土ブロック多量
 - 3 埴埴土 埴埴土、炭化灰少量
 - 4 埴埴土 埴埴土、炭化灰少量
 - 5 埴埴土 埴埴土ブロック



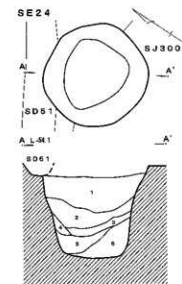
- 第22号井跡
- 1 埴埴土 炭化灰少量ブロック多量
 - 2 埴埴土 炭化灰少量ブロック少量
 - 3 埴埴土 炭化灰少量
 - 4 埴埴土 炭化灰少量
 - 5 埴埴土 炭化灰少量



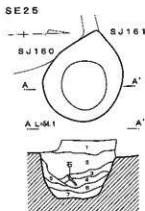
- 第23号井跡
- 1 埴埴内土 埴埴土、炭化灰
 - 2 埴埴土 埴埴土、炭化灰
 - 3 埴埴土 炭化灰、埴埴土、炭化灰
 - 4 埴埴内土 埴埴土
 - 5 埴埴土 埴埴土多量
 - 6 埴埴土 埴埴土、炭化灰

第308図 井戸跡 (4)

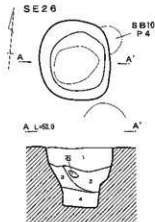




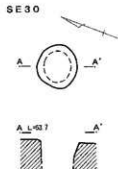
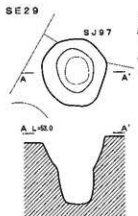
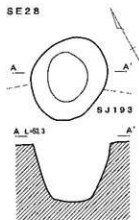
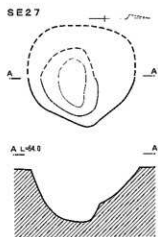
- 第24号井戸跡
- 1 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 2 埴土 埴土少量
 - 3 埴土 埴土、2層より多量
 - 4 埴土 埴土、2層より多量
 - 5 埴土 埴土
 - 6 埴土 埴土



- 第25号井戸跡
- 1 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 2 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 3 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 4 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 5 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 6 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 7 埴土 埴土少量、土砂片少量



- 第26号井戸跡
- 1 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 2 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 3 埴土 埴土少量、土砂片少量
 - 4 埴土 埴土少量、土砂片少量



第309図 井戸跡 (5)

0 2 m

底部にかけて狹まっている。3類に分類される。

遺物は、灰釉陶器長頸瓶、須恵器壺などが出土している。

時期は9世紀後半と考えられる。

第29号井戸跡 (第309図)

V・W-56グリッドに位置する。第97・129・131号住居跡と重複し、これらより新しい。

平面形は円形である。規模は直径1.07m、底径0.37m、深さ1.05mである。漏斗状に掘り込まれ、下部は筒状になる。3類に分類される。

遺物は、灰釉陶器皿、須恵器壺等が少量出土した。

時期は9世紀後半と考えられる。

第30号井戸跡 (第309図)

BB-47グリッドに位置する。第153・216号住居跡と重複し、これらより古い。

平面形は円形である。規模は直径0.67m、深さは0.84mまで掘り下げたが安全上の理由から完掘することが出来なかった。筒状に掘り込まれている。1類に分類される。

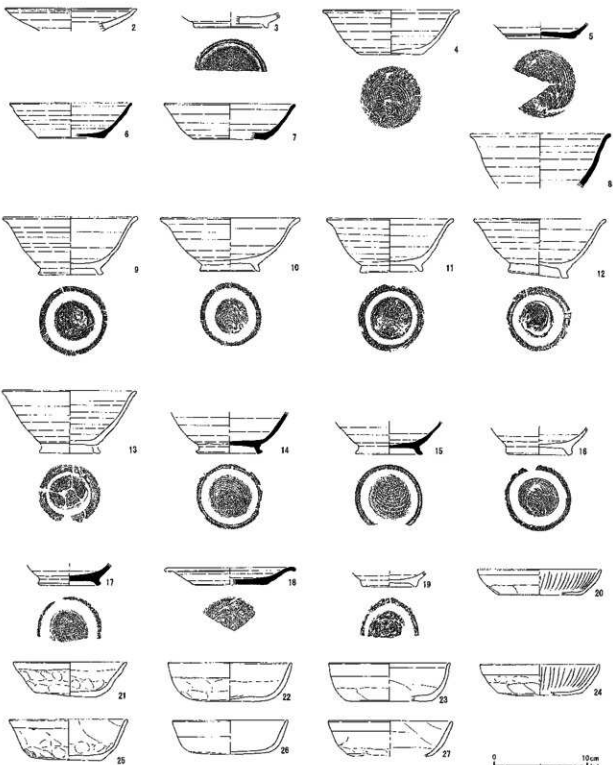
遺物は出土しなかった。

時期は、第153号住居跡が6世紀前半と考えられることからそれ以前となる。

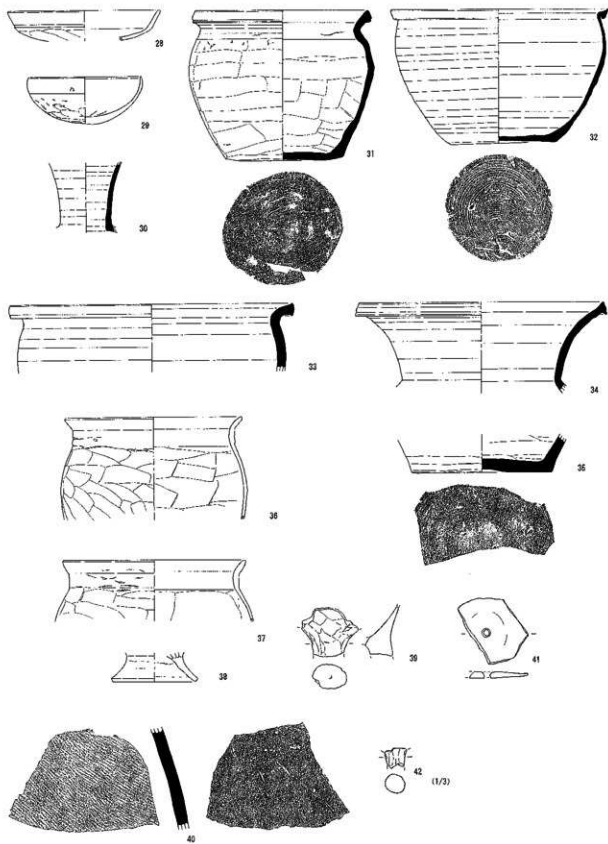
SE 4



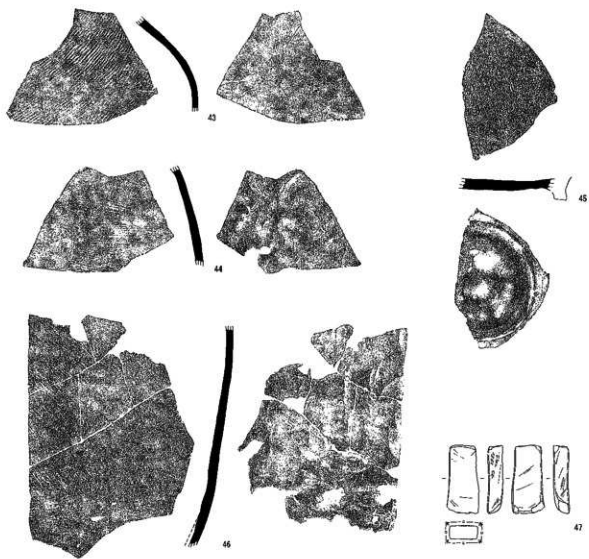
SE 5



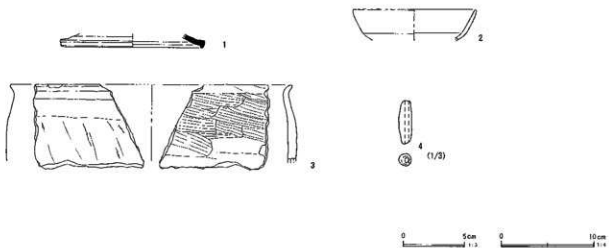
第310図 井戸跡出土遺物 (1)



第311区 井戸跡出土遺物 (2)

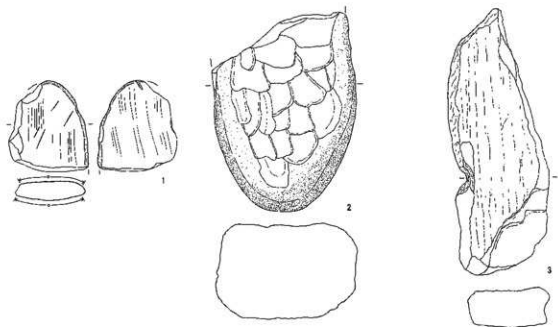


SE 6

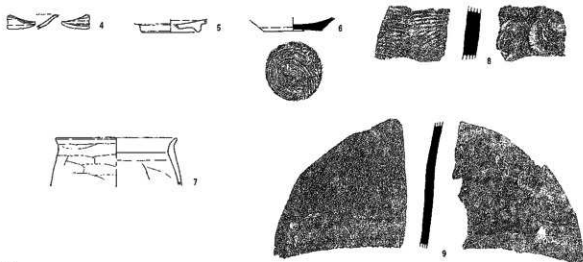


第312図 井戸跡出土遺物 (3)

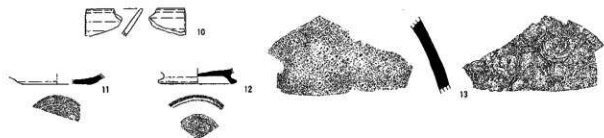
SE 7



SE 8



SE 9



第313図 井戸跡出土遺物 (4)

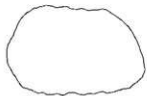
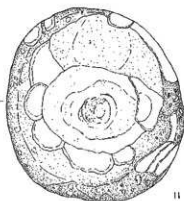
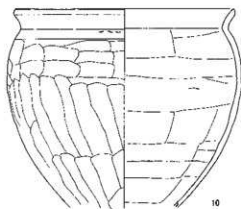
SE 11



SE 15



SE 16



0 10cm

第314図 井戸跡出土遺物 (5)

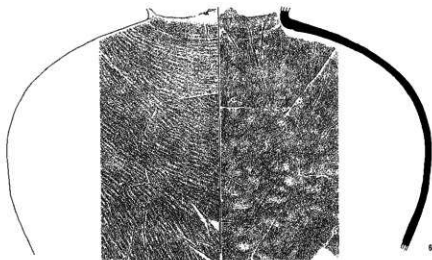
SE 18



SE 20



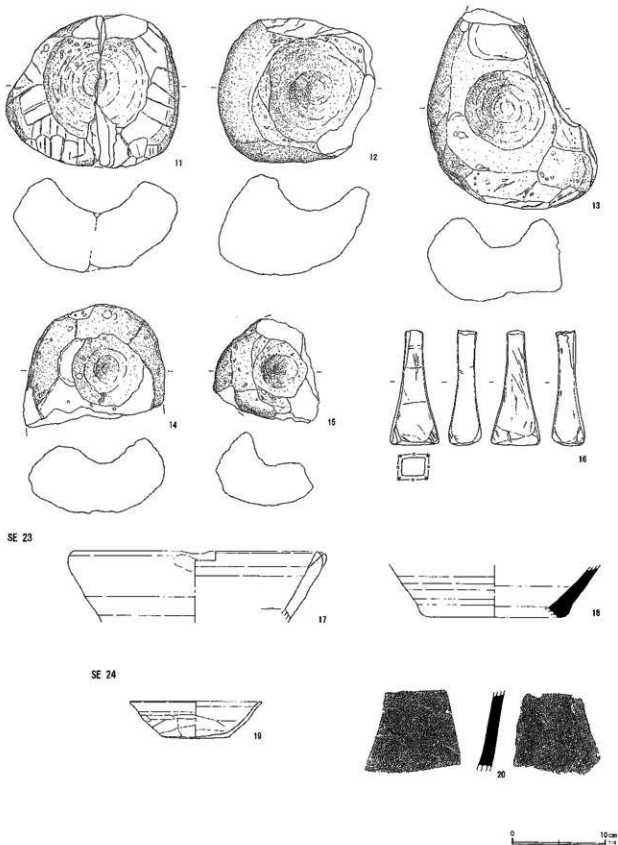
SE 21



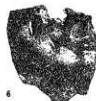
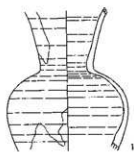
SE 22



第315区 井戸跡出土遺物 (6)



第316図 井戸跡出土遺物 (7)



0 10 cm

第317図 井戸跡出土遺物(8)

第162表 第4号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須臾器 甕	-	-	-	B E H	良好	黄灰	-	

第163表 第5号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
2	灰釉 皿	(14.0)	(2.4)	-	E	良好	灰白	20	
3	灰釉 皿	-	(1.6)	8.0	E	良好	灰白	40	
4	須臾器 埴	(14.6)	4.7	6.5	A B D H J	良好	にぶい褐色	60	
5	須臾器 坏	-	(1.6)	7.0	E H J	良好	黄灰	80	
6	須臾器 坏	(13.0)	3.7	(7.0)	B H J	良好	灰	15	
7	須臾器 坏	(14.0)	3.7	(7.0)	B E H J	良好	灰	15	
8	須臾器 埴	(15.0)	(5.7)	-	B E J	良好	灰	15	
9	須臾器 高台付埴	(14.4)	6.1	6.9	A H	普通	黄灰	60	
10	須臾器 高台付埴	(14.8)	5.6	6.5	A E H J	良好	黄灰	60	
11	須臾器 高台付埴	13.5	5.7	6.9	A E H J	良好	灰	100	
12	須臾器 高台付埴	(14.0)	6.2	6.4	A E H J	普通	灰黄褐色	45	歪み大きい
13	須臾器 高台付埴	(14.2)	(5.8)	(6.2)	B E J	良好	灰	70	
14	須臾器 高台付埴	-	(4.4)	7.0	B H J	良好	灰	60	
15	須臾器 高台付埴	-	(3.5)	7.2	B E J	良好	灰	80	
16	須臾器 高台付埴	-	(3.0)	7.0	B J	良好	灰	90	
17	須臾器 高台付埴	-	(2.4)	6.7	B H J	良好	黄灰	60	
18	須臾器 皿	(14.0)	1.8	(7.8)	E H	良好	灰	20	
19	ロクロ	-	(1.7)	6.0	A B E H	不良	橙	55	内外面摩耗著しい
20	土師器 坏	(13.0)	2.8	(9.0)	E H	普通	灰黄褐色	15	暗文
21	土師器 坏	12.0	3.7	6.5	A B D E H	普通	にぶい橙	100	
22	土師器 坏	(13.2)	5.1	(8.6)	A B D E H	普通	橙	50	やや歪みあり
23	土師器 坏	(13.0)	4.1	(9.0)	A B E G H	普通	にぶい橙	15	やや摩耗する
24	土師器 坏	(12.6)	3.3	(9.0)	B D E H	普通	にぶい橙	20	暗文
25	土師器 坏	12.5	4.3	7.4	A B D E H	普通	にぶい橙	100	
26	土師器 坏	(12.2)	3.6	(8.2)	A B E G H	不良	橙	30	内面摩耗著しい

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
27	土師器 坏	(13.0)	3.8	-	ABDE	普通	にぶい赤褐	15	
28	土師器 坏	(16.0)	(3.2)	-	KH	普通	にぶい橙	15	
29	土師器 坏	12.0	5.0	-	AEGH	良好	橙	80	
30	須恵器 長頸瓶	-	(7.3)	-	K	良好	暗灰黄	20	
31	須恵器 钵	18.3	15.9	12.5	BEHJ	良好	黄灰	95	
32	須恵器 钵	23.1	14.2	11.5	EHJ	良好	灰	90	
33	須恵器 钵	(30.0)	(7.1)	-	EJ	良好	灰	15	
34	須恵器 甗	(26.0)	(9.5)	-	BKH	良好	灰	15	
35	須恵器 甗	-	(4.0)	(15.0)	EHJ	良好	暗灰	40	
36	土師器 甗	(19.0)	(10.7)	-	ABDEH	普通	にぶい橙	20	
37	土師器 甗	(19.6)	(6.5)	-	ABDEH	普通	橙	25	
38	土師器 台付甗	-	(3.0)	8.6	AEGH	普通	にぶい褐	70	SX66 やや歪みあり
39	土師器 脚付土器	長さ(5.2)cm	脚部径3.0cm	-	ABDEH	普通	にぶい褐	-	脚部中央 串状の物を突き刺した痕跡あり
40	須恵器 甗	-	-	-	B'FJ	良好	灰	-	
41	土製紡錘車	長さ(5.2)cm	厚さ0.5cm	-	AEG	不良	橙	-	坏の転用 孔径0.3~0.6cm
42	不明土製品	長さ(1.6)cm	断面径1.6cm	-	EH	普通	橙	-	
43	須恵器 甗	-	-	-	BEFJ	良好	褐灰	-	
44	須恵器 甗	-	-	-	BEHJ	良好	暗灰黄	-	
45	須恵器 短頸甗	-	-	-	EF	良好	灰	-	
46	須恵器 甗	-	-	-	BEHJ	良好	灰黄	-	
47	磁石	長さ7.2cm	幅3.4cm	厚さ1.5cm	重さ61.8g	-	-	-	

第164表 第6号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 蓋	(15.0)	(1.4)	-	EH	良好	黄灰	5	
2	土師器 坏	(13.0)	(3.3)	-	DEH	不良	橙	20	摩耗著しい
3	土師器 甗	(30.0)	(8.0)	-	BEHJ	不良	灰黄褐	5	
4	土罐	長さ3.5cm	直径1.0cm	-	EH	普通	にぶい黄褐	100	孔径0.3cm 重さ3.2g

第165表 第7号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	磁石	(9.6)	(8.5)	2.1	150.5g	-	-	-	-	紙面2面
2	不明石製品	(21.1)	15.2	10.1	2714.7g	-	-	-	-	表面左右側面を面取り
3	不明石製品	28.0	(10.6)	4.2	1688.9g	-	-	-	-	左側面に凹みあり

第166表 第8号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
4	灰釉 甗	-	-	-	E	良好	灰白	-	
5	灰釉 甗	-	(1.4)	(6.0)	E	良好	灰白	10	
6	須恵器 坏	-	(1.4)	6.2	BEHJ	良好	灰	100	
7	土師器 甗	(13.0)	(5.1)	-	FGI	良好	にぶい褐	15	
8	須恵器 甗	-	-	-	BEHJ	良好	黄灰	-	
9	須恵器 甗	-	-	-	BEHJ	良好	灰	-	

第167表 第9号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
10	灰釉 甗	(12.0)	(2.9)	-	K	良好	灰オリーブ	10	
11	須恵器 坏	-	(1.0)	(7.0)	BEHJ	良好	褐灰	15	
12	須恵器 高台付甗	-	(1.6)	(8.4)	B'EH	良好	灰	15	
13	須恵器 甗	-	-	-	BE	良好	灰白	-	

第168表 第11号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 甗	-	-	-	BE	良好	灰	-	
2	須恵器 甗	-	-	-	BEH	良好	灰	-	

第169表 第15号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
3	土師器 甕	(22.0)	(3.3)	-	ABDEH	普通	橙	10	

第170表 第16号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
4	灰輪 皿	-	(2.0)	7.2	E	良好	灰白	90	
5	須恵器 坏	12.4	3.7	6.6	DE	普通	灰白	95	底面に穿孔?
6	ロクロ 甕	-	(2.8)	(16.0)	ABEFGH	普通	灰	10	やや摩耗する
7	土師器 坏	11.9	3.7	5.8	ABEH	不良	にぶい黄橙	95	
8	須恵器 鉢	(26.0)	(7.0)	-	FH	普通	灰黄褐	10	9と同一体
9	須恵器 鉢	-	(7.0)	12.6	DEH	良好	灰	40	やや摩耗する
10	土師器 鉢	(23.0)	(21.0)	-	A F I I J	普通	褐	30	
11	不明石製品	長さ20.4cm	幅19.0cm	厚さ11.2cm	重さ2323.5g				全体に焼熱し脆い
12	不明石製品	長さ19.4cm	幅14.8cm	厚さ9.5cm	重さ2247.7g				全面面取り 風化著しい

第171表 第18号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	青磁 碗	-	-	-	E	良好	オリーブ灰	-	

第172表 第20号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
2	須恵器 甕	-	-	-	BEH	良好	灰	-	

第173表 第21号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
3	土師器 坏	(12.0)	(3.4)	-	A E H	普通	補灰	20	
4	須恵器 甕	-	-	-	B E H J	普通	灰白	-	
5	不明石製品	長さ13.1cm	幅10.7cm	厚さ4.0cm	重さ455.9g				下面面取り 片岩
6	須恵器 甕	-	(26.0)	-	B E H J	良好	灰	30	

第174表 第22号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
7	かわらけ 小皿	(10.0)	3.3	(6.6)	EH	良好	にぶい褐	30	
8	片口鉢	29.4	10.5	13.5	BEH J	普通	黄灰	70	
9	甕	-	-	-	E J	良好	にぶい橙	-	常滑産
10	甕	-	-	-	E J	良好	にぶい褐	-	常滑産
11	不明石製品	長さ16.2cm	幅18.4cm	厚さ9.8cm	重さ1984.9g				工具痕跡
12	不明石製品	長さ15.1cm	幅16.7cm	厚さ10.5cm	重さ1687.4g				上部側面を面取り
13	不明石製品	長さ(17.1)cm	幅18.2cm	厚さ8.7cm	重さ2385.4g				
14	不明石製品	長さ(13.0)cm	幅15.0cm	厚さ8.0cm	重さ885.2g				風化著しい
15	不明石製品	長さ(10.9)cm	幅(11.2)cm	厚さ8.7cm	重さ423.7g				風化著しい
16	砥石	長さ12.2cm	幅5.2cm	厚さ3.5cm	重さ183.3g				

第175表 第23号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
17	片口鉢	(26.0)	(7.5)	-	B F H	普通	褐灰	10	内外面やや摩耗する
18	須恵器 鉢	-	(5.5)	(15.0)	B E H J	普通	灰	10	やや摩耗する

第176表 第24号井戸跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
19	土師器 坏	(14.0)	3.9	(7.0)	ADEH	普通	にぶい橙	50	
20	須恵器 甕	-	-	-	B E H J	良好	灰	-	

第177表 第28号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰陶 長頸瓶	-	(15.0)	-	E	良好	灰白	60	
2	須恵器 高台付埴	-	(2.5)	(7.8)	E H J	良好	黄灰	40	W49
3	須恵器 甕	-	-	-	E H J	良好	灰	-	W49
4	須恵器 甕	-	-	-	E H	良好	灰	-	W49

第178表 第29号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
5	灰陶 皿	-	(1.3)	(7.0)	B	良好	灰白	15	
6	須恵器 甕	-	-	-	E F H	良好	灰	-	

4. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (S X 2) (第318図)

調査区の東側、Y-56グリッドに位置する。第9号住居跡と重複し、これより古い。

平面形は隅丸方形である。規模は長軸が2.54m、短軸は2.50mである。深さは0.21mである。上軸方向はN-0°を示す。

床面はほぼ平坦である。北西をのぞく3箇所の角には段が見られた。覆土は自然堆積である。

遺物は出土しなかった。時期は、第9号住居跡が10世紀であることからそれ以前である。なお、第9号住居跡の説明文中における第2号竪穴状遺構は、第1号竪穴状遺構と読みかえる。

第2号竪穴状遺構 (S X 4) (第318図)

調査区の東側、X-53・54、Y-53グリッドに位置する。北東側は倒木痕によって壊されている。第199号住居跡がすぐ西側にあるが、直接重複する遺構はない。

平面形はやや台形を呈すると思われる。規模は長軸2.96m、短軸2.94m、深さは0.12mである。主軸方向は、N-86°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土はロームを多量に含む暗褐色土の単層であった。

遺物は、土師器片、須恵器高台埴などが少量出土したのみである。

時期は9世紀後半と考えられる。

第3号竪穴状遺構 (S X 7) (第318図)

調査区の東側、Y-54グリッドに位置する。中央を掘削によって壊されているほか、新しいピットがいくつか重複しているが、住居跡などの重複はない。

平面形は長方形である。規模は長軸2.82m、短軸1.34m、深さは0.39mである。主軸方向は、N-56°-Eを示す。覆土は自然堆積である。

遺物は出土しなかった。

第4号竪穴状遺構 (S X 8) (第318図)

調査区をやや東寄りZ・AA-53グリッドに位置する。第17号溝跡、第278号土壇と重複関係にあり、木遺構が古い。

平面形は南側に張り出しを持つ長方形である。規模は長軸2.96m、短軸2.70m、深さは0.12mである。主軸方向は、N-10°-Eを示す。

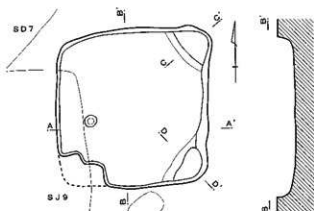
床面には土壇状の掘り込みが2箇所見られた。

遺物はごく少量の破片が出土した。第319図3はかわらけで近世と考えられる。4は8世紀頃の須恵器片である。遺物の時期差が激しいが、遺構の時期は重複関係から比較的古い時期と考えておきたい。

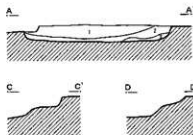
第5号竪穴状遺構 (S X 9) (第318図)

調査区の北西側、W-43・44グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

平面形は長方形で、規模は長軸3.36m、短軸2.86

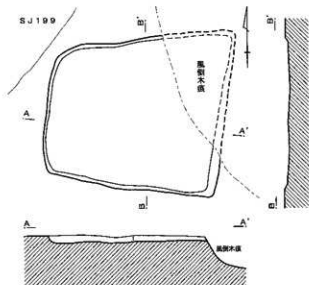


第1号竪穴状遺構



第1号竪穴状遺構

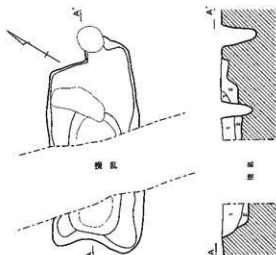
- 1 敷地面: 白土砂・3 A層少量
- 2 内壁土: 赤土砂・ロームブロック (φ1~3cm)・自然粘土層
- 3 外壁土: コー・A層・ロームブロック (φ1~3cm)少量



第2号竪穴状遺構

第2号竪穴状遺構

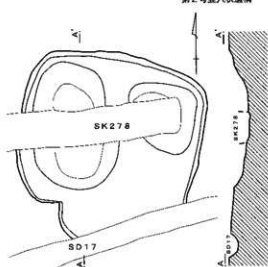
- 1 敷地面: コー・A層少量・ロームブロック (φ1~5cm)



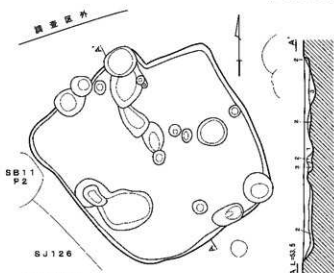
第3号竪穴状遺構

第3号竪穴状遺構

- 1 内壁土: コー・A層・ロームブロック少量
- 2 外壁土: コー・A層・自然粘土



第4号竪穴状遺構



第5号竪穴状遺構

第5号竪穴状遺構

- 1 敷地面: 灰褐色土多量・赤モツロップ・ローム塊中少量
- 2 内壁土: 灰褐色土多量・ロームブロック・ローム砂子
- 3 外壁土: 灰褐色土・粘土・粘砂・ローム塊中少量

水準標高=51.4m 0 2m

第318図 竪穴状遺構

第2号竪穴状遺構



第4号竪穴状遺構



0 10cm

第319図 竪穴状遺構出土遺物

第179表 第2号竪穴状遺構 (S X 4) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(11.0)	3.1	-	BEH	普通	橙	10	
2	須恵器 高台付瓿	-	(1.8)	7.4	AB	良好	にぶい橙	90	

第180表 第4号竪穴状遺構 (S X 8) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
3	かわらけ 小皿	(10.0)	2.0	(6.8)	G	普通	にぶい黄褐色	10	
4	須恵器 坏	-	(1.0)	(7.0)	EGH	普通	にぶい橙	20	

m、深さは0.11mであった。主軸方向は、N-30°-Wを示す。

覆土は焼土粒を含んだ褐色土である。

床面はピット状の掘り込みが多く起伏がある。遺物は出土しなかった。

5. 円形周溝状遺構

円形周溝状遺構 (S X 3) (第320図)

調査区の東側、Z・AA-58グリッドに位置する。東側は調査区外にかかる。西側で第70号土壌と重複している。土層断面の観察から本遺構が新しいことが確認された。周囲には竪穴住居跡の分布は薄く、第4・5・13号住居跡が北側に約5mの距離を置いて見られるだけである。

遺構は溝が円形に掘るもので、溝の幅は0.24m~0.44mで、深さは0.18m前後である。覆土は黒褐色

土層であった。円の直径は、溝の内周で3.40mを測る。

溝で囲まれた内部には、対角線上にピットが2基検出された。ピットはいずれも円形で、P1は直径0.30m、深さ0.42m、P2は直径0.32m、深さ0.38mを測る。内部にはこの他には掘り込みは認められず、ピットは遺構に伴うものと考えられる。

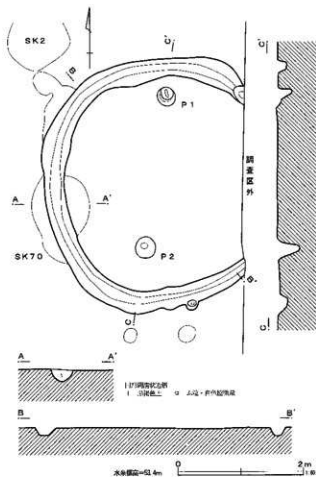
遺物は出土しなかったため、時期も不明である。

6. 環状ピット列

環状ピット列 (S X 44) (第321図)

I I-47グリッドに位置する。10基のピットがやや楕円形に配される。縄文時代の竪穴住居跡の柱穴とも考えられたが、周辺には該期の遺構はなく、むしろ竪立柱建物跡が多く存在することから、これら

と同時期の可能性が高いと判断した。直接重複する遺構はないが、長さ3.20m、幅0.13mの溝が貫いている。ピットに伴うという保障はないが、この部分にしかないため関連する可能性が高いと考えておく。各々のピットは円形ないし楕円形で方形に近いもの



第320図 円形周溝状遺構

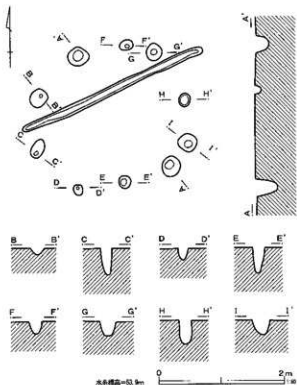
もある。大きさは20cm以下と30cm前後がある。
規模は長径2.78m、短径2.54mを測る。深さは11

7. 製鉄炉跡

第1号製鉄炉跡（第322図）

AA-48グリッドに位置する。炉体と排滓部の約半分を失っている。重複する遺構はない。構造は堅型炉で、炉体の直径は約0.6mの円形と推定される。残っていたのはか底部の僅かな部分で、還元前は1面であった。下部構造はない。

排滓部は瓜実形で、長さ1.75m、幅0.79m、深さは0.05mを測る。主軸方向はN-13°-Wを示す。確認面で滓及び羽口が出土した。これらの下からは炉壁が検出された。また、壁沿いには灰白色の粘土が見られ、やや被熱していた。底面は広い範囲にわたって焼土化しており、か本体に近い部分は還元し



第321図 環状ピット列

cmから42cmと幅がある。

この環状に廻るピットの性格については、この周辺には掘立柱建物跡が多く分布することから、円形に柱穴を配する比較的簡易な構造の構築物と考えておきたい。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

ていた。

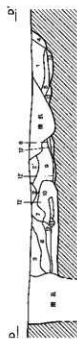
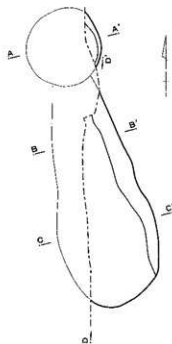
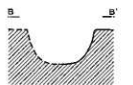
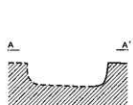
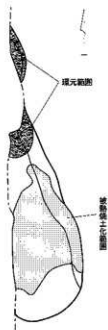
遺物は、羽口の他に土師器坏などが出土した。1・2は混入と思われる。第323図3は、十鍾状の外観を示すが中実で用途は不明である。1～3は混入と思われる。4・5は羽口である。4は先端部から体部まで残っている。表面は溶融しガラス質で、体部の破面にも滓が付着している。孔径は7.0cmである。胎土にはスサを含む。5は先端部から基部まで残っている。形態は、外面が平面的で角の丸い方柱状である。基部は円形でやや広がっている。残存長26cmであるが、これより長かったと考えられる。基部外径は9～10cmと推定される。孔径は7.2cmで



横出面遺物出土状況

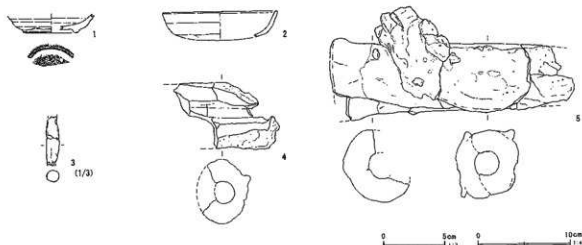


伊壁出土状況



- 図1 付録図解
- 1 粘褐色土 酸化層・粘土少量
 - 2 暗褐色粘土 灰質の塊多量、炭土少量
 - 2' 暗褐色粘土 暗褐色土層、土層上(中層)
 - 3 粘褐色土 塊土・塊土(ブロック) (φ1-2m)・炭化物少量
 - 4 粘褐色土 塊土・塊土・炭化物少量
 - 5 白土 塊土・炭化物少量、硬質、層状
 - 6 粘褐色土 黒色炭質(3層) 厚さ不均等、粘土
 - 7 赤褐色土 砂質粘砂
 - 8 暗褐色粘土 塊土・塊土(ブロック) (φ2m) 多量、炭化物少量
 - 9 粘褐色土 厚 (φ2m) 多量、塊土・炭化物少量
 - 10 粘褐色土 厚 (φ1-2m) - 塊土層 (φ1-2m) 多量
 - 11 粘褐色土 砂質粘砂
 - 12 灰褐色土 粘土層、1層(約10m) x 10m 非地盤化
 - 12' 灰褐色土 粘褐色土層の下の層、粘土少量
 - 13 暗褐色粘土 粘褐色土層より厚い粘土

水平距離=10 1m



第323図 第1号製鉄炉跡出土遺物

第181表 第1号製鉄炉跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	数(率%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付埴	-	2.0	(6.0)	ABEHJ	普通	褐	20	
2	土師器 埴	(12.0)	(2.7)	-	BDEH	普通	橙	10	
3	不明土製品	長さ(3.8)cm	直径1.0cm		DEH	普通	にぶい橙	-	中央 重さ3.6g
4	羽口	長さ10.5cm	外径7.0cm		BE	普通	褐灰	-	重さ205.5g
5	羽口	長さ26.0cm	外径7.2cm		BEHJ	普通	にぶい橙	-	重さ1365.0g

ある。基部から5cmのところには滓とともにが壁が付着している。滓の流れ方から羽口は25~30°の角度で設置されていたと考えられる。胎上にはスサを含む。この他に、羽口用痕のついた炉壁や炉内滓・流出孔滓・流出溝滓・木炭などが出土した。概要は第326図に掲載した。

時期は、土師器からは直接判断できないが、少なくとも1の高台付埴が10世紀と考えるなら、それ以降となる。

第2号製鉄炉跡 (第324図)

GG-48グリッドに位置する。炉本体は削平され、排滓部が残存していた。排滓部は不整形円形を呈し、長軸1.34m、短軸0.91m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-29°-Wを示す。南東側にかが本体があったと見られ、流出部分が還元していた。底面は広い範囲にわたって焼土化していた。炉本体に近い南東側から中央にかけて羽口や炉壁が出土し、北西側には滓が分布していた。

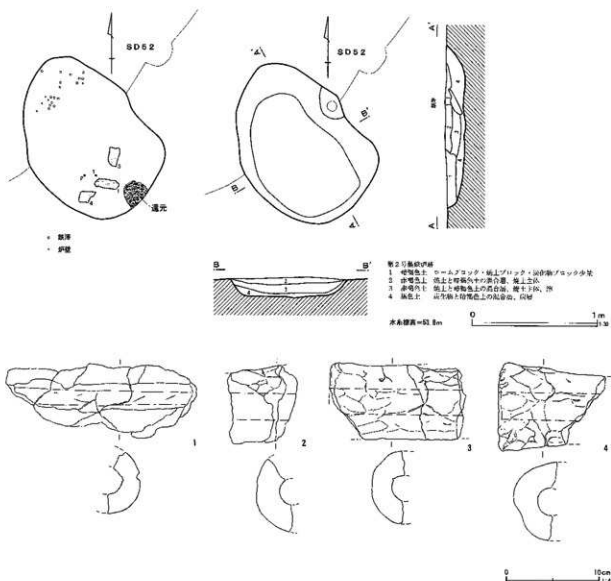
第324図1・2は羽口の体部破片、3は体部から基部、4は先端部から基部の破片である。いずれも円筒状で基部は僅かに広がる。3の外表面は粘土の軟らかいうちに筒調整している。孔径は2.7cmで基部は広がって5.0cmとなる。4は残存長11.4cm、基部外形は9.4cmである。この他に、炉壁や各種滓、木炭が出土した。概要は第327図に掲載した。

時期は、不明であるが第1号製鉄炉と同様の時期と考えるなら、10~11世紀頃となろう。

第3号製鉄炉跡 (第325図)

調査区の中央CC-48・49グリッドに位置し、第245号住居跡と重複する。新旧関係は、覆土が薄くはっきりしなかった。

炉は底部が残存していた。直径20cmの円形で還元していた。下部構造はない。南側に10cm離れて土城状の掘り込みと小ピットが検出された。ピットは土城状の掘り込みを切っており、中に羽口とミニチュア土器が残っていた。土城状の掘り込みは長さ65cm、



第324図 第2号製鉄炉跡・遺物出土状況・出土遺物

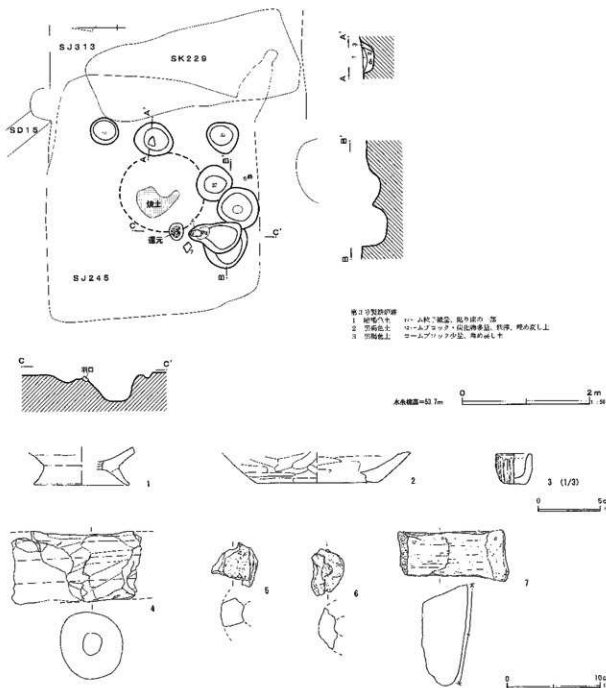
第182表 第2号製鉄炉跡出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	重さ	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	羽I	20.3	8.0	369.9	BEH	普通	灰黄褐色	-	
2	羽口	7.4	8.4	170.2	BDEHJ	普通	灰黄	-	
3	羽I	14.3	8.0	400.8	EJ	不良	黄灰	-	
4	羽口	11.4	9.4	358.3	REH	普通	にぶい黄褐色	-	

幅50cmの楕円形で、深さは5cmと浅い。また、カとビットを結ぶ線の西側に片岩が検出された。炉の北東側には、炉に接して直径1.30mの円形の浅い掘り込みが見られ、直径70cmほどの半円状に焼土が検出された。

炉の南側には3基の土壌が検出された。検出時に

は、3基が連続していたために長方形の上層に見え、輪座と想定して調査したが、結果的には円形の土壌となった。また、東側にも円形の土壌が2基確認された。いずれも滓が出土しており、排滓土壌と考えられる。土壌の規模は直径45～65cmで、深さは40cm前後である。覆土は黒褐色土で、ロームブロックと






























第325図 第3号製鉄炉跡・出土遺物



























第183表 第3号製鉄炉跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	ロクロ 高台付埴	-	4.09	(10.1)	A D E G H	普通	にぶい黄褐色	25	
2	土師器 鉢	-	3.3	(12.8)	A D E H J	普通	灰褐色	20	底部離れ砂
3	土師器 ミニチュア	2.5	2.4	1.9	B D G	普通	黒褐色	100	内面底部酸化鉄? 残存
4	羽II	長さ14.0cm	幅7.4cm		E	普通	灰	-	重さ1170.0g
5	羽I	長さ4.9cm	幅4.6cm		D E H	普通	灰	-	重さ44.3g
6	羽I	長さ3.5cm	幅4.9cm		A E	普通	灰	-	重さ37.2g
7	炉材石	長さ11.7cm	幅5.1cm	厚さ12.9cm					重さ1170.7g 澤付着 一面磨面
















SF1

炉壁	炉壁	羽口	マグネタイト系遺物	炉内滓	炉内滓	流出孔滓	流出溝滓	流動滓	炉内滓	炉内滓	木炭
製鉄炉	製鉄炉 羽口圧縮付	製鉄炉 先端部一基部			流動滓				含鉄 酸化(△)	含鉄 L(●)	
											
											
		先端部一基部									
											
分析											

第328図 製鉄副産物構成図(1)

SF2										
炉壁	羽口	炉底滓	炉内滓	流出孔滓(小)	流出孔滓(中)	流出溝滓	流動滓	炉内滓	炉内滓	木炭
製鉄炉	製鉄炉 先鋒部一部份	(炉内滓)	(半流動状)					含鉄 酸化(△)	含鉄 Li(●)	
 31	 33	 35	 37	 41	 43		 46	 48	 50	
			 38							
			 39			 45				
			 40	 42	 44		 47	 49	 51	 52
	体部~基部	 36	 40	 42	 44		 47	 49	 51	
分析										

第327図 製鉄炉渣滓標本図(2)

SJ150	SJ171			SJ245(SF3)			SJ256			SE34	SK55
鉄塊系遺物	羽口	炉内滓	炉底塊	羽口	炉材石(滓付)	炉内滓	炉壁	羽口	炉内滓	塊形鑛渣滓(中)	含鉄鉄滓
L(●)	製鐵炉 先端部~基部		含鉄 L(●)	体部~基部		含鉄 酸化(△)	製鐵炉	製鐵炉 体部		含鉄 酸化(△)	酸化(△)
 53	 54	 55	 56	 57	 58	 59  60  61	 62	 63  64	 65	 66	 67
分析											

第328図 製鉄関連遺物構成図(3)

第184表 製鉄関連遺物観察表

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量(g)	磁気度	メタル度	備考	分析番号
			長さ	幅	厚さ					
1	炉壁 (製錬炉)	SF1	10.9	6.2	12.0	299.1	2	なし		
2	炉壁 (製錬炉)	SF1	9.1	6.6	4.5	106.5	1	なし	発泡、胎土スサ多	
3	炉壁 (製錬炉)	SF1	10.6	6.1	3.0	123.7	3	なし		
4	炉壁 (製錬炉・羽口・圧直付)	SF1	7.8	6.6	5.1	102.1	1	なし		
5	羽口 (製錬炉・先端部一基部)	SF1	10.5	7.0	—	205.5	4	なし	外面溶融、破面浮付着	
6	羽口 (製錬炉・先端部一基部)	SF1	26.0	10.0	—	1365.0	4	なし	浮付着、一部自然種付着	
7	マグネサイト系遺物	SF1	2.7	2.5	1.6	6.2	5	なし		
8	炉内洋	SF1	6.2	4.7	5.9	167.2	2	なし		
9	炉内洋	SF1	5.0	5.3	5.0	120.6	2	なし		
10	炉内洋	SF1	4.9	5.6	6.7	163.2	4	なし		
11	炉内洋	SF1	8.1	5.7	3.6	157.8	3	なし		
12	炉内洋	SF1	6.2	6.5	6.8	240.8	2	なし		
13	炉内洋	SF1	8.1	9.2	4.9	262.9	2	なし	木炭痕多	
14	炉内洋	SF1	10.6	9.2	7.7	537.8	4	なし	上面流動、下面木炭痕、炉壁付着	
15	炉内洋 (流動洋)	SF1	4.6	7.3	4.1	165.4	5	なし		
16	炉内洋 (流動洋)	SF1	7.3	6.4	4.8	274.2	2	なし		
17	流出孔洋	SF1	4.2	4.4	2.8	69.9	2	なし		
18	流出孔洋	SF1	9.8	5.0	4.0	132.9	2	なし		
19	流出溝洋	SF1	8.8	4.7	2.5	137.2	2	なし		
20	流出溝洋	SF1	12.5	7.2	3.1	211.3	2	なし		
21	流出溝洋	SF1	10.2	13.5	3.4	291.4	3	なし		
22	流出溝洋	SF1	8.2	10.0	5.6	242.2	3	なし		
23	流出溝洋	SF1	10.4	6.1	4.5	287.6	3	なし		
24	流動洋	SF1	15.3	13.3	5.1	832.5	3	なし		
25	流動洋	SF1	22.3	20.0	10.0	3910.0	3	なし	上面流動、下面砂、小礫、炉壁付着	
26	炉内洋 (含鉄)	SF1	2.5	3.8	2.1	12.8	4	錆化(△)		
27	炉内洋 (含鉄)	SF1	3.3	4.7	3.4	44.3	6	錆化(△)		
28	炉内洋 (含鉄)	SF1	5.2	3.6	2.6	34.9	3	錆化(△)		
29	炉内洋 (含鉄)	SF1	4.9	6.3	4.5	170.6	6	L (●)	塊状・炉壁付着	
30	木炭	SF1	10.5	2.9	1.9	13.0	1	なし		
31	炉壁 (製錬炉)	SF2	7.6	8.2	2.9	106.5	1	なし		
32	炉壁 (製錬炉)	SF2	12.3	13.7	5.4	405.8	1	なし	発泡、木炭痕	
33	羽口 (製錬炉・先端部一基部)	SF2	20.3	8.0	5.0	369.9	1	なし	外面溶融、破面浮付着	
34	羽口 (製錬炉・先端部一基部)	SF2	14.3	8.0	4.4	400.0	1	なし	外面割頭痕、縦ナギ	
35	炉底塊 (炉内洋)	SF2	6.5	7.1	4.6	226.5	7	なし		
36	炉底塊 (炉内洋)	SF2	11.5	6.7	8.7	787.2	2	なし		
37	炉内洋 (半流動状)	SF2	5.1	1.6	1.8	13.8	1	なし		
38	炉内洋 (半流動状)	SF2	4.6	2.9	2.9	18.8	1	なし		
39	炉内洋 (半流動状)	SF2	5.0	4.0	3.9	49.4	1	なし		
40	炉内洋 (半流動状)	SF2	4.9	4.0	5.3	47.6	1	なし		
41	流出孔洋 (小)	SF2	4.1	4.0	1.7	30.7	2	なし		
42	流出孔洋 (小)	SF2	6.4	4.1	2.2	52.3	2	なし		
43	流出孔洋 (中)	SF2	5.7	4.2	3.8	123.0	1	なし		
44	流出孔洋 (中)	SF2	4.0	6.6	4.4	204.7	3	なし		
45	流出溝洋	SF2	7.6	6.4	4.5	305.0	4	なし		
46	流動洋	SF2	11.2	9.0	5.1	297.9	3	なし		
47	流動洋	SF2	19.5	25.2	7.7	3200.0	3	なし	上面流動、下面砂、小礫、炉壁付着	
48	炉内洋 (含鉄)	SF2	1.9	1.7	1.8	5.2	3	錆化(△)	塊状	
49	炉内洋 (含鉄)	SF2	6.3	4.7	3.3	94.7	3	錆化(△)		
50	炉内洋 (含鉄)	SF2	4.2	4.2	3.8	53.9	4	L (●)		
51	炉内洋 (含鉄)	SF2	8.1	9.0	4.0	267.4	1	L (●)		
52	木炭	SF2	2.4	2.1	1.1	8.8	1	なし		
53	鉄塊系遺物	SJ150	4.2	5.5	4.1	125.5	7	L (●)		
54	羽口 (製錬炉・先端部一基部)	SJ171	23.1	9.0	8.2	1210.0	1	なし		
55	炉内洋	SJ171	8.2	5.5	5.5	201.7	2	なし		
56	炉底塊 (含鉄)	SJ171	10.0	9.9	5.0	502.9	6	L (●)		
57	羽口 (体部一基部)	SJ245	14.0	7.4	7.3	623.3	1	なし	外面割頭痕、縦線割り	
58	炉材石 (浮付き)	SJ245	11.7	5.1	12.9	1170.0	1	なし	片岩、一面厚減、一面浮付き	

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	縦径	メタル度	備考	分析番号
			長さ	幅	厚さ					
59	炉内滓 (含鉄)	SJ245	2.0	1.9	1.6	6.1	3	錆化(△)		
60	炉内滓 (含鉄)	SJ245	3.5	2.9	2.4	24.5	4	錆化(△)		
61	炉内滓 (含鉄)	SJ245	3.8	2.8	2.5	28.5	4	錆化(△)		
62	炉壁 (製鉄炉)	SJ256	8.3	10.2	7.0	347.9	1	なし		
63	羽口 (製鉄炉・体部)	SJ256	5.8	6.1	3.2	76.7	1	なし		
64	羽口 (製鉄炉・体部)	SJ256	12.7	7.8	4.1	285.7	1	なし		
65	炉内滓	SJ256	6.4	7.9	5.6	284.1	1	なし		
66	楕形煎治滓 (中・含鉄)	SE34	8.8	10.3	4.2	518.5	5	錆化(△)		
67	含鉄鉄滓	SK55	2.1	3.0	1.9	11.1	5	錆化(△)		

炭化物、滓を含み埋め戻されている。

第325図1・2は土壌から出土した。3は外面縦方向にミガキ状の調整がされ、内面は横方向になでられる。4は羽口。体部から基部にかけて残存しており、外面は縦方向に幅広く鋭ナデされる。5は先端部付近の破片である。6は先端部破片である。7は炉の脇から出土した片岩である。大きさは10cm四方で、厚さは4～5cmである。側面の1面が磨かれている。四隅のうち一隅に滓が付着していることから、

ら、炉材と考えられる。また、容器の脚と考えられる鑄型が1点出土したが、遺憾ながら調査中に紛失した。

時期は不明であるが、他の製鉄が跡の年代や第245号住居跡が10世紀後半から11世紀と考えられることから、それに近い時期を考えておきたい。

この他に、製鉄関連の遺物が各種の遺構から少量ずつ出土した。殆どが滓であるが、主なものを第328図に掲載した。

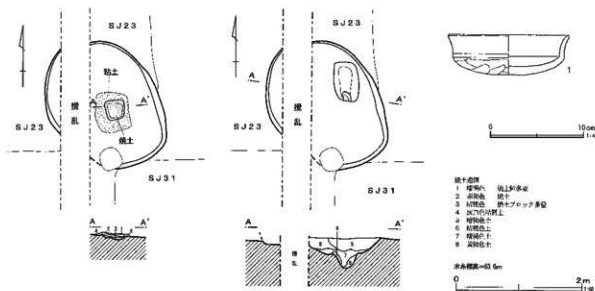
8. 焼土遺構

第1号焼土遺構 (SX5) (第329図)

Y-43グリッドに位置する。第23・31号住居跡と重複関係にあり、本遺構が新しい。

一辺0.32mの方形に焼土が検出され、周囲には白

色粘土が認められた。焼土は厚さ3cm程度であったが硬く焼きしまっている状態ではなく、焼土をはずしたところ下には白色粘土が見られた。粘土の範囲は0.64×0.52mの長方形で厚さは5cm前後であった。



第329図 焼土遺構

検出面では掘り方等は確認できなかったが、白色粘土下はロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻されたものと考えられた。検出面から約10cm下で楕円形の掘り込みが確認された。土層断面で確認できなかったため焼土遺構に伴うとは断定できないが、規模

9. 粘土採掘坑

粘土採掘坑は、密集して掘られている部分が3箇所確認された。それぞれの密集部分を粘土採掘坑群として概要を記す。各群に含まれる粘土採掘坑の数は20基前後である。他にこれらの群から離れ、単独或いは2～3基程度で存在するものもある。それらを含めた総数は60基である。ただし、数については全ての粘土採掘坑について土層断面を設定して確認したのではなく、掘り上がりの状態によって判断したものである。分布状況は、2群が中央西寄りであるが、他の殆どが調査区南側に分布している。これは、南側が地形がやや低く遺構も少ないため粘土の採掘が比較的容易であったためではないかと思われる。遺物は極めて少なく、全く出土しないものが多い。なお、遺構図は群として捉えたもの以外は省略した。

遺物は当然ながら埋め戻された覆土から出土している。須恵器は環・蓋・甕が多く、土師器は環・甕・鉢が多い。他に灰釉陶器や紡錘車、土錘、土鈴などが出土している。時期は、多少の混入が見られるものの、概ね7世紀後半から8世紀前半に収まるものが多い。

1群は、I I-45グリッドを中心として広がり、S X 13～S X 25が密集している。調査区の南側に位置し、竪穴住居跡の密集する北側の空間からは離れている。周囲には掘立柱建物跡があり、ちょうど掘立柱建物跡の存在しない空間に掘り込まれている。掘り上がりの状態から20程度掘り込まれていると考えられる。やや離れてS X 47・62などがある。群の南側半分は、第52号溝跡と重複しており、溝跡より古い。また、北側に位置するS X 13・17は第265

は長径2.18m、短径1.72m、深さ0.05mである。覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、滓などは出土せず、6世紀の土師器破片が1点出土したのみであるが、混入である。

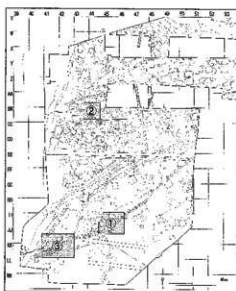
号住居跡と重複し、これより古い。

個々の粘土採掘坑の平面形は、円形や楕円形を呈し径は2～3mであるが、多くは激しい重複によって掘り込み時の原形をとどめていない。深さは0.9～1.5mである。粘土層は確認面から0.6～0.7mより下にあり、粘土採掘坑の深さもそれに規制されている。掘り方はほぼ垂直に掘り込んで、粘土層に達すると横方向に掘って粘土を採取している。覆土は、基本的には黒褐色土とロームブロックの互層で、埋め戻されたものである。埋め戻しは粘土採取後すぐに行われたと考えられ、ある一定の時間をおいて次の粘土採掘坑を、場所を僅かにずらして掘り込んでいる。そのために土層断面は、連続する埋め戻しの状況が見られる。

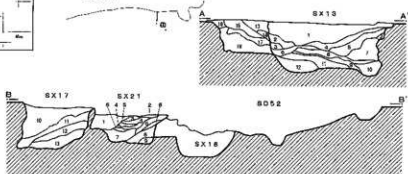
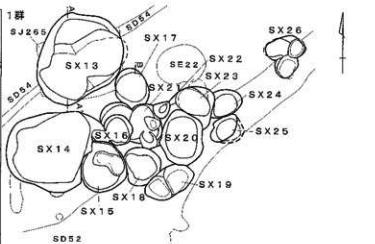
遺物は、破片で少量出土している。須恵器盤・壺、土師器環・甕の他に、手捏ねのミニチュア土器、土錘、石製紡錘車、ガラス玉がある。

時期は、S X 14が9世紀代の可能性があるが、他は7世紀後半にほぼ収まるものと考えられる。

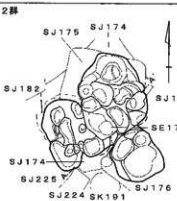
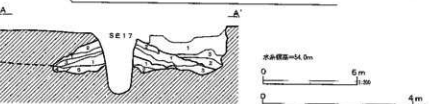
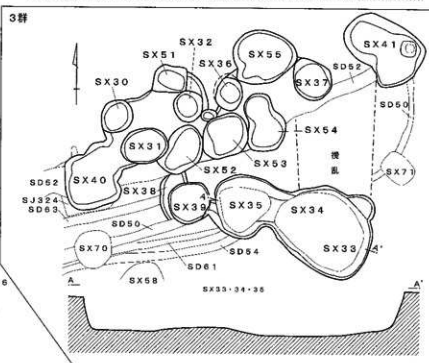
2群は、B B-43・44グリッドを中心に広がる。調査区の中央西寄りに位置し、他の2群からは離れている。周囲には竪穴住居跡が密集し、重複が激しい。第174～176・225号住居跡、第17号井戸跡と重複している。第175号住居跡、第17号井戸跡より占く、他の住居跡より新しい。調査時に一括してS X 12の番号を付したが、内容は3単位の小群に分けられる。それぞれを構成する粘土採掘坑の数は3ないし4基から10数基で、総数は約20基である。個々の粘土採掘坑の形状や掘り方、覆土は1群と同様である。



- 【A-A'】
- 1 粘土層上 コーム状残存
 - 2 粘土層上 コーム状残存
 - 3 粘土層上 コーム状残存
 - 4 粘土層上 コーム状残存
 - 5 粘土層上 コーム状残存
 - 6 粘土層上 コーム状残存
 - 7 粘土層上 コーム状残存
 - 8 粘土層上 コーム状残存
 - 9 粘土層上 コーム状残存
 - 10 粘土層上 コーム状残存
 - 11 粘土層上 コーム状残存
 - 12 粘土層上 コーム状残存
 - 13 粘土層上 コーム状残存
 - 14 粘土層上 コーム状残存
 - 15 粘土層上 コーム状残存
 - 16 粘土層上 コーム状残存
 - 17 粘土層上 コーム状残存



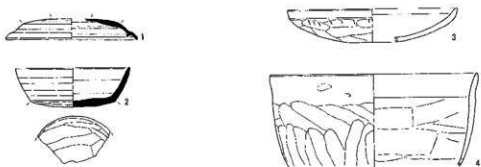
- 【B-B'】
- 1 粘土層上 コーム状残存
 - 2 粘土層上 コーム状残存
 - 3 粘土層上 コーム状残存
 - 4 粘土層上 コーム状残存
 - 5 粘土層上 コーム状残存
 - 6 粘土層上 コーム状残存
 - 7 粘土層上 コーム状残存
 - 8 粘土層上 コーム状残存
 - 9 粘土層上 コーム状残存
 - 10 粘土層上 コーム状残存
 - 11 粘土層上 コーム状残存
 - 12 粘土層上 コーム状残存
 - 13 粘土層上 コーム状残存
 - 14 粘土層上 コーム状残存
 - 15 粘土層上 コーム状残存
 - 16 粘土層上 コーム状残存
 - 17 粘土層上 コーム状残存



- 【A-A'】
- 1 粘土層上 コーム状残存
 - 2 粘土層上 コーム状残存
 - 3 粘土層上 コーム状残存
 - 4 粘土層上 コーム状残存
 - 5 粘土層上 コーム状残存

第330図 粘土探掘坑

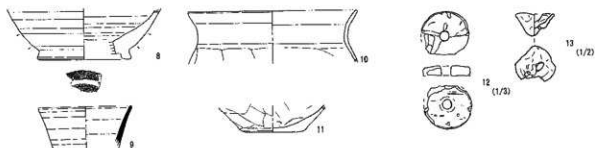
SX 12



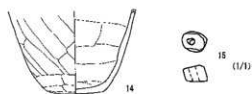
SX 13



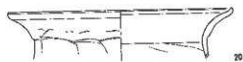
SX 14



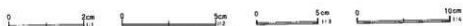
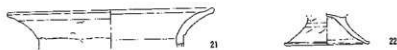
SX 15



SX 15-16

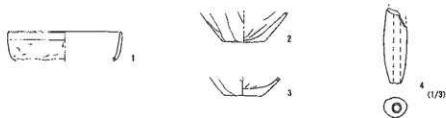


SX 16

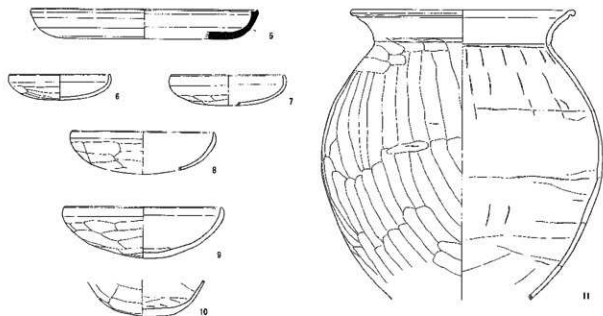


第331号 粘土探掘坑出土遺物 (1)

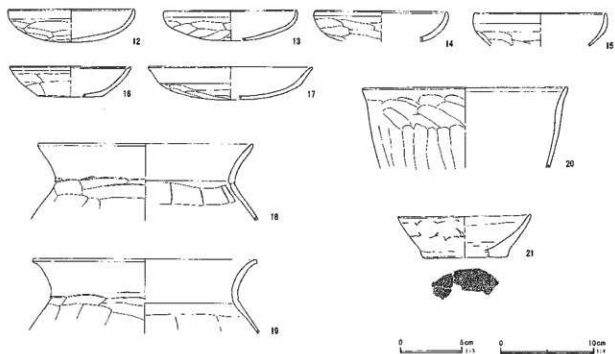
SX 17



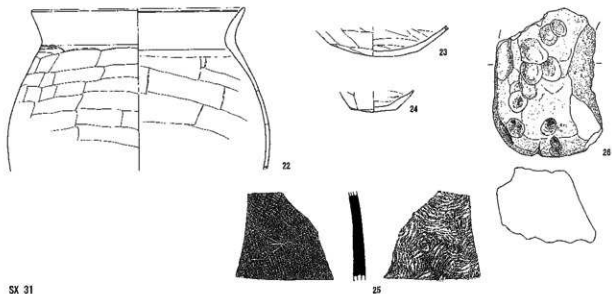
SX 26



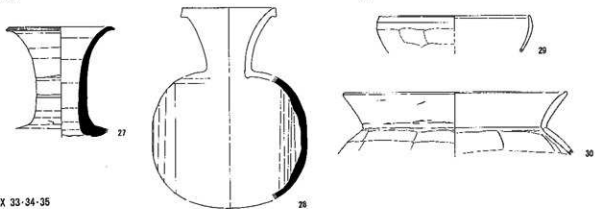
SX 30-31-32



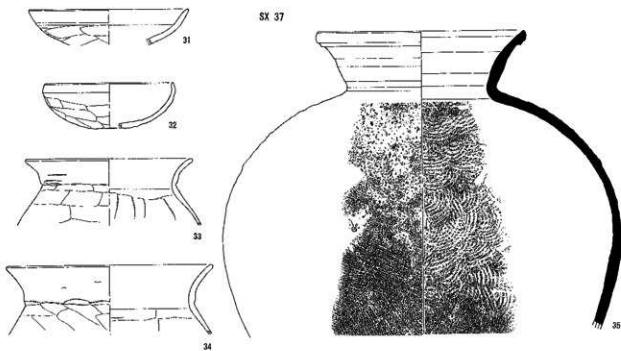
第332号 粘土採掘坑出土遺物 (2)



SX 31



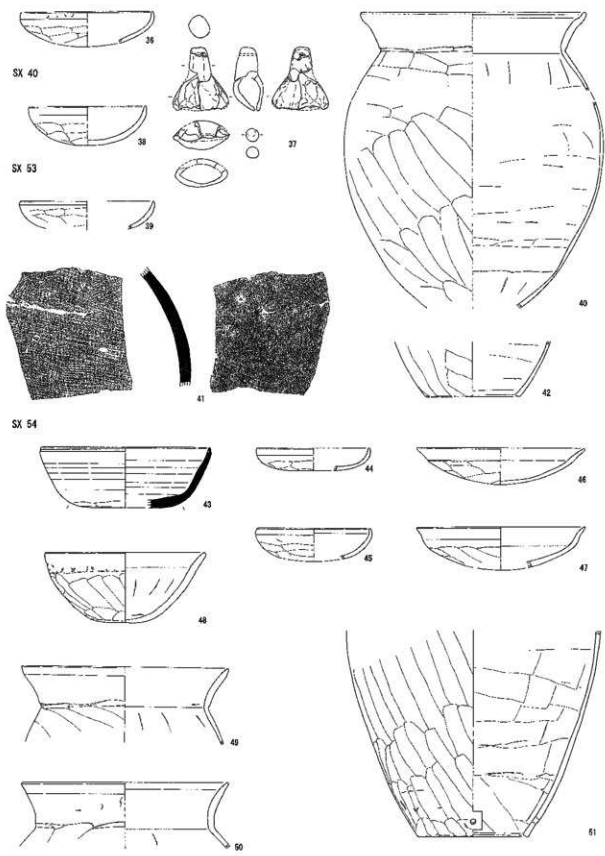
SX 33-34-35



SX 37

第333图 粘土探掘坑出土遗物 (3)





SX 40

SX 53

SX 54

第334圖 粘土採掘坑出土遺物 (4)

0 10cm

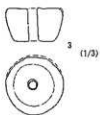
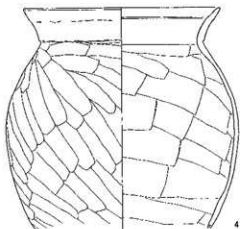
SX 1



SX 11



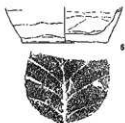
SX 56



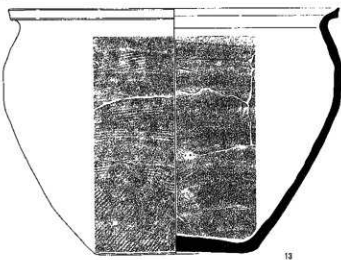
SX 57



SX 59



SX 63



SX 60



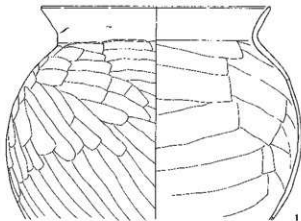
SX 63



SX 62



第335图 粘土採掘坑出土遺物 (5)



第336図 粘土採掘坑出土遺物 (6)

遺物は少なく、円化できたのは、須恵器環・蓋、土師器甕・鉢である。第331図1は天井部が厚く、口縁部が外側に膨らんで端部は丸く作られる。返りは短い。2は底部がやや厚く、底部中央が張り出している。体部は僅かに内湾する。口縁部はやや薄くなり、口唇部は丸く仕上げられる。

時期は、須恵器環の年代をとれば7世紀末から8世紀初頭が考えられる。

3群はJ J・K K-41・42グリッドに位置する。調査区の南西部にあり、調査区の中でも低い場所にあたる。16基分の番号を付したが実数は20基を超えられると思われる。周辺には僅かに竪穴住居跡が見られるほかは溝跡が多い。第50・52・54・61・63号溝跡と重複する。第52号溝跡より古いが他の溝跡との新旧関係は不明である。個々の粘土採掘坑の形状や掘り方、覆土は1群と同様である。本群は大きな平面形を示す採掘坑が多い。これは掘削の回数が多く、

結果としてひとつの大きな繋がりとなったものと理解できる。

遺物は、S X 31のフラスコ型長頸瓶のように古いものも見られるが、これは混入と思われる。S X 37からは土鈴が出土した。上端には穴が開いていることから紐などで吊るしたものと考えられる。下部は三角形を呈する。膨らみは3cmあり、器壁は0.5cmであるから、中の空間は約2cmである。中に入る土玉は直径1.4cmである。外面は指頭痕が顕著である。土師器環は、大きく分けると口縁部が短く内湾しながら立ち上がるものと、大きく外傾するものがある。いずれも器高は低く、口径は前者が12~14cm、後者は18cm前後である。甕は口縁部が外反する。最大径は胴部中位から上半にあり、器厚は薄い。外面の調整は頸部下が横方向の筧ケズリで、それ以下は縦或いは斜め方向の筧ケズリである。

時期は7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。

第185表 粘土採掘坑 (S X 12) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 甗	(14.0)	(2.2)	-	BEJ	良好	灰	20	B B 44
2	須恵器 甗	(12.0)	4.1	(9.2)	BEJ	良好	灰	25	B B 44
3	土師器 壺	(18.0)	(3.5)	-	BDE	普通	にぶい橙	20	
4	土師器 鉢	(22.0)	(9.8)	-	B D G H	普通	にぶい橙	15	

第186表 粘土採掘坑 (S X 13) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
5	土師器 坏	(13.0)	2.3	-	DEH	普通	橙	15	やや摩耗する
6	土師器 鉢	(16.0)	(5.8)	-	A B H	普通	褐灰	10	
7	土師器 甗	(18.0)	(3.7)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	10	

第187表 粘土採掘坑 (S X 14) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置	
8	灰釉 瓶	-	(5.3)	(10.0)	B	良好	灰白	15		
9	須恵器 壺	(10.0)	(4.4)	-	E	良好	オリブ黒	10		
10	土師器 甗	(18.0)	(5.5)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	15		
11	土師器 甗	-	(2.8)	6.7	A B E H	普通	にぶい橙	50		
12	石製紡錘車	長さ3.8cm 厚さ0.8cm 孔径0.7cm 重さ14.7g								
13	土師器 ミニチュア	2.0	1.2	-	A E	普通	橙	90	穿孔2ヶ所	

第188表 粘土採掘坑 (S X 15) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
14	土師器 甗	-	(8.7)	6.2	B E G H	普通	にぶい黄橙	80	内外面やや摩耗する
15	ガラス土	直径5.5cm 厚さ4.0mm 孔径1.5mm 重さ0.2g					褐灰	100	

第189表 粘土採掘坑 (S X 15・16) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
16	須恵器 高台盤	-	(2.6)	(10.0)	BEJ	良好	灰	15	
17	土師器 坏	(12.0)	3.5	-	B D E	普通	にぶい橙	20	
18	土師器 坏	(16.0)	3.0	-	B D E H	不良	にぶい橙	15	外面やや摩耗する
19	土師器 坏	(14.0)	(4.2)	-	A B D E H	普通	橙	25	
20	土師器 甗	(24.0)	(5.3)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	30	

第190表 粘土採掘坑 (S X 16) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
21	土師器 甗	(22.0)	(4.1)	-	B D E H	普通	橙	15	
22	土師器 台付甗	-	(3.2)	(9.0)	A D E	普通	にぶい橙	40	

第191表 粘土採掘坑 (S X 17) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置	
1	土師器 坏	(12.0)	(3.2)	-	B D E H	普通	にぶい橙	5		
2	土師器 甗	-	(3.2)	(4.4)	A B D E H	普通	にぶい橙	40		
3	土師器 甗	-	(2.0)	4.0	B E H	普通	橙	100		
4	土錘	長さ(6.0)cm 直径1.5cm				DEH	普通	褐灰	80	孔径0.5cm 重さ15.2g

第192表 粘土採掘坑 (S X 26) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
5	須恵器 甗	(24.0)	3.1	(19.6)	BEJ	良好	灰	15	
6	土師器 坏	10.6	2.7	-	A B D E H	普通	橙	95	
7	土師器 坏	(12.0)	3.3	-	DEH	不良	にぶい橙	40	やや摩耗する
8	土師器 坏	(15.0)	(4.0)	-	A B D E H	普通	橙	15	
9	土師器 坏	(17.0)	5.4	-	A B E G H	普通	灰橙	80	内面に煤付着
10	土師器 甗	-	(3.8)	7.0	B D E H	普通	黒褐	80	やや赤んだ丸底
11	土師器 甗	(24.0)	(30.5)	-	A B H J	普通	橙	60	

第193表 粘土採掘坑 (S X30・31・32) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置	
12	土師器 坏	(13.4)	3.5	-	A B D E H	普通	にぶい橙	30		
13	土師器 坏	(14.0)	3.2	-	A B D E H	普通	にぶい褐	50	やや摩耗する	
14	土師器 坏	(14.0)	3.2	-	D E H	普通	にぶい褐	15	外面やや摩耗する	
15	土師器 坏	(14.0)	(3.5)	-	B D E H	普通	にぶい橙	30		
16	土師器 坏	(13.0)	3.2	(7.0)	A D E H	普通	橙	15		
17	土師器 坏	(17.6)	3.3	-	D K H	普通	橙	30	やや摩耗する	
18	土師器 甕	23.0	(8.0)	-	B H	不良	橙	80	口縁やや内面影 摩耗著しい	
19	土師器 甕	(24.0)	(7.8)	-	A B D E H	普通	橙	50		
20	土師器 鉢	(22.0)	(8.4)	-	A E G H	不良	橙	25	摩耗著しい	
21	土師器 埴	(14.0)	4.5	(9.0)	D E G H	普通	にぶい橙	15		
22	土師器 甕	22.6	(17.0)	-	A B E H	普通	橙	60	内外面やや摩耗する	
23	土師器 甕	-	(3.7)	9.6	A B K G H	普通	にぶい橙	90		
24	土師器 甕	-	(2.2)	4.8	A B E G H	普通	褐色	80		
25	須恵器 甕	-	-	-	K	良好	灰	-		
26	不明石製品	長さ(15.8)cm 幅(11.6)cm 厚さ8.0cm 重さ879.4g								表裏面に凹みあり

第194表 粘土採掘坑 (S X31) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
27	須恵器 長頸瓶	11.6	(11.7)	-	K	良好	灰	90	
28	須恵器 長頸瓶	-	(13.0)	-	B E H J	良好	灰	20	
29	土師器 坏	(16.0)	(3.9)	-	E H	普通	にぶい黄褐	10	
30	土師器 甕	(24.0)	(6.6)	-	A B E H	普通	橙	50	内外面摩耗著しい

第195表 粘土採掘坑 (S X33・34・35) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
31	土師器 坏	(17.0)	(3.7)	-	A B D E H	普通	橙	15	やや摩耗する
32	土師器 坏	13.6	4.8	-	A H J	不良	橙	80	歪み大きい 摩耗著しい
33	土師器 甕	17.8	(7.0)	-	A B D E H	普通	にぶい黄褐	60	
34	土師器 甕	(22.0)	(7.3)	-	B E H	不良	橙	20	摩耗著しい

第196表 粘土採掘坑 (S X37) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
35	須恵器 甕	(22.0)	(32.0)	-	B E	良好	灰	40	S X31
36	土師器 坏	(14.0)	(3.3)	-	A B D E H	普通	橙	20	
37	土師	長さ6.7cm	幅6.0cm	厚さ3.0cm	E H	不良	にぶい褐	60	つまみ径2.3cm 重さ(43.1)g 玉径1.4cm

第197表 粘土採掘坑 (S X40) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
38	土師器 坏	(12.4)	4.1	-	A B D E H	不良	にぶい橙	30	内外面摩耗著しい

第198表 粘土採掘坑 (S X53) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
39	土師器 坏	(14.0)	(3.0)	-	A B D E H	不良	橙	10	内外面摩耗著しい
40	土師器 甕	(24.0)	(31.3)	-	A B D H	不良	橙	20	やや摩耗する
41	須恵器 甕	-	-	-	B E H	良好	灰	-	
42	土師器 甕	-	(5.8)	(10.0)	A B D E H	不良	橙	40	摩耗著しい やや歪みあり

第199表 粘土探掘坑 (S X 54) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
43	須恵器 埴	(18.0)	6.4	(12.0)	B E H	良好	灰	20	底部手持ちヘラケズリ S X 30・31・32
44	土師器 坏	(12.0)	2.4	-	B D E H	普通	赭	10	摩耗する
45	土師器 坏	(12.0)	(3.3)	-	B D E H	普通	赭	15	
46	土師器 坏	(18.0)	3.8	-	B D H	普通	赭	40	やや摩耗する
47	土師器 坏	(18.0)	(4.3)	-	A B D H	普通	にぶい橙	15	やや摩耗する
48	土師器 鉢	17.0	7.5	6.4	A B D E H	普通	灰黄褐	90	
49	土師器 甕	(22.0)	(8.0)	-	A B D E H	普通	赭	20	やや摩耗する
50	土師器 甕	(22.0)	(7.0)	-	A B E H	普通	赭	20	やや摩耗する 赤みあり
51	土師器 甕	-	(21.7)	11.6	B E H J	普通	赭	40	胴部下腹対角に穿孔2ヶ所

第200表 粘土探掘坑 (S X 1) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	-	(6.0)	-	B H	普通	赭	80	やや摩耗する

第201表 粘土探掘坑 (S X 11) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
2	土師器 甕	-	(1.6)	7.0	B H J	普通	にぶい橙	60	
3	土製紡錘車	径4.2×3.2cm 厚さ2.6cm		-	E H	普通	黒褐	90	孔径0.8cm 重さ66.0g

第202表 粘土探掘坑 (S X 56) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
4	土師器 甕	(21.0)	(23.3)	-	A B D E H	普通	にぶい橙	70	

第203表 粘土探掘坑 (S X 57) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
5	須恵器 甕	-	-	-	F H	良好	灰	-	

第204表 粘土探掘坑 (S X 59) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
6	土師器 甕	-	(3.8)	9.0	A B D E H	普通	にぶい橙	70	底部木変痕
7	磁石	残存長9.2cm 幅4.5cm 重さ88.7g		-	-	-	-	-	
8	土瓦	直径1.5cm 厚さ0.9cm		-	B D H	普通	褐	100	孔径0.3cm 重さ2.7g

第205表 粘土探掘坑 (S X 60) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
9	土師器 坏	11.3	3.6	-	B D E H	普通	赭	100	

第206表 粘土探掘坑 (S X 62) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
10	土師器 台付甕	-	(3.9)	(9.6)	A B D E H	不良	赭	70	摩耗著しい

第207表 粘土探掘坑 (S X 63) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
11	土師器 坏	12.7	3.7	-	A B D E H	普通	にぶい黄橙	80	やや摩耗する
12	土師器 甕	-	(3.0)	7.0	A B D E H	普通	赭	70	
13	須恵器 甕	(35.0)	26.0	17.2	B E H J	良好	褐灰	60	

第208表 粘土探掘坑 (S X 64) 出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(24.4)	(22.5)	-	A E H	普通	赭	70	
2	須恵器 横瓶	-	-	-	E J	良好	灰	-	

10. 方形区画溝跡

方形区画溝跡 (S D 42) (第337・338図)

方形に廻る溝跡が検出された(第337図)。第42号溝跡で、B B-44-47・E E-45-47グリッドに位置する。周辺には竪穴住居跡などが多くあるが、位置的には南側の掘立柱建物群と北側の竪穴住居跡群の境にあたる。第157・177・208・217・221・274・299・307号住居跡、第208・279号土壌、第47・49・50・51号溝跡、粘土採掘坑(S X 63)、第1号道路跡と重複関係にある。第157・177・217・221・274・299・307号住居跡、第47号溝跡より新しく、第208・274号住居跡より古い。溝跡では、第49号溝跡より古い。第1号道路跡より古い。土壌では第208号土壌より古い、第279号土壌との新旧関係は不明である。調査時の所見では粘土採掘坑(S X 63)より古いと思われた。

溝跡は、北辺及び南辺は東西方向を指すが、東辺と西辺はN-7°-Wを示し、やや平行四辺形を呈する。南西角は外側に段があるが、これは後世の影響による可能性が高い。

規模は北辺が28.5m、南辺は29.8mで、東辺と西辺はともに26.6mである。幅は0.7~1.3mで、深さは0.4m前後である。底面は平坦で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土は自然堆積である。場所によって多少の差はあるが、基本的には暗褐色土を主体とし、焼土粒とローム粒を含む。

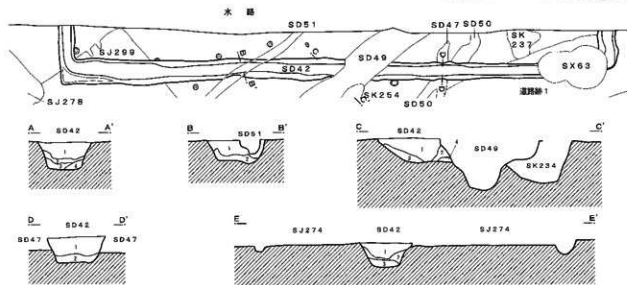
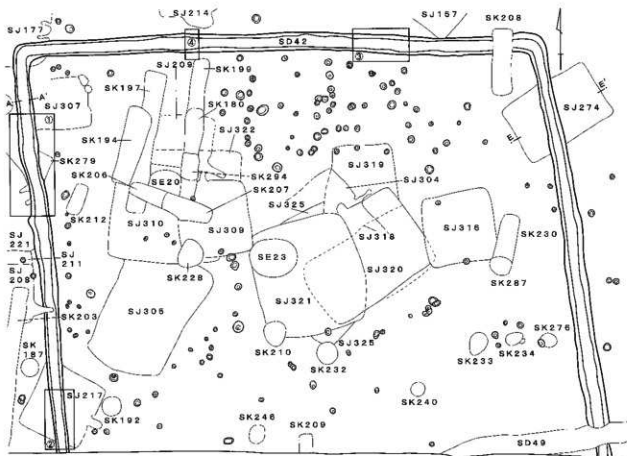
区画内には複数の竪穴住居跡と井戸跡、土壌などが存在する。第309号住居跡が溝跡と近い時期であるが、他の遺構は時期的に区画溝には伴わない。また、掘立柱建物跡についても丹念に精査したが検出することはできなかった。区画外にも直接溝跡に関

係すると考えられる遺構は検出できなかった。

遺物は、北辺と西辺から出土した。北辺からは土師器杯、須恵器蓋・杯が出土した。個体数は少ないが残存状況は良い。いずれも床面から浮いており、溝が1/4程度埋まった段階で入っている。西辺からは破片の状態で纏まって出土した。特に北側に集みが見られる。出土状況は、底面よりやや浮いた位置から上層まで分布しており、外側から流れ込んだ状況が窺われる。西側に住居跡が多く存在することと関係があると思われる。遺物は土器よりも磁が多く、土器も混入によって時期差が見られる。古い時期のものは、第221号住居跡などの重複している遺構のものと考えられる。

北辺から出土した土器は、重複する遺構がなく混入の惧れが少ないと考えられる。第339図3・4は須恵器高台付杯である。北辺の東側から出土した。体部は直線的に立ち上がり断面は箱型を呈する。高台はきわめて低く小さい。2も同じく北辺の東側から出土した蓋である。口縁部は欠失している。握みは低く輪状で直径6cmと大きい。15は土師器杯である。北辺のやや西側から出土した。丸底の底部から口縁部は真直ぐに立ち上がる。外面底部施ケズリ、口縁部は横ナデされる。

これらの北辺から出土した遺物の時期は7世紀後半と考えられ、前述のように1/4ほど埋まった時点で溝に入り込んでいることから、溝の機能した時期の下限を示すと考えられる。溝の機能については、方形に区画しているということ以外、具体的な機能を推定させるものがなく不明である。



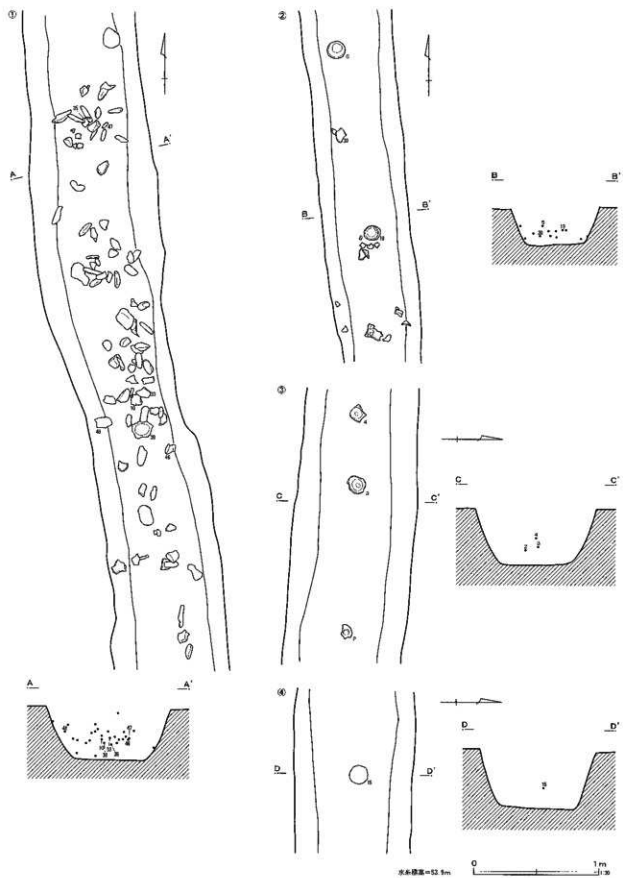
- (A-A')
- 1 礫層土 礫土層・コム土層
 - 2 礫層土 礫土層・コム土層
 - 3 礫層土 コム土層
 - 4 礫層土 コム土層
- (B-B')
- 1 礫層土 礫土層・コム土層
 - 2 礫層土 コム土層
- (C-C')
- 1 礫層土 礫土層・コム土層
 - 2 礫層土 コム土層
 - 3 礫層土 コム土層
 - 4 礫層土 コム土層
 - 5 礫層土 コム土層
 - 6 礫層土 コム土層
 - 7 礫層土 コム土層

- (D-D')
- 1 礫層土 礫土層・コム土層
 - 2 礫層土 コム土層
 - 3 礫層土 コム土層
 - 4 礫層土 コム土層
 - 5 礫層土 コム土層
 - 6 礫層土 コム土層
 - 7 礫層土 コム土層
- (E-E')
- 1 礫層土 礫土層・コム土層
 - 2 礫層土 コム土層
 - 3 礫層土 コム土層

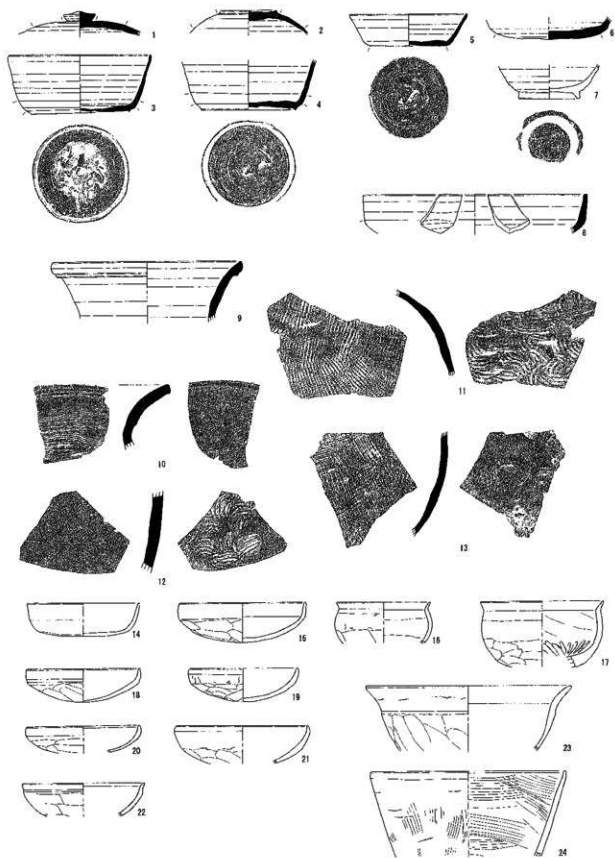
第337図 方形区画遺跡

水路幅=5.5m



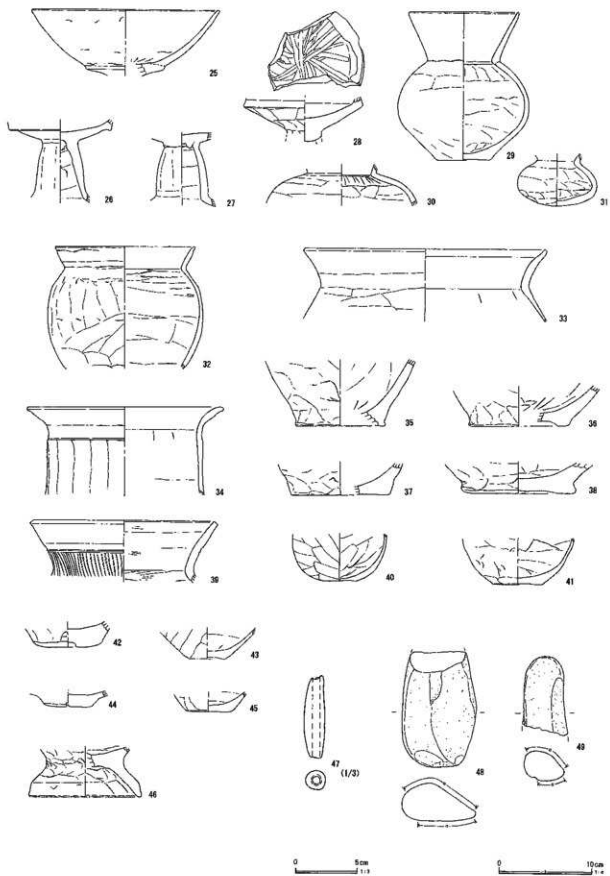


第338图 方形区画满迹遗物出土状况



第339图 方形区画满跡出土遗物 (1)

0 10cm



第340图 方形区画满跡出土遺物(2)

第209表 方形区画溝跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	厚(半)(%)	備考・出土位置
1	須恵器 蓋	-	(2.8)	-	EHJ	良好	灰	60	CC44 つまみ径3.4cm
2	須恵器 蓋	-	(2.6)	-	BEH I J	良好	灰	70	つまみ径6.0cm
3	須恵器 高台付埴	15.0	6.2	10.4	B E H J	良好	黄灰	90	
4	須恵器 高台付埴	-	(5.3)	10.0	BEH I J	良好	灰黄	70	やや摩耗する
5	須恵器 坏	12.6	3.4	8.1	B F F H	良好	にぶい赤褐	90	D D 44
6	須恵器 坏	-	(2.4)	(11.0)	EHJ	良好	灰	10	南溝
7	須恵器 高台付埴	-	(3.5)	6.6	E H I J	普通	灰白	80	
8	須恵器 蓋	(24.0)	(4.1)	-	E	良好	灰	5	BB47
9	須恵器 甕	(20.0)	(6.4)	-	K	良好	灰	10	KK40・41
10	須恵器 甕	-	-	-	BE	良好	灰	-	CC44
11	須恵器 甕	-	-	-	BEJ	良好	黄灰	-	
12	須恵器 甕	-	-	-	EH	良好	灰	-	
13	須恵器 甕	-	-	-	BEJ	良好	灰	-	KK40・41 やや赤みあり
14	土師器 坏	(12.0)	3.5	9.8	EH	不良	橙	20	南溝 摩耗著しい
15	土師器 坏	13.5	4.2	-	DEH	普通	橙	90	やや摩耗する
16	土師器 钵	(10.0)	(4.4)	-	ABEH	普通	にぶい褐	10	DD44
17	土師器 钵	(13.0)	(6.9)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	50	CC44
18	土師器 坏	(12.0)	3.5	-	AEH	普通	にぶい赤褐	10	BB46
19	土師器 坏	11.5	3.5	-	BDEH	普通	橙	10	DD44
20	土師器 坏	(12.0)	(2.8)	-	BDEH	普通	にぶい橙	30	KK40・41
21	土師器 坏	(14.0)	4.0	-	ABDEH	普通	にぶい橙	15	KK40・41
22	土師器 坏	(13.0)	(3.4)	-	ADEH	不良	橙	10	KK40・41 摩耗著しい
23	土師器 钵	(22.0)	(6.9)	-	B E H J	普通	黒褐	25	KK40・41 内面摩耗著しい
24	土師器 钵	(21.0)	(9.0)	-	ABEH	普通	にぶい褐	10	
25	土師器 高坏	(20.0)	(7.0)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	60	CC47
26	土師器 高坏	-	(8.8)	-	ABEH	普通	橙	60	南溝
27	土師器 高坏	-	(7.7)	-	ABEH	普通	にぶい橙	80	
28	土師器 高坏	-	(4.8)	-	DEH	普通	にぶい赤褐	60	
29	土師器 小型甕	11.8	15.6	5.5	AB	普通	明赤褐	80	CC44 内外面摩耗著しい
30	土師器 甕	-	(4.3)	-	AEH	普通	明赤褐	30	DD44
31	土師器 小型甕	-	(5.3)	-	AGH	普通	橙	100	
32	土師器 甕	(15.0)	(12.7)	-	ABEHJ	普通	にぶい赤褐	30	
33	土師器 甕	(26.0)	(7.6)	-	ABDEH	不良	橙	10	CC44
34	土師器 甕	(21.0)	(9.3)	-	ADEH	普通	橙	30	CC44 やや摩耗する
35	土師器 甕	-	(7.0)	(9.6)	ABDEH	普通	明褐	20	CC44
36	土師器 甕	-	(4.1)	10.6	BEH	普通	にぶい褐	70	CC44
37	土師器 甕	-	(2.2)	(10.6)	ABDEH	普通	にぶい褐	50	CC44 内面やや摩耗する
38	土師器 甕	-	(3.2)	12.2	BDEH	普通	橙	100	CC44
39	土師器 甕	(20.0)	(6.5)	-	ABDEH	普通	にぶい橙	10	DD44
40	土師器 小型甕	-	(5.0)	3.5	ABEH	不良	橙	80	CC44
41	土師器 小型甕	-	(4.9)	5.5	ABDEH	普通	にぶい赤褐	80	DD44
42	土師器 甕	-	(2.6)	6.7	DEH J	普通	褐	60	
43	土師器 甕	-	(3.3)	4.0	AEH	普通	にぶい橙	40	CC44
44	土師器 甕	-	(1.7)	5.6	DEH	普通	にぶい赤褐	100	内外面摩耗著しい
45	土師器 甕	-	(2.2)	5.0	EGH	普通	黒褐	100	BB47 底部楕円形
46	土師器 白付埴	-	(5.3)	(12.0)	DEGH	普通	褐	30	CC44 やや赤みあり
47	土師器	長さ6.5cm	直径1.6cm	-	ABEH	普通	褐	100	CC44 孔径0.6cm 重さ14.3g
48	砥石	長さ(12.3)cm	幅7.9cm	厚さ4.0cm	重さ551.2g	-	-	-	CC48
49	砥石	長さ(8.3)cm	幅4.8cm	厚さ3.1cm	重さ164.8g	-	-	-	BB45

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやにしいせき		
書名	宮西遺跡Ⅱ		
副書名	岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告		
巻次	Ⅴ (第1分冊)		
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書		
シリーズ番号	第310集		
編著者名	木戸 春夫		
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団		
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月24日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みやにしいせき 宮西遺跡	さいたま市岡部町 大字様沢304 番地12	11405	045	36° 12' 45"	139° 12' 30"	19970106～ 19970331 19970401～ 19970630 19980406～ 19980831	18,180	工業団地 建設に伴 う事前調 査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
宮西遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土壇	18軒 8基	縄文土器 石器 石製品	
		古墳時代	竪穴住居跡 井戸跡 古墳跡 土壇 溝跡	66軒 1基 1基 2基 2条	土師器 須恵器 土製品 石製品 鉄製品 埴輪	
	奈良・ 平安時代	竪穴住居跡	86軒	土師器 須恵器	製鉄炉跡	
		掘立柱建物跡	36棟	三彩陶器 緑釉	粘土採掘坑から土鈴出土	
		井戸跡	16基	陶器 灰釉陶器	三彩	
		製鉄炉跡	3基	土製品 石製品		
		方形区画溝跡	1条	鉄製品 鉄滓		
		溝跡 土壇 土壇墓	8条 5基 2基			
	中近世	井戸跡	4基	陶器 土器 瓦		
		溝跡	8条	銭貨 磁石		
土壇		67基				
茶毘跡		2基				
畚跡 道路跡		1ヶ所 3条				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第310集

岡部町

宮西遺跡Ⅱ

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

< 第 1 分冊 >

平成17年 3月14日 印刷

平成17年 3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工業印刷株式会社